

バーガ森北斜面遺跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ



2015.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

バーガ森北斜面遺跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ

2015.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

バーガ森北斜面遺跡の発掘調査は、国土交通省が進める高知西バイパス(一般国道33号線バイパス)建設に伴う緊急調査として、平成22年度から23年度にかけて2年間発掘調査を実施してまいりました。この事業は、高知県東部に計画されている高知南国道路と南国安芸道路の二つの自動車専用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査とほぼ同時進行で実施されたものです。

高知西バイパスは、高知市から西に隣接するいの町にかけて全長9.8kmの区間で計画されており、工事路線上にはバーガ森北斜面遺跡や天神溝田遺跡を始めとして多くの遺跡が所在しています。

今回報告するバーガ森北斜面遺跡は、弥生時代を中心とする山に開けた集落遺跡です。発掘調査により竪穴建物跡や当時の山住みの集落の生活がわかる土器や石器が多数見つかりました。この調査成果は、当遺跡が地域に果たしてきた役割、仁淀川流域における遺跡の実態をより鮮明なものにし、今後は仁淀川流域の歴史を語る上で重要な位置を占めるものと思います。

本書が豊かな地域史の復元に寄与し、地域の再発見に繋がると共に、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町、そして埋蔵文化財への深い御理解と御協力を賜りました地元の皆様方に心から謝意を表すと共に、発掘調査に従事して頂いた現場作業員の皆様方、報告書作成にあたり御指導ならびに御教示頂きました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 森田 尚宏

例言

1. 本書は、高知西バイパス建設に伴い、平成22・23年度に実施したバーガ森北斜面遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が発掘調査を実施した。
3. バーガ森北斜面遺跡は、高知県吾川郡いの町字奥名・是友に所在する。
4. 発掘調査は2カ年にわたって実施し、発掘調査延べ面積は、6,437㎡である。
5. 調査期間は、平成22年4月5日～平成25年3月31日にかけて発掘調査及び基礎整理を行い、本報告書刊行及び整理業務を平成26年4月1日～平成27年3月31日まで実施した。
6. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成22年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫

総務：同次長 森田尚宏 同総務課長 里見敦規 同主任 弘末節子

調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調査担当：同調査第二班長 吉成承三 同専門調査員 笠井秀人 技術補助員 矢野雅子 測量補助員 横山藍

平成23年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏

総務：同次長 嶋崎るり子 同総務課長 里見敦規 同主任 黒岩千恵

調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調査担当：同調査第四班長 吉成承三 同専門調査員 武森清幸 技術補助員 大原直美 測量補助員 横山藍

平成24年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏

総務：同次長 嶋崎るり子 同総務課長 里見敦規 同主任 黒岩千恵

調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久

調査担当：同調査第四班長 吉成承三 同専門調査員 武森清幸 技術補助員 大原直美 測量補助員 横山藍

平成25年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏

総務：同次長 宮田謙輔 同総務課長 野田美智子 同主任 黒岩千恵

調査総括：同調査課長 廣田佳久

調査担当：同調査第三班長 吉成承三 調査補助員 横山藍

平成26年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏

総務：同次長兼調査課長 松田直則 同総務課長 野田美智子 同主任 黒岩千恵

調査総括：同調査課長 松田直則

調査担当：同調査第三班長 吉成承三 調査補助員 横山藍

7. 本書の執筆は吉成が行い、調査補助員の横山が編集した。なお付編2については横山が執筆した。現場測量、遺構図等の作成、及び報告書掲載の遺構・写真等の図版作成は、調査補助員 矢野・大原・横山の補助を得た。
8. 遺構については、ST(竪穴建物跡)、SB(掘立柱建物跡)、SA(柵列)、SK(土坑)、SD(溝)、SR(自然流路)、SX(性格不明遺構)、P(ピット)とし、遺構番号は、ST、SB、SAについては調査区全体の通し番号とし、SK、SD、Pについては調査区ごとに通し番号を付した。掲載している遺構図の縮尺はSTはS=1/60、SB、SAはS=1/100、SK、SD、PはS=1/40、S=1/60、S=1/100で作成しそれぞれに記載しており、方位(N)は世界標準座標方眼北である。
9. 遺物については、原則S=1/4とし、法量の大きさによってS=1/2、S=1/3、S=2/3で掲載し、各遺物にはスケールバーを掲載している。
10. 基準点設置については(株)アンプル、航空写真測量については(株)四航コンサルタントに委託し業務を実施した。整理業務では、バーガ森北斜面遺跡から出土した種実の自然化学分析、及び鉄器の保存処理を(株)パリノ・サーヴェイに、併せて鉄器の保存処理を財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所に業務を委託した。また、本報告書第V章磨製石包丁の使用痕分析については、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室 原田幹氏の多大な協力を得て、玉稿を頂いた。石器の石質については、高知大学教育研究部理学系理学部門教授吉倉紳一氏にご教示を頂いた。記して感謝する。
11. 現場作業及び整理作業については下記の方々に行って頂いた。(敬称略,五十音順)
発掘調査作業員
井沢俊一・大原栄美・尾崎毅・川上公雄・北岡由美・塩見朗・渋谷茂弘・近澤憲太郎・中島慧太・中島美恵子・西内園・西村仁水・仁野村かゆり・橋村康之・林孝明・原田憲二・藤山三和・町田憲嗣・松田侑也・宮添彬・村松広海・山口壽子・山口優幸・横山正宣・和田智子
整理作業員
岡崎千枝・永森亜紀・橋田美紀・畑平裕美・松山真澄・吉本由佳
また、報告書作成にあたっては、埋蔵文化財センターの諸氏の協力と援助を得た。
12. 調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町、いの町教育委員会、工事関係者の協力を得た。また、地元の方々の絶大な協力と援助を得た。
13. 出土遺物の注記は、出土略号を平成22年度を10-5IB、平成23年度を11-5IBとし、図面、写真資料とともに高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る契機と経過	1
1. 調査に至る契機	1
2. 調査の経過	3
第Ⅱ章 遺跡の概要と地理的・歴史的環境	5
1. バーガ森北斜面遺跡の概要	5
2. 地理的・歴史的環境	5
(1) 地理的環境	5
(2) 歴史的環境－バーガ森北斜面遺跡周辺の遺跡－	7
第Ⅲ章 三世庵地点の調査成果	9
1. 三世庵地点の概要	9
2. 各調査区の概要と基本層序	10
(1) I 区	10
(2) II 区	14
(3) III 区	15
(4) IV 区	15
3. 検出遺構と出土遺物	18
(1) I 区	18
(2) II 区	18
(3) II e 区	23
(4) II n 区	29
(5) III 区	33
(6) IV 区	33
4. 小結	120
第Ⅳ章 岩神地点の調査成果	165
1. 岩神地点の調査概要	165
2. 各調査区の概要と基本層序	167
(1) I 区	167
(2) II 区	168
(3) III 区	170
3. 検出遺構と出土遺物	173
(1) I w・I s 区	173
(2) I e 区	182
(3) I n 区	185
(4) II 区	186
(5) III 区	200
(6) 自然流路	211

4. 小結	214
第V章 分析	245
1. 自然科学分析	245
(1)はじめに	245
(2)試料	245
(3)分析方法	245
(4)結果	246
(5)考察	250
2. 磨製石包丁の使用痕分析	252
(1)はじめに	252
(2)分析資料と分析方法	252
(3)分析結果の概要	253
(4)機能推定	256
(5)まとめ	256
第VI章 まとめ	259
1. バーガ森北斜面遺跡出土の弥生土器について	259
(1)器形の特徴－甕にみられる胴部の張りとお口の開き－	259
(2)口縁部の形態	259
(3)文様構成－施文方法の特徴－	261
(4)胎土・色調の違いによる土器の特徴	262
(5)在地系土器と非在地系土器の比率－貼付・素口縁・凹線文－	264
2. バーガ森北斜面遺跡出土の石器について	264
(1)石包丁の特徴	264
(2)調査地点における投弾の分布	265
3. バーガ森北斜面遺跡の性格と位置付け	266
付編1	269
1. 三世庵の近世集石墓	269
付編2	273
1. 三世庵地点出土のガラス瓶	273
2. 牛乳瓶からみる明治期の高知	274

挿図目次

図1-1	いの町位置図..... 1	図3-31	段部1 ST3遺構図 37
図1-2	調査地点位置図..... 2	図3-32	段部1 ST3遺物実測図..... 38
図2-1	これまでの調査・試掘位置図 4	図3-33	段部1 SK6遺構図・遺物実測図... 39
図2-2	いの町地形地質図..... 6	図3-34	段部1 SK7遺構図・遺物実測図... 40
図2-3	西バイパス路線と周辺の遺跡 8	図3-35	段部1 SK8・10遺構図・遺物実測図41
図3-1	三世庵地点調査区位置図・グリッド 設定図 9	図3-36	段部1 ピット遺物実測図 41
図3-2	I～Ⅲ区エレベーション図 11	図3-37	段部2・3遺構配置図..... 42
図3-3	I・Ⅱ区エレベーション図 12	図3-38	段部2 ST4遺構図・遺物実測図... 43
図3-4	Ⅳ区エレベーション図..... 13	図3-39	段部2 ST4遺物実測図..... 44
図3-5	I・Ⅱ区調査区セクション図 14	図3-40	段部2 SK28遺構図・遺物実測図.. 45
図3-6	Ⅲ区調査区セクション図..... 15	図3-41	段部2 焼土坑1～4遺構図 45
図3-7	段部1・2セクション図..... 16	図3-42	段部2 焼土坑5遺構図 46
図3-8	段部4・5セクション図..... 17	図3-43	段部2 焼土坑6遺構図・遺物実測図 46
図3-9	I区SK11遺構図・遺物実測図 ... 18	図3-44	段部2 焼土坑7・8遺構図 47
図3-10	I区遺構配置図..... 19	図3-45	段部2 SD2～6遺構図・遺物実測図48
図3-11	Ⅱ・Ⅱe・Ⅱn・Ⅲ区遺構配置図.. 20	図3-46	段部2 SA1遺構図 49
図3-12	ST8 遺構図 21	図3-47	段部2 SA1出土遺物 49
図3-13	ST8 遺物実測図 22	図3-48	段部2 ピット出土遺物 50
図3-14	ST9 遺構図 22	図3-49	段部3 SK35・36遺構図..... 50
図3-15	Ⅱ区ピット遺物実測図..... 23	図3-50	段部4 遺構配置図..... 51
図3-16	Ⅱ区包含層遺物実測図..... 23	図3-51	段部4 SK32遺構図・遺物実測図.. 52
図3-17	SK23・25・26遺構図・遺物実測図 24	図3-52	段部4 SX3遺構図・遺物実測図... 53
図3-18	SD1遺構図 25	図3-53	段部4 P72遺物実測図..... 53
図3-19	SD1遺物実測図 25	図3-54	段部4 ST5遺構図 54
図3-20	Ⅱe区ピット遺物実測図 25	図3-55	段部4 ST5遺物実測図1..... 55
図3-21	Ⅱe区包含層遺物実測図1..... 26	図3-56	段部4 ST5遺物実測図2..... 56
図3-22	Ⅱe区包含層遺物実測図2..... 27	図3-57	段部4 ST5遺物実測図3..... 57
図3-23	Ⅱn区遺構配置図 28	図3-58	段部4 SK33遺構図・遺物実測図.. 59
図3-24	SK34遺構図 29	図3-59	段部4 P55遺構図・遺物実測図 ... 60
図3-25	Ⅱn区包含層遺物実測図1 30	図3-60	段部4 包含層遺物出土状態図・遺物 実測図 61
図3-26	Ⅱn区包含層遺物実測図2 31	図3-61	段部5 焼土坑配置図 62
図3-27	Ⅲ区包含層遺物実測図..... 32	図3-62	段部5 SK37・39遺構図..... 63
図3-28	段部1 遺構配置図 34	図3-63	段部5 SK41遺構図・遺物実測図.. 63
図3-29	段部1 ST1遺構図・遺物実測図... 35	図3-64	段部5 焼土坑12遺構図 63
図3-30	段部1 ST2遺構図・遺物実測図... 36	図3-65	段部5 遺構配置図 64

図3-66	段部5 ST6遺構図・遺物実測図... 65	定図..... 165
図3-67	段部5 土器集中遺構図・遺物実測図66	図4-2 岩神地点調査区エレベーション図166
図3-68	段部5 土器集中遺物実測図..... 67	図4-3 I s・I w区調査区セクション図 168
図3-69	段部5 ST7遺構図・遺物実測図... 68	図4-4 I e・I n区調査区セクション図 169
図3-70	段部5 ST7遺物実測図..... 69	図4-5 II区調査区セクション図..... 170
図3-71	段部5 SD7・8遺構図・遺物実測図 70	図4-6 III区調査区セクション図..... 171
図3-72	段部5 ピット遺物実測図..... 71	図4-7 I w・I s区遺構配置図..... 172
図3-73	段部1 包含層遺物実測図1..... 72	図4-8 I w区ST1・2遺構図..... 174
図3-74	段部1 包含層遺物実測図2..... 74	図4-9 I w区ST1 遺物実測図..... 175
図3-75	段部1 包含層遺物実測図3..... 76	図4-10 I w区ST2 遺物出土状態図.... 175
図3-76	段部1 包含層遺物実測図4..... 77	図4-11 I w区ST2 遺物実測図1..... 176
図3-77	段部2 包含層遺物実測図1..... 79	図4-12 I w区ST2 遺物実測図2..... 177
図3-78	段部2 包含層遺物実測図2..... 81	図4-13 I w区ST3 遺構図..... 178
図3-79	段部2 包含層遺物実測図3..... 83	図4-14 I w区SK3・P33遺構図・遺物実測図 178
図3-80	段部2 包含層遺物実測図4..... 85	図4-15 I w区 SK4・11遺構図・遺物実測図 179
図3-81	段部2 包含層遺物実測図5..... 86	図4-16 I w区 SK14・P79・80遺構図・遺物 実測図..... 179
図3-82	段部2 包含層遺物実測図6..... 87	図4-17 I w区ピット遺構図・遺物実測図180
図3-83	段部2 包含層遺物実測図7..... 89	図4-18 I w区包含層出土遺物..... 181
図3-84	段部2 包含層遺物実測図8..... 91	図4-19 I e区ピット遺物実測図..... 182
図3-85	段部2 包含層遺物実測図9..... 92	図4-20 I e区遺構配置図..... 183
図3-86	段部2 包含層遺物実測図10..... 93	図4-21 I e区包含層遺物実測図..... 184
図3-87	段部3 包含層遺物実測図1..... 95	図4-22 I n区遺構配置図..... 185
図3-88	段部3 包含層遺物実測図2..... 96	図4-23 I n区包含層遺物実測図..... 186
図3-89	段部4 包含層遺物実測図1..... 98	図4-24 II区遺構配置図..... 187
図3-90	段部4 包含層遺物実測図2..... 100	図4-25 II区ST1 遺構図..... 188
図3-91	段部4 包含層遺物実測図3..... 102	図4-26 II区ST1 遺物実測図1..... 190
図3-92	段部4 包含層遺物実測図4..... 104	図4-27 II区ST1 遺物実測図2..... 191
図3-93	段部4 包含層遺物実測図5..... 105	図4-28 II区SK1・13遺構図・遺物実測図192
図3-94	段部4 包含層遺物実測図6..... 106	図4-29 II区SK2 遺構図・遺物実測図... 193
図3-95	段部5 包含層遺物実測図1..... 108	図4-30 II区SK4・5・9遺構図・遺物実測図 194
図3-96	段部5 包含層遺物実測図2..... 110	図4-31 II区SX1 遺構図・遺物実測図... 195
図3-97	段部5 包含層遺物実測図3..... 111	図4-32 II区SA1 遺構図..... 196
図3-98	段部5 包含層遺物実測図4..... 113	図4-33 II区SB1 遺構図..... 196
図3-99	段部5 包含層遺物実測図5..... 115	図4-34 II区ピット遺物実測図..... 197
図3-100	段部5 包含層遺物実測図6..... 116	
図3-101	段部5 包含層遺物実測図7..... 117	
図3-102	段部5 包含層遺物実測図8..... 119	
図4-1	岩神地点調査区位置図・グリッド設	

図4-35	Ⅱ区石垣裏込出土遺物	197	図4-54	SR1遺物実測図5	219
図4-36	Ⅱ区包含層出土遺物1	198	図5-1	バーガ森北斜面遺跡の種実遺体	251
図4-37	Ⅱ区包含層出土遺物2	199	図5-2	分析石器実測図	252
図4-38	Ⅲ区遺構配置図	201	図5-3	光沢分布図・写真位置図	253
図4-39	Ⅲ区SD2遺構図・遺物実測図	202	図5-4	使用痕顕微鏡写真(1)	254
図4-40	Ⅲ区ハンダ土坑1～3遺構図・遺物実測図	202	図5-5	使用痕顕微鏡写真(2)	255
図4-41	Ⅲ区石組遺構遺構図・遺物実測図	204	図5-6	石包丁の使用方法	257
図4-42	Ⅲ区ピット遺物実測図	205	図6-1	口縁部の形態分類	260
図4-43	Ⅲ区土器集中1・2遺物実測図	205	図6-2	口縁断面形分類模式図	261
図4-44	Ⅲ区石垣1・2遺物実測図	206	図6-3	壺・甕文様模式図	262
図4-45	Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層遺物実測図1	207	図6-4	胎土・色調による土器相対図	263
図4-46	Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層遺物実測図2	208	図6-5	石包丁組成割合図	265
図4-47	Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層遺物実測図3	209	図6-6	三世庵地点投弾出土分布図	266
図4-48	Ⅲ区Ⅲ層遺物実測図	210	図6-7	竪穴建物跡位置図	267
図4-49	SR1遺構図	212	図7-1	三世庵地点集石墓位置図	269
図4-50	SR1遺物実測図1	215	図7-2	集石墓1遺構図・遺物実測図	270
図4-51	SR1遺物実測図2	216	図7-3	集石墓2遺構図・遺物実測図	271
図4-52	SR1遺物実測図3	217	図7-4	集石墓2遺物実測図	272
図4-53	SR1遺物実測図4	218	図7-5	三世庵地点出土ガラス瓶他実測図	273

表目次

表5-1	分析資料一覧	245	表6-1	在地系土器と非在地系土器の比率	264
表5-2	放射性炭素年代測定結果	247	表6-2	石包丁の形態分類と出土比率	264
表5-3	種実同定結果	248	表7-1	バーガ森北斜面遺跡・西浦遺跡出土の内ネジ式牛乳瓶	274
表5-4	炭化米の大きさ	249			

遺構計測表目次(三世庵地点)

遺構計測表1	ST	123	遺構計測表9	Ⅳ区ST7ピット	124
遺構計測表2	Ⅳ区ST1ピット	123	遺構計測表10	Ⅳ区ST8ピット	124
遺構計測表3	Ⅳ区ST2ピット	123	遺構計測表11	SK	125
遺構計測表4	Ⅳ区ST3ピット	123	遺構計測表12	SK	126
遺構計測表5	Ⅳ区ST4ピット	123	遺構計測表13	SD	126
遺構計測表6	Ⅳ区ST5ピット	123	遺構計測表14	SX	126
遺構計測表7	Ⅳ区ST5ピット	124	遺構計測表15	Ⅱ区SA1	126
遺構計測表8	Ⅳ区ST6ピット	124	遺構計測表16	Ⅳ区SA1ピット	126

遺構計測表目次(岩神地点)

遺構計測表1	ST	223	遺構計測表11	I w区SK	225
遺構計測表2	I w区ST1ピット	223	遺構計測表12	I e区SK	225
遺構計測表3	I w区ST2ピット	223	遺構計測表13	II区SK	225
遺構計測表4	I w区ST3ピット	223	遺構計測表14	III区SK	226
遺構計測表5	II区ST1ピット	223	遺構計測表15	I w区SD	226
遺構計測表6	II区ST1ピット	224	遺構計測表16	II区SD	226
遺構計測表7	II区SB1	224	遺構計測表17	III区SD	226
遺構計測表8	II区SB1ピット	224	遺構計測表18	I s区SX	226
遺構計測表9	II区SA1	224	遺構計測表19	II区SX	226
遺構計測表10	II区SA1ピット	224			

遺物観察表目次(三世庵地点)

遺物観察表(土器) 1 ~ 33	129	遺物観察表(土器) 596 ~ 629	147
遺物観察表(土器) 34 ~ 68	130	遺物観察表(土器) 630 ~ 654	148
遺物観察表(土器) 69 ~ 106	131	遺物観察表(土器) 655 ~ 679	149
遺物観察表(土器) 107 ~ 134	132	遺物観察表(土器) 680 ~ 741	150
遺物観察表(土器) 135 ~ 167	133	遺物観察表(土器) 742 ~ 766	151
遺物観察表(土器) 168 ~ 202	134	遺物観察表(土器) 767 ~ 791	152
遺物観察表(土器) 203 ~ 241	135	遺物観察表(土器) 792 ~ 816	153
遺物観察表(土器) 242 ~ 274	136	遺物観察表(土器) 817 ~ 820	
遺物観察表(土器) 275 ~ 311	137	(石器・鉄器) 2 ~ 77	154
遺物観察表(土器) 312 ~ 336	138	遺物観察表(石器・鉄器) 78 ~ 173	155
遺物観察表(土器) 337 ~ 361	139	遺物観察表(石器・鉄器) 175 ~ 252	156
遺物観察表(土器) 362 ~ 401	140	遺物観察表(石器・鉄器) 253 ~ 383	157
遺物観察表(土器) 402 ~ 426	141	遺物観察表(石器・鉄器) 384 ~ 562	158
遺物観察表(土器) 427 ~ 451	142	遺物観察表(石器・鉄器) 563 ~ 587	159
遺物観察表(土器) 452 ~ 476	143	遺物観察表(石器・鉄器) 588 ~ 705	160
遺物観察表(土器) 477 ~ 501	144	遺物観察表(石器・鉄器) 706 ~ 823	161
遺物観察表(土器) 502 ~ 526	145	遺物観察表(石器・鉄器) 824 ~ 848	162
遺物観察表(土器) 527 ~ 595	146	遺物観察表(石器・鉄器) 849 ~ 869	163

遺物観察表目次(岩神地点)

遺物観察表(土器) 1～25……………	229	遺物観察表(土器) 277～301……………	237
遺物観察表(土器) 26～57……………	230	遺物観察表(土器) 302～369……………	238
遺物観察表(土器) 58～90……………	231	遺物観察表(石器・鉄器) 39～129……………	239
遺物観察表(土器) 91～119……………	232	遺物観察表(石器・鉄器) 130～190……………	240
遺物観察表(土器) 120～163……………	233	遺物観察表(石器・鉄器) 198～273……………	241
遺物観察表(土器) 164～201……………	234	遺物観察表(石器・鉄器) 274～331……………	242
遺物観察表(土器) 202～235……………	235	遺物観察表(石器・鉄器) 332～371……………	243
遺物観察表(土器) 236～276……………	236		

図版目次(三世庵地点)

図版1 三世庵地点全景(北東より)	図版13 段部1 ST2床面炭化物検出状態(西より)
図版2 三世庵地点 I・II区全景(北より)	段部1 ST2完掘状態(北西より)
図版3 三世庵地点全景(南東より)	図版14 段部1 P6弥生土器(99～101)出土状態
図版4 I・II区調査前全景(南東より)	段部1 ST1石包丁(104)出土状態
II区調査前全景(南西より)	段部1 ST2弥生土器甕(109)出土状態
図版5 IIe・II n区調査前全景(東より)	段部1 ST2石鏃(112)出土状態
IV区調査前状態(北より)	段部1 ST3弥生土器壺(116)出土状態
図版6 I区遺構検出状態(南東より)	段部1 ST3弥生土器甕(118)出土状態
昭和49年竪穴建物跡(南より)	段部1 ST3弥生土器甕(122)出土状態
図版7 II区遺構検出状態(南西より)	段部1 ST3石包丁(132)出土状態
II区遺構完掘状態(北東より)	図版15 段部1 完掘状態(北西より)
図版8 II区ST8床面遺構検出状態(南西より)	段部1 斜面遺構検出状態(北西より)
II区ST8完掘状態(西より)	図版16 段部2 遺構検出状態(西より)
図版9 IIe区バンクセクション・SK23・25・	段部2 遺構検出状態(南東より)
26検出状態(南より)	図版17 段部2 ST4床面遺構検出状態(南西より)
II区段状遺構完掘状態(南より)	段部2 ST4完掘状態(東より)
図版10 II区段状遺構～IV区完掘状態(南東より)	図版18 段部2 ST4弥生土器壺(149)出土状態1
III区遺構検出状態(南より)	段部2 ST4弥生土器壺(149)出土状態2
図版11 III区バンクセクション(東より)	段部2 ST4弥生土器壺(150)出土状態
IIe区P3弥生土器甕(13)出土状態	段部2 ST4石斧(153)出土状態
II n区包含層弥生土器壺(53)出土状態	段部2 焼土坑1～5検出状態(北より)
II n区包含層石鏃(77)出土状態	図版19 段部2 SA1P8鉄鏃(173)出土状態
III区包含層弥生土器高杯(95)出土状態	段部2 SA1P7石包丁未製品(175)出土状態
図版12 段部1バンクセクション(北西より)	段部2 P113石包丁未製品(176・177)出土
段部1バンクセクション(東より)	状態

- 段部2 P56弥生土器甕(180)出土状態
段部2 完掘状態(北西より)
- 図版20 段部3 SK35検出状態(西より)
段部3 SK35炭化物検出状態(北より)
- 図版21 段部3 SK36検出状態(西より)
段部4 SX3セクション(南東より)
- 図版22 IV区ユニット1～3 遺物検出状態(北西より)
段部4 P55遺物出土状態
- 図版23 段部4 ST5上面遺構検出状態(西より)
段部4 ST5上面遺構完掘状態(西より)
- 図版24 段部4 ST5中央ピット検出状態(南東より)
段部4 ST5床面遺構検出状態(南東より)
- 図版25 段部4 ST5弥生土器壺(192)出土状態
段部4 ST5弥生土器甕(200)出土状態
段部4 ST5弥生土器甕(204)出土状態
段部4 ST5弥生土器甕(198)出土状態
段部4 ST5弥生土器甕(212)出土状態
段部4 ST5弥生土器甕(214)出土状態
段部4 ST5石包丁(227)出土状態
段部4 ST5石包丁(228)出土状態
- 図版26 段部4 ST5完掘状態(西より)
段部4・5 ST5・6完掘状態(南西より)
- 図版27 段部5 焼土坑検出状態(南より)
段部5 SK37セクション(東より)
段部5 SK39セクション(北東より)
段部5 焼土坑12セクション(北西より)
段部5 焼土坑13セクション(北西より)
- 図版28 段部5 土器集中4・壁面バンクセクション(北東より)
段部5 土器集中4(南より)
- 図版29 段部5 バンクセクション(南東より)
段部5 ST6検出状態(北西より)
- 図版30 段部5 ST6炭化物検出状態(北西より)
段部5 ST6床面検出状態(西より)
- 図版31 段部5 ST6完掘状態(南西より)
段部5 ST7完掘状態(南西より)
- 図版32 段部5 ST7セクション(北西より)
- 段部5 ST7床面遺構検出状態(南西より)
- 図版33 段部5 ST7完掘状態(北西より)
段部5 ST7完掘状態(北西より)
- 図版34 段部4 包含層弥生土器壺・甕(254・645)出土状態(北東より)
段部4 包含層弥生土器壺(254)出土状態(南より)
段部1 包含層弥生土器壺(297)出土状態
段部1 包含層弥生土器壺(343)出土状態
段部1 包含層弥生土器壺(305)出土状態
- 図版35 段部1 包含層弥生土器(297 他)出土状態(北東より)
段部1 包含層弥生土器甕(339)出土状態
段部1 包含層弥生土器甕(352)出土状態
段部2 包含層弥生土器壺(397)出土状態
段部2 包含層弥生土器壺(430)出土状態
- 図版36 段部2 包含層弥生土器壺(432)出土状態
段部2 包含層弥生土器壺(436)出土状態
段部2 包含層弥生土器甕(444)出土状態
段部2 包含層弥生土器甕(453)出土状態
段部2 包含層弥生土器甕(465)出土状態
段部2 包含層弥生土器甕(475)出土状態
段部2 包含層弥生土器甕(521)出土状態
段部2 包含層弥生土器高杯(525)出土状態
- 図版37 段部2 包含層弥生土器高杯(539)出土状態
段部2 包含層弥生土器高杯(541)出土状態
段部2 包含層石鏟(552)出土状態
段部2 包含層石鏟(553)出土状態
段部2 包含層石包丁(557)出土状態
段部2 包含層石包丁(561)出土状態
段部2 包含層石包丁(564)出土状態
段部2 包含層石包丁未製品(565)出土状態
- 図版38 段部2 包含層石斧(568)出土状態
段部2 包含層石斧(569)出土状態
段部4 包含層弥生土器壺(624)出土状態
段部4 包含層弥生土器壺(625)出土状態
段部4 包含層弥生土器壺(636)出土状態
段部4 包含層弥生土器甕(657)出土状態

- 段部4 包含層弥生土器甕(661)出土状態
 段部4 包含層弥生土器甕(662)出土状態
 図版39 段部4 包含層弥生土器甕(674)出土状態
 段部4 包含層弥生土器甕(679)出土状態
 段部4 包含層弥生土器高杯(690)出土状態
 段部4 包含層袋状鉄斧(691)出土状態
 段部4 包含層石鏃(694)出土状態
 段部4 包含層石包丁(695)出土状態
 段部4 包含層石包丁(697)出土状態
 段部4 包含層石包丁未製品(701)出土状態
 図版40 段部4 包含層石包丁未製品(702)出土状態
 段部4 包含層石包丁未製品(707)出土状態
 段部4 包含層石斧(708)出土状態
 段部4 包含層石錘(716)出土状態
 段部5 包含層弥生土器壺(728)出土状態
 段部5 包含層弥生土器壺(729)出土状態
 段部5 包含層弥生土器壺(734)出土状態
 段部5 包含層弥生土器壺(761他)出土状態
 図版41 段部5 包含層弥生土器甕(770)出土状態
 段部5 包含層弥生土器甕(779)出土状態
 段部5 包含層弥生土器甕(791)出土状態
 段部5 包含層弥生土器高杯(819)出土状態
 段部5 包含層袋状鉄斧(821)出土状態
 段部5 包含層石鏃(822)出土状態
 段部5 包含層石鏃(824)出土状態
 段部5 包含層石鏃(825)出土状態
 図版42 段部5 包含層石包丁(833)出土状態
 段部5 包含層石斧(839)出土状態
 段部5 包含層スクレイパー(841)出土状態
 段部5 包含層叩石(853)出土状態
 ST4～6完掘状態(南西より)
 図版43 ST4～6完掘状態(北東より)
 ST4・7完掘状態(南東より)
 図版44 集石墓1・2検出状態(南西より)
 集石墓1検出状態(南西より)
 図版45 集石墓2検出状態(北西より)
 集石墓2(空輪・風輪)検出状態(南東より)
 図版46 石器(石鏃)
 図版47 石器(石包丁)
 図版48 石器(石包丁)
 図版49 石器(石包丁未製品)
 図版50 石器(投弾)
 図版51 石器(石斧)
 石器(石斧)
 図版52 弥生土器(壺・甕・高杯・鉢)
 段部5 包含層 鉄器(袋状鉄斧)
 図版53 II e区包含層 弥生土器(壺)
 II e区包含層 弥生土器(甕)
 図版54 II e・II n区包含層 石器(投弾)
 II n区包含層 弥生土器(壺)
 図版55 II n区包含層 弥生土器(甕)
 段部1 ST2 弥生土器(壺・甕)
 図版56 段部1 ST3 弥生土器(甕)
 段部4 ST5 弥生土器(甕)
 図版57 段部4 P55 弥生土器(壺)
 段部1 包含層 弥生土器(壺)
 図版58 段部2 包含層 弥生土器(壺)
 段部2 包含層 弥生土器(壺)
 図版59 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 図版60 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 図版61 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 図版62 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 図版63 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 段部2 包含層 弥生土器(高杯)
 図版64 段部2 包含層 弥生土器(高杯)
 段部2 包含層 石器(砥石)
 図版65 段部3 包含層 弥生土器(壺)
 段部3 包含層 弥生土器(甕)
 図版66 段部3 包含層 弥生土器(甕)
 段部4 包含層 弥生土器(甕)
 図版67 段部4 包含層 弥生土器(甕)
 段部4 包含層 弥生土器(甕)

- 図版68 段部4 包含層 弥生土器(甕)
 段部4 包含層 弥生土器(甕)
- 図版69 段部4 包含層 弥生土器(高杯)
 段部5 包含層 弥生土器(壺)
- 図版70 段部5 包含層 弥生土器(高杯)
 段部5 包含層 弥生土器(高杯)
- 図版71 Ⅲ区 包含層 弥生土器(壺)
 段部1 ST3 弥生土器(甕)
 段部1 ST3 弥生土器(甕)
 段部1 SK8 弥生土器(甕)
 段部4 SK33 弥生土器(甕)
 段部4 包含層 弥生土器(壺)
- 図版72 段部5 P95 弥生土器(壺)
 段部2 包含層 弥生土器(壺)
 段部2 包含層 弥生土器(壺)
 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 段部2 包含層 弥生土器(甕)
- 図版73 段部2 包含層 弥生土器(高杯)
 段部2 包含層 弥生土器(高杯)
 段部3 包含層 弥生土器(壺)
 段部4 包含層 弥生土器(壺)
 段部4 包含層 弥生土器(壺)
 段部4 包含層 弥生土器(甕)
- 図版74 段部4 包含層 弥生土器(鉢)
 段部5 包含層 弥生土器(壺)
 段部5 包含層 弥生土器(壺)
 段部5 包含層 弥生土器(壺)
 段部5 包含層 弥生土器(壺)
 段部5 包含層 弥生土器(甕)
- 図版75 Ⅱ e 区 SK25 石器(石包丁未製品)
 Ⅱ e 区 SD1 弥生土器(甕)
 Ⅱ n 区 包含層 弥生土器(壺)
 Ⅱ n 区 包含層 弥生土器(高杯)
 Ⅲ区 包含層 弥生土器(高杯)
 Ⅲ区 包含層 弥生土器(高杯)
 Ⅲ区 包含層 石器(叩石)
 段部1 ST3 弥生土器(甕)
- 図版76 段部1 P11 弥生土器(高杯)
 段部1 SK7 弥生土器(壺)
 段部1 SK7 弥生土器(甕)
 段部1 SK7 弥生土器(甕)
 段部2 ST4 弥生土器(壺)
 段部2 ST4 弥生土器(高杯)
 段部2 ST4 石器(砥石)
 段部2 ST4 石器(棒状石器)
- 図版77 段部2 SA1P8 鉄器(鉄鍬) (表面)
 段部2 SA1P8 鉄器(鉄鍬) (裏面)
 段部2 SA1P7 弥生土器(甕)
 段部4 SK32 弥生土器(壺)
 段部4 P72 弥生土器(壺)
 段部4 ST5 弥生土器(壺)
 段部4 ST5 弥生土器(壺)
 段部4 ST5 弥生土器(甕)
- 図版78 段部4 ST5 弥生土器(甕)
 段部4 ST5 弥生土器(甕)
 段部4 ST5 弥生土器(壺)
 段部4 ST5 弥生土器(底部)
 段部4 ST5 弥生土器(蓋)
 段部4 ST5 石器(礫錐)
 段部4 SK33 弥生土器(高杯)
 段部4 SK33 石器(叩石)
- 図版79 段部4 包含層 弥生土器(甕)
 段部5 SK41 弥生土器(高杯)
 段部5 土器集中4 弥生土器(高杯)
 段部5 土器集中4 石器(砥石)
 段部5 ST7P3 石器(叩石)
 段部5 SD7 弥生土器(甕)
 段部1 包含層 弥生土器(壺)
 段部1 包含層 弥生土器(壺)
- 図版80 段部1 包含層 弥生土器(壺)
 段部2 包含層 弥生土器(壺)
 段部2 包含層 弥生土器(甕)
 段部2 包含層 石器(礫錐)
 段部2 包含層 石器(石鍬未製品) (表面)
 段部2 包含層 石器(石鍬未製品) (裏面)

- 段部2 包含層 石器(石錘) (表面)
 段部2 包含層 石器(石錘) (側面)
 図版81 段部2 包含層 石器(石核) (表面)
 段部2 包含層 石器(石核) (裏面)
 段部3 包含層 弥生土器(壺)
 段部3 包含層 弥生土器(甕)
 段部3 包含層 石器(砥石)
 段部3 包含層 石器(剥片)
 段部4 包含層 弥生土器(壺)
 段部4 包含層 弥生土器(甕)
 図版82 段部4 包含層 弥生土器(壺)
 段部4 包含層 弥生土器(壺)
 段部4 包含層 弥生土器(壺)
 段部4 包含層 弥生土器(甕)
 段部4 包含層 鉄器(袋状鉄斧) (表面)
 段部4 包含層 鉄器(袋状鉄斧) (裏面)
 段部4 包含層 石器(石斧)
 段部4 包含層 石器(砥石)
 図版83 段部4 包含層 石器(石錘)
 段部4 包含層 石器(叩石)
 段部4 包含層 石器(剥片) (表面)
 段部4 包含層 石器(剥片) (裏面)
 段部4 包含層 石器(石核) (表面)
 段部4 包含層 石器(石核) (裏面)
 段部5 包含層 弥生土器(壺)
 段部5 包含層 弥生土器(壺)
 図版84 段部5 包含層 弥生土器(甕)
 段部5 包含層 弥生土器(甕)
 段部5 包含層 弥生土器(壺)
 段部5 包含層 弥生土器(甕)
 段部5 包含層 弥生土器(甕)
 段部5 包含層 弥生土器(甕)
 段部5 包含層 弥生土器(鉢又は高杯)
 図版85 段部5 包含層 石器(石斧)
 段部5 包含層 石器(砥石)
 II 区 包含層 石器(叩石・投弾)
 II e 区 SD1 弥生土器(壺・鉢)
- II e 区 P3・5 弥生土器(壺・甕)
 II e 区 包含層 弥生土器(壺)
 II e 区 包含層 石器(砥石)
 II e 区 包含層 石器(投弾・石核)
 図版86 II n 区 包含層 弥生土器(壺)
 II n 区 包含層 弥生土器(壺)
 II n 区 包含層 弥生土器(甕)
 II n 区 包含層 石器(砥石)
 III 区 包含層 弥生土器(甕)
 段部1 P6・ST1 弥生土器(甕)
 段部1 ST3 弥生土器(壺)
 段部1 ST3 弥生土器(甕)
 図版87 段部1 P11 弥生土器(甕)
 段部1 P13・26 弥生土器(壺・甕)
 段部2 SK28 弥生土器(甕)
 段部2 焼土坑6 弥生土器(壺・甕)
 段部2 SD3・5 弥生土器(壺)
 段部2 SD3・5 弥生土器(甕)
 段部2 P56・81・83 弥生土器(壺・甕)
 段部4 SX3 弥生土器(壺・甕)
 図版88 段部4 SX3 石器
 段部4 ST5 弥生土器(壺)
 段部4 ST5 弥生土器(甕)
 段部4 ST5 弥生土器(甕)
 段部4 ST5 中央ピット 弥生土器(甕)
 段部4 ST5 石器(砥石)
 段部4 ST5 石器(石核)
 段部4 SK33 弥生土器(壺・甕)
 図版89 段部4 P55 弥生土器(甌・把手)
 段部5 ST6 弥生土器(壺・甕・高杯)
 段部5 土器集中4 弥生土器(壺)
 段部5 土器集中4 弥生土器(甕)
 段部5 ST7 弥生土器(壺・甕)
 段部1 包含層 弥生土器(壺)
 段部1 包含層 弥生土器(壺)
 段部1 包含層 弥生土器(壺)
 図版90 段部2 包含層 弥生土器(壺)
 段部2 包含層 弥生土器(壺)

	段部2 包含層	弥生土器(壺)		段部4 包含層	弥生土器(甕)
	段部2 包含層	弥生土器(壺)		段部4 包含層	弥生土器(鉢)
	段部2 包含層	弥生土器(壺)		段部4 包含層	弥生土器(高杯)
	段部2 包含層	弥生土器(甕)	図版93	段部4 包含層	石器(砥石)
	段部2 包含層	弥生土器(甕)		段部5 包含層	弥生土器(壺)
	段部2 包含層	弥生土器(甕)		段部5 包含層	弥生土器(壺)
図版91	段部2 包含層	弥生土器(甕)		段部5 包含層	弥生土器(壺)
	段部2 包含層	弥生土器(鉢)		段部5 包含層	弥生土器(壺)
	段部2 包含層	弥生土器(高杯)		段部5 包含層	弥生土器(甕)
	段部2 包含層	弥生土器(器台・蓋)		段部5 包含層	弥生土器(甕)
	段部2 包含層	石器(叩石)		段部5 包含層	弥生土器(甕)
	段部3 包含層	弥生土器(甕)	図版94	段部5 包含層	弥生土器(甕)
	段部3 包含層	弥生土器(高杯・把手)		段部5 包含層	弥生土器(甕)
	段部4 包含層	弥生土器(壺)		段部5 包含層	弥生土器(甕)
図版92	段部4 包含層	弥生土器(壺)		段部5 包含層	弥生土器(甕)
	段部4 包含層	弥生土器(壺)		段部5 包含層	石器(スクレイパー)
	段部4 包含層	弥生土器(甕)		段部5 包含層	石器(砥石)
	段部4 包含層	弥生土器(甕)		段部5 包含層	石器(砥石)
	段部4 包含層	弥生土器(甕)		段部5 包含層	石器(叩石)

図版目次(岩神地点)

図版95	岩神地点全景(南西上空より)	図版102	I w 区SK11 弥生土器甕(53)出土状態
図版96	I w・II・III区調査前風景(南西より)		I w 区P 84 弥生土器壺(25)出土状態
	II・III区石垣検出状態(北西より)		I w 区P 65 上面弥生土器甕(60)出土状態
図版97	I 区調査前風景(北西より)		I w 区III-1層土師器甕(77)出土状態
	III区調査前風景(北東より)		I w 区ST3 完掘状態(北より)
図版98	I w 区上面遺構検出状態(北より)	図版103	I w 区遺構完掘状態(南より)
	I s・I w 区上面遺構検出状態(南東より)		I w 区遺構完掘状態(北より)
図版99	I w 区バンクセクション(北西より)	図版104	I e 区遺構検出状態(南東より)
	I w 区下面遺構検出状態(東より)		I e 区遺構完掘状態(南より)
図版100	I w 区ST1 床面検出状態(南東より)	図版105	I e 区斜面完掘・I n 区遺構検出状態
	I w 区ST2 弥生土器出土状態(東より)		(北西より)
図版101	I w 区ST2 弥生土器壺(13)出土状態		I n 区遺構完掘状態(北西より)
	I w 区ST2 弥生土器甕(19)出土状態	図版106	II 区遺構検出状態(北より)
	I w 区ST2 弥生土器甕(26)出土状態		II 区遺構検出状態(南より)
	I w 区ST2 投弾(42)出土状態	図版107	II 区ST1テラス面検出状態(西より)
	I w 区ST1 完掘状態(南より)		II 区ST1東西セクション(西より)

- 図版108 II区ST1完掘状態(北西より)
 II区ST1弥生土器壺(111)出土状態
 II区ST1石鏃(129)出土状態
 II区ST1石斧(130)出土状態
 II区ST1砥石(132)出土状態
 図版109 II区SK1遺物出土状態(西より)
 II区SK13セクション(西より)
 II区SK1弥生土器壺(137)出土状態
 II区SK1弥生土器壺(139)出土状態
 II区SK1弥生土器甕(141)出土状態
 図版110 II区II層弥生土器甕(164)出土状態
 II区II層弥生土器甕(170)出土状態
 II区P20石包丁(155)出土状態
 II区II層祭祀具(188)出土状態
 II区SX1土師器椀(151)出土状態
 II区SX1緑釉陶器椀(152)出土状態
 II区SK2磁器鉢(145)出土状態
 II区SK5陶器碗(148)出土状態
 図版111 II区遺構完掘状態(北より)
 II区ST1・SK1周辺完掘状態(南より)
 図版112 II区SA1完掘状態(西より)
 III区遺構検出状態(南東より)
 図版113 III区石組遺構完掘状態(北東より)
 III区石組遺構完掘状態(北西より)
 図版114 III区III層弥生土器壺(266)出土状態
 III区土器集中1弥生土器壺(210)出土状態
 III区III層石鏃(269)出土状態
 III区III層石包丁(270)出土状態
 III区III層須恵器壺(279)出土状態
 III区I層瓦質土器焜炉(254)出土状態
 III区I層磁器香炉(240)出土状態
 III区II層石臼(263)出土状態
 図版115 III区中面遺構完掘状態(南東より)
 III区遺構完掘状態(東より)
 図版116 SR1完掘状態(南東より)
 SR1完掘状態(北東より)
 図版117 SR1セクション(北東より)
 III区SR1弥生土器甕(302)出土状態
 I w区SR1弥生土器甕(305)出土状態
 II区SR1鉄斧(310)出土状態
 III区SR1石鏃(311)出土状態
 図版118 II区SR1石包丁(314)出土状態
 II区SR1石包丁(313)出土状態
 II区SR1石包丁(319)出土状態
 II区SR1石斧(320)出土状態
 III区SR1砥石(325)出土状態
 III区土器集中1叩石(215)出土状態
 III区SR1須恵器杯(362)出土状態
 II区SR1土師器杯(353)出土状態
 図版119 II区SK1 弥生土器(壺・甕)・炭化米・
 堅果類
 石器(石鏃)
 図版120 石器(石包丁)
 石器(石包丁)
 図版121 石器(投弾)
 図版122 鉄器(鉄斧・鉄鏃)(裏面)
 鉄器(鉄斧・鉄鏃)(表面)
 図版123 石器(石斧)
 I w区ST1 弥生土器(甕・高杯)
 図版124 I w区ST2 弥生土器(壺)
 I w区ST2 弥生土器(甕)
 図版125 I w区ST2 弥生土器(甕)
 I w区ST2 弥生土器(壺・甕)
 図版126 I w区ST2 弥生土器(高杯)
 I w区SK4 須恵器(皿)・瓦器(椀)
 図版127 I w区SK14・P80 弥生土器(甕・壺)
 I w区ピット 弥生土器(壺・甕・蓋)
 図版128 I w区包含層 弥生土器(壺・甕)
 I w区包含層 土師質土器(杯)・瓦器(椀)
 図版129 I w区包含層 土師器(甕)
 I e区包含層 須恵器(皿)・土師質土
 器(杯・羽釜・鍋)・土師器(甕)
 図版130 I e区包含層 陶器(碗・播鉢)・瓦質土
 器(焙烙鍋)
 I n区包含層 青磁(碗)・磁器(碗)
 図版131 I n区包含層 陶器(皿・碗)

- II区ST1 石器(叩石)
- 図版132 II区ST1 弥生土器(壺・甕)
- II区ST1 弥生土器(壺)
- II区ST1 弥生土器(高杯)
- II区ST1 弥生土器(ミニチュア土器)
- II区ST1 石器(砥石)
- 図版133 II区SK1 弥生土器(壺)
- II区SK1 弥生土器(壺)
- II区SK1 弥生土器(甕)
- II区SK1 石器(砥石)
- II区SK1 弥生土器(壺)
- 図版134 II区SX1 土師器(杯・椀・甕)
- II区包含層 弥生土器(壺・甕・甑・高杯)
- 図版135 II区石垣裏込 陶器(皿・碗)(内面)
- II区石垣裏込 陶器(皿・碗)(外面)
- 図版136 II区包含層 須恵器(杯)・土師器(甕)・土師質土器(小皿)・青磁(碗)・陶器(碗)・磁器(紅皿)
- II区包含層 石器(叩石)
- 図版137 III区ハンダ土坑1 磁器(皿・蓋)
- III区石組遺構 磁器(皿・小杯)
- 図版138 III区土器集中1・2 弥生土器(壺・甕)
- III区石垣1 陶器(皿・碗)・磁器(碗)・石器(砥石)
- 図版139 III区石垣2 磁器(紅皿)・陶器(皿)・磁器(小丸碗)
- III区I・II層 緑釉陶器(皿・椀)・白磁(碗)・須恵器(壺)
- 図版140 III区I・II層 磁器(小杯・碗)
- III区I・II層 磁器(皿)
- 図版141 III区I・II層 瓦質土器(焜炉・焙烙鍋)
- III区III層 須恵器(壺)
- 図版142 SR1 弥生土器(壺)
- SR1 弥生土器(壺)
- 図版143 SR1 弥生土器(甕)
- SR1 弥生土器(甕)
- 図版144 SR1 石器(砥石)
- SR1 土師器(杯・皿)
- 図版145 SR1 黒色土器(椀)・緑釉陶器(皿・椀)(内面)
- SR1 黒色土器(椀)・緑釉陶器(皿・椀)(外面)
- 図版146 SR1 須恵器(杯・蓋・高杯)
- Iw区P65 弥生土器(甕)
- Iw区II層 青磁(碗)
- Ie区P5・8 土師質土器(杯)
- Ie区II層 石器(砥石)
- 図版147 II区III層 弥生土器(甕)
- III区SD2 銅製品(煙管)
- II区SX1 緑釉陶器(椀)(内面)
- II区SX1 緑釉陶器(椀)(外面)
- II区II層 石器(祭祀具)(表面)
- II区II層 石器(祭祀具)(裏面)
- III区ハンダ土坑1 陶器(皿)
- III区ハンダ土坑1 陶器(皿)
- 図版148 III区ハンダ土坑1 陶器(皿)
- III区ハンダ土坑1 磁器(碗)
- III区ハンダ土坑1 石器(砥石)
- III区石組遺構 磁器(重鉢)
- III区I層 磁器(香炉)
- III区I層 瓦質土器(焜炉)
- III区II層 瓦質土器(焜炉)(内面)
- III区II層 瓦質土器(焜炉)(外面)

付図目次

付図1 バーガ森北斜面遺跡三世庵地点調査区全体遺構配置図(S = 1/200)

付図2 バーガ森北斜面遺跡岩神地点調査区全体遺構配置図(S = 1/200)

第 I 章 調査に至る契機と経過

1. 調査に至る契機

バーガ森北斜面遺跡の所在するいの町は、県中央部に位置し、東側は県都である高知市に接する。平成 16 年(2004) 10 月に吾川郡伊野町、吾北村、土佐郡本川村が合併して現在のいの町になった。町の南部に位置する中心部には、鉄道に並行して東西に国道 33 号線が通っており、仁淀川橋のたもとで吾北、本川、愛媛県西条市方面に向かう国道 194 号線と分岐する。これらの国道は、高知県西部の主要国道であり、いの町は近郊からの交通の要衝となっているため、中心部の国道は慢性的な道路渋滞となっている。これらの交通渋滞緩和及び路面冠水の解消、交通安全確保を目的として国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所により高知西バイパスの計画が図られた。高知西バイパスは、高知市鴨部よりいの町波川までの総延長 9.8km の区間で計画されており、I 期工事として高知市鴨部よりいの町枝川までの区間は平成 9 年度までに供用が開始された。いの町枝川から波川区間については II 期工事として地域高規格道路・高知松山自動車道の一部としての事業が進められてきた。いの町内では平成 18 年度から高知西バイパス建設工事が進められている。路線計画は、いの町中心部の南部丘陵地を現国道 33 号線に並行して西に進み、仁淀川を架橋して対岸の鎌田地区に渡り、波川、日高村方面に向けてバイパスが建設される予定である。

いの町内には、仁淀川及びその支流沿いに遺跡の分布密度が高く、バーガ森北斜面遺跡や天神溝田遺跡などに代表される弥生時代から中・近世にかけての周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く立地する。今回のバイパス路線計画は仁淀川の支流である宇治川沿い、及び南部丘陵地に工事が行われることから国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会による協議が行われ、計画



図1-1 いの町位置図

1. 調査に至る契機

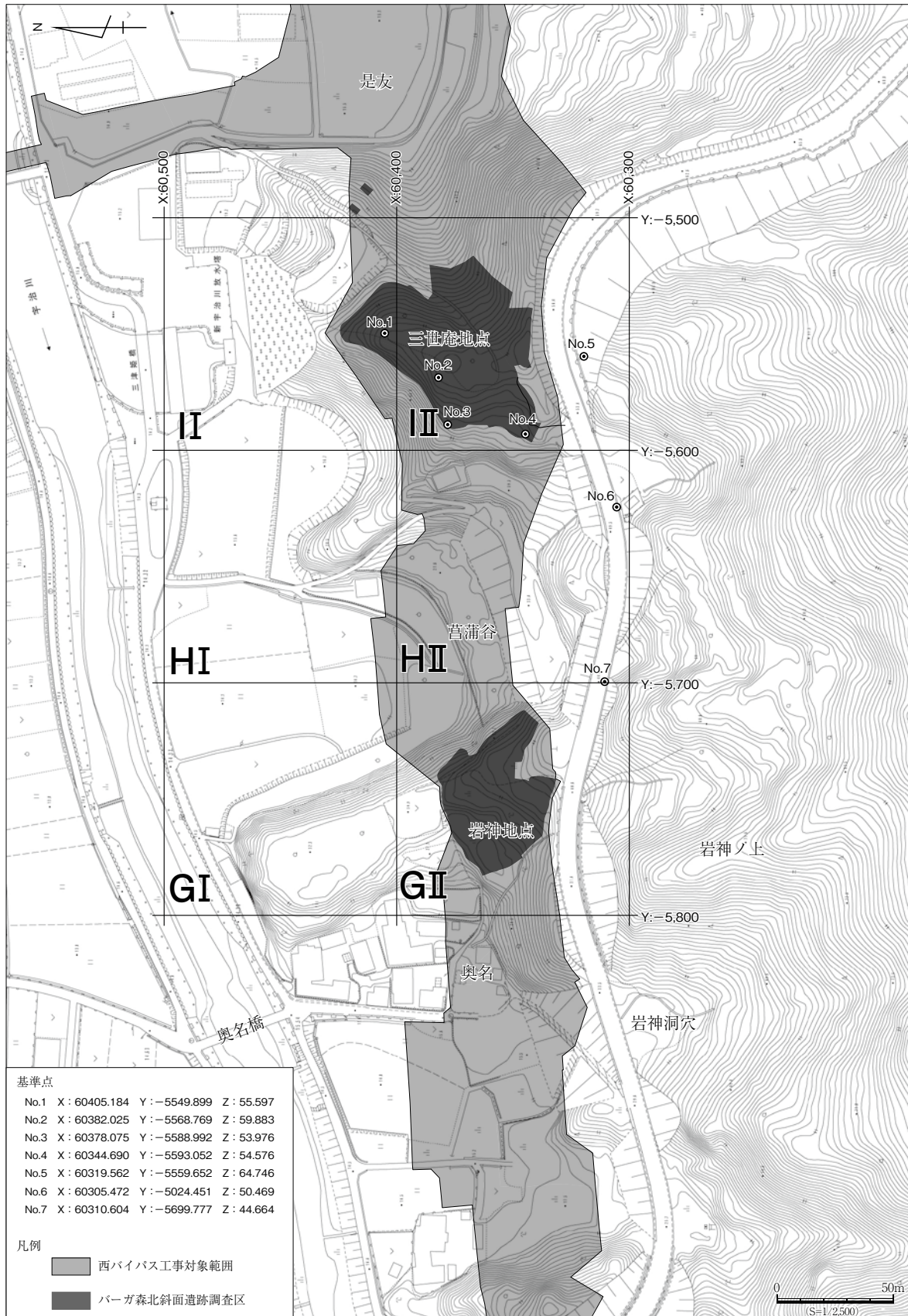


図1-2 調査地点位置図

路線内及び周辺部に埋蔵文化財包蔵地が立地する工事計画区域については、事前の試掘調査を実施し、遺構・遺物の有無等、調査内容の結果により発掘調査が必要な場所、範囲についての協議が行われた。今回報告するバーガ森北斜面遺跡については、平成22年度に岩神地点の試掘調査が高知県教育委員会により実施された。

2. 調査の経過

バーガ森北斜面遺跡は、昭和43年(1968)、昭和49年(1974)、昭和51年(1976)に部分的な発掘調査が行われ、周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡範囲が登録されている。その後、平成9年(1997)、平成11年(1999)には、岩神地点と三世庵地点について伊野町農道基盤整備事業に伴う農道工事の際に記録保存を目的とした発掘調査が実施されている。遺跡の中で、三世庵地点の竪穴建物跡は昭和50年に伊野町指定文化財として登録されていたが、周知の包蔵地内に道路計画があったため、いの町は、高知県教育委員会の指導のもと指定文化財の取り扱いについて文化財審議会を開催し協議の場を持った。その結果、高知西バイパスの道路計画の変更は難しく、止むなく物件の指定を解除し、記録保存のための調査を実施することとなった。なお、遺跡範囲内の指定文化財の竪穴建物跡周辺にバーガ森北斜面遺跡の碑、遺跡の内容を記した説明板等を設置し、指定物件の箇所付けの変更案も出された。

これらの経緯を受け、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町、高知県教育委員会による協議が行われ、工事計画区域内の丘陵部分を中心に記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。三世庵地点は平成22年4月5日から平成23年2月25日、岩神地点は平成23年8月1日から平成24年1月31日まで2カ年に亘って発掘調査を実施した。

2. 調査の経過

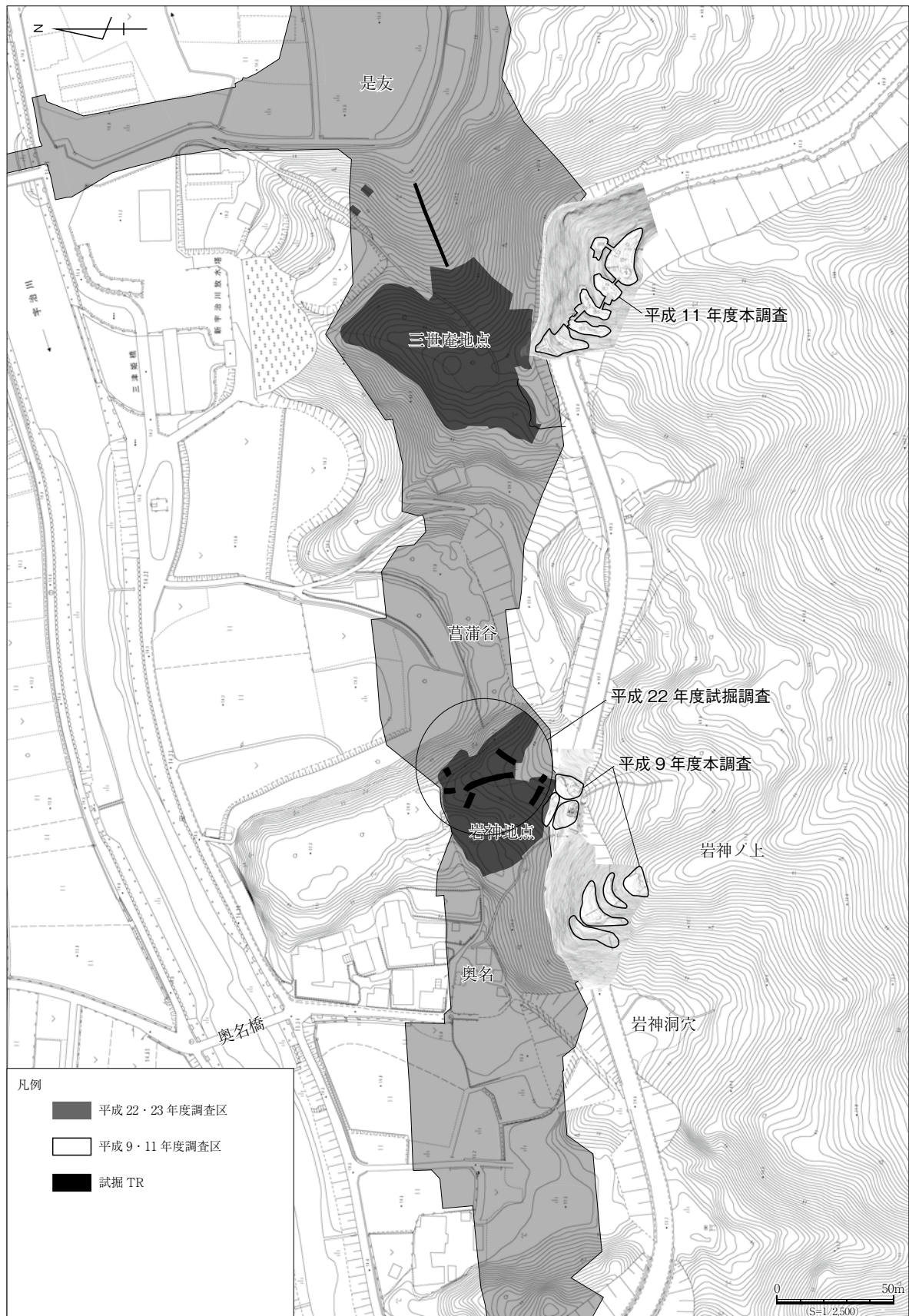


図2-1 これまでの調査・試掘位置図

第Ⅱ章 遺跡の概要と地理的・歴史的環境

1. バーガ森北斜面遺跡の概要

バーガ森北斜面遺跡は高知県吾川郡いの町字奥名・是友に所在し、仁淀川の支流宇治川に沿った東西に延びる標高140m前後の丘陵北斜面にある。遺跡発見の端緒となったのは昭和32年(1957)に地元の小谷登喜義・中島勝秀両氏らによって三世庵・岩神地点を含む7地点から遺物が発見され、丘陵北斜面の中腹を中心とし東西約450m、南北300mの範囲の中に弥生時代中期末の集落の存在が想定された。その後、昭和43年(1968)、昭和49年(1974)、昭和51年(1976)に岡本健児・廣田典夫両氏らによって三世庵と奥名地区の発掘調査が行われ、竪穴建物跡3棟と、弥生時代中期末の土器、石包丁、叩石、打製石鏃、鉄刀子、投弾などが出土し、菖蒲谷を挟んで東側に三世庵・新崎、西側に岩神・岩神ノ上とそれぞれの谷を挟み、標高45～80mを測る丘陵斜面部に弥生時代の集落の存在が明らかとなった。特に、三世庵地点で発見された竪穴建物跡は良好な状態で検出され、昭和50年(1975)に伊野町指定文化財として登録された。その後、平成9年度(1997)と平成11年度(1999)に伊野町南地区基幹農道整備事業に伴い、新崎地点と岩神地点の記録保存を目的とした発掘調査が実施された。新崎地点は三世庵地点の上部にあたり竪穴建物跡1棟と土坑4基、段状遺構を3ヶ所で確認した。遺物は弥生時代中期末の壺・甕を中心とする土器、石包丁、石錘などが出土した。岩神地点では竪穴建物跡2棟が検出されている。これら2地点の調査成果は弥生時代中期末から後期初頭にかけての竪穴建物跡や土坑が遺物とともに検出され、より具体的な集落の広がりを把握することができた。

バーガ森北斜面遺跡出土の土器の特徴は貼付口縁で外面に刻目を施し、頸部から胴部上半にかけて微隆起帯と櫛描沈線文が施される壺や甕が主体を占める。これらは「南四国型」と呼ばれる在地色の強い弥生時代中期の土器の一群であり、その特徴から高知県の指標土器となっている。また、バーガ森北斜面遺跡出土の土器の胎土は砂粒が多く含まれ、色調が黒色、黄灰色のものが主体を占める。他には凹線文が施された土器も見受けられるが全体量の10%にもみまない。高知平野の本村遺跡(香南市)や田村遺跡群(南国市)の弥生時代中期末の土器と比較すると土器の胎土や凹線文土器の占める割合など組成比に相違がみられ、この時代の集落の地域差をうかがう事ができる。高知県に所在する弥生時代の「高地性集落」の構造を解明するうえで欠かすことの出来ない遺跡である。

2. 地理的・歴史的環境

(1)地理的環境

バーガ森北斜面遺跡の所在する高知県吾川郡いの町は、高知県の中央部に位置する。いの町を流れる仁淀川の流域は、愛媛県中央山岳部から高知県中部にまたがり、高知県土佐市、愛媛県久万高原町をはじめとする3市6町1村で構成される。仁淀川源流を含む上流域は、石鎚山をはじめとする急峻な山地からなる。また、中流域は、越知町等わずかに平地が開けるほかは、山地で構成される。いの町北部に立地する本川地区は愛媛県との県境に位置し、標高1,000m前後の山岳地で、西日本最高峰の石鎚山から連なる高山を有し、吉野川の源流域にあたる。

いの町南部には古生層からなる丘陵と、東西方向の標高15～20mの沖積層の低地がある。南部の

2. 地理的・歴史的環境

仁淀下流域では、東西から合流する日下川、宇治川、波介川等の支流沿いや、旧河道沿等に細長く高岡、弘岡平野の沖積地が形成され、土佐市・いの町等の主要な市街地が位置する。これら支流の河床勾配は極めて緩く、支流の平野は、仁淀川の本流から離れるにしたがい地盤が低くなる地形であるため、古くから氾濫による水害に悩まされてきた地域である。下流に形成される平野は、その地盤高が仁淀川の洪水位より低く、さらに、仁淀川から離れるほど地盤が低いため、仁淀川からの背水の影響を受けやすく内水被害が多発している。

当地域の地質は大きく秩父累帯に属し、北から秩父垂帯、黒瀬川垂帯、三宝山垂帯に三分される。北部は一部が仁淀ユニットと呼ばれる岩層に属し、先白垂系の砂岩・泥岩の互層からなり、泥岩部にはチャート・石灰岩・緑色岩の岩塊が含まれる。南部は黒瀬川構造帯と呼ばれるシルル―デボン期の古期岩類からなるレンズ状の岩帯である。この地域の黒瀬川構造帯は東西方向に細長く帯状にみられることから大きく四帯に分けられている。いの町南部の中心部は、黒瀬川構造帯の一部を構成する伊野層があり、岩層は緑色岩・泥質岩からなり、チャート、石灰岩が含まれる。仁淀川断層を南限に仏像構造線までの間は三宝山垂帯と呼ばれ、チャート、泥岩、砂岩で構成される斗賀野層と、石灰岩、チャート、凝灰岩、砂岩、泥岩が含まれる三宝山層の付加帯にあたる。いの町南端部の八田地区は秩父累帯の南端に位置し、仏像構造線に接する。今回報告するバーガ森北斜面遺跡は黒瀬川構造帯の一部である伊野層の地質帯に位置し、地山は泥岩・緑色岩であり、岩神地点ではチャートの岩塊も認められる。

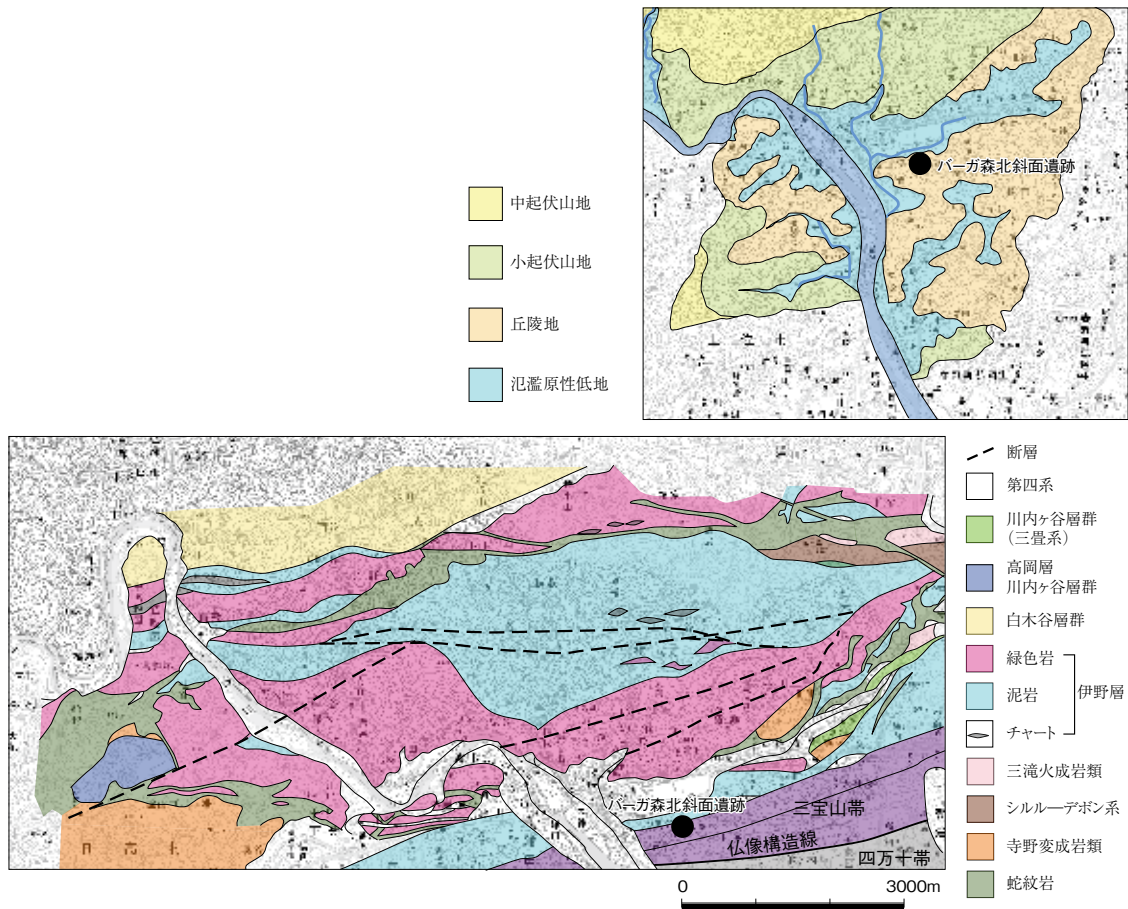


図2-2 いの町地形地質図

(2)歴史的環境—バーガ森北斜面遺跡周辺の遺跡—

バーガ森北斜面遺跡の周辺に目を向けると、平野部には縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が立地する。これらの遺跡の立地は、宇治川を中心とした自然堤防上に立地する。バーガ森北斜面遺跡の岩神地点下の谷部には奥名遺跡があり、昭和54年に行われた宇治川改修工事の際に縄文時代中期中葉の船元ⅢA式土器、後期中葉の津雲A式が発見された。また、対岸の大デキ遺跡では排水工事の際に水田中から縄文時代晩期の磨製石斧が採取されている。大デキ遺跡では弥生時代中期中葉に位置付けられる甕型土器の口縁部や石斧なども採取され、東へ500mほど宇治川を遡ったサジキ遺跡では同時期の土器片と石包丁が採取されており、宇治川右岸の平野部には弥生時代中期頃には一定の遺跡の広がりがみられる。宇治川下流域に目を向けると天神溝田遺跡が立地しており、昭和36年の宇治川改修工事の際に中細形銅剣と中広形銅戈(いずれも県指定文化財)が発見された。河川に近い畑で掘削中に地下2.5～3mで偶然出土した。銅剣の出土状況の詳細は不明であるが身は斜めになって埋没していたとされており、さらに5mほど離れた地点で銅戈も出土した。これらの青銅器を祭った弥生時代の人々の集落がバーガ森北斜面遺跡ではないかとされていた。

天神溝田遺跡については、高知西バイパス建設工事及びいの町道建設に伴う発掘調査が平成18年度から実施され、弥生時代後期から江戸時代にかけての遺構と遺物が確認されている。(詳細は高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集『天神溝田遺跡Ⅰ』2010.2 同139集『天神溝田遺跡Ⅱ』2014.3)この調査では弥生時代後期前半の土坑と、後半の土器溜まり遺構を検出したが、銅剣・銅戈の時期を示す遺構と遺物は確認されなかった。出土した土器は従来「天神式土器」と呼ばれるこの地域の弥生時代後期後半の指標土器であり、この頃には周辺部に集落が開けていたものと思われる。また、遺跡の東端では一段階古い弥生時代後期前半代の土器が土坑から一括して出土している。天神溝田遺跡では、他に古代の遺構と遺物が同町内で初めて確認され銅製の銚帯金具や、鉄器製作を窺わせる鉄滓、鍛冶関連遺構も確認された。これらの古代の遺構・遺物は主に8世紀後半～9世紀前半代、9世紀末～10世紀代の奈良・平安時代を中心とする。また、中世では完形の備前焼壺の中に土師質土器皿20枚、銅銭393枚を納め、壺の口の部分に和鏡で蓋をするように置いた埋納遺構が検出された。さらに、壺内部を精査した結果、ヒエ・アワといった種子も入っており、何らかの祭祀を行った後に埋納されたものと考えられる。埋納の時期は備前焼壺の形態から16世紀前半代と考えられ、遺跡の南丘陵に立地する音竹城跡との関連もうかがえる。検出された遺構の中心は南北朝期から室町時代であり、14～16世紀前半代の掘立柱建物跡や、土坑、溝を検出した。近世では17世紀前半代と、18世紀後半～19世紀代を中心とする掘立柱建物跡や土坑、これらの屋敷を囲む溝が検出された。宇治川を挟み天神溝田遺跡の対岸には塔の向遺跡が立地する。平成20年度に調査がおこなわれ弥生時代後期の土器片と古代の土器片が採取されており、これらの土器は天神溝田遺跡と同時期のものであることから遺跡の広がりが確認できた。

バーガ森北斜面遺跡の岩神地点の山裾に開けた平地には奥名遺跡が立地する。奥名遺跡は昭和53年に宇治川改修工事で橋の付け替え工事の際に掘削土の中から偶然縄文時代後期の土器(津雲A)が確認され縄文時代の周知の遺跡包蔵地になっている。高知西バイパス建設に伴い、平成24年度に道路工事で影響を受ける南側の山裾部分について発掘調査が行われ、古代(9世紀末～10世紀)・中世(13～15世紀)を中心とする遺構・遺物が確認されている。また、天神溝田遺跡から奥名遺跡の南背後にある丘陵上には音竹城跡が立地しており、現状では堀切や平場など中世の山城としての遺構が良く残っている。

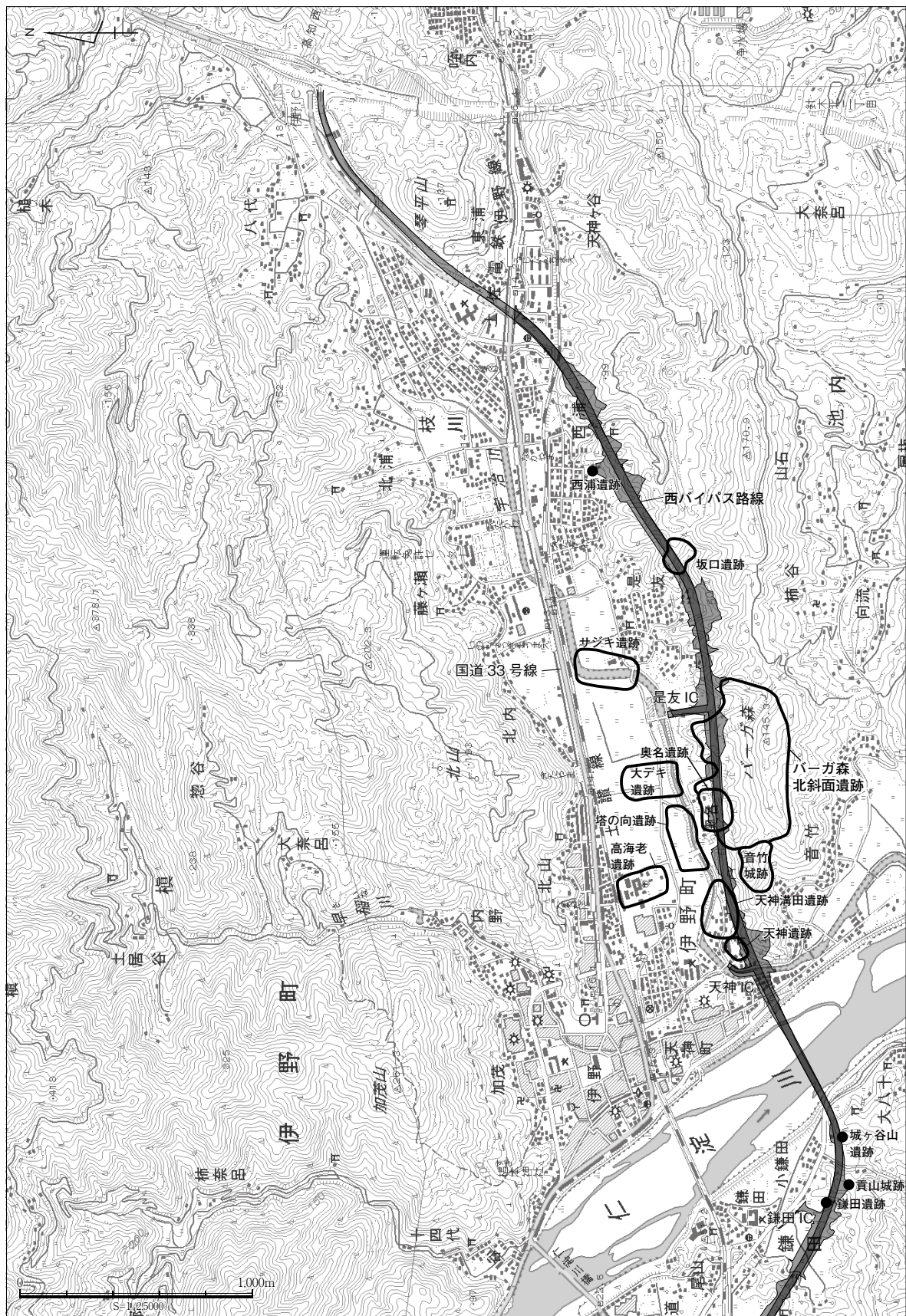


図2-3 西バイパス路線と周辺の遺跡

第三章 三世庵地点の調査成果

1. 三世庵地点の概要

三世庵地点は菖蒲谷の東側にあたり、南北に延びる標高51～58mの丘陵部、及びその斜面部に位置する。「三世庵」(さんぜあん)という地名は天正年間の『長宗我部地検長－吾川郡上－』に「サンゼアン」のホノギの記載がみられる。遺跡の発見は昭和49年に菖蒲谷に面した斜面部で弥生時代中期末の土器や石器と共に竪穴建物跡が検出され、バーガ森北斜面遺跡の埋蔵文化財包蔵地の東限を示す地点として確認された。その後、平成11年度には今回の調査対象の上部に位置する新崎地点で農道

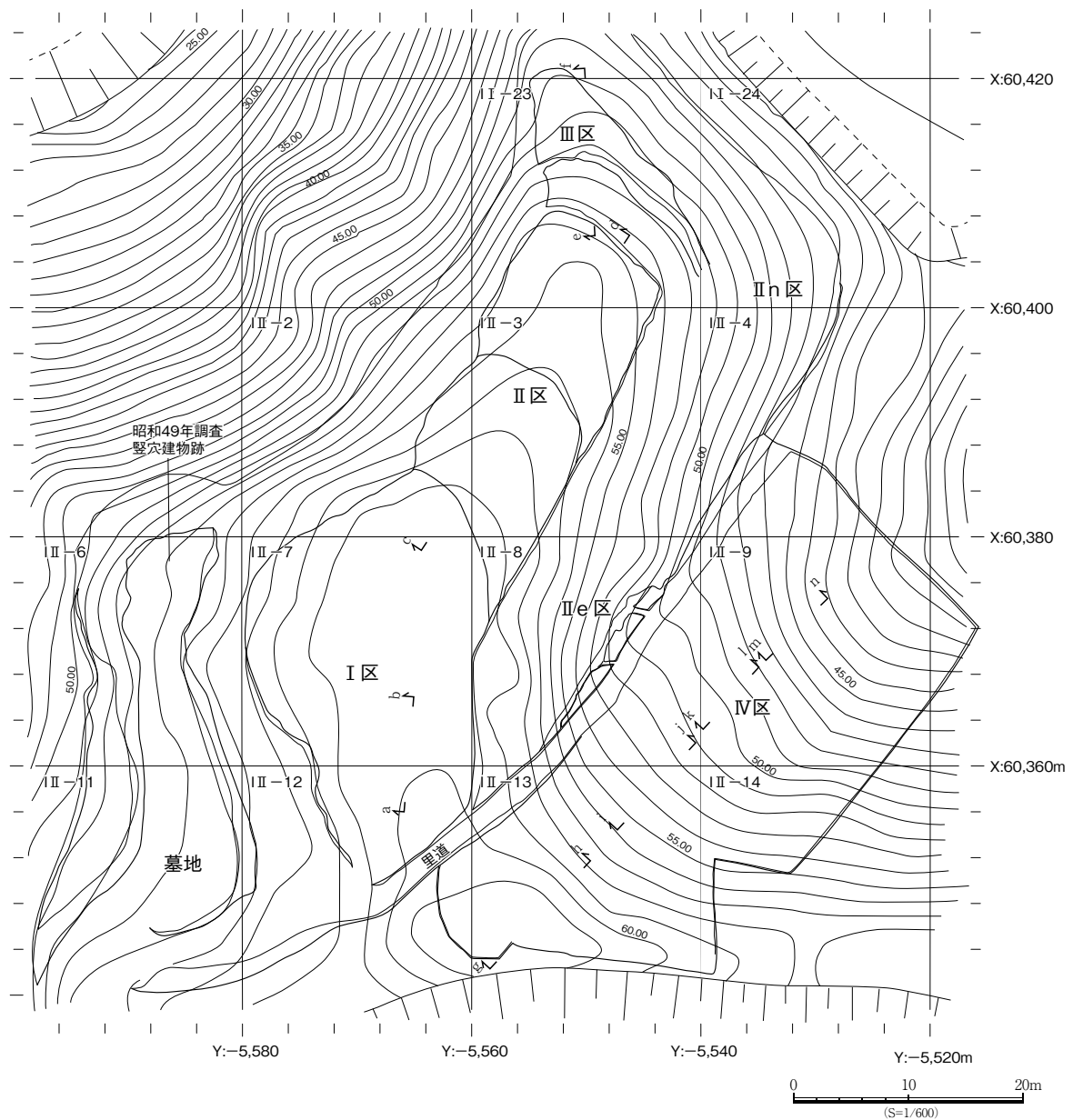


図3-1 三世庵地点調査区位置図・グリッド設定図

2. 各調査区の概要と基本層序

建設に伴う記録保存調査が実施され竪穴建物跡などが検出されている。

今回の調査対象地の現況は、丘陵部の尾根頂部が果樹畑、茶畑、西斜面部は墓地、東斜面部は竹林など雑木林である。尾根頂部は畑の開墾の影響を受け、西斜面部は墓地の改変の影響を受けていた。東側斜面部は、雑木林と竹林であったが、現地踏査で小規模な段地形が連続する場所が確認されたため調査の対象範囲とした。

発掘調査前に調査対象地内全域の伐採を行い現況の地形測量を行った。地形測量後は地形に応じてアルファベット、方位を示した小文字アルファベットを付し各調査区の設定を行った。調査対象地の地形が丘陵部と斜面部にあたるため、丘陵頂部の畑に開墾されている平場南部をⅠ区、北部をⅡ区、Ⅱ区北端で北西と北東方向に小尾根が分岐するが、北東方向に延びる小尾根の下段にある小規模な段部をⅡn区とした。さらに、北西方向に延びる小尾根の下段に開けた小規模な平場をⅢ区とした。丘陵東斜面部は上部の平場に付したⅡ区との関連からⅡ区東斜面部としてⅡe区とした。この東斜面部には現況で里道があり、谷部の様相を呈している。この里道を境に南東側に広がる斜面部をⅣ区とした。また、丘陵西斜面部は墓地造成による開墾が著しく、昭和49・51年に発見された竪穴建物跡周辺のみを調査の対象とした。調査にあたっては、公共座標(世界測地系)を使用し、調査対象地に20mの中グリッド、4mの小グリッドを設け、包含層の遺物の取り上げ等には調査グリッド名を使用した。グリッド番号は、天神溝田遺跡発掘調査で割り付けた高知西バイパス関連遺跡調査グリッド番号を岩神地点と同様に踏襲した。当調査区は大グリッド(100m四方)でⅠ・Ⅱグリッドに位置する。

発掘調査は、平成22年4月5日から準備を開始し、調査対象地内の樹木伐採工事が終了後、Ⅰ区から開始した。調査区の平場に土層観察用のベルトを設定し、ベルトに沿ってトレンチ調査を行った。その後、平面的な発掘を人力により行い、廃土については斜面にシューターを設置して、東斜面部の里道に仮置きした。その廃土を重機(小型バックホー)により、用地内の仮置場に移動した。Ⅰ・Ⅱ区の調査終了後は東斜面部の発掘調査を行った。斜面部は上部から掘削し、土で土嚢を造り、斜面の足場として利用しながら斜面下部に向かって調査を進めた。Ⅳ区の斜面部も段部を中心に縦断の土層ベルトを設定し、斜面上部の段部から同じ方法で調査を行った。各斜面部は斜度が40°前後の場所もあり、発掘作業は困難を極めた。遺構完掘後はラジコンヘリコプターによる遺構全体の完掘状態写真撮影及び写真測量を委託し記録保存を図った。また、調査終了後は調査成果について記者発表及び現地説明会を実施した。三世庵地点の発掘調査は平成23年2月25日まで延べ11ヵ月間実施した。

2. 各調査区の概要と基本層序

(1)Ⅰ区

Ⅰ区は平場で面積536㎡、標高59.6m前後を測る。現況は果樹畠であり、開墾による削平及び、園芸用施設の攪乱がみられた。現表土及びⅠ・Ⅱ層は耕作土であり、近現代の陶磁器や瓦片が出土した。Ⅱ層直下は地山の岩盤(泥岩)である。地山はほぼ水平に削平されている。Ⅰ区の北端から尾根筋は北東方向に傾斜しながらⅡ区に延びる。調査区の西側縁辺には、暴風用に植林された樹木と用排水として掘られた溝や貯蔵用に掘られた室施設など、改変が著しい。また、西斜面では開墾の影響を受けているものの弥生時代中期の遺物包含層が一部に残っており、通路状の段部で弥生土器片が出土した。

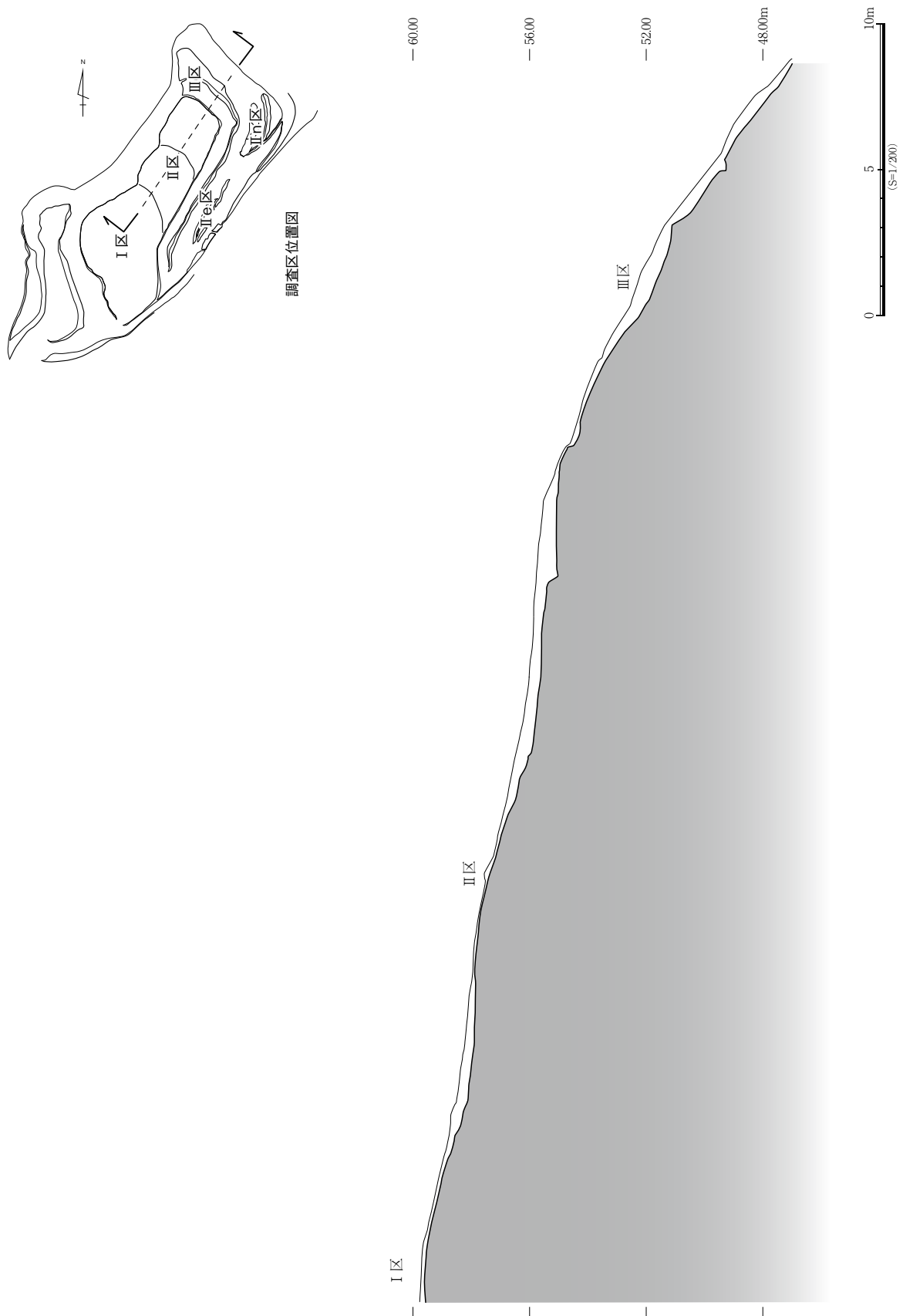


図3-2 I～III区エレベーション図

2. 各調査区の概要と基本層序

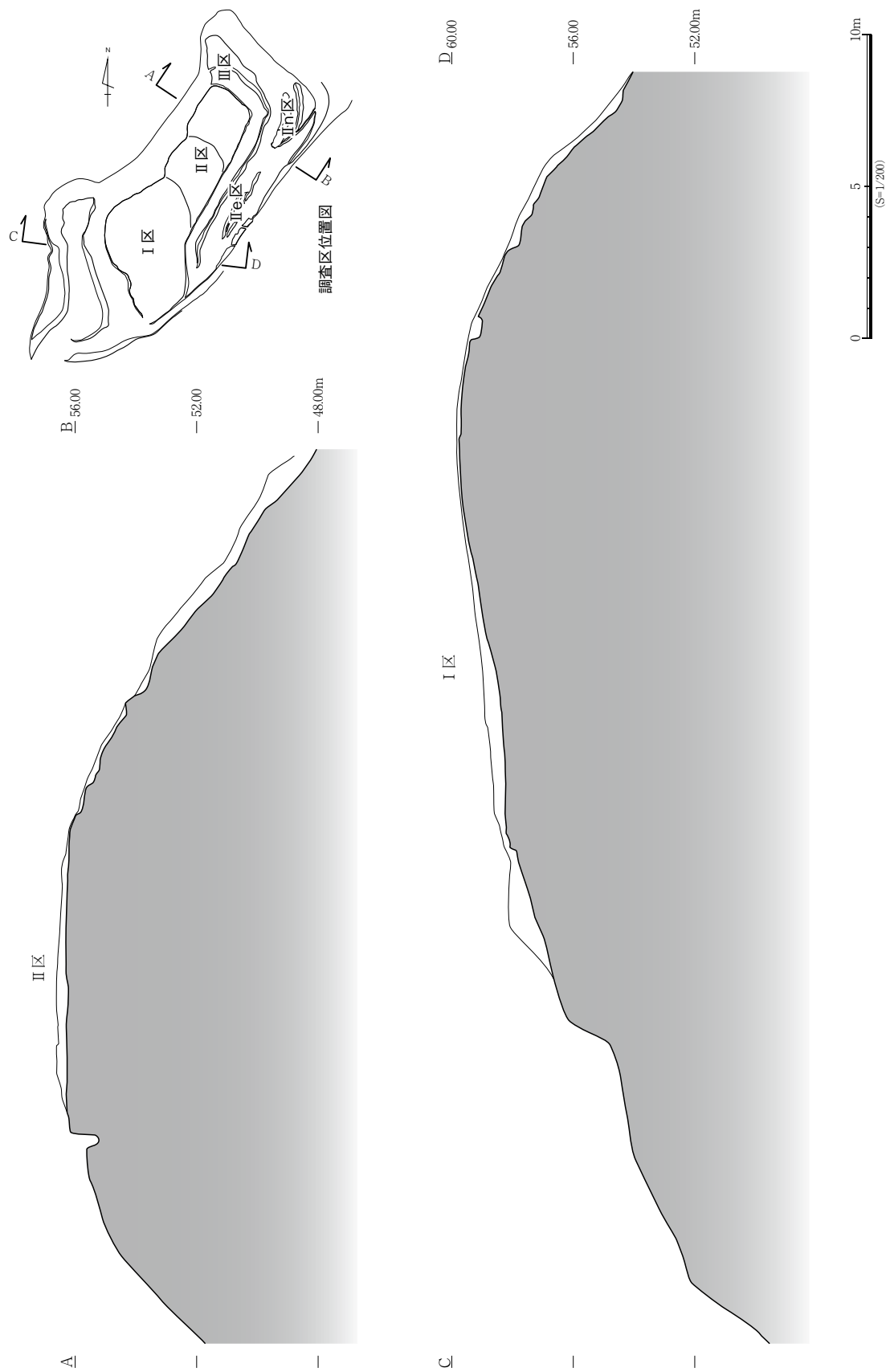


図3-3 I・II区エレベーション図

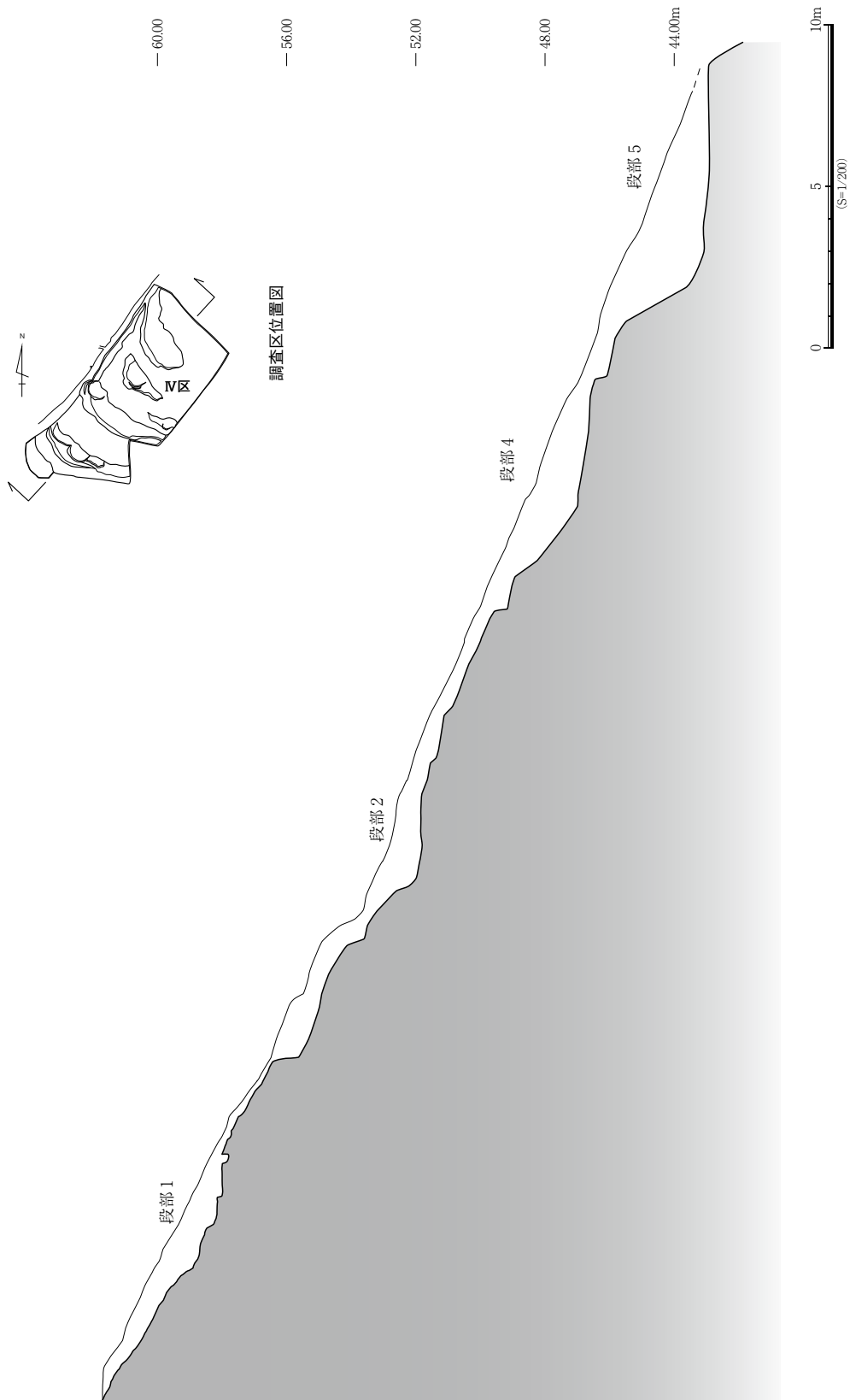


図3-4 IV区エレベーション図

2. 各調査区の概要と基本層序

I 区の基本層序

- I 層 : 褐色(7.5YR4/6)シルト質砂(作土。φ 0.5~1.5cm礫・炭化物少量混)
- II 層 : 黄褐色(10YR5/6)シルト質砂(φ 0.5~1.5cm礫・炭化物少量混)
- II' 層 : にぶい赤褐色(5Y4/4)シルト質砂(φ 1.0~5.0cm角礫混)

(2) II 区

II 区は平場で面積 343.5㎡, 標高 55~57m 前後を測り, 北に向かって地形が下がっている。現況は I 区と同じく果樹畝であり, 同様に開墾により削平を受けていた。平場では表土及び I・II 層中から, 近現代の陶磁器や瓦片が出土した。II 区は, I 区から比高差 2~4m で北に向かって下がっており, 標高 57m と 55m に小規模な平場がある。北端の平場では粘性のある明褐色シルト(III 層)の堆積が認められ, 弥生時代の遺物包含層が確認された。調査区南部の標高 57m の平場では, 柱穴が円形に並ぶピットを検出し, 埋土から弥生時代の石鏃・石包丁が出土した。これらのピット埋土は III 層と同じであり, 弥生時代の建物(ST9)の柱穴プランとして捉える事ができる。また, 標高 55m の平場の北東端部は上面の近現代の遺構面下に堅穴建物が検出された。規模は直径 3m 前後を測る円形で, 一部に段

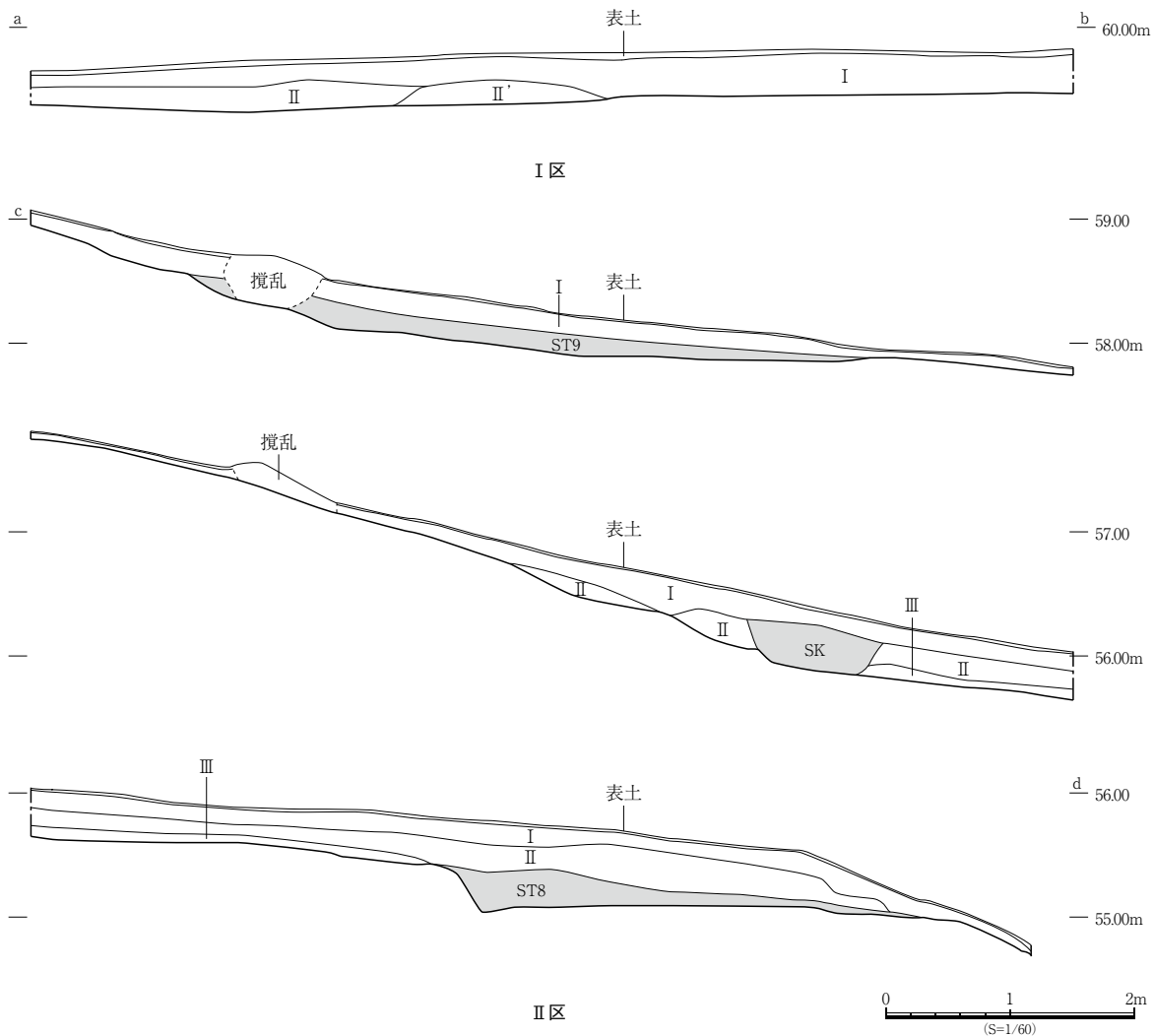


図3-5 I・II区調査区セクション図

状のテラスがみられる。住居埋土からは叩石などが出土した。また、Ⅱ区東斜面及び北東側斜面では段部が検出され、弥生土器や石器がまとまって出土した。

Ⅱ区の基本層序

- Ⅰ層：黄褐色(10YR5/6)シルト質砂(耕作土。φ 1.0～2.0cm礫混)
- Ⅱ層：明褐色(7.5YR5/6)シルト質砂(φ 0.5～2.0cm礫混。粘性)
- Ⅲ層：明褐色(7.5YR5/6)シルト(弥生時代遺物包含層。φ 0.5～2.0cm礫混。粘性)

(3)Ⅲ区

Ⅲ区は、調査対象地の北端にあたり、面積 177 m²、標高 52m 前後を測る平場である。Ⅱ区の北端で尾根筋は北方向と北東方向に分岐し、Ⅱ区から北方向の比高差 3m の一段低いところに開けた平場をⅢ区とした。表土及びⅠ・Ⅱ層を除去すると弥生時代中期末の遺物包含層のⅢ層があり、Ⅴ層床面でピットを検出した。遺構検出面標高は 51.3m を測る。これらのピットを検出した平場は、幅 3～7m、長さ 10m を測り三角形を呈する。地山を掘削し平坦面を造りだしている。この平坦部で弥生時代中期末から後期初頭の土器片が出土した。

Ⅲ区の基本層序

- Ⅰ層：黄褐色(2.5Y5/6)シルト質砂(φ 1.0～5.0cm礫混)
- Ⅰ'層：オリーブ褐色(2.5YR4/6)シルト質砂(φ 1.0cm礫混)
- Ⅱ層：褐色(10YR4/6)シルト質砂(φ 1.0～5.0cm礫混)
- Ⅲ層：黄褐色(2.5Y5/6)シルト(弥生時代遺物包含層。φ 1.0～5.0cm礫混)
- Ⅳ層：黄褐色(10YR5/8)シルト(Ⅳ-1：φ 3.0～10.0cm礫・Ⅳ-2：φ 1.0～2.0cm礫混)
- Ⅴ層：明黄褐色(2.5Y6/8)シルト(弥生時代遺物包含層。φ 1.0～5.0cm礫混)

(4)Ⅳ区

Ⅳ区は、南東斜面に位置し、標高 59～42m 前後を測る斜面地の調査区である。Ⅰ～Ⅲ区の丘陵尾根筋の南東谷部にあたる。Ⅳ区の調査は 1,537 m² を対象に実施した。斜面全体の斜度は 24～32° 前後を測る傾斜地である。段部は、標高 58, 52, 49.8, 48, 44m の 5箇所が確認され、幅 4～5m、長さ 10～20m にわたり山の斜面を L 字状に削って平坦に造成している。調査区の中央部に土層ベルトを上段

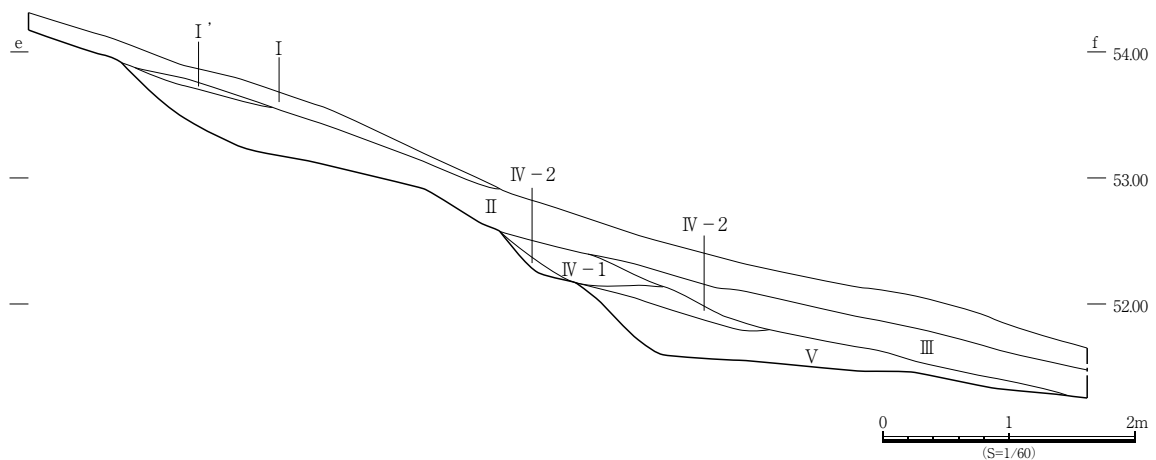


図3-6 Ⅲ区調査区セクション図

2. 各調査区の概要と基本層序

から下段にかけて設定し、各段部及び斜面部の堆積状況を確認しながら面的に発掘調査を行った。各段部、Ⅲ層以下が弥生時代中期末の遺物包含層である。段部では竪穴建物跡と炉跡と思われる土坑が検出されたことから、住居などの居住空間と考えられる。竪穴建物跡の規模は、直径3～5mを測る円形、楕円形であり、一部の竪穴建物跡には、貼床(粘土を床に敷く)が認められた。各建物内では、炉跡と思われるピットを検出した。また、各段部下の斜面では柱穴が並んで検出されており、柵列もしくは建物構造と一体的な施設として捉える事ができる。また、竪穴建物跡の外部には焼土を伴う炉跡や、石囲みの炉跡などを検出する事ができた。

今回の出土遺物の大半はⅣ区から出土しており、弥生時代中期末から後期初頭にかけての弥生土器、石器を中心とする遺物が出土した。

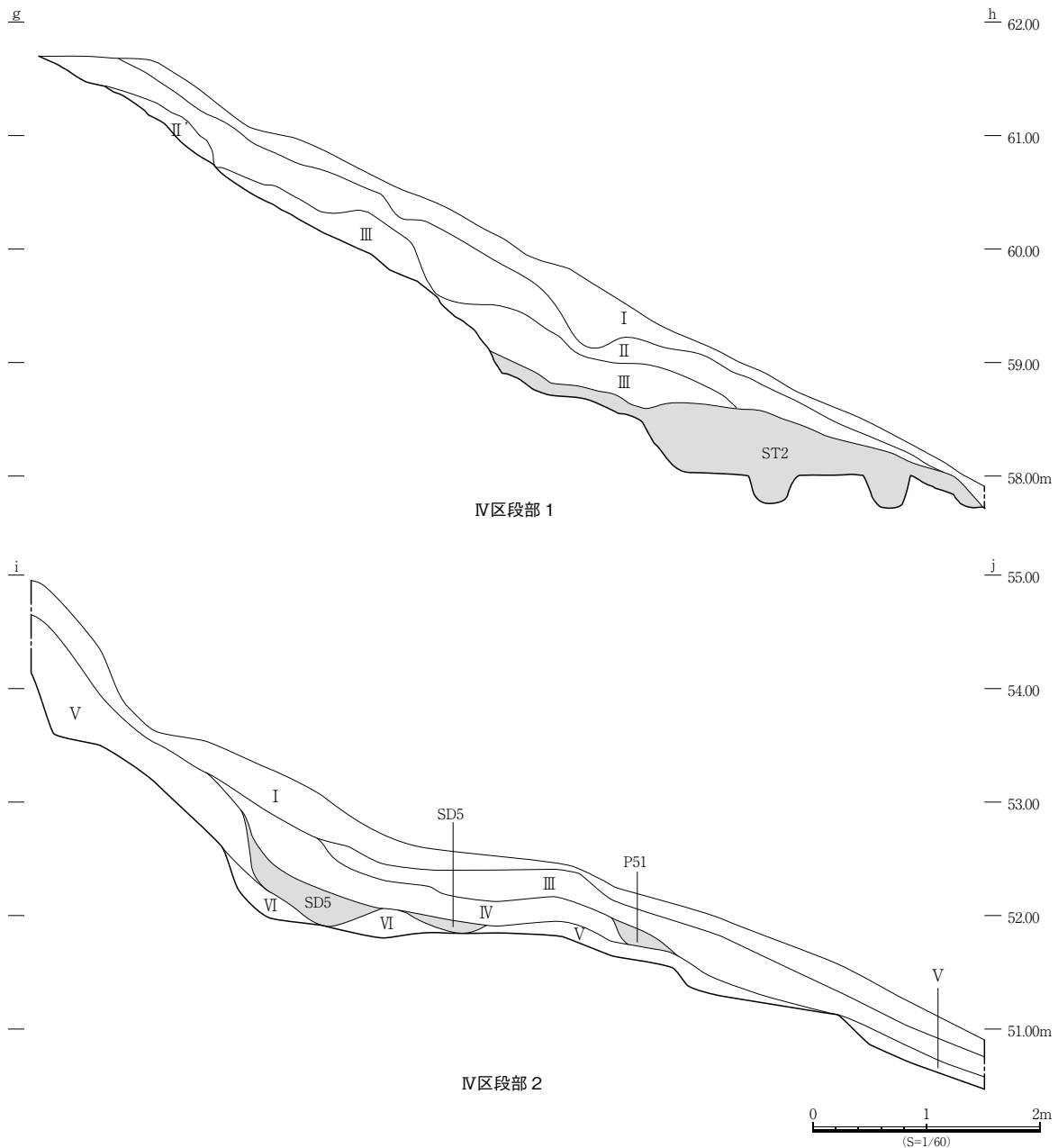


図3-7 段部1・2セクション図

Ⅳ区の基本層序

(段部1)

- I層：暗褐色(10YR3/3)シルト(表土, 植物腐植土含む)
- II層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質砂(φ 1.0cm礫少量含む)
- II'層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト(φ 0.5cm礫含む)
- III層：暗褐色(10YR3/4)シルト(弥生時代遺物包含層。φ 1.0～3.0cm礫混)

(段部2)

- I層：暗褐色(10YR3/3)シルト(表土, 植物腐植土含む)
- III層：褐色(7.5YR4/3)シルト(弥生時代遺物包含層。φ 1.0cm礫混)(段部1 II層と共通)
- IV層：褐色(7.5YR4/3)粘土質シルト(弥生時代遺物包含層。φ 1.0～5.0cm礫混。炭化物含む)
- V層：黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト(遺構検出面。φ 1.0～5.0cm礫混。炭化物含む)
- VI層：褐色砂質シルト(φ 0.5～1.5cm礫混)

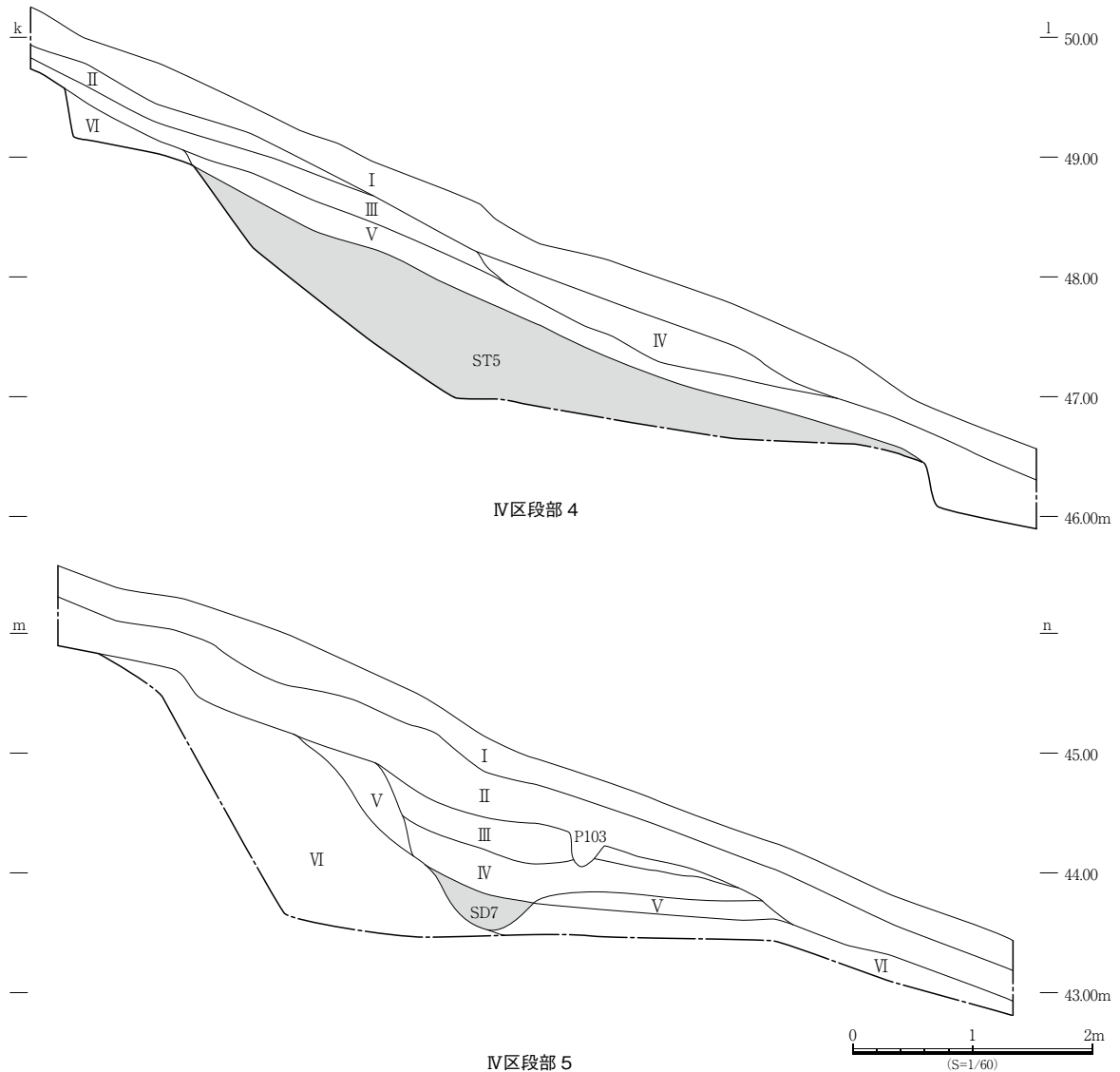


図3-8 段部4・5セクション図

3. 検出遺構と出土遺物

(段部4)

I層：黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト(φ 1.0～3.0cm礫混。炭化物含む)

II層：褐色(7.5YR4/3)シルト(φ 1.0cm礫混)

III層：褐色(10YR4/6)シルト(弥生時代包含層。φ 1.0cm礫混。炭化物含む)

IV層：褐色(10YR4/6)シルト(弥生時代包含層。φ 1.0cm礫混。炭化物少量含む)

V層：褐色(10YR4/6)シルト(弥生時代包含層。φ 1.0～5.0cm礫混)

VI層：黄褐色シルト質砂(φ 0.5cm礫混。炭化物含む)

(段部5)

I層：黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト(φ 1.0～3.0cm礫混。炭化物含む)

II層：褐色(10YR4/6)粘土質シルト(段部4のV層と同じ。φ 1.0～3.0cm礫混)

III層：黄褐色(10YR4/6)粘土質シルト(φ 1.0～5.0cm礫混)

IV層：黄褐色(10YR5/8)粘土質シルト(φ 1.0～3.0cm礫混。固く締る)

V層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト(φ 1.0～3.0cm礫混)

VI層：褐色(10YR4/6)シルト(φ 1.0～3.0cm礫混)

3. 検出遺構と出土遺物

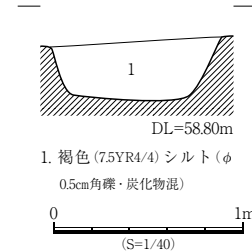
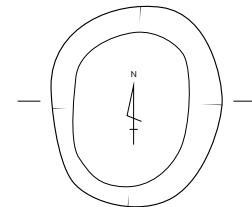
(1) I 区

I区では、土坑10基、ピットを16個検出した。これらの遺構の時期は出土遺物が僅少であるため詳細は不明である。出土遺物はI区全体で近現代の陶磁器片37点、瓦7点が出土した。I区の東斜面部では弥生時代の土器片、石包丁、投弾などが出土した。土坑については園芸用に使用した室など近現代のものが多い。I区の平場の西側斜面は墓地造成により改変されている。

①土坑

SK11 (図3-9)

調査区中央部西寄りで見出した楕円形の土坑である。長軸1.06m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る。掘方は逆台形を呈し、埋土は褐色シルトで、白磁の口縁部片が出土した。1の白磁端反皿であり、15～16世紀代の貿易陶磁器である。混入と考えられる。



1. 褐色(7.5YR4/4)シルト(φ 0.5cm角礫・炭化物混)

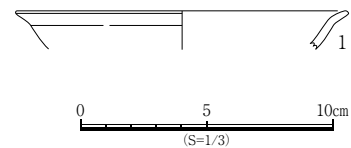


図3-9 I区SK11遺構図・遺物実測図

(2) II 区

II区では、平場部分、東斜面部のII e区、北東斜面部のII n区で竪穴建物跡2棟、土坑11基、柱穴43個、溝3条、通路状遺構を検出した。

平場部分では表土及びI・II層中から、近現代の陶磁器や瓦片が出土した。II区は、I区から比高差2～4mで北に向かって下がっており、調査区中央部を境に南側の標高57mと、北側の標高55mに小規模な平場がある。北側の平場では粘性のある明褐色シルト(III層)の堆積が認められ、弥生時代の遺物包含層が確認された。さらに、下層で竪穴建物跡(ST8)を検出した。調査区南部の標高57mの平場では、柱穴が円形に並ぶピットを検出し、埋土から弥生時代の石鎌・石包丁が出土した。これらの

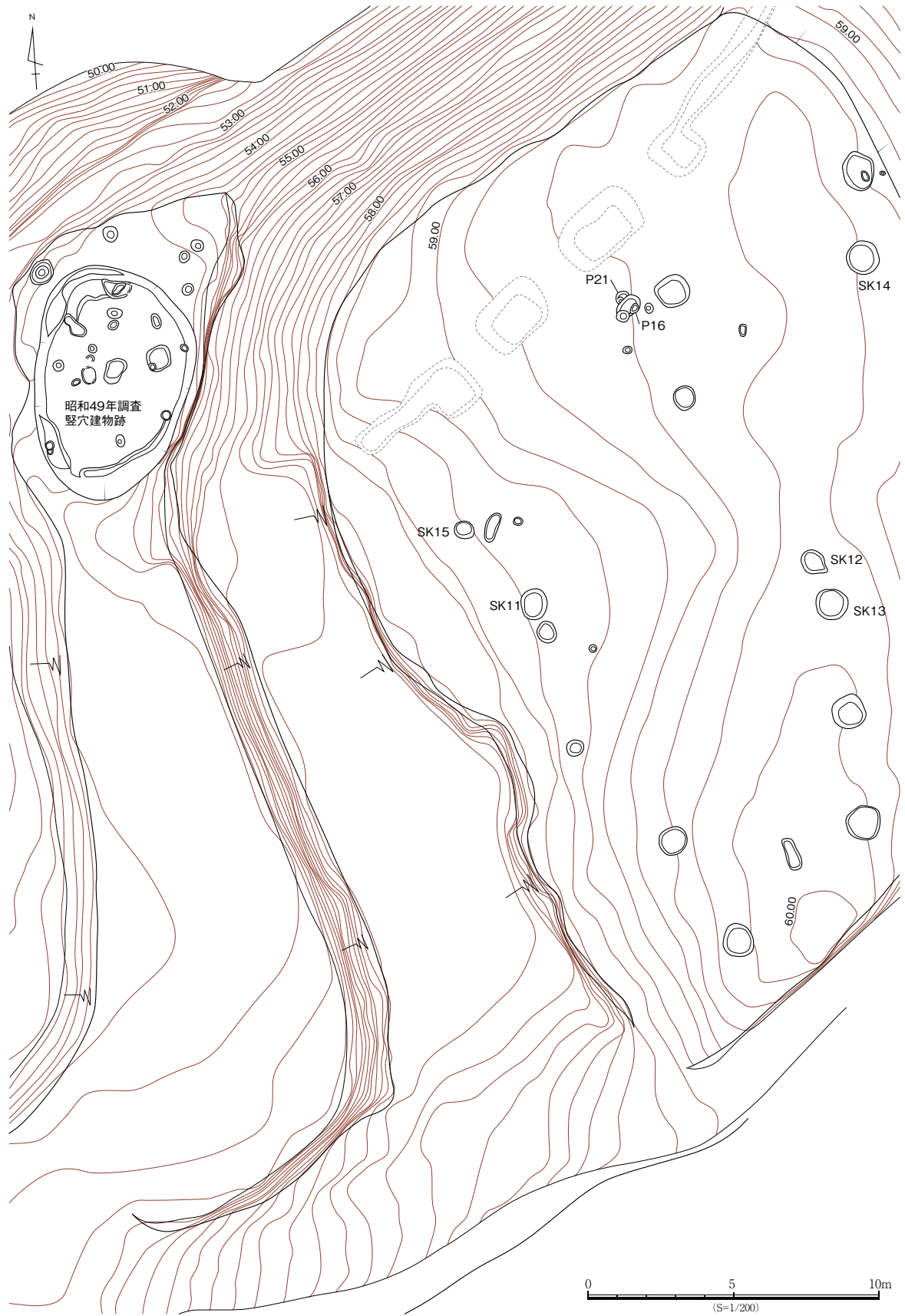


図3-10 I区遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

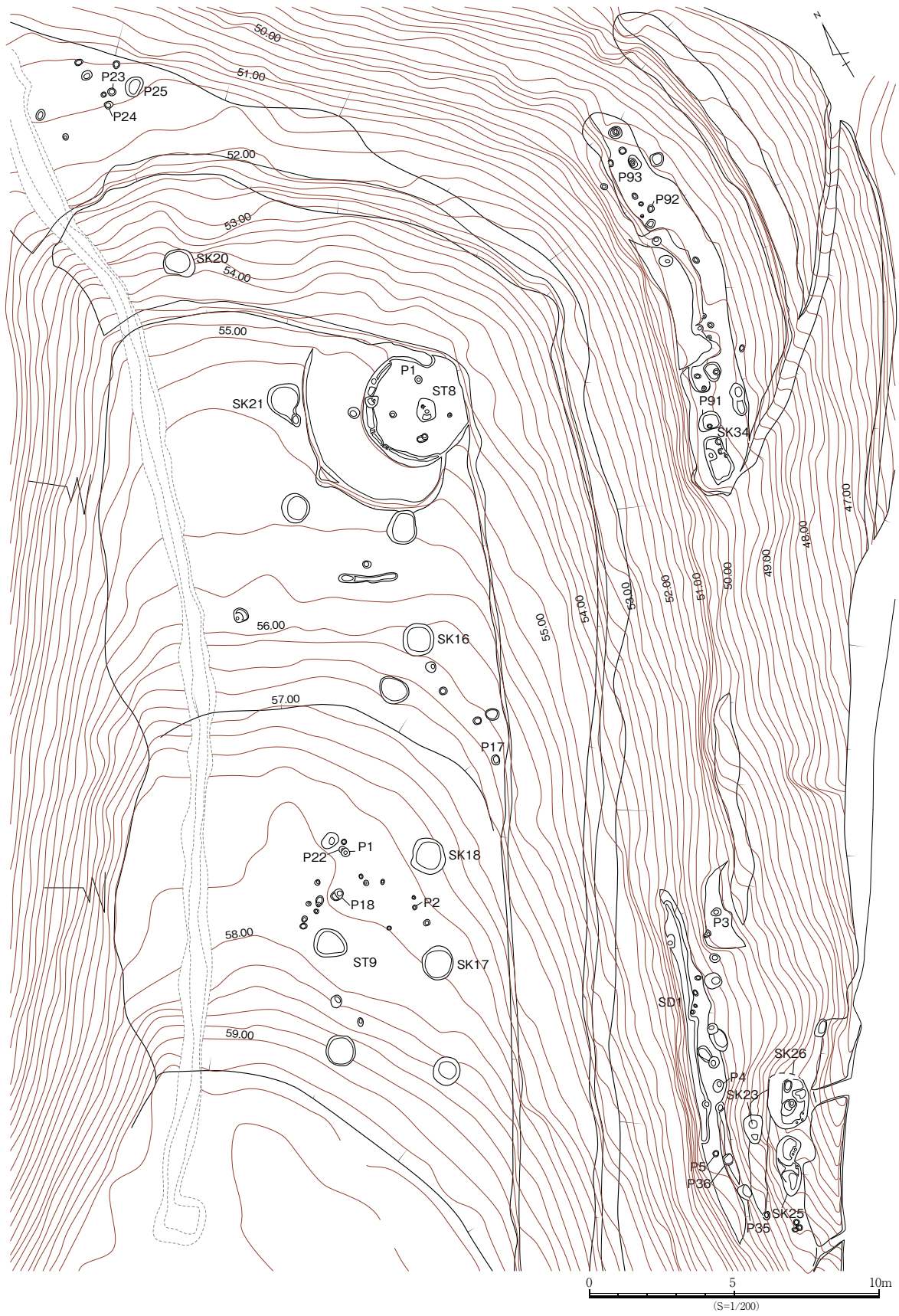


図3-11 II・IIe・II n・III区遺構配置図

ピット埋土は弥生時代遺物包含層のⅢ層と同じであることから、弥生時代の建物(ST9)の柱穴プランとして捉える事ができる。また、Ⅱe区及びⅡn区では、斜面で段部が検出され、段部面で土坑、ピット、溝などを検出した。Ⅱe区では通路状を呈した平坦部で溝が検出された。この平坦面の下で焼成土坑3基を検出した。弥生土器や石器がまとまって出土した。

① 竪穴建物跡

ST8(図3-12・13)

調査区北東端部で検出した竪穴建物跡である。平面プランは円形で長径3.85m、短径3.55mを測り、面積は10.4㎡である。西側は一段高い楕円形のテラスがあり、遺構の深さは検出面からテラス部は0.07m、内側の最深部は0.55mを測る。遺構埋土は固く締った明褐色シルト、床面直上は黄褐色シルトである。東側は斜面部に開口し、西側では床面で壁溝が検出された。検出された壁溝は床面の西半分まで、幅0.15～0.2m、床面からの深さ0.15mを測り、壁溝内でピット(P5・6)を検出した。竪穴建物跡床面では4本(P1～4)の支柱穴と中央ピットを検出した。この支柱穴のP1・2間と、P2・3間のそれぞれ

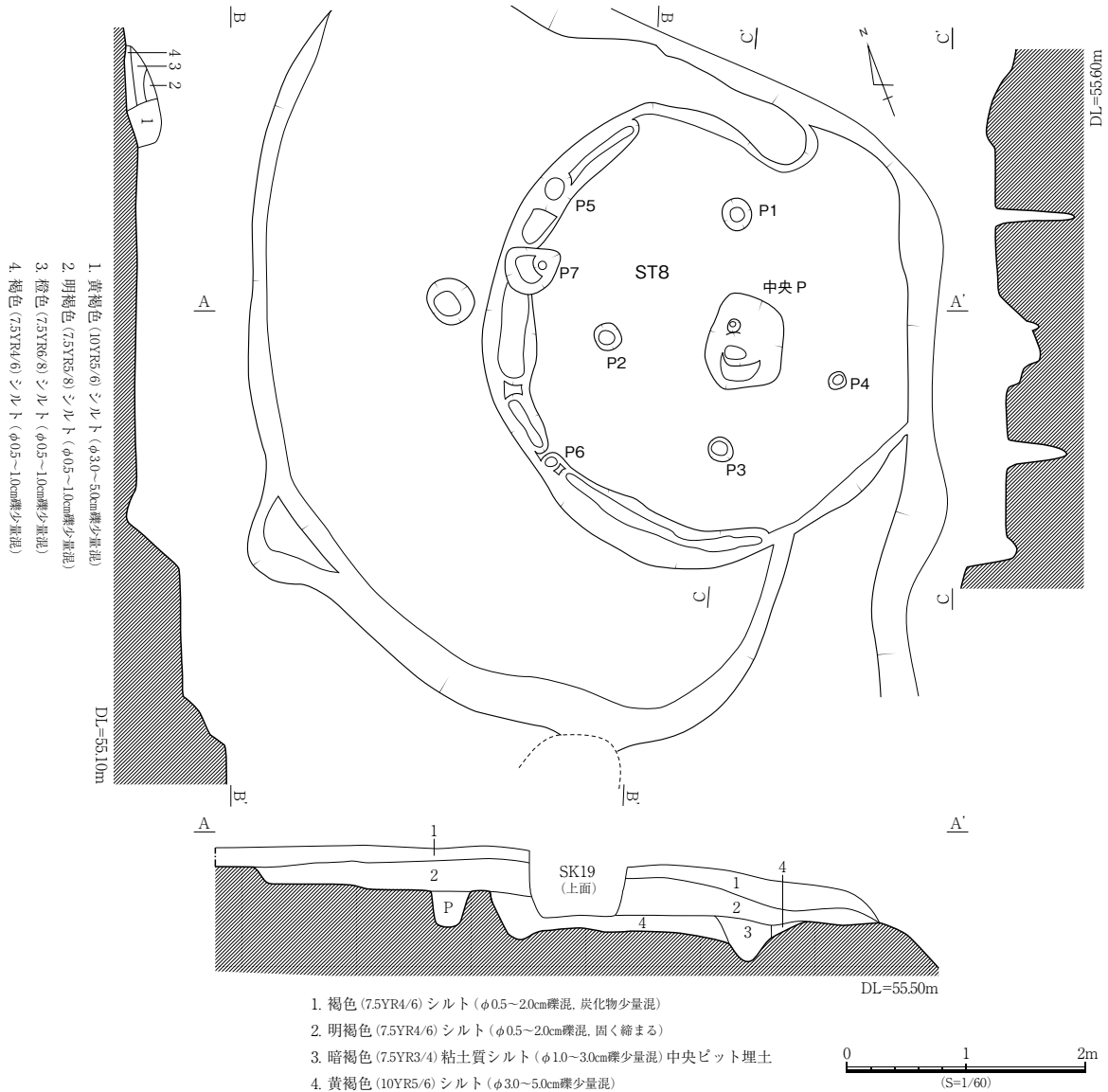


図3-12 ST8遺構図

3. 検出遺構と出土遺物

れの柱間中央の延長部に壁溝内ピットのP5・6が交互に位置する事から多角形柱の可能性も考えられる。中央ピットは長径0.81m, 短径0.62m, 深さ0.34mを測り, 内部に直径10cmの小ピットがある。出土遺物は弥生土器片15点と図示した2の砥石が1点である。

ST9 (図3-14)

調査区南部の平場に位置し, ピットが集中して検出された上面に炭化物を含む明褐色シルト(2層)が円形状に堆積している範囲をSTとして取り上げた。主柱穴と考えられるピットは北半分に半円状に並ぶが, 建物跡としての全体プランは不明である。ST9としたプランの範囲内には2層とその下に赤褐色シルトの3層の堆積が認められ, 住居床土として捉えることができる。この3層上面でピット, 土

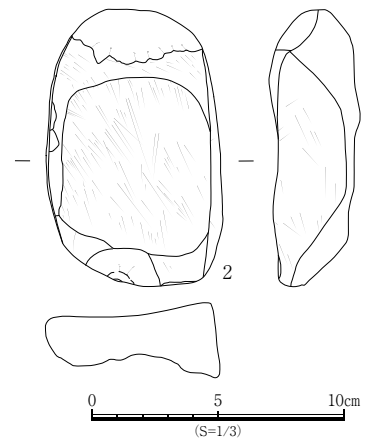


図3-13 ST8遺物実測図

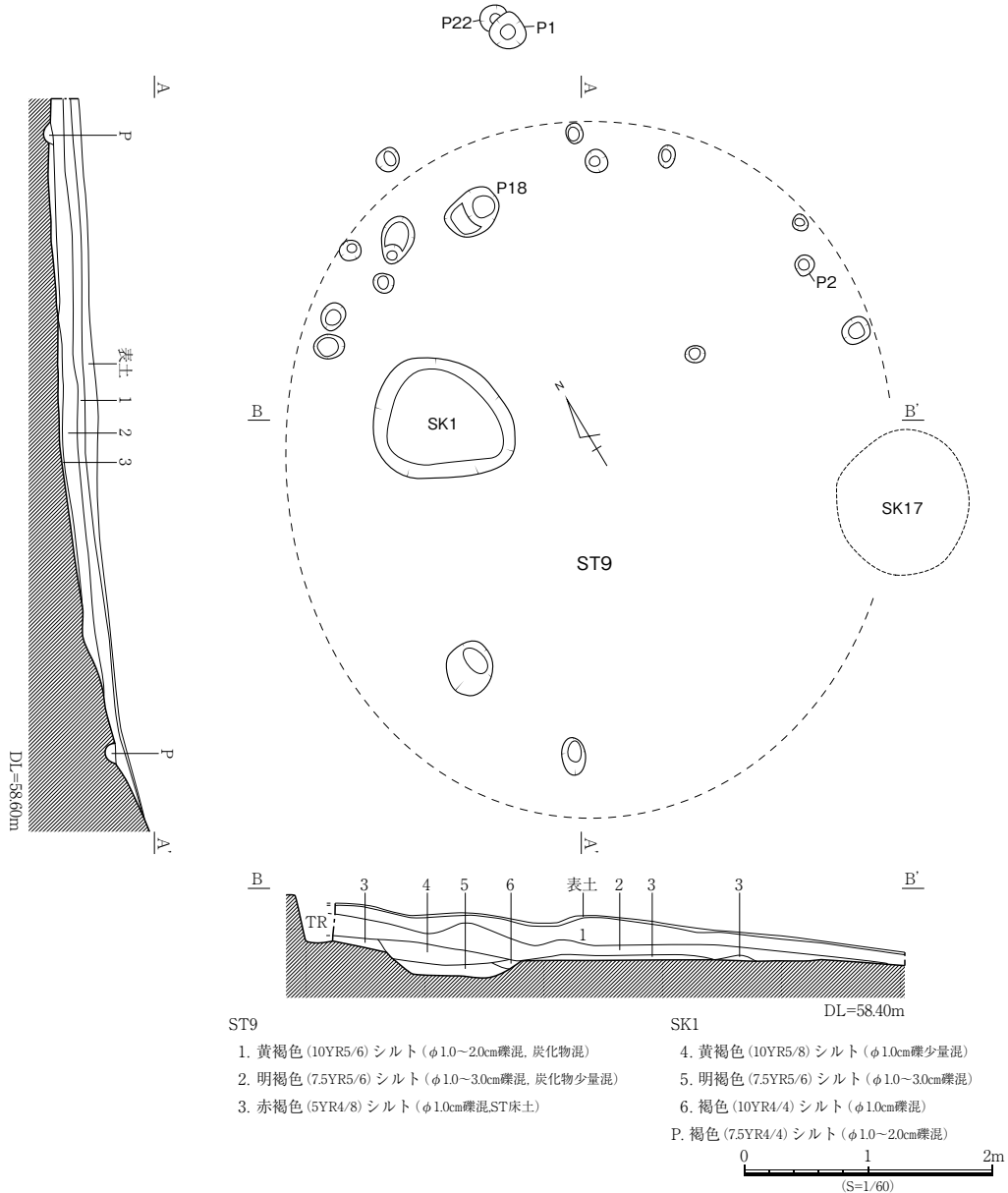


図3-14 ST9遺構図

坑を検出した。SK1はST9に伴う土坑と考えられ、プラン中央より西寄りで検出した。出土遺物は弥生土器の細片が僅少出土したのみで時期等詳細は不明である。プラン内部のP2からは3のサヌカイト製の打製石鏃が出土した。また、ST9のプランに隣接するP1からは4の泥岩製磨製石包丁の断片が1点出土した。

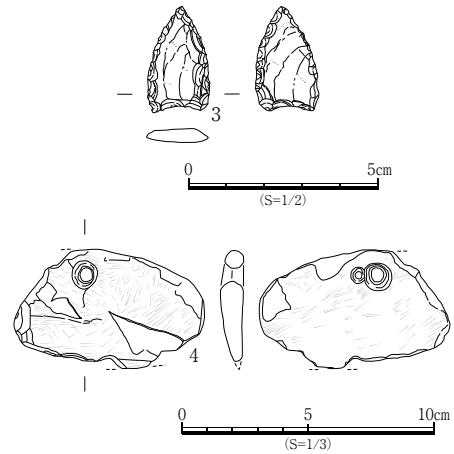


図3-15 II区ピット遺物実測図

②II区包含層出土遺物(図3-16)

II区ではI・II層から近現代の陶磁器片18点、瓦8点、II・III層から弥生土器片138点、石包丁5点、石鏃2点、石斧2点、叩石3点、砥石1点、投弾21点、その他石器石材剥片など27点が出土した。

5は頁岩製の磨製石包丁の断片である。6は叩石であり、敲打により両面中央部が凹む。7は投弾で卵塔形を呈する。6・7の石質は細粒花崗岩である。

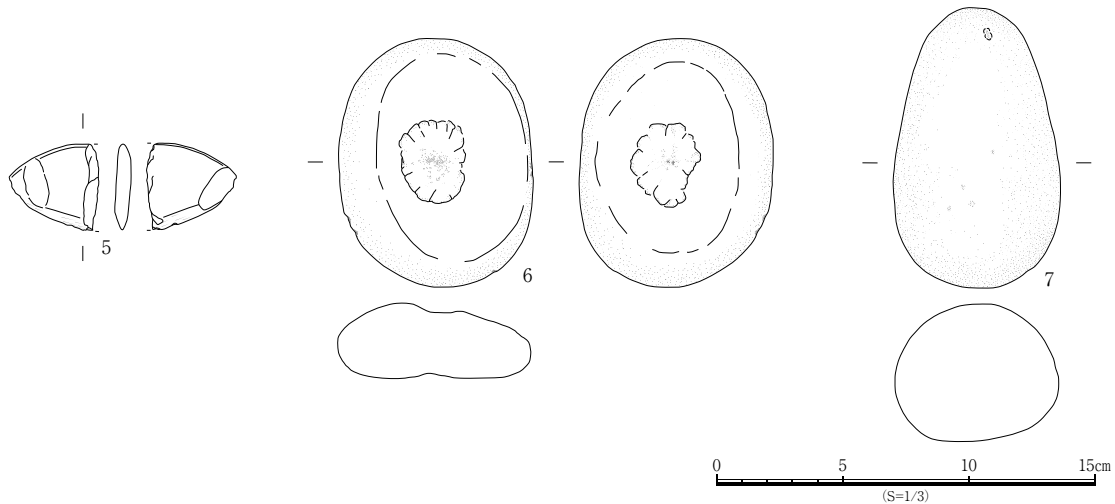


図3-16 II区包含層遺物実測図

(3)II e区

II e区はII区南部平場の東斜面部に位置する。斜面の傾斜は38～40°前後を測り、標高54～51mの斜面で通路状の段部を三段検出した。また、各段部では土坑3基、溝1条、ピットを検出した。

①土坑

SK23(図3-17)

標高52mで検出した。長径0.99m、短径0.64mを測る平面楕円形の土坑である。掘込みは浅く断面形は皿状を呈する。深さは0.12mを測り、埋土は明褐色シルト、赤褐色シルトである。弥生土器細片が6点出土した。

SK25(図3-17)

標高51.6～51mで検出した。長径2.08m、短径0.75mを測る平面形が不整楕円形の土坑である。掘込みは北側と南側が浅く皿状に凹む。深さは最深部で0.36mを測り、埋土は灰黄褐色シルト、オリーブ褐色シルトである。弥生土器細片が2点、8の泥岩石包丁未製品が1点出土した。

3. 検出遺構と出土遺物

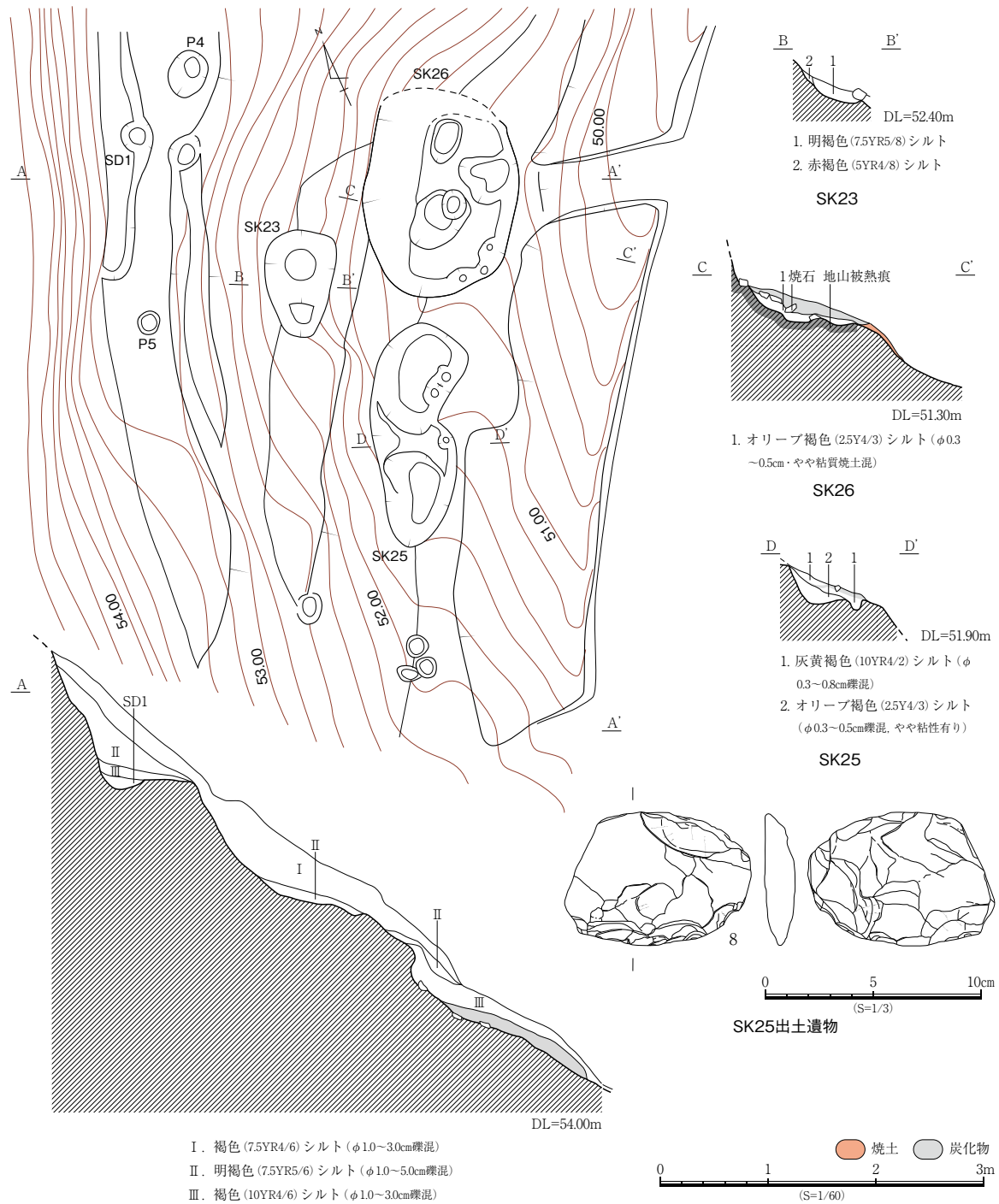


図3-17 SK23・25・26遺構図・遺物実測図

SK26 (図3-17)

標高51~50.6mで検出した。土坑の北側プランは明確に検出できなかった。推定長径1.71m，短径1.48mを測る平面楕円形の土坑である。土坑床面はピット状の凹凸があり，皿状に凹む。土坑の深さは0.2mを測る。埋土はオリーブ褐色シルトで上部には厚さ0.15mの炭化物の堆積と被熱した礫が認められる。また，床面全体が被熱し，土坑プランの東肩から斜面にかけて焼土の堆積が認められた。土坑内部からは遺物は出土しなかった。

②溝

SD1 (図3-18・19)

段部の通路状平坦面，標高 53.1 ~ 53m で検出した。長さ 8.5m，幅 0.17 ~ 0.55m で平坦面の山際に沿って南北に延びる。山際は標高 54m 前後からほぼ垂直にカットし，平坦面からの掘込みは 0.06 ~ 0.15m を測る。断面形は U 字型で埋土は明褐色シルトである。出土遺物は図示した 3 点の他，弥生土器細片が 54 点出土した。9 は凹線文が施された壺の口縁部片である。10 は鉢と思われる。口縁部は外反し，端部は丸みを帯びる。ナデ調整が施される。11 は甕であり，口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は下方に摘み出し断面三角形を呈する。頸部下半から上胴部にかけては櫛描直線文と円形浮文が施され，下位に縦方向の列点状の刻目が施される。

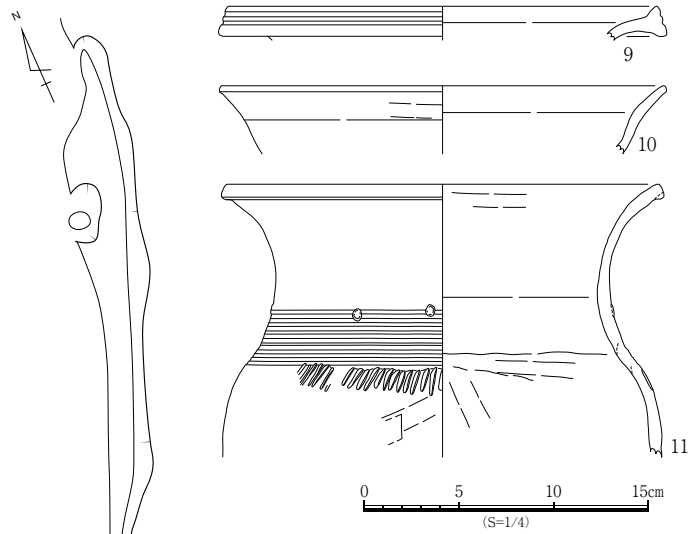
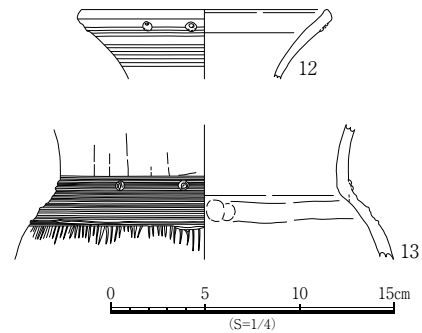
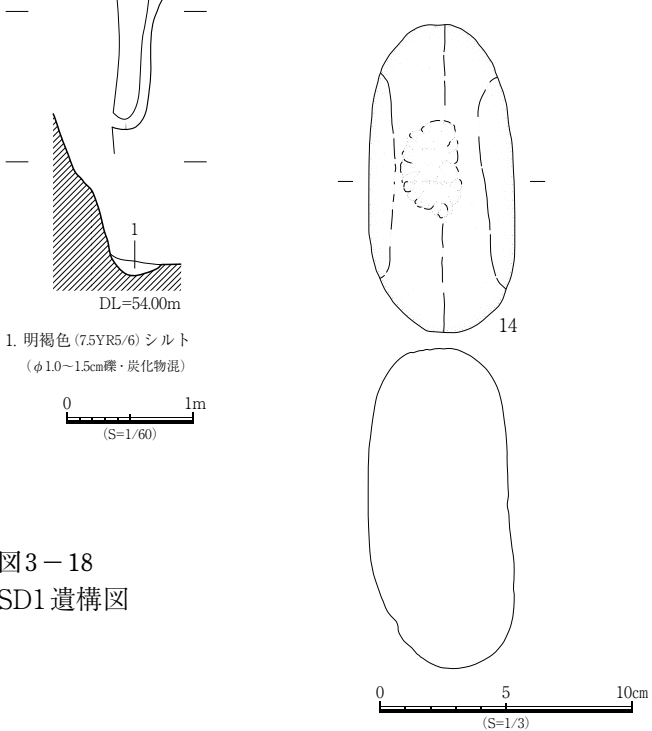


図3-19 SD1 遺物実測図



③ピット出土遺物 (図3-20)

12 は P5 から出土した。弥生土器壺口縁部であり，口縁部は外反し，端部は上方に摘み尖り気味に仕上げる。口縁外面には刺突を施した円形浮文が配され，頸部外面には櫛描直線文が施される。13 は甕であり，上胴部の外面に櫛描直線文と微隆起帯が施され，上位に刺突を施した円形浮文が配される。下位は単位の細かい列点状の刻目を施す。14 は叩石であり，一側辺に敲打痕が認められる。



1. 明褐色 (7.5YR5/6) シルト
(φ1.0~1.5cm 礫・炭化物混)
DL=54.00m
0 1m
(S=1/60)

図3-18
SD1 遺構図

図3-20 II e 区ピット遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

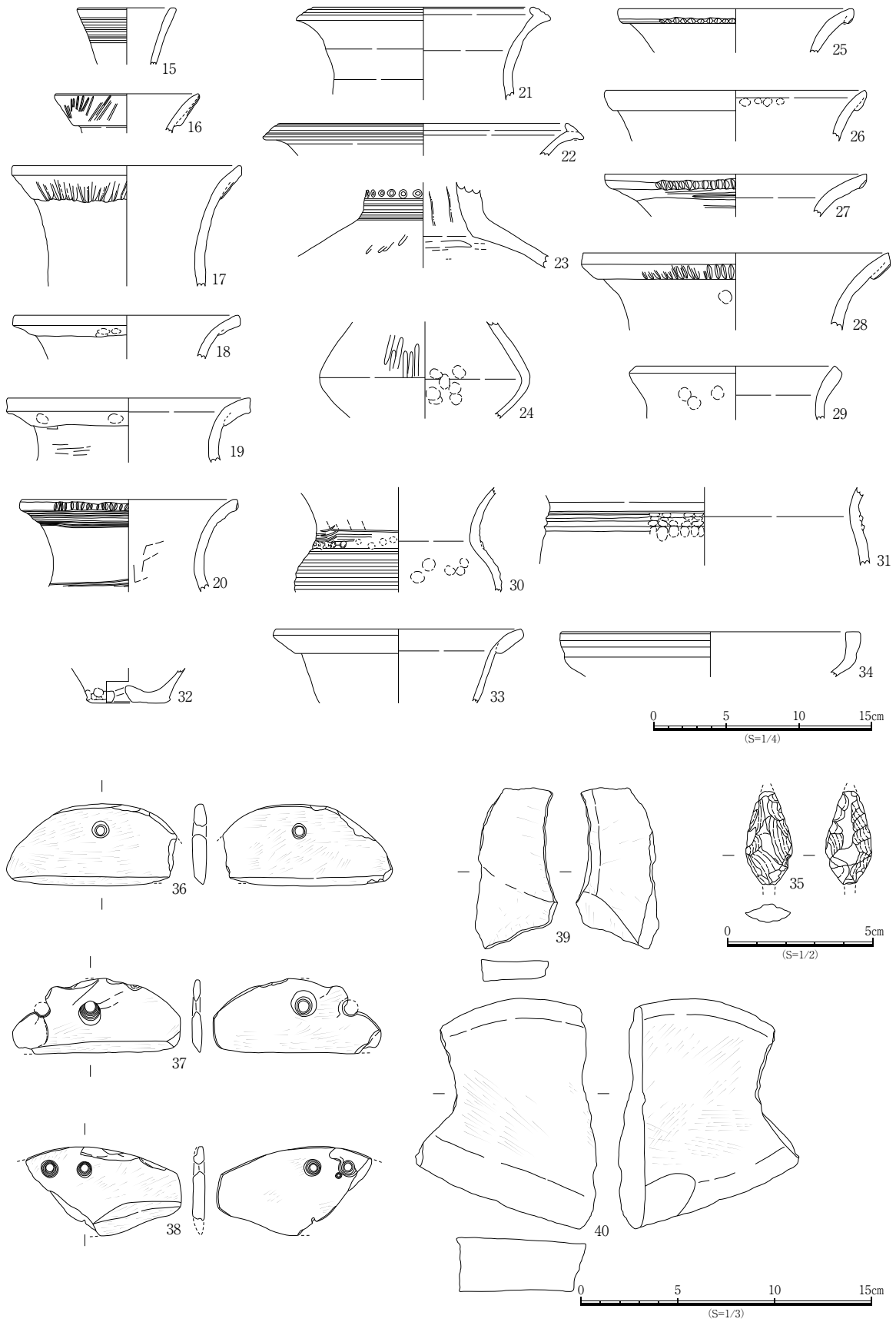


図3-21 II e区包含層遺物実測図1

④Ⅱe区包含層出土遺物(図3-21・22)

15～24は壺である。15・16は細頸壺の口縁部であり、15の口縁端部は水平な面を成し、頸部外面に櫛描直線文を施す。16は貼付口縁で、外側に粘土帯を貼付し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面に斜状の刻目を施す。17は貼付口縁で、外側に粘土帯を貼付し口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面に縦長の刻目を施す。18～20は甕とも呼ばれる口縁部片である。18・19は貼付口縁であり口縁部の断面形は四角形を呈する。端部はナデ調整が施され面を成す。19の頸部には櫛描直線文の一部が残る。20の口縁端部は玉縁状に肥厚し、上方に尖り気味に仕上げ、外面下端に刻目を施す。口縁部外面には櫛描直線文と微隆起帯が施され、頸部下端にも同じ工具を使用した沈線文が認められる。21・22は凹線文の壺口縁部である。口縁端部を内外に拡張し、外面に凹線文を施す。22は口縁端部内側に粘土を継ぎ足した接合痕が認められる。23は壺の胴頸部片であり、頸部には竹管状の刺突文、櫛描直線文が施される。胴部の一部はヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。24は細頸壺の胴部片であり、外面にヘラミガキが施される。25～31は甕である。25～29は口縁部片であり、胴頸部の形態によっては壺に分類されるものもあると思われるが、ここでは甕として取り上げた。25～28は貼付口縁であり、25～27の口縁部の断面形は玉縁状を呈し、口縁端部を尖り気味に仕上げる。25・27は口縁部外面下端に刻目を施し、27は口縁部外面の下端に櫛状工具で横方向の調整を施す。

28の口縁部の断面形は四角形を呈し、外面に縦長の刻目を施す。29は小型甕になるものと思われる。口縁部は僅かに肥厚し、端部はナデ調整により上方に尖り気味に仕上げる。30・31は甕の胴頸部片である。30は頸部と胴部の境目に櫛描直線文を施す。沈線文を巡らす際に始点と終点に食違いが生じ弧状に修正をした箇所がみられる。この櫛描直線文の上に円形浮文を貼付する。胴部は微隆起帯が連続して施される。31は頸部と胴部の境目に二条の微隆起帯を貼付する。32は甕の底部片であり、底部中央部からややずれた所に外側から内側の焼成前穿孔が認められる。33は鉢であり、口縁部は貼付口縁である。34は高杯である。口縁端部は水平な面を成し、外面に凹線文を巡らす。35～40は石器である。35はサヌカイト製の有茎石鏃で、先端と基部の一部は欠損する。36～38は磨製石包丁である。36は弧背直刃タイプで背面寄りに一穴筒状に穿孔する。石質は粘板岩である。37は有側弱直背直線刃タイプで背面及び一側辺が欠損する。中央に二穴穿孔が認められる。石質は泥岩である。38は有側弱直背弱凸刃タイプで一側辺が欠損する。刃部は側辺部よりを研ぎ直したことにより凸刃状を呈するものと思われる。背面はやや弧状を呈し、背面寄りに二穴の穿孔が認められる。39・40は砥石である。39は泥岩で、40は流紋岩である。41～43は投弾である。石質は細粒花崗岩で直径3.0～4.0cm前後の小型のものと、7.0～8.0cmの扁平な中型のものがみられる。44は緑色の凝灰岩の石核である。直方形の母岩の隅を打ち搔く。

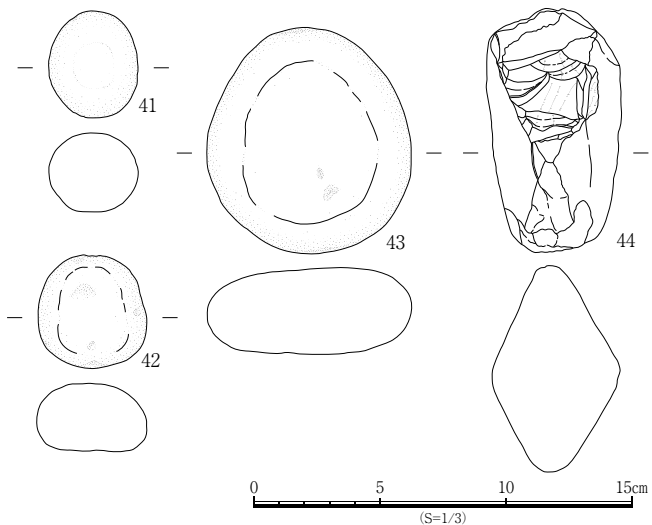


図3-22 Ⅱe区包含層遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

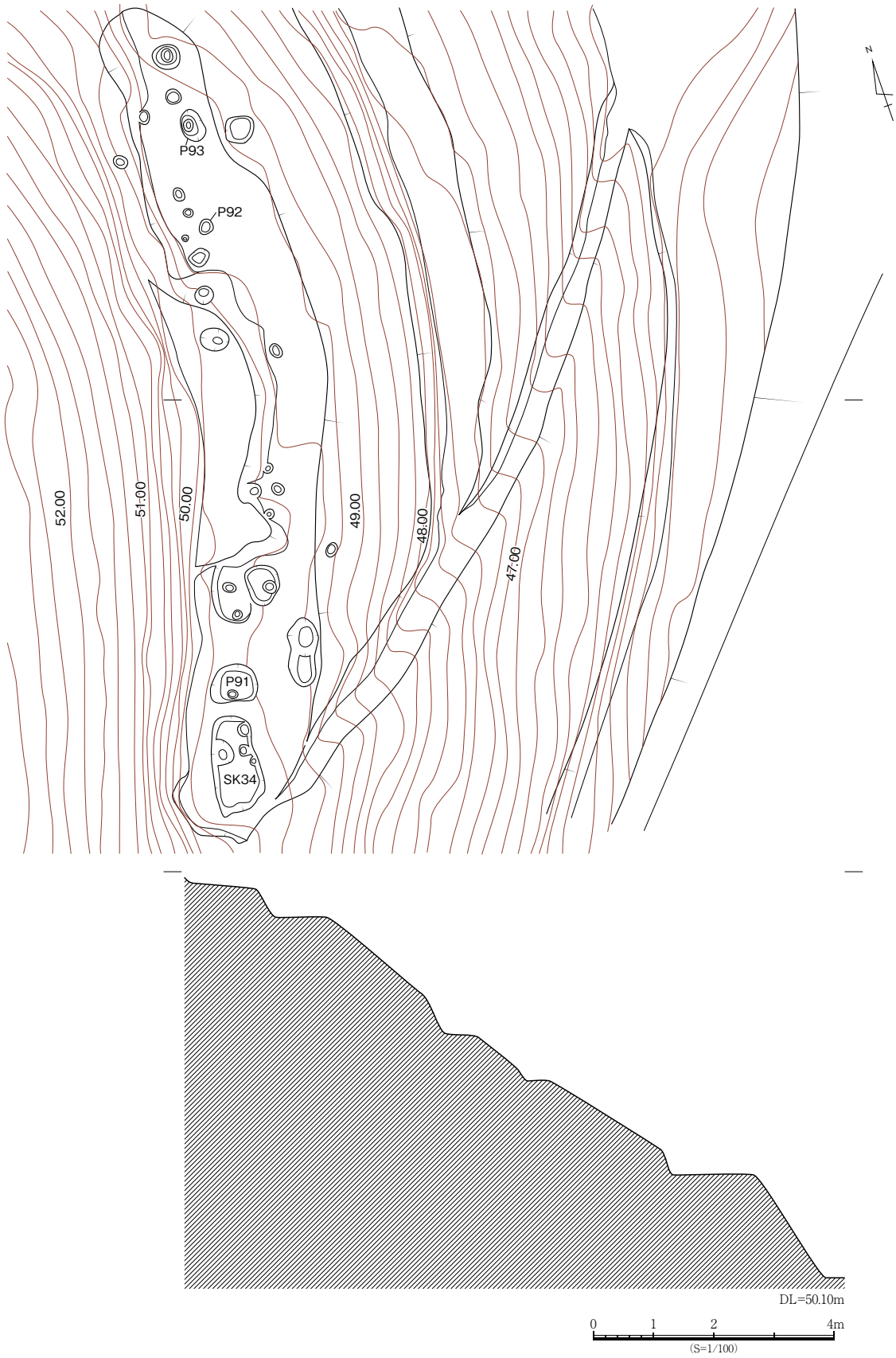


図3-23 II n区遺構配置図

(4) II n 区

II 区北部平場の北東側斜面部に位置する。斜面の傾斜は 32° 前後を測り、標高 50m で通路状の段部を検出した。通路状の段部は長さ 14m, 幅 1.2~2.1m で検出され、面積は 28㎡を測る。段部の中央部に長さ 4m, 幅 1m の不整形に地山を削り出したテラス状の高まりがある。また、段部の平坦面では土坑、ピットを検出した。

①土坑

SK34 (図3-24)

段部の南端で検出した土坑である。平面形が隅丸方形を呈し、長径 1.65m, 短径 0.84m, 深さは 0.18~0.26m を測る。長軸方向は N-70°-E を指す。埋土は明褐色シルトで炭化物を含む。床面でピットを検出した。出土遺物は弥生土器細片が 12 点出土した。



図3-24 SK34
遺構図

② II n 区包含層出土遺物 (図3-25・26)

45~59 は壺である。全体の形状が不明であり、中には甕に分類されるものもあると思われるが頸部の立ち上がり、口径などから今回は壺として分類した。45~52 は貼付口縁の壺であり、45 は細頸壺類の口縁部である。口縁部の断面形が四角形を呈し、口縁部外面には縦長の刻目、直下に粒状の浮文を配し、頸部には櫛描直線文を施す。46 は断面三角形の貼付口縁で、口縁部外面下端に刻目を施し、頸部は指頭圧痕とナデ調整が施され、円形浮文を配す。47 は頸部が長く、口縁部の断面形が楕円形を呈する。48 は頸部の立ち上がりが短く口縁部の開き方が小さい。口縁部の断面形は楕円形を呈し、外面に指頭圧痕が残る。49・50 の口縁端部は上方に摘み尖り気味に仕上げる。外面に縦長の刻目を施す。49 は口縁部直下に櫛描による段が生じる。50 は頸部下位に櫛描直線文が施される。51 は内外面にハケ調整痕が認められる。52 は大型壺の口縁部と思われ、口径が大きく開く。53・54 は素口縁の壺である。53 の口縁部は僅かに肥厚し、口縁端部は面を成す。外面に斜状の刻目を交互に巡らし、頸部は単位の細かい櫛描直線文が施される。45 の貼付口縁壺の形態と同じと思われるが、口縁部の粘土帯の貼付、及び直下の浮文は簡略化される。54 の口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部は上方に摘み尖り気味に仕上げる。55・56 の口縁部は大きく外反し、頸部に円孔を穿つ。胎土はチャートを含み色調が黄橙色を呈し、他の土器と胎土の特徴が異なる。57・58 は凹線文の壺である。口縁端部を内外に拡張し、外面に凹線文を巡らす。58 は内面に櫛描による波状文を施す。59 は胴部と頸部の境目に断面三角形の微隆起帯を一条巡らし、直下に縦方向の刻目を施した後、斜めにも施す。60~67 は甕である。頸部以下が残存していないため壺と判別し難いものもあるがここでは甕として記述する。60~65 の口縁部は貼付口縁である。60・61 は口縁端部が玉縁状を呈し、端部を上方に摘み尖り気味に仕上げる。60 は下端に刻目を施す。62・63 の口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、断面形は三角形を呈する。口縁外面の下端に刻目を施す。内面はナデ調整が施される。64 も口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、外面に縦方向の単位の細かい刻目を施す。65 は断面楕円形の貼付口縁で端部は丸みを帯び、外面に刻目を施す。口縁直下に櫛描直線文を施し、微隆起帯を巡らす。66 は胴頸部片であり、胴部と頸部の境目に櫛描直線文、刻目を施す。67 は凹線文が施された甕である。口縁端部は上下に拡張され、外面に凹線文を施す。68~72 は底部片である。68

3. 検出遺構と出土遺物

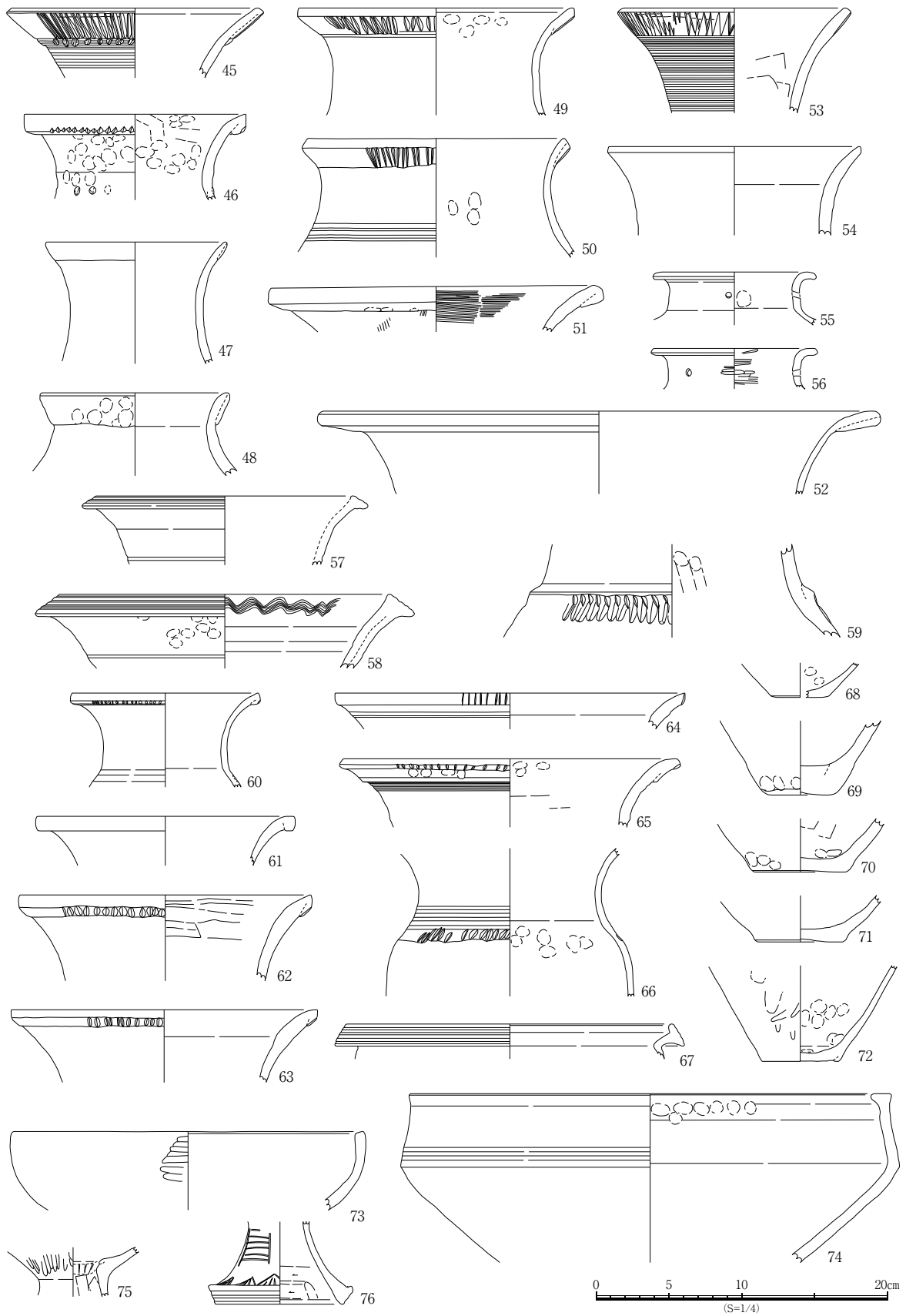


图3-25 II n区包含層遺物実測图1

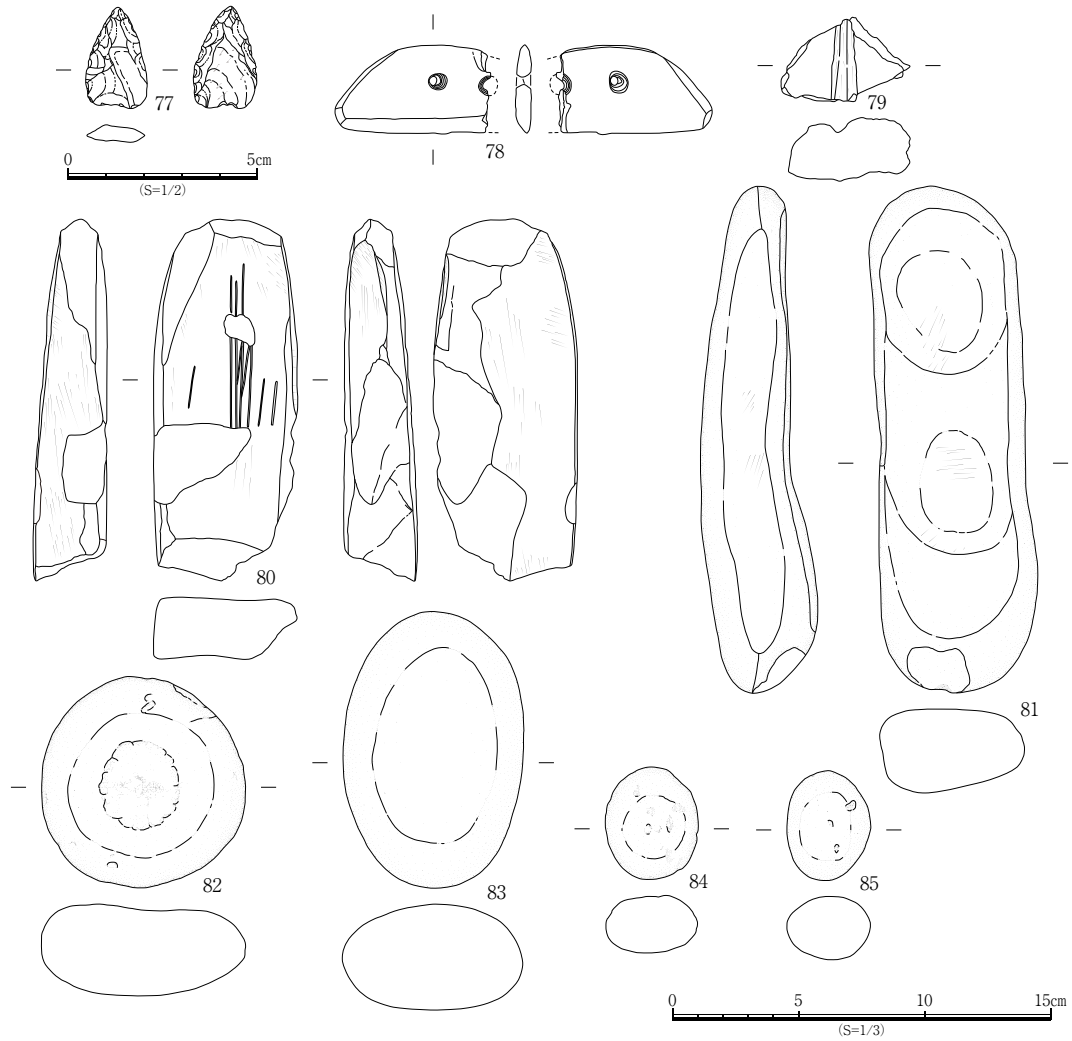


図3-26 II n区包含層遺物実測図2

は器壁が薄く平底である。69の底部は比較的厚く、底部中央部分は内面から粘土を充填する。70・71は平底からやや段を持って内湾気味に立ち上がる。72は外面の一部にヘラミガキ痕が認められる。底部は輪状にした粘土に内側から粘土を充填し成形しており、外底周縁部は高台状を呈する。全体的に器壁が薄く、丁寧な調整が施される。73・74は高杯である。73の杯部は口縁にかけて直立気味になり、口縁端部はやや内傾する面を成す。外面には横方向のヘラミガキが施される。74は口径が31.0cmを測り大型である。杯口縁部は内傾し端部は内外に拡張して水平な面を成す。口縁部外面下位に二条の凹線文を巡らす。75・76は脚部である。75は外面ヘラミガキ、内面はヘラ状工具によるナデ調整が施される。杯部との接合は円盤充填である。76は裾部に凹線文が施される。脚部には区画された沈線文と、裾部に鋸歯文がヘラ描きされる。77～85は石器である。77は打製石鏃で頁岩製である。平基式に近い凹基式である。78は磨製石包丁で片方は欠損する。弧背直刃であり、刃部面を厚く残す。背面寄りに二穴穿孔する。石質は片岩製である。79は泥岩製の有溝砥石である。80・81は砥石であり、80は泥岩製で直方体状に四面使用している。81は流紋岩製で扁平な面と一側面を使用している。82は叩石で片面中央部に敲打による凹みがある。石質は細粒花崗岩である。83～85は投弾であり、83は10.0cm以上、重量400g以上を測る大型、84・85は4.0cm内外、重量50g以内を測る小型に属する。

3. 検出遺構と出土遺物

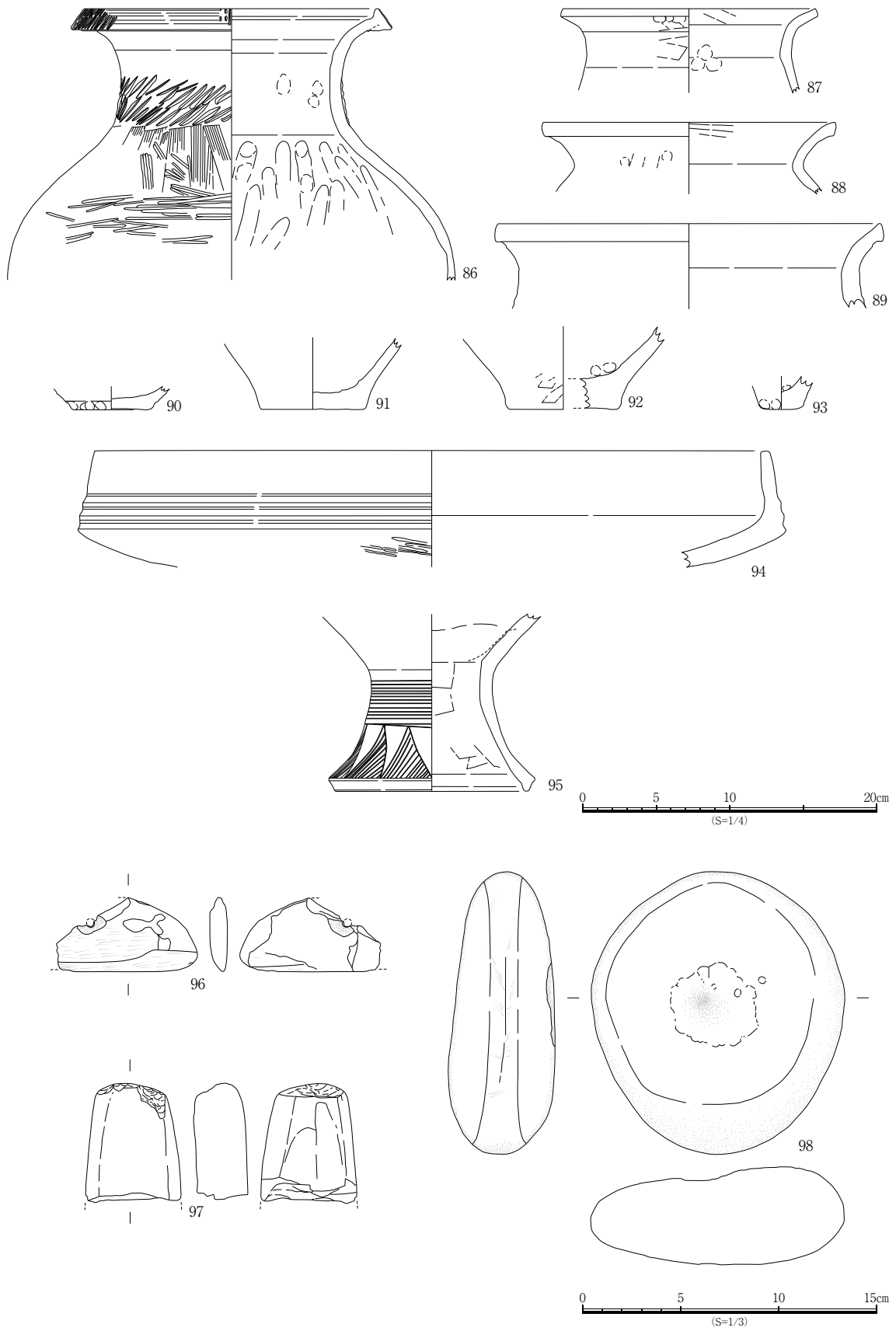


图3-27 Ⅲ区包含層遺物実測図

(5)Ⅲ区

調査対象地北端に設定した調査区である。南部のⅡ区との比高差は約4mを測る。Ⅱ区の北端で北方に分岐する尾根上に開けた平場であり、面積は177㎡を測る。この調査区ではピット12個と、土坑を1基検出した。

①Ⅲ区包含層出土遺物(図3-27)

Ⅲ区ではⅢ層とⅤ層から弥生時代中期末の遺物がまとまって出土した。遺物の内訳は、土器片が320点、石包丁1点、投弾4点、その他石器石材剥片など7点である。

86は口縁部に凹線文が施された壺である。口縁部は粘土を付け足し、端部を上下に拡張する。口縁外面は凹線文を巡らした後、部分的に縦方向の刻目を施す。頸部は下半に斜状の刻目を上下二段に施す。胴部外面はヘラミガキとハケ調整、内面はナデ調整が施される。87～89は甕である。全て素口縁で「く」の字状に外反する。87は胴部から口縁部にかけてやや間延びしながら外反し、頸部を残す。ナデ調整が施される。88の口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に摘み尖り気味に仕上げ、外面は面を成す。ナデ調整が施される。89は緩やかに外反し、端部は上方に摘み出し外面に面を成す。ナデ調整が施される。90～93は底部片である。90の底部は外底中央がやや凹み、底部脇に指頭圧痕が残る。91は平底で段を持って立ち上がる。92は厚みのある底部で段を持って立ち上がる。93はミニチュア土器の底部片と思われる。94・95は高杯である。出土状況から同一個体の可能性がある。94の杯部は口縁がやや内傾する。口縁端部は面を成し、外面下位に凹線文を巡らす。杯部外面の一部にはヘラミガキが認められる。95は脚部であり、杯部との接合は円盤充填と思われる。裾端部は内側に拡張し面を成し、ナデ調整により中央部が凹む。脚部は櫛描直線文と下位に鋸歯文が施される。96～98は石器である。96は磨製石包丁であり、一方が欠損する。刃部の側辺よりは研ぎ直しにより刃部面の幅が広い。石質は泥岩である。97は大型蛤刃石斧の基部であり、片岩製である。98は叩石で中央部が敲打により凹む。側辺部は一部に擦痕が認められる。

(6)Ⅳ区

調査対象地の南東斜面に設定した調査区である。Ⅰ・Ⅱ区の丘陵尾根の谷部に位置する。標高約41～61.6mの斜面で段部を5ヶ所検出した。これらの各段部では掘立柱建物跡、土坑、溝、ピットなどを検出した。以下に、各段部で検出された遺構、出土遺物について段部ごとに記載する。

段部1

Ⅳ区標高58mの斜面に開けた約54㎡を測る平場である。竪穴建物跡3棟、土坑6基、ピット57個を検出した。出土遺物は弥生土器細片約3,200点、石器約120点が出土した。以下に各遺構について記載する。

①竪穴建物跡

ST1(図3-29)

段部1の西寄りで検出した。ST2の西側に隣接する。平面プランは半楕円形状を呈し、北側は斜面に傾斜する。床面の形状は半月形を呈し、隣接するST2の拡張部の可能性も考えられる。検出した規模は長径6.2m、短径2.3mを測る。平面プランを楕円形として復元すると、短径は5.8mとなり床面積は10.7㎡を測る。深さは0.23～0.45mを測り、埋土は黄褐色シルトである。床面ではピットを3個検出した。埋土はSTと同じで1.0～2.0cm大の礫を含む。P1～3は直線上に並びP3は直径0.69mを測りP1・2に比べ大きく中央ピット的な性格の穴として捉えることができる。ただ、竪穴内の壁際で

3. 検出遺構と出土遺物



図3-28 段部1遺構配置図

検出している事や、他の建物柱と考えられるピットが床面で検出されていない事から建物の全体プランは不明である。また、竪穴の南部はテラス状の平場があり、P6を検出した。ピットは長径0.33m、短径0.31m、深さ0.2mを測る。このピット上面で99～101の土器が集中して出土した。99は甕の口縁部であり、「く」の字に外反する。口縁端部はナデ調整により面を成す。外面胴部上位に列点状の刻目が施される。100は甕の胴部片であり、平底から斜上方に直線的に立ち上がる。外面は工具によるナデ調整が施され、一部に煤の付着が認められる。101は底部片であり、輪状の粘土の上に内側から粘土を充填するため、外底中央が凹み周縁が高台状を呈する。P6の埋土はST1埋土と同じ黄褐色シルトであり、ST1の建物構造の一部として捉える事もできる。また、ST1の埋土からは、102・103の甕、104の石包丁が出土した。102は甕の口縁部片であり、口縁端部はやや肥厚し、ナデ調整により面を成す。下端に僅かに刻目を残す。103は底部片であり、平底で外方に開く。ナデ調整が施される。104は頁岩製であり、弱直背直線刃タイプの石包丁である。中央に一穴穿つ。

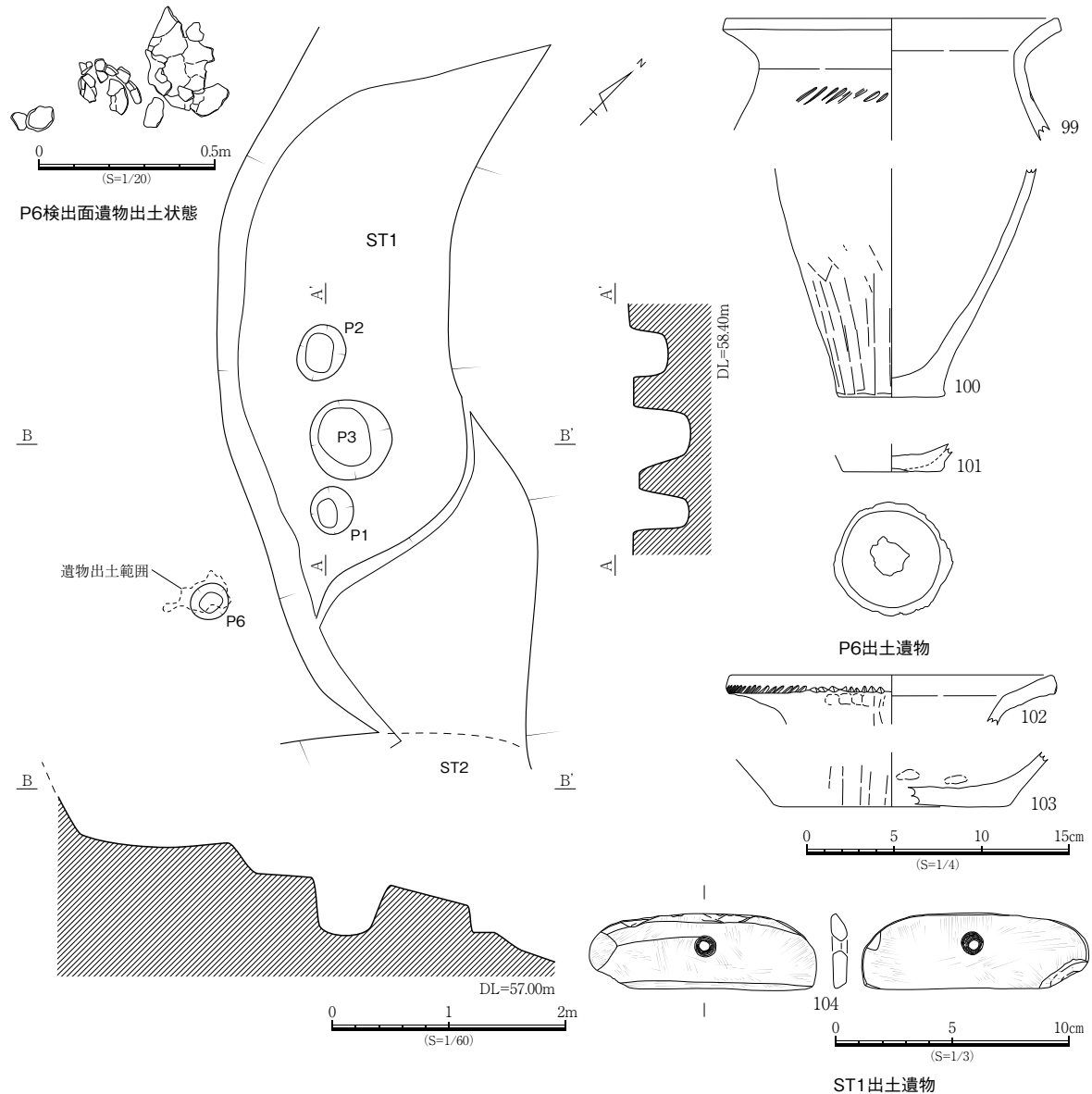


図3-29 段部1 ST1 遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

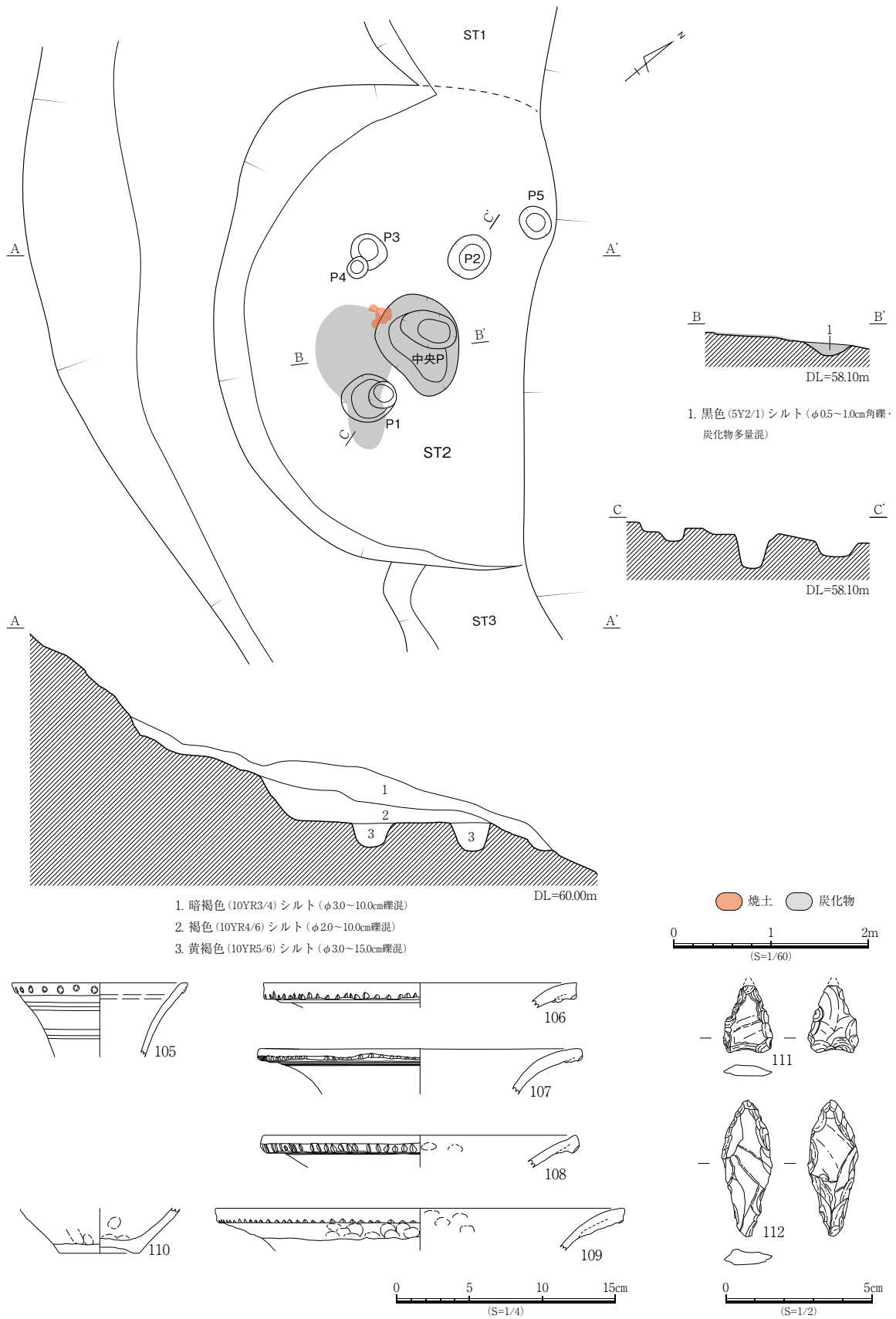


図3-30 段部1 ST2遺構図・遺物実測図

ST2 (図3-30)

段部1の西寄りで検出し、両側はST1・3に接する。平面プランは半楕円形状を呈し、北側は斜面に開口する。床面の形状は半月形を呈し、検出した規模は長径5.05m、短径3mを測る。平面プランを楕円形として復元すると、短径は5mとなり床面積は17.33㎡を測る。深さは0.47～0.7mを測り、埋土は暗褐色～褐色シルトである。床面ではピットを6個検出した。床面中央部に長径1.1m、短径0.80m、深さ0.39mを測る中央ピットと考えられるピットがあり、検出面で炭化物と焼土を検出した。炭化物は中央ピットの南側床面に集中がみられた。中央ピットの埋土も炭化物を多く含む黒色シルトが堆積していた。他のピット埋土は黄褐色シルトで3.0cm大の礫を含む。P1・2は中央ピットを挟み直線上に並びST1と同じ様な配置である。また、竪穴の南部はテラス状の平場があり、ST1南部のテラスと共有する。出土遺物は埋土の1・2層から、弥生土器片112点、石鏃2点、鉄器2点が出土した。105は細頸壺の口縁部であり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面に円形浮文、櫛描直線文を巡らす。106～109は甕の口縁部片である。全て貼付口縁であり、106・107の口縁部は端部上方を摘みナデ調整を施す。下端に刻目を施し、直下に一条の微隆起帯を巡らす。口縁部の断面形状は台形状を呈する。107の頸部には櫛描直線文が施される。108の口縁部の断面形状は三角形を呈し、外面に刻目を施す。直下に微隆起帯を巡らす。109の口縁部は貼付帯の幅が広く、外面に指頭圧痕が認められる。口縁端部は上方を摘みナデ調整を施す。下端に僅かに刻目を残す。110は底部片であり、外底部中央が凹む。ナデ調整を施す。111・112は打製石鏃である。111は凹基式の石鏃であり、先端部は欠損する。石質は赤色頁岩である。112は有茎であり石質はサヌカイトである。

ST3 (図3-31・32)

段部1の中央部で検出し、西側はST2に接する。平面プランは隅丸方形形状を呈し、北側は斜面に開口する。床面の形状は半月形を呈し、検出した規模は長径4.35m、短径2.08mを測る。平面プランを隅丸方形として復元すると、短径は4.35mとなり床面積は12.45㎡を測る。深さは0.42～0.6mを測り、埋土は黄褐色シルトである。床面中央部に長径0.6m、短径0.52m、深さ0.38mを測る中央ピットと

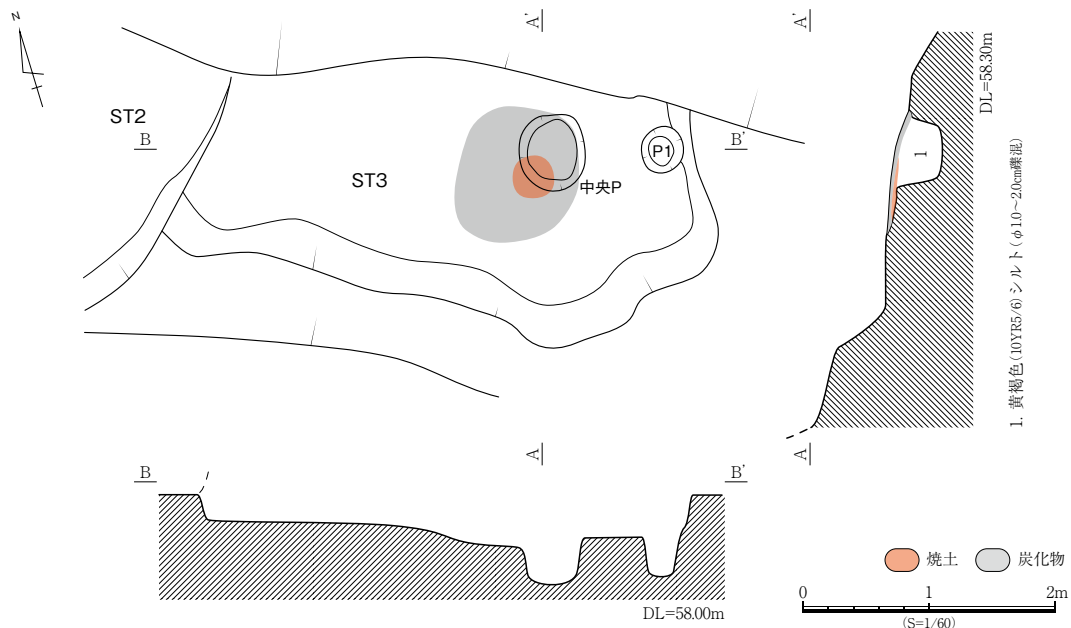


図3-31 段部1 ST3 遺構図

3. 検出遺構と出土遺物

考えられるピットがあり、検出面で炭化物と焼土を検出した。炭化物及び焼土は中央ピットの南側床面に集中がみられ、中央ピットの埋土は黄褐色シルトが堆積していた。竪穴床面では中央ピットの東側、竪穴の壁際で長径0.37m、短径0.33m、深さ0.32mを測るピットを検出した。埋土は中央ピットと同じ黄褐色シルトである。竪穴建物跡の主柱穴床面では検出されず、構造及び性格は不明であるが、埋土中からは遺物がまとまって出土した。図示した遺物はST3埋土から出土した遺物である。

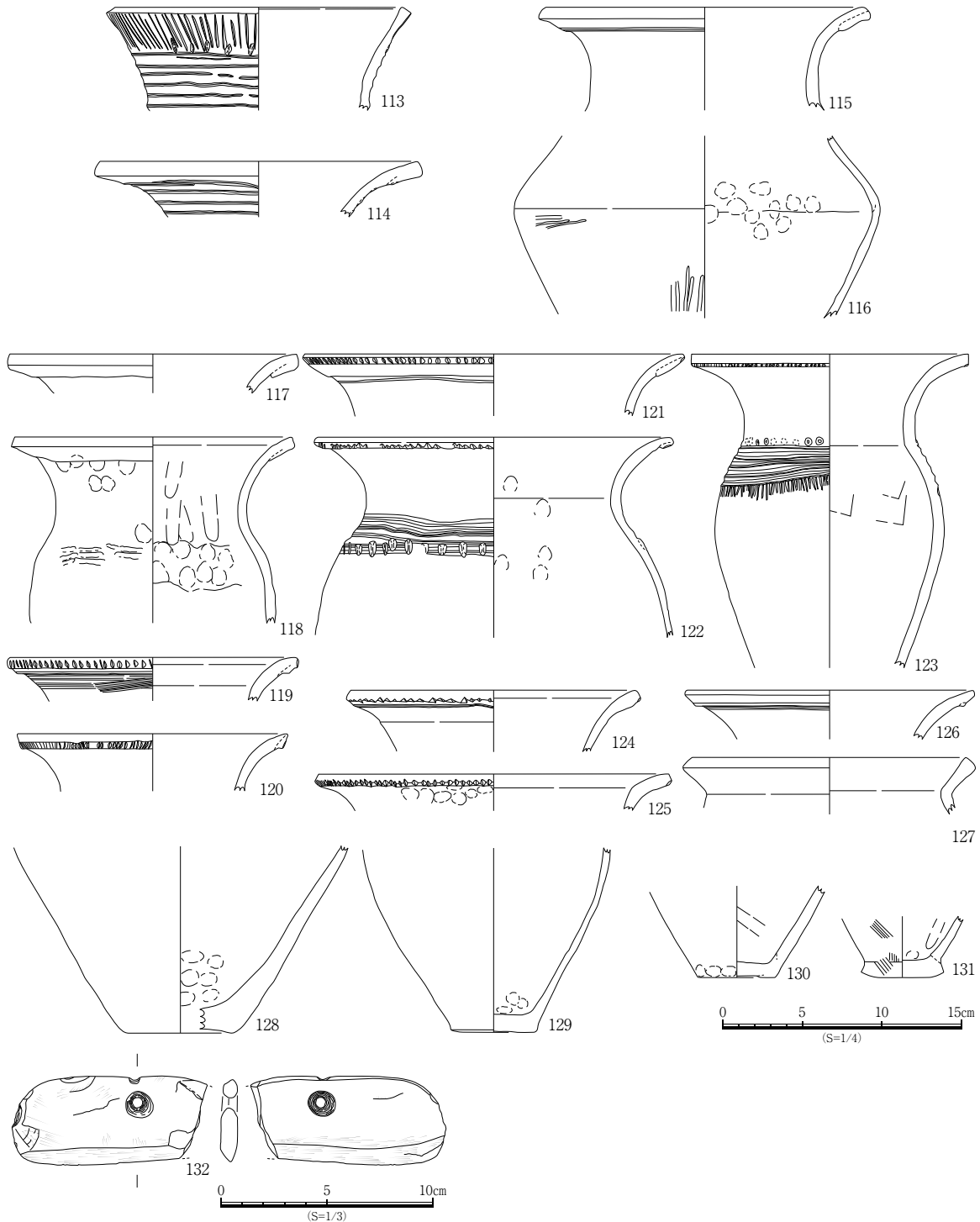


図3-32 段部1 ST3遺物実測図

113～116は壺であり，113は口縁部に縦長の刻目を施し，直下に粒状浮文を付ける。頸部には微隆起帯を連続して巡らす。114の口縁部は外反する。貼付口縁であり，口縁部は無文，頸部には微隆起帯を巡らす。115は貼付口縁で口縁端部を下方に拡張させ面を成す。外面の口縁部直下に一条の沈線を巡らす。116は胴部片であり，胴部の屈曲がきつく算盤玉状を呈する。胴部下半にヘラミガキが認められる。117～127は甕である。117～122は貼付口縁である。117は口縁部の断面形が四角形の貼付口縁であり，ナデ調整を施す。118の口縁部は頸部から緩やかに外反する。口縁部貼付の跡を僅かに残す。外面は工具によるナデ調整の痕が認められる。内面は指頭によるナデ調整痕が顕著である。119の口縁部の断面形は台形であり，外面に刻目と微隆起帯を施し，直下に櫛描直線文を巡らす。120の口縁端部は尖り気味に仕上げ，口縁部の断面形は三角形を呈する。下端に刻目を施し，頸部は無文である。121の口縁部は縦長の貼付帯で，端部は丸く収め断面形は楕円形である。口唇部に刻目を施し，口縁貼付帯直下に一条の沈線を施す。122の口縁部は玉縁状を呈し，下端に刻目を施す。胴部は櫛描直線文の間に微隆起帯を連続して巡らせ，下位に棒状浮文を貼付する。123は素口縁で口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し，下端に刻目を施す。胴部には櫛描直線文の間に微隆起帯を連続して巡らせ，上位にドーナツ状の浮文を貼付し，下位に縦長の刻目を列点状に施す。124の口縁部は刻目を施し，下端をナデ調整により微隆起帯をつくる。125の口縁部は口縁下端に刻目を施し，頸部外面は指頭圧痕が認められる。口縁部内面はナデ調整が施され，外反の屈曲部に稜が残る。126の口縁端部は尖り気味に仕上げ，口縁部外面は微隆起帯を巡らす。127は「く」の字に外反し，ナデ調整を施す。端部は上方に尖り気味に仕上げ，外面は面を成す。128～131は底部片である。128は外底部中央に向けて凹み，外面に赤化粧土が施される。129は胴部の器壁は薄く，内面と外面の一部にタール痕が認められる。130は輪状の粘土の内側から粘土を充填し成形することに起因し，外底部は中央が凹み，周縁部は高台状を呈する。131は厚みのある底部で段を成す。132は磨製石包丁で直背直刃タイプである。背面寄りに一穴穿孔し，背面にも抉りが認められる。全体的に丁寧な研磨が施される。

②土坑

SK6 (図3-33)

段部1の東部で検出した平面プラン楕円形の土坑である。土坑の北側はSK8に切られる。規模は長径1.4m，短径1.09m，深さ0.28mを測る。長軸方向はN-70°-Wを指す。断面形は逆台形状を呈し，埋土は上層に炭化物を含んだ暗褐色～黒褐色シルトが皿状に堆積する。出土遺物は図示した弥生土器の底部が1点出土した。133は内面にタールの付着が認められる。

SK7 (図3-34)

段部1の東部，ST3に隣接して検出した。平面プランは楕円形を呈し，長径1.7m，短径1.15m，深さ0.23mを測る。長軸方向はN-25°-Eを指す。上面ピットP11に切られる。P11の規模は長径0.56m，短径0.47m，深さ0.42mを測る。ピット埋土は暗褐色シルトで礫と炭化物を含む。このP11からは134～138の遺物が出土した。134～136は甕の口縁部片であり，134は貼付口縁である。外面

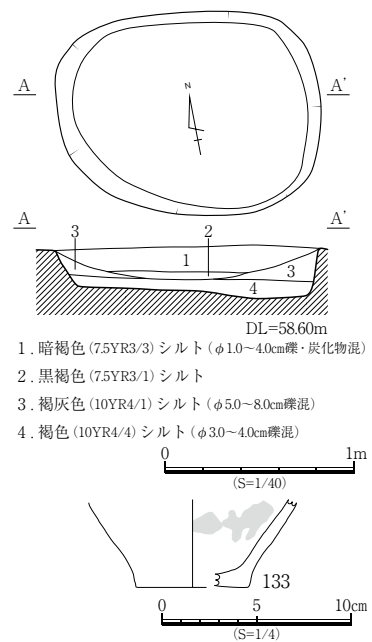


図3-33 段部1 SK6 遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

に縦長の刻目が施される。135の口縁端部は下方に摘みナデ調整を施し、下端に刻目を入れる。外面には微隆起帯と櫛描直線文が巡る。136の口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は面を成す。下端に刻目を施し、頸部は無文である。137は底部片で、外底部中央が凹む。外面にヘラ状工具によるナデ調整が施される。138は高杯の杯部であり、口縁部、及び端面に凹線文を施す。体部外面はヘラミガキが施され、脚部との接合部は円盤充填である。SK7の床面では北東隅でピットP13を検出した。土坑埋土は暗褐色シルトで埋土中から図示した弥生土器の他に弥生土器細片37点出土した。139は貼付口縁の壺である。口縁部外面は貼付帯に指頭圧痕が連続する。端部は面を成し、外面全体に縦方向の刻目が施される。頸部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が施される。頸部と胴部の境目に縦長の列点状の刻目が施され、その下にヘラ描きによる波状文が巡る。140・141は甕であり、140は胴部最大径よりも口径が大きく開く。口縁端部はナデ調整により外側が面を成す。胴部上位に櫛描直線文と微隆起帯の文様帯が巡り、直下に棒状浮文が貼付される。141は口縁端部を下方に摘みナデ調整を施し、下端に刻目を施す。直下に微隆起帯を巡らす。上胴部には櫛描直線文と微隆起帯を連続した文様帯で配し、上位には竹管刺突文、下位には斜状の刻目を施す。

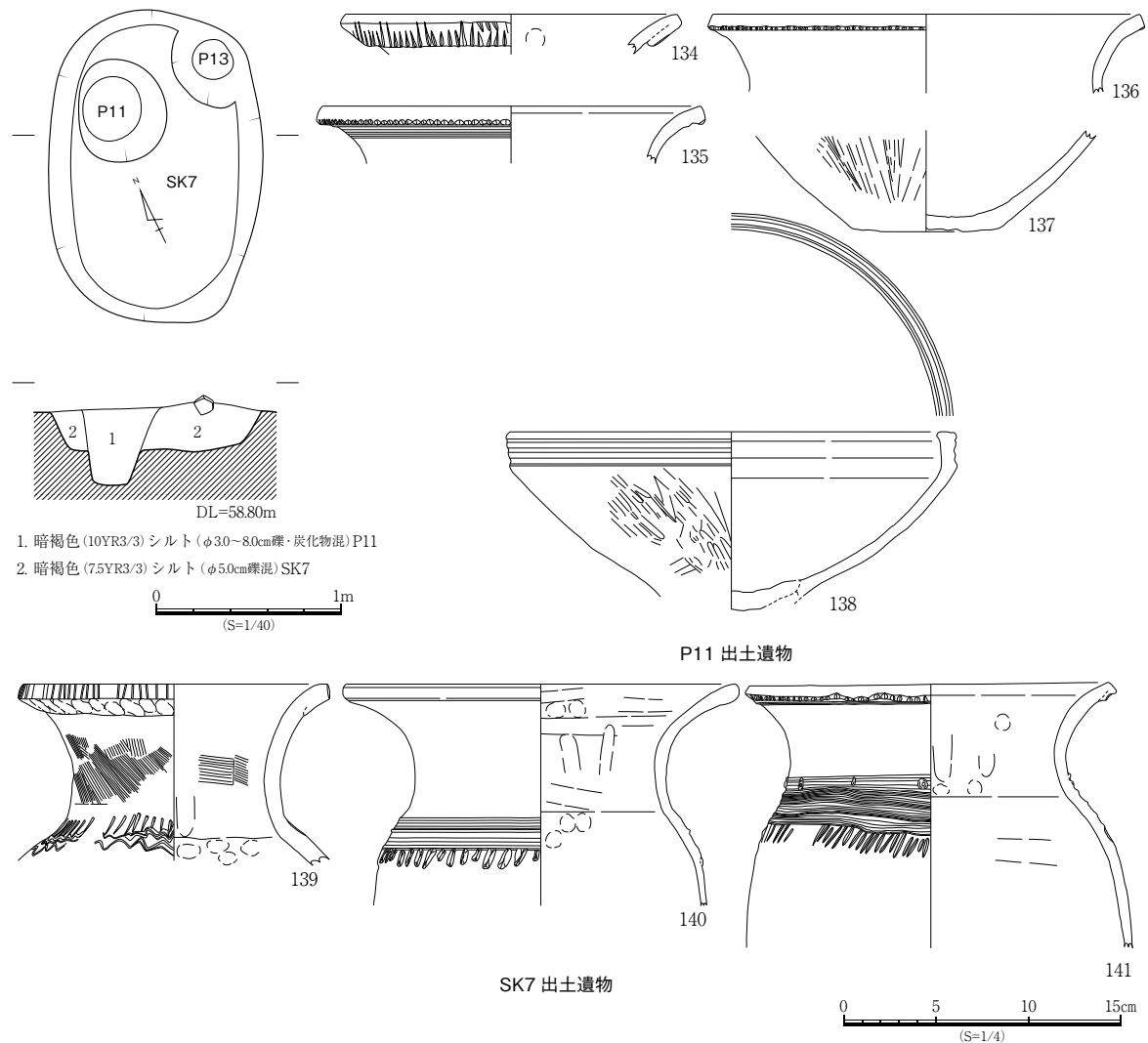


図3-34 段部1 SK7 遺構図・遺物実測図

SK8・10 (図3-35)

二つの土坑とも段部1の東端で検出した。SK8はSK10, 南部はSK6を切る。SK8は平面不整形円で長径1.2m, 短径1.1m, 深さ0.36mを測る。遺構埋土は2.0~8.0cm大の礫を含む褐色粘土質シルトであり, 図示した遺物の他に弥生土器片47点が出土した。142は甕であり, 貼付口縁である。上胴部には粒状浮文が配され, 櫛描直線文, 縦方向の刻目が施される。SK10は不整形で長径2.3m, 短径は検出長で1.2m, 深さ0.28mを測る。遺構埋土は礫を含む褐色シルトであり, 図示した遺物の他に弥生土器片が75点出土した。143は平底の底部片でナデ調整が施される。144は高杯脚の裾部片であり, 端部は上下に拡張し, 外面に一条の沈線が施される。外面の一部にヘラミガキ, 内面は横方向のヘラケズリ痕が認められる。145は石器の剥片と思われる。片岩製である。

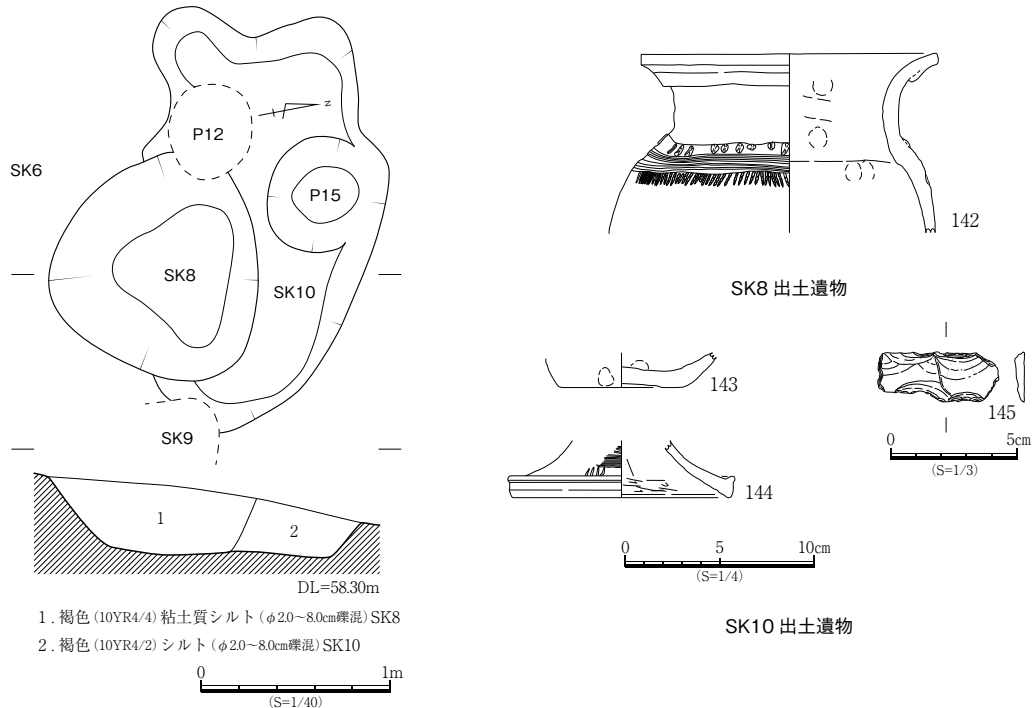


図3-35 段部1 SK8・10遺構図・遺物実測図

③ピット出土遺物

段部1ではピットを57個検出した。ここでは, ピットから出土した遺物について実測可能なものについて掲載する。P26から146・147の遺物が出土した。146は細頸壺の口縁部で, 貼付口縁である。口縁部外面には縦長の刻目が施され, 頸部には櫛描直線文を数条の単位で巡らす。147は甕であり, 口縁端部は丸く収め外面に刻目, 直下に微隆起帯を巡らす。148の胴部上位は内傾接合であり, 頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反する。口縁部は貼付口縁で外面の貼付帯に指頭圧痕が連続する。端部は外傾する面を成す。外面は粗い櫛描直線文と間に刺突文が施される。下位には縦長の刻目が施される。148は今

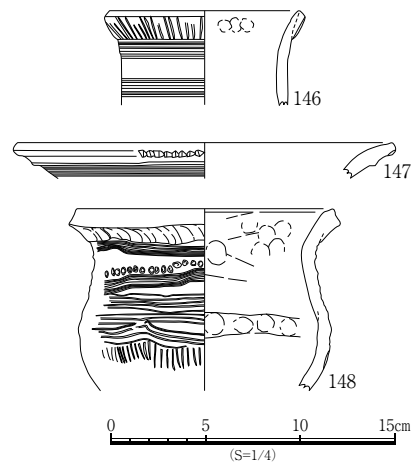


図3-36 段部1ピット遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

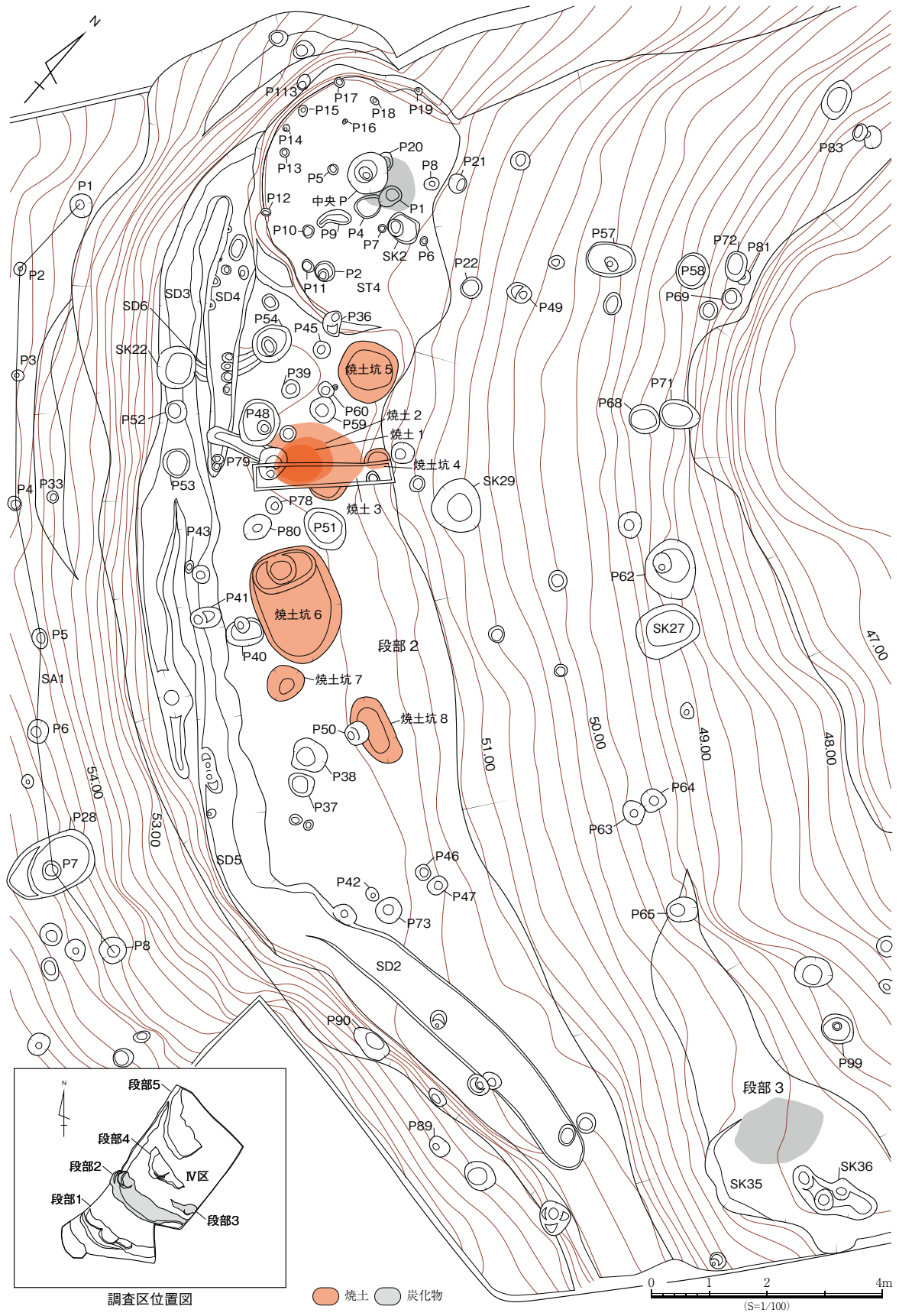


図3-37 段部2・3遺構配置図

段部2

IV区標高約51.8mの斜面部に開けた100㎡を測る平場である。段部1との比高差は約6.2mを測る。この平場では竪穴建物跡1棟、柵列1、土坑16基、溝3条、ピット88個を検出した。

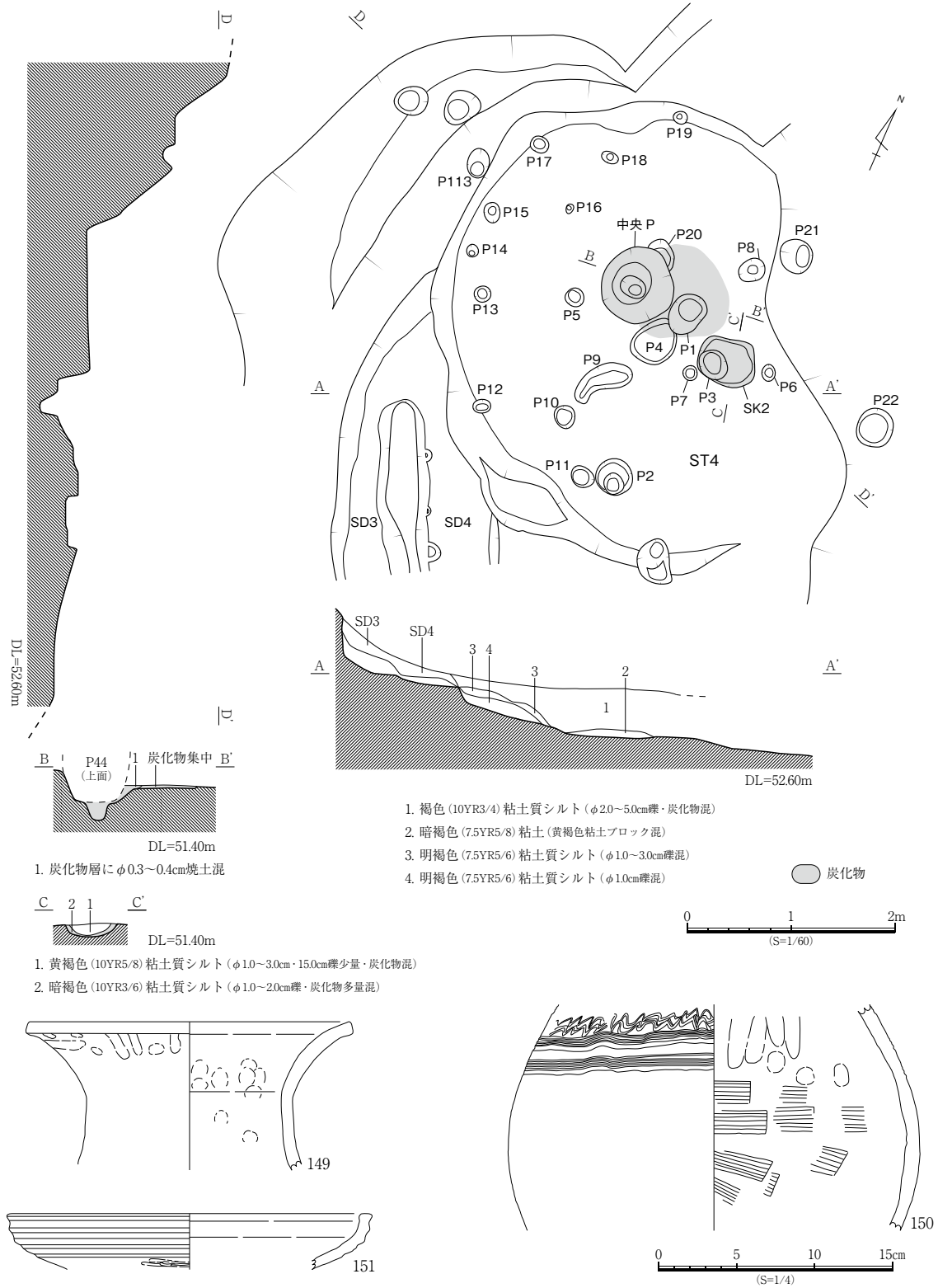


図3-38 段部2 ST4遺構図・遺物実測図

① 竪穴建物跡

ST4 (図3-38・39)

段部2の平場の西端で検出した。平面プランは半楕円形で北東側は斜面に開口する。検出した規模は長径4.58m、短径3.7mで、平面プランを楕円形とした短径は復元すると4.2mとなり、復元面積は12.12㎡である。深さは0.27～0.42mを測り、埋土は褐色シルトである。ST4の西側は三日月状のテラスが付属する。また、ST4の南側は、段部2の成形時に掘削されたと考えられる溝(SD3～5)がST4の南側肩口に接続する。ST4の竪穴中央部には長径0.74m、短径0.71m、深さ0.48mを測る円形の中央ピットと考えられるピットがあり、上部は上面で検出したP44で切られている。検出面で焼土をブロックで含む炭化物層を検出した。炭化物層は中央ピットの東側床面に集中がみられ、中央ピットの埋土は0.3～0.4cmの焼土を含んだ炭化物が堆積していた。また、中央ピットの東側に隣接して長径0.58m、短径0.46m、深さ0.11mを測る楕円形の土坑SK2があり、同じ様に炭化物層が土坑底面に堆積していた。上層は炭化物がブロック状に混じった黄褐色粘土質シルトであり、人為的に埋めた土と思われる。SK2は中央ピット的な性格も考えられ、竪穴建物跡の切合いも想定される。ST4はP6・21、P11～19と竪穴の壁際に並ぶピット、中央ピット周囲のP5・8が支柱穴になるものと考えられ、多支柱建物跡と思われる。またSK2を中央ピットとした場合、SK2を中心としたP2・5・10・20・21・22の6本柱の多角形建物跡が想定される。ST4内の埋土は炭化物が混じった褐色粘土質シルトが全体的に堆積しており、埋土中から弥生土器片121点、石斧1点、石包丁1点、砥石1点、投弾3点が出土した。149は壺の口縁部片であり、端部はナデ調整により面を成す。150は壺の胴部片であり、胴部の最大径は中位にくる。胴部上位に櫛描波状文と直線文が巡る。内面は中位以下にハケ調整が施される。151は高杯であり、口縁部は内湾しながら端部に向けて直立する。外面に凹線文が施され、体部外面はヘラミガキが施される。152は片岩製の磨製石包丁で側辺は欠損する。直背直刃タイ

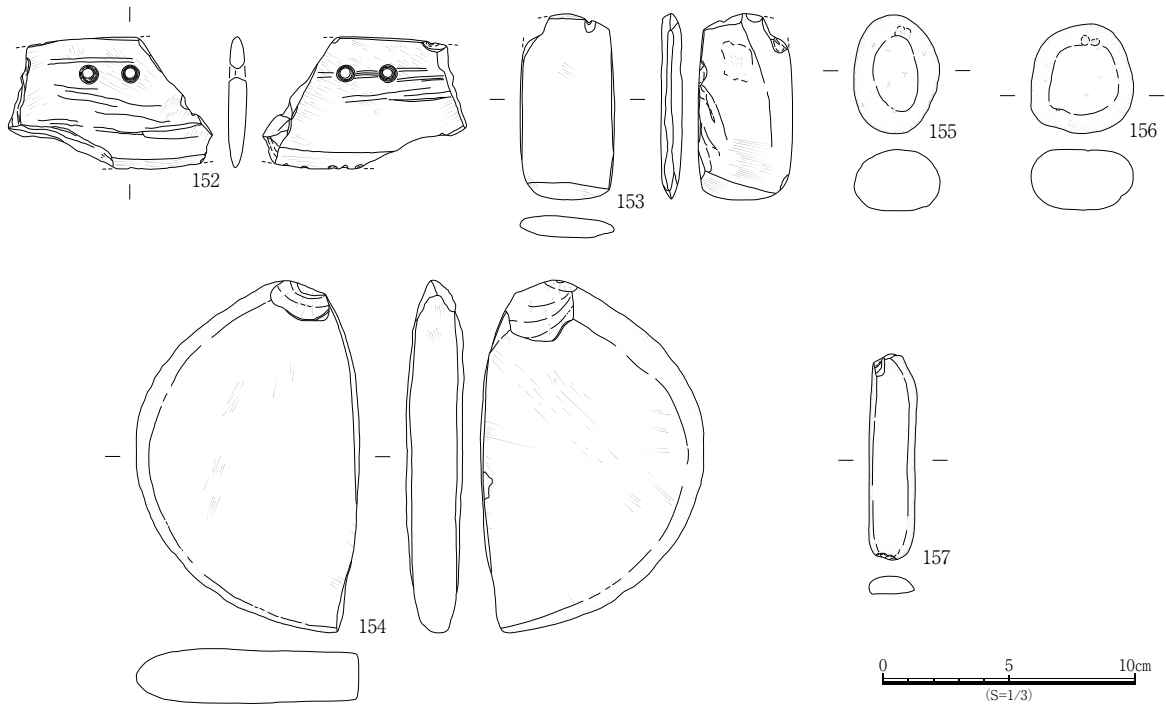


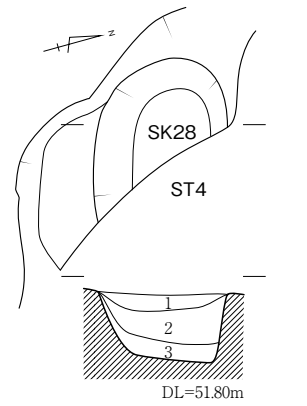
図3-39 段部2 ST4 遺物実測図

プで丁寧な研磨が施される。153は玄武岩製の小型石斧で基部から刃部面にかけて全体的に丁寧な研磨が施され側縁を直線的に仕上げる。扁平で刃部は両刃である。154は流紋岩製の砥石で扁平な両面と一側辺を使用している。155・156は4cm内外を測る小型の投弾である。石質は155が花崗斑岩、156が細粒花崗岩である。157は棒状の石器で断面が半月形を呈する。全長が8.0cm前後を測る扁平な緑色片岩であるが、この棒状を呈した石が包含層からも多数出土している。

②土坑

SK28 (図3-40)

ST4の床面で検出したP11・12間の壁際のテラス上で検出した土坑である。プランの東側はST4の埋土と判別できず検出ができなかった。ST4の上面遺構として取り上げる。検出長は0.91m、短径0.71mを測り、平面形は楕円形を呈するものと思われる。テラス面からの深さは0.38mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄褐色～明褐色を呈した粘土質シルトが堆積しており、埋土中から弥生土器細片28点、石鏃の石材と考えられる剥片が1点出土した。158～160は弥生土器の甕の口縁部片であり、158は口縁端部を尖り気味に仕上げ、外面に僅かに微隆起帯を残す。内面に化粧土を残す。口縁部下端に刻目を施す。159の口縁部はナデ調整を施し、口縁端部は面を成す。158・160は頸部から緩やかに外反する。頸部は内傾接合され、外面は縦方向のナデ調整、内面は横方向のナデ調整が施される。



- 1. 黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト (φ1.0~2.0cm風化礫・炭化物混)
- 2. 褐色 (10YR4/6) 粘土質シルト (φ1.0~3.0cm風化礫・炭化物混)
- 3. 明褐色 (7.5YR5/6) 粘土質シルト (φ1.0~2.0cm風化礫混)

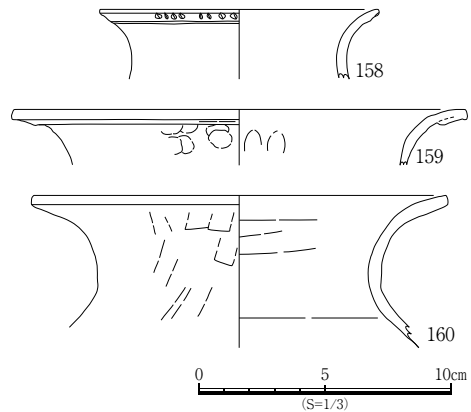
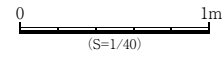


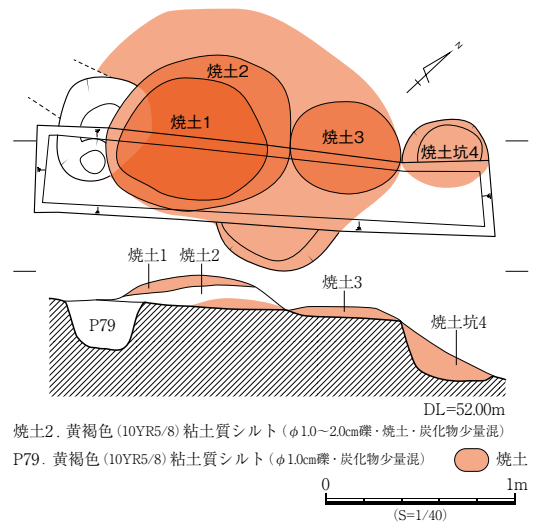
図3-40 段部2 SK28遺構図・遺物実測図

③焼土坑

段部2の平場では焼土坑が集中して検出された。遺構検出面でマウンド状に広がり呈するものや、土坑状に掘込まれたものがある。これらの焼土坑はST4東側で検出され、野外炉的な性格のものと思われる。以下に各焼土坑について記述する。

焼土1～3・焼土坑4 (図3-41)

ST4の東側4mに位置する。段部2の遺構検出面で検出した。焼土は幅1.38～1.7mの範囲でマウンド状に広がっており、下部は平面的な広さの差はあるものの焼土のブロックを4ヶ所確認した。特に焼土1・2



- 焼土2. 黄褐色 (10YR5/8) 粘土質シルト (φ1.0~2.0cm礫・焼土・炭化物少量混)
- P79. 黄褐色 (10YR5/8) 粘土質シルト (φ1.0cm礫・炭化物少量混)

図3-41 段部2焼土坑1～4遺構図

3. 検出遺構と出土遺物

については間層に炭化物を含む黄褐色粘土質シルトがあり、同じ場所を火床に使用したものと思われる。焼土3・焼土坑4については焼土1・2の北側に接して検出した。焼土3は直径0.6mの円形で検出した。焼土坑4は直径0.48mの円形で、斜面際に深さ0.28mの掘込みが確認された。焼土の南側の下面ではP79の掘込みが確認されたが、埋土は炭化物を含んでいるものの焼土は確認されなかった。

焼土坑5(図3-42)

ST4の東側に隣接して検出した。直径1~1.03mを測る円形の土坑であり、深さは土坑プランの西側が東側に比べて少し深く掘込まれており、検出面から西側0.2m、東側0.12mを測る。東側の上面で8.0~20.0cm大の角礫と黄褐色粘土質シルトが混じった焼土の堆積が認められた。土坑の埋土は全て焼土が主体であり、ブロック状に堆積が認められる。埋土中からは弥生土器片22点、投弾が1点出土した。

焼土坑6(図3-43)

段部2の平場中央部で検出した土坑である。平面プランは隅丸形状を呈し、長径2m、短径1.45m、深さ0.18~0.27mを測り、土坑の西側は一段凹む。焼土は西側の凹んだ下部から東側の上面に向かって堆積している。焼土の上には1層とした焼土をブロック状に含んだ褐色粘土質シルトの堆積が認められる。焼土の色調は赤褐色~暗赤褐色を呈し、上層に向かって色調が黒っぽくなる。土坑プラン東側の一段高い部分では黄褐色粘土質シルト(3層)が床面に堆積しており、上面で直径0.1m前後の小ピットを検出した。焼成土坑に付属するピットと思われる。埋土中からは弥生土器片111点、投弾が1点出土した。161は壺の口縁部片であり、貼付口縁である。断面四角形を呈した粘土

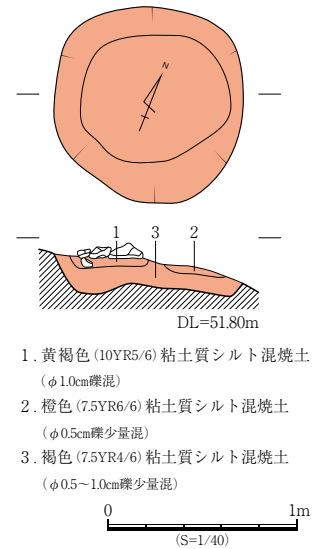


図3-42 段部2焼土坑5遺構図

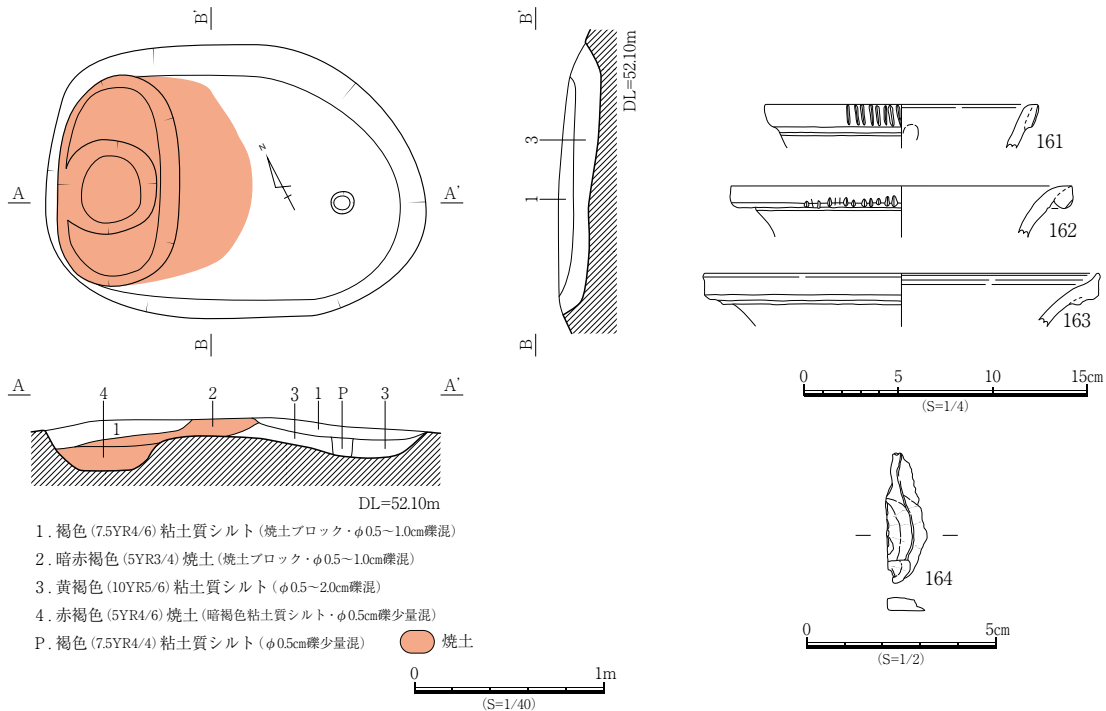


図3-43 段部2焼土坑6遺構図・遺物実測図

帯を貼付し、縦長の刻目を施す。162・163は甕の口縁部片で、162の口縁部は断面三角形形状を呈した貼付口縁であり、外面に刻目を施す。163の口縁部は断面台形を呈した貼付口縁であり、端部を上方に摘みナデ調整を施し、尖り気味に仕上げる。164は石器の剥片で、サヌカイト製である。

焼土坑7(図3-44)

段部2の平場中央部、焼土6の東側に隣接する。直径0.61～0.67mを測る不整円形の土坑であり、深さは0.11mを測る。プラン西側は浅く、東側が皿状に凹む。焼土は埋土上層に薄く堆積しており、下層は礫混じりの褐色粘土質シルトである。遺構埋土からは弥生土器片が3点出土した。

焼土坑8(図3-44)

段部2の平場中央部、焼土7の北東側に位置する。南側はP50に切られる。平面形は楕円形で長径1.25m、短径0.63m、深さ0.27mを測る。断面形は逆台形状を呈し、上層の中央部に焼土が認められる。下層は褐色～暗褐色を呈した粘土質シルトが堆積している。埋土中から弥生土器片が50点と投弾1点が出土した。

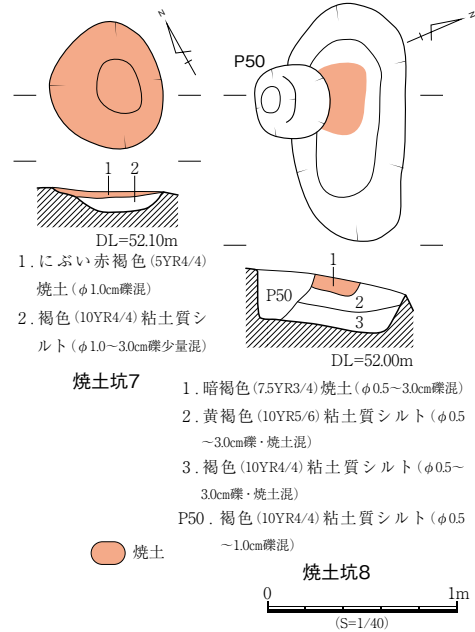


図3-44 段部2焼土坑7・8遺構図

④溝

SD2～6(図3-45)

段部2の平場成形面の山側斜面際に沿って検出した溝である。西端部はST4に接する。SD2～5はそれぞれ検出した箇所番号を付したが、基本的には同じ溝と考えられる。全体の検出長は20.1m、幅は0.4～1.36mを測る。SD3は西端部から6mの地点でSD5と二股に分岐し、内側のSD5は段部2の東端までSD2として延びる。SD4は始点のST4からSD3に並行して延長4.2mを検出した。SD6はSD3・4、P54に切られる。溝底面の標高は、西端部のST4に接する地点で51.88m、SD5の中央部で51.85m、SD2の中央部で51.87mとほぼ高低差は認められない。埋土はSD3・4が炭化物混じりの黄褐色粘土質シルト(1層)で、SD2がにぶい黄褐色粘土質シルト(2層)である。SD2の断面では上層にSD3・4の埋土1層の堆積が認められる。これらは段部2の平場を成形する際に掘込まれた排水施設の可能性も考えられる。埋土からSD2の範囲で弥生土器片43点、石鏃1点、SD3で弥生土器片49点、SD4で弥生土器片62点と投弾2点、SD5で弥生土器片27点と投弾1点、SD6で弥生土器片2点が出土した。比較的SD3・4の範囲から遺物が多く出土している。165～167は壺で、SD5から出土した。165は口縁部片で、端部を上方に拡張し、外面に沈線化した凹線文が施される。166は長頸の頸部片で、頸部下半に櫛描直線文、胴部との境目に円形浮文を配する。167の長頸壺の胴部片で、頸部外面に棒状浮文、微隆起帯と円形浮文、胴部には櫛描直線文と微隆起帯を巡らし、その下に棒状浮文を配する。168は壺の胴部片で頸部との境目に二条の断面三角形形状の隆起帯が巡る。胴部外面にはヘラミガキが施される。全てナデ調整が施される。169～171は甕で169・170はSD5から出土した。169は断面三角形を呈した貼付口縁で、外面に刻目を施す。170は素口縁で口縁端部は尖り気味に仕上げる。171はSD3から出土した胴部片で、外面胴部上位にドーナツ状の浮文、その下に櫛描直線文、微隆起帯を巡らす。全てナデ調整である。172はSD2から出土した石鏃で、平基式、サヌカイト製である。

3. 検出遺構と出土遺物

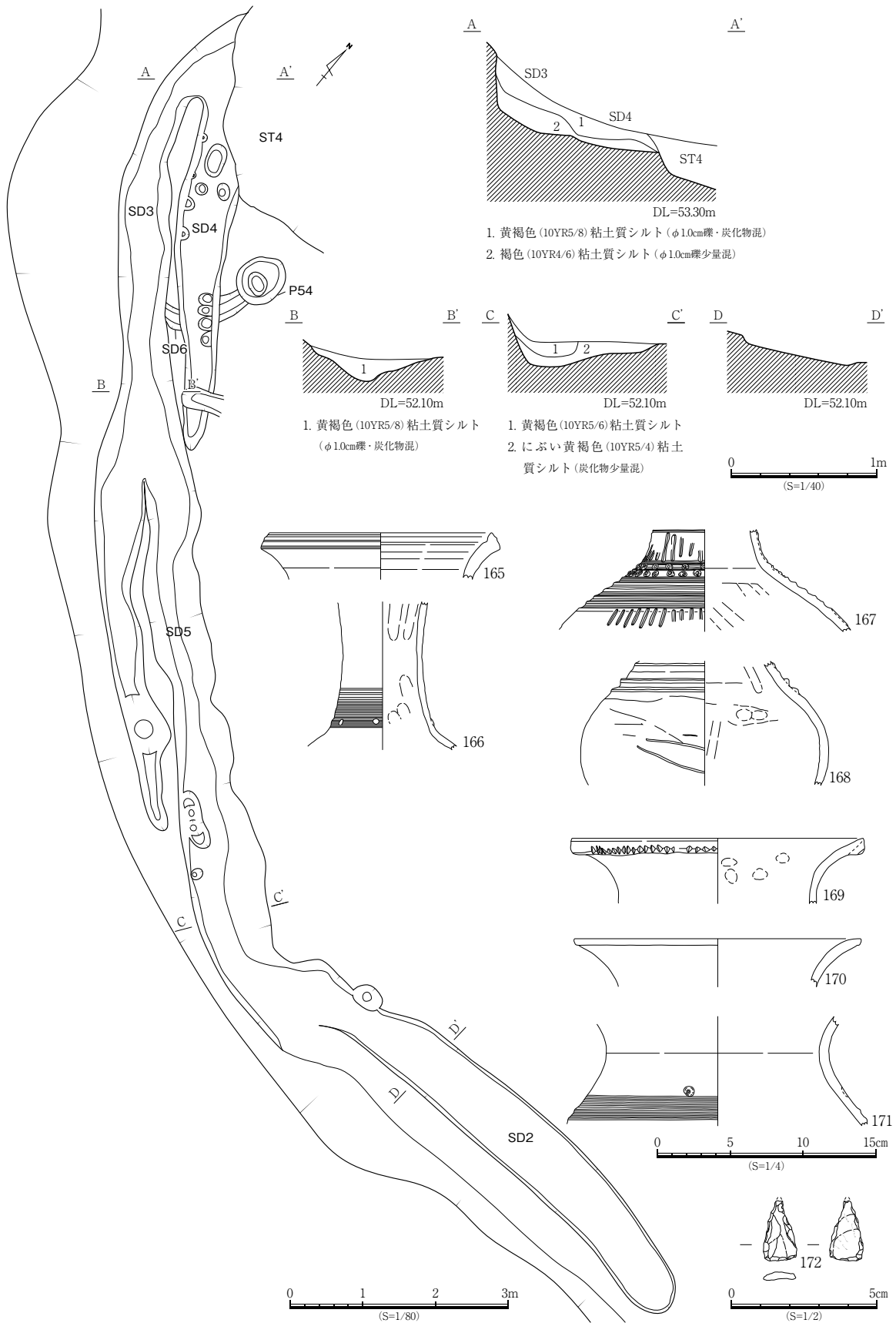


図3-45 段部2 SD2~6 遺構図・遺物実測図

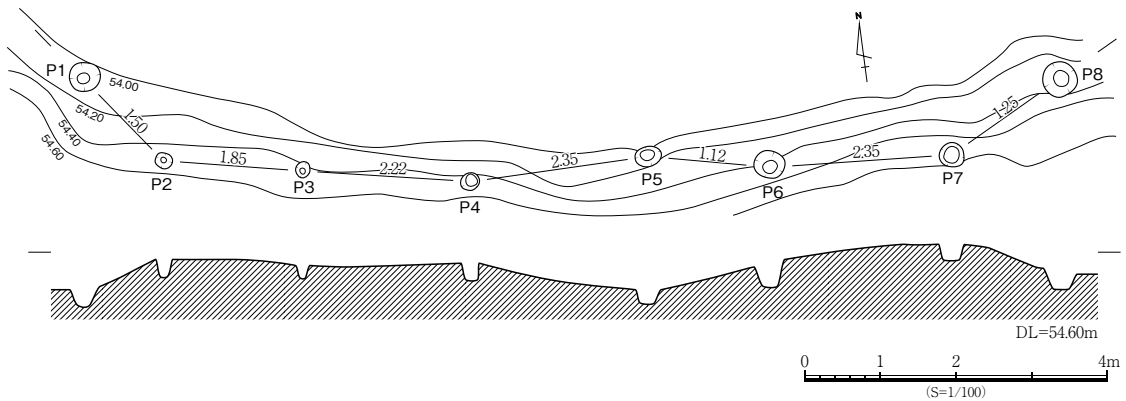


図3-46 段部2 SA1 遺構図

⑤ピット列(柵列)

SA1 (図3-46・47)

段部2の平場の山側斜面で検出したピット列である。P1～8は段部2の平場標高54～54.6mの範囲でほぼ等高線に沿ってピットが並ぶ。ピット列と平場との比高差は1.2m前後を測る。ピット間は1.12～2.35mを測り間隔が不規則である。ピットは円形で直径は0.21～0.45mを測る。P8の埋土から鉄鏃(173)と思われる鉄器が出土した。P7の埋土からは甕の口縁部片と石包丁の未製品(174・175)が出土した。174は断面四角形の貼付口縁で外面に縦長の刻目が施される。175は頁岩で裏面は平らな面を確保したハツリ面を残す。他のピットではP6・7より弥生土器片3点が出土した。

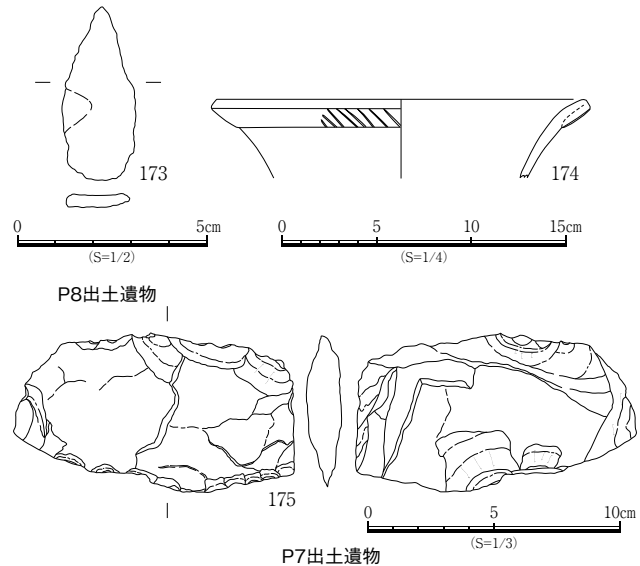


図3-47 段部2 SA1 出土遺物

⑥ピット

段部2の平場及び斜面地ではピットを88個検出した。以下にピットから出土した遺物について述べる。176・177はST4に付属すると思われるP113から出土した石包丁の未製品である。2点とも頁岩製で176の裏面は平らな面を確保したハツリ面を残す。一側辺は角を取り成形され、主面側は一部研磨される。177は刃部面と側面、背面の一部は丁寧に研磨される。主面、裏面ともに剥離面を残し未調整である。178は甕の口縁部片で斜面地のP81から出土した。口縁端部を尖り気味に仕上げ、外面に刻目を施す。外面は櫛描直線文と微隆起帯が巡る。179は胴部の張り具合から壺と考えられる。斜面地P83から出土した。胴部上位に櫛描直線文と微隆起帯が巡る。下部の微隆起帯間には棒状浮文が配される。180は甕の胴部片と思われる。胴部に櫛描直線文と微隆起帯、刻目を施し、胴部上位には円形浮文が配される。181は投弾である。石質は細粒花崗岩で3.7～4.4cm大の小型に属する。P54からの出土である。

3. 検出遺構と出土遺物

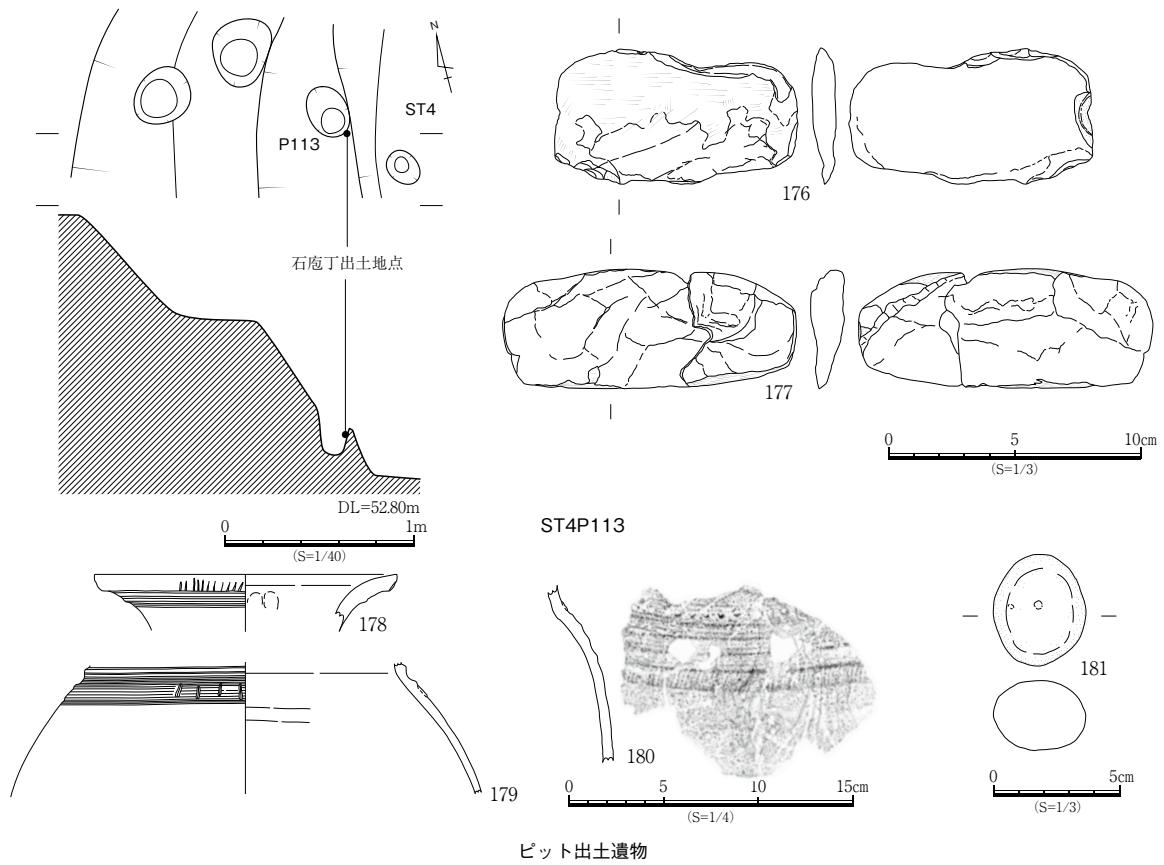


図3-48 段部2ピット出土遺物

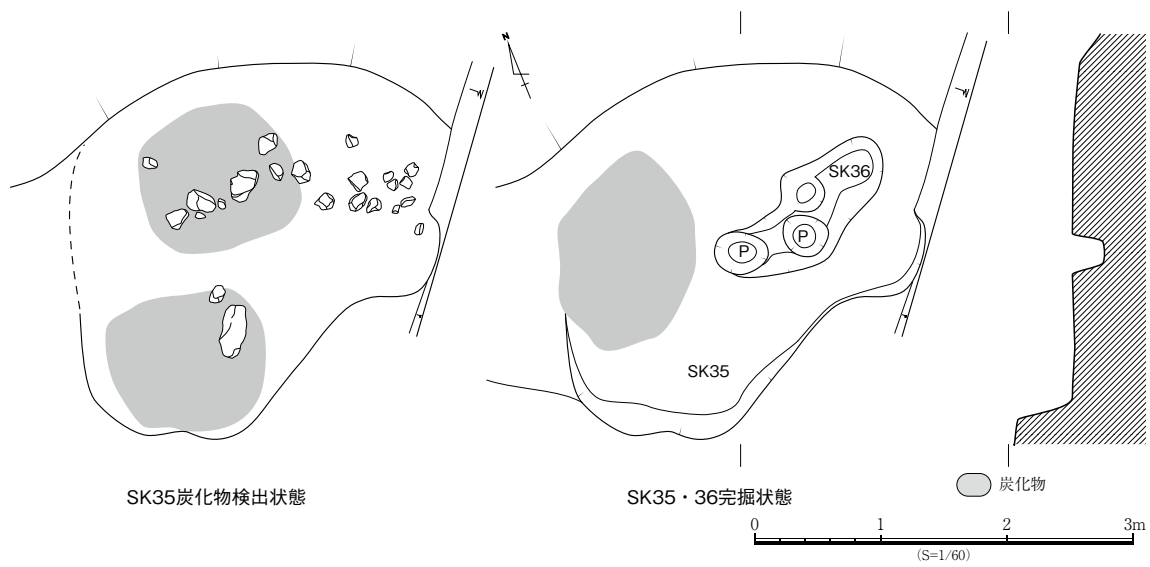


図3-49 段部3 SK35・36遺構図

段部3

段部2の平場東端部から比高差1.6m下、標高48.8～50mに開けた小規模な平場である。

段部3の平場は10㎡を測る。段部3の東端部では、上面で2箇所にて炭化物層の広がり、直径20cmの角礫の集中が確認され、その範囲を面的に掘り下げた結果、下層で土坑を検出した。炭化物が集中され

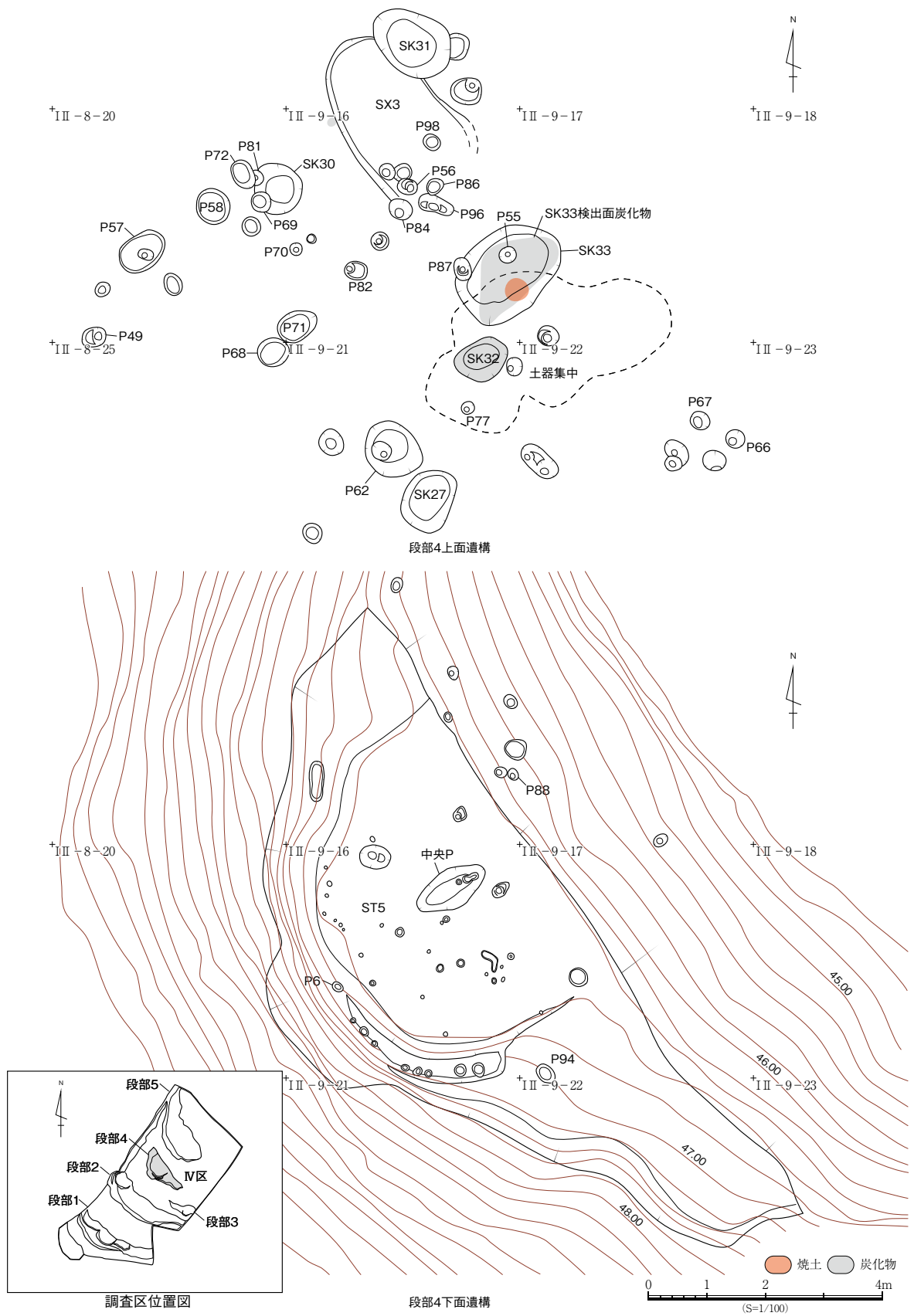


図3-50 段部4遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

て検出されたSK35の土坑の規模は長径2.78m、短径2.1mを測り、深さは検出面から0.46mを測る。埋土は部分的に炭化物層が互層に堆積しており、床面で不整形なSK36を検出した。SK36は不整形楕円形状を呈し、土坑内部にピット状に凹む箇所が認められる。長径1.55m、短径0.58m、深さ0.26mを測る。SK35からは弥生土器片が9点、SK36からも2点出土した。

段部4

IV区標高約46.5mの斜面部に開けた82.5㎡を測る平場である。段部2との比高差は5mを測る。この平場は、現状の斜面地形を掘り下げて確認された平場であり、上面で土坑5基、ピット28個、性格不明遺構1基を検出し、下面で竪穴建物跡1棟を検出した。

上面遺構

①土坑

SK32 (図3-51)

段部4上面の土器集中範囲の中で炭化物を含んだ浅い皿状の土坑である。平面プランは楕円形で長径0.92m、短径0.67m、深さ0.17mを測る。埋土は炭化物のみであり、中から弥生土器片9点と図示した壺口縁部片が出土した。182は貼付口縁であり、外側に粘土帯を貼付し、肥厚させる。口縁端部は平坦な面を成し、外面下端に刻目を施す。貼付帯下端はナデ調整により段を有し、稜ができる。

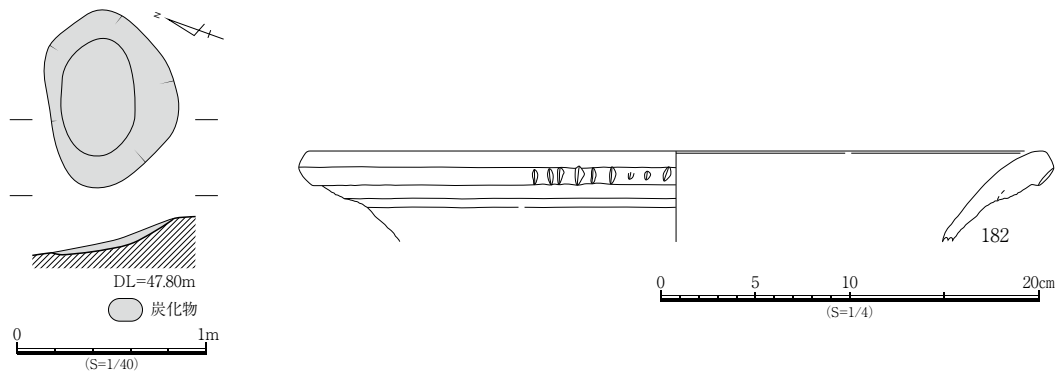


図3-51 段部4 SK32遺構図・遺物実測図

②性格不明遺構

SX3 (図3-52)

段部4上面中央部で検出した土器溜まり状の遺構である。プランの南東側は不明瞭である。検出規模は長径2.28m、短径1.55m、深さは0.3mを測る。埋土は炭化物が混じる黄褐色粘土質シルトで埋土中から弥生土器片117点、石鏃1点、石材(サヌカイト)2点、投弾2点、外面臼型をした石器2点が出土した。183・184は壺であり、183は断面形が四角を呈した貼付口縁であり、外面に刻目を施す。頸部は無文である。184は長頸壺の頸部片であり、頸部に櫛描直線文が施され、頸部と胴部の境目に円形の粘土を貼付し、中央部に刺突を施したドーナツ状の浮文が配される。185・186は甕であり、185の口縁部は貼付口縁である。外面に粘土帯を貼付し、端部を上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ外面に面を成す。外面下端に刻目を施す。186の口縁部は外反し端部はナデ調整を施し外面は面を成す。頸部と胴部の境目に一条の微隆起帯が巡る。187は平基式の打製石鏃であり、サヌカイト製で

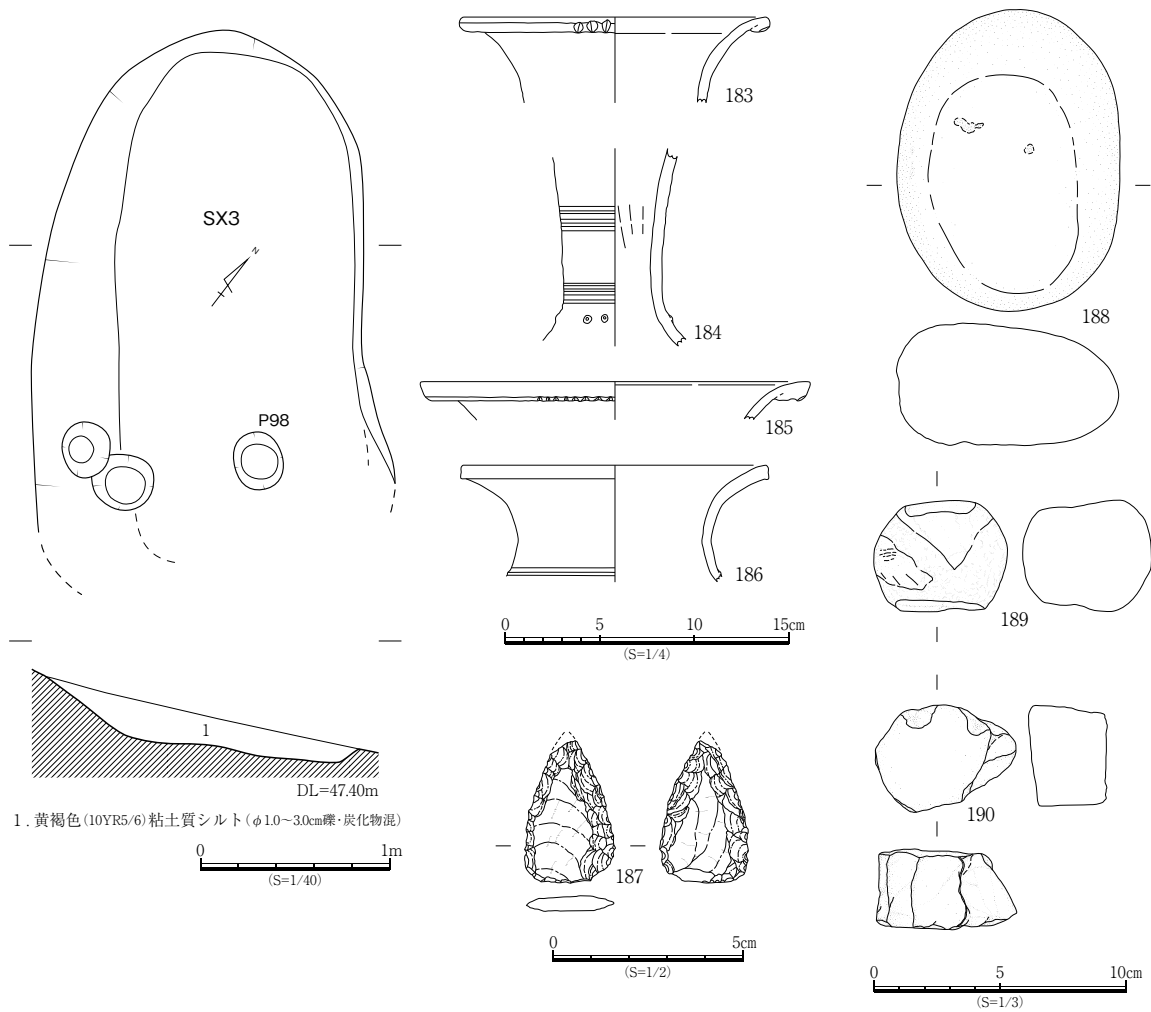


図3-52 段部4 SX3遺構図・遺物実測図

ある。188は大型の投弾と思われる。扁平で全長12.0cm, 全幅8.9cm, 重量799.0gを測る。石は細粒花崗岩である。189・190は両端を平滑にし, 190は側面を6面体にハッキリ白型を呈した石器である。189は緑色チャート, 190は砂岩である。

③ピット

P72 (図3-53)

段部4の上面北部で検出したピットで, 埋土から弥生土器片15点が出土した。191は無頸壺と思われる胴部は内湾し, 口縁部に至る。断面四角形の貼付口縁であり, 外面に刻目が施される。

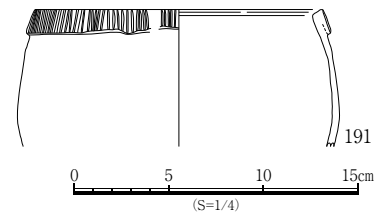


図3-53 段部4 P72遺物実測図

下面遺構

①竪穴建物跡

ST5 (図3-54~57)

段部4の下面で検出した竪穴建物跡である。平面プランは円形で長径5.5m, 短径4.35m (復元5.5m), 面積は22.41㎡を測り, IV区で検出された竪穴建物跡で最大規模である。北東側は斜面に開口してお

3. 検出遺構と出土遺物

り、全体的なプランは不明であるが円形プランと思われる。北西及び西南斜面側は段部4の成形矩面と上端が共有しており、上端から下端まで深さ1.3mを測る。南東側は幅0.25～0.45m、長さ3.7mを測るテラスがある。竪穴建物跡の埋土上層は上面遺構検出面の黄褐色シルトが堆積しており、ST埋土(Ⅰ-1層)として遺物の取り上げをした。1層から貼床面(9層)までの平均的な深さは0.15mを測

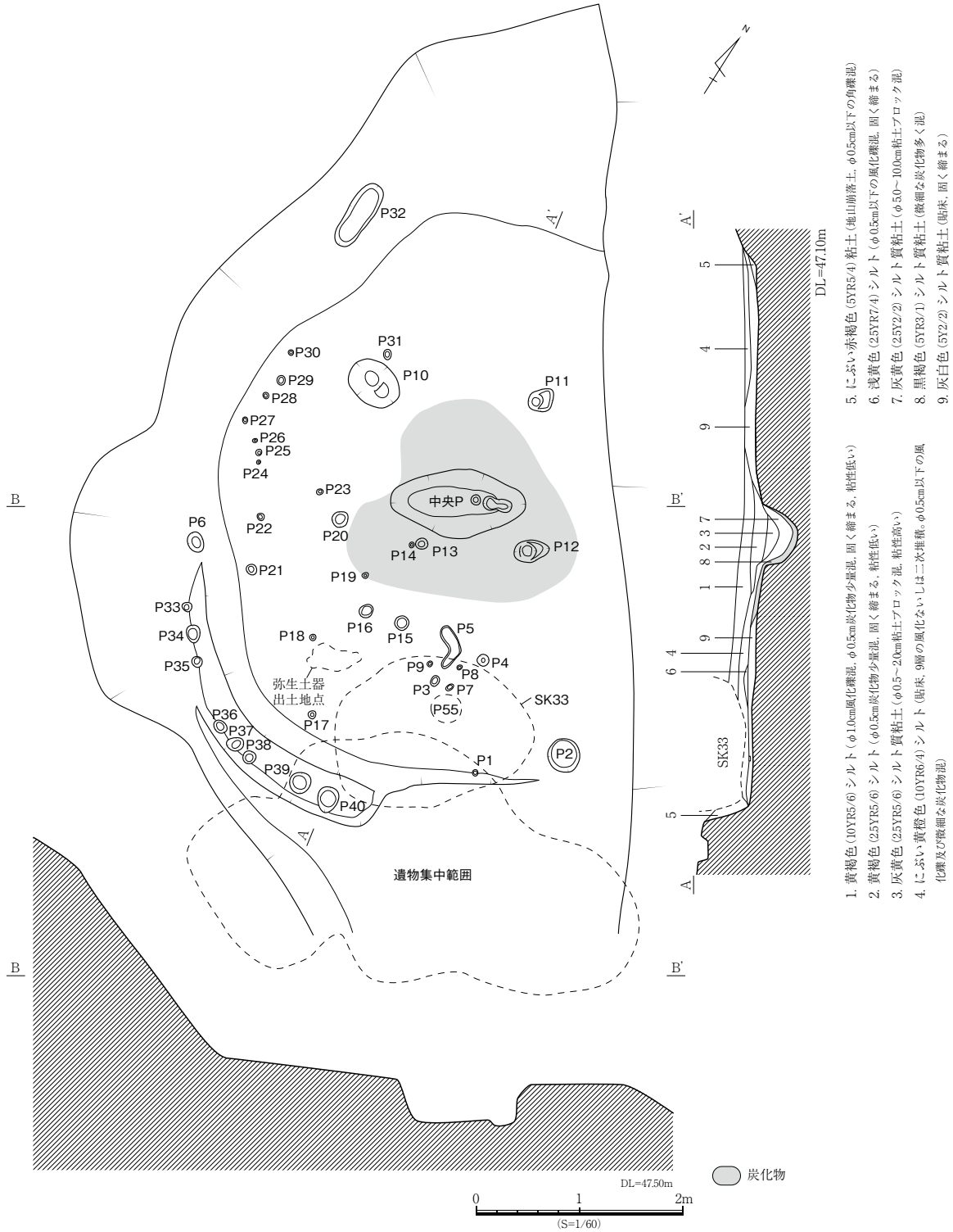


図3-54 段部4 ST5遺構図

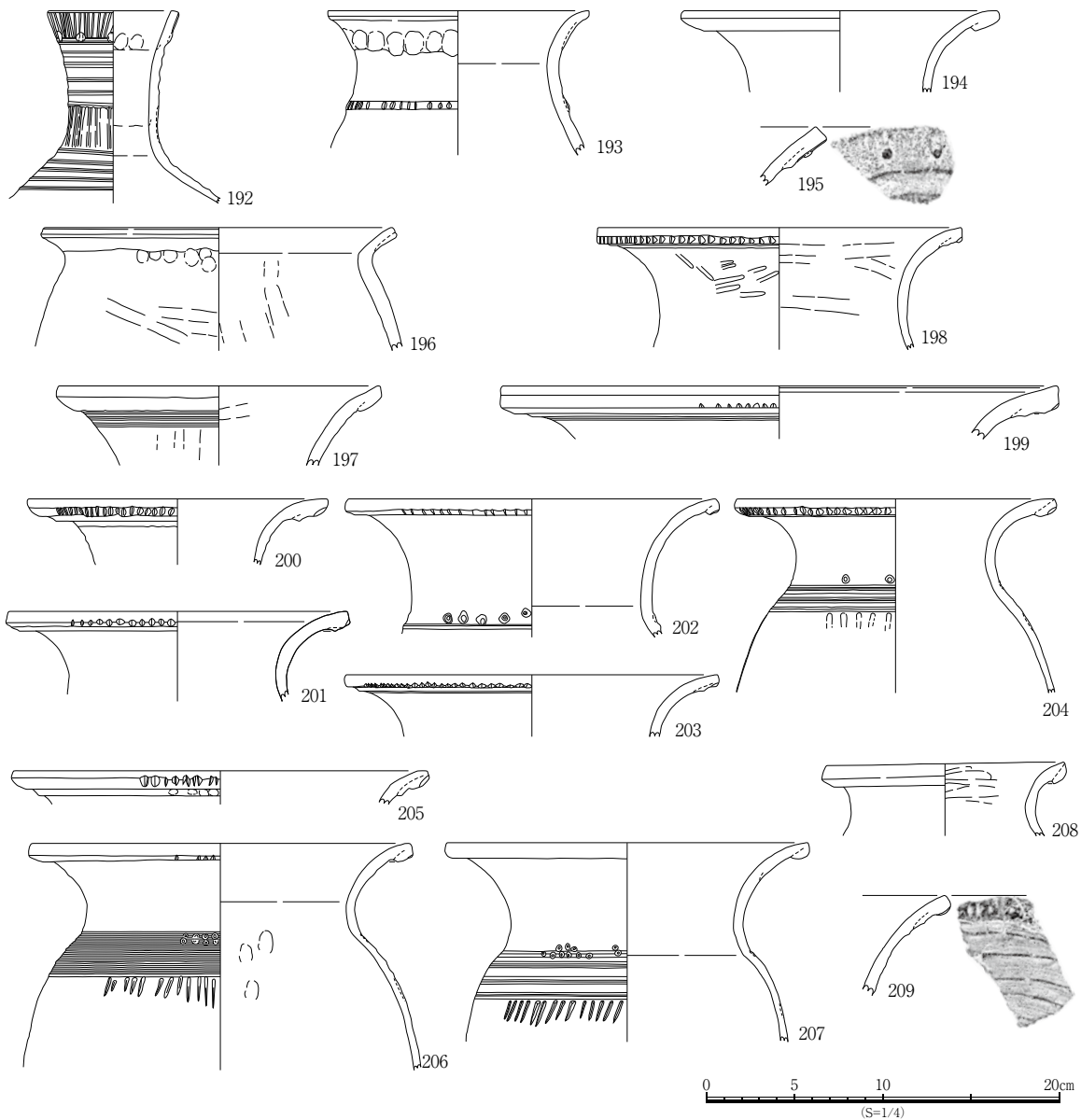


図3-55 段部4 ST5遺物実測図1

る。床面全体に灰白色を呈したシルト質粘土(9層)が認められ貼床である。貼床と考えられる粘土は4層と9層の2面あり、中央ピットから掻き出したと考えられる炭化物は9層の貼床上面で広がりを検出した。中央ピットは楕円形を呈し、規模は長径1.31m、短径0.67m、深さ0.43mを測る。長軸方向はN-60°-Eを指す。埋土は2・3・7層で、最下層が炭化物層である。炭化物層の上層は灰黄色シルト質粘土で粘土をブロック状に含む。ピット内部の北東側に小ピットを検出した。ST床面で検出したピットはP1~40の40個を検出した。P10~12・15・20の5本柱で構成されるものと思われる。また、床面の周縁部にはP1・17・18・21~30の直径5.0~10.0cm内の小ピットが並んで検出された。また、南東部のテラス上面にも壁際にピットが並び建物の構造に伴うピット群として捉えられる。ST5の埋土からは弥生土器片349点、石包丁2点、石鏃2点、砥石2点、礫錐1点、投弾11点、石核2点が出土した。192~195は壺である。192は細頸壺であり、口縁部は縦長の刻目と円形浮文を配し、頸部上位は微隆起帯、下位は棒状浮文、胴部は微隆起帯を巡らす。193・194は甕とも呼べる器形である

3. 検出遺構と出土遺物

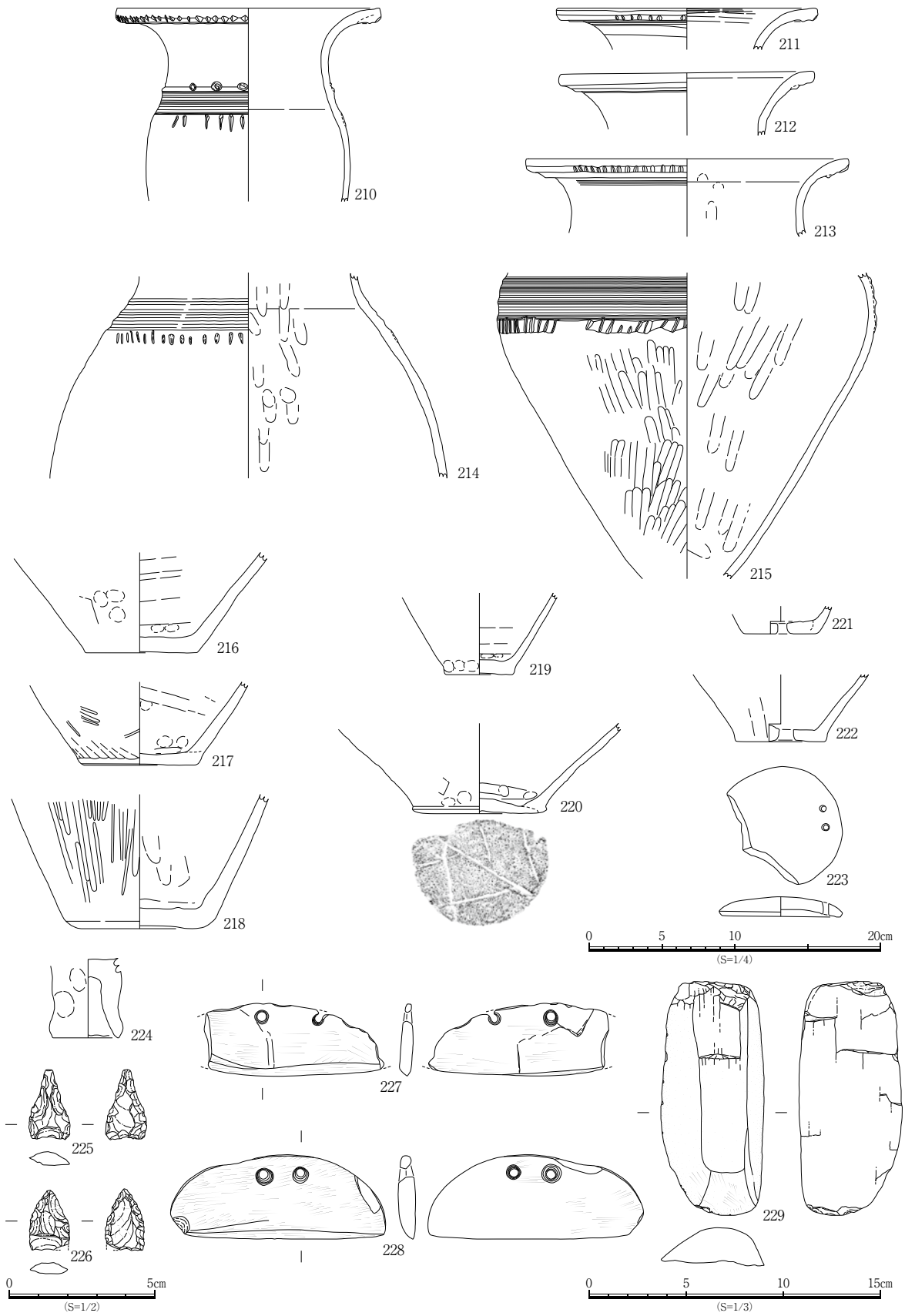


図3-56 段部4 ST5遺物実測図2

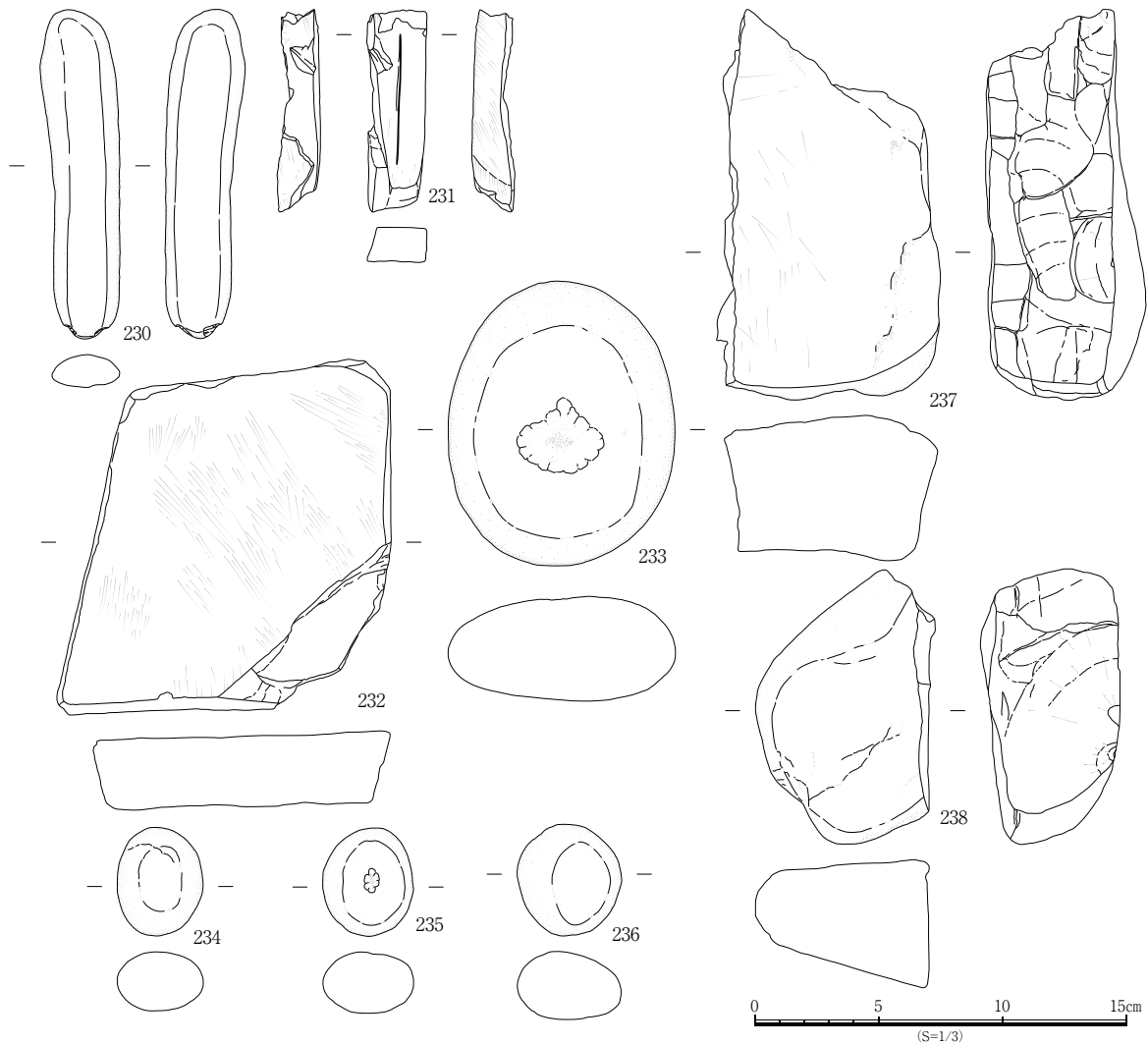


図3-57 段部4 ST5 遺物実測図3

がここでは壺として取り上げる。193の口縁部は緩やかに外反し、端部は尖り気味に仕上げる。口縁部は外面に貼付痕が認められ、外面に指頭圧痕が連続する。頸部には刻目が施された凸帯が巡る。胎土にチャートを含み全体的に橙色を呈する。194の口縁部は断面四角形の貼付口縁である。195の口縁部は外面に円形浮文を配し、頸部は微隆起帯を巡らす。196～215は甕である。196～210の口縁部は全て貼付口縁である。196の口縁部は「く」の字に外反する。端部はナデ調整により中央部が凹む。口縁部外面は貼付痕が認められる。全体的にナデ調整が施される。197も貼付口縁であり、外面口縁部直下に櫛描直線文が巡る。口縁部内面の一部にタール痕が認められる。198の口縁部は僅かに肥厚し、端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。口縁下端に刻目を施す。頸部外面にヘラミガキ痕、内面はナデ調整が施される。199の口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。口縁端部に刻目を施し、下端に微隆起帯が巡る。200・201は頸部からラップ状に大きく開く。200の口縁端部はナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。口縁外面に刻目を施す。201の口縁部はナデ調整を施し、断面四角形状に仕上げる。202の口縁部は緩やかに外反し、端部は玉縁状に仕上げる。下端は刻目を施す。頸部と胴部の境目に円形の粘土に刺突を施しドーナツ状を呈する浮文が配され、直下に微隆起帯が巡る。内外面に赤い化粧土を施す。203・204の口縁端部は断面台形の貼付口縁で

3. 検出遺構と出土遺物

あり、外面下端に刻目を施す。204は上胴部に円形の粘土に刺突を施しドーナツ状を呈する浮文が配され、その下に櫛描直線文と微隆起帯を連続させて巡らし直下に棒状浮文を配する。205は口縁直下に粘土帯を貼付して二段にし、ナデ調整により微隆起帯にする。端部外面に刻目を施す。206の口縁部はナデ調整により貼付口縁を四角く仕上げる。口縁部外面に刻目が僅かに残る。頸部は無文で上胴部に櫛描直線文と微隆起帯を連続させて巡らし、直下に棒状浮文を配する。207の口縁部は玉縁状に肥厚する。上胴部と頸部の境目に段が生じる。頸部は無文で、上胴部に微隆起帯と竹管刺突文を配し、直下に棒状浮文を配する。208は小型甕の口縁部片である。口縁部は粘土帯を貼付し、玉縁状に肥厚する。無文でナデ調整が施される。209は頸部にナデにより凹凸をつけ、微隆起帯状に連続させる。口縁端部は玉縁状に肥厚させ刻目を施す。210は胴部の最大径より口径が広く、胴部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁部は断面台形の貼付口縁であり、外面を強くナデ調整を施し、下端を隆起させ微隆起帯状に仕上げる。頸部と胴部の境目に円形の粘土に刺突を施しドーナツ状を呈する浮文が配され、櫛描直線文と微隆起帯を連続させて巡らし、直下に棒状浮文を配する。211～213の甕は素口縁である。211は大きく外反し、端部を僅かに肥厚させ、外面に刻目と微隆起帯を施す。212の口縁部は端部外面に面を成し、直下に微隆起帯を巡らす。213の口縁端部外面は面を成し下端に刻目を施す。口縁直下に微隆起帯、櫛かハケ状工具による沈線文を巡らす。

214・215は胴部片である。214は甕の胴部片と思われ、上胴部に四条の微隆起帯を巡らし、直下に退化した棒状浮文を貼付する。215は壺の胴部片と思われ、胴部下半が窄まる。上胴部には櫛描直線文と微隆起帯を連続させて巡らし、直下に退化した棒状浮文を貼付する。外面胴部下半はヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。216～222は底部片である。全て平底であり、216は内外面ともにナデ調整が施され、胎土は細かな砂粒を多く含む黄橙色の色調を呈し、バーガ森北斜面遺跡出土の他の土器とは様相が異なる。217・218は外面の一部にヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。219は底径が4.6cmと他に比べ小さく小型である。外面の一部に煤の付着が認められる。220は他に比べ器壁が薄く、胴部は底部から外方に大きく開く。底部と胴部の接合部を押圧しながらナデ調整を施すため、内底部周縁は凹み、中央部は盛り上がる。外底部に木葉痕が認められる。221・222は甕底部であり、221は底部中央に直径0.7～0.8cmの焼成前の穿孔が認められる。222は底部中央に焼成後の穿孔が認められる。223は蓋と思われ、円盤状を呈する。周縁部に2個円孔を穿つ。224はミニチュア土器の底部と思われ、外面は指頭圧痕が顕著であり、内面は中空である。225～238は石器である。225・226は打製石鏃であり、2点とも平基式でサヌカイト製である。227・228は磨製石包丁で2点とも頁岩製である。227は背面寄りに二穴穿つ。形態は弧背直刃で、刃部側が厚く、背面側が薄くなる。主面左側欠損部は刃部の研ぎ直し痕が認められる。228は背面寄りに二穴穿つ。形態は弧背直刃で、刃部側が厚く、背面側が薄くなる。背面は丁寧な研磨によりきれいに面取りされる。229は磨製石斧で緑色の玄武岩製である。裏面は未調整であり、刃部面及び一側縁のみ丁寧な研磨が施される。230は礫錐と考えられ、先端部は突起状を呈し、突起部には擦痕がみられる。緑色片岩製である。231・232は砥石であり、231は直方体をした砂岩の砥石である。三面に使用痕がみとめられる。232はやや大型で扁平な仕上げ用の砥石である。片面のみ擦痕が顕著であり砂岩製である。233は叩石で片面中央部に敲打により凹んだ痕が認められる。細粒花崗岩である。234～236は直径が3.3～4.4cm内外を測る小型の投弾である。237・238はチャートの石核である。237は一側辺にハツリ痕が認められる。238は緑色チャートであり、一側辺にハツリ痕が認められる。この石材は石鏃に使用が認められる。

②土坑

SK33 (図3-58)

ST5の南東壁際に位置する。上面で検出した遺物集中範囲とSK33のプランの検出が難しく、ST5埋土I-1層を掘削途中に検出した。上面の遺物集中範囲の西寄りで炭化物の広がりが検出され、炭化物層を除去すると土坑の埋土として認識出来る黄褐色シルト(1層)とオリーブ褐色粘土質シルト(2層)が検出された。1層は炭化物を少量含み、焼土をブロックとして含む。1・2層の境目に、炭化物の斜状の堆積が認められ、上層で検出した炭化物層の広がりにつながるものと思われる。SK33のプランは不整楕円形を呈し、規模は長径1.94m、短径1.48m、検出面からの深さは0.33mを測る。長軸方向はN-51°-Eを指す。埋土中からは弥生土器片152点、石鏃未製品1点、石鏃加工剥片(サヌカイト)4点、石核(チャート)1点、砥石1点、投弾4点が出土した。239は壺であり、口縁部は外反し、端部はナデ調整を施し外面に面を成す。口縁端部に刻目を施し、頸部には三条の微隆起帯を巡らす。240は大型で壺とも思われるがここでは甕として取り上げる。断面長方形の貼付口縁である。外面に縦長の刻目を施し、直下に二条の微隆起帯を巡らす。241は甕の胴部片と思われる。上胴部に櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らし、直下に退化した棒状浮文を配する。239~241は胎土にチャートを多く

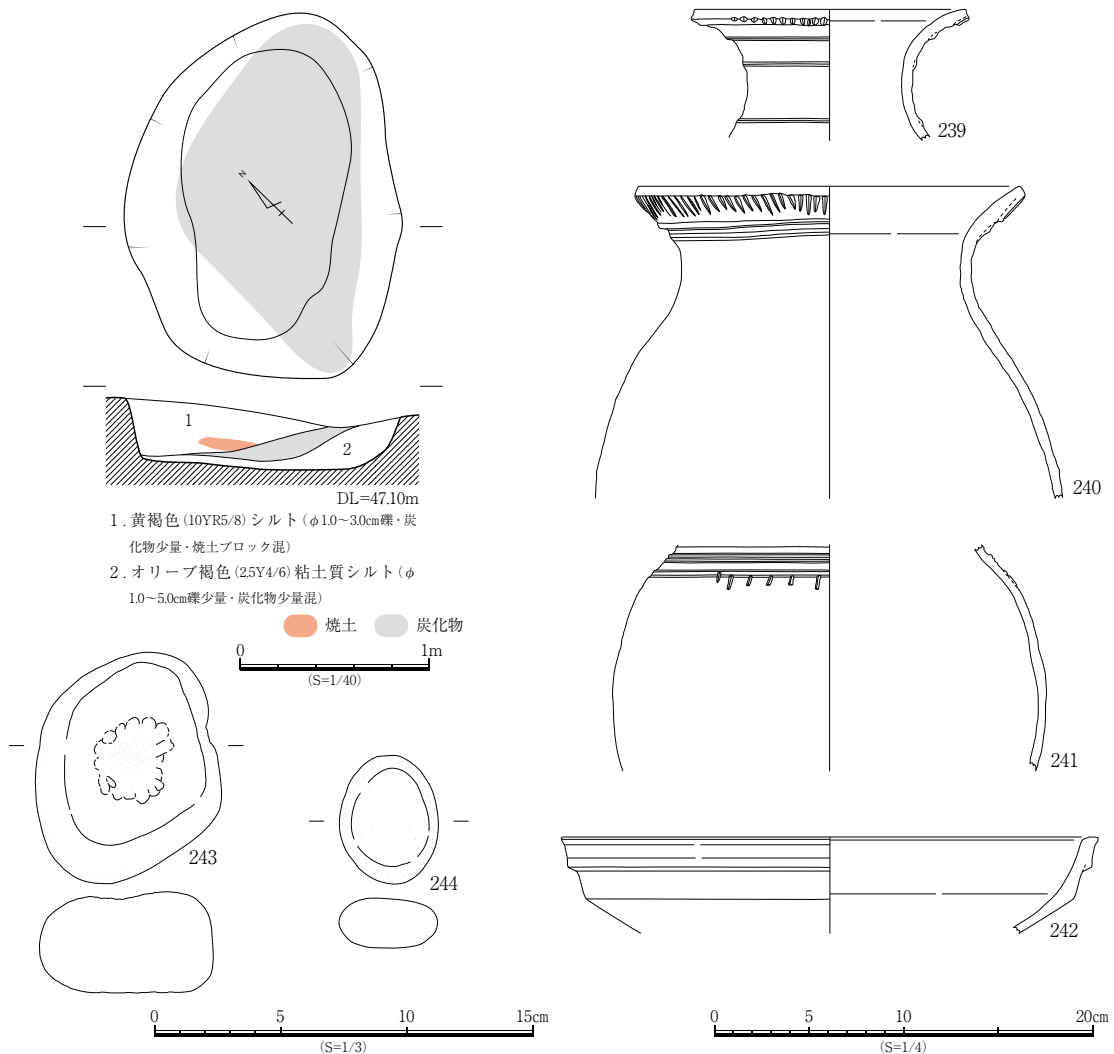


図3-58 段部4 SK33遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

含み、色調が黄橙色～黄色を呈し、バーガ森北斜面遺跡出土の他の土器とは様相が異なる。242は高杯の杯部片である。口縁部は貼付口縁で肥厚し、端部を外方に摘みナデ調整を施し上面に面を持つ。外面も横方向のナデ調整を施し、中央部が凹む。杯部は口縁部にかけて上方に屈曲し口縁部に至る。243は叩石である。片面中央部が敲打により凹む。細粒花崗岩である。244は直径3.9～5.1cmを測る扁平な小型の投弾である。細粒花崗岩である。

③ピット

P55 (図3-59)

SK33上面で検出した。平面プランは円形で長径0.61m、短径0.59m、深さ0.1～0.2mを測り、ピットの北側が一段深くなる。柱痕状に深くなる部分は円形で長径0.32m、短径0.3mを測る。検出面で土器が集中して出土し、ピットから図示した遺物の他に弥生土器片171点、石斧片1点が出土した。245は細頸壺であり、口縁端部は僅かに面を成す。全体的にナデ調整が施され、内面は指頭圧痕が顕著である。246～249は甕とも呼べる器形であるが、口径が12.0～13.0cm前後と頸部からの開きが小さいことからここでは壺として取り上げる。246は頸部から短く外反し、口縁部は玉縁状に肥厚する。247は貼付口縁であり、口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。端部外面下端に僅かに刻目を残す。口縁部の外面貼付帯は微隆起帯状に段を残す。248の口縁部は短く外反する。貼付口縁であり、端部は尖り気味に仕上げる。口縁部外面には指頭圧痕が連続し、頸部と胴部との境目に二条の微隆起帯を巡らす。249の口縁部は尖り気味に仕上げる。外面に刻目を施し、内面には円形の粘土に刺突を施しドーナツ状を呈する浮文が連続して配される。頸部には微隆起帯を連続して巡

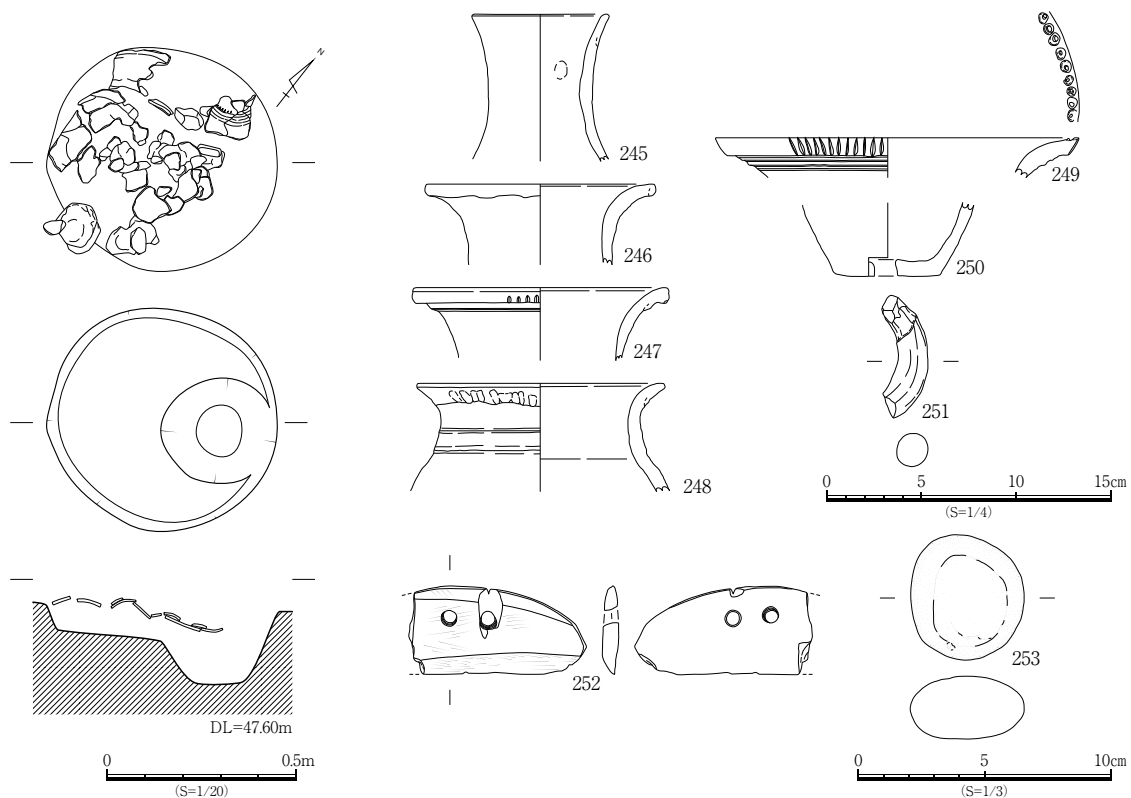


図3-59 段部4 P55遺構図・遺物実測図

らす。250は甑の底部片であり、底部中央に直径1.2cmの焼成前の穿孔が認められる。251は土器の把手部である。取り付け部は先端を細く仕上げる。252は磨製石包丁である。弧背直刃タイプで主面側の背部は斜めに研ぐ。石質は頁岩である。253は直径4.5～5.0cm内外を測る扁平な中型の投弾である。石質は細粒花崗岩である。

④埋納遺構

段部4 Ⅲ層出土遺物(図3-60)

段部4 ST5上面で検出した。255の大型の甕の内部に、254の壺が「入れ子」状に出土した。255の甕の向きと逆に254の壺を入れ、寝かせた状態であった。254はほぼ完形で出土し、255は周辺の包含層出土の土器とも接合を試みたが全体復元には至らなかった。段部4の包含層であるV-2層はST5の南西斜面側に堆積している埋土の可能性が高く、住居内に埋められていた可能性も考えられる。出土地点はSK33に隣接する。254は頸部から口縁部にかけて外方に立ち上がり、僅かに外反する。口縁部は外面に貼付口縁の名残を僅かに残し、頸部には四条一単位の櫛描直線文が2本巡る。底部は平底であり、底部から胴部の1/5の所で内面に段が生じる。全体的にナデ調整が施される。255の口縁部は大きく外反し端部に向けて肥厚する。端部はやや丸みを帯び、外面下端に刻目を施す。胎土にチャート砂粒を多く含み、色調が黄色を呈し、バーガ森北斜面遺跡出土の他の土器とは様相が異なる。SK33出土の240の甕と同じ胎土である。

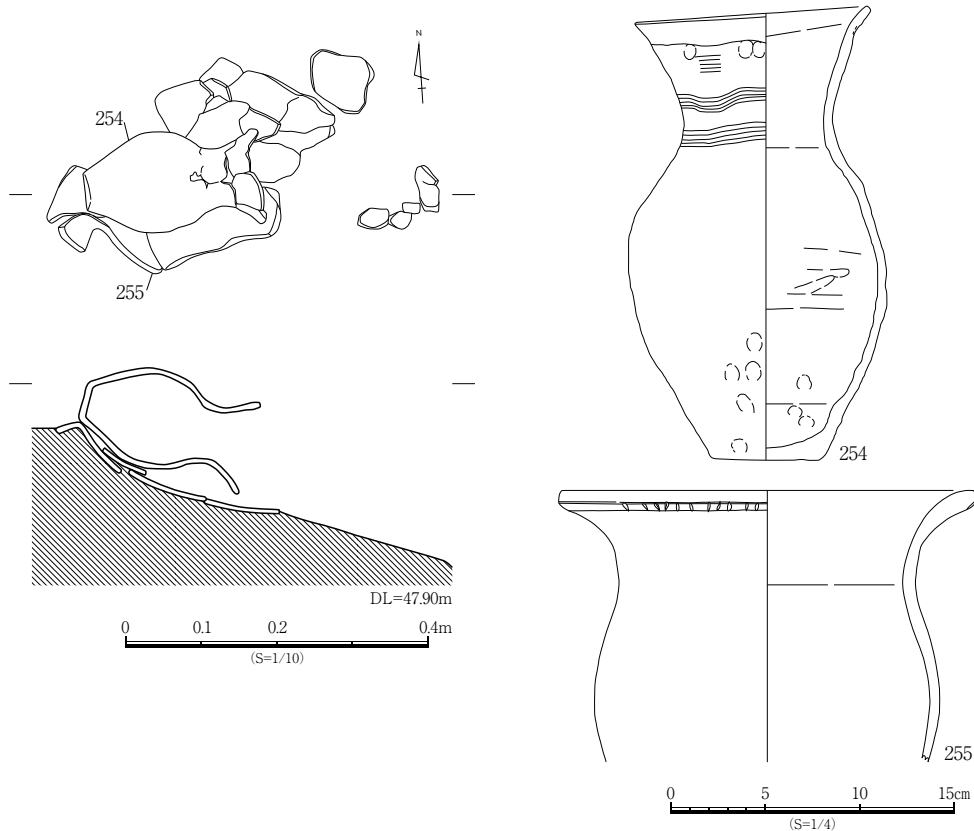


図3-60 段部4包含層遺物出土状態図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

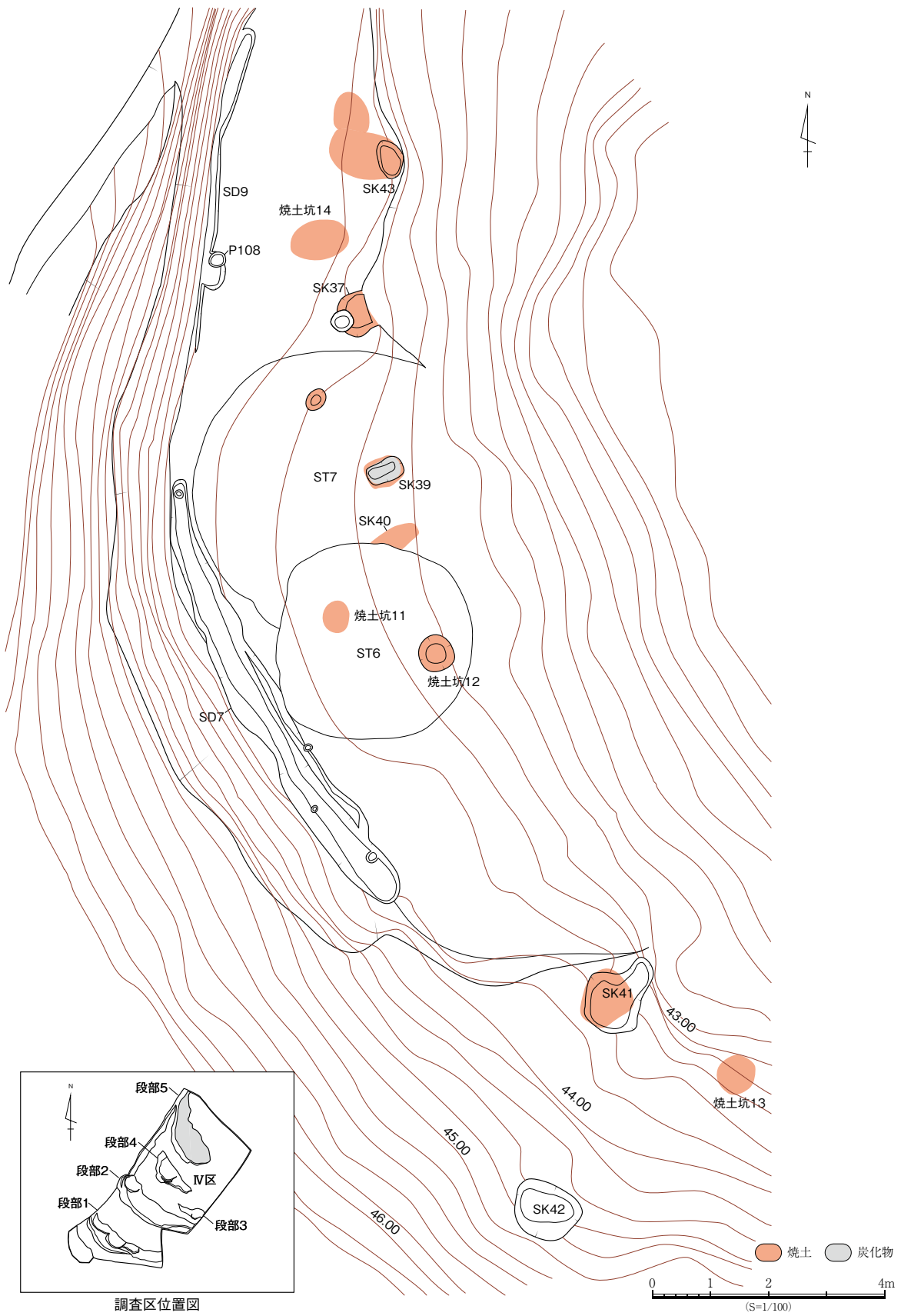


図3-61 段部5焼土坑配置図

段部5

IV区標高43.4mの斜面部に開けた70㎡を測る平場である。段部4との比高差は3.5mを測る。現状の斜面地形を掘り下げて確認された平場であり、土坑7基(焼土坑含む)、ピット10個、溝2条、竪穴建物跡2棟を検出した。

①土坑(焼土坑)

段部5では焼土及び炭化物を含む土坑が検出面上面で集中して検出された。焼土坑群として以下にまとめる。

SK37(図3-62)

段部5の平場ST7に隣接して検出した。土坑の東側は斜面に開口し、西側はピットに切られる。平面プランは楕円形状を呈するものと思われ、長径0.76m、短径0.52mを検出した。断面形は浅い皿状を呈し、最深部で0.15mを測る。上層に炭化物層が2.0~5.0cmほど堆積しており、下層に焼土が10.0cm堆積している。床面には被熱痕跡は認められない。

SK39(図3-62)

ST7検出面上面で検出した。平面プランは楕円形で長径0.64m、短径0.39mを測る。断面形は舟底状を呈し、最深部で0.18mを測る。上面に炭化物層が2.0cm、下面に焼土が2.0cm堆積しており、焼土は土坑の周囲まで広がっている。埋土は炭化物が混じった褐色粘土質シルトが堆積しており、弥生土器片が1点出土している。床面及び壁面には被熱痕跡は認められない。

SK41(図3-63)

段部5の南部斜面地で検出した不整形な土坑である。検出面で土坑プランの西寄りでは焼土の広がりを見出した。土坑の規模は長径1.44m、短径1.18mを測り、土坑の西側は楕円形状で、北東側に突出した形状である。土坑の埋土は上層に厚さ2.0cmの焼土の堆積が認められ、炭化物を含む暗赤褐色~褐色シルト、炭化物をブロック状に含む黄褐色シルトが堆積している。床面及び壁面には被熱痕跡は認められない。出土遺物は埋土3層中から弥生土器片が14点出土した。256は貼付口縁の高杯であり、口縁部の上下端部を外方に摘みナデ調整を施す。上端は面を成し、外面中央部が凹む。胎土には石英を含み、色調は橙色を呈する。

焼土坑12(図3-64)

ST6検出面上面で検出した。平面プランは円形で直径0.61~0.63mを測る。断面形は浅い逆台形状を呈し、最深部で0.12mを測る。土坑埋土は焼土のみで床面及び壁面には被熱痕跡は認められない。

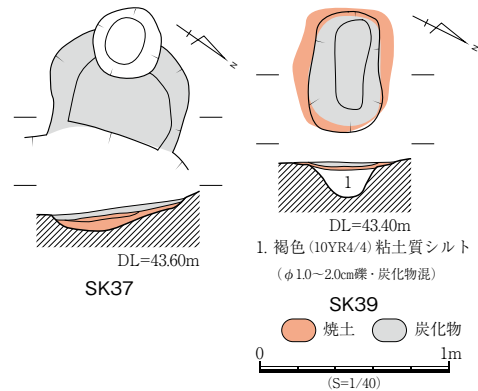


図3-62 段部5 SK37・39遺構図

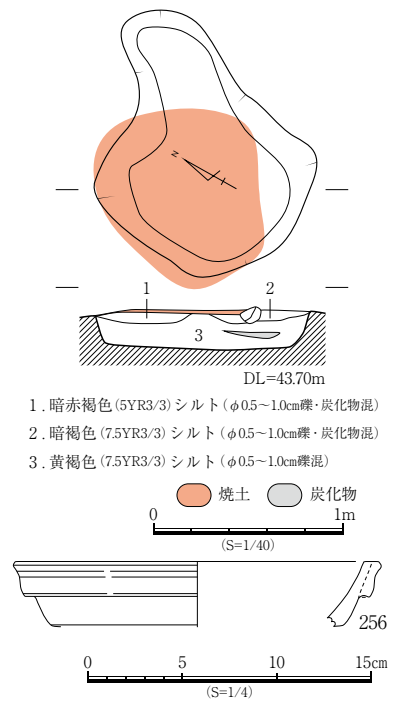


図3-63 段部5 SK41遺構図・遺物実測図

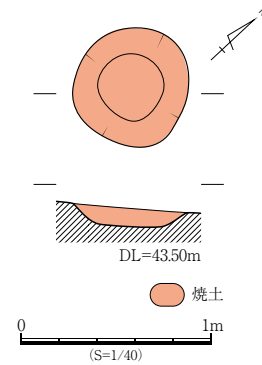


図3-64 段部5 焼土坑12遺構図

3. 検出遺構と出土遺物

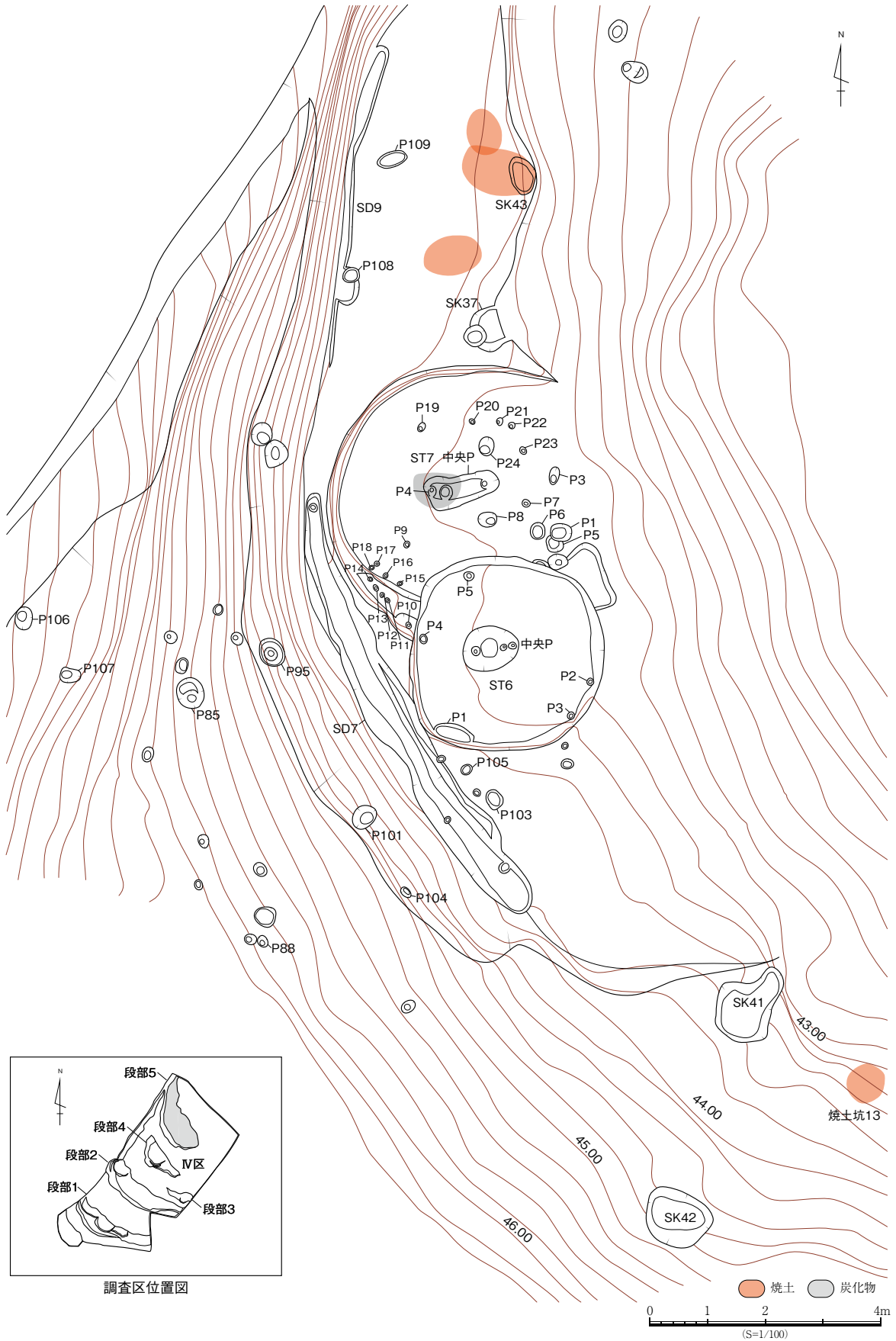


図3-65 段部5遺構配置図

② 竪穴建物跡

ST6 (図3-66)

段部5の中央部で検出した。平面プランは隅丸方形に近い円形であり、長径3.5m、短径3.5m、深さ0.23~0.55mを測る。床面中央部で中央ピットを検出した。中央ピットは楕円形を呈し、長径0.77m、短径0.33m、深さ0.34mを測る。長軸方向はN-82°-Wを指す。埋土は1層がオリーブ褐色粘土質シルトで、2層が褐色粘土質シルトである。床面には炭化物層が厚さ2.0~4.0cmで堆積しており、建物跡床面北東に向かって炭化物が掻き出されている。中央ピットの床面で直径15.0~20.0cm大の小ピットを西側面で1個、東側面で2個並んで検出した。また、支柱穴と考えられるピットは5個あり、建物跡の西側と東側に直径13.0~18.0cmの小ピットがP2・3とP4・5二個ずつ壁際に並んで検

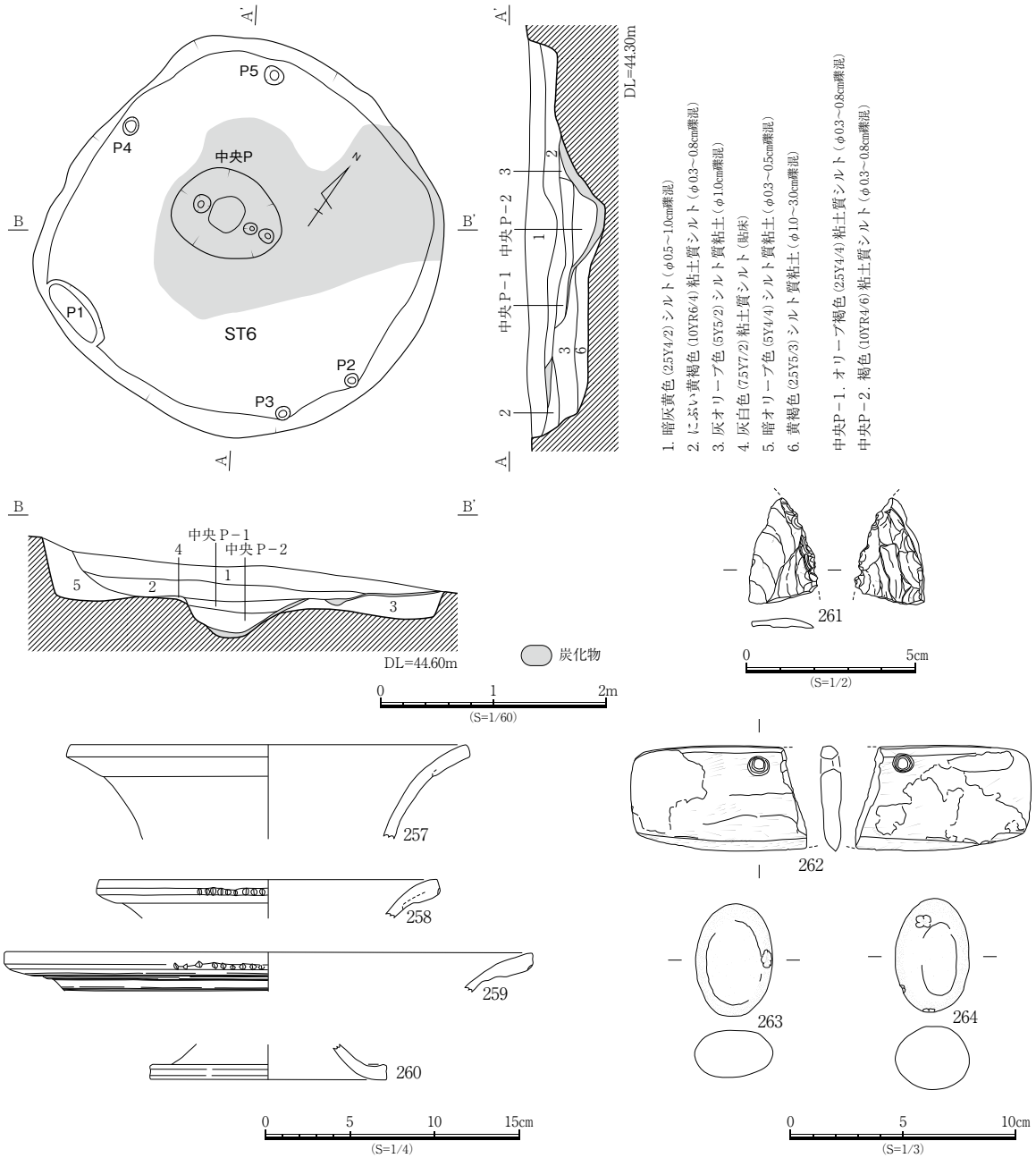


図3-66 段部5 ST6遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

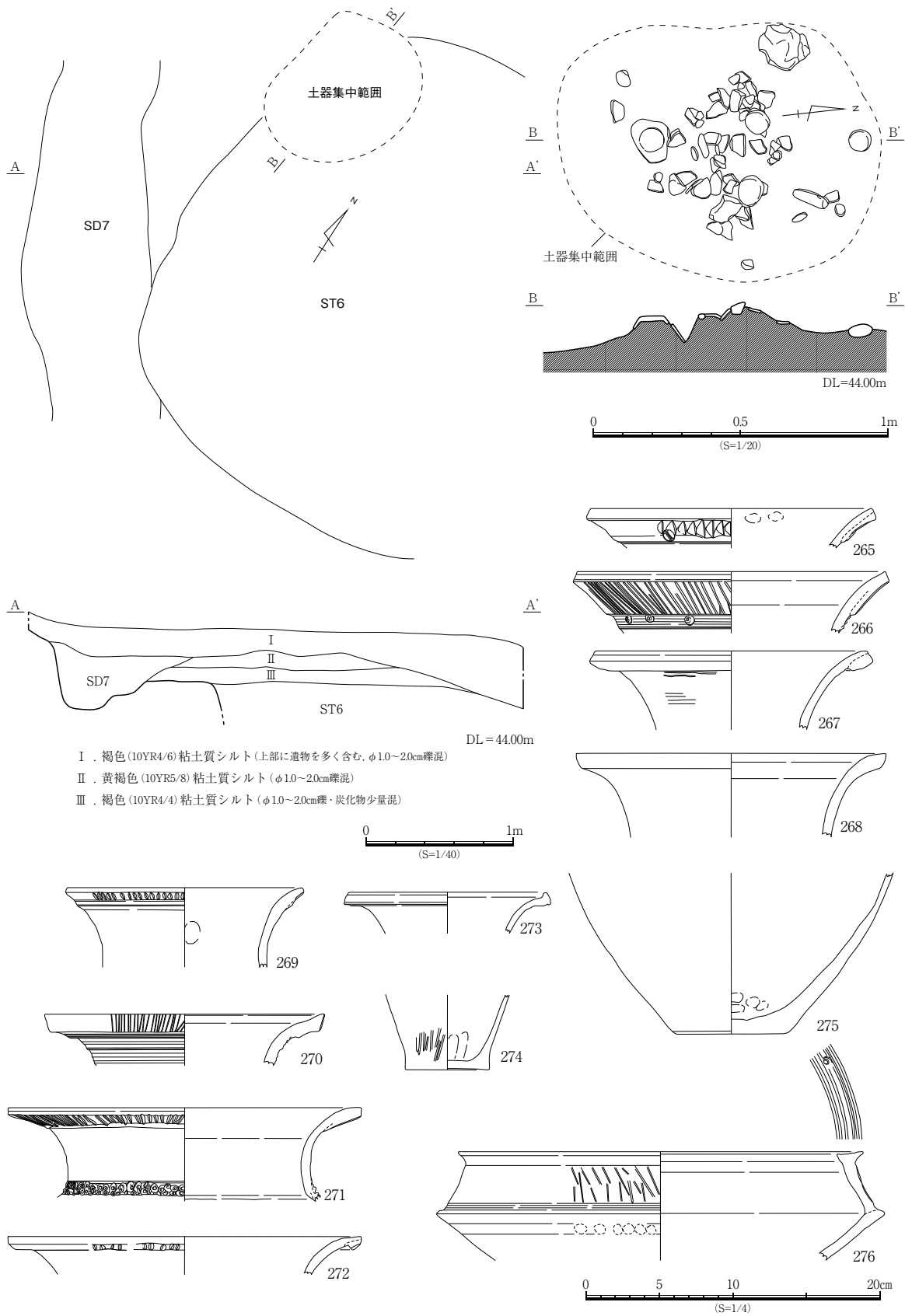


図3-67 段部5土器集中遺構図・遺物実測図

出した。また、南壁際には長径 0.71m、短径 0.29m を測る楕円形状の細長い P1 を検出した。埋土は 1 層が 0.5～1.0cm 大の礫が混じった暗灰黄色シルト、2 層がにぶい黄褐色粘土質シルトである。床面は灰オリーブ色シルト質粘土(3 層)で、一部貼床に灰白色粘土質シルト(4 層)が認められる。埋土 1～2 層からは弥生土器片 44 点、石包丁 1 点、石鏃 1 点、投弾 8 点が出土した。257 は壺の口縁部片であり、貼付口縁で端部はナデ調整が施され面を成す。258・259 は甕の口縁部片であり、258 は断面四角形の貼付口縁であり、外面端部下端に刻目を施す。259 の口縁部は大きく外反する。端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。外面端部下端に刻目を施し、口縁直下に微隆起帯が巡る。ナデ調整が施される。260 は高杯の脚部片であり、裾端部は外方に開き内面が接地する。端部外面は垂直な面を成し、中央部が凹線状に凹む。261 はサヌカイト製のスクレイパーの断片であり、一側辺をハツリ刃部に加工する。262 は頁岩製の磨製石包丁である。直背直刃タイプで長形状を呈する。刃部は表裏面から丁寧な研磨が施され両刃状に仕上げる。背面は丁寧な面取りがされる。背面側に二穴穿つ。263・264 は長径 5.0～5.1cm、短径 3.3～3.4cm を測る卵形をした中型の投弾である。263 は砂岩で 264 は細粒花崗岩である。

ST6 関連土器集中(図3-67・68)

ST6 の北西壁際上面で検出した土器集中である。掘方など明確なプランは検出されなかったが、段部 5 に堆積している包含層(I 層)上面で土器と石器が集中して出土した。遺物についてはユニット 4 として取り上げを行った。一括性の高い遺物群である。ST6 との関連も考えられるため、ここで記載する。265～268 は壺である。265 の口縁部は断面長方形の貼付口縁であり、端部はナデ調整により面を成す。外面は縦長の細い刻目を施し、その刻目よりも幅の広いヘラ状工具で斜状に刻目を施す。口縁部外面の貼付帯の下部に円形の粘土を貼付し、中央部を摘み隆起させた粒状浮文を配する。266 の口縁部は断面長方形の貼付口縁であり、端部を上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。口縁部外面に縦長の刻目を施し、口縁部直下に櫛描直線文と微隆起帯を巡らしその上に円形浮文を配する。267 は断面四角形の貼付口縁であり、口縁端部はナデ調整が施され面を成す。頸部に櫛描直線文が僅かに認められる。268 は素口縁であり、口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。269～273 は甕である。269 の口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。口縁部外面に刻目を施し、直下に微隆起帯を巡らす。270 の口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し、尖り気味に仕上げ、外面に垂直な面を成す。外面に縦方向の刻目を施し、頸部は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らす。271 は断面長方形の

貼付口縁であり、外面に上下二段刻目が施される。頸部と胴部の境目に円形の粘土を連続して貼付し、その上から竹管刺突を施した浮文が配される。272 の口縁部は大きく外反し、口縁端部は玉縁状を呈する。外面に刻目を施す。273 は口縁端部を上方に摘み拡張する。口縁部の一部にタール痕が認められる。凹

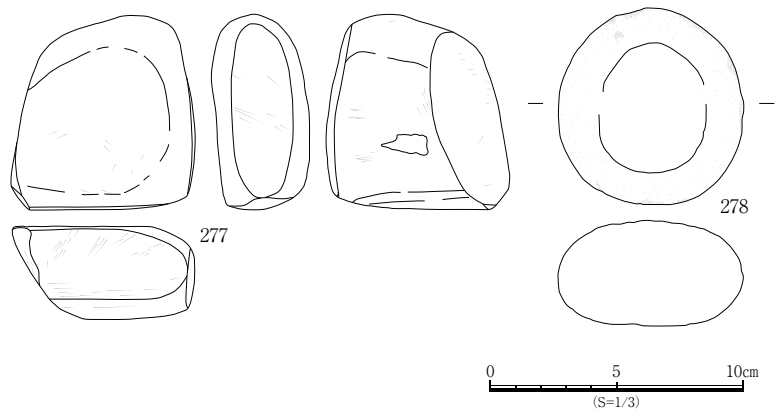


図3-68 段部5土器集中遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

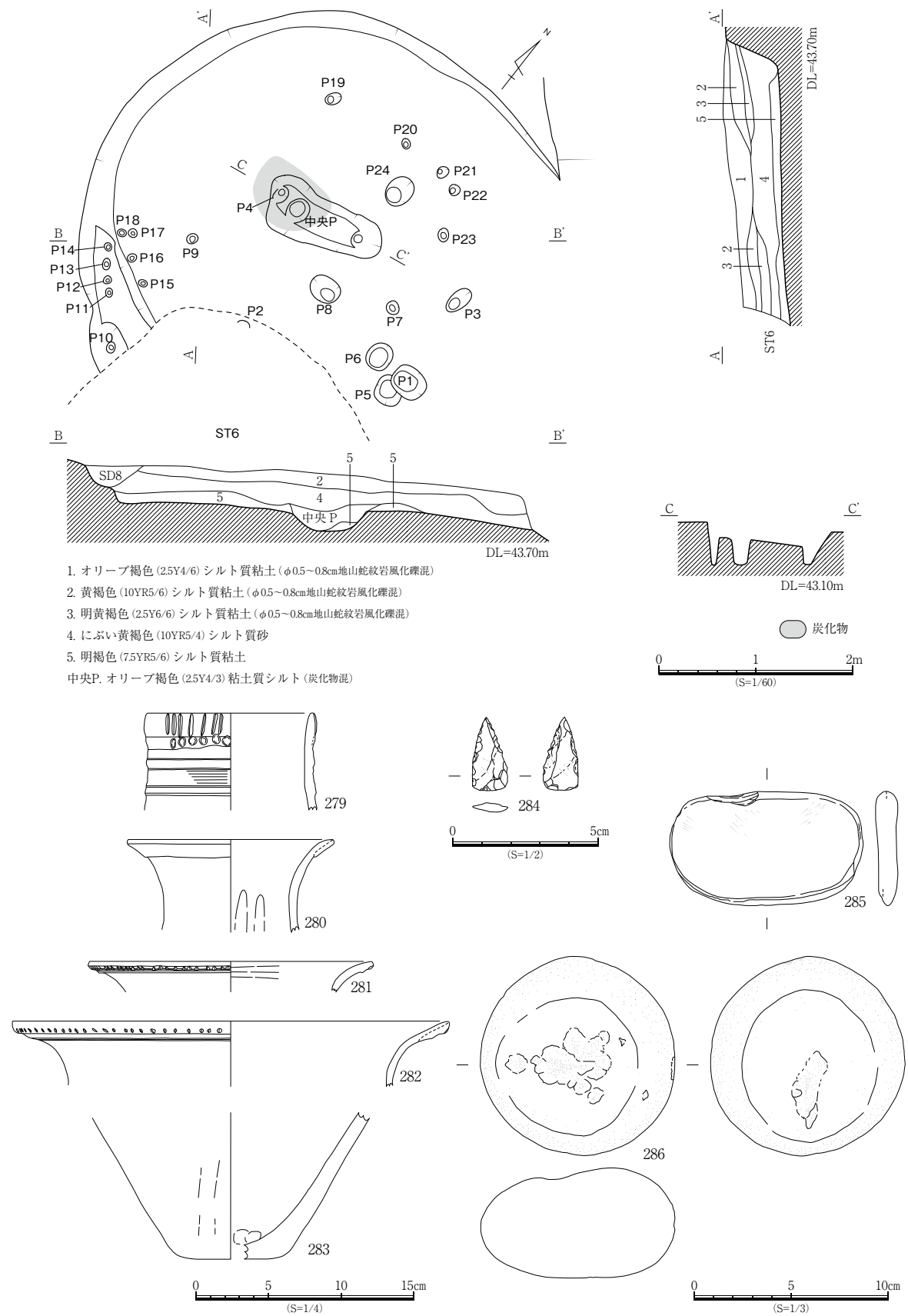


図3-69 段部5 ST7 遺構図・遺物実測図

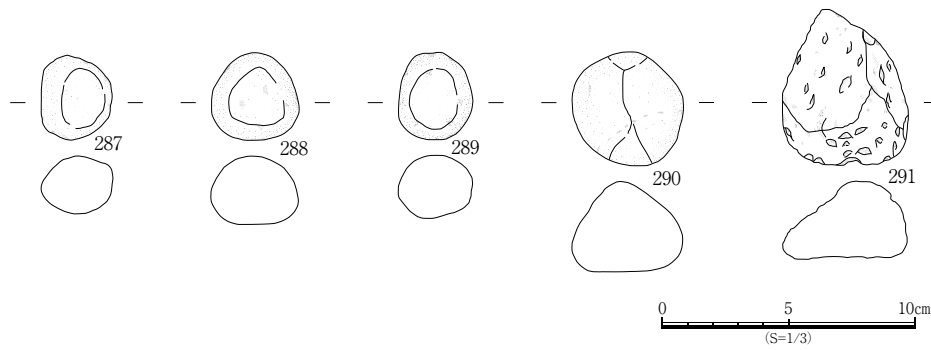


図3-70 段部5 ST7遺物実測図

線文系であり、胎土は砂粒が少なく色調が橙色である。274・275は底部片であり、274は平底で外面へラミガキ、内面はナデ調整が施され、器壁が薄い。275は平底から胴部にかけて内湾して立ち上がる。器表面の摩耗が著しく調整は不明である。内底部には指頭圧痕が認められる。276は高杯で、口縁部は杯部中位の内側に接合し内傾させる。端部は内外に拡張し水平な面を持ち凹線文が施される。一部に竹管刺突が施される。口縁部外面は縦方向と斜状の二段刻目が施され、下位に凹線文が巡る。全体的にナデ調整が施される。胎土にはチャート砂粒が僅かに認められ、色調は橙色を呈する。277は流紋岩の砥石である、扁平で平らな両面及び両側面に擦痕が認められる。278は直径7.4～7.8cmを測る中型の扁平な投弾である。石質は細粒花崗岩である。

ST7 (図3-69・70)

段部5中央部で検出した。南部はST6に切られる。平面プランは円形で長径5m、短径5mを測り、東側は斜面に開口する。深さは検出面から0.35～0.62mを測る。床面中央部では楕円形の中央ピットを検出した。規模は長径1.28m、短径0.59m、深さ0.4mを測り、長軸方向はN-81°-Eを指す。中央ピットの長軸方向の床面両端、及び中央やや西寄りにピットが付く。断面では東側のピットが斜め、西側は垂直に掘込まれ、それぞれ底面の幅が狭い。床面では大小含めてピットを24個検出した。プラン南側はテラスを持ち、テラス面のP11～14、床面壁際にP15～18の直径9.0～12.0cmの小ピットが並ぶ。また、北側はP1・3、P19～23が中央ピットを中心に並び多支柱穴の建物跡になるものと思われる。プラン南部はST6に切られて不明であるが、テラス部及び壁際の小ピット群の配置は段部4のST4と同様である。埋土は1～4層に分層され、5層は明褐色シルト質粘土で貼床である。埋土中からは弥生土器片147点、石鏃1点、投弾5点が出土した。279・280は壺であり、279の口縁部は直立する。外面に縦長の刻目を施し、直下に円形浮文を配する。頸部は櫛描直線文が施される。280の口縁部は外反する。断面楕円形の貼付口縁であり、ナデ調整が施される。281・282は甕である。281は口縁端部を肥厚させ、外面端部下端に刻目を施し、直下に微隆起帯を施す。器壁が薄い。282は口径が大きく30.0cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。口縁外面下端に刻目を施し、直下に微隆起帯を巡らす。283は底部片であり、ナデ調整を施す。284はサヌカイト製の打製石鏃であり、平基式である。285は石包丁の未製品と思われる。緑色系の結晶片岩であり、裏面は未調整、主面側は一部に研磨痕が認められる。286は叩石で中央部が敲打により凹む。石質は細粒花崗岩である。287～290は直径3.4～4.5cmを測る球形をした小型の投弾である。全て細粒花崗岩である。291は軽石である。

3. 検出遺構と出土遺物

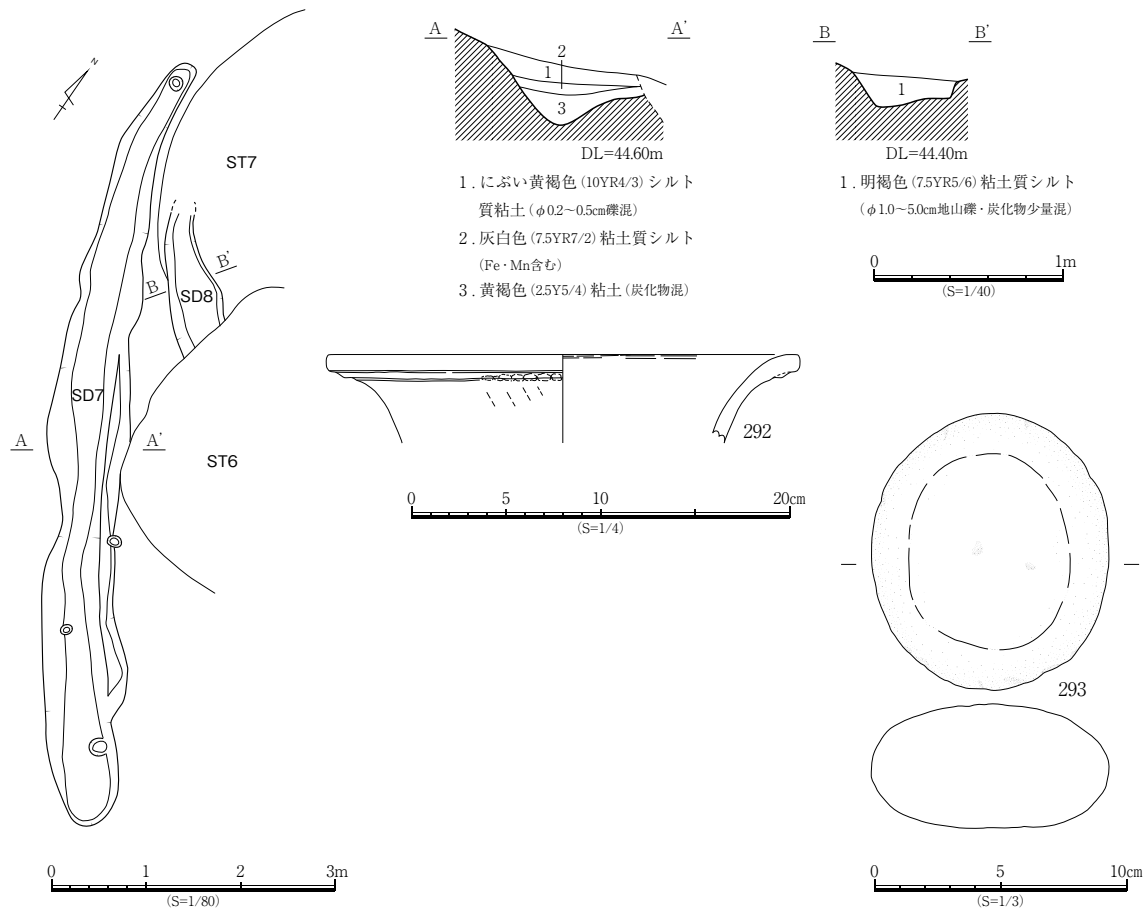


図3-71 段部5 SD7・8遺構図・遺物実測図

③溝

SD7・8 (図3-71)

段部5の南西斜面際、ST6・7の南縁辺で検出した溝である。SD7は長さ8.16m、幅0.28~0.88m、深さ0.1~0.43mを測る。ST6の南西側は一部テラス状に段を持つ。溝の断面形は舟底形を呈し、埋土は3層に分層される。下層の3層は炭化物を含む黄褐色粘土が堆積している。埋土からは弥生土器片1点、投弾1点出土した。292は甕であり、口径が24.8cmと大きい。口縁部は外反し、端部に向かって肥厚する。端部はナデ調整を施し外側に面を成す。外面口縁下に一条の微隆起帯が巡る。

SD8はST7上面で検出した溝である。ST7の掘方のラインに沿ってプランを検出したが、全体的なプランの検出には至らなかった。検出長は1.44m、幅は0.28~0.56mで深さは0.2mを測る。断面形は浅い逆台形状を呈し、埋土は炭化物を少量含んだ明褐色粘土質シルトである。埋土から長径9.4~11.0cmを測る大型の投弾293が出土した。石質は細粒花崗岩である。検出面がSTの掘方よりも上であることからこれらの溝は段部成形時に掘込まれた雨水対策用の溝と思われる。

④ピット出土遺物

294はP95から出土した壺である。甕とも呼べる器形であるが胴部の張り具合と頸部の立ち上がり方からみてここでは壺として取り上げる。貼付口縁であり、口縁部外面に幅の広い粘土帯を貼付し、端部を摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。外面口縁下端に刻目を施し、頸部中位に櫛描直

線文を施す。頸部と胴部の境目には円形の粘土を貼付し刺突を施したドーナツ状の浮文を連続して配する。直下に櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らせ、その下に縦長の列点状の刻目を施す。295は打製石鏃の破片であり、P88から出土した。基部は欠損し全体的な形状は不明である。サヌカイト製である。

IV区包含層出土遺物

IV区の斜面地を含む各段部の包含層からは弥生土器片25,494点、石器類1,071点、鉄器類5点が出土した。弥生土器は壺・甕・鉢・高杯があり、石器は石鏃・石包丁・石斧・叩石・砥石・投弾の他、石器加工剥片、石器石材が出土している。鉄器は袋状鉄斧が出土した。出土遺物は斜面堆積の包含層から出土であり、面的な層位の把握が難しかったためここでは各段部の包含層出土遺物を器種ごとに分け一括して記述する。なお、弥生土器については壺と甕の形態の区別が付き難いものがあり、頸部が細く口径の開きが小さいものを壺とした。

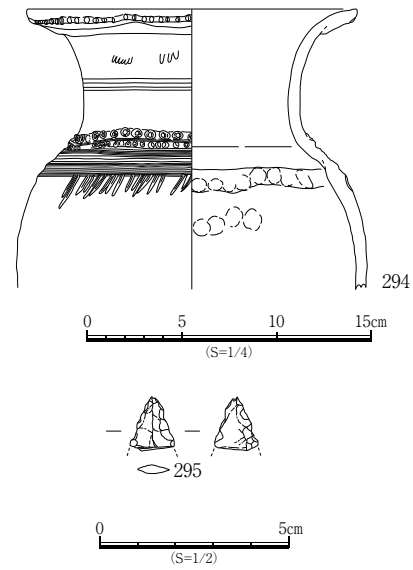


図3-72 段部5ピット遺物実測図

段部1包含層出土遺物

段部1からは弥生土器片3,173点、石器類103点が包含層Ⅱ・Ⅲ層から出土した。

壺(図3-73)

296～315は弥生土器壺である。296～302は細頸壺に分類される。口縁部は貼付口縁と素口縁のものともみられる。296は素口縁であり、口縁端部をナデ調整により水平な面を成す。外面は縦長の刻目を施し、頸部には五条の櫛描直線文帯が間隔をおいて巡らせ、口縁直下には粒状の浮文を貼付する。内面はナデ調整が施される。297は口縁端部が内傾する面を成し、刻目を施す。頸部は三条一単位の櫛描が深く施される。内面はナデ調整が施される。298は断面四角形の貼付口縁であり、頸部には四条の櫛描直線文帯が間隔をおいて巡る。299は素口縁であり、口縁端部は内傾する面を成す。外面口縁端部直下に粒状の浮文を配し、頸部中位に櫛描直線文を施す。頸部と胴部の境目には粒状浮文の一部と思われる貼付痕が認められる。300の口縁部は内傾する面を成し、外面口縁端部直下に櫛描直線文が施され、その上に粒状浮文が間隔をおいて配される。301・302は296～300より法量大きいタイプであり、301は断面楕円形の貼付口縁で口縁端部は丸く収める。外面に縦長の幅の細い刻目を施し、刻目が途中で重なる。302は断面長方形の貼付口縁であり、口縁端部は水平な面を成す。口縁部外面に刻目を施し、直下に粒状浮文を配する。頸部には櫛描直線文が施される。303～306はさらに法量の大きい壺の口縁部である。303は断面長方形の貼付口縁であり、外面に縦長の幅の狭い刻目を施す。外面の口縁部直下の貼付帯接合部に指頭圧痕が連続する。304も断面長方形の貼付口縁であり、外面に縦長の刻目、下端に粒状浮文を貼付する。頸部は櫛描直線文と微隆起帯が巡る。305の口縁部は素口縁であり、端部は内傾する面を成す。外面は縦長の刻目が施され、下端に粒状浮文が配される。頸部は断面三角形の微隆起帯が三条施される。306は口縁端部を内側に摘みナデ調整を施し、内傾する面をつくる。外面は縦長の幅の細い刻目を施し、下端に粒状浮文を配する。頸部は櫛描直線

3. 検出遺構と出土遺物

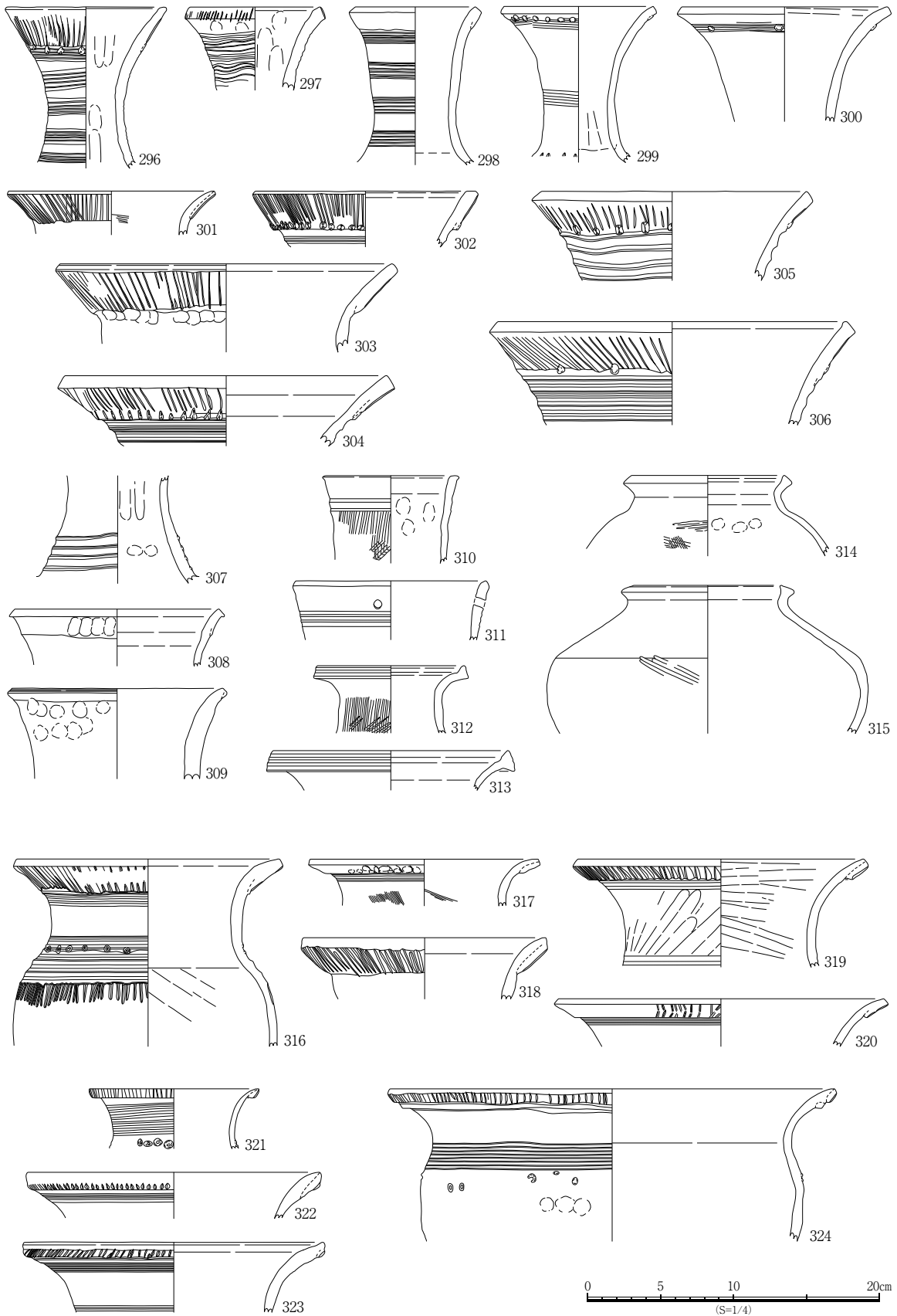


図3-73 段部1包含層遺物実測図1

文と微隆起帯を連続して巡らす。307は壺の頸部片であり、頸部下位に四条の微隆起帯を貼付する。308・309は貼付口縁であり、端部を外下方に摘みナデ調整を施し、やや拡張する。308は外面の貼付帯に指頭圧痕が連続する。309は口縁端部に一条の沈線が施される。310～315は凹線文系の壺である。310・311の口縁部は直立し310は外面に二条の沈線化した凹線を巡らせる。外面はハケ調整が施され、下位に斜状に刻目を施す。311は口縁部に穿孔が認められる。外面に三条の沈線文が巡る。312の口縁部は外反し、端部を上方に拡張する。口縁部外面に凹線文を巡らす。頸部外面はハケ調整が施され、斜状の刻目を施す。313は口縁端部を上下に拡張し外面に凹線文を巡らす。314・315は凹線文系の壺であり、肩の張る胴部から上半が窄まり口縁部が短く外反する。口縁端部は内側に拡張し、外面は面を成す。314の胴部外面はハケ調整、口縁部及び内面はナデ調整が施される。315は外面胴部上位にヘラミガキが認められる。310～315は胎土にチャート礫を含み、焼成色調は橙色～黄橙色を呈する。

甕(図3-73～75)

316～360は甕である。316～337は貼付口縁であり、口縁部の断面形により分類した。316～320は断面四角形及び長方形を呈し、口縁部の貼付帯に幅がある。316は胴径と口径の開きに差がなく、頸部が直立気味であり壺形にもみえる。口縁部外面には上下に二段に分かれた刻目を施す。口縁の外面貼付帯直下には櫛描直線文が巡り、頸部下位から胴部上半にかけては櫛描直線文帯と微隆起帯を連続して巡らせ、上位に円形の粘土に竹管刺突を施した浮文を配する。沈線文帯直下には幅広の工具により縦方向に撫でるように刻み棒状浮文風に仕上げる。内面は全体的にナデ調整が施される。317の口縁部は外面の貼付帯に指頭圧痕が連続し、間が圧痕により隆起する。頸部の一部にハケ調整が認められる。318は口縁部の貼付が他に比べ分厚い。外面に縦長の刻目が施される。319は口縁部外面の刻目が右から左方向に斜めに刻む。貼付帯直下に幅の狭い櫛描直線文が巡る。頸部下位には二条の沈線文が施される。外面は指頭によるナデ調整、内面はヘラ状工具によるナデ調整が施される。320の口縁部の刻目は上下二段に刻まれる。外面貼付帯直下に櫛描直線文が巡る。321～324は口縁部の断面形が三角形もしくは玉縁状に肥厚させた貼付口縁である。321は頸部から口縁部は短く外反する。口縁端部は外面に縦長の刻目を施し、頸部には櫛描直線文が巡る。頸部下位には円形の粘土に刺突を施したドーナツ状の浮文が配される。322は玉縁状に肥厚し、丸みを帯びた突端に刻目を施す。直下に微隆起帯と櫛描直線文が巡る。323は口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し、尖り気味に仕上げる。口縁部下端に刻目を施し、直下に沈線を巡らす。沈線と櫛描直線文帯は間隔が空き、突帯状を呈する。324は法量の大きい甕である。口縁部は玉縁状に肥厚し、外面に刻目を施す。直下に断面三角形の微隆起帯を巡らし、頸部下半に櫛描直線文、上胴部には円形の粘土に刺突を施したドーナツ状の浮文が配される。325～331は口縁部の断面形が台形状を呈する貼付口縁である。口縁端部を尖り気味に仕上げ、外面端部下端に刻目を施し、口縁外面の貼付帯下端に微隆起帯を巡らす。口縁部直下には櫛描直線文が施される。327は櫛描直線文を強く施す事により、微隆起帯をつくる。325～331の胎土の色調は黒及び灰色を呈し、チャート・石英粒を多く含む。332・333は断面楕円形を呈する貼付口縁であり、端部が丸みを帯びる。332は口縁部の貼付帯がやや下に認められ、さらに端部に粘土帯を貼付し肥厚させる。口縁部下端に刻目を施す。333は貼付帯外面に縦長の幅の狭い刻目を施す。334～337は口縁部の断面系が他のタイプに当てはまらないものである。334・335口縁部の開き方が他に比べ狭い。334は口縁外面に粘土帯を貼付し、端部を下方に拡張し内傾する面を持つ。

3. 検出遺構と出土遺物

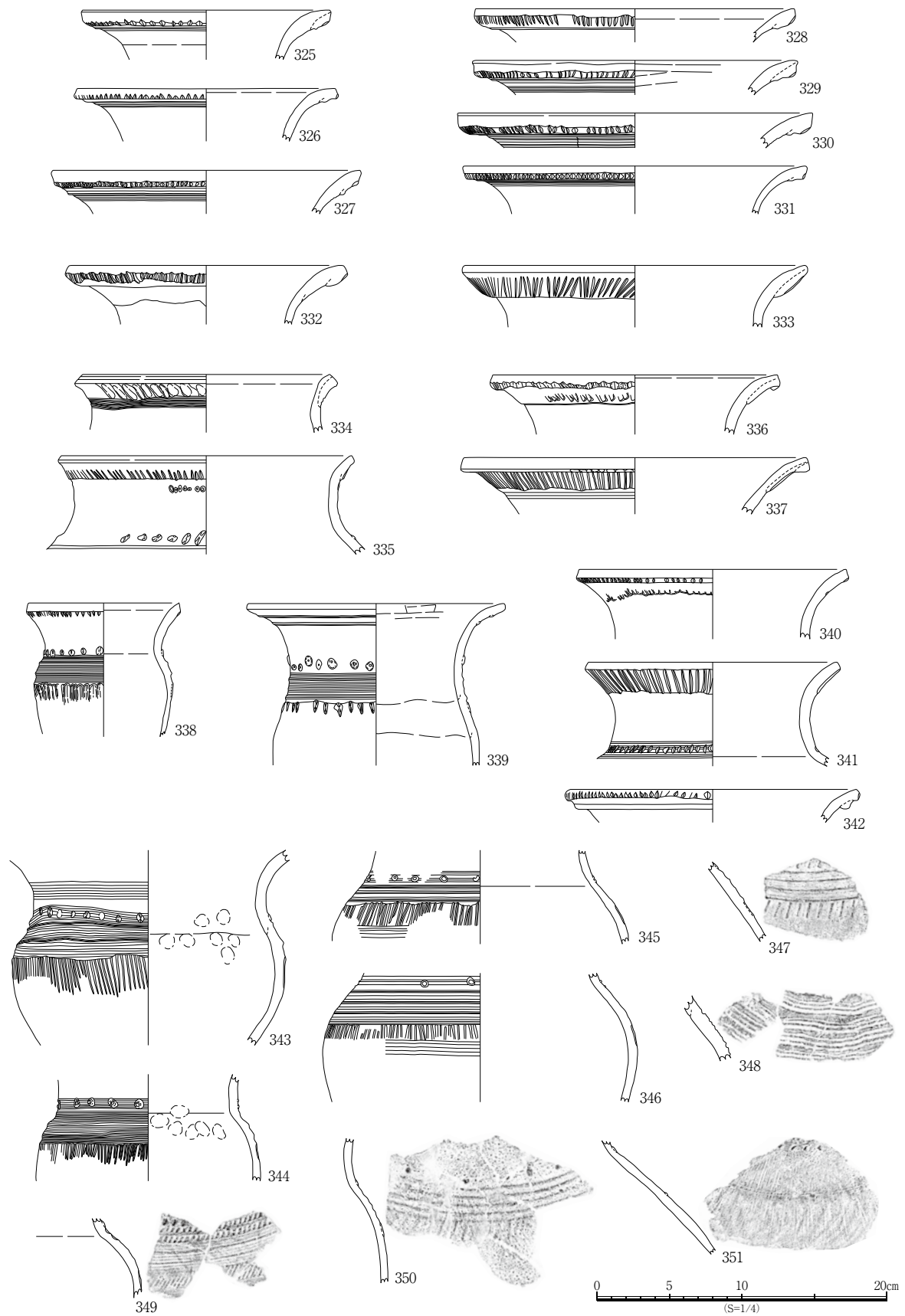


図3-74 段部1包含層遺物実測図2

口縁部の貼付帯外面は指頭圧痕が連続する。335は貼付帯が薄く端部はナデ調整が施され面を成す。外面の口縁部貼付帯下半に刻目を施し、貼付帯の直下に刺突文が施される。頸部と胴部の境目に粒状浮文を配し、その下に櫛描直線文を施す。336は口縁端部を下方に摘みナデ調整を施す。下端に刻目を施し、口縁部の貼付帯は指頭圧痕が連続する。337は口縁端部を下方に摘みナデ調整を施し断面三角形状に成形する。口縁部の貼付帯は縦長の刻目が施され、直下には櫛描直線文が施される。338～342は口縁部に粘土帯を貼付しない甕である。338は小型の甕であり、口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。外面の端部下端に刻目を施し、上胴部は粒状浮文を配しその下に浅い櫛描直線文と微隆起帯を連続させて巡らし、垂下する棒状浮文を配する。339は細身の胴部から口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸く仕上げ、外面に二条の微隆起帯が巡る。頸部には円形の粘土に刺突を施した浮文が配され、上胴部には櫛描直線文と微隆起帯を連続させその下に棒状浮文を配する。外面の一部に赤化粧土が施される。340は口縁端部を尖り気味に仕上げ、外面下端に刻目を施す。口縁部下には右から左方向に押し引きした刺突文が施される。341は外面に刻目を施す。頸部下位に櫛描直線文の上に列点文状に刻目を施す。342は外面口縁端部直下に断面三角形の微隆起帯が付く。口縁端部下端には刻目が施される。343～351は甕の胴部片である。343は櫛描直線文を施すことにより、沈線文帯間を隆起させ微隆起帯を造る。内面の頸部と胴部の接合部が顕著であり、明瞭な段を残す。胴部外面には櫛描直線文帯の上に粒状浮文を配する。また、櫛描直線文帯の下は縦長の刻目を施す。344も胴部と頸部の境目に明瞭な段が生じ、外面に櫛描直線文を施し沈線文帯間を隆起させ微隆起帯を造る。その上に円形の粘土に刺突を施した浮文が配される。櫛描直線文帯の下は縦長の刻目を施す。345・346は膨らみのある胴部から頸部に向けて窄まる。外面上胴部には櫛描直線文帯と微隆起帯を連続させて巡らし、その上に円形の粘土に刺突を施した浮文が配される。櫛描直線文帯の下は縦長の刻目を施し、さらにその下に横方向の櫛描沈線を巡らす。347は粒状浮文、微隆起帯、棒状浮文が外面上胴部に配される。348は櫛描直線文が上胴部に配される。349は上から粒状浮文、二段の刻目帯、櫛描直線文帯と微隆起帯、斜状の長い刻目、横方向の櫛描直線文が外面上胴部に施される。350は小さな粒状浮文と五条の微隆起帯、その下に斜状の棒状浮文を配する。351は頸部と胴部の境目にハケ目の様な櫛描直線文を巡らし、その上に円形の粘土に竹管刺突を施した浮文を配する。胴部は縦方向のハケ調整が施され、中位に二条の沈線が巡る。352～356は外面無文の甕である。352は胴部と頸部の境目に段を有し、頸部から口縁部は緩やかに外反する。口縁部は断面四角形の貼付口縁であり、ナデ調整が施される。353の口縁部は断面楕円形の貼付口縁で端部は丸みを帯びる。口縁部の貼付帯には指頭圧痕が連続する。354は胴部から口縁部にかけて緩やかに外反し、端部を外側に摘みナデ調整を施す。355は丸みのある胴部から頸部にかけて窄まり、頸部は直立し、口縁部は外反する。頸部内面に粘土帯接合痕が認められる。356の口縁端部は上方に尖り気味に仕上げ、外側に面を成す。ナデ調整が施される。357～360は素口縁の甕口縁部である。357は「く」の字状に外反し、端部はナデ調整により面を成し、端面中央が沈線状に凹む。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整が施される。358の口縁端部はナデ調整が施され面を成し、外面に微隆起帯が巡る。359の口縁部は短く外反し、端部を上方に摘みナデ調整が施され面を成す。端面は沈線状に凹む。360の口縁部は上方に拡張し、外面に凹線文を巡らす。端部内面も沈線状に凹む。361～368は底部片である。全て平底であり、底部から段を持って胴部に立ち上がるタイプ(361～364)と、底部から外方に直線的に立ち上がるタイプ(365～368)がある。365の底部は他に比べ分厚く、壺の底部片と思われる。内底部の周縁に接

3. 検出遺構と出土遺物

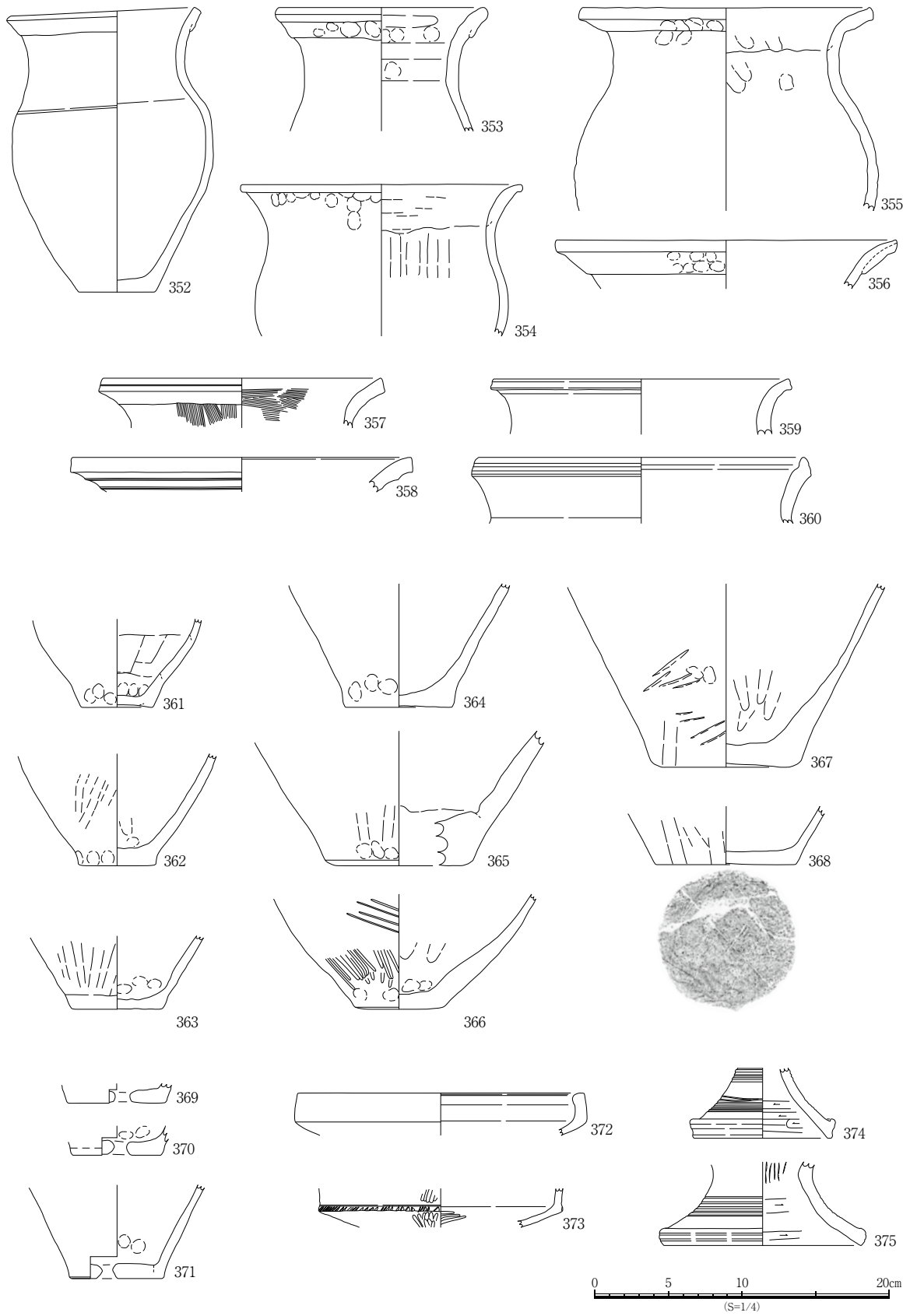


図3-75 段部1包含層遺物実測図3

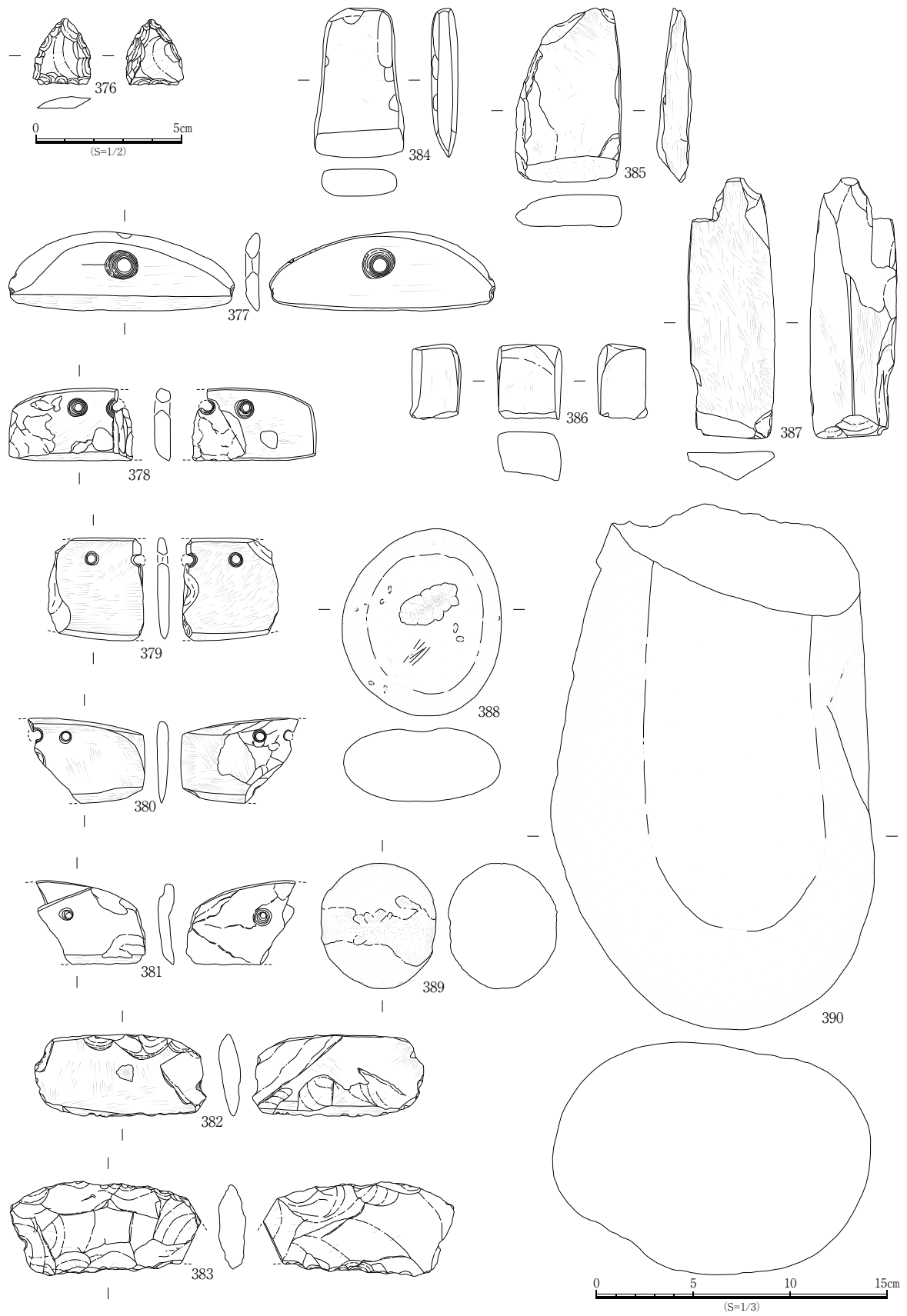


図3-76 段部1包含層遺物実測図4

3. 検出遺構と出土遺物

合痕が顕著である。基本的に内外面ともナデ調整が施され、361は内面、363・367は外面にヘラ状工具によるナデ調整痕が認められる。367は外面の一部にタタキ成形痕が残る。赤化粧土が認められる。368の外底部には木葉痕が認められる。369～371は甌の底部片である。いずれも焼成後穿孔である。369・370は土製紡錘車への転用品とも思われる。

高杯(図3-75)

372～375は高杯である。372は口縁部片であり、口縁端部は面を成す。ナデ調整が施される。373の口縁部は欠損する。杯部の屈曲部の凸部に刻目を施す。内外面にヘラミガキを施す。374・375は脚部である。374の外面は櫛描直線文が施され、裾端部は上下に拡張され凹線文が施される。375は五条の櫛描直線文、裾端面には沈線化した凹線文を施す。内面横方向のケズリが施される。

石器(図3-76)

376～390は石器である。376はサヌカイト製の打製石鏃である。平基式である。377～381は石包丁である。377は弧背直刃タイプであり、中央に一穴の紐孔を穿つ。背部、側辺部に沿って山形に磨き仕上げる。石質は結晶片岩である。378は弱直背直線刃タイプで片方が欠損する。背部、側辺部は丁寧に研磨され面取りされる。刃部は片刃に仕上げる。背部寄りに二穴の紐孔を穿つ。石質は頁岩である。379も直背直刃タイプになるものと思われる。両端が欠損する。刃部は両刃に仕上げ、背部も面取りされる。背部寄りに二穴の紐孔を穿つ。石質は頁岩である。380は弱直背弱凸刃タイプと思われる。刃部は両刃に仕上げ、側面は両面とも丁寧な研磨が施され薄く仕上げる。石質は頁岩製である。381は結晶片岩であり、片方及び裏面の一部が欠損する。弱直背弱凸刃タイプと思われ、刃部は片刃に仕上げる。紐孔は認められるが片方が欠損しており、一穴か二穴かは不明である。382は磨製石包丁の未製品である。主面側中央に紐孔を穿つための敲打痕が認められる。主面側は丁寧な研磨がなされており、裏面は自然面を残す。383は打製石包丁であり、一側辺に抉りが認められる。片方は一部が欠損しており、有抉か無抉かは不明である。石質は頁岩である。384・385は扁平片刃石斧であり、384は緑色玄武岩である。基部が細く、刃部に向けてバチ形を呈する。側縁部は丁寧な研磨が行われ、面取りされる。385は刃部及び裏面は未調整である。側縁部は研磨により面取りされる。石質は砂岩である。386は砂岩製の砥石であり、正方体を呈する。三面を砥石として使用している。387は粘板岩製の砥石である。断面形は三角形で三面とも使用している。388は叩石であり、中央部に敲打による凹みが認められる。石質は細粒花崗岩である。389は投弾であり、中央部は敲打により溝状に凹みをつける。390は台石と思われる。平らな面があり、一部に擦痕が認められる。石質は細粒花崗岩である。

段部2包含層出土遺物

段部2からは弥生土器片7,210点、石器類307点が包含層Ⅲ・Ⅳ層を中心に出土した。

壺(図3-77・78)

391～437は弥生土器壺である。中には甕とも呼べるものもあるが、胴部の張り、頸部と口縁の開き具合からここでは壺として分類した。391～398は頸部が細長いタイプの壺である。口縁部の形態及び文様・調整手法により細分される。391は細長い頸部から口縁部は外反する。口縁端部は外面に面を成し、下端に刻目を施す。頸部は単位の細やかな櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らし、下位には縦長の刻目を施し、直下に円形の粘土に刺突を施したドーナツ状の浮文を配する。胴部下半が

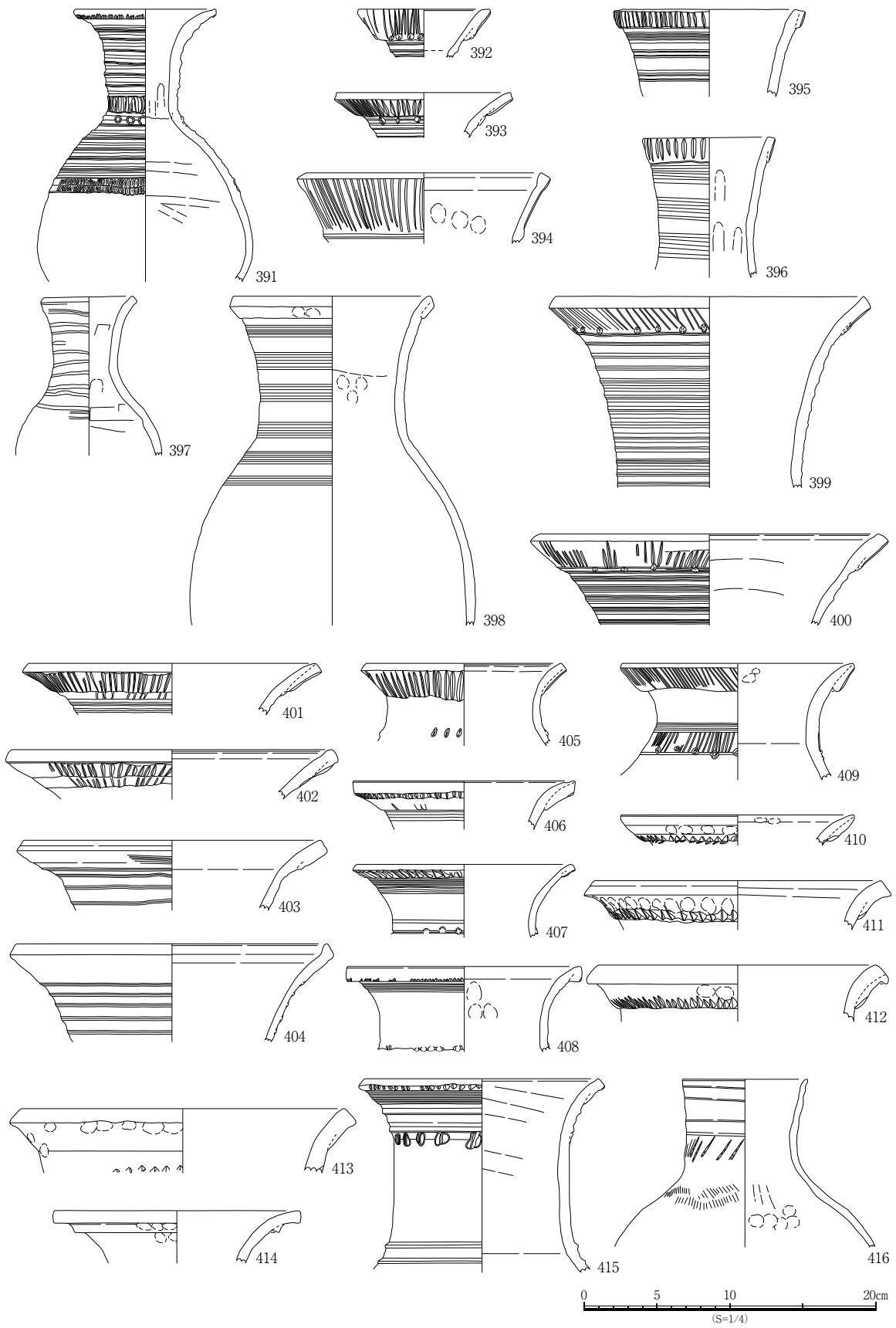


図3-77 段部2包含層遺物実測図1

3. 検出遺構と出土遺物

最大径になり、下膨れである。胴部上半には単位の細やかな櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らし、中位には上下二段の刻目を施す。392・393は断面長方形の貼付口縁であり、392の端部は水平な面を成し、393は内傾する面を成す。貼付帯外面には縦長の刻目が施され、392は下端、393は貼付帯直下に粒状浮文が配される。頸部は櫛描直線文と微隆起帯が巡る。394はやや法量が大きいタイプである。口縁部は直線的に外方に開く。口縁端部は内側に尖り気味に拡張し、ナデ調整により内傾する面を成す。外面に縦長の刻目を施し、直下に微隆起帯を巡らす。395・396は直線的に外方に開く。口縁端部は四角形の貼付口縁であり、貼付帯外面に刻目を施す。頸部は数条の櫛描直線文が単位ごとに巡る。397は素口縁であり、口縁端部は内傾する面を成す。外面はヘラ描き沈線を巡らす。内面胴部はヘラケズリ、頸部はナデ調整が施される。398は395・396と同じタイプで法量が大きい。口縁端部は四角形の貼付口縁であり、貼付帯外面に指頭圧痕を施す。頸部は数条の櫛描直線文が単位ごとに巡る。399～404は頸部が長い形態の壺である。399～403は断面長方形の貼付口縁であり、399～401は貼付帯外面に縦長の刻目を施し、貼付帯下端及び直下に粒状浮文を配する。頸部は櫛描直線文と微隆起帯を連続させて巡らす。402の口縁部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。外面は上下に二段刻目を施す。赤化粧土が施される。403の口縁部は貼付帯が他に比べ厚く、端部にナデ調整を施し、端面中央が沈線状に凹む。404は394と同じ形態であり、口縁端部を内側に摘み尖り気味に仕上げる。口縁部外面に刻目は無い。頸部は微隆起帯を連続して巡らす。405～408は頸部がやや直立気味に立ち上がるタイプである。胴部以下が残存していないため全体のプロポーションが不明で胴部の張り具合によっては甕に分類されるものもある。405は断面四角形の貼付口縁で端部を上方に摘みナデ調整を施す。外面は縦長の刻目を施す。頸部下端には粒状浮文が配される。406は口縁端部を外方に摘みナデ調整を施し、外側に垂直な面を造る。下端に刻目を施し、頸部には櫛描沈線が施される。407は貼付口縁で外面に幅の広い刻目が施される。頸部上位には櫛描沈線が巡り、下位にはヘラ描き沈線が施され円形浮文が施される。408は断面三角形の貼付口縁であり、外面に垂直な面を造り、下端の凸部に刻目を施す。口縁部直下に櫛描直線文が施される。頸部と胴部の境目に竹管刺突文が施される。409は断面楕円形状の貼付口縁であり、口縁端部は丸く収める。貼付帯外面に斜状に幅の狭い刻目を施す。頸部下半に櫛描直線文と垂下する刻目、浮文を配する。410は断面楕円形の貼付口縁であり、外面は二段のナデ調整が施され、下端に刻目が施される。411～413の口縁端部は下方に拡張し面を成す。外面は指頭圧痕が顕著であり、貼付帯下端に刻目を施す。413は貼付帯直下に刻目を施す。414は口縁部直下に断面三角形の微隆起帯を貼付する。415の頸部は直立して長く伸び、口縁端部は下方に摘み刻目を施す。口縁外面は幅の狭い浅い櫛描直線文が施され、直下に二条の微隆起帯を巡らし、その下に指で挟んだ粒状浮文を配する。頸部下位は二条の微隆起帯を巡らす。ナデ調整が施される。416～420は凹線文系の壺である。416は胎土に石英と雲母片を含む搬入品と思われる。頸部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。外面は凹線文とその下にハケか櫛による原体で斜状に刺突した刻目が施される。胴部外面はハケ状工具による縦方向の調整が上半に見られる。内面はナデ調整が施される。417は貼付口縁の壺である。口縁端部は欠損する。外面はナデ調整により凹線文が施され、直下に円形の粘土に刺突を施した浮文が配され、直下に微隆起帯を巡らす。418の頸部は直立し、口縁部は外反し端部は上方に拡張する。口縁部外面及び頸部上位に凹線文を巡らす。口縁部外面には三～四条の棒状浮文を貼付し刻目を施す。419の口縁部は外反し、端部は上方に摘みナデ調整を施す。

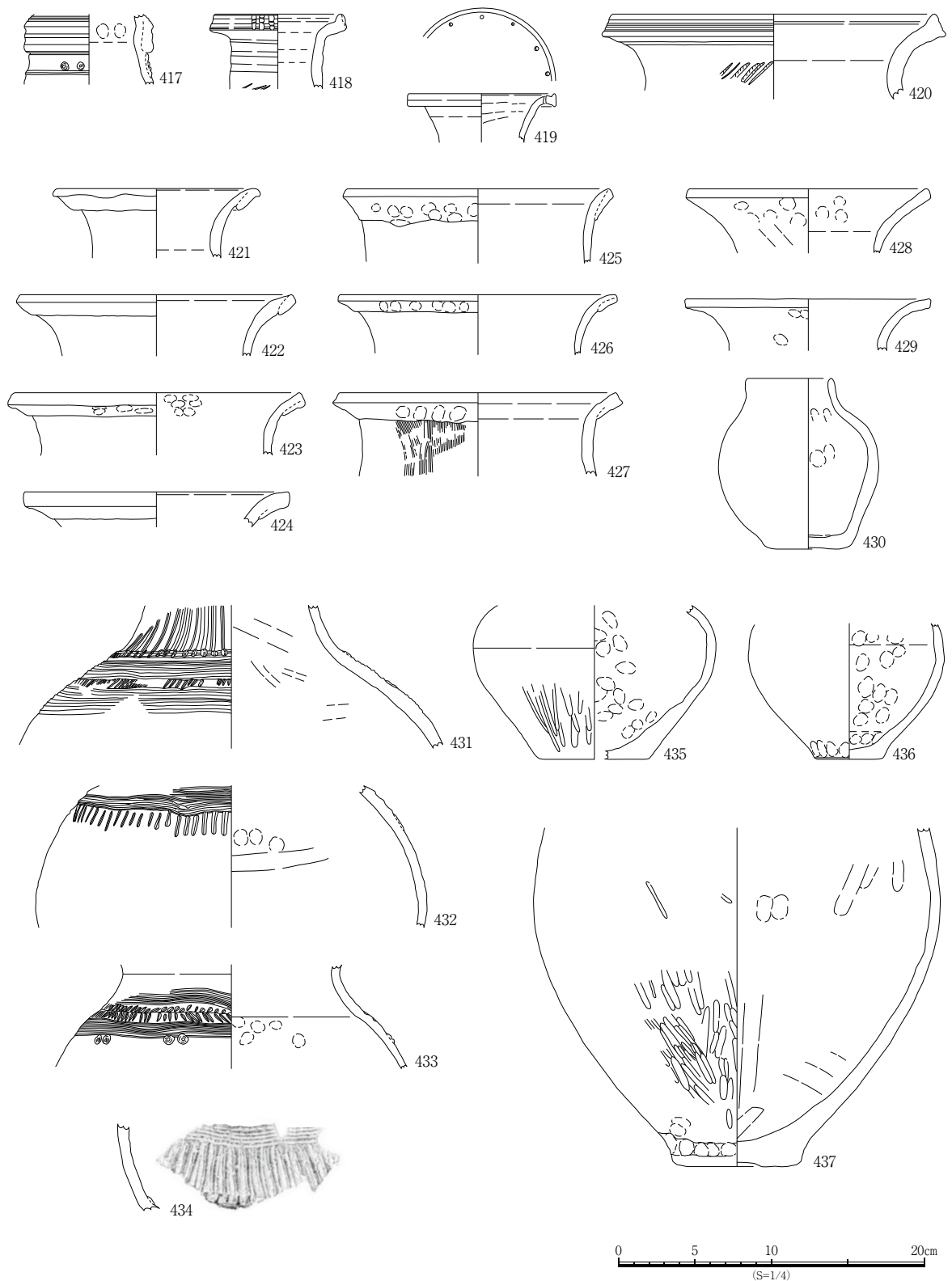


図3-78 段部2包含層遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

口縁部には直径2mmの円孔を並べて穿つ。420の口縁部は外反し、端部を上下に拡張する。外面に凹線文を施す。頸部にはハケか櫛による原体で斜状に刺突した刻目が施される。421～430は無文の壺である。421～427は貼付口縁であり、421は貼付口縁で端部は下方に摘み垂下する。ナデ調整が施される。422は器形的にみて甕に分類されるタイプかも知れない。口縁部外面に粘土帯を貼付し、四角く仕上げる。423・424は口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し、外面に面を成す。425の口縁部は僅かに外反し、口縁端部に面を成す。貼付帯外面に指頭圧痕が顕著である。426は器形的にみて甕に分類されるタイプかも知れない。ナデ調整が施される。427の口縁端部はナデ調整が施され面を成す。外面に指頭圧痕が顕著である。頸部は縦方向のハケ調整が施される。428・429は素口縁であり、429は外反の度合いがよい。430は短頸壺で口縁部は短く直立し、端部は丸く収める。ナデ調整が施される。431～434は壺の胴頸部片である。431は胴部から頸部が窄まり、頸部は縦方向にヘラ状工具で凹ませ、間を棒状浮文状に仕上げ直下に粒状浮文を配する。胴部は上半に櫛描直線文間に列点状の刻目を施す。432は幅の狭い櫛描直線文を浅く施し、施文間を微隆起帯状に仕上げる。直下に縦長の棒状浮文を配する。433は胴部と頸部の境目に、櫛描直線文間に矢羽根状に二段の刻目を施す。直下に円形の粘土に刺突を施したドーナツ状の浮文を2個ずつ並べて配する。434の頸部は櫛描直線文の直下に縦方向にヘラ状工具で凹ませ、間を微隆起帯状に仕上げる。435～437は壺の胴部片である。435は平底の底部から胴部は張りを持たせる。外面胴部下半にヘラミガキ、内面は指頭圧痕が顕著であり、胴部中位は張りを持たせるため器壁が薄い。436は底径の小さい平底から胴部は膨らみを持つ。内底部は指頭の押圧により凹む。437は平底であり、外底部中央が凹み、高台状を呈する。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。

甕(図3-79～82)

438～510は甕に分類する。438～474は貼付口縁であり、口縁部の形態で分類した。438～446は断面長方形から四角形の形態、447～460は三角形もしくは玉縁状を呈する。461～468は台形、469～472は断面が楕円形、473・474はその他の形態を示す。438は胴部の最大径よりも口径が大きく、口縁部に幅広の粘土帯を貼付し肥厚する。外面に縦長の刻目を施し頸部は櫛描直線文を巡らし、単位間が微隆起帯状に隆起する。頸部と胴部の境目には櫛描沈線の間斜状の刻目を施し、胴部にも同じ刻目を配する。439・440は口縁部の断面を四角く成形し外面に刻目を施し、439は貼付帯直下に櫛描直線文を施す。441は口縁端部の下端を摘み刻目を施す。貼付帯直下に櫛描直線文を施す。442・443は貼付帯が薄く外面に縦長の刻目を施す。444は他に比べ口径が大きく、法量の大きい甕の口縁部と思われる。外面に幅の広い粘土帯を貼付し肥厚する。外面に縦長の刻目を施す。445は外面に幅の狭い粘土帯を貼付し、四角く仕上げる。貼付帯下端を摘みナデ調整を施す事で中央部が凹み下端を微隆起帯状に仕上げる。貼付帯直下に櫛描直線文を施す。ナデ調整が施される。446は口縁端部が面を成す。無文である。447～449は口縁部の開き方が小さい。447の口縁端部は丸みを帯び、外面に縦長の刻目を施す。448は端部を上方に摘みナデ調整を施し、尖り気味に仕上げる。外面下端の凸部に刻目を施す。449は口縁端部を上方と外側に摘みナデ調整を施し、外面の下端に刻目を施す。450は下方に摘みナデ調整を施し垂直な面を造り下端に刻目を施す。直下には櫛描直線文を巡らす。451の口縁部は玉縁状に肥厚し、外面に刻目を施す。452の口縁端部は上方に摘みナデ調整により尖り気味に仕上げ、内面は凹む。外面は玉縁状を呈し、凸部下端に刻目を施す。貼付帯直下に櫛描直線文が施される。453も口縁端部を摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。外面は玉縁状を呈し、凸部下

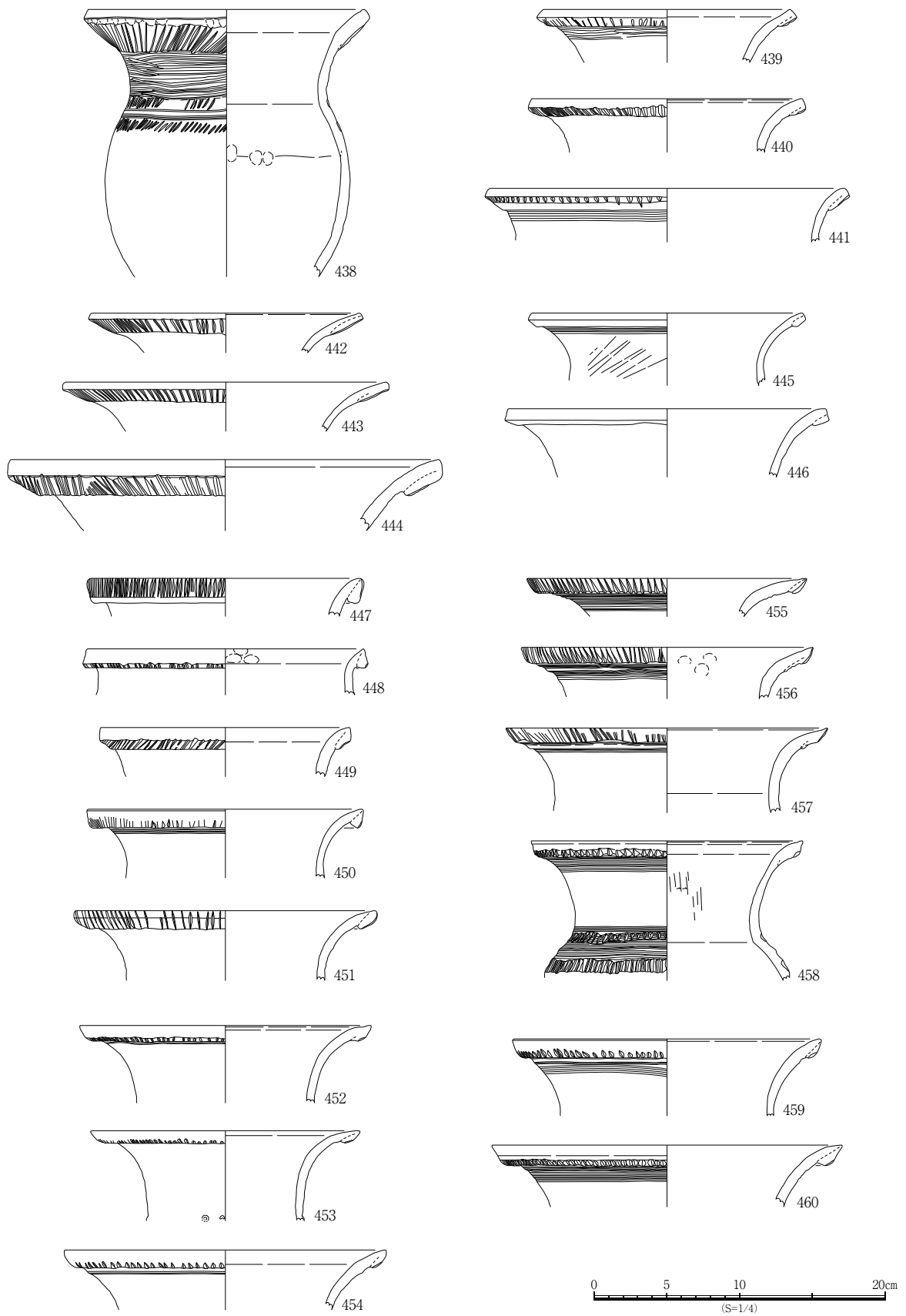


図3-79 段部2包含層遺物実測図3

3. 検出遺構と出土遺物

端に刻目を施す。頸部は下位に円形粘土に刺突を施した浮文が2個以上配される。454も口縁端部を摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。外面は玉縁状を呈し、凸部下端に刻目を施す。直下に微隆起帯を巡らす。455～458の口縁端部は摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。外面は小さな玉縁状を呈し、刻目を施す。貼付帯直下に櫛描直線文と微隆起帯を巡らす。458は口縁端部を摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、下端に刻目を施す。貼付帯直下に櫛描直線文を施した後、胴部上位には刻目を施す。頸部内面は縦方向のヘラケズリが認められる。459・460も口縁端部を摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、下端に刻目を施す。貼付帯直下に櫛描直線文が施される。461～468は口縁部の断面形が台形の貼付口縁であり、461は上方を摘みナデ調整を施し、外面の凸部に刻目を施す。頸部は無文で、上胴部は櫛描直線文と上位には円形の粘土に刺突を施した浮文が配される。胴部の櫛描直線文帯の下には列点状の刻目が施される。462～466の貼付帯外面上端は刻目、下端は微隆起帯状に仕上げ、刻目と微隆起帯がセットになるタイプである。貼付帯直下は櫛描直線文と微隆起帯が連続して巡らされ、胴部は円形浮文と櫛描直線文帯、その下に刻目が施される。465は胴部と頸部の境目に二穴の刺突を施した円形浮文を配し、櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らす。直下に退化した棒状浮文を貼付する。466は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らした文様帯の下位に粒状浮文を配する。467は口縁端部を尖り気味に仕上げ、外面に垂直な面を成し、刻目を施す。貼付帯直下に櫛描直線文を施す。468は他より口径が大きく法量の大きい甕になるものと思われる。口縁端部は面を成し、下端に刻目が施される。貼付帯下端は微隆起帯を巡らす。469～472は口縁部の断面形が楕円形を呈し、端部は丸みを帯びる。469は口縁端部を外側に摘み出す。貼付帯外面の下端に縦長の刻目を施す。470の口縁部は外面の凸部に刻目を施し、貼付帯の下端を摘み微隆起帯状に仕上げる。471の口縁部は玉縁状に肥厚し、外面に縦長の刻目を施す。貼付帯直下に櫛描直線文と微隆起帯を連続させて巡らす。472は貼付口縁で端部は丸く収め、外面に凹線文を施す。473・474は貼付口縁で端部を下方に拡張させ外面に面を成す。473は口縁端部が垂直な面を成し、貼付帯外面には指頭圧痕が連続する。474は外面に刻目、直下に櫛描直線文が施される。475～503は素口縁の甕である。475・476の口縁部はナデ調整を施し、端部は面を成す。475は口縁部から頸部にかけて無文で、胴部に円形の粘土に刺突を施した浮文を配し、櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らせ、直下に縦長の刻目を連続して施し棒状浮文風に仕上げる。476は口縁部下端に刻目を僅かに残し、頸部は無文である。上胴部に円形の粘土に刺突を施した浮文を疎らに配し、櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らせ、直下に縦長の刻目を列点状に配する。477は口縁端部を肥厚させ、直下に櫛描直線文を施し微隆起帯を巡らす。478は口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、外面下端に刻目を施す。頸部の下位に櫛描文と粒状浮文を2個1単位で巡らす。479は頸部外面が縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整が施される。頸部下位に沈線文を巡らす。480の口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。外面に刻目を施す。それ以外は無文である。481・482は口縁下端に刻目を施し、直下に櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らす。483は口縁内面にも刻目を施す。484～486は口縁端部を尖り気味に仕上げ、外面に断面三角形の微隆起帯を巡らす。口縁部の開き方がラッパ状に大きく開き、端部には刻目を施す。487の口縁端部は面を成し、刻目は施さず外面に二条の微隆起帯が付く。488～491は無文で、ナデ調整が施される。488の口縁端部は下方に拡張し面を成す。490の口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。491は胴部の最大径より口径が大きくラッパ状に外反する。口縁端部は丸く収める。ナデ調整が施される。492は口縁端部を上方に摘

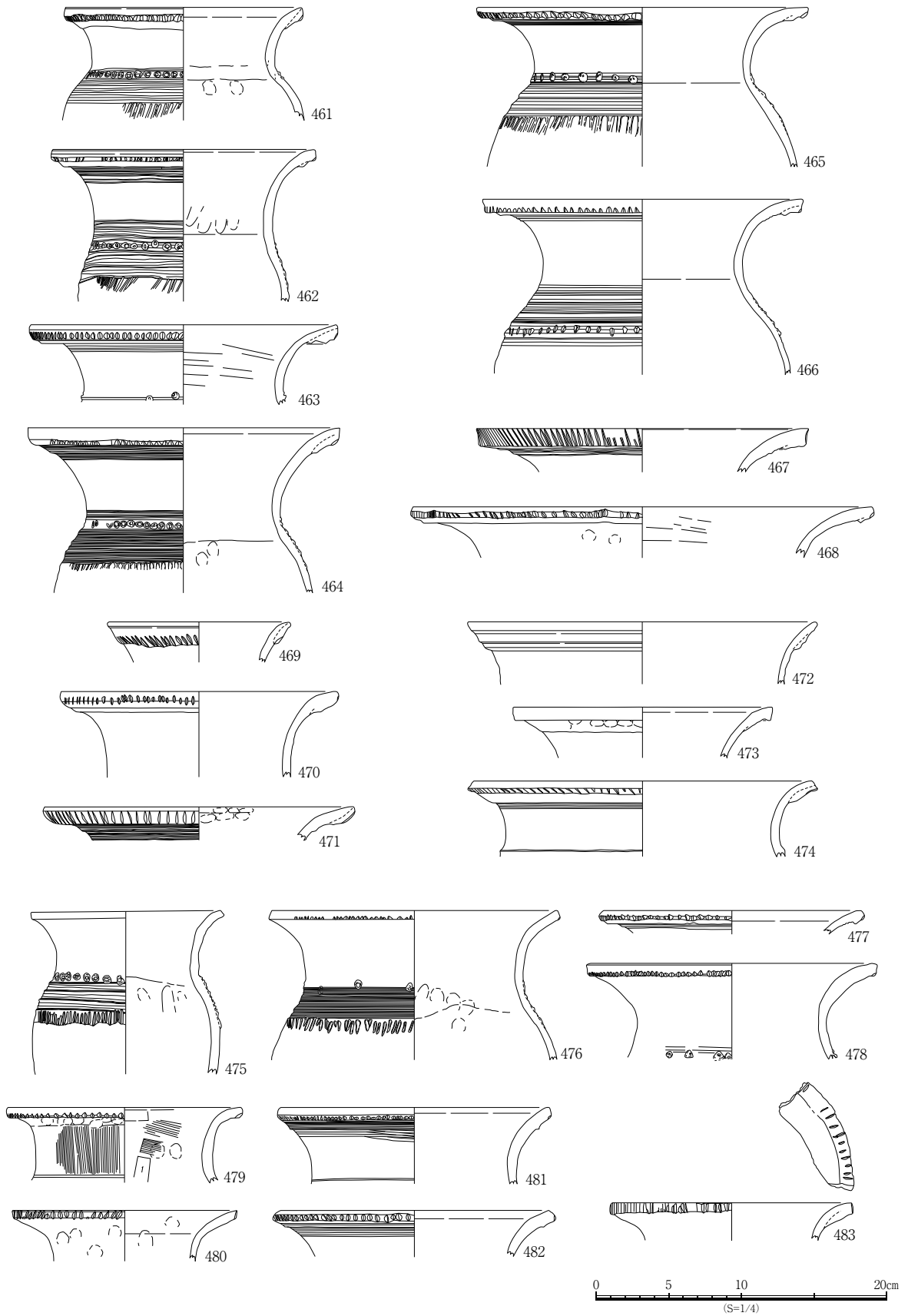


図3-80 段部2包含層遺物実測図4

3. 検出遺構と出土遺物

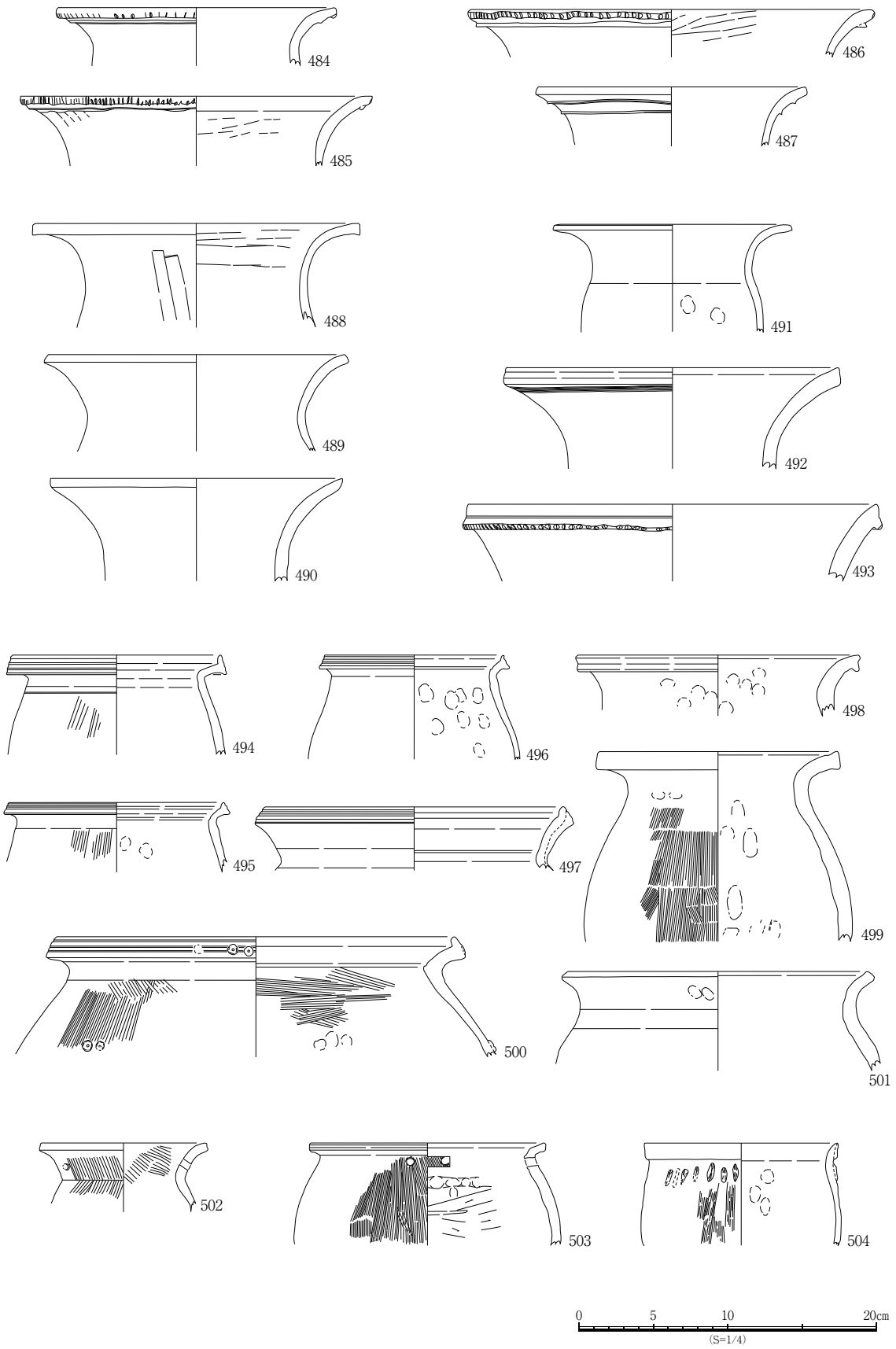


図3-81 段部2包含層遺物実測図5

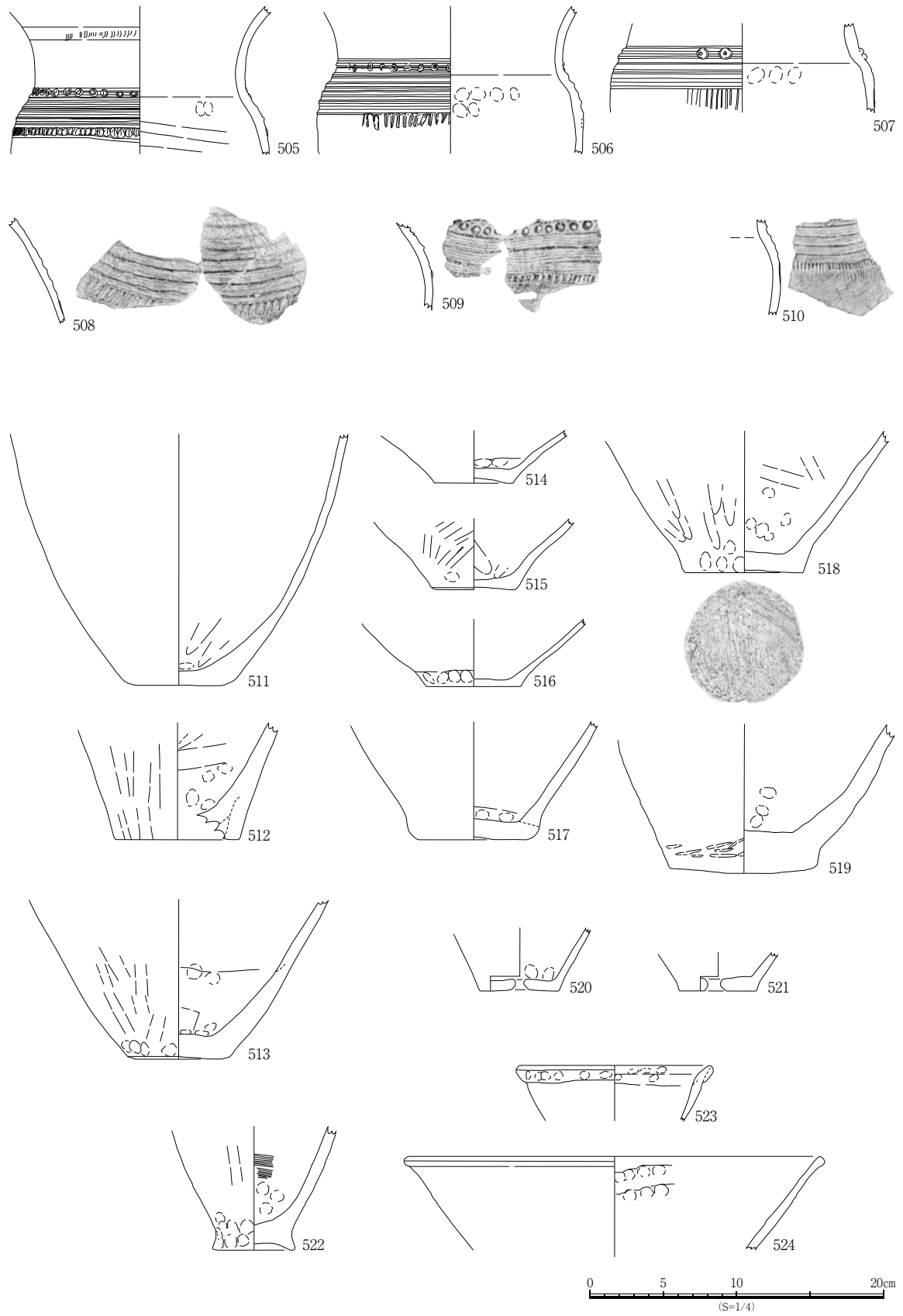


図3-82 段部2包含層遺物実測図6

3. 検出遺構と出土遺物

みなデ調整を施し拡張する。外面の端面直下に櫛描直線文を巡らす。493は口縁端部を上下に拡張し端面中央に沈線を巡らす。下端に刻目を施す。494～503は凹線文系の甕である。これらの甕の胎土にはチャート礫を含み在地産と思われる。494の口縁部は外反し端部を上方に拡張する。外面には沈線化した凹線文を巡らす。495は「く」の字に短く外反し、端部は上下に拡張する。外面には沈線化した凹線文が施される。494・495とも外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。496の口縁部も端部が上下に拡張され外面に沈線化した凹線文が施される。内外面にタール痕が認められる。497の口縁部は外面に粘土帯を貼付し、端部は上下に拡張する。外面には沈線化した凹線文が施される。498の口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上下に拡張され、外面に凹線文を巡らす。499は肩が張らない胴部から口縁部にかけて緩やかに外反する。端部は上下に拡張し、外面に面を成す。外面は単位の細やかなハケ調整が施され、内面はナデ調整が施される。500は法量が大きい甕である。口縁部は「く」の字に外反し、口縁端部は内側上方に拡張する。口縁部外面には沈線化した凹線文を巡らし円形浮文を2個一対で配する。胴部上半にも円形浮文を配する。内外面ともハケ調整が施される。501は胴部と口縁部が間延びする。口縁端部はナデ調整が施され、端部は面を成す。内外面ともにナデ調整が施される。502は小型の甕の口縁部であり、胴部から口縁部にかけて緩やかに外反し端部は面を成す。内外面ともにハケ調整が施される。口縁部は直径5mmの円孔を穿つ。外面の一部に煤付着。503の口縁部は短く外反し、口縁部直下に円孔を2個並べて穿つ。外面は単位の細かいハケ調整が施され、内面は横方向のヘラケズリが認められる。504は小型の甕と思われ、口縁部外面に粘土帯を貼付し、端部は尖り気味に仕上げる。外面口縁部直下に棒状浮文を配する。505～510は胴頸部片である。胴部と頸部の境目の屈曲が強く段が生じる。505は頸部の上位に爪状圧痕を連続して配する。上胴部には円形の粘土に竹管刺突を施した浮文が配され、櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らし直下に刻目を施す。506は頸部と胴部の境目に円形の粘土に竹管刺突を施した浮文を配し、櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らし直下に棒状浮文を配する。507は櫛描直線文、円形浮文、縦長の刻目が施される。508・509は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らし、直下に右から左の刻目を施し、棒状浮文風に仕上げる。510は櫛描直線文帯の下に縦長の刻目を施し、棒状浮文風に仕上げる。511～521は底部片である。全て平底である。511～513は底部から胴部に向かって上方に立ち上がる。内外面ともナデ調整が施される。512は厚みのある底部で断面に粘土の接合痕が顕著に認められる。514～519は平底の底部から段を持って胴部は外方に開く。全て内外面ともナデ調整が施される。514～516は他に比べ器壁が薄く、514は外底部中央が凹む。515は外面の一部にタール痕、内面には化粧土が施される。517の底部は丸みを持って立ち上がる。518は内面全体にタール痕の付着が認められる。外底部はヘラ状工具による擦痕が認められる。519の底部片は外面底部脇にタタキ目を残す。ナデ調整が施される。他に比べ器壁が厚く、重量がある。520・521は甑の底部である。どちらも底部中央に外から内の焼成後の穿孔が認められる。

鉢(図3-82)

522～524は鉢である。522の底部は外底周縁部を外方に摘み出し高台状を呈する。内外面ともナデ調整が施され、内面の一部にハケ調整が施される。523の口縁部は断面四角形の貼付口縁であり、口縁部の内外面に指頭圧痕が顕著に認められる。ナデ調整が施される。524の体部は直線的に外方に立ち上がり、端部は外方に摘みナデ調整を施すことにより面を成す。

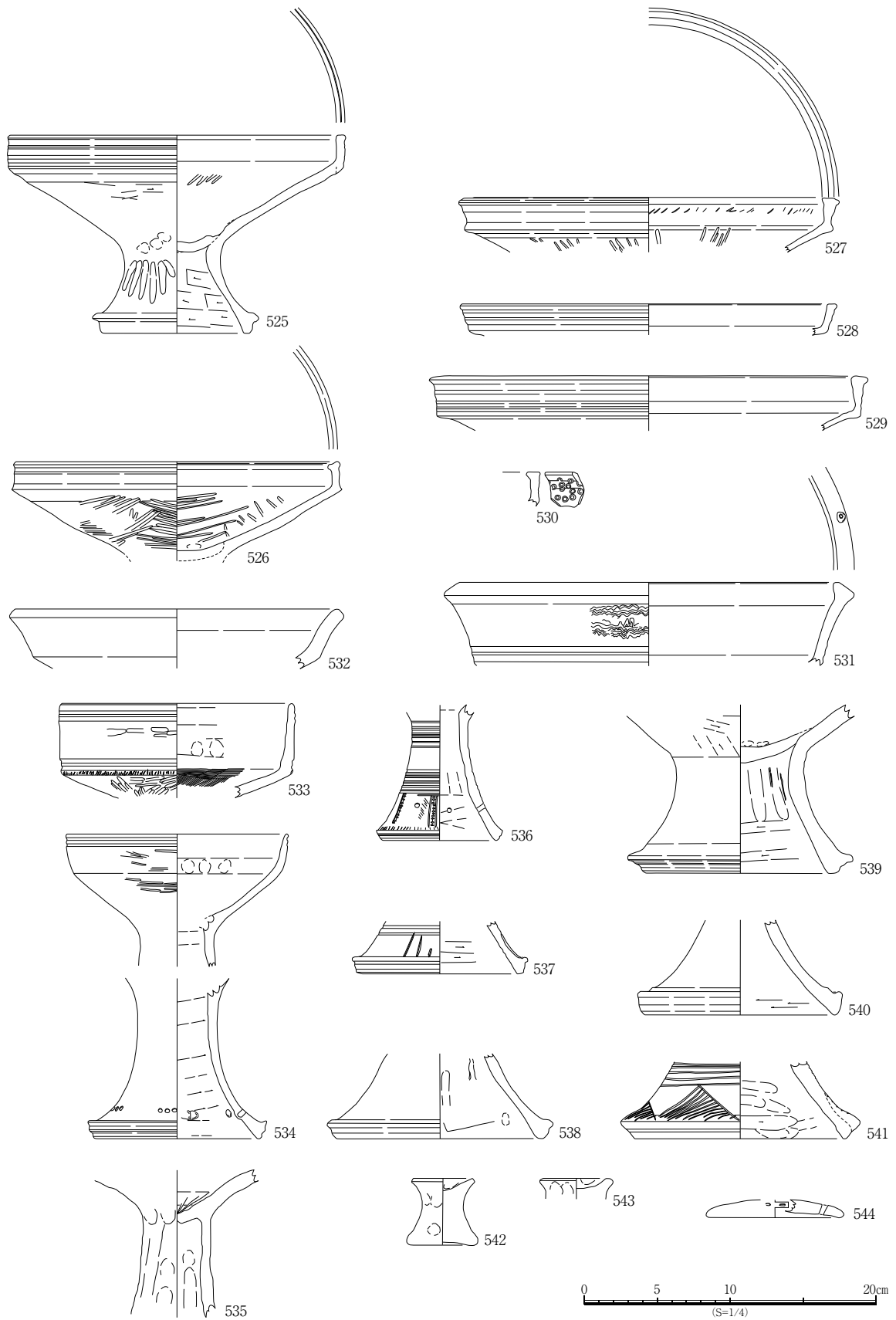


図3-83 段部2包含層遺物実測図7

3. 検出遺構と出土遺物

高杯(図3-83)

525～541は凹線文系の高杯である。525の口縁部は直立し、端部はナデ調整により水平な面を造る。口縁部外面及び端面には凹線文が施される。体部内面の一部にヘラミガキが認められ、外面はヘラケズリが認められる。脚部は外面ヘラミガキ、内面はヘラケズリが施される。脚裾部は上端を外方に摘みナデ調整を施し、突起状を呈する。下端の接地部は丸みを持つ。杯部との接合は円盤充填である。526の口縁端部は内外に摘みナデ調整を施し拡張する。口縁部端面及び、端面直下に沈線化した凹線文が施される。内外面とも密なヘラミガキが施される。杯部と脚部の接合は円盤充填である。527の口縁端部はナデ調整により内外面に拡張し面を成す。口縁部端面及び、端面直下に沈線化した凹線文が施される。口縁部と体部の境目は突起状に外方に突出す。口縁部内面には爪状の圧痕が刻目風に施される。体部は内外面ともヘラミガキが施される。528は口縁部が直立し、端部は面を成す。外面に凹線文を施す。529は口縁端部を外方に摘みナデ調整を施し、水平な面を成す。外面に凹線文を施す。530は口縁部片である。口縁端部は内側に摘みナデ調整を施し、面を成す。外面には凹線文と竹管刺突文が施される。531は他に比べ法量が大きい高杯である。口縁部は内外に拡張し、内傾する面を成す。口縁部端面にはドーナツ状の浮文が配される。外面は波状文、下位には凹線文が施される。532の口縁部は外反し端部は面を成す。全体的にナデ調整が施される。533は口縁部が直立して長く延び、端部は尖り気味に仕上げる。口縁部外面は上位と下位に二条ずつ沈線が施され、下端の凸部に刻目を施す。外面は化粧土を塗布する。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整、体部はハケ状工具により横方向に調整する。534は杯部と脚部との接点が見つからなかったが同一個体と考えられる。杯部は内湾し、口縁部にかけて直立気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。口縁部外面の上位には二条の沈線を施す。外面は横方向のヘラミガキが施され、内面はナデ調整が施される。脚部は裾端部を上下に拡張し、外面に凹線文を施す。3個1単位で円孔を穿つが、いずれも穿孔はしていない。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整とヘラケズリが施される。杯部と脚部の接合は円盤充填である。535の杯部中央は凹み、粘土を充填した痕が放射状に残る。脚部はナデ調整が施される。536～541は脚部である。536は脚部に櫛描直線文が施され、裾部は二条の垂下する沈線間に刺突文を施す。裾端部は端面に二条の沈線化した凹線文が施される。内面ヘラケズリが施される。537はヘラ描き沈線を二条施し、裾部は沈線が施される。裾端部は上下に拡張し外面に凹線文が施される。内面ヘラケズリが施される。538の裾端部は拡張し外面に凹線文を施す。539は法量が大きく、脚部は裾部に向けて大きく開き、裾端部は外方に拡張し、外面に凹線文を施す。杯部と脚部の接合は円盤充填である。内面はヘラケズリとナデ調整、外面は杯部の一部にヘラミガキが認められる。540の裾端部は拡張し、外面に凹線文が施される。541の裾端部は粘土を付け足し拡張し、外面中央部は沈線状に凹む。外面にヘラ描き沈線文と鋸歯状の文様が施される。

その他(図3-83)

542・543は糸巻き形をした土製品である。臼状を呈する。ミニチュアの器台と思われる。544は蓋と思われ、円盤状を呈し、上位に直径3.0mmの円孔を2個並べて穿つ。端部は丸みを帯びる。

石器(図3-84～86)

545～587は石器である。545～555は打製石鏃であり、555を除き全てサヌカイト製である。545・546は凹基式に属する。546は基部の凹みが弱く、平基式に近いが中央部にハツリ痕が認められる事から凹基式に分類した。先端部は欠損する。547～549は平基式である。547は先端部が欠損する。

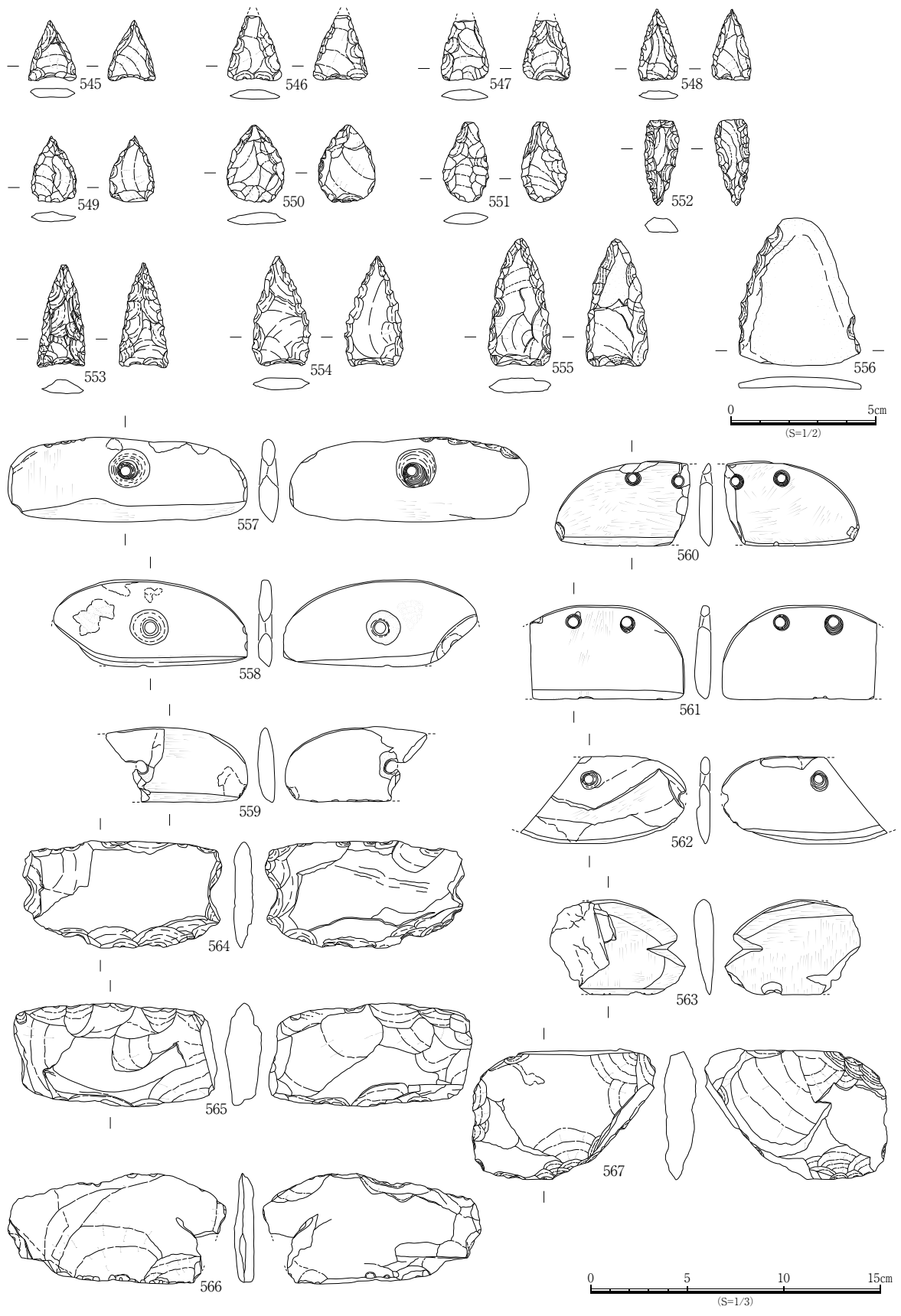


図3-84 段部2包含層遺物実測図8

3. 検出遺構と出土遺物



図3-85 段部2包含層遺物実測図9

547・548は全長に対して基部の幅が狭い。549は基部の幅が広く、若干丸みを持つ。550・551は凸基式である。基部が窄まり丸みを持ち、円基式に近い形状である。552は細長く基部が窄まり尖頭器状を呈する。553～555は全長が3.0cmを越える大型の石鏃である。凹基式で裏面は平滑である。基部の凹みが弱く、平基式に近いが中央部にハツリ痕が認められる事から凹基式に分類した。555は緑色の硅質頁岩である。556は緑色硅質頁岩の未製品である。表裏面は未調整で、一側辺のみ刃部の加工がみられる。スクレイパーの可能性も考えられるが、555と同じ石材であり、大型石鏃の未製品と思われる。557～563は磨製石包丁である。557は有側の弱直背直線刃タイプであり、中央に一穴の紐孔を穿つ。刃部面は片刃に仕上げ背部が薄く刃部に向かって厚みが増す。頁岩製である。558は無側で弧背直刃タイプである。中央に一穴の紐孔を穿つ。刃部面の欠損部は割れ口に沿って研ぎ直しをし、片

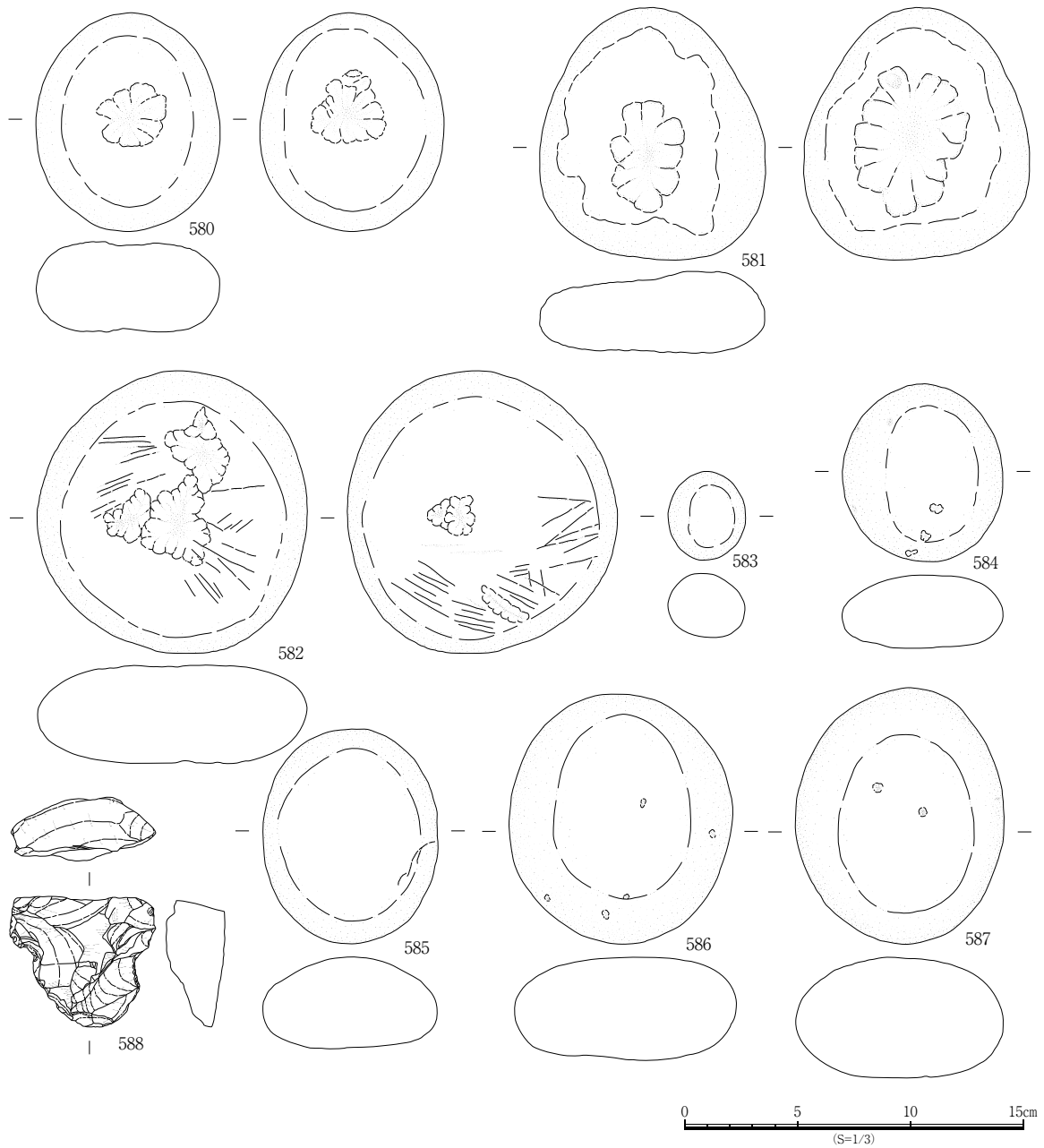


図3-86 段部2包含層遺物実測図10

3. 検出遺構と出土遺物

刃に仕上げる。背部は丁寧な研磨により面取りする。頁岩製である。559は片方が欠損する。無側で弧背直刃タイプである。中央に一穴の紐孔を穿つ。刃部側が厚く片刃に仕上げ、背部は丸みを持つ。頁岩製である。560は無側で弧背直刃タイプである。中央背部寄りに二穴の紐孔を穿つ。両面とも丁寧な研磨が施され、刃部は片刃に仕上げる。頁岩製である。561は赤色を呈した玄武岩であり、半月形を呈した無側の弧背直刃タイプである。中央背部寄りに二穴の紐孔を穿つ。刃部側に厚みがあり、片刃に仕上げる。562は片方が欠損する。無側で弧背弱凸刃タイプである。中央背部寄りに一穴の紐孔を穿つが片方が欠損しているため穴数は不明である。また、一側辺に抉りが認められる。刃部面は剥離した部分を研ぎ直しする。裏面も刃部のみ研磨し、両刃に仕上げる。頁岩製である。563は片方が欠損しており紐孔数は不明である。弧背直刃タイプの形状であり、側部にV字状に抉りを入れる。全体的に丁寧な研磨が施され刃部は両刃に仕上げる。頁岩製である。564は打製石包丁であり、両側部に抉りが入る。チャート製である。565～567は石包丁の未製品と思われる。全て頁岩であり、565・567は有側の直背直刃タイプの形状に成形する。刃部面及び側部面は未調整である。566は片方の幅が狭く土掘具の可能性も考えられる。568・569は太型蛤刃石斧である。568は緑色片岩製である。両刃で基部は欠損する。一側縁部は研磨が施され面取りされるが、片方の側縁部は自然面を残す。569は緑色の玄武岩であり、基部が欠損する。基部に向かって幅が狭くなる。側縁部は敲打痕が顕著であり、研磨はされていないが側面をつくる。主面、背面ともに丁寧な研磨が施され厚みのある両刃部を成形する。570はスクレーパーと思われる。刃部は未調整な部分がある。サヌカイト製である。571は礫錐であり、両端部が研磨により細くなる。片岩製である。572は石錘であり、扁平な石の両側辺を敲打によりV字状に抉りを入れる。裏面は金属器で引っ掻いた様な細く深い擦痕が認められる。流紋岩製である。573～576は砥石である。573は直方体を呈し、二面に使用痕が認められる。574は四角錐状の形状で四面とも使用面である。2点とも流紋岩製である。575は扁平な両面を使用している。粘板岩である。576は細粒花崗岩製の砥石で片面は一面、もう片面は二面を使用する。幅のある深くて細長い使用痕が認められる。577～582は叩石である。全て細粒花崗岩であり、扁平な円礫を使用している。577・580～582は平らな面の中央部が両面敲打により凹む。578・579は片面のみ使用する。583～587は投弾である。583の様に直径4.0cm内外を測り、球形を呈した小型のもの、584・585の様に直径7.0cm内外を測る扁平な中型のもの、586・587の様に直径10.0cm内外を測る扁平な大型のものがみられる。全て細粒花崗岩である。588はチャートの石核である。

段部3包含層出土遺物

段部3からは弥生土器片305点、石器類70点が包含層から出土した。

壺(図3-87)

589～591は壺であり、細頸壺に分類される。589は細長い頸部から口縁部は外反する。断面四角形を呈した貼付口縁であり、貼付帯外面に縦長の刻目を施し、直下に粒状浮文を配する。頸部は櫛描直線文を単位ごとに施し、頸部と胴部の境目には粒状浮文を並べる。胴部には斜状の列点状の刻目を施し、その上から櫛描直線文を巡らす。590は素口縁で端部は面を成す。外面には円形浮文を配し、頸部は櫛描直線文を単位ごとに巡らす。頸部の下位には櫛描直線文を巡らした上に円形浮文を配する。591の口縁端部は僅かに面を残す。口縁部からやや下がった位置に凹線文を巡らす。

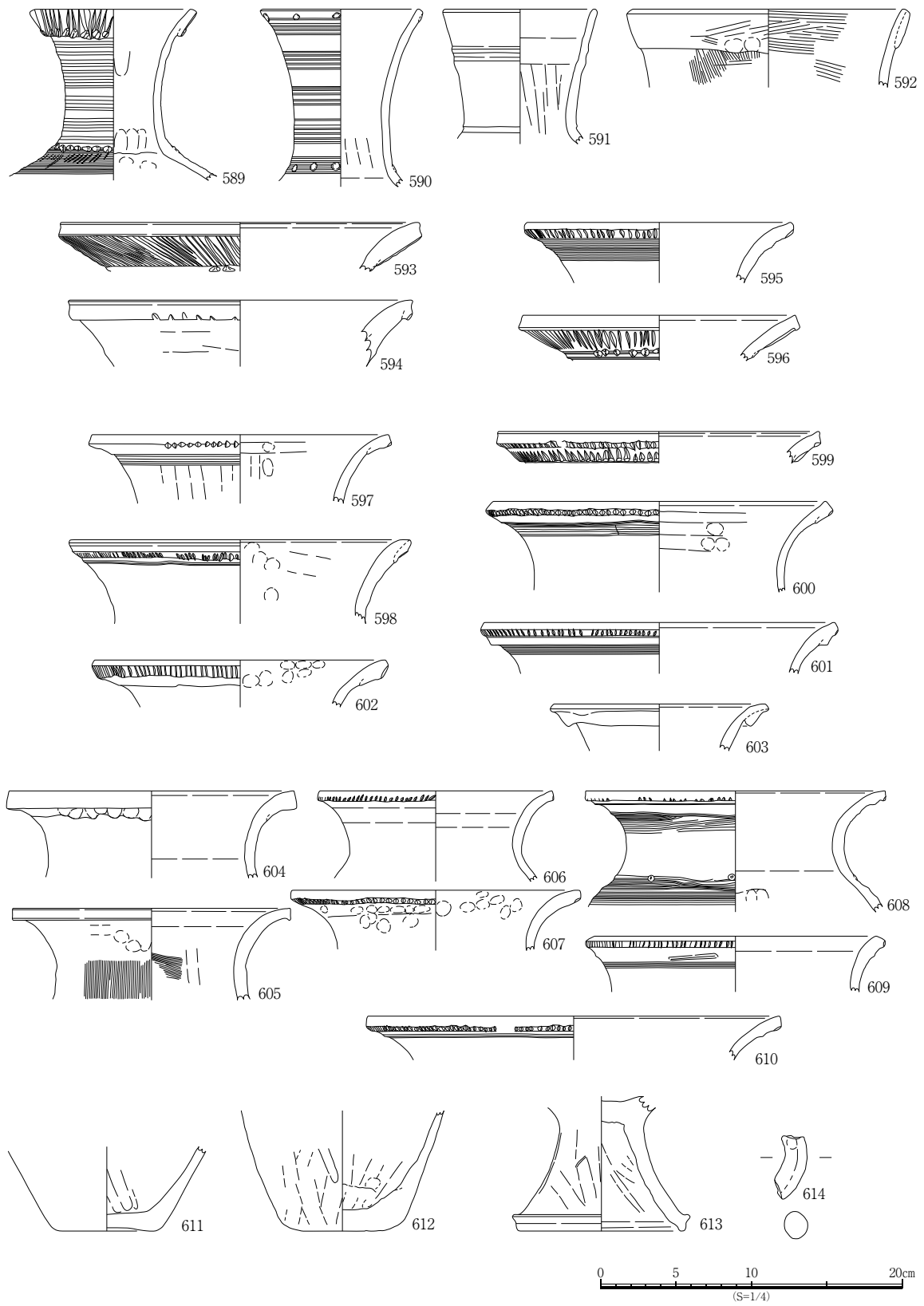


図3-87 段部3包含層遺物実測図1

3. 検出遺構と出土遺物

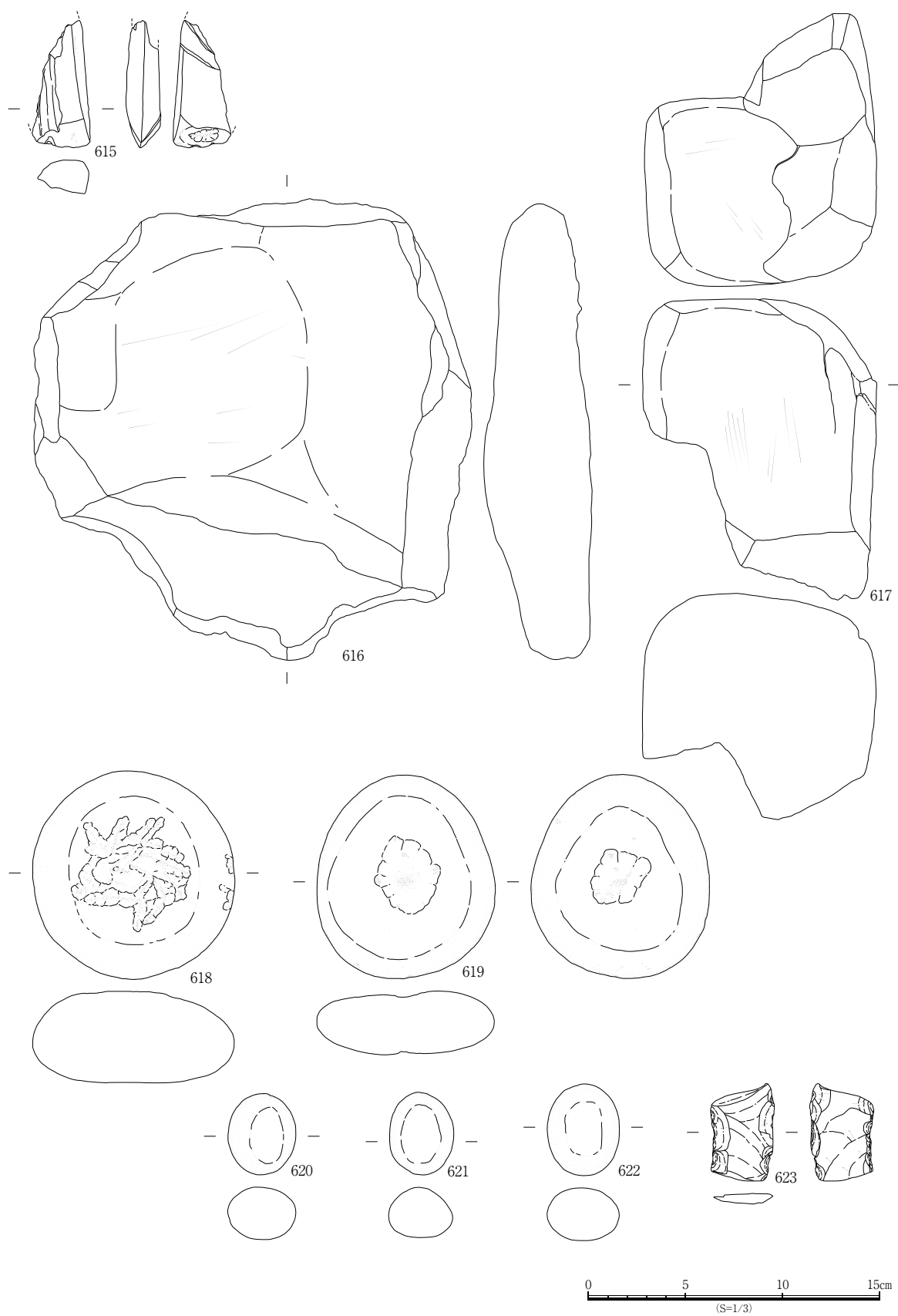


図3-88 段部3包含層遺物実測図2

甕(図3-87)

592は断面四角形の貼付口縁で口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面ともに粗いハケ調整が施される。593は断面四角形の貼付口縁である。口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。外面は口縁部の貼付帯下に円形浮文を配する。594の口縁部は貼付口縁であり、口縁端部は上下に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、外面は沈線状に凹む。下端に刻目を施す。ナデ調整が施される。593・594の胎土はチャートを多く含み、色調も黄橙色、橙色を呈する。595は口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し、尖り気味に仕上げる。外面には刻目を施し、その下に櫛描直線文と微隆起帯を巡らす。596は口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し、尖り気味に仕上げ面を成す。外面には縦長の刻目を施し、直下には櫛描直線文、微隆起帯を巡らし、粒状浮文を配する。597～610は甕である。597は断面四角形の貼付口縁で端部下端に刻目を施し、口縁部直下には櫛描直線文が巡る。外面は縦方向のナデ調整、内面は横方向のナデ調整が施される。598は断面楕円形の貼付口縁であり、口縁端部は丸く収める。外面は口縁端部と微隆起帯をナデ調整により施し、凸部に刻目を施す。599は口縁端部を上方に摘み尖り気味に仕上げる。外面は端部下端と、その下に二段に刻目を施す。600は断面台形の貼付口縁であり、口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し、尖り気味に仕上げる。外面端部下端に刻目を施し、直下の貼付帯下端に微隆起帯を巡らす。頸部は櫛描直線文を巡らす。601も断面台形の貼付口縁であり、端部を上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、貼付帯下端を下方に摘みナデ調整を施すことにより断面三角形の微隆起帯状に仕上げる。口縁部直下の頸部には櫛描直線文を巡らす。602は断面楕円形の貼付口縁で、端部は丸く収める。外面には刻目を施す。603は外面に粘土帯を厚く貼付し、端部は外方に摘みナデ調整を施す。貼付帯下端も下方に摘みナデ調整を施し垂下する。604は口縁端部を上下に拡張し内傾する面を造る。貼付帯外面には指頭圧痕が連続する。605～610は口縁部の貼付帯痕は認められない。605の口縁部は外反し、口縁端部は下方に摘み垂直な面を造る。内外面とも口縁部はナデ調整、頸部はハケ調整が施される。606の口縁端部は外側に面を成し、下端に僅かに刻目を施す。無文であり、内外面ともナデ調整が施される。607も口縁端部は外側に面を成し、下端に刻目を施す。内外面とも指頭圧痕を顕著に残す。608は胴部最大径と口径が同じである。口縁端部は外側に面を成し、下端に僅かに刻目を施す。頸部は上位に櫛描直線文と微隆起帯を巡らし、胴部との境目に円形の粘土に刺突を施した浮文を配し、胴部には櫛描直線文と微隆起帯を巡らす。609は口縁端部を外方に摘みナデ調整を施し、端部下端に刻目を施す。外面に櫛描直線文、微隆起帯を巡らす。610は口縁端部下端に刻目を施し、直下にナデ調整より微隆起帯状に仕上げる。611・612は底部片である。平底でナデ調整を施す。612は底部脇が丸みを帯び、内面に粘土帯の接合痕が認められる。

高杯・その他(図3-87)

613は高杯である。裾端部は上下に拡張し、外面中央部は凹む。ヘラ状工具によるナデ調整が施される。614は把手部片である。

石器(図3-88)

615～623は石器である。615は石斧片であり、刃部は片面が未調整で敲打痕を残す。緑色片岩である。616・617は砥石であり、616は1面のみ使用痕が認められる。細粒花崗岩である。617は花崗斑岩で一部被熱している。618・619は叩石であり、扁平な面の中央部に敲打による凹みが認められる。細粒花崗岩である。620～622は球形を呈した直径3.3～3.7cmを測る小型の投弾である。全て細粒花崗岩である。623はチャートの剥片石器である。両側に刃部成形のハツリ痕が認められる。

3. 検出遺構と出土遺物

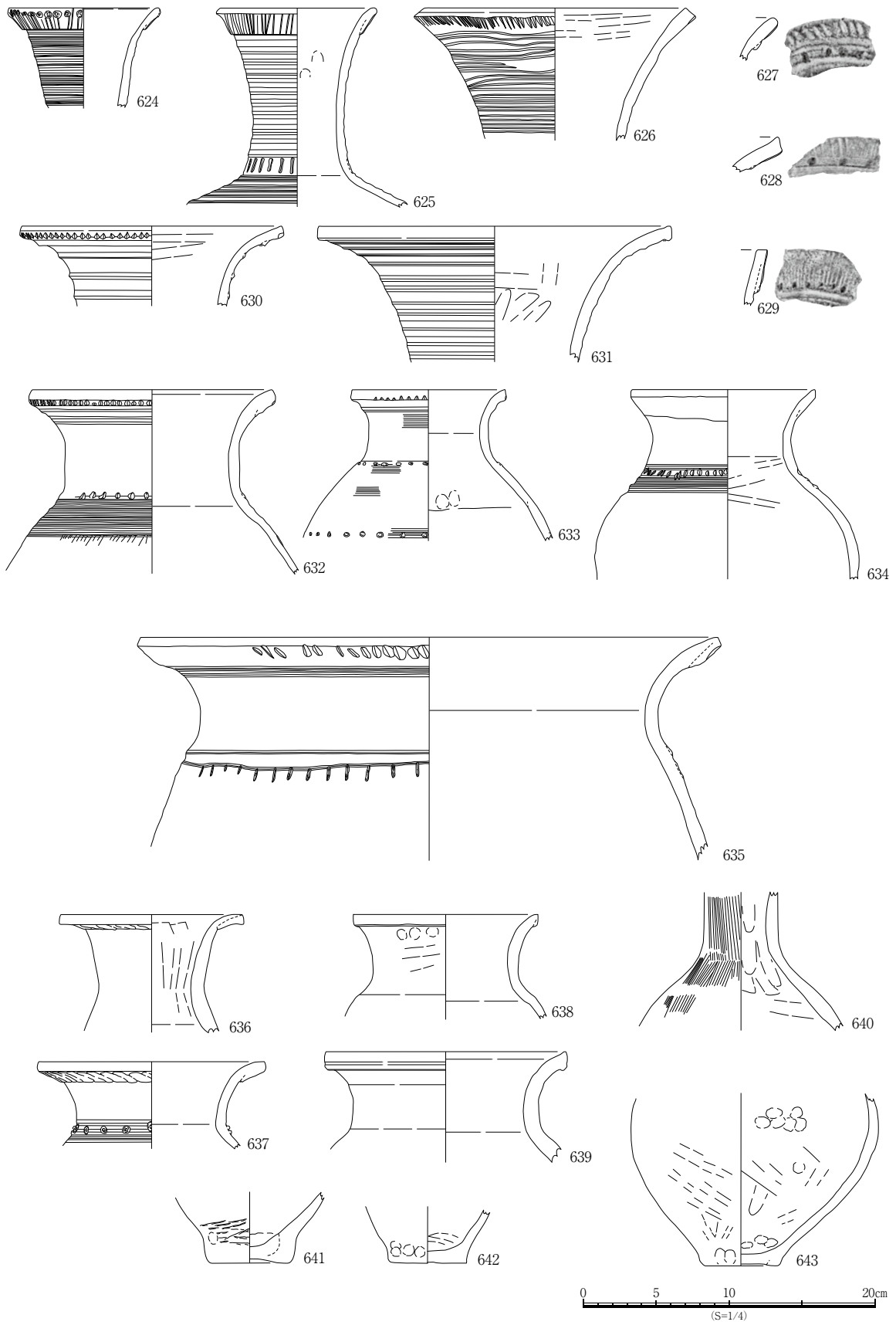


図3-89 段部4包含層遺物実測図1

段部4 包含層出土遺物

段部4からは弥生土器片6,828点、石器類262点が包含層から出土した。

壺(図3-89)

624～643は壺である。624・625は細頸壺で細長い頸部から口縁部は外反する。624の口縁部は断面楕円形の貼付口縁で口縁端部は丸く収める。外面に縦長の刻目を施し、上端に円形の粘土に刺突を施した浮文を並べる。頸部は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らす。625は胴部から頸部にかけて窄まり、頸部は細長く伸び、口縁部にかけて外反する。口縁部は断面楕円形の貼付口縁で端部は丸みを持つ。外面に縦長の刻目を施し、頸部は微隆起帯を連続して巡らす。頸部下位には棒状浮文を配する。胴部上位も微隆起帯を連続して巡らす。626は624・625の細頸壺より法量が大きく口径が開くタイプの壺である。細長く伸びる頸部から口縁部は外反する。口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し、面を成す。外面には縦長の刻目を施し、外面は単位の粗い櫛描直線文を巡らす。627～629は細頸壺の口縁部片であり、627・628は外面に粘土の貼付が認められず、629は貼付口縁である。刻目、円形浮文、微隆起帯が施される。630も細長い頸部から口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し、外側に面を持つ。端面下端に細かな刻目を施し、外面口縁部から頸部にかけて断面三角形の微隆起帯を等間隔に四条巡らす。631も頸部から口縁部にかけて大きく開く。口縁端部は上下に摘みナデ調整を施し、外側に面を成す。口縁部は刻目を施さず、口縁部から頸部にかけて微隆起帯を連続して巡らす。胎土はチャート礫を含み、色調は橙色を呈す。632～634は膨らみのある胴部から頸部にかけて窄まり、頸部は直立して伸び、口縁部は外反するタイプである。632は貼付口縁であり、口縁部は肥厚する。口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し、外面は丸みを帯びた面を成す。外面下端に刻目を施し、直下に微隆起帯を巡らす。口縁部下は櫛描直線文を巡らす。胴部は頸部との境目に円形浮文を配し、浅い櫛描直線文と微隆起帯を交互に連続させて巡らす。直下に列点状の刻目を施す。633は632に比べ頸部が窄まる。口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し、外面に面を成す。外面下端に刻目を施し、下位に断面三角形の微隆起帯が巡る。頸部は櫛描直線文の施文の一部が認められる。頸部下位と胴部中位に円形浮文を配する。634は張りのある胴部から頸部にかけて窄まり、口縁部は短く外反する。貼付口縁であり端部は上方に尖り気味に仕上げ、外面は面を成す。口縁部から頸部にかけては無文であり、胴部は上位に櫛描直線文を巡らし、沈線文帯の間に刻目を施す。635は法量の大きい壺である。形態的には甕にも分類されるような器形である。口縁部は貼付口縁で、外面に幅の広い刻目が連続する。口縁部の貼付帯直下に櫛描直線文が施され、上胴部に二条の微隆起帯を巡らし、下の微隆起帯から垂下する棒状浮文を配する。胎土は粒子の細かいチャート礫と石英を含み、色調は黄橙色を呈する。636は直立気味の長く伸びる頸部から口縁部は外反する。口縁部は貼付口縁であり、口縁端部は下方に摘みナデ調整を施し垂下する面を成す。外面には指頭圧痕が連続する。胎土にはチャート礫を含み、色調は橙色を呈する。637は632～634と同じく、頸部は直立して伸び、口縁部にかけて外反するタイプである。貼付口縁であり、口縁部は肥厚する。口縁部外面は指頭圧痕が連続する。頸部は無文で、頸部と胴部の境目に櫛描直線文を巡らせ、円形の粘土に刺突を施した浮文が配される。638は頸部から口縁部にかけて短く外反し、端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。無文でナデ調整が施される。639の口縁端部は上下に拡張し、外面に面を成す。640は細頸壺の胴頸部片であり、外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。641～643は壺の底部片であり、641は平底から段を持って立ち上がり、外面にタタキ目を残す。内底部に内側から粘土を

3. 検出遺構と出土遺物

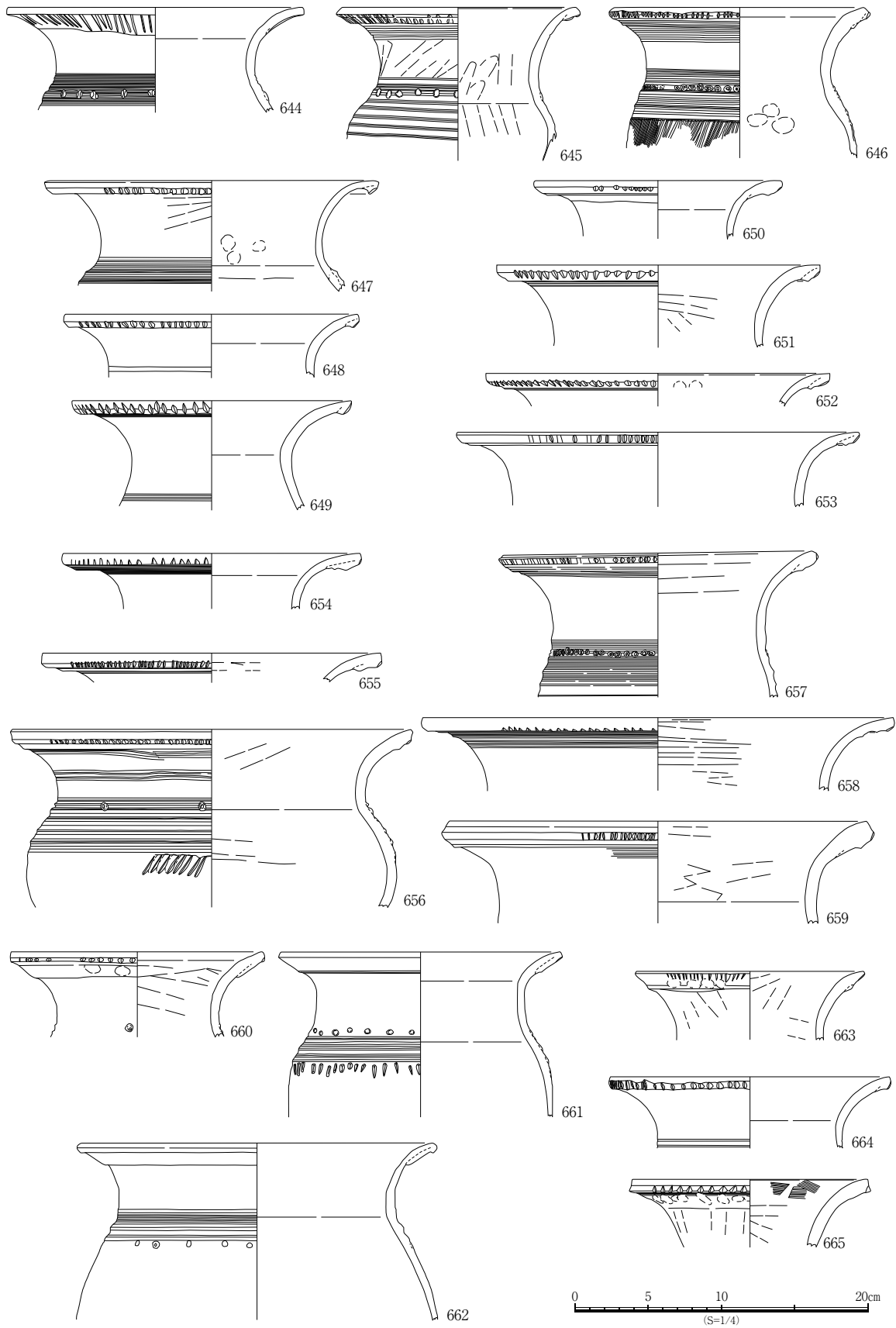


図3-90 段部4包含層遺物実測図2

充填した接合痕が認められる。642は平底から段を持って立ち上がり、内面は横方向のナデ調整が施される。643は底部径が小さく胴部は中位に最大径があり、球形に膨らむ。ナデ調整が施される。

甕(図3-90・91)

644～674は甕である。644の口縁部は外反し、端部は面を成す。薄い貼付口縁で、外面に縦長の刻目が施される。頸部と胴部の境目には櫛描直線文と粒状浮文が配される。胎土にはチャート礫を含み、色調は黄橙色を呈する。645は口縁端部を下方に摘みナデ調整を施し、内傾する面を成す。貼付帯外面に刻目を施す。口縁部貼付帯直下と、頸部と胴部の境目に櫛描直線文を巡らし、その上に円形浮文を配する。胴部は微隆起帯を連続して巡らす。内外面ともヘラ状工具によるナデ調整が施される。646は口縁端部を外方に摘みナデ調整を施し、下端に刻目を施す。直下に微隆起帯と櫛描直線文を巡らす。胴部は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らし、その下に幅の狭い縦長の刻目を施す。胴部と頸部の境目には円形の粘土に竹管刺突を施した浮文を配する。647～649は断面三角形から玉縁状を呈する貼付口縁である。口縁部はラッパ状に大きく開く。647は外面口縁部下端に刻目を施し、胴部は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らす。648は外面口縁部下端に刻目を施し、頸部中位に一条の沈線を巡らす。649は口縁部外面全体に刻目を施し、頸部下位に櫛描直線文を施す。650～655は断面台形を呈する貼付口縁である。外面貼付帯の凸面に刻目を施す。650の頸部は無文である。651は口縁部に刻目を施し、貼付帯直下に櫛描直線文を巡らす。652～655は外面貼付帯の上端に刻目、下端に微隆起帯を巡らす。652～655の頸部は無文である。654は貼付帯直下の頸部に櫛描直線文を施す。656は膨らみのある胴部であり、頸部中位から口縁部にかけて緩やかに大きく外反する。口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し、外面に面を成す。外面端面の下端に刻目を施し、直下に櫛描直線文を巡らす。頸部は同じ単位の櫛描直線文が間隔を空けて巡る。胴部は櫛描直線文帯と微隆起帯が巡る。657は口縁部が大きく外反する。口縁部は断面楕円形の貼付口縁であり、端部は丸みを帯びる。端部中央はナデ調整により凹む。口縁部には刻目が施され、貼付帯直下に櫛描直線文と微隆起帯が巡る。胴部は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らせ円形の粘土に竹管刺突を施した浮文を配する。658の口縁部は大きく外反する。口径が大きく大型の甕になるものと思われる。口縁端部は肥厚させ、端面下端に僅かに刻目が残る。外面は櫛描直線文が施される。659の口縁部は分厚く肥厚する。口縁端部を外方に摘み上端に刻目を施し、下端もナデ調整により微隆起帯状に隆起させる。660～662は断面楕円形の貼付口縁である。外面の貼付帯が薄く、口縁端部は丸く収める。660は口縁端部下端に刻目を施す。外面貼付帯には指頭圧痕がみられる。頸部下位には円形浮文が付く。661は口縁部から頸部にかけては無文で、胴部に円形浮文と、その下に微隆起帯を連続させて巡らし、疎らな棒状浮文を配する。662は口縁端部を外方に摘み出す。口縁部から頸部にかけて無文であり、胴部に櫛描直線文と微隆起帯を巡らし、円形浮文を下位に配する。663は法量が小型であり、口縁部の外反が他に比べ弱い。口縁端部は尖り気味に仕上げ、端部からやや下がった位置に微隆起帯を巡らす。口縁部外面に僅かに単位の細かい刻目を残す。664は口縁端部を僅かに肥厚さす。端面下端に刻目を施す。頸部に幅の広い櫛描直線文を巡らす。665の口縁部は櫛かハケ状工具による調整が施される。口縁部内面は一部にハケ調整痕が認められる。端面下端に刻目を施す。666は口縁部片であり、断面台形の貼付口縁である。上端に刻目、下端に微隆起帯が施される。667は胴部片であり、指頭によるナデ調整により微隆起帯を造る。微隆起帯間と最下に棒状浮文を配する。668は胴部と頸部の境目に上下交互に円形の粘土を貼付し刺突を施す。胴部は櫛描直線文間に微隆起帯を造り、最下帯の中に幅の狭い列

3. 検出遺構と出土遺物

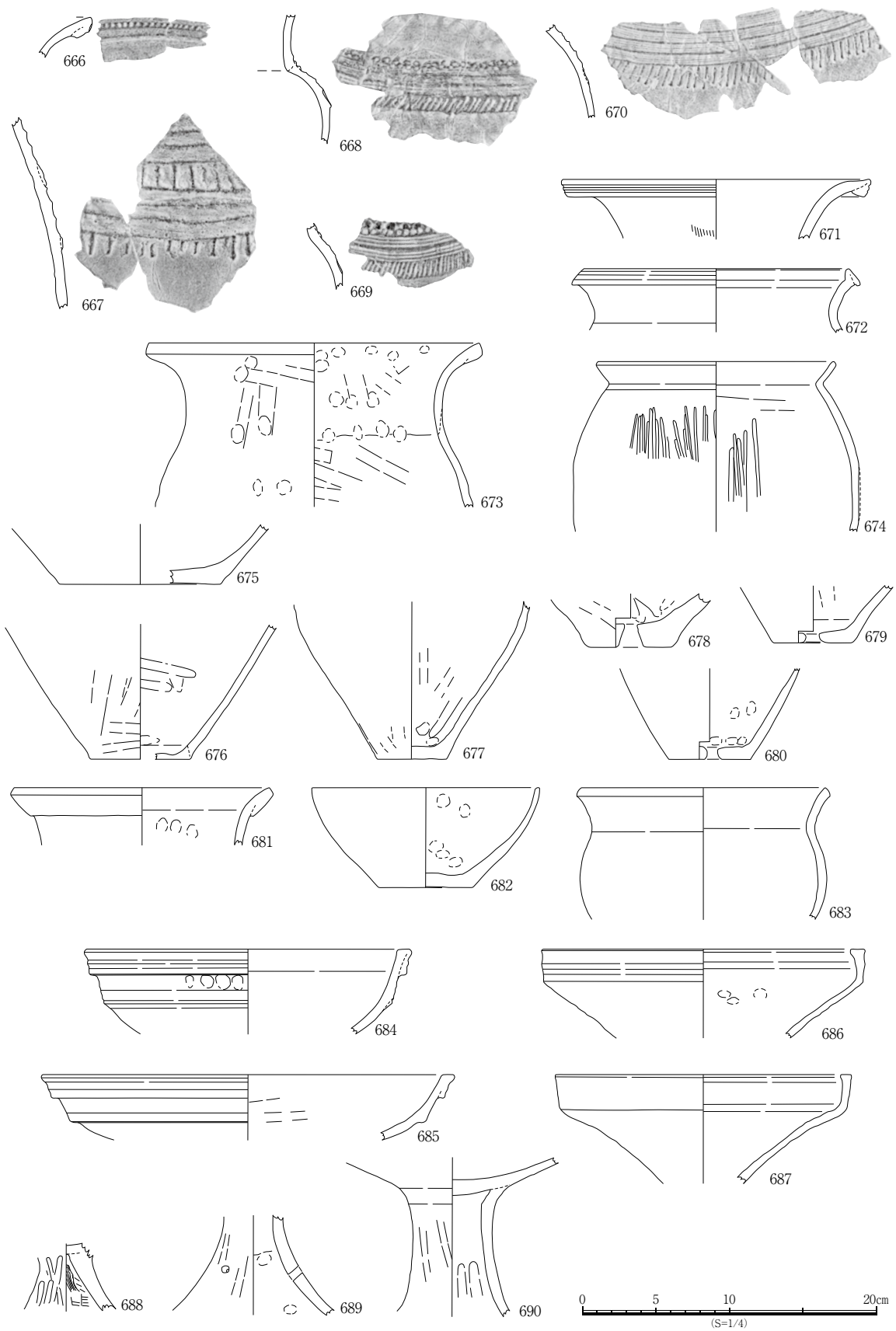


図3-91 段部4包含層遺物実測図3

点状の刻目を施す。669は胴部と頸部の境目に粒状浮文と刺突文を上下交互に施す。その下に三条一単位の櫛描文と刻目を施す。670は幅が狭いハケ状の櫛により沈線文が施され、沈線文間を微隆起帯状に仕上げる。その下には棒状浮文を配する。671・672は凹線文系の甕である。671は外面に断面三角形に粘土帯を貼付し、外面に凹線文を巡らす。全体的にナデ調整が施され、外面の一部にハケ調整痕が認められる。672の口縁端部は上下に拡張して外面に凹線文を施す。673は頸部から緩やかに外反し、口縁端部は僅かに肥厚し、外面に面を成す。内面に頸部と胴部の接合痕が認められる。全体的にナデ調整が施され、胴部内面はヘラ状工具によるナデ調整が施される。674は口縁部が「く」の字に短く外反する。口縁端部は丸く収める。内外面ヘラミガキが施される。675～680は底部片である。675は底径の大きい平底である。斜上外方に大きく開く。676は平底で器壁が薄い。内底部周縁は強いナデ調整により凹む。外面の一部にタール及び煤の付着が認められる。677は底径の小さい平底から段を持って立ち上がり胴部中位で膨らみを持つ。外面に煤が付着する。678～680は甌の底部片である。678は底部中央に断面三角形の焼成前穿孔が認められる。679・680は焼成後穿孔である。

鉢(図3-91)

681～683は鉢に分類した。681は断面四角形の貼付口縁であり、ナデ調整が施される。682は椀形で平底から内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内底周縁は強いナデ調整により凹む。683は膨らみのある胴部から口縁部は外反し、端部は面を成す。ナデ調整が施される。

高杯(図3-91)

684～690は高杯である。684・685は貼付口縁の高杯の杯部であり、外面上下端部を外方に摘みナデ調整を施し、外面に凹線文を巡らす。杯部との接合部も外方に摘みナデ調整を施し、突帯状に仕上げる。全体的にナデ調整が施される。686・687の杯部は深く、口縁部は直立する。口縁端部は内側に摘みナデ調整を施し、水平な面を造る。686は外面に凹線文を巡らす。全体的にナデ調整を施す。688～690は高杯の脚部である。688は外面ミガキ、内面は絞りが顕著に残る。689は脚部中央に円孔を穿つ。ナデ調整が施される。690は脚部と杯部を分割して成形している。脚部内面の杯部との接合部は外側に向けて開き隙間ができる。ナデ調整が施される。

鉄器・石器(図3-92～94)

691は鉄斧である。着柄の部分は三角形の折り返しが認められる。刃部は欠損する。

692～727は石器である。692～694は打製石鏃であり、692は小型の凹基式石鏃である。サヌカイト製である。693はチャートの石鏃である表裏面とも刃部の調整が丁寧である。694は平基式の石鏃で頁岩製である。695～700は磨製石包丁である。695・696は弧背直刃タイプで二穴紐孔を穿つ。丁寧な研磨により背部は面取りされ、刃部は片刃に仕上げる。695は砂岩製で696は頁岩製である。697も幅の狭い弧背直刃タイプであり、研磨により刃部側を厚く仕上げ角度がつく。背部も丁寧な面取りがされる。背部寄りに管状工具により二穴紐孔を穿つ。698は有側の弱直背弱凸刃タイプである。背側部は丁寧な研磨より面取りされ、刃部側を厚く仕上げ角度がつく。刃部は側部に向かって弧状を呈する。片方が欠損しており紐孔数は不明であるが二穴になるものと思われる。管状工具により紐孔を穿つ。頁岩製である。699は弧背直刃タイプで紐孔部から片方が欠損している。研磨により刃部側を厚く仕上げ角度がつく。背部も丁寧な面取りがされる。背部寄りに管状工具により紐孔を穿つ。頁岩製である。700は石包丁の刃部片で、背部側、両側部が欠損する。頁岩製である。刃部は研磨により鋭角に仕上げる。

3. 検出遺構と出土遺物

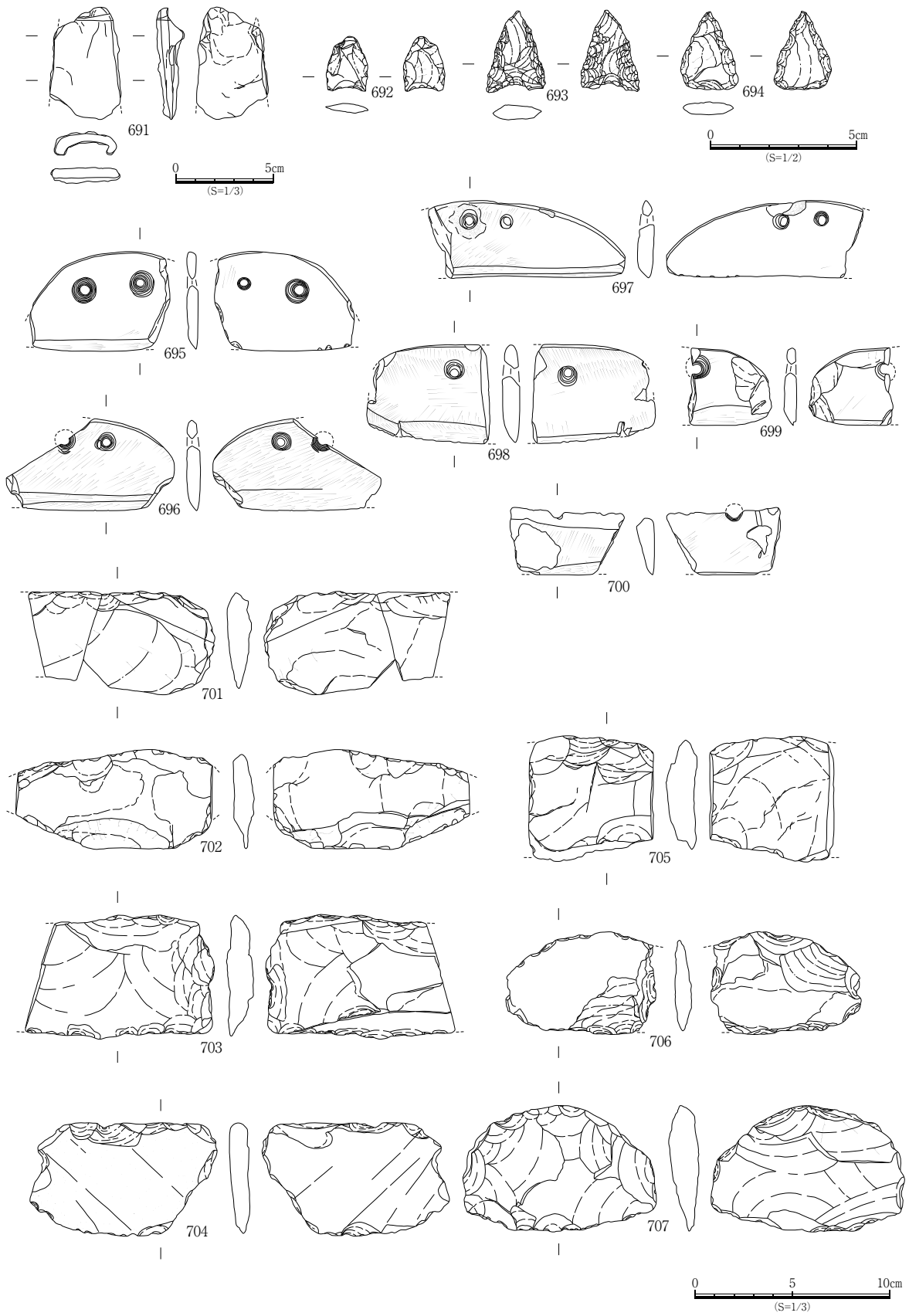


図3-92 段部4包含層遺物実測図4

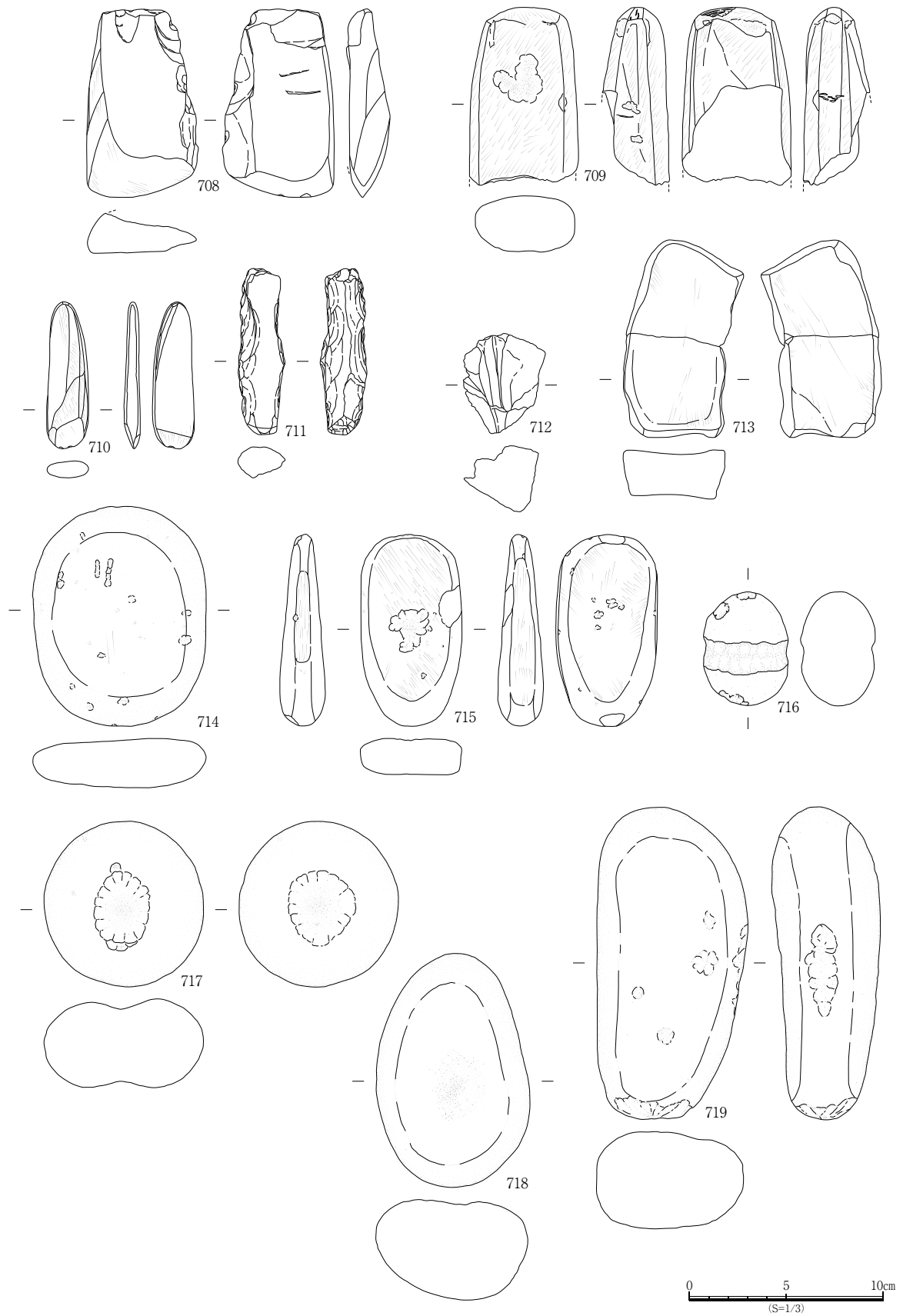


図3-93 段部4包含層遺物実測図5

3. 検出遺構と出土遺物

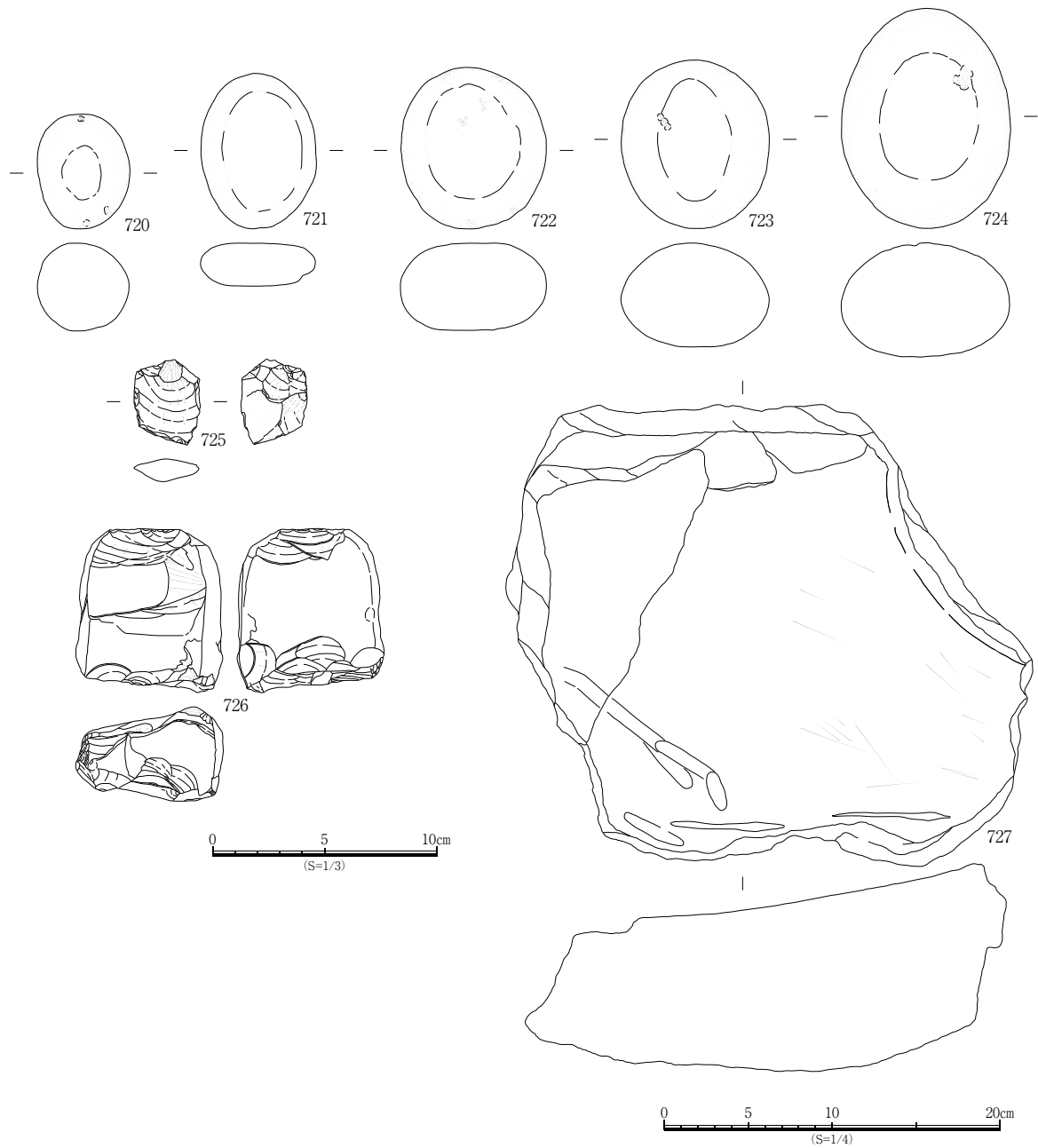


図3-94 段部4包含層遺物実測図6

701～707は石包丁の未製品である。704は緑色の凝灰岩で、その他は頁岩ある。研磨は認められず表面にはハツリ痕が残り剥離成形の段階のものである。708・709は太型蛤刃石斧である。708は一側縁が剥離する。側縁部は面取りされ、刃部は両面から丁寧な研磨が施され、主面側の側縁は使用により摩耗する。708は緑色片岩である。709は基部であり、刃部は欠損する。全体的に研磨され、側縁は面取りする。709は緑色の玄武岩である。710・711は局部磨製石斧である。棒状の先端部を研磨し、刃部のみ調整を施す。710・711とも緑色片岩である。712～715は砥石である。712は有溝砥石の断片であり、葉研状を呈した溝が認められる。泥岩製である。713は砂岩の砥石であり、直方体の二面に使用痕が認められる。両面の中央部が使用により凹む。714は扁平な細粒花崗岩で片面に平滑に研磨痕を残す。715は楕円扁平な流紋岩の砥石であり、扁平な両面、及び側辺部に研磨痕が認められる。716は石錘で、

中央部を敲打し溝を造る。流紋岩製である。717～719は叩石であり、717は両面の中央部に敲打痕が集中し凹む。718は片面の中央部に敲打痕が認められる。719は先端と側辺部に敲打痕が認められる。720～724は投弾である。720は直径4.1cm前後の球形を呈した小型の投弾である。721～723は直径6.0cm内外のやや扁平な中型の投弾である。724は直径7.5～9.9cmを測る中型の投弾であり、重量が500gを越える。725はチャートの剥片で、726は石核である。727は細粒花崗岩の砥石である。一面のみ擦痕が認められ、他は使用痕跡が認められない。

段部5 包含層出土遺物

段部5からは弥生土器片7,978点、石器類329点が包含層から出土した。段部5の中央部分ではⅡ～Ⅴ層、北西部分ではⅢ・Ⅳ層からまとまって出土した。

壺(図3-95・96)

728～761は壺である。728は細頸壺の口縁部であり、細長く延びる頸部から口縁部は外反する。器壁が薄く、口縁部は僅かに肥厚させ口縁端部はナデ調整により、水平な面を造る。口縁部外面は幅の狭い縦長の刻目を斜状に施し、下端に円形浮文を配す。頸部は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らす。その下に棒状浮文を配する。729は728に比べ法量が大きい。口縁部は外面に薄く粘土帯を貼付し、口縁端部は内側を摘みナデ調整を施し、内面は内湾気味になる。端部は内傾する面を成す。外面の施文の構成は728と同じで、口縁部外面は幅の広い刻目が施され頸部は櫛描直線文と微隆起帯が連続して施される。その下に、幅の広いヘラ状工具により上下に調整をかけて、その調整間を棒状浮文風に仕上げる。内面はヘラ状工具によるナデ調整が施され、一部に化粧土がみられる。731も728・729と同じタイプの壺の口縁部である。外面に薄く粘土帯を貼付して肥厚させ、端部は外側を摘みナデ調整を施し、外傾する面を成す。口縁部外面には幅の狭い縦長の刻目が施され、直下に粒状浮文を連続して配置する。732～735の口縁部は外反し、端部は内側を摘みナデ調整を施し内傾する面を造る。口縁部外面に薄い粘土帯を貼付し、縦長の幅の狭い刻目を施す。口縁部下端に円形浮文を配し、頸部には微隆起帯を連続して巡らす。733は外面の粘土帯貼付は認められない。735は端部を上方に摘みナデ調整を施し拡張する。円形浮文はやや下がった位置に配される。736は口縁部の開きが他に比べ小さく、口縁端部は水平な面を造る。端部外面に円形の粘土に刺突を施した浮文を並べて配する。頸部には櫛描直線文が施される。737はハケ目の様な浅い櫛描直線文と微隆起帯を連続して配する。738・739は同じ細頸タイプであり口縁部は外反する。口縁部は断面四角形の貼付口縁であり、口縁端部は面を成す。頸部には櫛描直線文を単位ごとに間隔を空けて巡らす。740は胴頸部片で、頸部に幅の広いヘラ状工具により上下に調整をかけて、その調整間を棒状浮文風に仕上げる。直下に粒状浮文を微隆起帯間に上下に並べて配する。その下は微隆起帯間に幅の狭い刻目を施す。741は胴部片であり、740と同様に頸部直下に粒状浮文を上下に並べて配し、その下の微隆起帯間に刻目を施す。胴部には櫛描直線文と微隆起帯が連続して巡り、胴部中位には微隆起帯間に幅の狭い刻目が施される。740と同一個体の可能性もある。742は断面四角形の貼付口縁であり、ナデ調整が施される。無文である。743は口縁端部を丸く収める。口縁端部からやや下がった位置に浮文を配する。744は頸部から緩やかに外反し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。口縁端部外面に間隔を空けて刻目を配する。745は口縁端部を上下に摘みナデ調整により拡張し、外面中央がナデ調整により凹む。744・745は胎土にチャートを含み色調は橙色を呈する。746は頸部から口縁部にかけて

3. 検出遺構と出土遺物

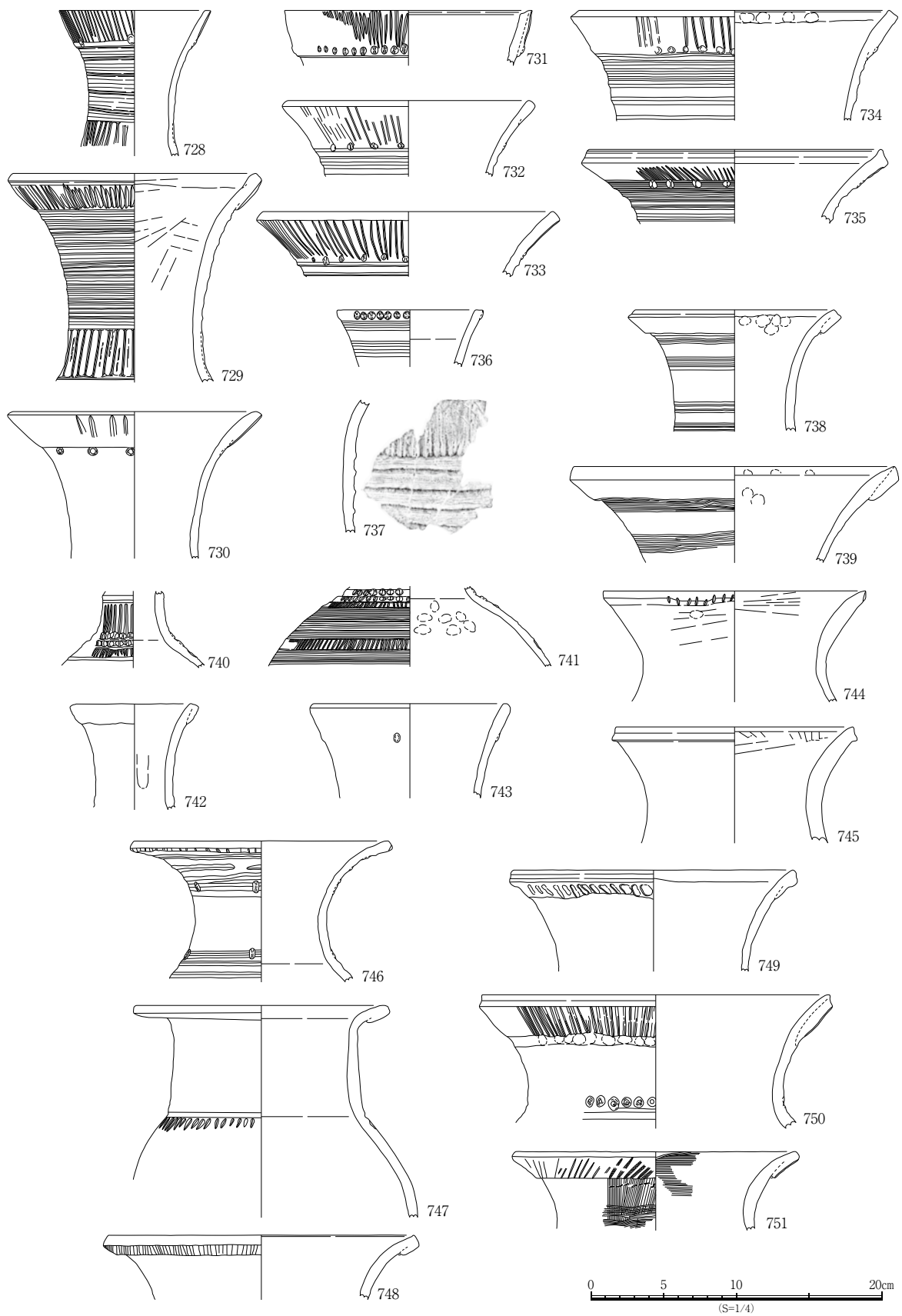


図3-95 段部5包含層遺物実測図1

大きく外反する。口縁端部は面を成し、下端に刻目を施す。直下に断面三角形の微隆起帯を二条巡らす。頸部上位と下位に櫛描直線文を巡らし、その上に粒状浮文を貼付する。胴部には微隆起帯を巡らす。747は胴部から頸部にかけて窄まり、頸部は直立し口縁部は外反する。口縁端部は断面四角形の貼付口縁でありナデ調整を施す。口縁部から頸部にかけて無文であり、頸部と胴部の境目には沈線が巡る。直下に縦長の刻目を列点状に施す。747は胎土にチャートを含み色調は橙色を呈する。748は断面四角形の貼付口縁であり、ナデ調整により端部外面に面を成す。外面に刻目を施す。749は貼付口縁であり、口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し外面に面を成す。外面貼付帯は連続した指頭圧痕である。無文である。750は貼付口縁であり、口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。貼付帯下端には指頭圧痕が連続する。口縁部外面には縦長の刻目を施す。頸部と胴部の境目には円形の粘土を貼付し、竹管刺突を施した浮文が配される。胎土はチャートを多く含み、色調は黄橙色を呈する。751は断面四角形の貼付口縁である。外面にハケ状工具による刻目を斜状に施す。頸部外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整が施される。口縁部貼付帯直下に爪状圧痕が連続して巡る。752は口縁部と胴部の接点が見つからなかったが同一個体として取り上げる。口縁部は断面楕円形の貼付口縁であり、口縁端部は丸く収める。外面は幅の狭い刻目が施される。頸部は無文でナデ調整が施される。胴部は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らす。753は断面楕円形の貼付口縁であり、口縁端部は丸みを持つ。貼付帯外面に横方向の強いナデ調整を施し段が生じる。口縁部から頸部は無文で頸部と胴部の境目に刻目を施す。754は張りのある胴部から頸部にかけて窄まり、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。胴部最大径と口径がほぼ同じ指数を示す。口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し、外面は面を成す。端面下端に刻目を施し、口縁部下には櫛描直線文を施す。胴部は櫛描直線文を単位ごとに間隔を空けて四条巡らす。その下に縦長の刻目を配する。胎土はチャートを多く含み、色調は黄橙色を呈する。755～757は凹線文系の壺である。755は頸部から外反気味に開き口縁部は内側に屈曲し口が窄まる。屈曲部は外方に摘みナデ調整を施す。口縁端部も外側に摘みナデ調整を施し、面を成す。口縁部外面には凹線文を巡らす。細頸壺の口縁部と思われる。756・757は無頸壺と思われる。756の口縁端部は内側に摘みナデ調整を施し水平な面を成す。外面には凹線文を巡らし、左右2ヶ所に、757は上下2ヶ所に円孔を穿つ。757の外面には斜状にハケ状工具の先端で刺突した様な刻目が施される。755～757の胎土には細粒のチャート礫を僅かに含み、色調は橙色を呈する。758・759は胴部片である。758は平底の底部から内湾しながら立ち上がる。内外面ともナデ調整が施される。胎土には細粒のチャート礫を僅かに含み、色調は橙色を呈する。759は張りのある胴部であり、外面下位はヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。760は平底から胴部が長く延び、胴部上半に最大径がくる。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部はナデ調整により面を成す。全体的にナデ調整で仕上げる。761は胴部上位に最大径があり、頸部にかけて窄まり、口縁部は直立気味に立ち上がり、僅かに外反する。口縁部は外面に粘土を貼付しており、肥厚する。外面胴部下半にはヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。

甕(図3-97・98)

762～791は甕である。762は口縁部がラップ状に大きく開き、胴部径より口径が大きい。端部は肥厚し上端を摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。端部外面には刻目を施し、頸部は無文、胴部は櫛描直線文と微隆起帯を巡らす。頸部と胴部の境目には円形の粘土に刺突を施した浮文を櫛描直線文の上に配する。763も胴部径より口径が大きい。口縁部は肥厚し、端部は丸みを帯び

3. 検出遺構と出土遺物

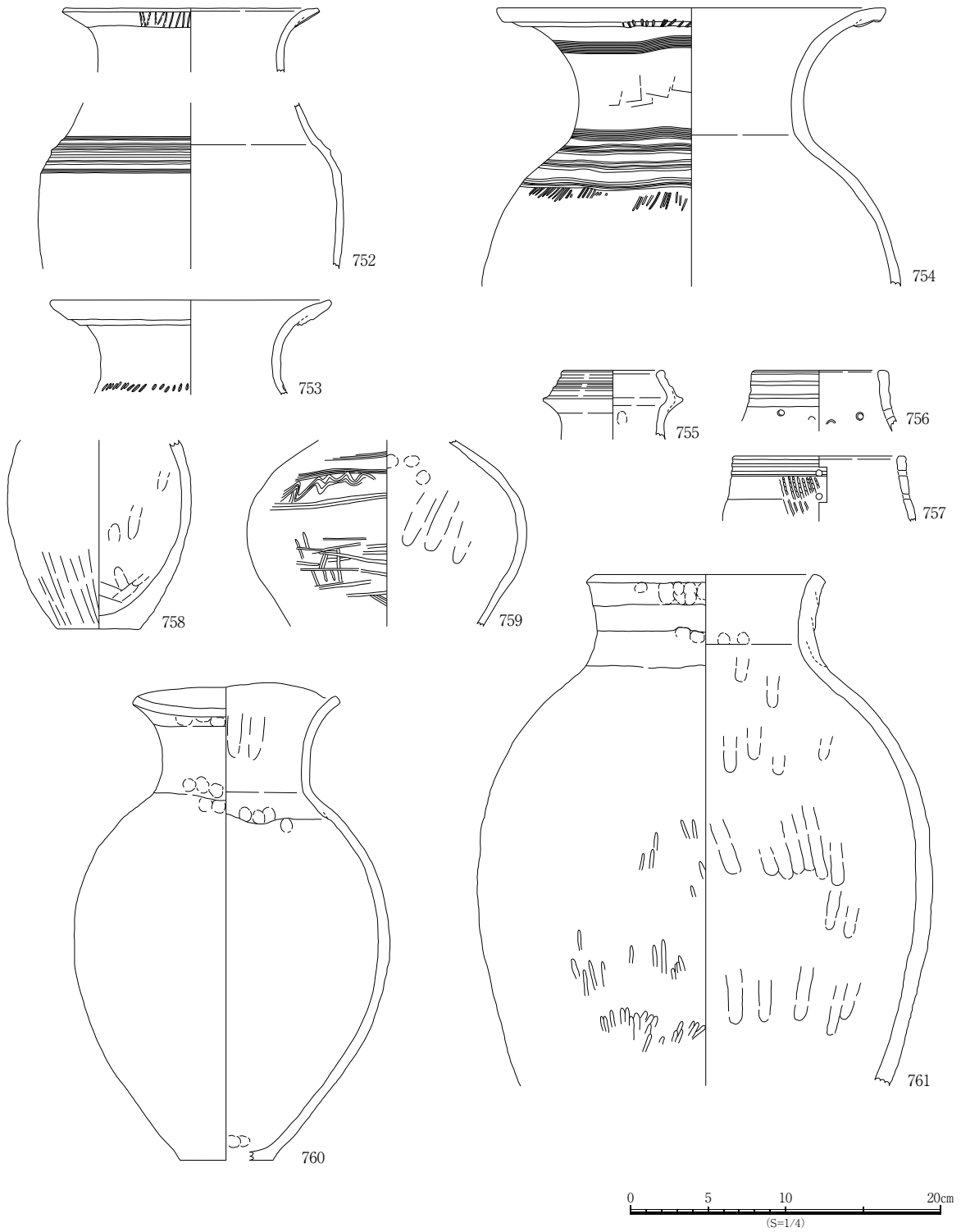


図3-96 段部5包含層遺物実測図2

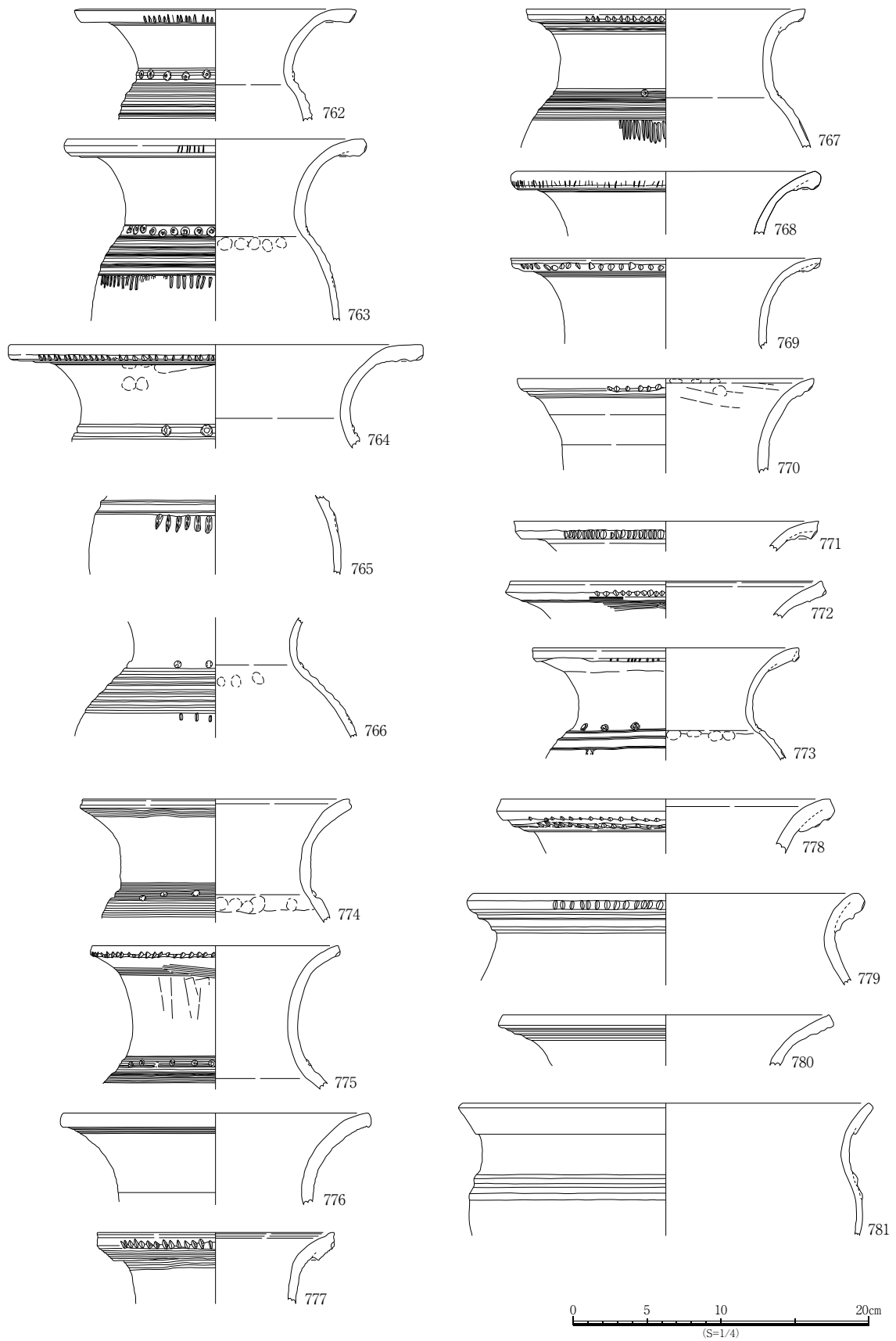


図3-97 段部5包含層遺物実測図3

3. 検出遺構と出土遺物

る。端部外面に刻目を施し、口縁部下端に櫛描直線文と微隆起帯を巡らす。頸部と胴部の境目には円形の粘土に刺突を施した浮文を配し、胴部には櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らし、直下に棒状浮文を配する。764は口径が大きく法量の大きい甕である。口縁端部は肥厚させナデ調整を施し外側に面を成す。端面下端に刻目を施し、直下に櫛描直線文を巡らす。頸部下位には沈線文間に円形の粘土に刺突を施した浮文を配する。765は胴部片であり、二条の微隆起帯を巡らし、その下に棒状浮文を配する。766の胴部片は外面に円形浮文を配し、直下に微隆起帯を連続して配し、その下に退化した棒状浮文を配する。767は胴部から頸部が直立し、口縁部にかけて外反する。口縁端部を摘みナデ調整を施し、下端に刻目を施す。口縁部外面には櫛描直線文と微隆起帯を巡らす。頸部は無文で上胴部に櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らす。その下に縦長の刻目を施す。768の口縁部は玉縁状に肥厚し、端部は丸みを持つ。外面下端に弱い刻目を施し直下に櫛描直線文と微隆起帯を巡らす。769の口縁部は断面形が台形を呈し、端部上端を摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。下端に刻目を施し、貼付帯下端に微隆起帯、直下に櫛描直線文を巡らす。770は口縁端部にナデ調整を施し、尖り気味に仕上げる。外面に刻目を施す。771は口縁端部の上下を摘みナデ調整を施し、断面三角形状に肥厚する。外面下端に刻目を施す。772は上方に摘みナデ調整を施し、外側に面を成す。端面下端に刻目を施し、直下に微隆起帯を一条、櫛描直線文を巡らす。773の口縁部は緩やかに外反し、端部は上方に摘みナデ調整が施され、外側に面を成す。下端に僅かに刻目を残し、胴部には円形の粘土を貼付し、竹管刺突を施した浮文を配する。その下に細い微隆起帯を三条巡らす。器壁が薄い。774は胴部から頸部にかけて窄まり、胴部と頸部の境目に明瞭な段が生じる。頸部は直立し口縁部は外反する。口縁部は肥厚し、端部は上方に摘みナデ調整を施し、外側に面を成す。外面に櫛描直線文を施す。頸部下位から上胴部にかけては櫛描直線文が施され、胴部と頸部の境目に円形浮文を疎らに配する。775は頸部から口縁部にかけて間延びしながら外反する。口縁端部はナデ調整を施し、外面に面を成す。端面下端に刻目を施し、口縁部の下位に櫛描直線文を施す。胴部は櫛描直線文と微隆起帯を連続して巡らし、胴部と頸部の境目には円形の粘土に刺突を施した浮文を配する。776の口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、外面は面を成す。口縁部外面には櫛描直線文が巡る。777は断面台形の貼付口縁であり、口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、貼付帯の上端と下端を摘み、上端には刻目を施し、下端は微隆起帯状に仕上げる。口縁貼付帯の外面から直下まで櫛描直線文が施される。778の口縁部は分厚く、玉縁状に肥厚する。口縁端部を摘みナデ調整を施し、外側に面を成す。口縁貼付帯の外面は横方向のナデ調整により、二条の微隆起帯状に仕上げ、二段の刻目を施す。779の口縁部は「く」の字状に外反し、玉縁状に肥厚する。口縁端部は丸みを持ち外面に刻目を施す。口縁貼付帯の外面にはナデ調整により二条の微隆起帯を造る。780は776と同じタイプである。口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ、外面は面を成す。口縁部外面には櫛描直線文が巡る。781は法量が大きく、大型の鉢の可能性も考えられる。張りのある胴部から口縁部は緩やかに外反し、口縁部は断面長方形の貼付口縁である。ナデ調整が施され、口縁端部及び外面は平らな面を成す。胴部と頸部の境目には二条の微隆起帯が付く。778～781は胎土にチャート・石英粒を多く含み、色調が橙色～黄橙色を呈する。782～784は「く」の字に外反する甕である。782・783の口縁部は貼付口縁であり、口縁端部は下方に摘みナデ調整を施し外面に面を成す。口縁貼付帯の外面には指頭圧痕が連続する。784の口縁部は短く「く」の字に外反し、端部はナデ調整が施され、面を成す。胎土にはチャートを含み色調は橙色を呈する。785は小型の甕であり、肩の張

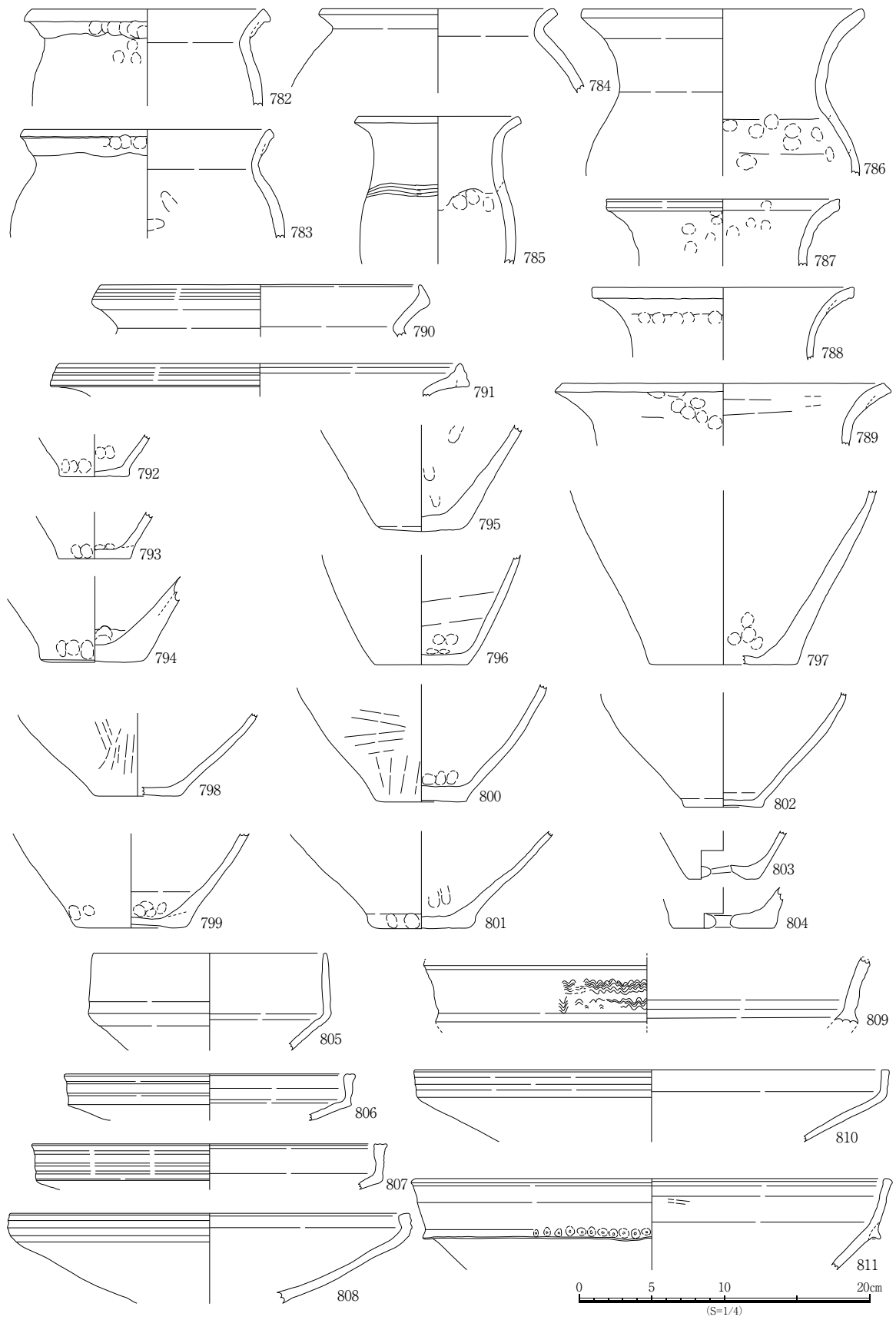


図3-98 段部5包含層遺物実測図4

3. 検出遺構と出土遺物

らない胴部から上方に間延びし、口縁部は外反する。全体的にナデ調整が施され、口縁端部は面を成す。胴部外面には櫛描直線文が施される。内面胴部と頸部の境目に接合痕が認められる。786は胴部から頸部が延び、口縁部にかけて外反する。口縁部はナデ調整が施され、端部は面を成す。胴部内面には接合痕が認められる。胎土にはチャートを含み色調は黄橙色を呈する。787は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。端部は上方に摘みナデ調整を施し、外側に面を成す。ナデ調整が施され、胴部内外面には指頭圧痕が顕著である。胎土にはチャートを含み色調は橙色を呈する。788・789の口縁部は外反し、口縁端部はナデ調整を施し外側に面を成す。口縁部外面に指頭圧痕が顕著であり、貼付の痕が残る。792～804は底部片である。792・793は平底で段を持って立ち上がる。器壁が他に比べ薄い。793は外底部の一部にタール付着。794は厚みのある底部であり、内外面に指頭圧痕が顕著である。795・796は平底から上方に直線的に立ち上がる。ナデ調整が施される。796は器壁が薄い。797は平底で底径が大きく器壁が薄い。底部から上方に直線的に立ち上がり、胴部中位で器壁が薄くなる。ナデ調整が施される。798は平底から外方に開く。器壁が薄くナデ調整が施される。799は内底部周縁の接合部を指頭により押圧することで凹む。ナデ調整が施される。800・801は平底から段を持って内湾気味に立ち上がる。ナデ調整が施される。802は平底で底部の器壁が薄く、丁寧なナデ調整が施される。胴部中位で器壁が薄くなる。803・804は甑の底部片である。803は焼成後、外から内の穿孔が認められる。804は底部中央に焼成前穿孔が認められる。

高杯(図3-98・99)

805～820は高杯であり、805～811は杯部、812～820は脚部である。805は体部から口縁部は上方に直立して延び端部は尖り気味に仕上げる。ナデ調整が施され、外面の屈曲部は外方に摘みナデ調整を施す。806は体部から口縁部は上方に屈曲し、端部は外方に摘みナデ調整を施し水平な面を成す。口縁部外面に凹線文を巡らす。807の口縁部は端部を僅かに外方に拡張し、水平な面を成す。外面には凹線文を巡らす。808は体部から口縁部を内湾気味に屈曲させる。口縁端部は面を成し、外面の体部と口縁部の屈曲部はナデ調整により丸みを帯びる。口縁部外面に凹線文を巡らす。809の口縁端部及び体部は欠損する。外面口縁部と体部の接合部は外方に摘みナデ調整を施し突帯状に仕上げる。外面には櫛描による波状文が施される。全体的にナデ調整が施される。808・809は胎土にチャート・石英粒を含み、色調が橙色を呈する。810は体部から口縁部は上方に屈曲し、端部はナデ調整により水平な面を成す。外面にはナデ調整により弱い凹線文を巡らす。811は体部から口縁部は上方に折れ、開きながら外方に延びる。口縁端部は内外に摘みナデ調整を施し、面を成す。外面の体部と口縁部の屈曲部には、断面三角形の鏢状の突帯が付き、上面に竹管刺突文を連続して配する。胎土には石英粒を含み、色調は橙色を呈する。812の裾部は端部を外方に摘み強いナデ調整を施し、端面中央部が凹む。裾端部上面は沈線が巡る。脚部内面はナデ調整とヘラケズリが施される。外面はヘラミガキを施す。胎土にはチャートを含み、色調は橙色を呈する。813は裾端部の上端を外方に摘みナデ調整を施して拡張する。外面には10個1単位の刺突文を配する。内面はヘラケズリが施される。胎土にはチャートを含み、色調は黄橙色を呈する。814は裾端部を上方に拡張する。外面に鋸歯文と櫛描直線文が施される。脚部内面はヘラケズリが施される。815は裾端部を上下に拡張し、端面中央部は凹む。外面は櫛描直線文とヘラ描きによる垂線が施される。816の裾部は大きく開く。裾端部を上方に拡張し、端面には凹線文を巡らす。内外面ともナデ調整が施される。817は大型の高杯脚部と思われる。裾端部の上端を水平に引き出す。裾部外面には凹線文が施され、脚部には刻目を施す。胎土にはチャート



図3-99 段部5包含層遺物実測図5

3. 検出遺構と出土遺物



図3-100 段部5包含層遺物実測図6

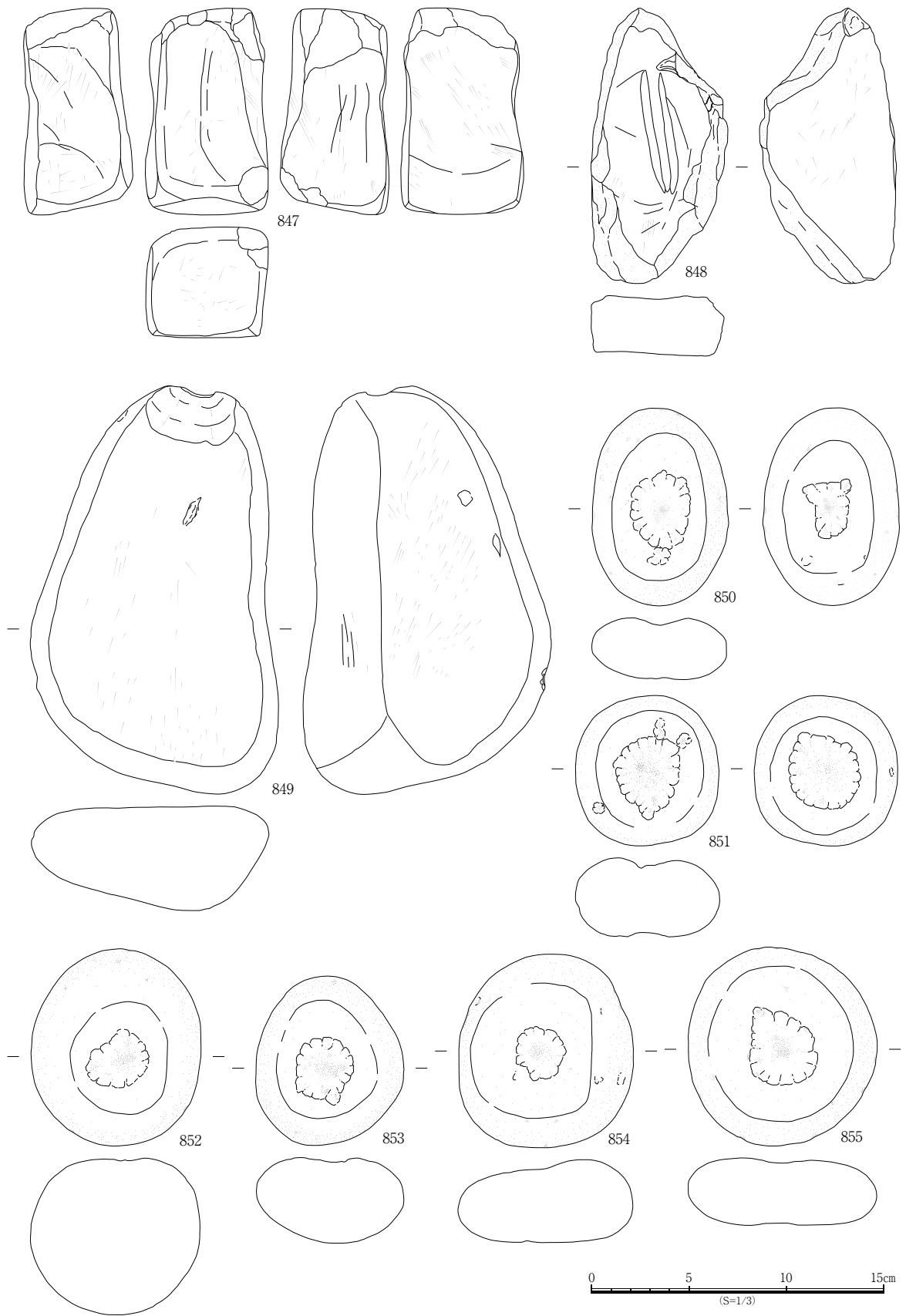


図3-101 段部5包含層遺物実測図7

3. 検出遺構と出土遺物

を含み、色調は橙色を呈する。818の裾部はラッパ状に開き、端部は丸く収める。中央部に直径1.2cmの円孔を穿つ。ナデ調整が施される。胎土にはチャートを含み、色調は黄橙色を呈する。819の杯部と脚部の接合部は円盤充填である。脚内部の杯部寄りには絞り目、下位はヘラケズリが認められる。胎土にはチャートを含み、色調は橙色を呈する。820の杯部と脚部の接合部は円盤充填である。外面にヘラ描きによる沈線文が施され、直下に円孔を穿つ。脚部内面には絞り目が認められる。胎土には赤色チャートを含み、色調は橙色を呈する。

鉄器・石器(図3-99~102)

821は鉄器である。袋状鉄斧であり、全長11.8cm、袋部幅3.5cm、袋部の厚みは0.5cm、刃部は0.7cmで、重量は178.0gを測る。袋部の両端は外側に開き、刃部も僅かに撥状に開く。段部5の包含層Ⅱ層からの出土である。822~869は石器である。822~827は打製石鏃で、全てサヌカイト製である。822は凹基式で表裏面とも平滑に仕上げる。823も凹基式で基部の両翼及び先端が欠損する。822・823は全長2.3~2.4cmを測り、小型に属する。824は全長3.7cmを測る凹基式の大型の石鏃である。刃部の一側辺が欠損する。基部をハツリ、両翼を造る。825~827は平基式の石鏃である。825・826は全長2.4~2.5cmを測る小型であり、基部の両端をハツリ、丸みを持つ。826は基部の中央部が欠損し凸基の形状になる可能性がある。827は全長3.3cmを測り、大型の石鏃である。表裏面を平滑に仕上げる。828~834は磨製石包丁である。828は紐孔部から片方が欠損する。有側の弱直背弱凸刃の形態と思われ、刃部は片刃に仕上げる。刃部面は研磨されるが、裏面は未調整である。背側部も研磨は認められず、未調整である。紐孔を穿つための敲打痕が両面に残る。結晶片岩製である。829は紐孔部から片方が欠損する。無側の弧背弱凸刃の形態と思われ、刃部は側部に向かって弧状を呈する。全体的に丁寧な研磨が施され、刃部は片刃に仕上げる。紐孔を穿つための敲打痕が両面に残る。砂岩製である。830は紐孔部から片方が欠損する。無側で弧背直刃の形態と思われる。頁岩製であり管状工具により紐孔を穿つ。全体的に丁寧な研磨が施され、刃部は片刃に仕上げ、背部は面取りされる。831は欠損しており全体の形状は不明であるが、830と同じ無側で弧背直刃の形態になるとと思われる。紐孔の穿孔具は管状工具による。頁岩製である。832は有側の直背直刃の形態である。背部側が刃部側より幅が広い。刃部面は丁寧な研磨が施されるが、裏面の刃部以外は未調整である。中央に一穴紐孔を穿つ。片岩製である。833も幅の狭い有側の直背直刃の形態である。紐孔部から片方は欠損する。全体に丁寧な研磨が施され、刃部側を厚く片刃に仕上げる。背部は丸みを持ち、側部は一部面取りがみられる。片岩製である。834は砂岩製の石包丁の断片であり、紐孔部から左右が欠損する。全体的に丁寧な研磨が施される。刃部は両面から研磨を施し両刃に仕上げる。紐孔は管状工具による。835は頁岩製の石包丁未製品である。背部、刃部面のハツリが認められ剥離成形の段階のものである。一部に研磨痕が認められる。836・837は大型蛤刃石斧である。836は基部が細く刃部は幅が広い。側縁は面取りされ、一側縁は抉りが入る。刃部は両面から研磨が行われ、両刃に仕上げる。背面は中央部が凹む。緑色片岩製である。837は背面が欠損する。基部の幅が細く、刃部に向かって幅が広がる。側縁は基部側が丁寧な研磨が施される。緑色片岩製である。838は刃部のみ研磨した局部磨製石斧である。基部側は欠損する。扁平で側縁も面取りされる。緑色岩である。839は蛇紋岩製の扁平片刃石斧である。基部より刃部の幅が僅かに広くなり、基部、側縁ともに研磨により面取りされ直方体を呈する。840・841はサヌカイト製の剥片石器である。840は扇形に開く側を刃部に成形する。841はやや弧状を呈し、両側辺部にハツリを入れ刃部に加工する。842~849は砥石である。842・843は泥質砂岩であり、842は

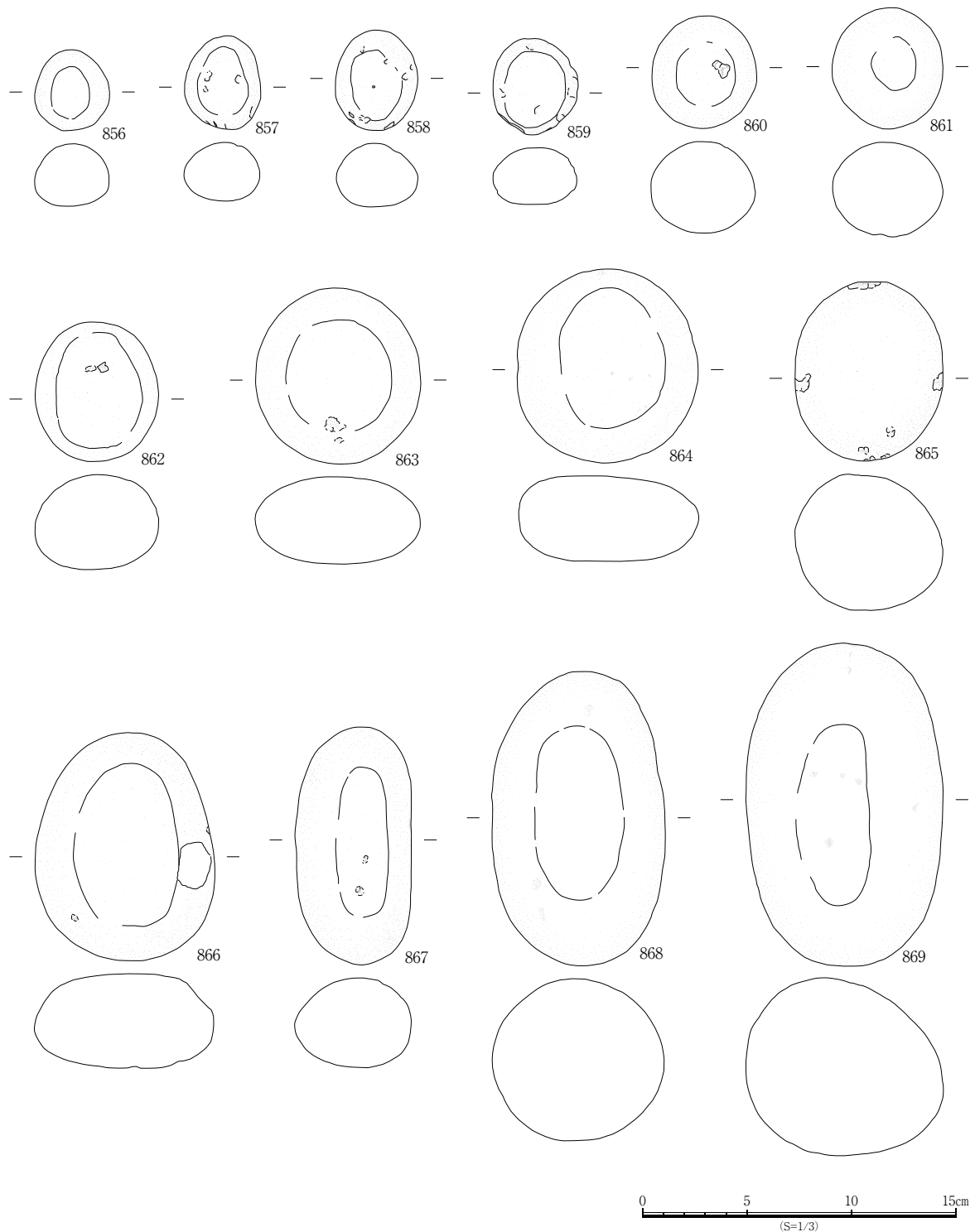


図3-102 段部5包含層遺物実測図8

両側面が欠損し、直方体状を呈する。一面のみ使用され、被熱痕跡が認められる。843は四面使用し、四面とも研磨痕が認められる。中央部に向かって研磨する事により擦り減り弧状を呈する。844は流紋岩製の砥石で扁平である。両面に使用痕が認められる。845の両面は剥離する。一側面を砥石として使用する。緑色片岩製であり、蛤刃石斧の石材の可能性も考えられる。846は砂岩であり両面を砥

4.小結

石として使用する。両面に研磨痕を残す。中央部に向かって研磨する事により擦り減り弧状を呈する。847は直方体を呈し、六面体のうち、五面を砥石として使用している。流紋岩製である。848は扁平な砂岩製の砥石であり、両面を使用する。849は流紋岩製の砥石であり、片面は稜があり、平滑な面には擦痕が顕著である。850～855は叩石である。850は扁平な楕円形の中央部に敲打による凹みがみられる。851は扁平な円形の中央部に敲打による凹みが両面にみられ、中央部は両側から凹み薄くなる。852～855は片面のみを使用する。いずれも全長7.8～10.3cmを測り、重量は339～554g前後である。852は球体を呈し、重量が979gと重い。全て細粒花崗岩である。856～869は投弾である。856～859は全長が3.9～5.8cmの小型の投弾である。球形を呈し、重量53.5～75.5gを測る。864はタール痕の付着が認められる。860～865は全長が5.4～9.3cmを測る中型の投弾である。球形のもの(860～862・865)と、扁平なもの(863・864)がある。866は一部被熱している。866～869は10.0cm以上を測る大型の投弾である。868・869は卵形を呈し、全長14.1～15.5cmを測る。重量は1,249～1,735gを測り他に比べ重量がある。投弾については以上の3タイプの規格に分かれる。全て細粒花崗岩である。段部5からは投弾が193個出土しており、各段部から出土した総数606個の割合の内31%を占める。

4.小結

三世庵地点ではIV区を中心に弥生時代中期末から後期前半にかけての遺構と遺物を検出した。IV区は丘陵の谷部の奥に位置し、従来集落が想定された調査区西側の「菖蒲谷」とは反対の谷部で集落を構成する竪穴建物跡や土坑が集中して検出された。昭和49年の三世庵地点の発掘調査では「菖蒲谷」に面した丘陵部に竪穴建物跡が検出されたが、今回は谷の奥まった標高44～58mの斜面で検出した。段部は5段検出され、その内、竪穴建物跡は4ヶ所で検出した。各段部は、標高差4～6mを持ちながら上下に並び、その段部の中で竪穴建物跡を5棟検出した。等高線に沿って丘陵沿いに並ぶ配置とは逆に、1ヶ所に集中して上下に並ぶ傾向がみられた。各段部では竪穴建物跡が建替えを含めて1棟を検出し、付属する土坑なども検出した事から、一つの段部が一世帯の単位として捉えることができる。遺物は、弥生時代中期末から後期前半の土器、石器が大量に出土した。「南四国型甕」とよばれるタイプの甕と凹線文系の高杯を中心とした遺物がまとまって出土した。弥生土器では壺・甕・鉢・高杯があり、壺・甕については器形の判別が難しいものが多いが、圧倒的に貼付口縁が多く、外面に施される刻目、櫛描文、微隆起帯、浮文の施文バリエーションが多彩である。1割ほど凹線文系の壺・甕が出土している。鉢は僅少で、全体の1割にみたない。高杯は凹線文系のもものがほとんどであり、中には在地系譜をひく貼付口縁の形態をした高杯などもみられる。石器は石包丁がIV区だけで46点出土した。また、石斧が22点出土しており生業に関わる石器が集中して出土している事も注目される。石鏃や投弾なども各段部から出土しており、高地性集落の性格を考える上で貴重な成果を得た。

岩神地点の調査成果と比較しながら遺構の立地や、遺物の組成比率など第VI章で触れてみたい。

遺構計測表

遺構計測表1 ST

遺構番号 (調査区)	規模(残存長) m			平面形	主軸方向	中央ピット主軸方向	面積(残存面積) m ²
	長径	短径	深さ				
ST1 (IV区)	6.2	5.80 (2.30)	0.23～0.45	楕円形 (半円)	N - 58° - W	N - 43° - W	10.70
ST2 (IV区)	5.05	5.00 (3.00)	0.47～0.70	楕円形 (半円)	N - 46° - W	N - 67° - W	11.68 (17.33)
ST3 (IV区)	4.35	4.35 (2.08)	0.42～0.60	隅丸方形 (半分)	N - 58° - W	N - 30° - E	5.41 (12.45)
ST4 (IV区)	4.58	4.20 (3.70)	0.27～0.42	楕円形 (半円)	N - 40° - W	N - 38° - W	10.93 (12.12)
ST5 (IV区)	5.50	5.50 (4.35)	1.30～0.15	円形	-	N - 60° - E	17.25 (22.41)
ST6 (IV区)	3.50	3.50	0.23～0.55	円形	-	N - 82° - W	7.83
ST7 (IV区)	5.00	5.00	0.35～0.62	円形	-	N - 81° - E	17.78
ST8 (II区)	3.85	3.55	0.07～0.55	円形	-	N - 33° - E	10.40

遺構計測表2 IV区ST1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P1	0.41	0.37	0.46	円形	-
P2	0.49	0.40	0.30	楕円形	-
P3	0.69	0.69	0.47	円形	弥生土器片16

遺構計測表3 IV区ST2ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
中央P	1.10	0.80	0.39	円形	弥生土器片1
P1	0.56	0.49	0.15	円形	-
P2	0.45	0.41	0.14	円形	-
P3	0.37	0.34	0.30	円形	-
P4	0.22	0.20	0.32	円形	-
P5	0.35	0.31	0.55	円形	-

遺構計測表4 IV区ST3ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
中央P	0.37	0.33	0.32	円形	-
P1	0.60	0.52	0.38	円形	-

遺構計測表5 IV区ST4ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
中央P	0.74	0.71	0.48	円形	-
P1	0.42	0.31	0.08	円形	弥生土器片4
P2	0.35	0.34	0.18	円形	-
P3	0.58	0.46	0.11	円形	-
P4	0.47	0.38	0.08	円形	-
P5	0.18	0.17	0.07	円形	-
P6	0.16	0.13	0.05	円形	-
P7	0.14	0.14	0.23	円形	-
P8	0.26	0.21	0.06	円形	-
P9	0.6	0.23	0.1	不整形	-
P10	0.22	0.2	0.11	円形	-
P11	0.24	0.19	0.07	円形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P12	0.17	0.14	0.06	円形	-
P13	0.16	0.15	0.05	円形	-
P14	0.12	0.11	0.08	円形	-
P15	0.19	0.15	0.08	楕円形	-
P16	0.1	0.07	0.08	円形	-
P17	0.18	0.15	0.1	円形	-
P18	0.17	0.11	0.09	楕円形	-
P19	0.14	0.12	0.12	円形	-
P20	0.31	(0.31)	0.23	円形	-
P21	0.32	0.32	0.22	円形	-
P22	0.37	0.37	0.12	円形	-

遺構計測表6 IV区ST5ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
中央P	1.31	0.67	0.43	楕円形	弥生土器片4
P1	0.06	0.05	0.06	円形	-
P2	0.33	0.31	0.08	円形	-
P3	0.11	0.08	0.09	円形	-
P4	0.11	0.11	0.25	円形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P5	0.41	0.14	0.07	不整形	-
P6	0.2	0.15	0.12	円形	弥生土器片3
P7	0.08	0.05	0.03	円形	-
P8	0.05	0.04	0.05	円形	-
P9	0.06	0.05	0.08	円形	-

遺構計測表7 IV区ST5ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P10	0.53	0.40	0.40	楕円形	-
P11	0.23	0.22	0.44	円形	-
P12	0.34	0.22	0.20	円形	-
P13	0.12	0.11	0.06	円形	-
P14	0.06	0.05	0.06	円形	-
P15	0.13	0.13	0.27	円形	-
P16	0.14	0.12	0.37	円形	-
P17	0.08	0.08	0.09	円形	-
P18	0.06	0.06	0.10	円形	-
P19	0.06	0.50	0.06	円形	-
P20	0.16	0.15	0.30	円形	-
P21	0.11	0.10	0.11	円形	-
P22	0.07	0.07	0.14	円形	-
P23	0.06	0.06	0.10	円形	-
P24	0.05	0.04	0.06	円形	-
P25	0.06	0.06	0.05	円形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P26	0.05	0.04	0.05	円形	-
P27	0.06	0.05	0.07	円形	-
P28	0.06	0.06	0.15	円形	-
P29	0.09	0.08	0.15	円形	-
P30	0.05	0.05	0.10	円形	-
P31	0.10	0.07	0.18	円形	-
P32	0.69	0.26	0.16	円形	-
P33	0.10	0.09	0.07	円形	-
P34	0.17	0.13	0.06	円形	-
P35	0.1	0.10	0.04	円形	-
P36	0.14	0.11	0.14	円形	-
P37	0.16	0.13	0.14	円形	-
P38	0.12	0.12	0.13	円形	-
P39	0.2	0.20	0.06	円形	-
P40	0.25	0.20	0.10	円形	-

遺構計測表8 IV区ST6ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
中央P	0.77	0.33	0.34	楕円形	弥生土器片1
P1	0.71	0.29	0.11	楕円形	弥生土器片3
P2	0.13	0.12	0.1	円形	弥生土器片1

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P3	0.13	0.12	0.03	円形	-
P4	0.17	0.13	0.09	円形	-
P5	0.18	0.16	0.26	円形	-

遺構計測表9 IV区ST7ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
中央P	1.28	0.59	0.40	楕円形	-
P1	0.37	0.31	0.28	楕円形	弥生土器片3
P2	-	-	-	-	弥生土器片1
P3	0.31	0.17	0.18	楕円形	叩石1
P4	0.18	0.13	0.41	楕円形	弥生土器片2
P5	0.30	0.28	0.09	円形	-
P6	0.29	0.25	0.20	円形	-
P7	0.14	0.13	0.21	円形	-
P8	0.33	0.26	0.75	楕円形	-
P9	0.12	0.10	0.14	円形	-
P10	0.12	0.09	0.03	円形	-
P11	0.09	0.07	0.06	円形	-
P12	0.09	0.08	0.20	円形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P13	0.12	0.08	0.15	円形	-
P14	0.09	0.07	0.04	円形	-
P15	0.09	0.07	0.14	円形	-
P16	0.10	0.08	0.13	円形	-
P17	0.09	0.09	0.12	円形	-
P18	0.09	0.08	0.21	円形	-
P19	0.17	0.12	0.18	楕円形	-
P20	0.11	0.08	0.11	楕円形	-
P21	0.11	0.11	0.19	円形	-
P22	0.11	0.11	0.14	円形	-
P23	0.14	0.11	0.15	円形	-
P24	0.33	0.26	0.53	楕円形	-

遺構計測表10 IV区ST8ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
中央P	0.81	0.62	0.34	楕円形	-
P1	0.27	0.24	0.66	楕円形	弥生土器細片3
P2	0.23	0.21	0.16	円形	-
P3	0.22	0.2	0.13	円形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P4	0.15	0.14	0.09	円形	-
P5	0.11	0.1	0.12	円形	-
P6	(0.17)	0.15	0.23	円形	-
P7	0.48	0.42	0.20	円形	-

遺構計測表 11 SK

遺構番号(調査区)	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
SK5(Ⅳ区)	-	(0.40)	(0.35)	0.10	楕円形	-
SK6(◇)	N-70°-W	1.40	1.09	0.28	楕円形	弥生土器1
SK7(◇)	N-25°-E	1.70	1.15	0.23	楕円形	弥生土器片39・投弾1・石不明2
SK8(◇)	-	1.20	1.10	0.36	不整形	弥生土器片49・投弾2
SK9(◇)	N-21°-E	0.90	0.65	0.07	楕円形	-
SK10(◇)	N-75°-W	2.30	(1.20)	0.28	不整形	弥生土器片75
SK11(Ⅰ区)	N-41°-E	1.06	0.90	0.30	円形	白磁1・木炭
SK12(◇)	N-24°-W	(0.78)	0.78	0.59	円形	近世陶器片1
SK13(◇)	N-62°-W	0.99	0.98	0.24	円形	-
SK14(◇)	N-43°-W	1.12	1.05	0.32	円形	近世陶器片1・近世磁器片1
SK15(◇)	N-69°-W	0.73	(0.44)	0.29	円形	須恵器細片1
SK16(Ⅱ区)	N-31°-E	1.10	1.10	0.28	円形	弥生土器片・石鏃材(頁岩)1
SK17(◇)	N-33°-E	1.10	1.08	0.34	円形	-
SK18(◇)	N-49°-E	1.25	1.04	0.44	円形	-
SK19(◇)	N-30°-E	1.05	0.87	0.30	円形	-
SK20(Ⅲ区)	N-50°-W	2.20	1.84	0.40	円形	-
SK21(Ⅱ区)	N-63°-W	1.36	1.20	0.28	円形	鉄釘1
SK22(Ⅳ区)	N-35°-W	0.65	(0.55)	0.17	円形	弥生土器片3
SK23(Ⅱe区)	N-25°-E	0.99	0.64	0.12	楕円形	弥生土器細片6
SK24(Ⅳ区)	-	0.62	(0.31)	0.16	円形	弥生土器片1
SK25(Ⅱe区)	N-28°-E	2.08	0.75	0.36	楕円形	弥生土器細片2・石斧1
SK26(◇)	N-30°-E	(1.71)	1.48	0.20	楕円形	-
SK27(Ⅳ区)	N-30°-E	1.00	0.83	0.28	楕円形	-
SK28(◇)	-	-	0.71	0.38	楕円形	弥生土器片31・石鏃材(赤色粘板岩)1
SK29(◇)	N-35°-W	0.78	0.73	0.26	円形	-
SK30(◇)	N-27°-W	0.92	0.79	0.44	円形	弥生土器片4
SK31(◇)	N-55°-W	1.47	1.03	0.28	楕円形	弥生土器片27
SK32(◇)	N-70°-E	0.92	0.67	0.17	楕円形	弥生土器片9
SK33(◇)	N-51°-E	1.94	1.48	0.33	円形	弥生土器片152・叩石1・石鏃未製品1・石材(サヌカイト)4・石核(チャート)1・砥石1・投弾4
SK34(Ⅱn区)	N-70°-E	1.65	0.84	0.26	隅丸方形	弥生土器細片12
SK35(Ⅳ区)	-	(2.78)	(2.10)	0.46	円形	弥生土器片9
SK36(◇)	N-85°-E	1.55	0.58	0.26	楕円形	弥生土器片2
SK37(◇)	N-69°-E	0.76	(0.52)	0.15	楕円形	-
SK39(◇)	N-65°-E	0.64	0.39	0.18	楕円形	弥生土器片1
SK40(◇)	N-56°-E	(0.75)	0.42	0.06	楕円形	-
SK41(◇)	N-48°-W	1.44	1.18	0.20	楕円形	弥生土器片14
SK42(◇)	N-69°-W	0.93	0.89	0.30	円形	-
SK43(◇)	N-29°-W	0.68	0.44	0.20	楕円形	弥生土器片2
焼土1(◇)	N-31°-E	0.80	0.63	-	円形	弥生土器片4
焼土2(◇)	N-31°-E	0.98	0.81	-	円形	弥生土器片47
焼土3(◇)	-	0.58	0.47	-	円形	-
焼土坑4(◇)	N-37°-E	0.48	0.48	0.28	円形	-
焼土坑5(◇)	N-21°-W	1.03	1.00	0.20	円形	弥生土器片22・投弾1

遺構計測表12 SK

遺構番号(調査区)	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
焼土坑 6 (Ⅳ区)	N - 62° - W	2.00	1.45	0.18 ~ 0.27	隅丸方形	弥生土器片111・投弾1
焼土坑 7 (◇)	N - 21° - W	0.67	0.61	0.11	不正円形	弥生土器片3
焼土坑 8 (◇)	N - 66° - W	1.25	0.63	0.27	楕円形	弥生土器片50・投弾1
焼土坑11 (◇)	N - 11° - E	0.55	0.45	-	楕円形	-
焼土坑12 (◇)	N - 26° - W	0.63	0.60	0.12	円形	-
焼土坑13 (◇)	N - 36° - E	0.68	0.65	-	円形	-
焼土坑14 (◇)	N - 75° - E	1.02	0.69	-	楕円形	弥生土器片3

遺構計測表13 SD

遺構番号(調査区)	主軸方向	規模(m)			出土遺物
		長径	短径	深さ	
SD1 (Ⅱe区)	N - 21° - E	8.50	0.17 ~ 0.55	0.06 ~ 0.15	弥生土器3・弥生土器細片54
SD2 (Ⅳ区)	N - 80° - W	12.24 (全体)	0.56 ~ 0.89	0.04 ~ 0.30	弥生土器片43・石鏃1
SD3 (◇)	N - 30° - W	-	0.49 ~ 0.72	0.17 ~ 0.23	弥生土器片49
SD4 (◇)	N - 32° - W	-	0.33 ~ 0.79	0.20 ~ 0.47	弥生土器片62・投弾2
SD5 (◇)	N - 51° - W	-	0.60 ~ 1.06	0.04 ~ 0.33	弥生土器片27・投弾1
SD6 (◇)	-	0.28	(0.24)	0.12	弥生土器片2
SD7 (◇)	N - 15 ~ 34° - W	8.16	0.28 ~ 0.88	0.10 ~ 0.43	弥生土器片31・投弾1
SD8 (◇)	N - 49° - W	(1.44)	0.28 ~ 0.56	0.20	弥生土器片1・棒状石器1
SD9 (◇)	N - 8.6° - E	8.18	0.29 ~ 0.88	0.15	弥生土器片6

遺構計測表14 SX

遺構番号(調査区)	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
SX3 (Ⅳ区)	N - 39° - E	(2.28)	1.55	0.30	楕円形	弥生土器片117・石鏃1・石鏃材(サヌカイト)2・扁平石1・投弾4

遺構計測表15 Ⅱ区SA1

遺構名(調査区)	主軸方向	柱穴数	総長(m)	柱間(m)	柱径(m)
SA1 (Ⅳ区)	N - 36 ~ 86° - W N - 62 ~ 89° - W	8	12.64	1.12 ~ 2.35	0.07 ~ 0.19

遺構計測表16 Ⅳ区SA1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P1	0.41	0.38	0.27	円形	-
P2	0.23	0.20	0.24	円形	-
P3	0.21	0.19	0.18	円形	-
P4	0.26	0.23	0.24	円形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P5	0.35	0.26	0.19	楕円形	-
P6	0.40	0.36	0.35	円形	弥生土器片1
P7	0.34	0.32	0.22	円形	弥生土器片2
P8	0.45	0.45	0.25	円形	鉄鏃1

遺物觀察表

凡例

1. 遺物観察表の法量は、基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については()で記載する。
その他、器形により必要なものは直接項目に付け加えた。
2. 色調については『新版標準土色帳』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
砂粒の大きさはS:1mm未満 M:1~2mm L:2mm以上である。
4. その他、備考には器種の分類、年代のわかるものについて記載した。
5. 弥生土器の分類

口縁形態分類	文様記号
I : 貼付口縁	a : 刻目
A : 断面形が四角	b1 : 円形浮文
B : 断面形が三角(玉縁状含む)	b2 : 粒状浮文
C : 断面形が台形	c : 棒状浮文
D : 断面形が楕円形	d : 竹管刺突
E : その他・不明	e : 凹線文
	f : 沈線文
II : 貼付なし	g : 櫛描文
A : 拡張あり	h : 微隆起帯
B : 拡張なし(素口縁)	i : 文様なし
C : その他・不明	— : 部位欠損
— : 口縁欠損	

6. 石器の分類については以下の通りとする。

石鏃 I : 凹基式(A:大型・B:小型) II : 平基式

III : 凸基式(A:円基式に近い・B:基部が窄まり尖頭器状) IV : 茎を作出したもの

石包丁 I : 打製 II : 局部磨製 III : 磨製

A : 無側

B1 : 有側無扶・B2 : 有側有扶(1:直背弧刃・2:直背直線刃・3:弱直背弱凸刃・4:弱直背直線刃)

石斧 I : 太型蛤刃石斧(A:断面形が扁平楕円形・B:断面形がAより厚みがある楕円形・C:断面形が円筒形に近い)

II : 扁平片刃石斧(A:短冊形・B:分銅形もしくは台形・C:逆台形に近い)

III : 小型石斧(A:平面形は楕円形・台形状、断面は扁平・B:平面形は棒状で、断面はやや丸味をもつ)

砥石 I : 手持ち型 II : 据置型 III : その他

叩石 I : 河原石をそのまま利用したもの(A:両面を中心に敲打痕が残る・B:両面及び両側面に敲打痕が残る)

II : 河原石を打ち割った剥片を利用したもの

投弾 I : 4cm以下 II : 4~10cm III : 10cm以上

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
1	I区	SK11	白磁 皿	(15.4)	(1.5)	-	灰白色 ク ク	-	端反皿。E群。	
9	IIe区	SD1	弥生土器 壺	(22.6)	(1.8)	-	にぶい橙色 ク 灰色	チャート (M)少	凹線文が施される。	II-A e, -, -
10	ク	ク	ク 鉢	(23.4)	(3.6)	-	にぶい橙色 にぶい黄橙色 ク	チャート (M)	口縁部は外反し, 端部は丸味を帯びる。ナデ調整。	
11	ク	ク	ク 甕	(22.8)	(14.5)	-	にぶい橙色 ク 灰色	- (L)	口縁部は緩やかに外反し, 端部は下方に摘み断面三角形を呈する。頸部下位に櫛描直線文と円形浮文, 胴部境目に刻目。内外面ナデ調整。	I-B h, blg, a
12	ク	P5	ク 壺	(13.0)	(3.7)	-	灰色 ク ク	チャート・ 石英(L)多	口縁部は外反し, 端部は上方に摘み尖り気味に仕上げる。外面は櫛描直線文, ドーナツ状浮文が配される。	II-A blg, -, -
13	ク	P3	ク 甕	-	(7.2)	-	にぶい褐色 にぶい黄褐色 灰色	チャート (M)多	外面櫛描文と微隆起帯, 刻目とドーナツ状の浮文が施される。	- -, -, blgha
15	ク	III層	ク 壺	(6.6)	(3.9)	-	にぶい黄褐色 ク 灰色	チャート (M)多	口縁部は水平な面を成す。外面櫛描直線文。	II-B g, -, -
16	ク	ク	ク ク	(4.8)	(2.7)	-	浅黄色 にぶい黄褐色 黒褐色	チャート・ 石英(M)多	貼付口縁。口唇部は尖り気味に仕上げる。外面は斜状の刻目。	I-E a, -, -
17	ク	ク	ク ク	(15.6)	(8.3)	-	にぶい黄褐色 明黄褐色 ク	チャート・石 英・結晶片岩 (M)多	貼付口縁。口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。外面に刻目が施される。	I-A a, i, -
18	ク	ク	ク ク	(15.4)	(3.0)	-	にぶい橙色 ク 灰色	チャート (M)多	貼付口縁。断面長方形の口縁。端部は面を成す。ナデ調整。	I-A i, -, -
19	ク	ク	ク ク	(16.6)	(4.4)	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色 黒色	チャート・ 石英(L)	貼付口縁。端部はナデ調整, 外側に面を成す。頸部は櫛描直線文の一部が残る。	I-A i, i, -
20	ク	ク	ク ク	(14.6)	(6.4)	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色 灰色	チャート・ 黒色粒(M) 多	口縁部は緩やかに外反し, 端部は外側に肥厚, 刻目。外面口縁下端は細かい櫛状工具により微隆起帯が施される。	II-B agh, g, -
21	ク	ク	ク ク	(15.2)	(6.4)	-	橙色 ク 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部を内外に拡張, 凹線文が施される。ナデ調整。	II-A e, i, -
22	ク	ク	ク ク	(19.8)	(2.2)	-	にぶい橙色 ク 橙・黒色	チャート (M)少	端部は内外に拡張し, 外面に凹線文を施す。	I-E e, -, -
23	ク	ク	ク ク	-	(5.9)	-	橙色 ク ク	石英・ 黒色粒 (M)多	胴部一部ヘラミガキ, 内面ナデ調整。	- -, dg, -
24	ク	ク	ク ク	-	(6.7)	(14.4)	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色 黄灰色	チャート (L)少	外面体部上半ミガキが施される。	- -, -, i
25	ク	ク	ク 甕	(16.0)	(3.0)	-	にぶい黄色 ク 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は玉縁状に肥厚し, 下端に刻目が施される。	I-B a, -, -
26	ク	ク	ク ク	(17.8)	(3.5)	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色 ク	チャート・ 石英(L)多	貼付口縁。口縁部は玉縁状を呈する。ナデ調整。	I-B i, -, -
27	ク	ク	ク ク	(18.0)	(2.9)	-	灰色 ク ク	チャート・ 石英(M)多	口縁部は玉縁状に肥厚し, 下端に刻目。口唇部は尖り気味に仕上げる。外面は櫛状工具による横方向の調整。	II-B ag, -, -
28	ク	ク	ク ク	(21.0)	(5.3)	-	灰色 ク オリーブ黒色	チャート・ 石英(L)多	貼付口縁。端部は上方に摘み上げる。外面に刻目を施す。	I-A a, -, -
29	ク	ク	ク ク	(13.6)	(3.7)	-	にぶい橙色 ク 褐灰色	チャート・ 石英(L)多	口縁部は僅かに肥厚し, 端部は上方に尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	II-B i, i, -
30	ク	ク	ク ク	-	(7.2)	-	にぶい黄褐色 ク 灰色	チャート・ 石英(M)	胴部と頸部の境目に櫛描直線文。食い違い部分を修正した箇所の上に円形浮文を貼付する。胴部はナデ調整により連続する微隆起帯。	- -, blg, h
31	ク	ク	ク ク	-	(5.4)	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色 にぶい黄褐色	チャート・ 石英(L)多	胴部と頸部の境目に二条の微隆起帯を貼付する。	- -, h, -
32	ク	ク	ク 甕	(2.4)	-	5.7	灰色 ク ク	チャート (S)多	底部中央からややずれた所に焼成前に外側から穿つ。	
33	ク	ク	ク 鉢	(16.8)	(5.1)	-	にぶい橙色 ク 灰色	チャート・ 石英(L)多	貼付口縁。断面逆四角形の粘土帯を貼付する。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
34	II e区	III層	弥生土器 高杯	(11.1)	(3.1)	-	橙色 〃 灰色	- (S)	口縁端部は水平な面を成し、外部に凹線文が施される。	
45	II n区	II層	〃 壺	(16.6)	(4.8)	-	にぶい黄橙色 にぶい黄色 黒褐色	チャート・ 石英(L)多	貼付口縁。外面刻目、櫛描直線文、浮文が施される。	I - A a, b2g, -
46	〃	III層	〃 〃	(15.2)	(5.9)	-	にぶい黄橙色 〃 暗灰色	チャート (M)多	貼付口縁。口縁端部は上方に摘みナデ調整、尖り気味に仕上げる。下端に刻目。頸部は指頭圧痕とナデ調整が施される。	I - B a, b1, -
47	〃	〃	〃 〃	(12.3)	(8.4)	-	にぶい黄橙色 〃 〃	チャート・ 石英(L)多	貼付口縁。端部は丸く収める。ナデ調整。	I - D i, i, -
48	〃	〃	〃 〃	(12.8)	(5.7)	-	にぶい赤褐色 〃 〃	チャート (M)多	貼付口縁。外面に指頭圧痕。	I - D i, i, -
49	〃	〃	〃 〃	(18.8)	(7.4)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート (L)	口縁部は緩やかに外反し、端部は上方に摘み、尖り気味に仕上げる。外面は刻目、頸部は横方向の櫛描により口縁部との境目に稜ができる。	I - A ag, i, -
50	〃	〃	〃 〃	(17.4)	(8.2)	-	にぶい黄橙色 明黄褐色 灰色	チャート・ 石英(L)多	貼付口縁。外面に刻目、頸部は櫛描直線文。	I - A a, g, -
51	〃	〃	〃 〃	(21.6)	(3.2)	-	橙色 〃 にぶい橙色	チャート (L)	貼付口縁。外面に指頭圧痕。頸部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整。	I - A i, i, -
52	〃	〃	〃 〃	(38.0)	(5.7)	-	橙色 〃 〃	チャート (L)多	貼付口縁。口縁部は緩やかに外反し端部は肥厚しながら丸く収める。ナデ調整。	I - D i, -, -
53	〃	〃	〃 〃	(15.0)	(7.2)	-	灰黄色 にぶい黄色 黄灰色	- (M)	上下2方向からの刻目。一部鋸歯状になる。頸部は櫛描文。	II - B a, g, -
54	〃	〃	〃 〃	(17.2)	(6.1)	-	黄灰色 橙色 黄灰色	チャート・ 石英(S)	口縁部は緩やかに外反し、端部は上方に尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	II - B i, i, -
55	〃	〃	〃 〃	(10.0)	(3.7)	-	灰白色 淡黄色 〃	チャート (M)	頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は外側に屈曲する。端部は丸く収める。頸部中位に円孔。摩耗著しく調整不明。	II - B i, i, -
56	〃	〃	〃 〃	(11.0)	(2.8)	-	黒色 〃 灰色	- (S)少	頸部は直立し、口縁部は外側に折り曲げ端部は丸く収める。頸部に直径3～5mmの円孔。内外面ともヘラミガキが施される。	II - B -, -, -
57	〃	〃	〃 〃	(17.6)	(4.8)	-	明黄褐色 淡黄色 〃	- (S)	内面が剥離する。口縁部は外方に拡張し沈線化した凹線文が施される。頸部外面に沈線。	II - A e, f, -
58	〃	II層	〃 〃	(22.8)	(5.1)	-	灰色 灰白色 黒色	チャート (S)	粘土帯を外側に貼付し、口縁端部を外方に肥厚させる。外面に沈線化した凹線文、内面に櫛描波状文。頸部外面に沈線が施される。	I - E e, -, -
59	〃	〃	〃 〃	-	(6.4)	-	浅黄褐色 〃 灰色	チャート (M)多	貼付口縁。外面に縦方向の刻目を入れた後、下端に斜位の刻目。内面は頸部に縦方向のナデ調整。	I - E a, i, -
60	〃	III層	〃 甕	(12.8)	(6.5)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	- (M)少	口縁部緩やかに外反し、端部を玉縁状に肥厚させ、下端に刻目が施される。	I - B a, i, -
61	〃	II層	〃 〃	(17.6)	(3.4)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート (M)多	貼付口縁。口縁端部は粘土帯を付け肥厚させ、上方に摘みナデ調整を施す。頸部は横方向のナデ調整。	I - B i, i, -
62	〃	III層	〃 〃	(20.0)	(5.9)	-	橙色 にぶい黄褐色 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚し上方に摘みナデ調整、口唇部を尖り気味に仕上げる。下端に刻目。ナデ調整。	I - B a, -, -
63	〃	〃	〃 〃	(25.6)	(6.1)	-	にぶい橙色 〃 灰色	チャート・ 石英(S)	口縁部は緩やかに外反し、少し肥厚する。端部は上方に摘みナデ調整、口唇部を尖り気味に仕上げる。外面下端に刻目。	II - B a, -, -
64	〃	〃	〃 〃	(24.0)	(2.5)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	- (L)	口縁端部は上方に摘みナデ調整、尖り気味に仕上げ、外面に刻目が施される。	II - B a, g, -
65	〃	〃	〃 〃	(22.8)	(4.7)	-	褐灰色 〃 〃	- (S)多	口縁部は緩やかに外反し、端部は楕円形に仕上げる。ナデ調整。刻目と口縁下端は櫛描を施すことにより微隆起帯を配する。	I - D agh, -, -
66	〃	〃	〃 〃	(14.6)	(10.2)	-	橙色 〃 にぶい橙色	チャート・ 石英(M)	頸部と胴部の境目に櫛描直線文と刻目が施される。	- -, ag, -
67	〃	〃	〃 〃	(22.2)	(2.4)	-	明黄褐色 〃 褐灰色	- (S)	口縁部は外側に屈曲、端部は上下に拡張し沈線化した凹線文が施される。	I - A e, -, -
68	〃	II層	〃 底部	-	(2.4)	(4.0)	浅黄褐色 〃 暗灰色	- (S)少	比較的薄い底部。ナデ調整が施される。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁、頸部、胴部)
				口径	器高	底径				
69	Ⅱn区	Ⅲ層	弥生土器 底部	-	(5.1)	(5.4)	にぶい 橙色 にぶい黄 褐色	チャート (M)	厚みのある底部。ナデ調整が施される。	
70	〃	Ⅱ層	〃	-	(3.7)	6.6	にぶい黄 褐色 にぶい橙 灰色	チャート・ 石英(M)	平底から僅かに段を持ち、内湾気味に立ち上がる。	
71	〃	Ⅲ層	〃	-	(3.2)	6.2	明褐色 にぶい黄 褐色	チャート・ 石英・蛇紋 岩系(M)	ベタ底から段を持って内湾気味に立ち上がる。	
72	〃	〃	〃	-	(6.6)	5.2	暗灰色 〃 〃	チャート・ 石英(M)多	外底部は輪積みにより台形状を呈する。外面一部ヘラミガキ、内面指頭圧痕とナデ調整。器壁が薄く丁寧。	
73	〃	〃	〃 高杯	(24.0)	(5.4)	-	浅黄色 〃 灰色	チャート (M)	外面の一部にヘラミガキ。	
74	〃	〃	〃	(31.0)	(11.6)	-	橙色 〃 〃	チャート・ 石英(L)	口縁端部は内外に拡張し、水平な面を成す。口縁外面下位に二条の凹線文。	
75	〃	〃	〃	-	(3.4)	-	浅黄褐色 にぶい橙 色 浅黄褐色	- (M)	外面ヘラミガキ、脚部内面はヘラ状工具によるナデ調整が施される。円盤充填。	
76	〃	〃	〃	-	(5.7)	(8.6)	にぶい橙 色 浅黄褐色	- (M)	裾部外面に凹線文、鋸歯文。脚部に区画された直線文がヘラ描きされる。	
86	Ⅲ区	〃	〃 壺	(20.0)	(18.5)	-	にぶい赤 褐色 にぶい黄 褐色	- (S)少	口縁部は粘土を付け足し端部を上下に拡張。外面は凹線文の後斜めと縦方向の刻目。頸部二段刻目。	I-E ae, a, i
87	〃	〃	〃 甕	(17.2)	(5.7)	-	にぶい黄 褐色 暗灰色	チャート (L)	胴部から頸部はやや直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。ナデ調整。	II-B i, i, -
88	〃	〃	〃	(19.8)	(4.9)	-	橙色 〃 黄灰色	チャート・ 石英(L)	口縁部は外反し、端部は上方に摘み、ナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。外面ナデ調整。	II-B i, i, -
89	〃	〃	〃	27.9	(3.6)	-	橙色 〃 にぶい黄 褐色	チャート (L)多	口縁部は緩やかに外反し、端部は上方に摘みナデ調整、尖り気味に仕上げる。外面は面を成す。ナデ調整。	II-B i, i, -
90	〃	〃	〃 底部	-	(1.6)	5.2	明黄褐色 橙色 灰色	チャート・ 石英(S)多	外底部中央がやや凹む。	
91	〃	〃	〃	-	(4.9)	7.0	にぶい黄 褐色 黒褐色	チャート (L)多	平底。ナデ調整が施される。	
92	〃	〃	〃	-	(5.7)	7.4	浅黄色 橙色 黒褐色	- (M)多	厚い底部から段を持ち斜上方に立ち上がる。内面指頭圧痕が施される。	
93	〃	〃	〃 ミニチュア 土器	-	(2.3)	2.8	黄褐色 にぶい黄 褐色 褐色	- (M)少		
94	〃	〃	〃 高杯	(46.0)	(7.9)	-	橙色 〃 灰色	-	凹線文。体部外面の一部にヘラミガキが施される。	
95	〃	〃	〃	-	(12.1)	(13.0)	にぶい黄 褐色 橙色 灰色	- (M)少	円盤充填。脚部外面中位に櫛描直線文。端部は凹線状に凹む。	
99	Ⅳ区 (段部1)	P6	〃 甕	(19.0)	(7.1)	-	浅黄色 にぶい黄 褐色 灰色	チャート (L)多	口縁部は「く」の字に外反する。ナデ調整。	II-B i, a, i
100	〃	〃	〃 底部	-	(13.1)	6.0	灰黄褐色 〃 暗灰色	石英 (L)	外面板状工具によるナデ調整。外面の一部に煤付着。	
101	〃	〃	〃	-	(1.6)	5.6	灰白色 浅黄色 灰色	チャート・ 石英(L)	輪積み粘土の上に粘土を付け足し底部を成形する。外底部は輪状を呈する。	
102	〃	ST1	〃 甕	(18.3)	(2.9)	-	にぶい黄 褐色 灰色	チャート・ 石英(L)多	ナデ調整。	II-B a, i, -
103	〃	ST1 中央P	〃 底部	-	(3.1)	(13.4)	浅黄褐色 〃 灰白色	チャート (L)少	ナデ調整。	
105	〃	ST2	〃 壺	(12.0)	(5.1)	-	にぶい黄 色 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は尖り気味に仕上げる。	II-D bl, g, -
106	〃	〃	〃 甕	(21.4)	(1.7)	-	にぶい橙 色 灰色	チャート (M)		I-C ah, -, -

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
107	Ⅳ区 (段部1)	ST2	弥生土器 甕	(22.0)	(3.1)	-	にぶい黄橙色 暗灰色	チャート・ 石英(S)多	ナデ調整。	I - C agh, i, -
108	〃	〃	〃	(21.4)	(2.2)	-	灰色 暗灰色	チャート・ 石英(L)多		I - B ah, -, -
109	〃	〃	〃	(28.0)	(2.9)	-	褐色 にぶい黄褐色	チャート (L)多		I - E a, -, -
110	〃	〃	〃 底部	-	(3.1)	5.4	灰黄褐色 褐灰色	チャート (M)	上げ底気味に仕上げる。外面の一部に煤付着。	
113	〃	ST3	〃 壺	(18.0)	(6.5)	-	浅黄色 黄灰色	チャート・ 石英(S)多	粒状浮文。	II - B ab2, h, -
114	〃	〃	〃	(20.0)	(3.5)	-	暗緑灰色 〃	チャート・ 石英(S)多	ナデ調整。	I - A i, h, -
115	〃	〃	〃	(20.0)	(6.5)	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色 にぶい橙色	チャート (M)多	貼付口縁外面に一条の沈線文が施される。	I - E f, i, -
116	〃	〃	〃	-	(11.5)	-	にぶい赤褐色 〃	- (S)	外面胴部下半へラミガキ。	- -, -, i
117	〃	〃	〃 甕	(18.0)	(2.5)	-	明褐色 〃	チャート (S)	胎土に赤色チャート多く含む。ナデ調整。	I - A i, i, -
118	〃	〃	〃	(17.4)	(11.7)	-	灰黄褐色 黄灰色	チャート・ 石英(M)多	胴部上位に工具によるナデ調整。	I - E i, i, i
119	〃	〃	〃	(18.0)	(2.8)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色 灰色	チャート・ 石英(S)多	ナデ調整。	I - C ah, g, -
120	〃	〃	〃	(17.0)	(3.6)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色 暗灰色	チャート (S)	口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	I - B a, i, -
121	〃	〃	〃	(23.8)	(3.9)	-	にぶい黄褐色 黄灰色	チャート・ 石英(M)多	貼付口縁下に一条の沈線が施される。	I - D a, f, -
122	〃	〃	〃	(22.4)	(12.7)	-	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	チャート・ 石英(S)多	ナデ調整。	I - B a, i, cgh
123	〃	〃	〃	(17.4)	(19.8)	-	にぶい黄褐色 暗灰色	チャート・ 石英(M)	胴部最大径 14.4 cmより口縁部が外反する。口縁内面に煤付着。ナデ調整。	II - B a, i, blgha
124	〃	〃	〃	(18.0)	(4.0)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色	石英 (S)	口縁外面下端に刻目を施し、直下に強いヨコナデ調整により微隆起帯を設ける。	II - B ah, i, -
125	〃	〃	〃	(22.0)	(2.3)	-	にぶい橙色 黒色	チャート (M)	外面の一部に煤付着。ナデ調整。	II - B a, i, -
126	〃	〃	〃	(18.0)	(3.1)	-	にぶい黄褐色 灰色	チャート・ 石英(S)多	口縁端部は尖り気味に仕上げる。口縁外面ナデ調整により一条の微隆起帯を設ける。	II - B h, i, -
127	〃	〃	〃	(17.2)	(3.1)	-	にぶい橙色 灰色	石英 (S)	ナデ調整。	II - B i, i, -
128	〃	〃	〃 底部	-	(11.8)	6.6	橙色 明赤褐色 黄灰色	チャート (M)多	外底部中央が凹む。ナデ調整。赤化粘土。	
129	〃	〃	〃	-	(11.6)	5.4	にぶい黄褐色 黒褐色	石英 (S)	器壁薄い。内面と外面にタール痕有り。ナデ調整。	
130	〃	〃	〃	-	(5.8)	4.8	にぶい黄褐色 にぶい赤褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)	外底部に輪積み痕が認められる。ナデ調整。	
131	〃	〃	〃	-	(3.9)	5.2	淡黄色 浅黄色 灰色	チャート (M)	段を持つ底部。	
133	〃	SK6	〃	-	(4.7)	(6.0)	橙色 オリーブ灰色	チャート (M)	内面にタール痕有り。	
134	〃	P11	〃 甕	(18.0)	(2.2)	-	橙色 黄灰色	チャート (M)多	ナデ調整。	I - A a, -, -

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁、頸部、胴部)
				口径	器高	底径				
135	IV区 (段部1)	P11	弥生土器 甕	(20.4)	(3.1)	-	灰黄褐色 褐灰色 黒色	チャート・ 石英(M)		II-A ahg, -, -
136	〃	〃	〃	(23.0)	(4.3)	-	にぶい黄色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	II-B a, i, -
137	〃	〃	〃 底部	-	(5.5)	8.0	橙色 にぶい黄橙色 褐灰色	チャート (L)	外面ヘラ状工具によるケズリ。	
138	〃	〃	〃 高杯	(24.0)	(9.6)	-	橙色 浅黄橙色 オリーブ黒色	チャート (M)	口縁端部は内側に摘み、水平な面を作り沈線化された凹線を施す。口縁外面は三条の沈線化された凹線文。体部外面はヘラミガキ。円盤充填。	
139	〃	SK7	〃 壺	16.4	(9.8)	-	明黄褐色 〃 灰色	チャート (M)	頸部ハケ調整。胴部刻目下に波状文。	I-A a, i, a
140	〃	〃	〃 甕	(21.0)	(12.0)	-	にぶい黄橙色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	II-B i, i, ghc
141	〃	〃	〃	20.0	(14.3)	-	淡黄色 〃 黄灰色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	I-C ah, i, ghda
142	〃	SK8	〃	(15.6)	(9.5)	-	明黄褐色 浅黄橙色 オリーブ黒色	チャート (L)	ナデ調整。胴部粒状浮文。	I-E i, i, agb2
143	〃	SK10	〃 底部	-	(1.8)	6.6	浅黄橙色 黄橙色 〃	チャート (L)		
144	〃	〃	〃 高杯	-	(3.0)	(11.5)	橙色 〃 褐灰色	チャート (L)	ヘラ描沈線が施される。	
146	〃	P26	〃 壺	(10.0)	(5.0)	-	暗灰黄色 〃 〃	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	I-A a, g, -
147	〃	〃	〃 甕	(19.8)	(1.9)	-	灰色 〃 〃	-	ナデ調整。	II-B ah, -, -
148	〃	P13	〃	(13.6)	(9.7)	-	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色 灰オリーブ色	チャート・ 石英(L)	頸部刺突文。	I-B i, gd, ag
149	IV区 (段部2)	ST4	〃 壺	(20.6)	(9.6)	-	橙色 〃 灰黄色	チャート (L)	ナデ調整。	II-B i, i, -
150	〃	〃	〃	-	(14.5)	-	灰色 灰白色 浅黄橙色	チャート (L)	櫛描波状文。	- -, -, g
151	〃	〃	〃 高杯	(23.4)	(3.6)	-	橙色 〃 黄橙色	チャート・ 石英(M)	口縁部は丸味を持ちながら上方に立ち上がり、端部は水平な面を成す。外面は凹線文が施される。体部外面はヘラミガキ。	
158	〃	SK28	〃 甕	14.8	(3.7)	-	橙色 オリーブ褐色 黄灰色	チャート (S)	口縁部は尖り気味に仕上げる。ナデ調整。内面化粧土が残る。	II-B a, i, -
159	〃	〃	〃	23.8	(3.0)	-	にぶい黄橙色 浅黄橙色 灰色	- (L)	ナデ調整。	I-A i, i, -
160	〃	〃	〃	21.8	(8.1)	-	にぶい褐色 灰褐色 黒褐色	チャート (S)	ナデ調整。	II-B i, i, -
161	〃	焼土坑6	〃 壺	(14.4)	(2.3)	-	灰色 〃 〃	チャート・ 石英(M)		I-A a, -, -
162	〃	〃	〃 甕	18.0	(2.7)	-	明黄褐色 〃 〃	チャート (M)	ナデ調整。	I-B a, -, -
163	〃	〃	〃	(20.8)	(2.8)	-	橙色 〃 黒褐色	チャート・ 石英(L)	口縁端部を上方に摘みナデ調整が施され、尖る。化粧土が施される。	I-C h, -, -
165	〃	SD5	〃 壺	15.2	(3.2)	-	にぶい黄橙色 〃 灰黄褐色	チャート (S)	沈線化した凹線文。ナデ調整。	II-A e, -, -
166	〃	〃	〃	-	(10.2)	-	灰オリーブ色 〃 灰色	チャート (M)	ナデ調整。	- -, blg, -
167	〃	〃	〃	-	(7.0)	-	灰黄色 黄灰色 〃	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	- -, ch, blcgh

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
168	IV区 (段部2)	SD3	弥生土器 壺	-	(8.6)	-	にぶい黄橙色 〃 褐灰色	石英 (S)少	ナデ調整。胴部中位から下半にかけてはヘラミ ガキが一部に認められる。	- -, h, h
169	〃	SD5	〃 甕	20.0	(4.5)	-	暗灰色 〃 〃	- (S)多	ナデ調整。	I - B a, i, -
170	〃	〃	〃 〃	19.6	(3.3)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート (L)多	ナデ調整。	II - B i, -, -
171	〃	SD3	〃 〃	-	(7.5)	-	にぶい橙色 〃 灰色	チャート・ 石英(L)多	ナデ調整。	- -, i, blgh
174	〃	SA1 P7	〃 〃	(19.4)	(4.2)	-	灰オリブ色 にぶい黄褐色 灰色	チャート (M)多	ナデ調整。	I - A a, i, -
178	〃	P81	〃 〃	16.0	(3.1)	-	オリブ黒色 〃 〃	チャート・ 石英(M)多	口縁端部を尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	II - B ah, g, -
179	〃	P83	〃 壺	-	(7.0)	-	にぶい橙色 褐灰色 黒色	- (S)	ナデ調整。	- -, -, cgh
180	〃	P56	〃 甕	-	(9.4)	-	にぶい黄橙色 〃 オリブ黒色	チャート (L)	胴部の文様は上から円形浮文に刺突, 挿描と微 隆起帯, 刻目。内面ナデ調整。	- -, -, ablgh
182	IV区 (段部4)	SK32	〃 壺	(39.0)	(4.9)	-	にぶい黄橙色 〃 〃	チャート (L)多	口縁端部は平坦な面を成す。貼付帯に段を有 し, 稜ができる。	I - C a, i, -
183	〃	SX3	〃 〃	(16.0)	(4.5)	-	にぶい黄橙色 〃 〃	チャート・ 石英(M)多	口縁部は玉縁状に肥厚する。	I - A a, i, -
184	〃	〃	〃 〃	-	(10.4)	-	にぶい黄橙色 〃 黒褐色	チャート・ 石英(M)多		- -, blg, -
185	〃	〃	〃 甕	(20.6)	(2.0)	-	灰色 〃 〃	チャート (M)多	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気 味に仕上げる。	I - B a, i, -
186	〃	〃	〃 〃	(16.0)	(6.2)	-	灰色 〃 オリブ黒色	チャート (M)多	口縁部は外反し端部はナデ調整を施し面を成 す。	II - B i, i, h
191	〃	P72	〃 壺	(15.2)	(7.2)	-	灰黄色 浅黄色 オリブ黒色	チャート・ 石英(M)多	無頸壺。胴部は内湾し, 口縁部に至る。	I - A a, -, i
192	〃	ST5	〃 〃	6.6	(10.9)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	- (M)	口縁端部は面を成す。	I - B abl, ch, h
193	〃	〃	〃 〃	(14.8)	(8.2)	-	橙色 〃 オリブ黒色	チャート (M)	口縁部は緩やかに外反し, 端部は尖り気味に仕 上げる。ナデ調整。頸部に刻目を施した突帯が 施される。	I - B i, a, -
194	〃	〃	〃 〃	(17.8)	(4.6)	-	オリブ黒色 〃 〃	チャート・ 石英(M)多	口縁部は肥厚させる。	I - A i, i, -
195	〃	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	にぶい黄橙色 〃 オリブ黒色	チャート・ 石英(S)		I - A ablh, i, -
196	〃	〃	〃 甕	-	(19.6)	(7.0)	橙色 〃 〃	チャート・ 石英(L)	口縁部は「く」の字に外反し端部はナデ調整に より中央部が凹む。ナデ調整が施される。	I - A i, i, i
197	〃	〃	〃 〃	18.2	(4.5)	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色 黒褐色	チャート (M)	ナデ調整。口縁内面の一部にタール痕有り。	I - A i, g, -
198	〃	〃	〃 〃	20.6	(6.9)	-	にぶい黄色 にぶい黄褐色 灰色	チャート (M)多	口縁部は僅かに肥厚し, 端部は上方に摘みナデ 調整を施し, 尖り気味に仕上げる。内面ナデ調 整, 外面ヘラミガキ。	I - A a, i, -
199	〃	〃	〃 〃	(31.4)	(3.0)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気 味に仕上げる。	I - A ah, -, -
200	〃	〃	〃 〃	(17.0)	(3.3)	-	にぶい黄橙色 灰色 〃	チャート・ 石英(M)多	口縁部はラッパ状に大きく開く。端部はナデ調 整を施し尖り気味に仕上げる。	I - B ah, i, -
201	〃	〃	〃 〃	(19.2)	(5.1)	-	浅黄色 橙色 灰オリブ色	-	口縁部はラッパ状に開き端部はナデ調整を施 し断面四角形状に仕上げる。	I - A ah, i, -
202	〃	〃	〃 〃	(20.8)	(7.9)	-	にぶい橙色 〃 灰色	チャート (M)	口縁部は緩やかに外反する。化粧土を施す。	I - B a, i, blh

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
203	IV区 (段部4)	ST5	弥生土器 甕	(21.0)	(3.5)	-	にぶい黄橙色 灰色	チャート (M)	口縁部はラッパ状に開く。端部はナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。	I-C a, i, -
204	〃	〃	〃	(18.0)	(11.0)	-	灰黄褐色 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は肥厚させる。	I-C a, i, blghc
205	〃	〃	〃	(23.4)	(1.9)	-	にぶい黄橙色 灰色	チャート (M)少	口縁直下に粘土帯を貼付し, 二段になる。	I-C ah, i, -
206	〃	〃	〃	(21.4)	(12.9)	-	浅黄色 にぶい黄橙色 黒色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は肥厚する。	I-A a, i, blghc
207	〃	〃	〃	(20.4)	(11.3)	-	灰黄色 暗灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁部は胴部より大きく開き, 端部は玉縁状に肥厚する。	I-B i, i, dhc
208	〃	〃	〃	13.4	(4.2)	-	橙色 にぶい黄褐色 灰色	チャート (S)	口縁部は粘土帯を貼付し端部を玉縁状に肥厚する。ナデ調整。	I-B i, i, i
209	〃	〃	〃	-	(5.7)	-	にぶい黄褐色 褐色	チャート (M)多	頸部は指頭によるナデ調整により微隆起帯を造る。口縁端部は玉縁状に肥厚させ, 刻目を施す。	I-B a, h, -
210	〃	〃	〃	(18.0)	(13.3)	-	にぶい黄色 黄灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁部は胴部より大きく開き, 端部は肥厚させる。口縁直下のナデが強く, 微隆起帯状に仕上げる。	I-C a, i, blghc
211	〃	ST5 中央P	〃	(17.6)	(2.8)	-	灰褐色 灰色	- (M)	口縁部は大きく外反し, 端部を肥厚させ, 外面に刻目と突帯がつく。ナデ調整。	II-A ah, i, -
212	〃	〃	〃	(17.4)	(4.3)	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色 黒色	チャート・ 石英(M)多	口縁部は外反し, 端部は面を成す。	II-B h, i, -
213	〃	〃	〃	22.0	(5.4)	-	にぶい黄褐色 黒色	チャート (M)多	ナデ調整。口縁部微隆起帯直下は櫛かハケ状工具による調整。	II-C ah, i, -
214	〃	〃	〃	-	(14.1)	-	黄褐色 橙色 灰色	チャート (M)多	外面赤化粘土を施す。	- -, -, ch
215	〃	〃	壺	-	(21.1)	-	浅黄色 灰色	- (S)少	内面ナデ調整, 外面ヘラミガキが施される。	- -, -, ghc
216	〃	〃	底部	-	(6.9)	7.6	にぶい黄褐色 灰色	チャート (S)多	平底。ナデ調整が施される。胎土がバーガ森遺跡のものとは異なる。	
217	〃	〃	〃	-	(5.7)	8.0	黄褐色 にぶい黄褐色 灰色	- (L)	平底。外面ヘラミガキ, 内面ナデ調整。	
218	〃	〃	〃	-	(9.2)	(8.2)	淡黄色 にぶい黄褐色 淡黄色	チャート (S)少	内面ナデ調整, 外面ヘラミガキ。	
219	〃	〃	〃	-	(5.6)	4.6	灰黄褐色 灰色	- (S)少	底径の小さい平底。ナデ調整。煤附着。	
220	〃	〃	〃	-	(5.7)	(9.2)	浅黄色 灰色	チャート (M)多	外底部に木葉痕, 内底部周縁は凹む。ナデ調整。外面タール痕。	
221	〃	〃	甌	-	(1.9)	5.0	褐色 にぶい黄褐色 褐色	- (S)	底部中央に0.7～0.8cmの焼成前穿孔有り。ナデ調整。	
222	〃	〃	〃	-	(4.6)	6.2	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	チャート (S)	底部中央に焼成後穿孔有り。	
223	〃	〃	蓋	8.1	1.4	-	にぶい黄褐色 灰色	チャート (S)	周縁部に2つの円孔を穿つ。	
224	〃	〃	ミニチュア 土器	-	(2.7)	2.3	暗灰色 にぶい黄褐色 暗灰色	チャート (S)少	中空のミニチュア土器。	
239	〃	SK33	壺	(14.4)	(6.9)	-	明黄褐色 褐色	チャート (M)多	口縁部は外反し, 端部はナデ調整を施し面を成す。	I-A a, h, i
240	〃	〃	甕	20.2	(16.5)	-	明黄褐色 灰色	チャート (L)多	口縁部は緩やかに外反し, 端部はナデ調整により面を成す。外面口縁直下に二条の突帯を施す。	I-A ah, i, i
241	〃	〃	〃	-	(12.0)	-	にぶい黄褐色 灰色	チャート (L)多		- -, -, ghc

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁、頸部、胴部)
				口径	器高	底径				
242	Ⅳ区 (段部4)	SK33	弥生土器 高杯	(28.4)	(5.1)	-	灰黄褐色 にぶい橙色 灰色	チャート (S)少	口縁部は粘土帯を外面に貼付けし、肥厚する。端部を外方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ上端は面を成す。ナデ調整。	
245	〃	P55	〃 壺	(7.0)	(7.8)	-	にぶい黄褐色 〃 暗灰色	- (S)少	細頸壺。口縁部は僅かに面を成す。ナデ調整。	I-E i, i, -
246	〃	〃	〃 〃	(12.0)	(4.3)	-	明黄褐色 〃 灰オリーブ色	チャート (L)多	口縁部は玉縁状に肥厚させる。	I-B i, i, -
247	〃	〃	〃 〃	(13.4)	(3.9)	-	にぶい黄褐色 〃 黒褐色	チャート (M)多	口縁部は上方に摘みナデ調整を施し、尖り気味に仕上げる。	I-C ah, i, -
248	〃	〃	〃 〃	(13.0)	(5.7)	-	にぶい黄褐色 〃 黒褐色	- (M)少	口縁部は短く外反する。外面に指頭圧痕。頸部中位に二条の微隆起帯が付く。	I-D i, h, -
249	〃	〃	〃 〃	(20.2)	(2.1)	-	黄灰色 〃 〃	チャート (M)多	口縁部は尖り気味に仕上げる。	II-B ab1, h, -
250	〃	〃	〃 甗	-	(3.9)	5.6	明黄褐色 にぶい黄褐色 〃	- (S)多	底部中央に直径1.2cmの焼成前穿孔。	
251	〃	〃	〃 把手	全長 6.5	全幅 2.4	全厚 1.8	橙色 〃 褐灰色	- (L)	重量205g	
254	〃	Ⅲ層	〃 壺	12.3	24.0	5.6	にぶい橙色 〃 黒色	チャート・ 石英(L)多	頸部は外方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。ナデ調整。胴径13.7cm。	I-A i, g, i
255	〃	〃	〃 甗	(21.8)	(14.4)	-	にぶい黄褐色 〃 橙色 〃 灰色	チャート (M)	ナデ調整。	II-B a, i, -
256	Ⅳ区 (段部5)	SK41	〃 高杯	19.2	(3.4)	-	にぶい橙色 〃 灰色	石英 (S)少	口縁部の上下端を外方に摘みナデ調整を施す。上端は面を成す。	
257	〃	ST6	〃 壺	(23.4)	(5.6)	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色 〃	チャート・ 石英(L)少	端部はナデ調整が施され、面を成す。	I-A i, i, -
258	〃	〃	〃 甗	(20.0)	(2.3)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(M)		I-A a, i, -
259	〃	〃	〃 〃	(31.2)	(2.3)	-	暗灰黄色 灰色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁部は大きく外反する。端部は上方に摘みナデ調整、尖り気味に仕上げる。	II-B a, h, -
260	〃	〃	〃 高杯	-	(2.1)	(14.0)	橙色 〃 〃	チャート (M)		
265	〃	土器集中 4	〃 壺	(19.0)	(2.7)	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色 〃 灰色	- (S)	円形の粘土を貼付けし中央部を摘み隆起させた浮文を配置する。	I-A ab2, i, -
266	〃	〃	〃 〃	(21.0)	(4.2)	-	にぶい黄褐色 〃 暗灰色	チャート (M)多	口縁部は端部を上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。	I-A a, blgh, -
267	〃	〃	〃 〃	(14.0)	(5.4)	-	灰黄色 〃 オリーブ黒色 〃	チャート (M)多	口縁部はナデ調整が施され面を成す。	I-A g, i, -
268	〃	〃	〃 〃	(21.0)	(5.7)	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色 〃 灰オリーブ色	チャート (L)多	口縁部は緩やかに外反し、端部は上方に摘みナデ調整、尖り気味に仕上げる。	II-B i, i, -
269	〃	〃	〃 甗	(16.0)	(5.4)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 黒色	チャート (L)多	口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。	II-B ah, i, -
270	〃	〃	〃 〃	(19.0)	(3.5)	-	にぶい黄褐色 黄灰色 〃 オリーブ黒色	チャート (M)多	口縁部は上方に摘みナデ調整、尖り気味に仕上げる。	I-C ah, gh, -
271	〃	〃	〃 〃	(24.0)	(6.4)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 暗灰色	チャート・ 石英(M)多	上下二段刻目が施される。	I-A a, bldg, -
272	〃	〃	〃 〃	(30.0)	(2.6)	-	灰色 〃 〃	チャート (M)多	口縁部は緩やかに外反する。	I-B a, -, -
273	〃	〃	〃 〃	(13.4)	(2.8)	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色 〃 にぶい橙色	チャート・ 石英(S)少	口縁部を上方に摘み、拡張し面を成す。口縁部にタール痕。	II-A e, i, -
274	〃	〃	〃 底部	-	(5.1)	(5.6)	にぶい黄褐色 にぶい橙色 〃 にぶい黄褐色	チャート (S)少	平底。外面ヘラミガキ、内面ナデ調整。器壁が薄い。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
275	IV区 (段部5)	土器集中 4	弥生土器 底部	-	(11.0)	(8.0)	橙色 〃 〃	チャート・ 石英(L)多	平底から胴部は内湾気味に立ち上がる。器表面 の摩耗が著しく調整不明。内面底部に指頭圧 痕。	
276	〃	〃	〃 高杯	(27.4)	(7.4)	-	明黄褐色 にぶい黄橙色 明黄褐色	チャート (M)	口縁部は内側に屈曲する。端部は内外に拡張し 凹線文, 一部に竹管刺突が施される。外面は上 下二段の刻目, ナデ調整。	
279	〃	ST7	〃 壺	(11.4)	(6.7)	-	にぶい橙色 〃 黄灰色	チャート・ 石英(L)多	頸部から口縁部にかけて直立する。	II-B ab1, g, -
280	〃	〃	〃 〃	(14.0)	(6.4)	-	橙色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(S)少	ナデ調整。	I-D i, i, -
281	〃	〃	〃 甕	(19.4)	(2.1)	-	灰黄褐色 にぶい黄橙色 灰色	チャート・ 石英(M)少	薄手式。	II-B ah, i, -
282	〃	〃	〃 〃	(30.0)	(4.5)	-	にぶい褐色 黄灰色 〃	チャート・ 石英(M)多	摩耗が著しい。	I-C ah, i, -
283	〃	〃	〃 底部	-	(10.1)	(5.0)	にぶい黄褐色 にぶい橙色 褐灰色	チャート (L)多	底部周縁は丸味を持つ。	
292	〃	SD7	〃 甕	(24.8)	(4.7)	-	にぶい橙色 灰褐色 灰色	チャート (M)	口縁部は僅かに肥厚させ端部はナデ調整を施 し面を成す。	II-B h, i, -
294	〃	P95	〃 壺	(17.4)	(14.9)	-	にぶい黄褐色 〃 暗灰色	- (S)少	頸部が立ち口縁部が外反する。外面に粘土帯を 貼付し端部を揃みナデ調整, 尖り気味に仕上げ る。頸部外面ヘラミガキ, ナデ調整。	I-B a, g, blgha
296	IV区 (段部1)	III層	〃 〃	(11.0)	(11.2)	-	橙色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(L)多	内面ナデ調整。	II-B a, b2g, -
297	〃	〃	〃 〃	(9.0)	(5.7)	-	黄褐色 にぶい黄色 黄灰色	チャート・ 石英(S)多	口縁内部は内傾する面を成す。頸部は三条1単 位の櫛描が深く施される。	II-B a, g, -
298	〃	〃	〃 〃	(8.2)	(10.8)	-	浅黄色 にぶい橙色 黒褐色	チャート (M)	ナデ調整。	I-A i, g, -
299	〃	〃	〃 〃	(10.2)	(10.7)	-	灰色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(L)多	粒状浮文。ナデ調整。	II-B b2g, g, c
300	〃	〃	〃 〃	14.1	(7.9)	-	にぶい褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	II-B b2c, i, -
301	〃	〃	〃 〃	(14.0)	(3.0)	-	灰黄色 にぶい橙色 オリーブ黒色	石英 (M)	刻目が途中で重なる。	I-D a, -, -
302	〃	II層	〃 〃	(15.2)	(3.8)	-	灰黄褐色 にぶい黄褐色 暗灰色	チャート・ 石英(S)多	口縁端部は水平な面を成す。外面に刻目, 直下 に粒状浮文を配する。頸部は櫛描。	I-A ab2, g, -
303	〃	III層	〃 〃	(22.8)	(6.1)	-	橙色 にぶい橙色 黄灰色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	I-A a, i, -
304	〃	〃	〃 〃	(22.0)	(4.8)	-	にぶい黄褐色 にぶい黄色 灰色	チャート・ 石英(S)多	ナデ調整。	I-A ab2, gh, -
305	〃	〃	〃 〃	(18.1)	(6.1)	-	灰色 黄灰色 〃	チャート (M)少	口縁部粒状浮文。頸部は強いナデ調整により断 面三角形の微隆起帯を造る。	II-B ab2, h, -
306	〃	〃	〃 〃	(23.7)	(7.1)	-	橙色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は内側に揃みナデ調整を施す。	I-A ab2, gh, -
307	〃	〃	〃 〃	-	(7.4)	-	明褐色 にぶい黄褐色 灰白色	チャート・ 石英(M)多	頸部に四条の突帯。ナデ調整。	
308	〃	〃	〃 〃	(14.0)	(3.9)	-	浅黄色 にぶい黄褐色 灰色	チャート・ 石英(S)	口縁端部は下方に揃み拡張する。ナデ調整。	I-E i, i, -
309	〃	〃	〃 〃	(14.4)	(6.2)	-	橙色 〃 浅黄色	チャート・ 石英(L)	口縁端部に一条の沈線。ナデ調整。	II-B f, i, -
310	〃	〃	〃 〃	(9.0)	(6.0)	-	にぶい褐色 橙色 黒褐色	チャート (S)少	口縁部は直立する。外面は二条の沈線化した凹 線を巡らせる。	II-B e, a, -
311	〃	II層	〃 〃	(13.0)	(4.1)	-	橙色 〃 〃	チャート (S)少	口縁部に焼成前穿孔。外面に三条の沈線文。ナ デ調整。	II-B i, f, -

遺物観察表(土器) 312～336

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
312	Ⅳ区 (段部1)	Ⅱ層	弥生土器 壺	(10.0)	(4.6)	-	橙色 〃 〃	石英 (S)多	口縁端部は上方に拡張する。	Ⅱ-A e, a, -
313	〃	Ⅲ層	〃 〃	(16.2)	(2.7)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート (L)	口縁端部は上下に拡張し, 外面に凹線文を施す。ナデ調整。	Ⅱ-A e, i, -
314	〃	〃	〃 〃	(10.4)	(5.5)	-	にぶい橙色 〃 褐灰色	チャート (S)	胴部から頸部が僅かに立ち上がる。口縁部は短く外反し端部は僅かに上方に拡張する。外面タキ成形後ハケ調整, 内面ナデ調整。	Ⅱ-A i, i, i
315	〃	〃	〃 〃	(10.0)	(10.2)	-	明黄褐色 〃 橙色 〃 明褐色	チャート・ 石英(M)多	肩の張る胴部から頸部は窄まり口縁部は内側に拡張する。凹線文系。外面胴部上位にヘラミガキ痕。	Ⅱ-A i, i, i
316	〃	〃	〃 甕	18.0	(12.9)	-	灰色 〃 〃 黒色	石英 (M)多	口縁部は上下二段の刻目。胴部の刻目は幅広く棒状浮文風に仕上げる。	Ⅰ-A a, g, ghdbla
317	〃	Ⅱ層	〃 〃	(15.6)	(3.2)	-	にぶい褐色 〃 灰黄褐色 〃 暗灰色	石英 (S)	頸部の一部にハケ調整痕。	Ⅰ-A i, g, -
318	〃	〃	〃 〃	(16.6)	(4.2)	-	浅黄色 〃 にぶい黄褐色 〃 黒褐色	チャート (S)多	ナデ調整。	Ⅰ-A a, i, -
319	〃	Ⅲ層	〃 〃	(19.6)	(7.4)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 暗灰色	石英 (S)	ヘラ状工具によるナデ調整。	Ⅰ-A a, g, -
320	〃	〃	〃 〃	22.2	(3.3)	-	にぶい黄褐色 〃 にぶい黄褐色 〃 褐灰色	- (M)少	口縁部の刻目は上下二段に施される。	Ⅰ-A a, g, -
321	〃	〃	〃 〃	(11.6)	(4.1)	-	にぶい橙色 〃 暗灰黄色 〃 〃	チャート・ 石英(S)多	胴部の円形浮文には刺突が施される。	Ⅰ-B a, g, bl
322	〃	Ⅱ層	〃 〃	(20.0)	(3.2)	-	にぶい黄色 〃 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	Ⅰ-B ah, g, -
323	〃	〃	〃 〃	(20.6)	(4.8)	-	にぶい黄色 〃 〃 灰色	石英 (S)	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。	Ⅰ-B a, g, -
324	〃	Ⅲ層	〃 〃	(30.4)	(10.5)	-	橙色 〃 〃 〃	チャート (M)多	口縁部は玉縁状に肥厚し, 刻目。直下に断面三角形の突帯。頸部下位に櫛描沈線, その下に刺突を施した浮文を配する。ナデ調整。	Ⅰ-B ah, g, bl
325	〃	〃	〃 〃	(17.0)	(3.4)	-	にぶい黄褐色 〃 にぶい黄褐色 〃 黄灰色	チャート (M)多		Ⅰ-C ahg, i, -
326	〃	〃	〃 〃	(17.8)	(3.7)	-	浅黄色 〃 〃 黄灰色	チャート (S)多	ナデ調整。	Ⅰ-C ah, g, -
327	〃	Ⅱ層	〃 〃	(21.1)	(3.0)	-	浅黄色 〃 黄灰色 〃 オリーブ黒色	石英 (M)多	櫛描沈線を強く施し微隆起帯を造る。内面ナデ調整。	Ⅰ-C agh, g, -
328	〃	〃	〃 〃	(22.0)	(2.3)	-	にぶい黄色 〃 〃 黒褐色	チャート・ 石英(S)	ナデ調整。	Ⅰ-C ah, i, -
329	〃	〃	〃 〃	(21.6)	(2.4)	-	にぶい黄褐色 〃 黄灰色 〃 黒色	チャート・ 石英(S)多		Ⅰ-C ah, g, -
330	〃	〃	〃 〃	(24.4)	(2.4)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 灰色	チャート (S)多	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し, 尖り気味に仕上げる。	Ⅰ-C ah, g, -
331	〃	〃	〃 〃	(23.6)	(3.3)	-	灰褐色 〃 褐灰色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(S)	ナデ調整。	Ⅰ-C ah, g, -
332	〃	Ⅲ層	〃 〃	(19.0)	(4.1)	-	浅黄色 〃 〃 黒褐色	チャート・ 石英(S)多	ナデ調整。	Ⅰ-D a, i, -
333	〃	〃	〃 〃	(23.4)	(4.3)	-	褐灰色 〃 〃 黒褐色	チャート (L)	ナデ調整。	Ⅰ-D a, i, -
334	〃	〃	〃 〃	(17.0)	(4.0)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 褐灰色	石英 (S)少		Ⅰ-E i, g, -
335	〃	〃	〃 〃	(20.0)	(6.8)	-	オリーブ黒色 〃 〃 〃	チャート・ 石英(M)多	口縁外面直下に刺突文を配する。頸部と胴部の境目には粒状浮文を配する。	Ⅰ-E ad, i, b2g
336	〃	〃	〃 〃	(19.6)	(4.1)	-	にぶい黄褐色 〃 灰黄褐色 〃 灰色	石英 (M)	口縁部は下方に摘みナデ調整後, 上下二段に刻目。貼付帯下位にも刻目を施す。ナデ調整。	Ⅰ-E a, i, -

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁、頸部、胴部)
				口径	器高	底径				
337	IV区 (段部1)	III層	弥生土器 甕	(23.6)	(3.9)	-	にぶい 橙色 灰色	チャート・ 石英(L)	口縁端部は粘土帯を貼付し断面三角形に仕上げる。	I-B a, g, -
338	〃	II層	〃	(10.4)	(9.3)	-	にぶい黄色 黄灰色	チャート (M)	頸部の浮文は粒状浮文。	II-B ab2, ghc, -
339	〃	III層	〃	(17.6)	(11.2)	-	にぶい褐色 明赤褐色 黒色	石英 (S)	外面の一部に赤化粘土。頸部の円形浮文には刺突が施される。	II-B h, bl, ghc
340	〃	II層	〃	(18.4)	(4.8)	-	灰オリーブ色 灰色 黒色	石英 (S)	口縁端部下端に刻目を施し麻状文風に刺突を施す。	II-B a, -, -
341	〃	〃	〃	(17.2)	(7.2)	-	オリーブ黒色 灰色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	II-B a, i, ag
342	〃	〃	〃	(20.0)	(2.3)	-	橙色 〃	チャート・ 石英(S)	口縁端部直下に断面三角形の突帯が付く。	II-B ah, i, -
343	〃	〃	〃	-	(13.5)	-	にぶい黄色 灰色	石英 (M)	櫛描沈線を施し微隆起帯を造る。内面頸部と胴部の境目に明瞭な段を残す。胴部粒状浮文。	- -, gh, gb2a
344	〃	III層	〃	-	(7.4)	-	灰色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(L)	胴部の円形浮文には刺突を施す。ナデ調整。	- -, gh, bla
345	〃	II層	〃	-	(6.5)	-	にぶい黄褐色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(S)	胴部の円形浮文には刺突が施される。ナデ調整。	- -, -, ghbla
346	〃	III層	〃	-	(8.9)	-	にぶい黄褐色 灰色	チャート・ 石英(M)	胴部の円形浮文には刺突が施される。ナデ調整。	- -, -, ghbla
347	〃	〃	〃	-	(5.5)	-	淡橙色 〃 灰色	チャート (S)	ナデ調整。	- -, -, b2hc
348	〃	〃	〃	-	(4.5)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(S)	幅の広い櫛描直線文。	- -, -, g
349	〃	II層	〃	-	(5.5)	-	にぶい黄褐色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(S)	胴部の浮文は粒状浮文。内面ナデ調整。	- -, -, b2agha
350	〃	III層	〃	-	(10.0)	-	橙色 浅黄色 灰オリーブ色	チャート・ 石英(M)	表面化粧土剥がれる。内面は赤化粘土が残る。	- -, -, b2hc
351	〃	〃	〃	-	(7.9)	-	にぶい黄色 にぶい黄色 暗灰色	チャート (L)	胴部の浮文には刺突が施される。外面縦方向のハケ調整。内面ナデ調整。	- -, -, gb1
352	〃	〃	〃	12.1	13.6	5.2	灰黄色 〃 黄灰色	チャート (L)	胴部と頸部の境目に段を有する。胴径13.6cm。	I-A i, i, i
353	〃	〃	〃	(14.0)	(8.4)	-	浅黄色 にぶい黄褐色 黒色	チャート (M)		I-D i, i, -
354	〃	〃	〃	(19.0)	(10.4)	-	橙色 にぶい黄色 黒褐色	チャート (M)	口縁端部は外側に摘み出す。ナデ調整。	II-B i, i, i
355	〃	〃	〃	(19.6)	(13.2)	-	灰黄色 にぶい黄色 灰色	チャート・ 石英(M)		I-E i, i, i
356	〃	II層	〃	(23.0)	(3.3)	-	浅黄色 〃 暗灰黄色	チャート・ 石英(M)	口縁端部は上方に尖り気味に仕上げ、外側に面を成す。ナデ調整。	I-E i, i, -
357	〃	III層	〃	(18.8)	(3.4)	-	にぶい黄褐色 褐色 黒褐色	チャート	ハケ調整。	II-B f, i, -
358	〃	〃	〃	(23.0)	(2.3)	-	浅黄色 にぶい黄色 黒褐色	石英 (S)	ナデ調整。	II-B h, i, -
359	〃	〃	〃	(20.0)	(3.8)	-	赤褐色 にぶい褐色 褐色	石英 (L)	口縁部は上方に摘みナデ調整を施し、尖り気味に仕上げる。端面は沈線状に凹む。内面に赤化粘土。ナデ調整。	II-B i, i, -
360	〃	II層	〃	(22.0)	(4.5)	-	にぶい黄色 〃 黄灰色	チャート (M)	口縁端部は尖り気味に仕上げ、外面に凹線文を施す。ナデ調整。	II-A e, i, -
361	〃	〃	底部	-	(6.0)	4.8	灰色 灰黄褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)	内底部は凹む。内面はヘラ状工具による縦方向のナデ調整。	

遺物観察表(土器) 362～401

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁、頸部、胴部)
				口径	器高	底径				
362	IV区 (段部1)	II層	弥生土器 底部	-	(7.6)	5.2	オリーブ黒色 〃 〃	チャート (S)多	底部は段を有する。ナデ調整。	
363	〃	〃	〃 〃	-	(4.0)	(6.2)	浅黄色 黄灰色 〃	チャート・ 石英(M)多	内底周縁部は指頭による押圧により凹む。外面 板状工具によるナデ調整。	
364	〃	III層	〃 〃	-	(8.4)	7.2	灰黄褐色 〃 〃	チャート・ 石英(M)多	甕底部。平底からやや段を持って立ち上がる。	
365	〃	〃	〃 〃	-	(9.2)	(10.0)	灰色 にぶい黄褐色 灰色	チャート (S)	厚みのある壺の底部片。ナデ調整。	
366	〃	〃	〃 〃	-	(7.8)	6.0	橙色 〃 〃	チャート (M)多	平底。内底部は凹む。	
367	〃	〃	〃 〃	-	(12.5)	8.6	灰色 にぶい赤褐色 灰色	石英 (S)多	外底部中央に向かって上げ底気味。外面の一部 にタタキ成形痕。タタキ成形後、板状工具による 内面ナデ調整。赤化粧土。	
368	〃	〃	〃 〃	-	(4.0)	9.5	橙色 にぶい黄褐色 〃	チャート (L)多	平底。外底面に木葉痕。	
369	〃	〃	〃 甕	-	(1.3)	(6.6)	明褐色 〃 浅黄色	チャート・ 石英(S)多	焼成後穿孔。紡錘車に転用か。	
370	〃	〃	〃 〃	-	(2.0)	6.0	にぶい黄褐色 にぶい黄色 黄灰色	チャート (M)	焼成後穿孔有り。	
371	〃	〃	〃 〃	-	(6.4)	(6.4)	灰黄褐色 暗灰色 〃	チャート (S)	焼成後穿孔有り。	
372	〃	〃	〃 高杯	-	(19.4)	-	にぶい橙色 〃 灰色	チャート・ 石英(S)	口縁端部は面を成す。ナデ調整。	
373	〃	II層	〃 〃	-	(2.7)	-	橙色 〃 〃	チャート (S)少	口縁上部欠損。下端の凸部に刻目を施す。内外 面ヘラミガキ。	
374	〃	〃	〃 〃	-	(4.8)	(9.4)	にぶい橙色 〃 〃	チャート・ 石英(S)	外面櫛描直線文。端部は凹線文が施される。内 面は横方向のヘラケズリ。	
375	〃	〃	〃 〃	-	(5.7)	(13.4)	橙色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)	五条の櫛描沈線。端面に沈線化した凹線文を施 す。内面横方向のケズリ。	
391	IV区 (段部2)	III層	〃 壺	9.6	(18.7)	-	灰色 にぶい黄色 灰色	チャート・ 石英(L)多		II - B a, agh, blgha
392	〃	〃	〃 〃	(9.0)	(3.8)	-	浅黄色 〃 灰色	チャート・ 石英(L)	粒状浮文。	I - A ab2h, -, -
393	〃	II層	〃 〃	(11.8)	(3.1)	-	にぶい黄褐色 灰色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I - A ag2, -, -
394	〃	III層	〃 〃	(16.0)	(3.6)	-	橙色 浅黄色 黒褐色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	II - B ah, -, -
395	〃	IV層	〃 〃	(13.0)	(6.0)	-	オリーブ黒色 浅黄色 オリーブ黒色	- (S)		I - A a, g, -
396	〃	〃	〃 〃	9.0	(9.6)	-	橙色 〃 〃	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I - A a, g, -
397	〃	〃	〃 〃	6.0	(11.0)	-	浅黄色 にぶい橙色 灰色	チャート・ 石英(L)多	細頸部。内面ナデ調整、ヘラケズリ。	II - B f, f, f
398	〃	III層	〃 〃	13.6	(22.5)	-	橙色 明黄褐色 橙色	チャート (M)多		I - A i, g, g
399	〃	〃	〃 〃	(21.0)	(13.1)	-	にぶい黄褐色 オリーブ黒色 〃	チャート (M)	外面ヨコナデ調整を施す。	I - A ab2, gh, -
400	〃	IV層	〃 〃	(23.0)	(6.3)	-	にぶい黄褐色 〃 黒褐色	- (S)多	ナデ調整。	I - A ab2, gh, -
401	〃	III層	〃 〃	(19.6)	(3.5)	-	明褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(S)		I - A ab2, gh, -

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
402	IV区 (段部2)	Ⅲ層	弥生土器 壺	(22.0)	(3.4)	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色 灰色	チャート・ 石英(M)多	赤化粘土。ナデ調整。	I-A a, -, -
403	〃	〃	〃	(20.4)	(4.8)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート・ 石英(S)多	断面四角形の口縁部。端部は面を成す。	I-A h, gh, -
404	〃	〃	〃	(21.2)	(6.7)	-	にぶい黄色 暗灰黄色 〃	チャート・ 石英(S)多	口縁端部は内側に屈曲する。内面ナデ調整。	II-A i, h, -
405	〃	IV層	〃	(13.4)	(5.7)	-	にぶい橙色 〃 黒色	チャート (M)多	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し面を成す。	I-A a, b2, -
406	〃	Ⅲ層	〃	(15.0)	(3.3)	-	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色 黒色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	I-E a, g, -
407	〃	〃	〃	(14.6)	(5.0)	-	灰黄褐色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(S)多	口縁端部は下方に摘み出し, 外面は幅の広い刻目が施される。ナデ調整。	I-E ag, blg, -
408	〃	〃	〃	(16.0)	(5.8)	-	にぶい褐色 灰褐色 〃	チャート (L)		I-B ag, d, -
409	〃	〃	〃	15.8	(8.0)	-	明黄褐色 橙色 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は細く仕上げる。ナデ調整。	I-D a, gab1, -
410	〃	〃	〃	(16.0)	(2.1)	-	明黄褐色 にぶい黄橙色 明黄褐色	- (S)	貼付口縁。外面は二段のナデ調整, 下端に刻目。	I-D a, -, -
411	〃	〃	〃	(19.6)	(3.4)	-	にぶい黄色 〃 灰色	チャート (M)	口縁端部は下方に垂下させ面を成す。外面は端部を下方に摘み出す際にできる指頭圧痕が顕著。貼付帯下端に刻目を施す。	I-E a, -, -
412	〃	〃	〃	(19.0)	(3.1)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート (S)	口縁端部は下方に摘み出し拡張する。	I-E a, i, -
413	〃	IV層	〃	(22.0)	(4.4)	-	にぶい橙色 〃 黒色	チャート (L)多	ナデ調整。	I-E i, a, -
414	〃	〃	〃	(16.8)	(3.6)	-	橙色 〃 〃	チャート (L)多	口縁直下に断面三角形の微隆起帯を貼付する。	II-B h, i, -
415	〃	Ⅲ層	〃	16.0	(13.3)	-	にぶい橙色 〃 暗灰色	石英 (S)多	頸部は直立気味に長く延び, 口縁部は短く外反する。ナデ調整。	I-B ag, hb2h, -
416	〃	〃	〃	(8.6)	(11.5)	-	橙色 にぶい黄褐色 灰褐色	石英・雲母 (S)	搬入品。外面ハケ調整, 内面ナデ調整。	II-B e, ae, i
417	〃	〃	〃	-	(4.6)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色 橙色	チャート (M)	口縁部は幅の広い玉縁状を呈し, 外面に凹線文を施す。口縁部直下の頸部に刺突を施した円形浮文と微隆起帯が配される。	I-D e, blh, -
418	〃	〃	〃	8.4	(4.9)	-	橙色 〃 にぶい黄褐色	チャート (L)	口縁外面は三～四条の棒状浮文を貼付し, 刻目を施す。ナデ調整。	II-A ec, i, -
419	〃	〃	〃	(9.6)	(3.2)	-	橙色 〃 〃	チャート (S)	直径2mmの円孔を並べて穿つ。ナデ調整。	II-A i, i, -
420	〃	〃	〃	(21.0)	(5.6)	-	橙色 〃 にぶい赤橙色	- (S)	口縁部は上下に拡張し外面に凹線文を施す。ナデ調整。	II-A e, a, -
421	〃	Ⅲ層	〃	(13.2)	(4.6)	-	にぶい黄褐色 〃 オリーブ黒色	チャート (M)多	口縁端部は外下方に摘み垂下する。	I-E i, i, -
422	〃	〃	〃	(17.8)	(4.0)	-	明黄褐色 黄褐色 灰黄色	チャート (M)多	ナデ調整。	I-A i, i, -
423	〃	IV層	〃	(18.6)	(4.1)	-	にぶい橙色 〃 黒色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I-B i, i, -
424	〃	〃	〃	(17.2)	(2.3)	-	橙色 浅黄褐色 〃	- (M)		I-A i, -, -
425	〃	〃	〃	(17.0)	(4.9)	-	にぶい黄褐色 灰色 〃	チャート・ 石英(S)	ナデ調整。	I-A i, i, -
426	〃	〃	〃	(18.0)	(3.9)	-	にぶい黄褐色 橙色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I-A i, i, -

遺物観察表(土器) 427～451

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
427	IV区 (段部2)	III層	弥生土器 壺	(18.0)	(5.5)	-	橙色 〃 灰色	- (M)	ナデ調整。	I-A i, i, -
428	〃	IV層	〃 〃	(15.6)	(4.2)	-	にぶい黄色 暗灰黄色 黒褐色	- (S)少	ナデ調整。	II-B i, i, -
429	〃	〃	〃 〃	(15.8)	(3.4)	-	にぶい黄色 暗灰黄色 黄灰色	チャート・ 石英(S)		II-B i, i, -
430	〃	〃	〃 〃	5.5	11.2	5.6	橙色 〃 黄灰色	チャート (L)	短頸壺。口縁部は短く直立し、端部は丸く収める。ナデ調整。	II-B i, i, i
431	〃	III層	〃 〃	-	(9.4)	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色 灰色	- (S)多	頸部は垂線状に刻み、下位に粒状浮文が配される。胴部は櫛描沈線帯の中に刻目を施す。内面ナデ調整。	- -, ab2, ga
432	〃	〃	〃 〃	-	(9.4)	-	灰黄色 暗灰黄色 黄灰色	チャート (S)多	ナデ調整。	- -, -, ahc
433	〃	〃	〃 〃	-	(6.8)	-	橙色 〃 〃	- (L)	内面ナデ調整。	- -, -, gadbl
434	〃	〃	〃 〃	-	(5.7)	-	灰色 にぶい黄褐色 暗灰色	石英 (S)	口縁端部欠損。端部直下に粒状浮文。櫛描沈線が施される。	- -, gcb2, -
435	〃	IV層	〃 〃	-	(10.1)	7.2	オリーブ黒色 黄橙色 オリーブ黒色	チャート (L)多	外面体部下半にヘラミガキ、内面は指頭圧痕が顕著。	- -, i, i
436	〃	〃	〃 〃	-	(8.9)	4.4	褐色 にぶい黄褐色 〃	チャート・ 石英(M)多	底径の小さい平底から、胴部は膨らみを持つ。内底部は指頭押圧により凹む。	- -, i, i
437	〃	III層	〃 〃	-	(22.2)	(8.6)	灰白色 にぶい黄褐色 浅黄褐色	チャート (M)多	外面ヘラミガキ、内面ナデ調整。	- -, -, i
438	〃	〃	〃 甕	19.0	(18.4)	-	にぶい黄色 黄灰色 暗灰色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I-A a, g, ag
439	〃	IV層	〃 〃	(16.4)	(3.7)	-	灰褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	I-A ag, -, -
440	〃	III層	〃 〃	(18.6)	(3.7)	-	にぶい黄色 明黄褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	I-A a, -, -
441	〃	〃	〃 〃	(24.4)	(3.7)	-	にぶい黄褐色 〃 〃	チャート・ 石英(L)多		I-A a, g, -
442	〃	〃	〃 〃	(18.4)	(2.7)	-	にぶい橙色 〃 暗オリーブ灰色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	I-A a, -, -
443	〃	〃	〃 〃	(22.0)	(3.4)	-	にぶい橙色 灰色 〃	チャート・ 石英(M)多		I-A a, -, -
444	〃	IV層	〃 〃	(29.4)	(4.9)	-	にぶい黄褐色 〃 黒褐色	チャート (L)多		I-A a, -, -
445	〃	〃	〃 〃	(18.6)	(5.0)	-	にぶい黄褐色 にぶい褐色 オリーブ黒色	- (M)	口縁下端を摘み微隆起帯状に仕上げる。ナデ調整。	I-A i, g, -
446	〃	〃	〃 〃	(21.8)	(4.7)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I-A i, i, -
447	〃	III層	〃 〃	(18.6)	(2.6)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	石英 (M)多		I-B a, -, -
448	〃	〃	〃 〃	(19.0)	(3.2)	-	浅黄色 橙色 黒褐色	チャート (M)多		I-B a, i, -
449	〃	IV層	〃 〃	(17.0)	(3.4)	-	浅黄色 灰白色 灰色	チャート (M)	ナデ調整。	I-B a, -, -
450	〃	III層	〃 〃	(18.8)	4.2	-	にぶい黄褐色 〃 黄灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。	I-B a, g, -
451	〃	IV層	〃 〃	(20.6)	(4.8)	-	明褐色 〃 〃	チャート・ 石英(S)多	ナデ調整。	I-B a, i, -

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
452	IV区 (段部2)	III層	弥生土器 甕	(20.0)	(5.3)	-	にぶい黄橙色 黒色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は上方に揃みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。	I-B ag, i, -
453	〃	〃	〃	(18.4)	(6.2)	-	にぶい黄橙色 黒褐色	チャート・ 石英(M)多		I-B a, bl, -
454	〃	IV層	〃	(22.0)	(4.1)	-	にぶい橙色 浅黄色 黄灰色	チャート (M)多	ナデ調整。内面に赤化粧土。	I-B a, h, -
455	〃	〃	〃	(19.2)	(2.6)	-	灰色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	I-B agh, -, -
456	〃	III層	〃	(20.0)	(3.6)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色 黒褐色	チャート (M)多	口縁端部は尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	I-B a, gh, -
457	〃	〃	〃	(22.0)	(5.8)	-	にぶい黄橙色 暗灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	I-B agh, i, -
458	〃	〃	〃	(18.6)	(9.6)	-	にぶい赤褐色 褐灰色 黄灰色	- (S)	口縁端部は上方に揃みナデ調整を施し, 尖り気味に仕上げる。ナデ調整。胴部上位の刻目は挿挿の後, 刺突状に施す。	I-B ag, i, agh
459	〃	IV層	〃	(21.0)	(5.3)	-	にぶい黄橙色 灰色	チャート・ 石英(M)多	玉縁状の口縁。ナデ調整。	I-B agh, i, -
460	〃	〃	〃	(24.0)	(4.2)	-	にぶい橙色 灰色	石英 (M)	ナデ調整。	I-B agh, i, -
461	〃	〃	〃	(16.2)	(7.8)	-	灰黄色 暗灰色	- (S)少	円形の粘土を貼付し, 竹管刺突を施す。ナデ調整。	I-C a, i, gbla
462	〃	III層	〃	(18.0)	(10.5)	-	にぶい褐色 暗灰色	チャート・ 石英(S)多	肩の張らない胴部から頸部は外反しながら緩やかに延び, 口縁部に至る。ナデ調整。	I-C agh, bldg, gha
463	〃	V層	〃	21.0	(5.5)	-	にぶい黄橙色 暗灰色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I-C agh, i, blgh
464	〃	〃	〃	(21.5)	(11.4)	-	にぶい黄橙色 灰色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I-C agh, i, blgha
465	〃	III層	〃	22.6	(11.0)	-	にぶい黄橙色 褐灰色	チャート・ 石英(L)多	円形浮文は二穴の刺突を施す。	I-C agh, i, blghc
466	〃	〃	〃	(22.0)	(12.1)	-	橙色 にぶい黄色 褐灰色	チャート・ 石英(M)多	胴部に棒状浮文が退化した浮文を貼付する。ナデ調整。	I-C agh, -, ghb2
467	〃	IV層	〃	(22.8)	(3.0)	-	にぶい黄橙色 にぶい赤褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	外面の一部に赤化粧土。	I-C ag, -, -
468	〃	〃	〃	(31.6)	(3.5)	-	にぶい橙色 にぶい黄色 黒色	石英 (M)少		I-C agh, i, -
469	〃	〃	〃	(12.4)	(2.8)	-	明褐色 明黄褐色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I-D a, i, -
470	〃	〃	〃	19.0	(5.9)	-	黄褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	I-D ah, i, -
471	〃	〃	〃	(21.2)	(2.3)	-	浅黄色 黄灰色	チャート・ 石英(S)	ナデ調整。	I-D ah, gh, -
472	〃	〃	〃	(24.0)	(4.3)	-	黄褐色 にぶい黄褐色 灰黄色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	I-D e, i, -
473	〃	III層	〃	(17.7)	(3.5)	-	黒色 にぶい黄橙色 黒色	チャート (M)多		I-E i, i, -
474	〃	〃	〃	(23.2)	(5.2)	-	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色 灰色	チャート (M)	ナデ調整。	I-E a, g, -
475	〃	〃	〃	13.0	(11.3)	-	黄褐色 にぶい黄褐色 黒色	チャート・ 石英(M)多	内面胴部ナデ調整。	II-B i, i, blgha
476	〃	〃	〃	19.6	(10.3)	-	橙色 黄灰色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	II-B a, blgha, -

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
477	IV区 (段部2)	III層	弥生土器 甕	(17.8)	(1.6)	-	にぶい褐色 黄褐色	- (S)少	口縁直下に櫛描を施し僅かに微隆起帯を作る。	II-B agh, -, -
478	〃	〃	〃	(15.2)	(6.6)	-	浅黄色 灰色	チャート・ 石英(S)多		II-B a, b2g, -
479	〃	IV層	〃	(16.0)	(5.2)	-	にぶい橙色 黒褐色	石英 (S)少	頸部外面は縦方向のハケ調整, 内面は横方向の ハケ調整。	II-B a, f, -
480	〃	III層	〃	(15.4)	(3.5)	-	黄褐色 にぶい橙色 黒褐色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	II-B a, i, -
481	〃	IV層	〃	(18.4)	(5.3)	-	にぶい黄褐色 灰色	石英 (S)少	口縁下は櫛描を施し微隆起帯を作る。	II-B agh, g, -
482	〃	III層	〃	(18.4)	(3.2)	-	にぶい黄褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(L)多	ナデ調整。	II-B agh, g, -
483	〃	〃	〃	(16.4)	(2.6)	-	明黄褐色 にぶい黄褐色 褐灰色	- (S)	口縁内面にも刻目を施す。ナデ調整。	II-B a, -, -
484	〃	IV層	〃	(18.6)	(3.9)	-	黄褐色 黄灰色	チャート (L)多	ナデ調整。	II-B ah, i, -
485	〃	〃	〃	(23.6)	(4.7)	-	橙色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(S)多	口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面に断面三 角形の微隆起帯を貼付する。ナデ調整。内外面 ともに赤化粧土が施される。	II-B ah, i, -
486	〃	III層	〃	(27.0)	(2.7)	-	橙色 黄灰色	- (S)	ナデ調整。	II-B ah, i, -
487	〃	〃	〃	(18.0)	(4.0)	-	にぶい黄色 黄灰色	石英 (S)	ナデ調整。	II-B h, -, -
488	〃	〃	〃	(22.0)	(7.0)	-	黄褐色 にぶい黄褐色 灰色	石英 (S)少	口縁端部は下方に拡張し, 面を成す。ナデ調整。	II-A i, i, -
489	〃	〃	〃	(20.0)	(6.5)	-	橙色 黒褐色	チャート (L)	ナデ調整。	II-B i, i, -
490	〃	IV層	〃	(19.6)	(6.9)	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色 灰色	チャート・ 石英(S)	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気 味に仕上げる。	II-B i, i, -
491	〃	〃	〃	(15.8)	(7.3)	-	にぶい黄褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	口縁部は大きく外反し, 端部は丸く収める。ナ デ調整。	II-B i, i, i
492	〃	〃	〃	(22.4)	(6.8)	-	にぶい橙色 灰黄褐色 黒褐色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	II-A g, i, -
493	〃	〃	〃	(27.4)	(5.2)	-	明褐色 黄褐色	チャート (L)多	口縁部は上下に拡張し外部は面を成す。中央部 に一条の沈線を施し下端に刻目を施す。	II-A af, i, -
494	〃	III層	〃	(14.0)	(6.7)	-	にぶい橙色 黄灰色	チャート (M)多	口縁部は外反し端部を上方に拡張する。外面は 沈線化した凹線文が施される。外面の一部にハ ケ目。	II-A e, i, i
495	〃	IV層	〃	(14.4)	(4.7)	-	にぶい橙色	チャート (S)多	口縁部は「く」の字状に短く外反し, 端部は上下 に拡張する。外面には沈線化した凹線文が施さ れる。外面ハケ調整。	II-A e, i, i
496	〃	〃	〃	(12.0)	(7.0)	-	にぶい黄褐色 黒褐色	- (S)	沈線化した凹線文が施される。内外面にタール 痕有り。	II-A e, i, -
497	〃	III層	〃	(20.0)	(4.3)	-	にぶい黄褐色	チャート (S)	口縁部は外反し, 端部は内上方に拡張する。外 面は沈線化した凹線文が施される。ナデ調整。	I-B e, i, -
498	〃	〃	〃	(18.8)	(4.1)	-	橙色 にぶい黄褐色 褐灰色	チャート・ 石英(L)多	口縁端部は上下に拡張し, 外面に凹線文。ナデ 調整。	II-A e, i, -
499	〃	〃	〃	(16.0)	(12.8)	-	橙色 黄灰色	チャート・ 石英(L)多	胴部外面ハケ調整, 内面ナデ調整。	II-A i, i, i
500	〃	IV層	〃	(26.6)	(8.1)	-	にぶい橙色 浅黄褐色	チャート (S)少	沈線化した凹線文。内外面ハケ調整。	II-A ble, -, bl
501	〃	III層	〃	(20.0)	(6.7)	-	橙色 暗オリーブ灰色	チャート・ 石英(L)多	ナデ調整。	II-B i, i, i

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁、頸部、胴部)
				口径	器高	底径				
502	IV区 (段部2)	III層	弥生土器 甕	(11.0)	(4.7)	-	浅黄色 にぶい黄橙色 褐色	- (S)少	口縁部の一部に直径5.0mmの焼成前円孔有り。 内外面ハケ調整。外面に煤付着。	II-B i, i, i
503	〃	〃	〃	(15.8)	(6.9)	-	〃 〃 灰黄褐色	チャート (M)少	口縁部は短く外反する。口縁直下に穿孔を2個 並べて配置する。外面単位の細かいハケ調整、 内面は横方向のヘラケズリ。	II-B e, i, i
504	〃	〃	〃	(13.0)	(6.9)	-	にぶい黄橙色 〃 黒褐色	チャート (M)多	口縁端部は丸く収める。口縁部直下に棒状浮 文。	I-B i, -, c
505	〃	IV層	〃	-	(10.1)	(17.6)	にぶい黄褐色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(M)多	頸部は爪状圧痕。	- -, -, bldgga
506	〃	〃	〃	-	(10.1)	(18.2)	暗黄褐色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(M)多	頸部と胴部の境目に円形浮文、竹管刺突を施 す。ナデ調整。	- -, i, bldghc
507	〃	III層	〃	-	(6.1)	-	橙色 〃 オリーブ褐色	チャート (S)多		- -, -, gbla
508	〃	〃	〃	-	(7.2)	-	にぶい褐色 にぶい橙色 灰色	チャート (S)		- -, -, ghd
509	〃	〃	〃	-	(6.0)	-	橙色 にぶい赤褐色 黄灰色	石英 (S)多	胴部の文様は上から円形浮文に刺突、櫛描と微 隆起帯、刻目。	- -, -, blgha
510	〃	〃	〃	-	(6.5)	-	にぶい黄褐色 黄灰色 〃	石英 (S)多	胴部中位に櫛描と微隆起帯、下位に刻目。刻目 は微隆起帯の下段に施す。	- -, -, agh
511	〃	〃	底部	-	(17.2)	6.0	にぶい黄色 にぶい褐色 黄灰色	チャート・ 石英(M)多	平底。ナデ調整。	
512	〃	〃	〃	-	(8.0)	(8.4)	にぶい黄褐色 〃 〃	チャート (L)多	平底。ナデ調整。	
513	〃	IV層	〃	-	(10.9)	(7.0)	灰色 にぶい橙色 灰色	チャート・ 石英(L)多	平底。ナデ調整。	
514	〃	〃	〃	-	(3.6)	5.4	黄灰色 にぶい黄色 黄灰色	チャート・ 石英(M)	外底部中央が凹む。ナデ調整。	
515	〃	〃	〃	-	(4.9)	5.8	橙色 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	チャート・ 石英(M)多	平底。ナデ調整。外面の一部にタール痕有り。 内面化粧土が施される。	
516	〃	III層	〃	-	(4.6)	6.6	灰色 灰白色 灰色	石英 (S)多	器壁薄い。ナデ調整。	
517	〃	〃	〃	-	(8.1)	(7.8)	黄灰色 〃 〃	チャート・ 石英(L)多	底部は丸味を持って立ち上がる。	
518	〃	〃	〃	-	(9.7)	8.0	オリーブ黒色 暗黄褐色 オリーブ黒色	- (M)多	内面全体にタール痕。外底面にヘラ状工具によ る擦痕。	
519	〃	〃	〃	-	(10.2)	10.0	黒褐色 にぶい黄褐色 黒褐色	チャート (L)多	外面底部脇にタタキ目を残す。ナデ調整。	
520	〃	〃	甌	-	(4.3)	5.4	オリーブ黒色 〃 〃	チャート・ 石英(M)多	底部中央に焼成後穿孔。ナデ調整。	
521	〃	IV層	〃	-	(2.7)	5.2	灰黄褐色 褐色	チャート・ 石英(M)多	焼成後穿孔。	
522	〃	III層	鉢	-	(8.5)	5.6	明赤褐色 〃 橙色	チャート	底部周縁を外方に摘み出し高台状を呈する。ナ デ調整。内面の一部にハケ調整痕。	
523	〃	〃	〃	(13.0)	(3.8)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色 〃	チャート (S)多	貼付口縁。ナデ調整。	
524	〃	〃	〃	(28.0)	(6.9)	-	黄褐色 〃 褐色	チャート・ 石英(S)	口縁端部は僅かに肥厚する。ナデ調整。	
525	〃	IV層	高杯	23.0	13.6	10.0	にぶい赤褐色 にぶい橙色 〃	チャート・ 石英(M)	口縁部は上方に拡張し、端部は水平な面を成 す。体部内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリ。 脚部内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキ。	
526	〃	III層	〃	(22.0)	(6.8)	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色 暗灰色	チャート (S)	口縁端部は内外に摘みナデ調整を施し僅かに 拡張する。体部は内外面ともヘラミガキ。円盤 充填。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
527	IV区 (段部2)	III層	弥生土器 高杯	(23.8)	(3.8)	-	橙色 にぶい黄橙色	- (S)	口縁端部はナデ調整により内外面に拡張し面を成す。口縁内面には爪状の圧痕が刻目風に施される。体部はヘラミガキ。	
528	〃	IV層	〃	(25.6)	(2.2)	-	浅黄色 浅黄橙色 灰色	チャート (S)	口縁部外面に凹線文が施される。	
529	〃	III層	〃	-	(30.0)	(3.8)	明褐色 黄灰色	チャート・ 石英(S)多	凹線文。	
530	〃	〃	〃	-	(2.4)	-	にぶい黄橙色 明褐色 にぶい黄橙色	チャート (S)少	口縁端部は内側に摘み拡張し面を成す。凹線文と竹管刺突。	
531	〃	〃	〃	(25.8)	(5.7)	-	橙色	チャート (S)	口縁部は内外に拡張し, 面を成す。外面は波状文と凹線文が施される。	
532	〃	〃	〃	(22.0)	(4.1)	-	にぶい黄橙色 褐色	チャート (L)	口縁部は外反し, 端部は面を成す。ナデ調整。	
533	〃	IV層	〃	(15.8)	(6.5)	-	にぶい橙色 明赤褐色 灰色	- (S)少	口縁部は上方に延び, 端部は尖り気味に仕上げる。口縁外面の上位と下位には二条ずつ沈線が施され, 下端に刻目。外面赤化粘土。	
534	〃	III層	〃	(15.0)	(16.5)	(11.2)	にぶい黄橙色 暗灰色	チャート (S)少	杯部は丸味を持ち, 口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面二条の沈線。裾部は円孔を穿つが穿孔はない。裾端部は拡張し凹線文を施す。	
535	〃	IV層	〃	-	(10.2)	-	橙色 灰褐色	- (S)	杯部中央は凹み, 粘土を充填した痕が放射状に残る。脚部はナデ調整。	
536	〃	〃	〃	(7.8)	(9.3)	-	橙色 にぶい黄橙色 灰白色	- (S)少	櫛描直線文。裾部は二条の垂下する沈線間に刺突文を施す。	
537	〃	III層	〃	-	(3.6)	(10.6)	にぶい黄褐色 にぶい橙色 灰色	チャート・ 石英(S)	ヘラ描き沈線を二条施す。端部は沈線が施される。内面ヘラケズリ。	
538	〃	〃	〃	-	(5.9)	(14.0)	明黄褐色 橙色 オリーブ黒色	チャート (M)多	裾端部は拡張し凹線文が施される。	
539	〃	〃	〃	-	(11.6)	13.0	にぶい橙色 橙色 にぶい黄橙色	チャート (L)多	円盤充填。裾端部は外方に拡張し, 外面に凹線を施す。内外面ともヘラケズリとナデ調整。	
540	〃	〃	〃	-	(6.5)	(13.0)	橙色 黄灰色	チャート (S)多	裾端部は拡張し外面に凹線文が施される。内面ケズリ。	
541	〃	〃	〃	-	(5.3)	(14.4)	にぶい橙色 にぶい黄褐色 灰褐色	チャート (S)少	ヘラ描沈線。裾端部は拡張し, 中央部は沈線状に凹む。内面ナデ調整。	
542	〃	IV層	〃 器台	(4.3)	4.6	(4.8)	黒褐色 にぶい黄色	石英 (S)		
543	〃	〃	〃	5.0	(1.5)	-	- 明褐色 淡黄色	チャート・ 石英(M)		
544	〃	III層	〃 蓋	-	(1.2)	(9.4)	浅黄褐色 黄灰色	チャート (S)少	端部は丸味を帯びる。直径3.0mmの円孔を2個並べて穿つ。	
589	IV区 (段部3)	〃	〃 壺	11.0	(11.4)	-	暗灰黄色 にぶい黄褐色 オリーブ黒色	石英 (S)	浮文は粒状浮文。	I - A ab2g, g, b2ag
590	〃	IV層	〃	10.7	(11.8)	-	浅黄色 にぶい黄色 黒褐色	チャート (M)	長頸壺。口縁端部は面を成す。頸部の櫛描は五条一単位。	II - B blg, gbl, -
591	〃	〃	〃	10.0	(8.9)	-	橙色 黄灰色	-	長頸壺。ナデ調整が施される。	II - A i, e, -
592	〃	III層	〃	(17.8)	(5.2)	-	明赤褐色 にぶい赤褐色 にぶい褐色	チャート (M)	内外面ともに粗いハケ調整。	I - A i, i, -
593	〃	〃	〃	(23.7)	(3.2)	-	にぶい黄褐色 にぶい黄色	チャート (M)多	ナデ調整。	I - A abl, -, -
594	〃	〃	〃	22.6	(4.4)	-	橙色	チャート (L)多	口縁部は肥厚する。	I - B a, -, -
595	〃	〃	〃	(17.0)	(3.8)	-	浅黄色 にぶい黄褐色 黒褐色	チャート・ 石英(L)多	ナデ調整。	II - B agh, g, -

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁、頸部、胴部)
				口径	器高	底径				
596	IV区 (段部3)	III層	弥生土器 壺	(18.0)	(3.0)	-	にぶい黄褐色 暗灰色	チャート・ 石英(M)多		I-A ab1gh, -, -
597	〃	IV層	〃 甕	19.6	(4.5)	-	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色 褐色	- (L)		I-A a, g, -
598	〃	〃	〃 〃	(22.4)	(5.6)	-	にぶい赤褐色 浅黄色 黒褐色	石英 (M)	口縁端部は丸く収める。口縁端部及び下位の微隆起帯を施す際のナデ調整により隆起した部位に刻目を施す。ナデ調整。	I-D ah, -, -
599	〃	III層	〃 〃	(21.2)	(2.1)	-	にぶい黄色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(S)	口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。外面下端と下位に二段刻目。ナデ調整。	I-C a, -, -
600	〃	〃	〃 〃	(22.0)	(6.0)	-	褐色 にぶい褐色 黒色	- (M)	ナデ調整。口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。	I-C ah, g, -
601	〃	〃	〃 〃	(23.0)	(3.4)	-	にぶい黄褐色 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁部を下方に摘み出しナデ調整を施し、断面三角形の突帯を作る。ナデ調整。	I-C agh, i, -
602	〃	〃	〃 〃	(19.2)	(3.1)	-	にぶい褐色 にぶい褐色 灰色	チャート・ 石英(L)多	ナデ調整。	I-D a, i, -
603	〃	II層	〃 〃	(14.0)	(3.1)	-	灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は外方に摘み出す。ナデ調整。	I-E i, i, -
604	〃	III層	〃 〃	(18.8)	(5.8)	-	浅黄色 にぶい褐色	チャート (L)多	貼付帯は薄く、外面に指頭圧痕が残る。端部はナデ調整を施し面を成す。ナデ調整。	I-E i, i, -
605	〃	IV層	〃 〃	(18.4)	(6.0)	-	褐色 にぶい褐色	チャート (M)多	口縁端部は僅かに下方に拡張する。ナデ、ハケ調整。	II-A i, i, -
606	〃	III層	〃 〃	(15.4)	(6.0)	-	明褐色 にぶい黄褐色 灰黄褐色	- (S)	ナデ調整。	II-B a, i, -
607	〃	V層	〃 〃	(19.0)	(4.0)	-	灰色	チャート・ 石英(M)多		II-B a, i, -
608	〃	III層	〃 〃	(19.8)	(8.1)	-	にぶい黄色 黒褐色	- (M)	ナデ調整。	II-B agh, i, b1gh
609	〃	II層	〃 〃	(18.6)	(3.7)	-	褐色 にぶい褐色 オリーブ黒色	- (M)	口縁端部は外方に摘み出し刻目を施す。	II-B agh, i, -
610	〃	〃	〃 〃	(27.2)	(2.9)	-	にぶい黄褐色 黄灰色	チャート (M)	ナデ調整により微隆起帯を作る。	II-B ah, -, -
611	〃	IV層	〃 底部	-	(5.6)	7.4	にぶい黄褐色 褐色 にぶい黄褐色	チャート・ 石英(L)多	平底。ナデ調整。	
612	〃	III層	〃 〃	-	(8.0)	7.3	灰色 浅黄色 にぶい黄褐色	石英 (M)	底部脇は丸味を帯びる。ナデ調整。	
613	〃	〃	〃 高杯	-	(9.0)	11.0	浅黄色 灰黄色	- (S)	裾端部は上部に拡張し、外面中央部は凹む。ナデ調整。	
614	〃	〃	〃 把手	全長 4.2	全幅 1.5	全厚 1.8	褐色 灰色	チャート (S)	重量13.5g	
624	IV区 (段部4)	III層	〃 壺	10.4	(6.9)	-	にぶい黄褐色 暗灰色	- (M)多		I-D abl, gh, -
625	〃	〃	〃 〃	10.6	(13.2)	-	褐色 にぶい褐色 黒色	チャート (M)多		I-D a, ch, h
626	〃	〃	〃 〃	(18.0)	(9.1)	-	にぶい黄褐色 浅黄色 黒色	チャート・ 石英(M)	内面ナデ調整。	II-B a, g, -
627	〃	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	にぶい黄色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	口縁部の浮文は粒状浮文。	II-B ab2gh, -, -
628	〃	V層	〃 〃	-	(2.2)	-	暗灰黄色 灰色	チャート (M)	口縁端部が内側に摘み尖り気味に仕上げる。	II-B abl, -, -
629	〃	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	浅黄色 にぶい黄褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	浮文は粒状浮文。	I-A ab2h, -, -

遺物観察表(土器) 630～654

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
630	IV区 (段部4)	II層	弥生土器 壺	17.8	(5.5)	-	黄灰色 にぶい黄色 灰色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整。	II-B a, h, -
631	〃	III層	〃	(24.0)	(9.3)	-	にぶい橙色 〃 暗灰色	チャート (M)	口縁部は外反し端部はナデ調整により外側が 面を成す。ナデ調整。	II-B h, h, -
632	〃	〃	〃	(16.4)	(12.7)	-	橙色 にぶい黄褐色 黒褐色	チャート・ 石英(L)多	口縁部は外反し, 外部に粘土帯を貼付し肥厚さ せる。	I-D a, i, blgha
633	〃	〃	〃	(10.4)	(10.4)	-	にぶい黄褐色 〃 暗灰色	- (M)	なで肩の胴部から頸部は直立気味に立ち上が り口縁部は短く外反する。端部は上方に摘みナ デ調整を施し尖り気味に仕上げる。	II-B ah, g, blg
634	〃	〃	〃	(12.4)	(13.0)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート (L)多	口縁部は短く外反する。	I-B i, i, ag
635	〃	〃	〃	(41.6)	(15.3)	-	明黄褐色 〃 浅黄色	チャート・ 石英(M)多		I-A ag, i, ch
636	〃	〃	〃	(12.4)	(8.1)	-	にぶい黄褐色 〃 灰褐色	チャート・ 石英(S)多	口縁外面に指頭圧痕顕著。内部はナデ調整によ り面を成す。	I-A i, i, -
637	〃	IV層	〃	(15.4)	(6.0)	-	にぶい黄褐色 〃 〃	チャート (M)	口縁部は肥厚し外面に指頭圧痕が連続する。ナ デ調整。	I-A i, i, blg
638	〃	〃	〃	(12.6)	(7.2)	-	にぶい黄褐色 〃 褐灰色	チャート・ 石英(L)多	頸部から口縁部は短く外反し, 端部は上方に摘 みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。ナデ調 整。	I-B i, i, -
639	〃	〃	〃	(16.4)	(7.6)	-	橙色 〃 灰色	チャート (M)少	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し, 外面に 面を成す。	II-A i, i, -
640	〃	V層	〃	-	(9.5)	-	にぶい黄褐色 〃 褐灰色	チャート・ 石英(M)多	細頸壺。外面に粗い単位のハケ調整, 内面はナ デ調整が施される。	- -, i, -
641	〃	〃	〃	-	(4.9)	(5.4)	黄灰色 橙色 黄灰色	チャート (S)少	平底から段を持って立ち上がる。外面タキ目 を残す。	
642	〃	III層	〃	-	(3.9)	5.3	浅黄色 黄灰色 〃	- (S)少	平底からやや段を持って立ち上がる。内底部は 横方向のナデ調整。	
643	〃	V層	〃	-	(11.8)	5.3	明黄褐色 橙色 明黄褐色	チャート (L)多	底径の小さい底部。胴部は中位に最大径があ る。ナデ調整。	
644	〃	〃	壺	(20.0)	(7.2)	-	明黄褐色 〃 〃	チャート (M)多	口縁部は外反し端部は面を成す。	I-A a, g, b2g
645	〃	III層	〃	(15.9)	(10.5)	-	灰黄褐色 暗灰黄色 黄灰色	- (S)多	口縁端部を外方に摘み内傾する面を成す。貼付 帯外面に刻目を施すが, 端部が凸状を呈してい るため上下二段刻みのように見える。	I-A ag, blg, g
646	〃	〃	〃	16.9	(10.3)	-	にぶい赤褐色 灰褐色 黒褐色	- (S)少	口縁端部は外方に摘みナデ調整を施す。	I-A agh, gh, bldgha
647	〃	V層	〃	(22.8)	(7.6)	-	にぶい黄色 〃 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁部はラッパ状に大きく開く。	I-B a, i, gh
648	〃	IV層	〃	(20.0)	(4.4)	-	にぶい橙色 にぶい褐色 黒色	- (M)多	口縁端部を肥厚させる。	I-C a, f, -
649	〃	V層	〃	(18.8)	(7.5)	-	にぶい褐色 〃 灰色	- (L)	口縁部は外反し, 端部は玉縁状に肥厚させる。	I-B a, g, -
650	〃	〃	〃	(16.8)	(4.0)	-	にぶい褐色 〃 黒褐色	チャート・ 石英(M)多		I-C a, i, -
651	〃	〃	〃	(22.0)	(5.7)	-	にぶい黄褐色 明黄褐色 黒色	チャート (S)少	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し, 尖り気 味に仕上げる。	I-C a, g, -
652	〃	〃	〃	(23.4)	(2.2)	-	にぶい橙色 オリブ黒色 〃	チャート・ 石英(S)多	内面は赤化粘土が残る。ナデ調整。	I-C ah, i, -
653	〃	〃	〃	(27.2)	(5.1)	-	にぶい黄褐色 にぶい褐色 暗灰色	チャート・ 石英(S)	口縁部は大きく外反し, 端部は上方に摘みナデ 調整を施し尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	I-C ah, i, -
654	〃	III層	〃	(20.2)	(3.8)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	石英 (S)少		I-C ah, i, -

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
655	IV区 (段部4)	V層	弥生土器 甕	23.0	(2.0)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 〃 〃 黒色	石英 (S)少	ナデ調整。口縁部微隆起帯直下は撫描が浅く施される。	I - C ah, -, -
656	〃	〃	〃	(27.2)	(12.2)	-	にぶい橙色 〃 〃 〃 暗灰色 黄灰色	チャート・ 石英(M)多	膨らみのある胴部から口縁部は外反する。	II - B ag, g, agh
657	〃	III層	〃	21.0	(10.0)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 〃 〃 黒色	- (M)多	口縁部は大きく外反する。端部はナデ調整により中央部が凹む。	I - D agh, i, bldgh
658	〃	V層	〃	(32.0)	(5.0)	-	にぶい橙色 〃 〃 〃 暗灰色	- (M)	口縁部は大きく外反し, 端部も僅かに外反する。	II - B ag, i, -
659	〃	III層	〃	(28.4)	(7.0)	-	にぶい橙色 〃 〃 〃 暗灰色	チャート (M)多	口縁部は肥厚し端部は外方に摘みナデ調整を施す。ナデ調整。	I - C a, i, -
660	〃	〃	〃	(17.2)	(5.8)	-	にぶい橙色 〃 〃 〃 黄灰色	チャート (L)多	頸部は直立気味に立ち上がり, 口縁部は外反する。ナデ調整。	I - D a, bl, -
661	〃	〃	〃	(19.0)	(11.3)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 〃 灰褐色 暗灰色	チャート・ 石英(L)多	口縁部は外反し肥厚する。	I - D i, i, blhc
662	〃	〃	〃	(24.0)	(12.1)	-	明黄褐色 〃 〃 〃 〃 〃	チャート・ 石英(M)	口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁の端部は僅かに外側に折り返す。ナデ調整。	I - D i, i, blgh
663	〃	〃	〃	(15.4)	(4.7)	-	にぶい赤褐色 〃 〃 〃 灰褐色 褐色	チャート (M)	口縁部は外反し, 端部は尖り気味に仕上げる。	II - B ah, i, -
664	〃	IV層	〃	(19.0)	(4.9)	-	にぶい橙色 〃 〃 〃 暗灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁部は外反し, 端部は僅かに肥厚する。ナデ調整。	I - D a, g, -
665	〃	V層	〃	16.0	(4.7)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 〃 褐色	チャート (M)多	口縁直下は櫛かハケ状工具による調整。外面ナデ調整, 内面は一部にハケ状の調整が施される。外面煤付着。	II - B a, i, -
666	〃	〃	〃	-	(2.8)	-	黄褐色 にぶい黄色 黒褐色	- (S)少	口縁端部は上方に摘みナデ調整。尖り気味に仕上げる。	I - C ah, -, -
667	〃	III層	〃	-	(13.1)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 〃 にぶい黄褐色 暗灰色	チャート・ 石英(M)	指頭によるナデ調整で微隆起帯を造る。微隆起帯間と最下帯に棒状浮文。	- -, -, ch
668	〃	IV層	〃	-	(8.8)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 〃 にぶい黄色 灰色	チャート・ 石英(M)多	頸部と胴部の境目に刺突文を上下交互に施す。胴部は撫描により微隆起帯を造り最下帯内に刻目を施す。	- -, -, dgha
669	〃	III層	〃	-	(4.5)	-	にぶい黄色 〃 〃 〃 にぶい黄褐色 黒色	石英 (S)多	胴部と頸部の境目に粒状浮文と刺突文を上下交互に施す。その下に三条一単位の櫛描文と刻目。	- -, -, b2dga
670	〃	〃	〃	-	(6.8)	-	にぶい黄褐色 〃 〃 〃 青黒色	チャート・ 石英(S)		- -, -, fhc
671	〃	〃	〃	20.8	(4.1)	-	明褐色 明赤褐色 〃 〃 〃	- (M)少	全体的にナデ調整。頸部外面の一部にハケ調整。	I - E e, i, -
672	〃	IV層	〃	(18.0)	(4.4)	-	黄褐色 橙色 〃 〃 黄褐色 黄褐色	チャート (S)少	頸部から口縁部にかけて外反する端部を上下に拡張する。	I - E e, i, -
673	〃	III層	〃	22.4	(11.2)	-	暗黄褐色 〃 〃 〃 暗灰色	石英 (M)少	ナデ調整。胴部内面はヘラ状工具によるナデ調整。	I - B i, i, i
674	〃	IV層	〃	(16.0)	(11.6)	-	にぶい赤褐色 〃 〃 〃 〃 〃	チャート・ 石英(L)多	口縁は「く」の字に外反する。口縁端部は丸く収める。内面ヘラミガキ, 外面ヘラケズリ。	II - B i, i, i
675	〃	V層	〃 底部	-	(4.1)	11.0	明黄褐色 〃 〃 〃 〃 〃	チャート (L)多	平底。底径大きい。	
676	〃	III層	〃	-	(9.2)	(6.8)	褐色 〃 〃 〃 〃 〃	チャート・ 石英(S)	内底部強いナデにより周縁部は凹む。外面タール痕, 煤付着。	
677	〃	〃	〃	-	(10.8)	4.8	黄灰色 〃 〃 〃 にぶい黄褐色 黄灰色	チャート・ 石英(M)多	底径の狭い平底から胴部中位で膨らみを持つ。外面煤付着。	
678	〃	〃	〃 甌	-	(3.7)	(5.6)	灰色 〃 〃 〃 淡黄色 灰色	チャート (M)多	比較的厚めの底部中央に断面逆三角形の焼成前穿孔有り。内外面ナデ調整。	
679	〃	〃	〃	-	(3.9)	5.5	にぶい褐色 〃 〃 〃 にぶい黄褐色 灰色	- (S)多	底部中央に焼成後穿孔有り。ナデ調整。	

遺物観察表(土器) 680～741

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
680	IV区 (段部4)	III層	弥生土器 甗	-	(6.2)	5.6	暗灰黄色 〃 暗灰色	チャート (M)多	底部中央に焼成後穿孔有り。ナデ調整。	
681	〃	V層	〃 鉢	(17.4)	(3.9)	-	橙色 にぶい黄橙色 灰白色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	I - A i, i, -
682	〃	I層	〃 〃	15.4	6.8	6.4	橙色 〃 〃	チャート (M)	平底から内湾して立ち上がる。内底周縁部はナ デ調整により凹む。	
683	〃	III層	〃 〃	(16.6)	(9.0)	-	橙色 〃 〃	チャート (L)	膨らみのある胴部から口縁部は外反し, 端部は 面を成す。	
684	〃	〃	〃 高杯	22.0	(5.8)	-	黄褐色 にぶい橙色 黄褐色	チャート・ 石英(M)多	貼付口縁。外面上下端を外方に摘み出し, ナデ 調整を施す。凹線文。体部の屈曲部は外側に摘 み, ナデ調整を施し突帯状に造る。	
685	〃	〃	〃 〃	(28.0)	(4.5)	-	明黄褐色 橙色 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁部は肥厚させ端部は外方に摘み, ナデ調整 を施し水平な面を成す。体部に段を有する。ナ デ調整。	
686	〃	〃	〃 〃	21.8	(6.1)	-	にぶい黄褐色 〃 〃	チャート (L)少	口縁端部は内側に拡張し, 水平な面を成す。口 縁外面に凹線文が施される。	
687	〃	〃	〃 〃	20.0	(7.5)	-	橙色 〃 暗灰黄色	石英 (S)少	口縁端部は僅かに内側に拡張し水平な面を成 す。ナデ調整。	
688	〃	V層	〃 〃	-	(4.6)	-	にぶい橙色 〃 褐灰色	チャート (L)少	外面ミガキ, 内面紋り目顕著。	
689	〃	III層	〃 〃	-	(6.9)	-	橙色 〃 褐灰色	チャート (L)多	脚部中位に焼成前穿孔有り。ナデ調整。	
690	〃	V層	〃 〃	-	(10.8)	-	灰色 橙色 灰色	石英 (S)少	ナデ調整。	
728	IV区 (段部5)	IV層	〃 壺	(10.4)	(10.0)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート (M)多	頸部は直立し, 外反する。口縁部は肥厚し端部 はナデ調整により面を成す。ナデ調整。	II - B ab1, ghc, -
729	〃	〃	〃 〃	(16.6)	(14.4)	-	明褐色 〃 にぶい黄褐色	チャート・ 石英(M)	頸部は直立し口縁部は外反する。端部は内傾す る面を成す。内面板状工具によるナデ調整。化 粧土。	I - A a, ghc, -
730	〃	〃	〃 〃	(16.6)	(10.1)	-	橙色 〃 暗灰色	チャート (M)多	摩耗が著しく調整不明。	I - D ab1, i, -
731	〃	〃	〃 〃	(17.0)	(2.9)	-	にぶい黄褐色 〃 黒色	チャート (M)多	口縁端部は尖り気味に仕上げる。	I - A ab2, -, -
732	〃	〃	〃 〃	(16.4)	(5.2)	-	オリーブ黒色 〃 〃	チャート (M)多		I - A ab1, h, -
733	〃	III層	〃 〃	(20.0)	(4.5)	-	にぶい黄褐色 〃 オリーブ黒色	チャート (M)多	口縁外面に幅の狭い刻目を施す。貼付痕は認め られない。	II - B ab1h, -, -
734	〃	IV層	〃 〃	(21.2)	(7.6)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート (M)多	口縁端部は上方に摘みナデ調整, 尖り気味に仕 上げる。	I - A ab1, h, -
735	〃	V層	〃 〃	(20.0)	(5.1)	-	黒褐色 〃 〃	- (M)多	口縁端部は上方に摘みナデ調整, 尖り気味に仕 上げる。	II - A a, b1gh, -
736	〃	IV層	〃 〃	(10.0)	(3.9)	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色 灰色	- (S)		II - B blg, g, -
737	〃	II層	〃 〃	-	(9.1)	-	灰黄色 〃 暗灰色	チャート (S)		- a, gh, -
738	〃	IV層	〃 〃	(13.6)	(8.4)	-	灰色 〃 〃	チャート (M)	口縁端部を上方に摘みナデ調整が施される。	I - A i, g, -
739	〃	〃	〃 〃	(22.0)	(6.6)	-	浅黄色 にぶい黄褐色 褐灰色	チャート (M)多	口縁端部はナデ調整を施し, 面を成す。	I - A i, g, -
740	〃	〃	〃 〃	-	(5.3)	-	黄灰色 暗灰黄色 黄灰色	チャート (M)		- -, ab2h, -
741	〃	〃	〃 〃	-	(5.5)	-	灰色 〃 〃	チャート (M)多		- -, -, ab2gh

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
742	IV区 (段部5)	III層	弥生土器 壺	(8.8)	(7.3)	-	にぶい黄橙色 明黄褐色 灰白色	チャート・ 石英(L)多		I-A i, i, -
743	〃	〃	〃	(13.2)	(6.5)	-	にぶい黄褐色 暗灰色	チャート・ 石英(M)	口縁部外面に浮文。ナデ調整。	II-B bl, i, -
744	〃	IV層	〃	(18.0)	(7.7)	-	にぶい黄褐色 橙色 灰色	チャート (L)多	口縁部は頸部から緩やかに外反する。	II-B a, i, -
745	〃	〃	〃	(16.2)	(8.0)	-	にぶい黄褐色 橙色 灰褐色	チャート・ 石英(L)多	凹線文系。口縁部は緩やかに外反する。端部は 上方と外方に揃みナデ調整を施し尖り気味に 仕上げる。ナデ調整。	II-A i, i, i
746	〃	III層	〃	(17.6)	(9.7)	-	にぶい橙色 明黄褐色 黒褐色	チャート・ 石英(L)多	ナデ調整。	II-B ah, b2gh, h
747	〃	IV層	〃	(17.4)	(14.6)	-	橙色 〃	チャート (M)	頸部は直立気味に立ち上がり口縁部は外方に 折れる。	I-A i, af, i
748	〃	III層	〃	(21.0)	(4.4)	-	明黄褐色 にぶい黄褐色 黄灰色	チャート・ 石英 (M)	ナデ調整。	I-A a, i, -
749	〃	〃	〃	(19.2)	(7.0)	-	にぶい黄褐色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(L)多	ナデ調整。	I-E i, i, -
750	〃	IV層	〃	(23.8)	(9.2)	-	にぶい黄褐色 にぶい黄色 にぶい黄褐色	チャート (M)多	口縁部は上方に揃みナデ調整, 尖り気味に仕 上げる。	I-E a, i, bld
751	〃	III層	〃	(19.4)	(5.4)	-	にぶい赤褐色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(L)多	口縁下に爪状圧痕が連続する。頸部は縦方向の ハケ調整後, 沈線が施される。内面の一部に赤 化粧土。	I-A a, f, -
752	〃	〃	〃	(16.2)	-	-	灰黄色 灰色 〃	チャート・ 石英(S)	胎土中の砂粒は石英が多い。	I-A a, i, gh
753	〃	〃	〃	(18.0)	(6.1)	-	明黄褐色 にぶい黄褐色 緑灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁外面下半は横方向にナデ調整を施し段が 付く。	I-D i, i, a
754	〃	IV層	〃	(25.0)	(18.0)	-	灰色 にぶい褐色 灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁部は緩やかに外反。端部は上方に揃みナデ 調整, 外面は面を成す。ナデ調整。	I-B a, g, ag
755	〃	II層	〃	(6.4)	(4.4)	-	明赤褐色 〃 灰褐色	- (S)極少	口縁部は内傾し端部は外方に揃みナデ調整。口 縁部下端も外方に揃み出しナデ調整が施され る。	II-A e, i, -
756	〃	IV層	〃	(8.8)	(3.8)	-	にぶい黄褐色 〃 にぶい黄褐色	-	無頸壺。2箇所に円孔を持つ。	II-B e, e, -
757	〃	II層	〃	(11.0)	(4.2)	-	明黄褐色 橙色 明黄褐色	- (S)少	無頸壺。	II-B e, ae, i
758	〃	〃	〃	-	(12.0)	-	にぶい黄褐色 橙色 にぶい黄褐色	- (S)少	外面胴部下位はヘラミガキ。内面は指頭による ナデ調整。胴径18.0cm。	- -, -, i
759	〃	〃	〃	-	(12.2)	5.4	浅黄褐色 橙色 浅黄褐色	チャート (L)多	小型壺。平底から内湾しながら立ち上がる。ナ デ調整。	- -, -, i
760	〃	III層	〃	12.8	30.8	(6.0)	にぶい黄褐色 〃 黒褐色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整。	II-B i, i, i
761	〃	II層	〃	14.0	(33.0)	-	にぶい黄褐色 〃 褐灰色	チャート (M)	肩の張らない胴部から頸部が少し立ち、口縁部 にかけて直立気味に仕上げる。口縁部は僅かに 肥厚する。	I-A i, i, i
762	〃	〃	甕	(19.0)	(7.6)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色 〃	チャート・ 石英(S)多	口縁部はラッパ状に大きく開く。端部は肥厚し 上端を揃みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ る。	II-B a, i, blgh
763	〃	〃	〃	(20.0)	(12.3)	-	にぶい褐色 にぶい褐色 黒色	チャート・ 石英(M)	口縁部はラッパ状に開く。化粧土が施される。	I-D agh, i, blghc
764	〃	〃	〃	(27.8)	(7.0)	-	にぶい黄色 にぶい黄褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)多	ナデ調整, 指頭圧痕。	II-B ag, bl, -
765	〃	III層	〃	-	(5.3)	-	にぶい黄褐色 灰色 〃	チャート・ 石英(S)多	胴部に微隆起帯, 棒状浮文を貼付する。	- -, -, ch
766	〃	IV層	〃	(8.2)	(11.0)	-	オリーブ黒色 〃 〃	チャート・ 石英(M)多		- -, -, blhc

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁, 頸部, 胴部)
				口径	器高	底径				
767	IV区 (段部5)	V層	弥生土器 甕	(18.8)	(9.4)	-	にぶい黄色 黄灰色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。	I-B agh, i, ablgh
768	〃	III層	〃	(20.3)	(4.3)	-	灰黄色 暗灰黄色 灰色	チャート・ 石英(S)	ナデ調整。	I-B agh, i, -
769	〃	II層	〃	(21.0)	(6.2)	-	にぶい黄橙色 〃 黒色	チャート (M)多	口縁部はラッパ状に開く。端部は上方に摘みナデ調整, 尖り気味に仕上げる。	I-C ahg, i, -
770	〃	〃	〃	(20.0)	(6.4)	-	にぶい黄橙色 灰色	チャート (M)	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	II-B a, i, i
771	〃	〃	〃	(20.6)	(2.0)	-	にぶい黄橙色 〃 黒色	チャート・ 石英(M)多	端部は摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。直下にナデ調整を強く施し凸状の微隆起帯を造る。	I-B a, -, -
772	〃	〃	〃	(21.0)	(2.5)	-	黄灰色 〃	- (S)少	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。	II-B agh, i, -
773	〃	IV層	〃	(18.0)	(7.6)	-	灰褐色 褐灰色 灰色	- (M)多	口縁部は緩やかに外反し端部は上方に摘みナデ調整, 尖り気味に仕上げる。器壁薄い。	I-C a, i, bldh
774	〃	II層	〃	(18.0)	(8.4)	-	にぶい橙色 にぶい黄褐色 褐灰色	チャート (M)少	口縁部は外反し端部はナデ調整, 面を成す。頸部と胴部の境目に段を持つ。	II-B g, -, blg
775	〃	III層	〃	(16.6)	(9.7)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色 暗灰色	チャート (S)	胴部の円形浮文には刺突が施される。ナデ調整。	II-B ag, i, blgh
776	〃	IV層	〃	(20.7)	(6.2)	-	にぶい黄褐色 〃 黒色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げ, 外面は面を成す。	II-B g, i, -
777	〃	II層	〃	(16.0)	(4.8)	-	灰黄褐色 褐色 灰色	石英 (S)多	端部は摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。口縁貼付帯下端は下方に摘み出し突帯状にする。	I-C agh, i, -
778	〃	〃	〃	(22.2)	(3.7)	-	にぶい黄褐色 〃 黒色	- (S)少	口縁部は肥厚し端部は丁寧なナデ調整を施し面を成す。	I-B ah, i, -
779	〃	IV層	〃	(26.0)	(6.2)	-	にぶい黄褐色 〃	チャート (M)多	口縁部は肥厚し端部は面を成す。	I-B ah, i, -
780	〃	〃	〃	(22.0)	(3.5)	-	明黄褐色 〃 淡黄色	チャート・ 石英(M)多	口縁端部は面を成す。ナデ調整。	II-B g, i, -
781	〃	II層	〃	(27.4)	(9.0)	-	にぶい黄褐色 〃	チャート (S)多	口縁部は緩やかに外反し, 端部は肥厚し面を成す。頸部と口縁部の境目に二条の突帯が巡る。	I-A i, i, h
782	〃	IV層	〃	(16.0)	(6.7)	-	明褐色 〃 黒色	チャート (L)多	口縁部は「く」の字に外反し, 端部は下方に摘みナデ調整。外面は面を成す。口縁部外面は粘土帯を貼付する際の指頭圧痕が連続する。	I-B i, i, -
783	〃	〃	〃	(17.0)	(7.5)	-	灰白色 灰黄褐色 灰白色	チャート (L)多	口縁部は「く」の字に緩やかに外反し, 端部は下方に僅かに拡張し面を成す。外面は粘土貼付帯に指頭圧痕が残る。ナデ調整。	I-A i, i, -
784	〃	〃	〃	(16.0)	(5.8)	-	浅黄色 〃 灰色	チャート (L)	口縁部は「く」の字に外反し, 端部は面を成す。ナデ調整。	II-B i, i, -
785	〃	III層	〃	(11.0)	(10.2)	-	にぶい黄褐色 黒褐色	チャート (S)多		II-B i, i, g
786	〃	IV層	〃	(19.2)	(11.5)	-	にぶい黄色 明黄褐色 灰色	チャート・ 石英(M)多	胴部から頸部が伸び口縁部は緩やかに外反する。端部は面を成す。ナデ調整。胴部内面接合部に指頭圧痕。	II-B i, i, i
787	〃	V層	〃	(16.0)	(4.6)	-	にぶい橙色 〃 黄色 黄灰色	チャート (L)多	頸部から口縁部は緩やかに外反する。端部は上方に摘みナデ調整を施し外側に面を成す。ナデ調整。内外面とも指頭圧痕が顕著。	II-A i, i, -
788	〃	III層	〃	(18.0)	(5.0)	-	にぶい黄色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(S)	口縁部外面に僅かに貼付の痕が残る。	I-E i, i, -
789	〃	〃	〃	(22.2)	(4.3)	-	明黄褐色 〃 黒色	-	ナデ調整。	II-E i, i, -
790	〃	〃	〃	(22.0)	(3.6)	-	にぶい黄色 にぶい黄褐色 黄灰色	-	口縁部は端部を上方に拡張する。ナデ調整。	II-A e, i, -
791	〃	IV層	〃	27.6	(2.3)	-	灰オリーブ色 灰色 灰オリーブ色	チャート (M)		I-C e, -, -

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式/文様 (口縁、頸部、胴部)
				口径	器高	底径				
792	IV区 (段部5)	III層	弥生土器 底部	-	(2.9)	(4.8)	にぶい黄色 にぶい黄橙色 黒褐色	チャート・ 石英(S)多	平底から段を持って立ち上がる。器壁薄い。	
793	〃	〃	〃	-	(3.2)	5.0	にぶい橙色 にぶい黄褐色	チャート・ 石英(M)多	平底。外面の一部にタール痕有り。	
794	〃	IV層	〃	-	(5.9)	7.1	灰色 橙色 灰色	チャート・ 石英(L)多	厚みのある底部。内外面に指頭圧痕。	
795	〃	II層	〃	-	(7.9)	(6.0)	浅黄色 橙色 浅黄褐色	チャート (L)	平底。ナデ調整が施される。	
796	〃	〃	〃	-	(7.6)	6.4	にぶい黄褐色 灰色	チャート・ 石英(M)多	平底。ナデ調整が施される。	
797	〃	IV層	〃	-	(12.0)	(10.0)	灰色 にぶい黄褐色	チャート (S)	平底。底部の器壁薄い。	
798	〃	III層	〃	-	(5.7)	(5.8)	灰色 にぶい黄褐色 暗灰色	チャート・ 石英(S)多	平底から外方に開く。ナデ調整。	
799	〃	IV層	〃	-	(6.5)	(7.6)	浅黄色 にぶい黄褐色	石英 (S)	平底。内底部が凹む。指頭圧痕、ナデ調整が施される。	
800	〃	III層	〃	-	(8.1)	6.2	灰黄褐色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(S)	平底から外方に開く。ナデ調整。	
801	〃	IV層	〃	-	(6.7)	(6.6)	褐色 明褐色 褐色	チャート (L)	平底から段を持ち外方に開く。	
802	〃	II層	〃	-	(7.9)	5.4	にぶい黄色 にぶい橙色 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)	平底。底部の器壁が薄く、丁寧なナデ調整が施される。	
803	〃	III層	〃 甗	-	(3.4)	(4.9)	橙色 にぶい褐色 黒褐色	チャート・ 石英(S)	焼成後外から内への穿孔。	
804	〃	IV層	〃	-	(2.8)	(7.0)	黄褐色 にぶい黄褐色 灰色	チャート (L)多	平底。底部中央に焼成前穿孔が見られる。	
805	〃	〃	〃 高杯	(16.0)	(6.7)	-	橙色 にぶい褐色 黒褐色	チャート (M)多	口縁部は上方に直立し、端部は尖り気味に仕上げる。ナデ調整。	
806	〃	〃	〃	(19.8)	(3.2)	-	明黄褐色 黒褐色	石英 (S)	凹線文。口縁端部は僅かに外側に拡張し水平な面を成す。ナデ調整。	
807	〃	〃	〃	(24.4)	(3.2)	-	橙色 褐色	- (M)	凹線文。口縁端部は僅かに外側に拡張し水平な面を成す。	
808	〃	III層	〃	(27.4)	(6.2)	-	にぶい黄褐色 灰色	チャート・ 石英(M)	口縁部は丸味を持ちながら内湾する。	
809	〃	〃	〃	-	(4.6)	-	橙色 明黄褐色	チャート・ 石英(S)	口縁端部、体部が欠損。口縁部外面に櫛描波状文。ナデ調整。	
810	〃	II層	〃	(32.6)	(5.0)	-	橙色 にぶい橙色 黄灰色	チャート (S)多	凹線文系。	
811	〃	〃	〃 鉢又は高杯	(32.0)	(6.3)	-	にぶい褐色 明赤褐色	石英 (M)多	口縁部は上方に折れナデ調整、端部は面を成す。体部との境目に鏝状の突帯が付き、上面に竹管刺突文を連続して配する。	
812	〃	IV層	〃 高杯	-	(3.6)	(10.8)	橙色	チャート・ 石英(S)	裾部端面は強いナデ調整により中央部は凹む。裾部端上面は沈線が入る。脚部内面はナデとヘラケズリが施される。外面はヘラミガキ。	
813	〃	〃	〃	-	(5.8)	(11.2)	にぶい橙色	- (S)少	裾部は外方に摘み拡張する。外面は10個1単位の刺突が巡る。内面はヘラケズリが施される。	
814	〃	〃	〃	-	(4.2)	(11.4)	にぶい赤褐色 明赤褐色 黒褐色	チャート (S)多	鋸歯文と櫛描直線文。内面ヘラケズリ。	
815	〃	〃	〃	-	(5.4)	(11.2)	赤褐色 オリーブ褐色	チャート (S)多	裾部は上下に拡張する。脚外面には櫛描直線文と垂線が施される。脚部内面ヘラケズリ。	
816	〃	III層	〃	(12.0)	(7.3)	-	浅黄褐色 明黄褐色 黄灰色	-	裾部は上方に拡張する。外面には凹線文が施される。ナデ調整。	

遺物観察表(土器)817～820・(石器・鉄器)2～77

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)(量)	特徴	形式／文様 (口縁、頸部、胴部)
				口径	器高	底径				
817	Ⅳ区 (段部5)	Ⅳ層	弥生土器 高杯	(36.0)	(5.2)	-	橙色 〃 灰色	チャート (L)	水平に引き出す。下部に凹線文、中位に刻目が施される。	
818	〃	Ⅱ層	〃 〃	-	(4.9)	(12.4)	橙色 〃 灰白色	チャート (L)多	裾部はラッパ状に開き中央に直径1.2cmの焼成前穿孔が見られる。	
819	〃	Ⅳ層	〃 〃	-	(9.3)	-	橙色 〃 灰色	チャート (S)少	円盤充填。脚内部に絞り目、下位にケズリが施される。	
820	〃	Ⅲ層	〃 〃	-	(7.0)	-	浅黄橙色 〃 橙色 〃 浅黄橙色	赤色チャート (L)	外面に沈線文。	

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
2	Ⅱ区	ST8	石器 砥石	Ⅲ	11.0	7.0	3.0	264.0	泥岩	主面一側面使用。裏面剥離。
3	〃	P2	〃 石鎌	I-A	2.8	1.7	0.4	2.0	サヌカイト	
4	〃	P1	〃 石包丁	Ⅲ-B1-3	7.5	4.7	0.9	32.0	泥岩	二穴。
5	〃	Ⅱ層	〃 〃	Ⅲ-A	3.6	3.4	0.6	8.9	頁岩	穴数不明。
6	〃	〃	〃 叩石	I-A	9.9	7.7	3.0	334.0	細粒花崗岩	
7	〃	〃	〃 投弾	Ⅲ	11.2	6.7	5.5	564.0	〃	
8	Ⅱe区	SK25	〃 石包丁未製品	-	8.7	6.2	1.4	85.0	泥岩	基部欠損。
14	〃	P34	〃 叩石	I-B	12.2	5.8	12.7	1269.0	細粒花崗岩	一側面に敲打痕が集中する。
35	〃	Ⅱ層	〃 石鎌	Ⅲ-B	3.2	2.6	0.6	2.6	サヌカイト	
36	〃	Ⅲ層	〃 石包丁	Ⅲ-A	8.5	4.3	0.7	34.1	粘板岩	一穴。
37	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B1-4	8.7	3.9	0.5	24.9	泥岩	二穴。
38	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B1-3	8.0	4.6	0.6	24.3	〃	二穴。
39	〃	〃	〃 砥石	I	8.3	4.2	1.1	54.3	〃	仕上砥。
40	〃	〃	〃 〃	I	11.9	9.4	2.8	394.0	流紋岩	両面使用。
41	〃	〃	〃 投弾	I	4.3	3.6	3.2	57.2	細粒花崗岩	
42	〃	〃	〃 〃	I	4.5	4.3	2.7	76.5	〃	
43	〃	Ⅲ層	〃 〃	Ⅱ	9.0	8.1	3.5	352.0	〃	
44	〃	〃	〃 石核	-	9.7	5.3	8.2	512.0	緑色凝灰岩	
77	Ⅱn区	〃	〃 石鎌	I-A	2.7	1.7	0.5	2.0	頁岩	重量軽い。

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
78	Ⅱn区	Ⅲ層	石器 石包丁	Ⅲ-A	6.2	3.5	0.6	240	片岩	二穴。
79	〃	〃	〃 砥石	Ⅲ	3.3	5.1	2.2	33.1	泥岩	中央に挟りが入る。
80	〃	〃	〃 〃	I	14.4	5.7	2.5	309.0	〃	
81	〃	〃	〃 〃	Ⅲ	20.1	6.7	4.6	656.0	流紋岩	一側面のみ使用。
82	〃	Ⅱ層	〃 叩石	I-A	8.4	8.1	3.7	330.0	細粒花崗岩	片面のみ敲打痕が残る。
83	〃	〃	〃 投弾	Ⅲ	11.0	7.1	4.2	434.0	片岩	
84	〃	〃	〃 〃	I	4.5	3.7	2.3	47.6	細粒花崗岩	
85	〃	〃	〃 〃	I	4.3	3.3	2.5	42.8	〃	
96	Ⅲ区	Ⅲ層	〃 石包丁	Ⅲ-A	7.2	3.8	0.9	27.3	泥岩	一穴。
97	〃	〃	〃 石斧	I-A	6.1	4.9	2.8	140.0	片岩	
98	〃	〃	〃 叩石	I	14.5	12.9	5.0	1299.0	細粒花崗岩	主面中央に敲打痕。一側面に擦痕が認められる。
104	Ⅳ区 (段部1)	ST1	〃 石包丁	Ⅲ-B2-4	9.7	3.3	0.7	38.1	頁岩	一穴。チャート混。
111	〃	ST2	〃 石鎌	I	2.3	1.7	0.4	1.3	〃	
112	〃	〃	〃 〃	Ⅳ	4.7	1.7	0.5	3.4	サヌカイト	
132	〃	ST3	〃 石包丁	Ⅲ-B2-2	9.2	4.2	0.8	51.5	頁岩	紐孔と並び背部に挟り入る。
145	〃	SK10	剥片	-	4.8	1.9	0.4	3.8	片岩	
152	Ⅳ区 (段部2)	ST4	〃 石包丁	-	5.2	8.1	0.7	36.3	〃	二穴。両側面欠損。
153	〃	〃	〃 石斧	Ⅱ-A	7.4	3.7	0.8	45.5	玄武岩	刃部は両面に研磨が認められる。
154	〃	〃	〃 砥石	I	14.0	8.8	2.2	377.0	流紋岩	扁平な石の両面及び一側面を使用する。
155	〃	〃	〃 投弾	Ⅱ	4.7	3.4	2.4	53.9	花崗斑岩	
156	〃	〃	〃 〃	Ⅱ	4.3	4.1	2.4	62.9	細粒花崗岩	
157	〃	〃	〃 棒状石器	-	8.2	1.3	0.7	19.0	緑色片岩	
164	〃	焼土坑6	剥片	-	3.4	1.1	0.4	1.1	サヌカイト	
172	〃	SD2	〃 石鎌	Ⅱ	2.1	1.1	0.3	0.6	〃	
173	〃	SA1 P8	〃 鉄鎌	-	4.6	2.0	0.4	5.5	-	

遺物観察表(石器・鉄器) 175～252

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
175	Ⅳ区 (段部2)	SA1 P7	石器 石包丁未製品	-	11.1	6.0	1.3	104.9	頁岩	
176	〃	P113	〃	-	9.7	5.4	1.0	66.0	〃	一側辺に抉りあり。
177	〃	〃	〃	-	11.7	4.8	1.3	64.9	〃	刃部のみ調整がみられる。
181	〃	P54	〃 投弾	I	4.4	3.7	2.7	54.6	細粒花崗岩	
187	〃	SX3	〃 石鏃	II	3.8	2.4	0.4	5.0	サヌカイト	
188	〃	〃	〃 投弾	III	12.0	8.9	4.9	799.0	細粒花崗岩	
189	Ⅳ区 (段部4)	〃	〃	-	4.4	5.3	5.1	187.0	緑色チャート	白型。両端は平滑な自然面。
190	〃	〃	〃	-	4.3	5.1	3.1	82.8	砂岩	白型。端部は平滑な自然面。側面は六面体。
225	〃	ST5	〃 石鏃	II	2.4	1.4	0.5	1.2	サヌカイト	
226	〃	〃	〃	II	2.1	1.3	0.4	1.0	〃	
227	〃	〃	〃 石包丁	III-A	9.3	3.8	0.7	36.1	頁岩	二穴。主面左側部欠損後、研ぎ直し。
228	〃	〃	〃	III-A	11.0	4.4	0.9	55.4	〃	二穴。背部丁寧な面取り。
229	〃	〃	〃 石斧	I-A	12.1	5.3	2.0	172.0	緑色玄武岩	裏面未調整。刃部のみ調整。
230	〃	〃	〃 礫錐	-	13.3	3.1	1.3	88.9	緑色片岩	
231	〃	〃	〃 砥石	I	8.2	2.9	1.4	45.0	砂岩	直方体。
232	〃	〃	〃	II	14.4	13.5	3.2	760.0	〃	片面のみ使用。金属器研磨。
233	〃	〃	〃 叩石	I	11.5	9.1	4.2	619.0	細粒花崗岩	片面中央部に敲打痕。
234	〃	ST5 P9	〃 投弾	I	4.4	3.5	2.4	50.5	砂岩	
235	〃	〃	〃	I	4.4	3.7	2.5	54.4	〃	
236	〃	〃	〃	II	4.5	4.2	2.7	69.2	細粒花崗岩	
237	〃	〃	〃 石核	-	15.8	9.0	5.9	1218.0	チャート	一側面を使用。
238	〃	〃	〃	-	11.1	7.0	5.2	562.0	緑色チャート	
243	〃	SK33	〃 叩石	I	9.2	7.4	4.0	432.0	細粒花崗岩	片面の中央部が凹む。
244	〃	〃	〃 投弾	II	5.1	3.9	2.0	51.8	〃	扁平。
252	〃	P55	〃 石包丁	III-A-3	7.0	3.5	0.6	22.1	頁岩	二穴。主面背部は斜めに研ぐ。

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
253	Ⅳ区 (段部4)	P55	石器 投弾	Ⅱ	5.0	4.5	2.5	73.1	細粒花崗岩	
261	Ⅳ区 (段部5)	ST6	〃 スクレイパー	-	3.1	2.1	0.3	2.0	サヌカイト	一側辺のみ調整。
262	〃	〃	〃 石包丁	Ⅲ-B2-2	7.8	4.7	0.9	39.3	頁岩	二穴。両刃。
263	〃	〃	〃 投弾	Ⅱ	5.0	3.4	2.1	50.7	砂岩	
264	〃	〃	〃 〃	Ⅱ	5.1	3.3	2.8	61.2	細粒花崗岩	
277	〃	土器集中 4	〃 砥石	Ⅰ	7.8	7.3	3.7	304.0	流紋岩	
278	〃	〃	〃 投弾	Ⅱ	7.8	7.4	4.2	368.0	細粒花崗岩	
284	〃	ST7	〃 石鎌	Ⅱ	2.5	1.2	0.3	0.7	サヌカイト	
285	〃	〃	〃 石包丁未製品	-	5.9	9.5	1.1	125.0	結晶片岩	
286	〃	ST7 P3	〃 叩石	Ⅰ-A	10.3	10.0	5.7	808.0	細粒花崗岩	
287	〃	ST7	〃 投弾	Ⅰ	3.4	2.8	2.3	31.2	〃	
288	〃	〃	〃 〃	Ⅰ	3.5	3.5	2.7	41.1	〃	
289	〃	〃	〃 〃	Ⅰ	3.5	2.9	2.5	35.0	〃	
290	〃	〃	〃 〃	Ⅱ	4.5	4.4	3.6	89.8	〃	
291	〃	〃	〃 軽石	-	6.2	5.0	3.1	18.4	軽石	
293	〃	SD7	〃 投弾	Ⅲ	11.0	9.4	4.9	736.0	細粒花崗岩	扁平。叩石か。
295	〃	P88	〃 石鎌	-	1.4	1.2	0.2	0.3	サヌカイト	基部は欠損。
376	Ⅳ区 (段部1)	Ⅲ層	〃 〃	Ⅱ	2.3	2.0	0.4	1.9	〃	
377	〃	〃	〃 石包丁	Ⅲ-A	11.6	4.1	0.7	57.6	結晶片岩	一穴。背部側辺に沿って山形に磨き仕上げ。
378	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B2-4	6.4	3.8	0.8	25.3	頁岩	二穴。片側欠損。
379	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B2-2	4.9	5.3	0.6	25.8	〃	二穴。両刃。
380	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B2-4	6.0	4.4	0.6	18.0	〃	二穴。片側欠損。背部・側部は丁寧な面取りが施される。
381	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B2-1	5.7	4.3	0.8	22.7	結晶片岩	穴数不明。背面の一部剥離。背部は面取りを行う。
382	〃	〃	〃 石包丁未製品	-	8.8	4.3	1.1	49.6	頁岩	一穴。主面中央に紐孔を穿つための敲打痕が認められる。
383	〃	〃	〃 石包丁	Ⅰ-B1	4.9	9.8	1.4	62.3	〃	

遺物観察表(石器・鉄器) 384～562

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
384	IV区 (段部1)	III層	石器 石斧	II-B	7.7	4.6	1.4	90.0	緑色玄武岩	
385	〃	〃	〃	II-A	9.0	5.4	1.7	110.0	砂岩	刃部背面未調整。
386	〃	〃	砥石	I	3.9	3.3	2.5	53.7	〃	三面使用。
387	〃	〃	〃	I	13.5	4.4	1.5	102.7	粘板岩	三角錐状。三面に使用痕。
388	〃	〃	叩石	I	9.7	8.2	3.8	415.0	細粒花崗岩	
389	〃	〃	投弾	II	6.5	5.9	5.6	307.0	〃	
390	〃	〃	台石	-	27.2	16.7	12.0	8500.0	〃	
545	IV区 (段部2)	III層	石鏃	I-A	2.1	1.6	0.3	1.0	サヌカイト	
546	〃	〃	〃	I-A	2.3	1.9	0.3	1.2	〃	先端部欠損。
547	〃	〃	〃	II	2.1	1.6	0.4	1.6	〃	先端部欠損。
548	〃	IV層	〃	II	2.5	1.4	0.3	1.2	〃	
549	〃	III層	〃	II	2.3	1.5	0.3	1.1	〃	
550	〃	IV層	〃	III-A	2.7	2.0	0.4	2.3	〃	
551	〃	III層	〃	III-A	2.8	1.5	0.4	1.7	〃	
552	〃	〃	〃	III-B	3.0	1.2	0.5	2.0	〃	田村IV-2期。
553	〃	〃	〃	I-A	3.6	1.7	0.5	2.0	〃	田村IV-2～V期。
554	〃	〃	〃	I-A	3.8	2.0	0.4	3.3	〃	
555	〃	〃	〃	I-A	4.4	2.1	0.5	6.4	緑色硅質頁岩	
556	〃	IV層	石鏃未製品	-	4.2	5.1	0.3	13.0	〃	大型未製品。一側辺に敲打痕。
557	〃	III層	石包丁	III-B2-4	12.4	4.4	1.0	89.7	頁岩	一穴。
558	〃	〃	〃	III-A	10.0	4.5	0.7	53.9	〃	一穴。主面側の一側辺は欠損後割口に 沿って研ぎ直しをする。背部は丁寧な面 取り。
559	〃	〃	〃	III-A	7.3	3.9	0.9	28.2	〃	一穴。
560	〃	〃	〃	III-A	7.0	4.4	0.7	30.8	〃	二穴。丁寧な調整。
561	〃	IV層	〃	III-A	8.0	4.9	0.8	42.0	玄武岩	二穴。
562	〃	〃	〃	III-A	8.6	4.5	0.7	33.2	頁岩	一穴。側部に抉りが入る。主面側剥離した 部分を研ぎ直し。両刃。弧背弱凸刃。

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
563	Ⅳ区 (段部2)	Ⅲ層	石器 石包丁	Ⅲ-A	7.0	4.9	1.0	31.8	頁岩	穴数不明。側部にV字状に抉りが入る。一側辺剥離。
564	〃	Ⅳ層	〃 〃	I-B2	10.3	5.5	1.0	87.1	チャート	
565	〃	Ⅲ層	〃 石包丁未製品	-	10.6	5.4	1.9	124.0	頁岩	
566	〃	〃	〃 〃	-	5.8	11.3	1.0	75.2	〃	
567	〃	〃	〃 〃	-	9.5	6.7	1.6	113.0	〃	
568	〃	Ⅳ層	〃 石斧	I-A	12.2	5.5	3.2	390.0	緑色片岩	
569	〃	〃	〃 〃	I-B	11.4	6.9	4.6	619.0	緑色玄武岩	
570	〃	〃	〃 スクレイパー	-	3.8	2.8	0.7	8.2	サヌカイト	
571	〃	Ⅲ層	〃 礫錐	-	9.0	2.2	1.3	35.7	結晶片岩	両端部が乳頭状を呈し、擦痕が認められる。
572	〃	〃	〃 石錘	-	9.0	7.3	3.6	277.0	流紋岩	
573	〃	〃	〃 砥石	I	12.7	6.1	6.5	756.0	〃	
574	〃	Ⅳ層	〃 〃	I	8.8	3.4	2.0	54.1	〃	四面使用。
575	〃	〃	〃 〃	I	5.7	5.6	2.1	67.3	粘板岩	両面使用。
576	〃	Ⅲ層	〃 〃	I	8.0	7.0	3.0	199.0	細粒花崗岩	一面に金属器を研磨した痕がみられる。
577	〃	Ⅳ層	〃 叩石	I	10.3	9.3	3.5	497.0	〃	両面中央部に敲打痕。
578	〃	Ⅲ層	〃 〃	I	10.0	8.5	3.4	433.0	〃	
579	〃	〃	〃 〃	I-A	12.3	10.1	4.9	872.0	〃	扁平な石の中央部及び一側辺に敲打痕。
580	〃	〃	〃 〃	I-A	8.1	9.7	4.0	407.0	〃	
581	〃	〃	〃 〃	I-A	11.3	10.0	3.6	600.0	〃	両面に敲打痕。
582	〃	〃	〃 〃	I-A	12.6	11.9	4.3	938.0	〃	
583	〃	I層	〃 投弾	I	4.0	3.4	2.8	48.4	〃	
584	〃	Ⅲ層	〃 〃	II	7.9	7.1	3.2	245.0	〃	扁平。
585	〃	〃	〃 〃	II	9.5	7.7	4.1	471.0	〃	
586	〃	〃	〃 〃	II	11.1	9.9	4.6	691.0	〃	扁平。叩石か。
587	〃	Ⅳ層	〃 〃	II	11.4	9.2	5.3	775.0	〃	扁平。叩石か。

遺物観察表(石器・鉄器) 588～705

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
588	Ⅳ区 (段部2)	Ⅳ層	石核	—	5.8	6.4	2.6	101.9	チャート	
615	Ⅳ区 (段部3)	Ⅳ層	石器 石斧	—	6.6	3.0	1.7	40.0	緑色片岩	
616	〃	Ⅱ層	〃 砥石	Ⅱ	22.5	23.8	5.6	3940.0	細粒花崗岩	
617	〃	〃	〃	Ⅱ	15.5	12.2	11.6	2800.0	花崗斑岩	一部被熱。雲母・長石多い。
618	〃	Ⅳ層	〃 叩石	Ⅰ	10.8	10.4	4.7	737.0	細粒花崗岩	片面に敲打痕。
619	〃	Ⅲ層	〃 〃	Ⅰ	10.5	9.1	3.3	461.0	〃	両面中央部に敲打痕。
620	〃	Ⅳ層	〃 投弾	Ⅰ	4.2	3.5	2.7	47.0	〃	
621	〃	〃	〃 〃	Ⅰ	4.3	3.3	2.6	47.1	〃	
622	〃	Ⅱ層	〃 〃	Ⅰ	4.7	3.7	2.7	64.9	〃	
623	〃	Ⅲ層	剥片	—	5.0	3.3	0.5	11.8	チャート	
691	Ⅳ区 (段部4)	Ⅴ層	鉄器 袋状鉄斧	—	5.8	3.7	0.8	32.7	—	
692	〃	〃	石器 石鎌	Ⅰ-A	1.9	1.4	0.3	0.9	サヌカイト	
693	〃	〃	〃 〃	Ⅰ-A	2.8	2.0	0.5	2.0	チャート	
694	〃	〃	〃 〃	Ⅱ	2.7	1.9	0.4	2.0	頁岩	
695	〃	Ⅲ層	〃 石包丁	Ⅲ-A	7.2	5.1	0.6	37.8	砂岩	二穴。
696	〃	Ⅴ層	〃 〃	Ⅲ-A	8.6	4.7	0.7	35.7	頁岩	二穴。
697	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-A	10.0	4.0	0.8	42.3	〃	二穴。刃部の方が厚みを持つ。
698	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B2-3	6.3	5.1	0.9	32.5	〃	穴数不明。背部は丸味を帯び、刃部は側部 に向かって弧状を呈する。
699	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-A	4.3	4.0	0.6	15.9	〃	穴数不明。
700	〃	〃	〃 〃	Ⅲ	5.8	3.3	0.9	19.5	〃	穴数不明。背部・両側部欠損。
701	〃	〃	〃 石包丁未製品	—	9.6	5.3	1.3	64.4	〃	
702	〃	Ⅲ層	〃 〃	—	10.1	5.1	1.0	64.0	〃	
703	〃	Ⅴ層	〃 〃	—	9.8	6.4	1.4	98.6	〃	
704	〃	〃	〃 〃	—	9.6	5.8	1.0	80.1	緑色凝灰岩	
705	〃	Ⅲ層	〃 〃	—	6.4	6.4	1.6	74.3	頁岩	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
706	IV区 (段部4)	IV層	石器 石包丁未製品	-	7.7	5.3	0.8	48.4	頁岩	
707	〃	III層	〃 〃	-	9.9	6.5	1.6	82.9	〃	
708	〃	IV層	〃 石斧	I-B	9.7	5.8	2.1	157.0	緑色片岩	
709	〃	V層	〃 〃	I-A	9.2	5.6	2.9	286.0	緑色玄武岩	
710	〃	IV層	〃 〃	III-A	7.6	2.1	0.8	22.4	緑色片岩	
711	〃	V層	〃 〃	III-B	8.6	2.4	1.6	41.4	〃	局部磨製。刃部のみ調整。
712	〃	〃	〃 砥石	I	5.2	4.2	3.4	46.9	泥岩	有溝砥石。
713	〃	III層	〃 〃	I	10.2	6.2	2.5	223.0	砂岩	
714	〃	〃	〃 〃	I	11.4	8.9	2.5	431.0	細粒花崗岩	一部にタール付着。
715	〃	〃	〃 〃	I	9.9	5.2	2.3	155.0	流紋岩	四面使用。
716	〃	〃	〃 石錘	-	5.9	4.4	3.8	103.0	〃	中央部を敲打し溝状にする。
717	〃	〃	〃 叩石	I	8.6	8.2	4.6	461.0	細粒花崗岩	両面中央部に敲打痕。
718	〃	〃	〃 〃	I	12.1	7.9	5.2	673.0	〃	平らな面の中央に敲打痕。
719	〃	V層	〃 〃	I-A	16.2	7.8	5.0	1029.0	花崗斑岩	花崗岩。
720	〃	〃	〃 投弾	II	5.1	4.1	3.9	107.3	細粒花崗岩	
721	〃	〃	〃 〃	II	6.9	5.1	1.9	95.7	流紋岩	扁平。タール痕あり。
722	〃	〃	〃 〃	II	7.2	6.5	3.9	259.0	細粒花崗岩	
723	〃	〃	〃 〃	II	8.6	6.6	4.6	305.0	〃	
724	〃	〃	〃 〃	II	9.9	7.5	5.1	511.0	〃	
725	〃	VI層	剥片	-	3.8	3.0	1.0	12.5	チャート	
726	〃	V層	〃 石核	-	7.3	6.3	4.2	265.0	〃	
727	〃	〃	〃 砥石	II	31.4	27.5	9.8	11500.0	細粒花崗岩	一面を砥石として使用。
821	IV区 (段部5)	II層	鉄器 袋状鉄斧	-	11.8	基部3.5 刃部5.2	0.5 0.7	178.0	-	
822	〃	IV層	石器 石鎌	I-B	2.3	1.6	2.5	0.8	サヌカイト	
823	〃	II層	〃 〃	I-B	2.4	1.6	0.3	1.1	〃	

遺物観察表(石器・鉄器) 824～848

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
824	Ⅳ区 (段部5)	Ⅳ層	石器 石鎌	I-A	3.7	2.0	0.5	3.2	サヌカイト	
825	〃	〃	〃	Ⅱ	2.4	1.6	0.4	1.0	〃	
826	〃	〃	〃	Ⅱ	2.5	1.6	0.4	1.6	〃	
827	〃	Ⅱ層	〃	Ⅱ	3.3	1.9	0.4	2.9	〃	
828	〃	Ⅳ層	〃 石包丁	Ⅲ-B1-3	4.8	4.4	0.9	19.1	結晶片岩	穴数不明。
829	〃	Ⅲ層	〃	Ⅲ-A	4.9	6.3	0.7	30.7	砂岩	穴数不明。弧背弱凸刃。
830	〃	Ⅳ層	〃	Ⅲ-A	5.6	4.3	0.7	19.2	頁岩	穴数不明。一側辺は欠損。背部は面取り。
831	〃	〃	〃	Ⅲ-A	7.7	3.5	0.7	21.2	〃	二穴。
832	〃	Ⅲ層	〃	Ⅲ-B1-2	10.0	5.0	0.9	63.5	片岩	一穴。刃部のみ丁寧な研磨調整。
833	〃	Ⅳ層	〃	Ⅲ-B1-2	4.8	3.7	0.7	20.4	〃	穴数不明。
834	〃	〃	〃	Ⅲ	4.2	4.5	0.4	10.8	砂岩	穴数不明。両端部欠損。背部は丸味を持つ。
835	〃	〃	〃 石包丁未製品	-	12.0	5.3	1.2	85.9	頁岩	
836	〃	〃	〃 石斧	I-A	11.8	4.7	3.0	261.0	緑色片岩	基部が細く、刃部は幅が広い。
837	〃	Ⅳ層	〃	I-A	15.9	5.2	2.3	310.0	〃	
838	〃	Ⅱ層	〃	Ⅲ-A	2.2	1.8	0.4	2.8	緑色岩	
839	〃	Ⅳ層	〃	Ⅱ-A	8.1	4.4	1.3	95.2	蛇紋岩	
840	〃	〃	〃 スクレイパー	-	4.4	3.3	0.7	9.7	サヌカイト	
841	〃	Ⅱ層	〃	-	6.8	2.3	0.6	14.2	〃	
842	〃	〃	〃 砥石	I	8.5	3.3	4.6	148.0	泥質砂岩	
843	〃	Ⅳ層	〃	I	9.2	5.3	3.4	174.0	〃	四面、縁辺を使用。
844	〃	〃	〃	I	9.0	5.9	1.6	87.7	流紋岩	
845	〃	Ⅱ層	〃	Ⅱ	18.4	6.3	4.1	896.0	緑色片岩	両面は剥離一側面を砥石として利用。
846	〃	Ⅳ層	〃	Ⅱ	17.6	9.4	5.5	1235.0	砂岩	
847	〃	〃	〃	I	10.7	6.3	5.7	614.0	流紋岩	五面使用。
848	〃	〃	〃	I	14.2	7.0	3.1	422.0	砂岩	二面使用。

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
849	IV区 (段部5)	III層	石器 砥石	II	21.0	12.8	5.4	1827.0	流紋岩	
850	〃	〃	〃 叩石	I-A	10.2	7.0	3.2	339.0	細粒花崗岩	両面中央に敲打痕。
851	〃	III層	〃 〃	I-A	7.8	7.4	4.1	344.0	〃	両面中央に敲打痕。
852	〃	II層	〃 〃	I	10.2	8.7	8.1	979.0	〃	球体。
853	〃	IV層	〃 〃	I	8.2	7.6	4.4	398.0	〃	片面中央部に敲打痕。
854	〃	〃	〃 〃	I	10.0	9.0	4.3	554.0	〃	片面中央部に敲打痕。
855	〃	〃	〃 〃	I	10.3	9.7	3.5	519.0	〃	
856	〃	〃	〃 投弾	I	3.9	3.6	3.0	53.5	〃	
857	〃	〃	〃 〃	I	4.5	3.6	2.8	60.5	〃	
858	〃	〃	〃 〃	I	4.8	3.9	3.1	75.5	〃	
859	〃	〃	〃 〃	I	4.6	4.0	2.7	65.8	〃	
860	〃	III層	〃 〃	II	5.4	5.1	4.4	156.0	〃	
861	〃	IV層	〃 〃	II	5.8	5.3	4.5	174.0	〃	球型。
862	〃	III層	〃 〃	II	6.7	5.9	4.6	238.0	〃	
863	〃	II層	〃 〃	II	8.5	7.9	4.2	344.0	〃	
864	〃	〃	〃 〃	II	9.3	8.7	4.1	449.0	〃	タール痕あり。
865	〃	〃	〃 〃	II	8.6	7.0	6.5	574.0	〃	
866	〃	II層	〃 〃	III	11.0	8.6	4.6	634.0	〃	被熱痕あり。
867	〃	IV層	〃 〃	III	11.4	5.6	4.3	415.0	〃	
868	〃	〃	〃 〃	III	14.1	8.3	7.8	1249.0	〃	卵型。
869	〃	II層	〃 〃	III	15.5	9.4	8.6	1735.0	〃	法量大さい。

第IV章 岩神地点の調査成果

1. 岩神地点の調査概要

岩神地点は菖蒲谷の西側にあたり、南北に延びる丘陵部に位置する。調査対象地の南西約100mの所に岩神神社がある。地元では「岩神様」として呼び親しまれており、御神体の巨石下は洞穴状になっている。戦前には、寺石正路氏らによって調査が行われており洞穴北西斜面で弥生時代中期の土器が出土したという記録が残されている。また、昭和43年には、岡本健児氏・地元有志らによって部分的な発掘調査が行われ、弥生土器、石器、鉄器などが出土した。この調査では、遺物包含層の確認のみで遺構は検出されなかった。平成9年度には、いの町農道基盤整備事業に伴う新規農道建設の際に岩神地点の発掘調査が行われている。

調査対象地は、平成9年度に発掘調査が行われた調査区(現農道)に隣接した丘陵下部分に位置し、現地地表高は約29.5～40mを測る。現況は竹林で、旧状は耕作地として利用されており、丘陵西斜面は一部石垣が残る段畑の様相を呈する。調査対象地内の丘陵頂部を調査Ⅰ区とし、頂部を境に東側をⅠe区、西側をⅠw区、北側をⅠn区と小調査区名を付した。丘陵西斜面部は段畑地形となっているため、各段の平場ごとにⅡ区、Ⅲ区と調査区名を付し、下段のⅢ区については、小区画の段地形が連続するため、各段に①～④の小調査区番号を付した。Ⅱ区とⅢ区の段部境界には4～5mを測るチャー

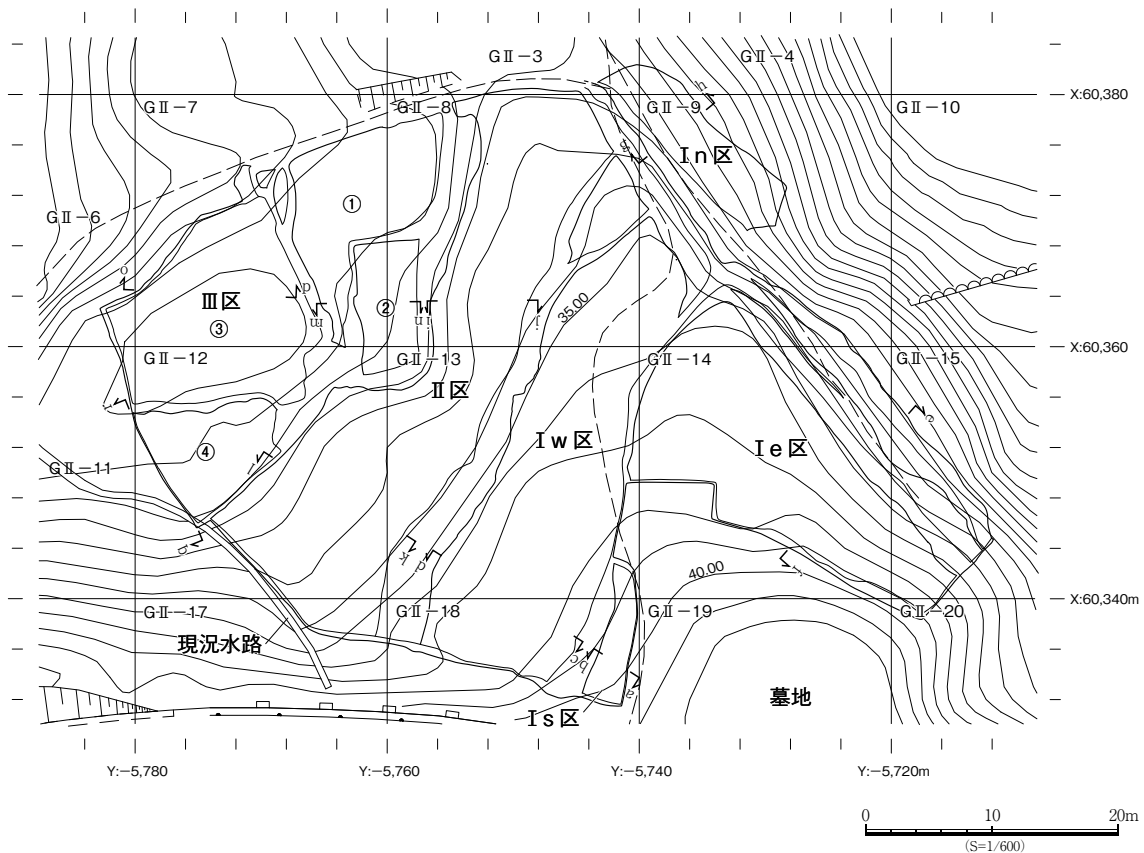


図4-1 岩神地点調査区位置図・グリッド設定図

1. 岩神地点の調査概要

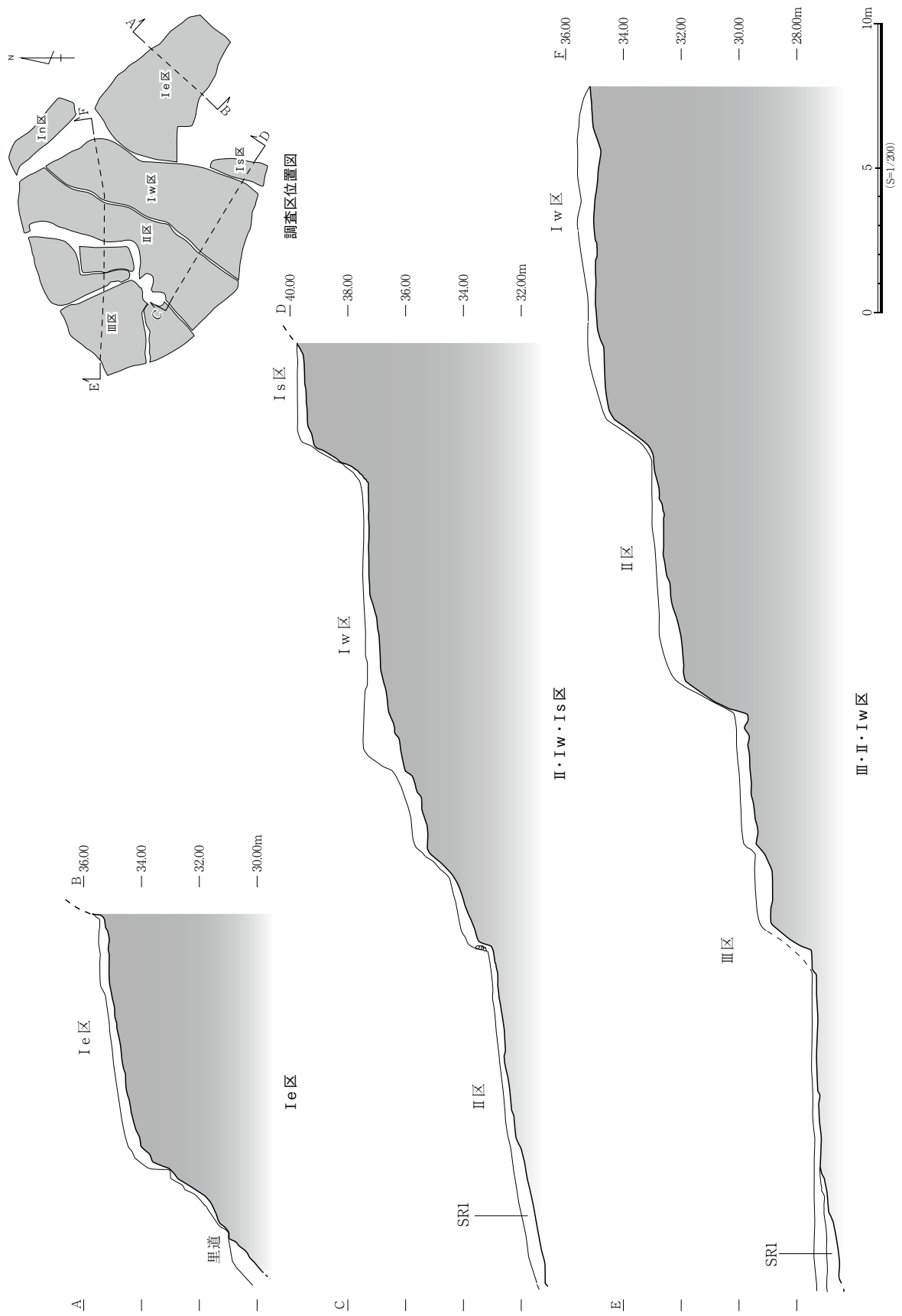


図4-2 岩神地点調査区エレベーション図

トの巨石が2石並列しており、巨石下は岩陰の様相を呈している。Ⅲ区は昭和43年(1968)に部分的な発掘が行われた地点にあたる。

岩神地点の発掘調査は、廃土置場を調査対象地内部に確保する必要があったため、最下段のⅢ区から実施した。表土の掘削、廃土の運搬は重機を使用した。Ⅲ区の廃土は、上段のⅡ区の平場に仮置きし、Ⅲ区調査終了後に埋め戻しを行い、Ⅰ・Ⅱ区の調査にあたっては、廃土を埋め戻したⅢ区の平場に仮置きする方法で発掘調査を進めた。調査にあたっては、公共座標(世界測地系)を使用し、調査対象地に20mの中グリッド、4mの小グリッドを設け、包含層の遺物の取り上げ等には調査グリッド名を使用した。グリッド番号は、天神溝田遺跡発掘調査で割り付けた高知西バイパス関連遺跡調査グリッド番号を踏襲した。当調査区は大グリッド(100m四方)でGⅡグリッドに位置する。

2. 各調査区の概要と基本層序

(1)Ⅰ区

Ⅰ区の現況は墓地、竹林であり、平成9年度に農道建設に伴い発掘調査を実施した調査区に接する。尾根頂部に開けた平場であり、頂部を軸に東西で調査区を分け、東側をⅠe区、西側をⅠw区とした。さらに、調査区南端の一段高い平場をⅠs区、北東端の一段低い平場をⅠn区と調査区に方位小文字アルファベットを付し小調査区を設定した。Ⅰs区は調査対象地の南端に位置する平場であり、標高39.5mを測る。現況は竹林であり、旧状は水田である。地山を削って平地にし、水田として利用していたと思われ、旧耕作土を二面検出した。Ⅰw区は調査対象地西側斜面に開けた平場であり、標高37.5mを測る。現況は竹林であり、旧状は水田である。Ⅰe区は、調査対象地の丘陵東側の斜面平場であり、標高30～35mを測る。現況は竹林で、竹根による攪乱が著しい。表土直下に黒褐色シルト層(Ⅱ層)があり、中世の土師質土器細片が僅少出土した。平場の幅は7.5～9mを測り、東側斜面に向かって傾斜する。Ⅱ層下は地山の岩盤が認められるが、部分的に墓地造成時に削平された状況がみられた。Ⅰn区は、調査対象地の北東端に位置する平場であり、標高29.5～31.2mを測る。現況は竹林であり、平坦面の南部は後世の開墾により削り取られていた。現表土直下に斜面からの岩盤崩落土(Ⅱ層)があり、Ⅱ層直下が地山である。以下に調査区ごとに基本層序、検出遺構と出土遺物について記述する。

Ⅰ区の基本層序

Ⅰs区

- 第Ⅰ層：黒褐色粘土質シルト(耕作土)
- 第Ⅱ層：オリーブ色粘土質シルト(床土)
- 第Ⅲ層：灰色粘土質シルト(旧耕作土)
- 第Ⅳ層：明赤褐色粘土質シルト層(Mn・Fe含む)

Ⅰw区

- 第Ⅰ層：黄灰色粘土質シルト(耕作土)
- 第Ⅱ層：明黄褐色シルト質粘土(耕作土床土)
- 第Ⅲ層：暗灰黄色粘土質シルト(旧耕作土)
- 第Ⅳ-1層：オリーブ黒色シルト(φ0.3～0.5cm礫混, 包含層)
- 第Ⅳ-2層：オリーブ黒色シルト(φ0.3～0.5cm礫混, 炭化物・焼土混, 包含層)
- 第Ⅴ層：にぶい黄褐色粘土質シルト(弥生遺物包含層)

2. 各調査区の概要と基本層序

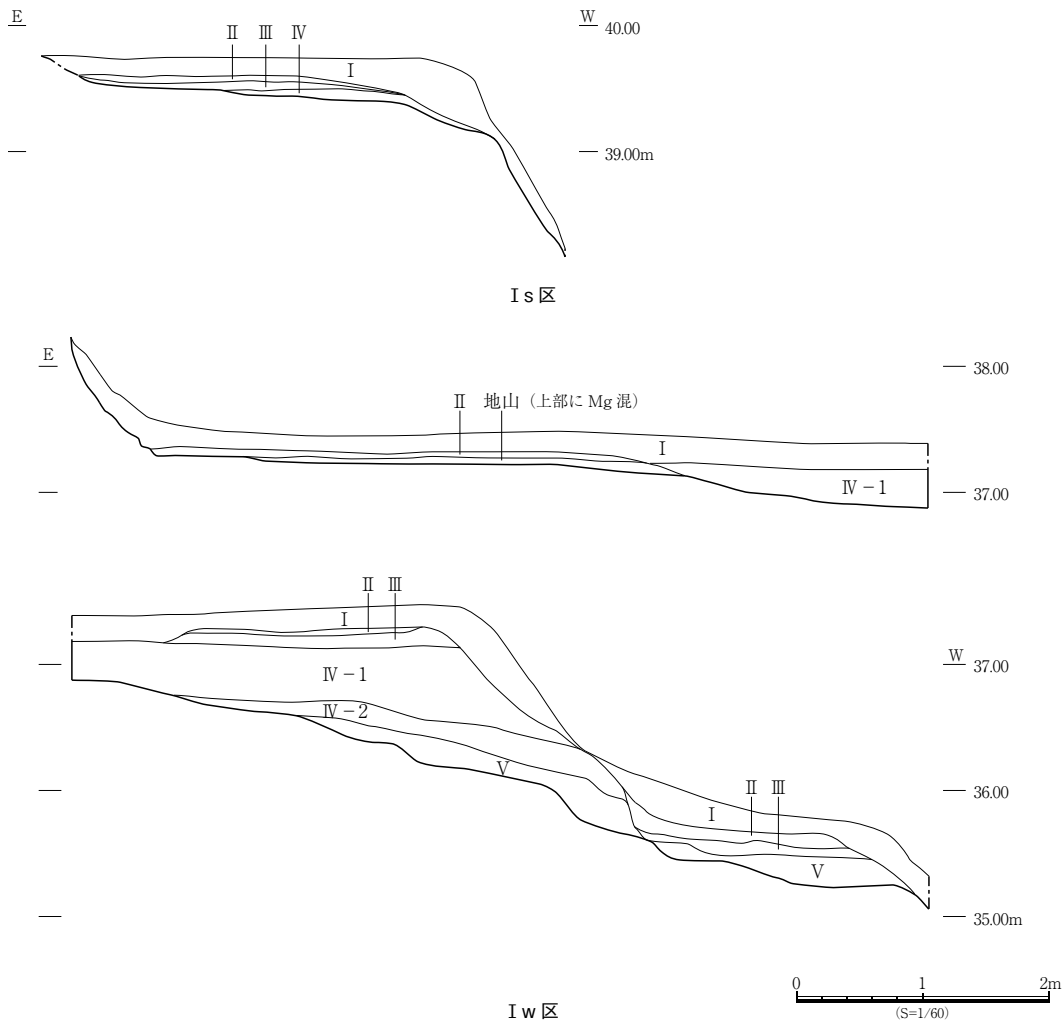


図4-3 Is・Iw区調査区セクション図

I e区

第I層：暗灰黄色シルト(φ 1.0～3.0cm礫混)

第II層：黒褐色シルト(φ 1.0～3.0cm礫混)

I n区

第I層：暗灰黄色砂質シルト礫(φ 0.5～0.8cm礫混)

第II層：オリーブ褐色砂質シルト(φ 0.8～1.0cm礫混)

第III層：オリーブ褐色粘土質シルト(φ 0.5～0.8cm礫混)

(2) II区

調査区平場では表土及びII層中から、近現代の陶磁器や瓦片が出土した。調査区南部ではI区から続く自然流路が検出され、流路の北肩部で古代(奈良から平安時代)の溝跡を確認した。流路では、直径1.5～2mを越える岩(チャート)がまとまって堆積している。流路堆積層からは土師器・須恵器・緑釉陶器など主に平安時代(10世紀代)の遺物が出土し、下層では弥生時代中期末を中心とする土器・石器が出土した。

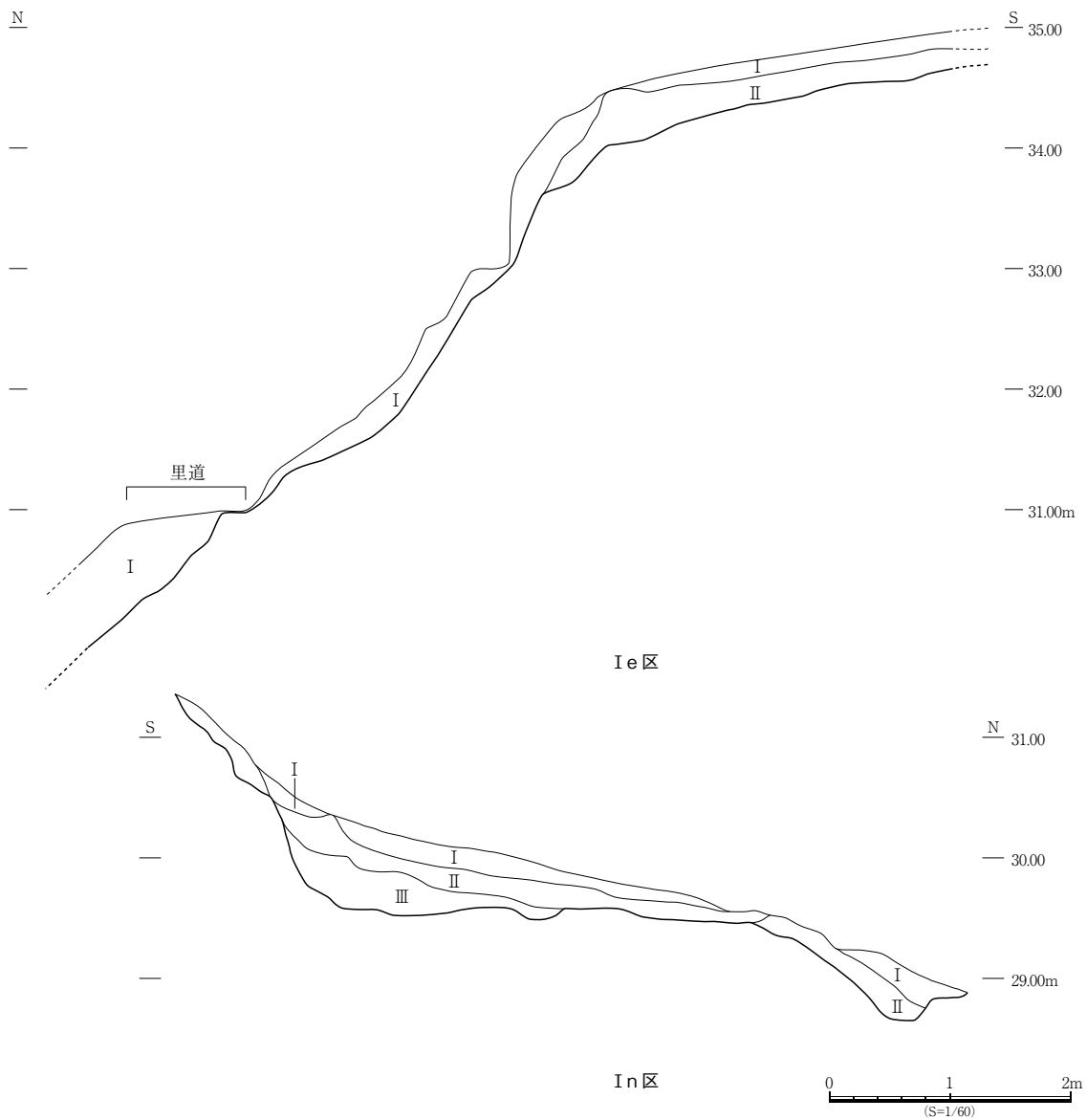


図4-4 Ie・In区調査区セクション図

II区の基本層序

II区はIw区の下段にあたり、調査区西側斜面に開けた平場である。標高32.5～33m前後を測り南に向かってやや傾斜する。現況は竹林で旧状は田畑地と思われ北部は開墾の影響が著しく、地山が削り取られている。

北部

- 第I層：暗褐色シルト(φ1.0～3.0cm礫混)
- 第II層：赤褐色粘土質シルト(φ1.0～5.0cm礫混)
- 第III層：暗赤褐色シルト(炭化物・弥生包含層)

南部

- 第I層：暗オリーブ褐色シルト(φ1.0～3.0cm礫混)
- 第II層：オリーブ褐色シルト(弥生遺物包含層)

2. 各調査区の概要と基本層序

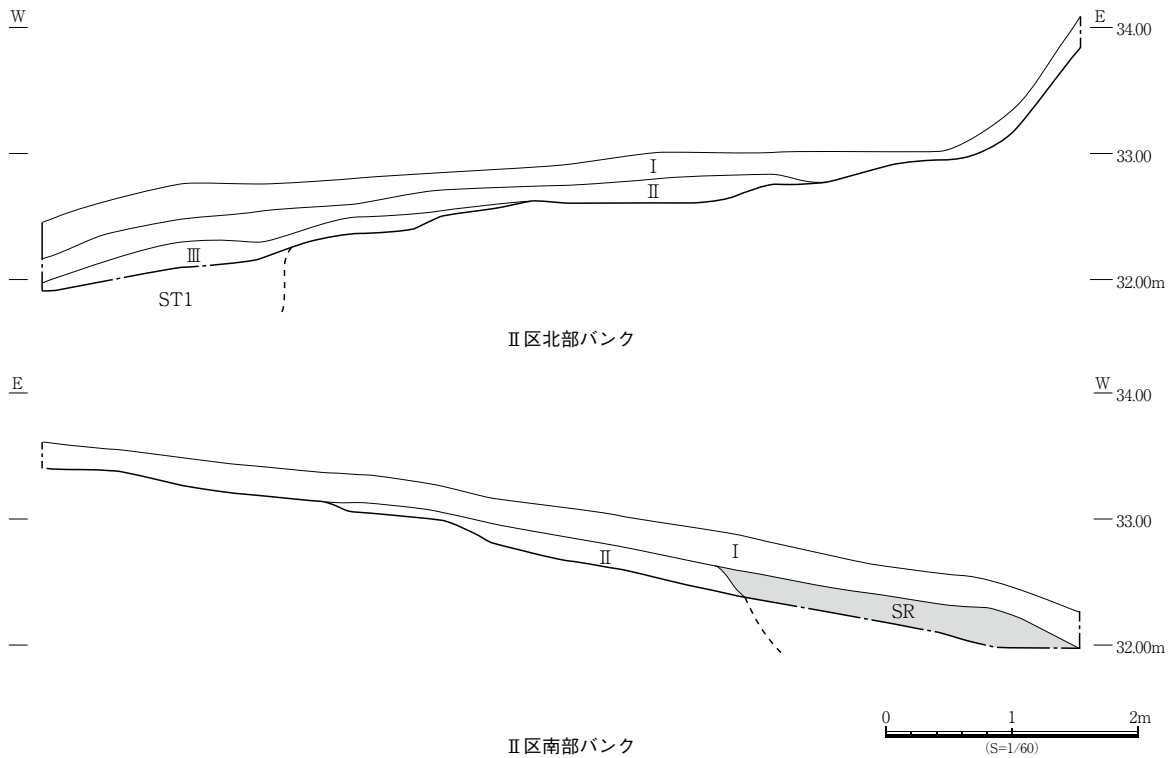


図4-5 II区調査区セクション図

(3) III区

III区は、調査対象地の北西端にあたり、標高27.5～30mを測る平場である。現況は竹林であり、旧状は畑地である。当調査区は昭和43年に部分的な発掘調査が行われており、弥生時代中期末頃の長頸壺・高杯・甕などが出土した。その状況から調査した部分は二次堆積であることがわかり、調査地点の上方に弥生時代中期末頃の集落がある可能性が指摘されていた。現況は後世の畑地にした時の開墾が著しく、調査区の東部(Ⅲ①・②区)は、山切が行われ地山の岩盤が削られ大きく削平されていた。

III区の基本層序

Ⅲ①・②区

第I層：暗褐色シルト(φ1.0～5.0cm礫混)

第II層：黄褐色粘土質シルト(Ⅱ-1(φ5.0～15.0cm)Ⅱ-2(φ1.0～3.0cm)Ⅱ-3(φ3.0～10.0cm)礫)

第III層：明褐色粘土質シルト(φ1.0～5.0cm礫混)

第IV層：褐色粘土質シルト(φ3.0～10.0cm礫混)

Ⅲ③区

第I層：暗褐色シルト(φ1.0～5.0cm礫混)

第II層：Ⅱ-1暗灰黄色シルト(φ1.0cm礫・炭化物混)

Ⅱ-2黄褐色粘土質シルト(風化礫ブロック混)

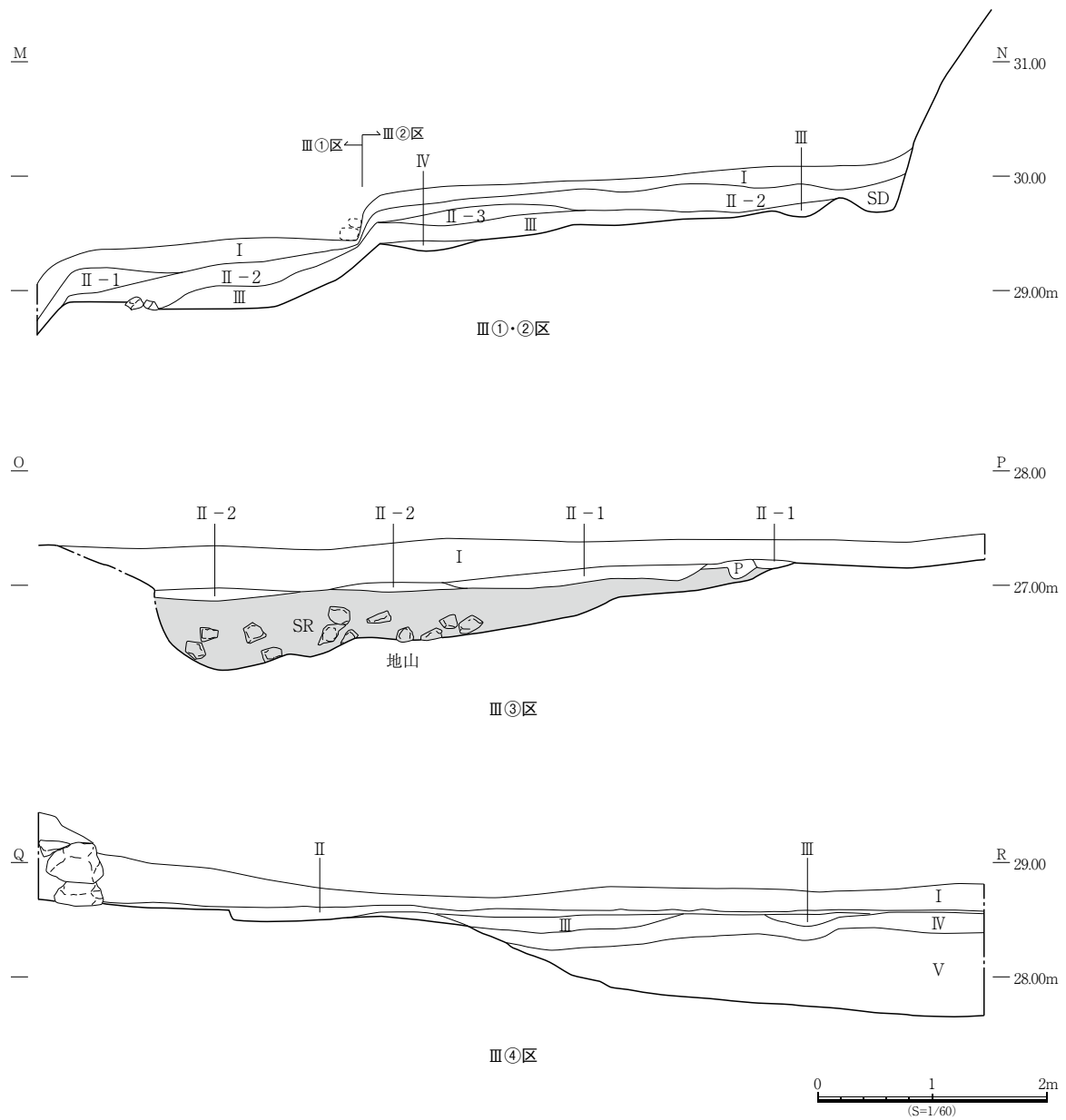


図4-6 III区調査区セクション図

III④区

- 第I層：褐灰色砂質シルト(耕作土)
- 第II層：黄褐色粘土質シルト(耕作土床土)
- 第III層：黄灰色砂質礫
- 第IV層：暗灰黄色砂質シルト礫
- 第V層：黒褐色砂質シルト礫

3. 検出遺構と出土遺物

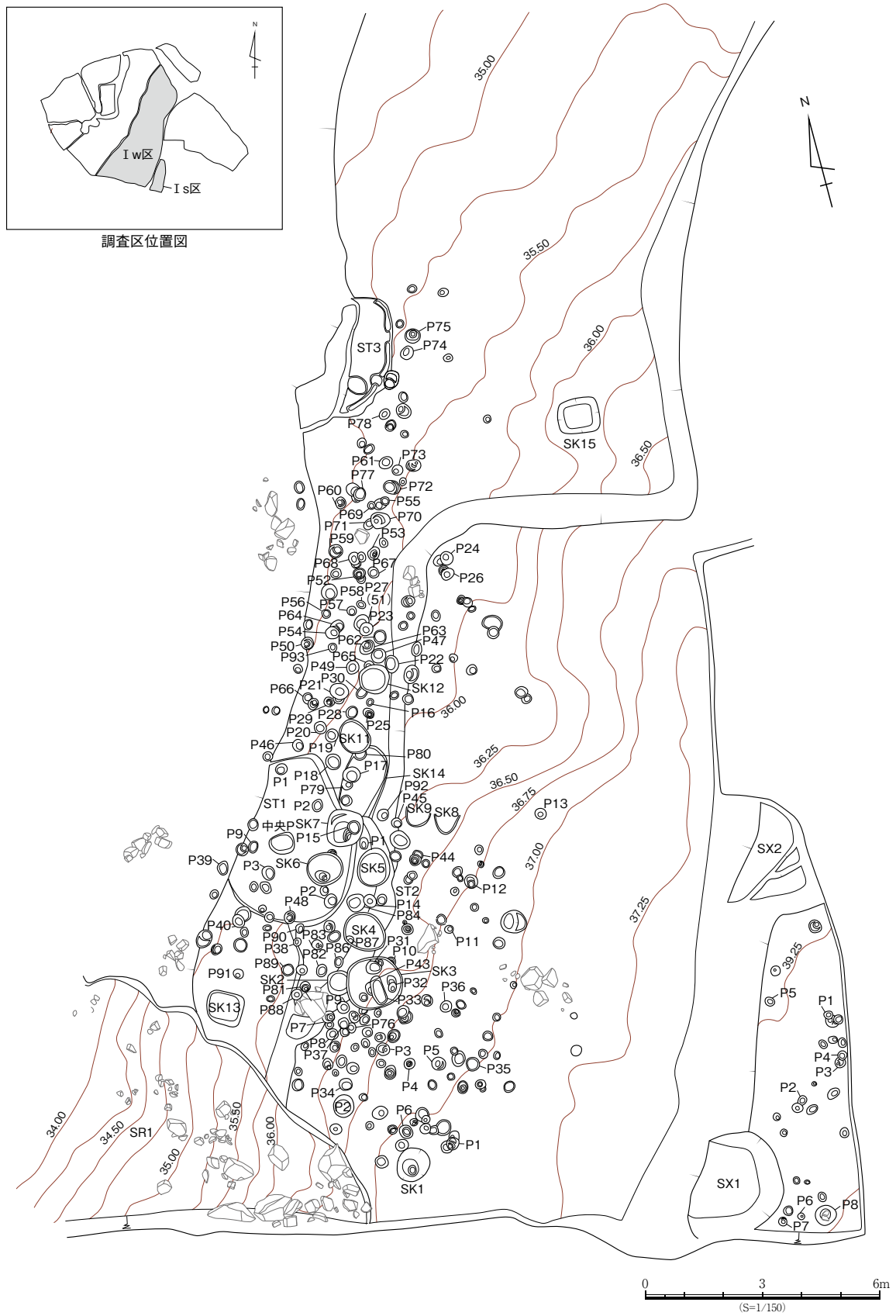


図4-7 Iwaki-Ishikawa区遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

(1) I w・I s区

I w区は調査対象地西側斜面に開けた平場であり、標高37.5mを測る。現況は竹林であり、旧状は水田である。試掘調査で古代の土坑状のプランと土師器、須恵器が確認されている。表土下30cmにオリーブ黒色シルト層(Ⅳ-1層)の堆積が認められ、古代(奈良時代後半から平安時代)の土師器・須恵器片が出土した。西側は、斜面が段状に削りとられており、下層には炭化物や焼土を含んだオリーブ黒色シルト層(Ⅳ-2層)の堆積が確認された。Ⅳ-2層は弥生時代中期末を中心とした土器・石器が出土している事からこの時期の包含層として捉えることができる。これらの包含層は調査区東側が部分的に削平されているが、I w区の西側斜面よりにほぼ全域にわたり堆積が認められる。

弥生時代の遺構は、竪穴建物跡・土坑・ピットを検出した。これらの遺構は、西側縁辺部で集中して検出し、斜面を成形し段部を構築している箇所も確認された。調査区南よりで検出された竪穴建物跡は直径4m前後を測り、竪穴プランの南東側に張り出す同規模の半月状の段部がみられ、竪穴の壁際に柱穴列が検出された。プランの西側は削平されており、全体形状は不明であるが、支柱穴と中央ピットを床面で検出した。この張り出しプランを持つ構造は平成9年度調査で検出された竪穴建物跡(ST1)と同様であり、切合い、時期差も想定されるが、埋土及び堆積状況からは一体的な構造として捉える事もできる。調査区北西部で検出された竪穴建物跡は平面プランが隅丸方形であり、壁溝が巡る。柱穴は確認されなかったが、壁立式の竪穴建物跡の構造になるものと思われる。

古代では、土坑と柱穴を検出した。柱穴は調査区西側縁辺部に沿って検出され、柵列、もしくは礎盤や根石を伴う柱穴も見られる事から掘立柱建物跡があった可能性も考えられる。

また、調査区南部では自然流路(SR1)を検出した。旧谷川と考えられるこの自然流路は調査区南部全域にわたり検出する事ができた。弥生時代、古代、中世を中心とする遺物が出土し、古代では緑釉陶器、黒色土器など10世紀代を中心とする遺物、中世は青磁など鎌倉期から南北朝期にかけての遺物が出土した。弥生時代は中期末から後期前半にかけての土器、石器、鉄器が出土している。平成9年度にこの農道建設工事の際に、現況の谷川の付け替え工事を行っているが、現況で谷筋を流れる谷川があり、この川に沿って自然流路が検出された。

I s区は、調査対象地南端に位置する平場であり、標高39.5mを測る。現況はI w区と同じく竹林で、旧状は水田であった。検出遺構は、直径2.5mの円形プランの土坑2基とピット28個を検出した。円形プランの土坑はI w区の斜面削平時に半分切られており、全体形状は不明である。断面形は逆台形状を呈し、性格は不明であるためSXとした。SX1からは弥生土器の細片と叩石が出土した。ピットからは弥生土器の細片が1点ずつ出土したピットが4個、土師質土器の細片が1点出土したピットが1個である。他のピットは出土遺物が皆無であり詳細は不明である。出土遺物はⅠ～Ⅲ層の現耕作土及び旧耕作土中から弥生土器、土師器、土師質土器、近世陶磁器などの細片が出土した。

以下にI w区で検出された遺構・出土遺物について個別に記載する。

①竪穴建物跡

I w区では調査区の西側縁辺部で竪穴建物跡を3棟検出した。

ST1(図4-8・9)

調査区南部、西側斜面縁辺で検出した。ST1の東側は半月状を呈したST2を検出したが、当初は一体的な竪穴建物跡のプランとして検出していた。全体を面的に掘り下げ、ST2床面で一段落ち込

3. 検出遺構と出土遺物

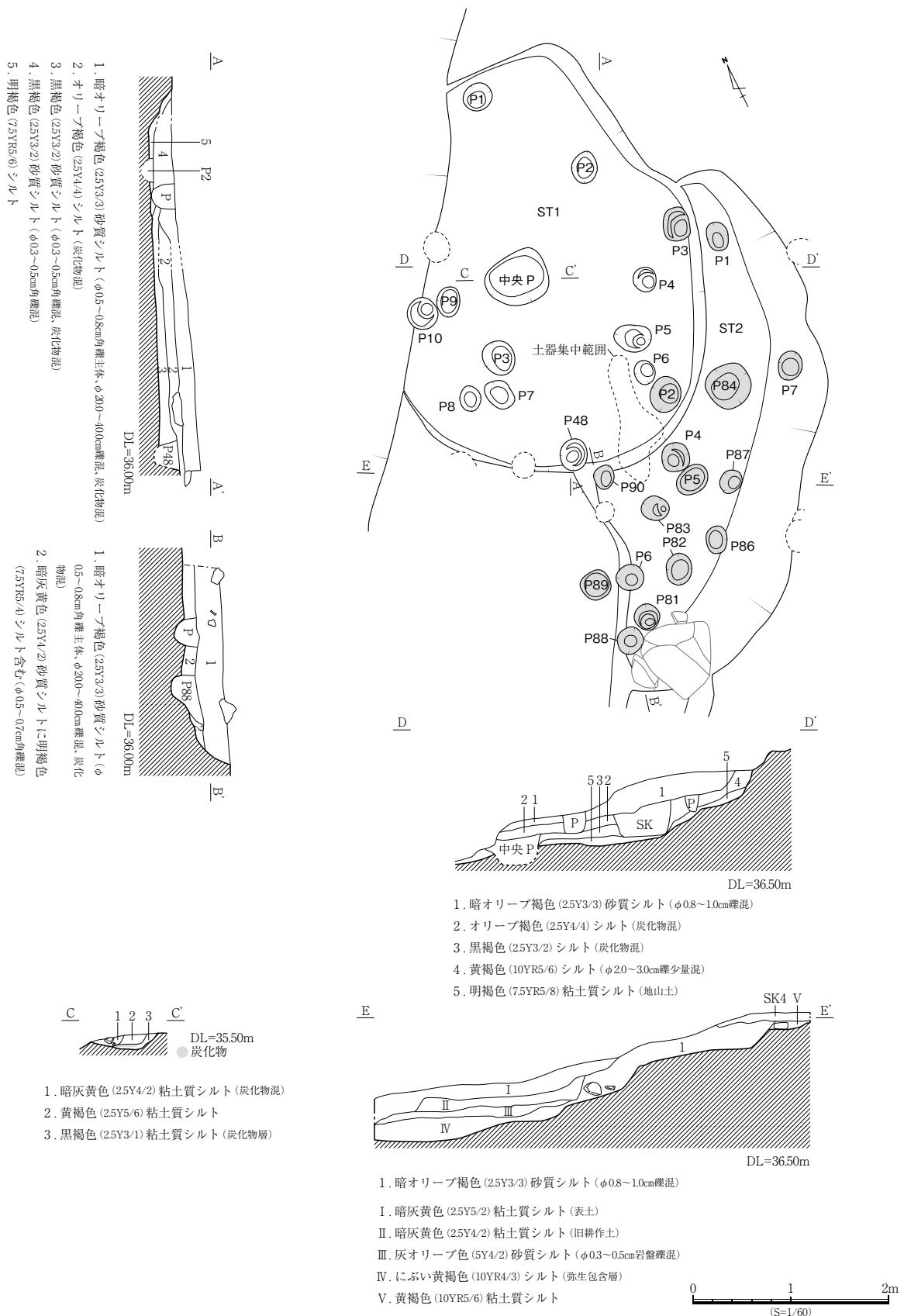


図4-8 Iw区ST1・2遺構図

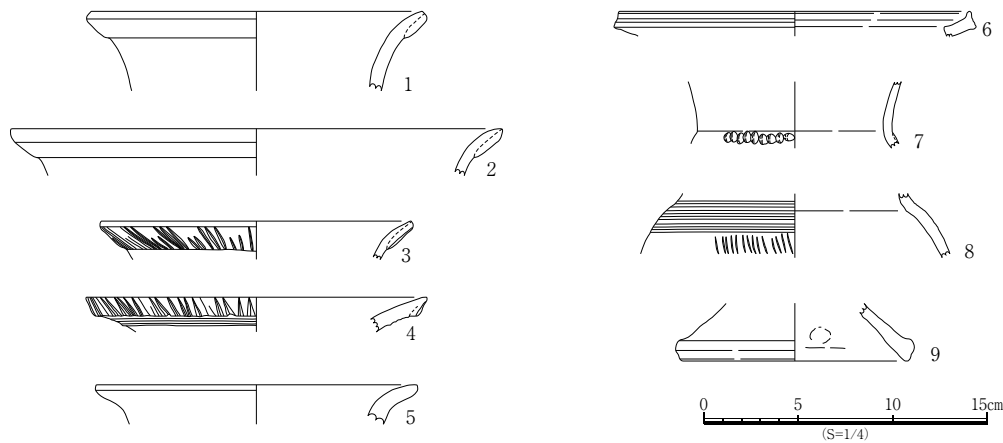


図4-9 I w区ST1遺物実測図

むST1のプランを検出したことから拡張、もしくは切合いも考慮し個別に取り上げる。ST1とした平面形は北側が少し張り出す楕円形であり、西側の一部は削平される。検出されたプランは長径4.32m、短径2.54m(推定3.5m)、面積は10.45㎡を測る。遺構の深さはプラン東側で0.84m、西側で0.44mを測る。遺構埋土は5層に分層され、1層は暗オリーブ褐色砂質シルト、2層はオリーブ褐色シルトで炭化物を含む。3・4層は黒褐色砂質シルトで3層には炭化物が混じる。5層は地山で明褐色シルトである。ST1で検出されたピットは中央ピットを含めて11個であり、P1～10が支柱穴に該当するものと思われ多角形を呈する。P5・6、P3・7、P9・10については内外に並んで検出していることから拡張の際の柱の建替えと考えられる。中央ピットは建物プラン中央やや西寄りで検出した。埋土は黄褐色粘土質シルトと底面に炭化物を含む黒褐色粘土質シルトである。楕円形を呈し長軸方向はN-84°-Wを指す。

埋土中から図示した弥生土器(図4-9 1～9)が出土した。1～4は貼付口縁の甕である。1は断面四角形の貼付口縁で無文である。2・3は口縁端部を尖り気味に仕上げ、3は外面に刻目を施す。4は断面形が三角形を呈し、外面に刻目、直下に櫛描による沈線が施される。5は素口縁の甕で口縁端部は丸みを帯びる。6は凹線文系の甕の口縁部であり、端部は上方に拡張され外面に一条沈線が施される。7は甕の頸部片であり、胴部との境目に薄く粘土帯を貼付し幅の広い刻目を施す。8は甕の胴部片であり、浅い櫛描沈線と、縦方向の長い刻目を施す。9は高杯の脚部で、裾端部は上下に拡張され外面に凹線文が施される。ST1内部からは他に弥生土器片110点、サヌカイト剥片1点出土した。

ST2(図4-8・10～12)

調査区南部、西側斜面縁辺で検出した。ST2とした平面形はST1との切合い、もしくは拡張部として捉えられ、半月状を呈する。検出されたプランは長径5.23m、短径1.96m、面積は3.48㎡を測る。遺構の深さは0.49～0.7mを測り、遺構埋土は暗オリーブ褐色砂質シルトの1層である。ST2で検出されたピットは16個であり、床面周縁部に柱穴が並ぶ。ST1と同様に内外に並ぶことから拡張が考えられる。

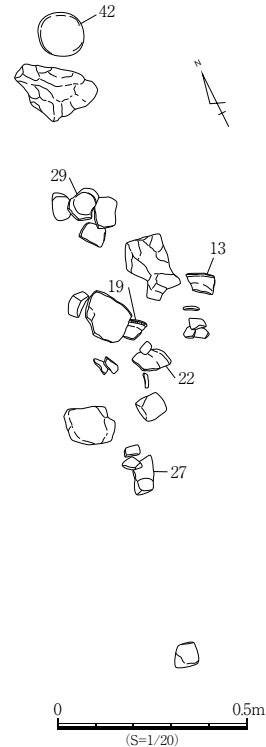


図4-10 I w区ST2遺物出土状態図

3. 検出遺構と出土遺物

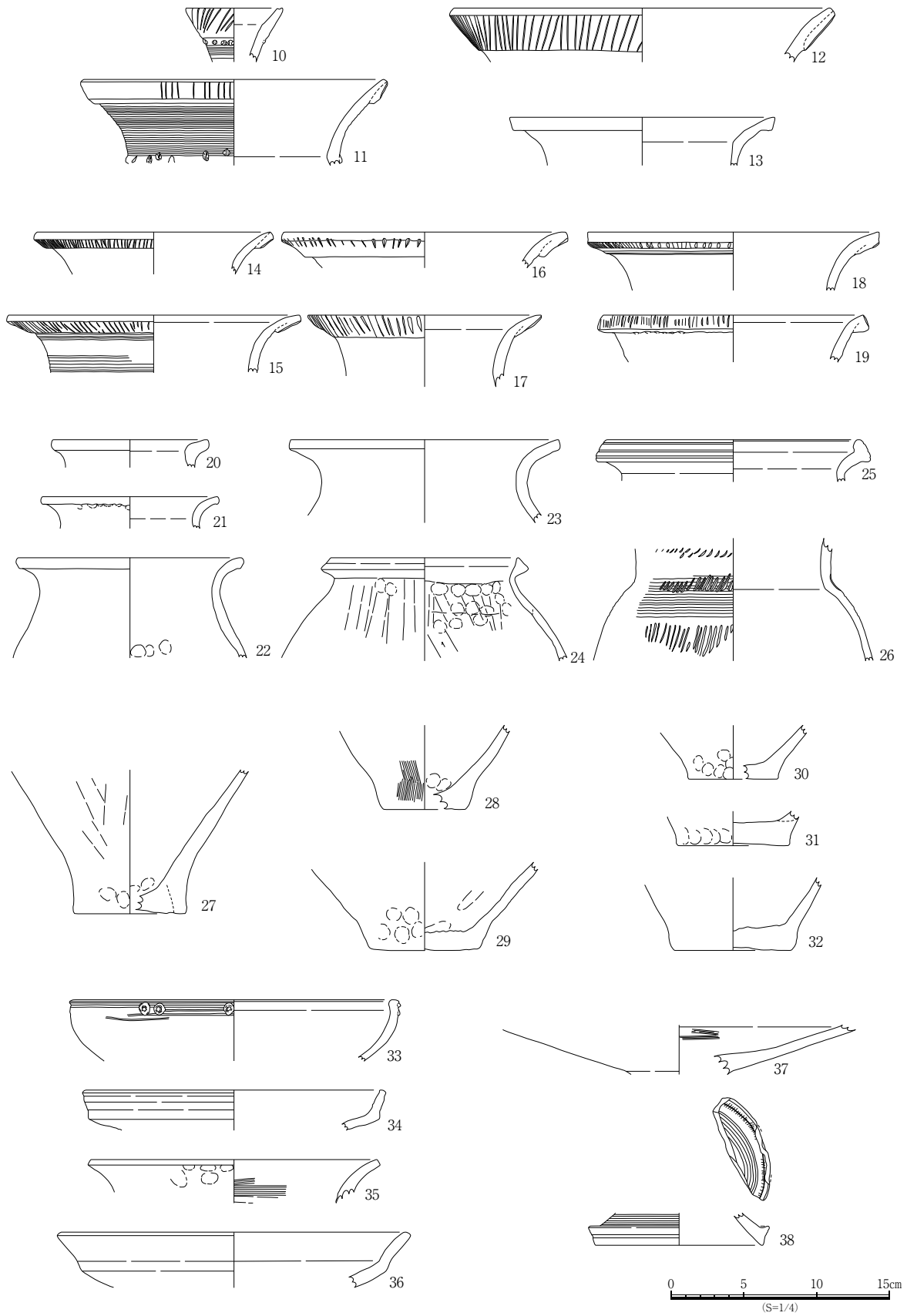


図4-11 I w区ST2遺物実測図1

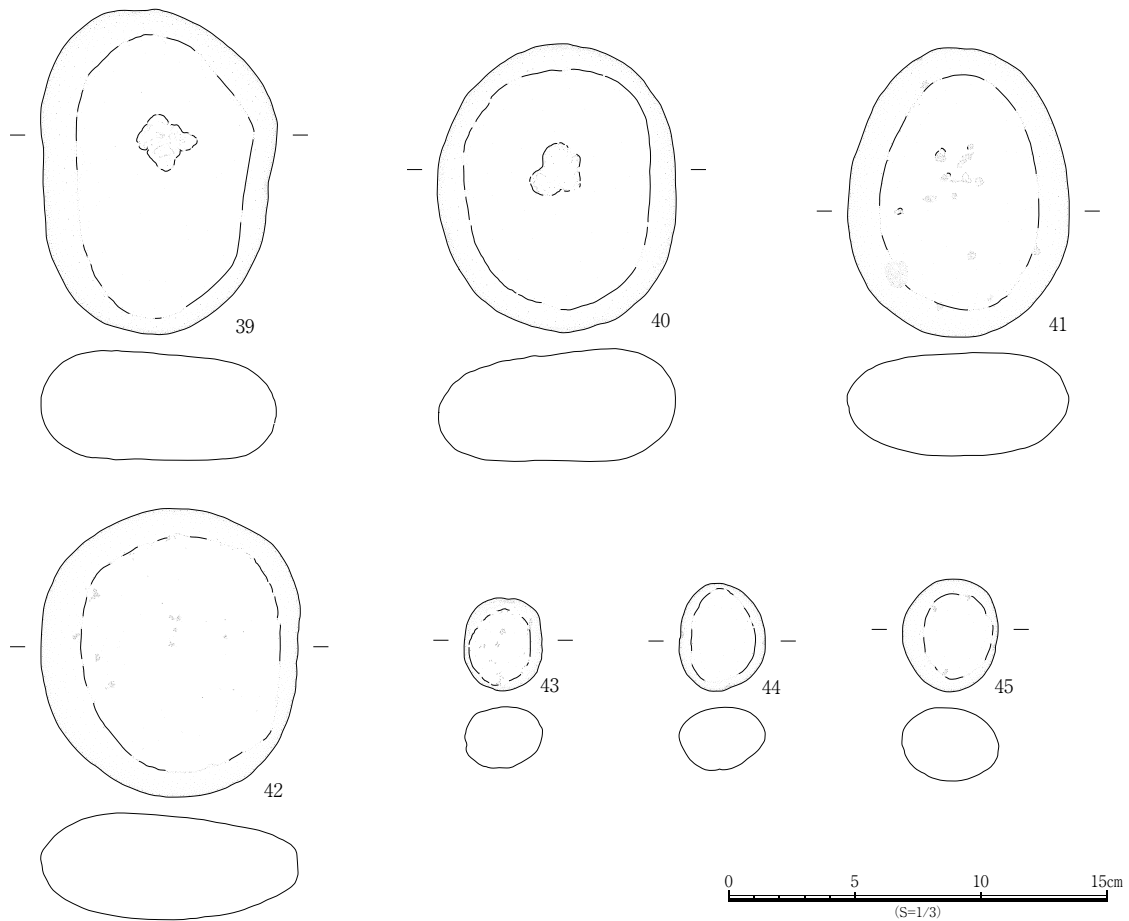


図4-12 Iw区ST2遺物実測図2

埋土中から図示した弥生土器(図4-11 10~38), 叩石・投弾(図4-12 39~45)が出土した。10~12は貼付口縁の壺である。10は長頸壺の口縁部片であり, 端部は水平な面を造る。外面には斜状の刻目を施し, 直下に円形浮文を配し, 頸部は横方向の櫛描直線文が施される。11・12は広口の壺であり, 11は断面玉縁状の貼付口縁で外面に刻目, 頸部は櫛描直線文, 胴部との境目には粒状浮文を配する。12は断面長方形の貼付口縁で, 外面に刻目が施される。13は素口縁の壺で口縁端部は上下に拡張し面を成す。内外面はナデ調整が施される。14~25は甕である。これらは胴部の形状が不明であるため壺器形の可能性も考えられるが, ここでは甕として取り上げた。14~19は貼付口縁, 20~23は素口縁である。断面形が長方形を呈するもの(14~16), 楕円形(17), 台形(18), 三角形(19)が見られる。14~16の口縁端部は面を成し, 外面に刻目が施される。15の頸部には櫛描直線文が施される。17の口縁端部は尖り気味に仕上げる。18は口縁端部を上方に摘みナデ調整を施し, 外面下端に刻目を施す。直下に微隆起帯が付く。19は玉縁状を呈し外面に薄い刻目を施す。20~23の口縁部は粘土帯の貼付は認められず全てナデ調整が施される。24・25は口縁端部を上方に拡張し外面に凹線文を施す。26は甕の胴部片で肩部が張らないプロポーションを呈する。肩部に櫛描直線文, 縦細い刻目が施される。27~32は壺・甕の底部片である。28は外面にハケ目が認められる。33~38は高杯である。33の杯身部は内湾し, 口縁端部は水平な面を成す。外面に沈線を施し, 円形浮文を2個ずつ並べて配する。34は外面に凹線文が施される。35・36は口縁部が外反し, 端部は面を成す。35の内面にはハケ目が認められる。37は杯身部であり, 口縁部と, 脚部が欠損する。内面の一部にハケ目が認められる。

3. 検出遺構と出土遺物

38は脚部片であり、裾端部は上下に拡張し外面中央部はナデにより凹む。脚部外面に櫛描直線文と、裾部には刻目が連続して配される。39・40は叩石で片面のみ使用が認められる。41～45は投弾であり、大きさが10.0cmを越える大型のもの(41・42)、3.0～5.0cm内外の小型のものが見られる。ST2からは他に弥生土器片1,447点、サヌカイト剥片2点が出土した。

ST3(図4-13)

調査区北部、西側斜面縁辺で検出した。平面プランは隅丸方形を呈し、壁溝が巡る。西側は削られて残存していない。長軸方向はN-18°-Wを指し、長径3.11m、短径1.04m(復元2.6m)を測り、復元面積は5.40m²である。柱穴は確認されなかったが、壁立式の竪穴建物跡の構造になるものと思われる。埋土は褐色シルト質粘土であり、深さは検出面より0.32～0.42mを測る。遺構埋土から遺物は出土しなかったが、検出面で弥生土器・石器が出土した。

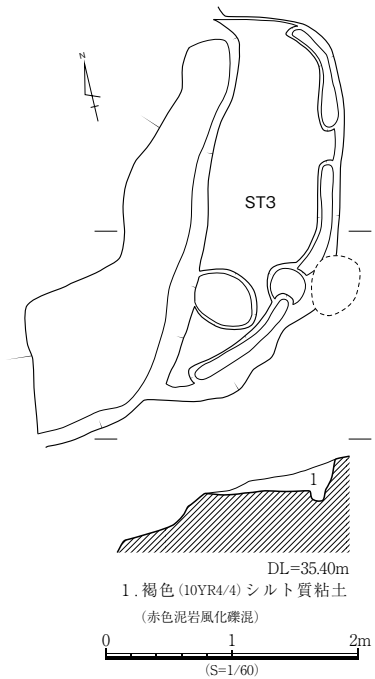


図4-13 Iw区ST3遺構図

②土坑

Iw区では、土坑を17基検出した。遺構は上面と下面に分けて検出し、上面で12基、下面で5基を検出した。内訳は、弥生時代6基、古代3基、中世3基、時期不明5基である。ここでは、実測可能な遺物が出土した土坑について遺構番号順に記述する。

SK3(図4-14)

調査区南部の上面で検出した中世の土坑である。長径1.44m、短径1.33mを測る楕円形の土坑である。深さは0.25mを測り、埋土は1層が焼土と炭化物を含む黒褐色砂質シルトで、下層は0.5～0.8cmの礫を含んだオリーブ褐色砂質シルトである。埋土中からは図示した瓦器碗(46)の他に弥生土器細

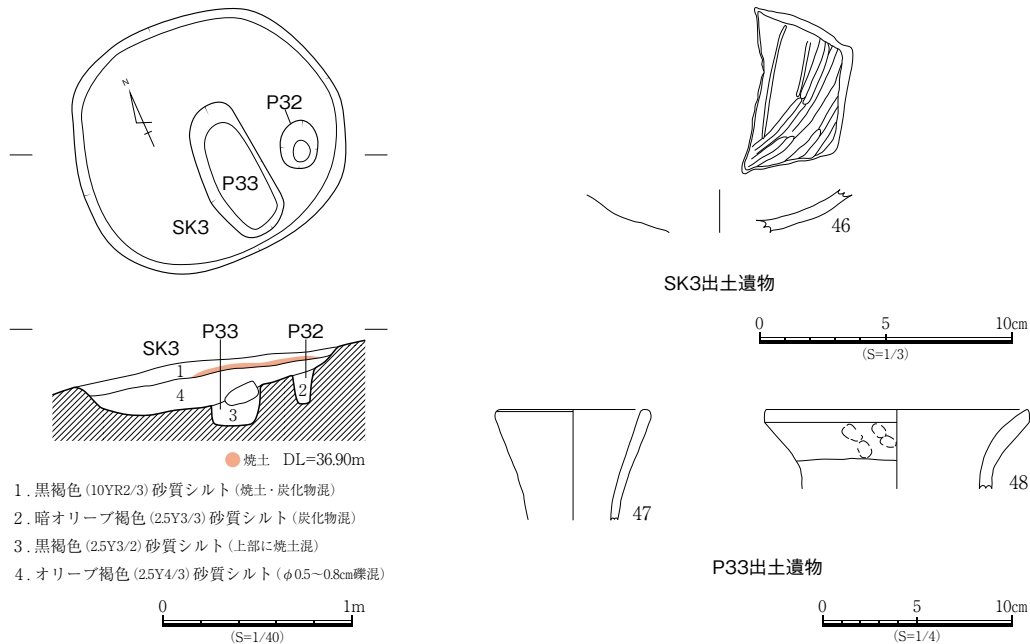


図4-14 Iw区SK3・P33遺構図・遺物実測図

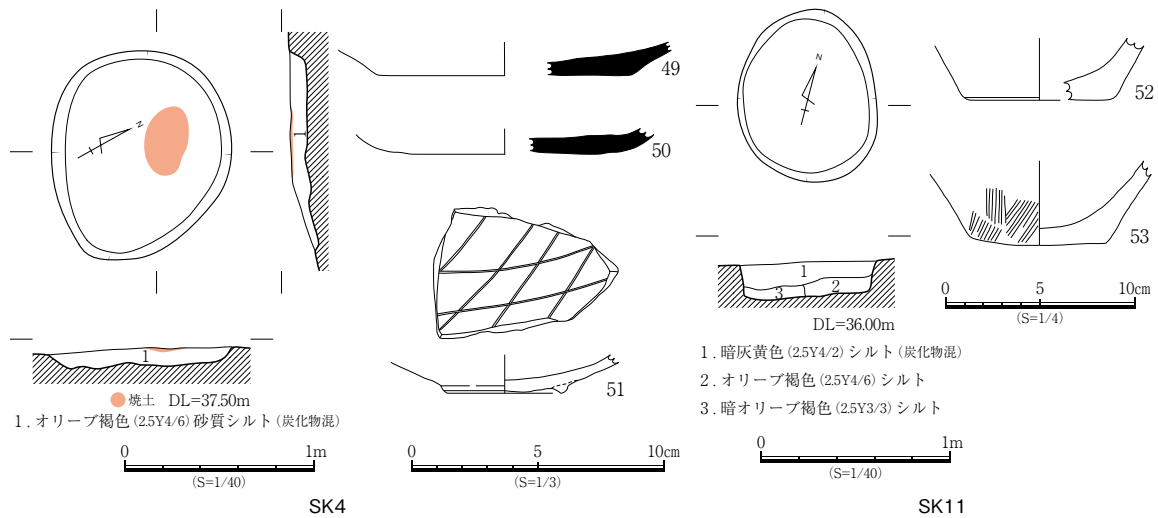


図4-15 I w区SK4・11遺構図・遺物実測図

片, 土師質土器片が出土した。床面ではピットを検出し埋土中から弥生土器の壺口縁部片(47・48)2点が出土した。

SK4(図4-15)

調査区南部の上面SK3の北側で検出した。長径1.13m, 短径0.96mを測る円形の土坑である。深さは0.1mと浅く, 埋土は炭化物が混じったオリーブ褐色砂質シルトである。検出面で一部に焼土が認められた。埋土中からは図示した須恵器皿(49・50), 瓦器椀(51)が出土した。51は和泉型瓦器椀であり, 見込に斜格子状の暗文が施される。他に須恵器片5点, 土師器片1点が出土した。

SK11(図4-15)

調査区中央部の下面で検出した。長径0.92m, 短径0.76mを測る楕円形の土坑である。深さは0.19mを測り, 埋土は1層が炭化物を含む暗灰黄色シルトで, 2・3層がオリーブ褐色~暗オリーブ褐色を呈したシルトである。埋土中から図示した甕の底部片(52・53)の他に弥生土器片38点が出土した。52・53は平底でナデ調整が施され, 53は外面に縦方向のハケ調整が施される。内面の一部にタール痕が認められる。

SK14(図4-16)

調査区中央部の下面で検出した。遺構の切合いが認められ, 北側の一部はSK11, 南部は上面で検

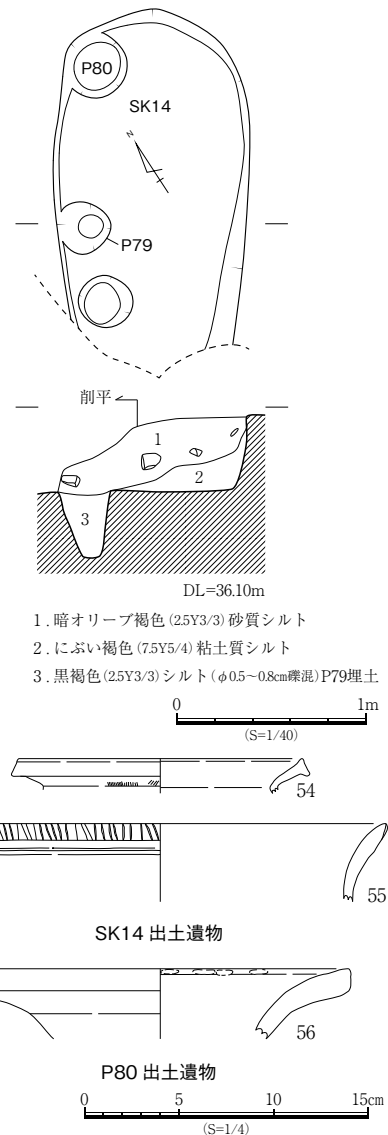


図4-16 I w区SK14・P79・80遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

出したSK7に切られる。長径は1.98m、短径1.03mを測り、平面プランは長楕円形を呈する。深さは0.38mを測り、プランの西側は段部成形により削平されている。埋土は1層が暗オリーブ褐色シルトで、2層がにぶい褐色を呈した粘土質シルトである。埋土中より、図示した弥生土器甕の口縁部片(54・55)の他に弥生土器片が48点出土した。54は凹線文系の甕の口縁部片であり、端部を上下に拡張し、外面の口縁部直下にはハケ目の一部認められる。55は甕の口縁部片であり、端部は尖り気味に仕上げ外面には刻目を施す。口縁直下にはナデ調整による微隆起帯が一条配される。

また、床面でP79・80の他1個のピットを検出した。P79は直径0.26～0.28m、深さは0.3mを測る円形のピットである。埋土は黒褐色シルトで弥生土器片11点出土した。P80は土坑床面の北端で検出した。直径0.34m、深さ0.1mを測る円形のピットである。埋土はP79と同じ黒褐色シルトであり、図示した弥生土器壺の口縁部片(56)が出土した。

③ピット

I w区では、ピットを228個検出した。遺構は上面と下面に分けて検出し、上面で93個、下面で135個を検出した。時期の判別が可能な遺物が出土したピットについての内訳は上面で弥生時代16個、古代10個、中世6個、近世1個、下面では弥生時代52個、古代5個、中世3個である。ここでは、実測可能な遺物が出土したピットについて遺構番号順に記述する。

P47(図4-17)

調査区中央部で検出した直径0.37～0.39m、深さ0.31mを測る円形のピットである。埋土は暗褐色砂質シルトで、図示した弥生土器壺の口縁部片(57)と底部片(58)の他に弥生土器片が9点出土した。

P68(図4-17)

調査区中央部やや北寄りで検出した直径0.31～0.32m、深さ0.4mを測る円形のピットである。埋土は暗褐色砂質シルトであり、図示したサヌカイト製の平基式の石鏃(62)が出土した。また、ピット最下面では投弾も出土した。

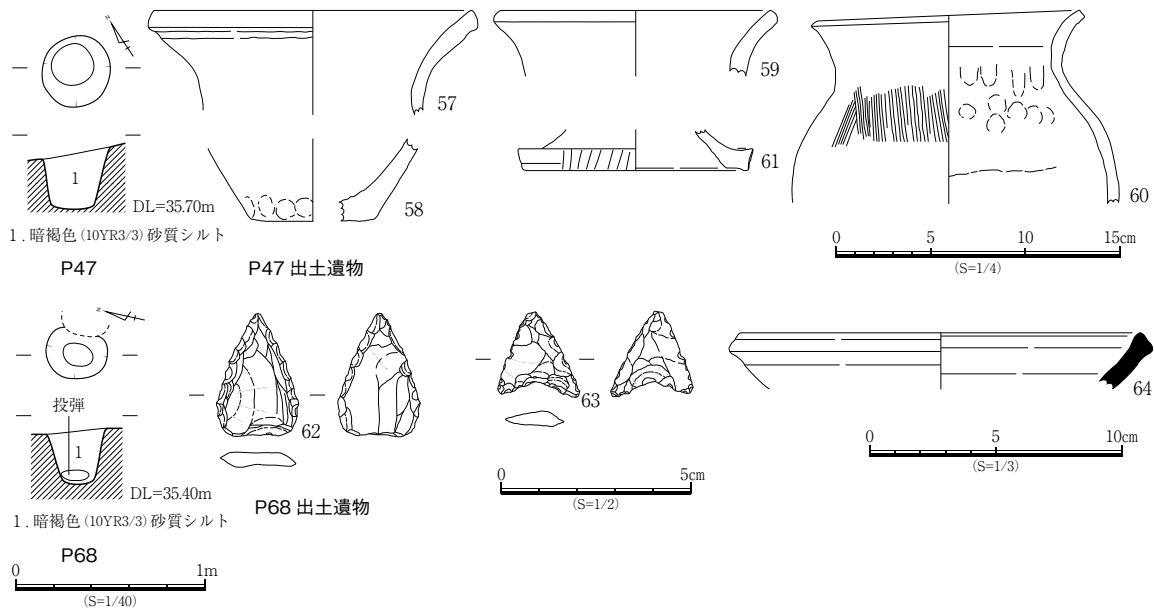


図4-17 I w区ピット遺構図・遺物実測図

ピット出土遺物(図4-17)

ここでは、ピットから出土した実測可能な遺物について個々に取り上げる。出土地点は観察表に記載する。59～63は弥生時代の遺物である。59は甕の口縁部片であり、ナデ調整が施され、緩やかに外反する。60も甕であり、胴部から口縁部にかけて間延びする。口縁端部は僅かに下方に拡張する。胴部外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整が施される。後期前半から中葉に位置付けられる。61は蓋であり天井部は欠損する。口縁部は外方に開き端部は上下に拡張し外面に刻目を施す。口縁内面はナデ調整により凹む。63は凹基式の打製石鏃でサヌカイト製である。64は須恵器甕の口縁部片であり、内外面ともナデ調整を施す。

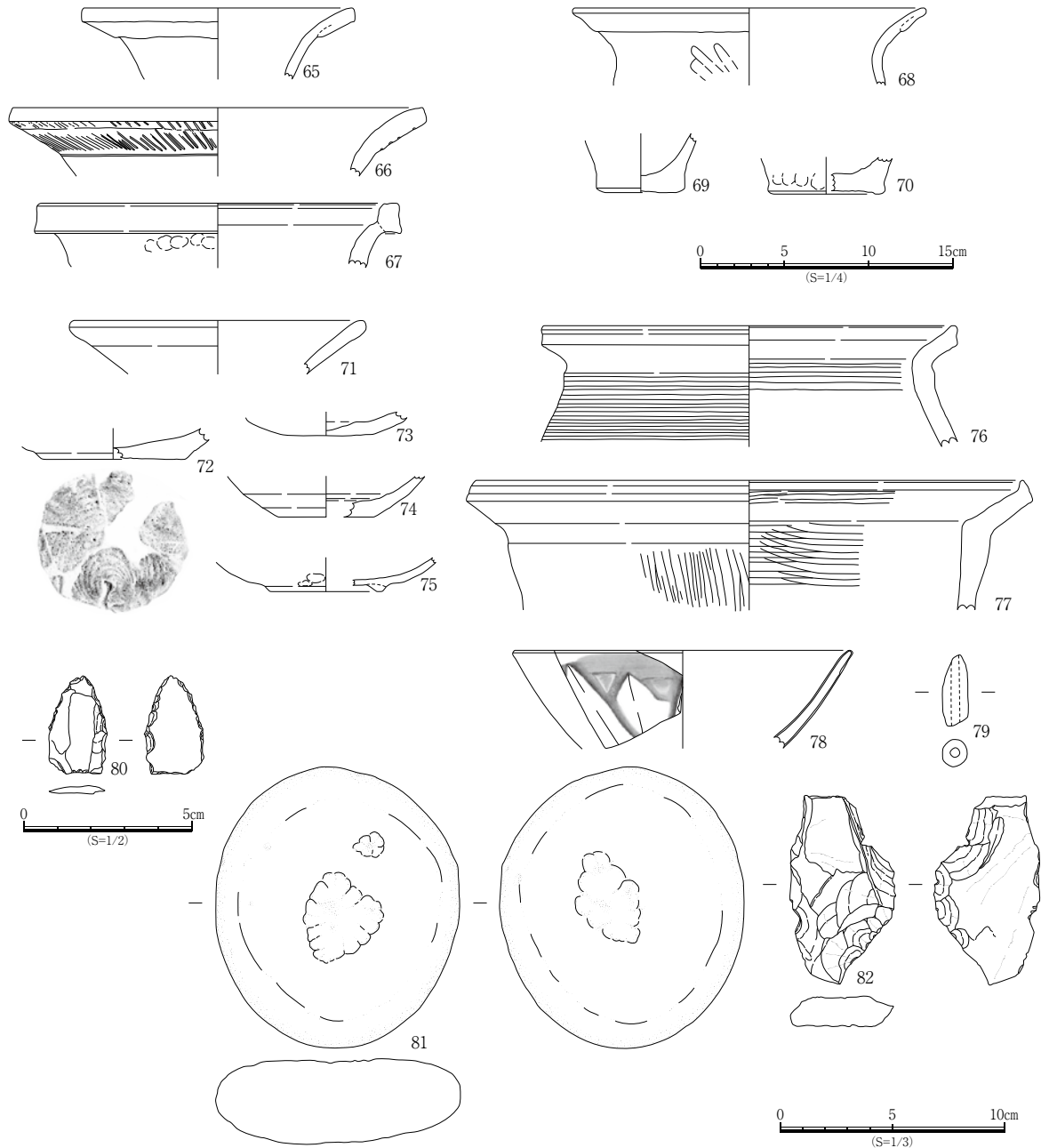


図4-18 I w区包含層出土遺物

3. 検出遺構と出土遺物

④ I w区包含層出土遺物(図4-18)

65～70は弥生土器である。いずれもⅢ-2層からの出土である。65～67は壺であり、口縁部は粘土帯を貼付した貼付口縁の形態のものである。65は断面四角形の貼付口縁であり、ナデ調整が施される。66は口縁部外面に斜状の刻目、下方に一条の沈線が施される。67の口縁部は外側に粘土帯を貼付する。端部は水平な面を成し、外面は下方にやや垂下する。土器の色調は赤褐色を呈し搬入品と思われる(大分壺B2類)。68は甕と考えられ、口縁部は大きく外反する。器壁が他に比べ薄く、断面楕円形の貼付口縁である。内外面無文でナデ調整が施される。69・70は底部片であり、69は平底、70は底部中央に向かってやや凹む。71～77は古代から中世にかけての土器である。Ⅱ・Ⅲ・Ⅲ-1層からの出土である。71～74は土師質土器の杯で、全て回転ナデ調整が施される。72・73は底部片であり、外面に回転糸切り痕が認められる。72の内面にはタール痕が認められ灯明具として使用したものと思われる。75は瓦器椀の底部片であり、断面三角形の低い高台が付く。焼成不良で調整は不明である。76・77は煮炊具の甕で、口縁部は「く」の字に外反する。口縁端部は上方に拡張し、尖り気味に仕上げる。76は内外面共に横方向の荒いハケ調整が施され、77の胴部の外面は縦方向、内面は横方向を基調とするハケ調整が施される。78は青磁鎬蓮弁文碗であり、Ⅱ層から出土した。79は管状土錘でありⅢ層から出土した。80～82は石器である。80は頁岩製の打製石鏃であり平基式である。81は花崗岩質砂岩の叩石である。断面形は扁平で、両面中央部に敲打痕が認められる。82は頁岩の石核である。

(2) I e区

I e区は調査対象地東側斜面に開けた平場であり、標高37.5mを測る。現況は竹林であり、竹根による攪乱、及び部分的に墓地等、後世の造成による影響を受けていた。検出遺構はI e区の西部に集中し、Ⅱ層下、地山の岩盤面で土坑8基、ピット121個を検出した。

①ピット出土遺物(図4-19)

83は土師質土器杯でありP5から出土した。回転ナデ調整、底部は回転糸切り痕が認められる。84も土師質土器杯の底部片とみられ、外底部には回転糸切り痕が認められる。P8からの出土である。85は平釘でありP3から出土した。86は磨製石包丁であり、結晶片岩製である。中央部に一穴穿つ。87は叩石であり、長軸方向の両端に敲打痕が認められる。石質は緑色片岩である。

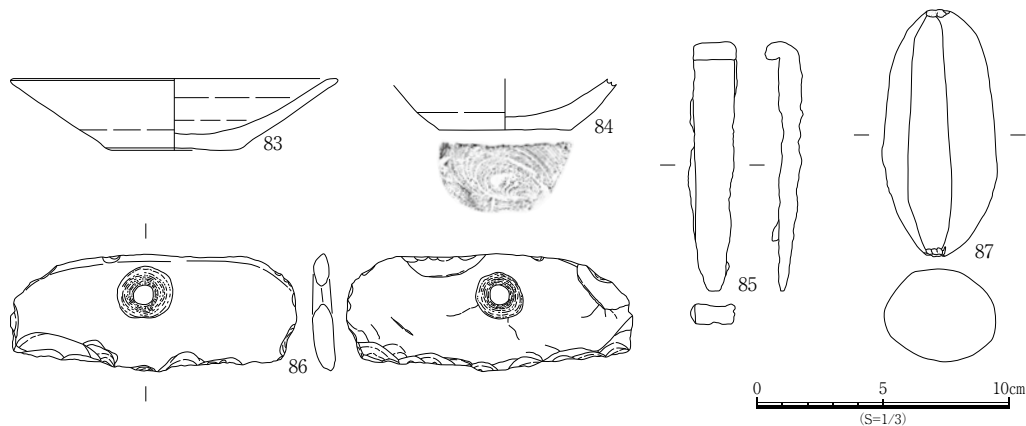


図4-19 I e区ピット遺物実測図

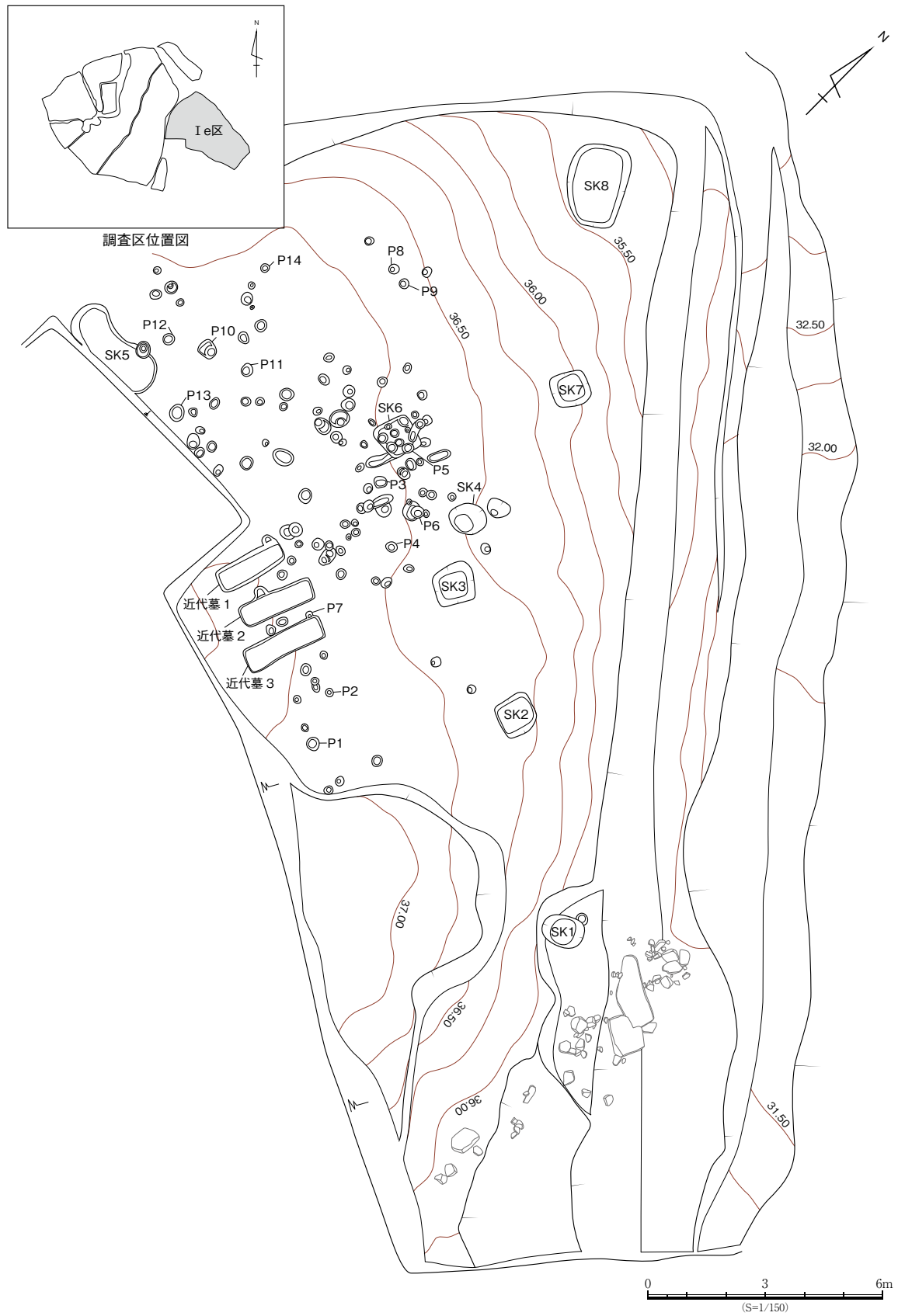


図4-20 Ie区遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

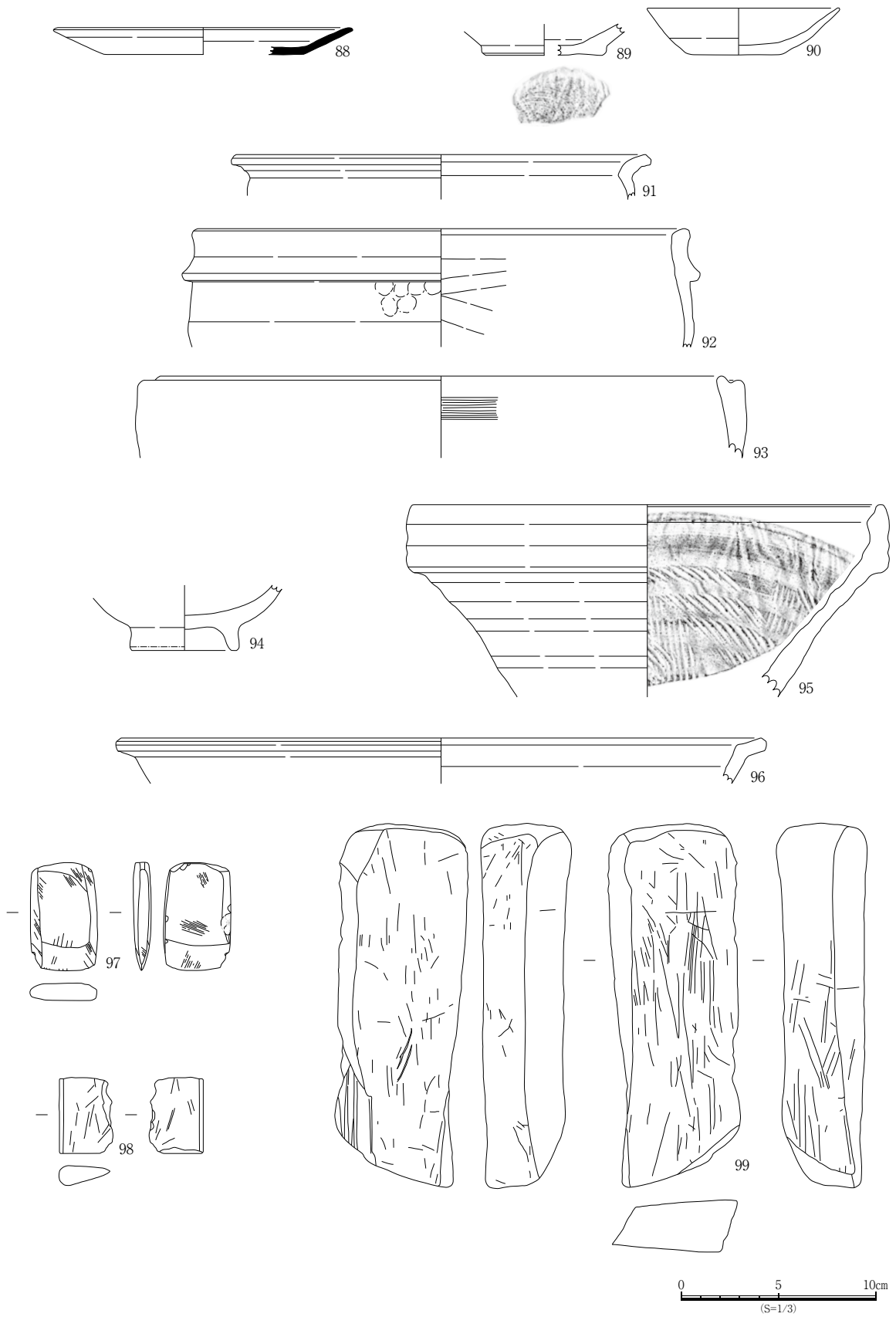


図4-21 I e区包含層遺物実測図

② I e区包含層出土遺物(図4-21)

88～93はⅡ層から出土した古代・中世の遺物である。88は須恵器皿であり回転ナデ調整が施される。89・90は土師質土器杯である。89は底部片で円盤状を呈し、外底部に回転糸切り痕が認められる。90はロクロ成形であり、体部下半でやや腰折れ、口縁部に向かって外方に開く。91は土師器甕であり、口縁部は外反し、端部はやや下方に拡張し面を成す。92は土師質土器の羽釜であり、口縁端部は内傾する面を持ち、外面に反りの浅い短い鍰が付く。外面胴部上位は指頭圧痕、内面は横方向のナデ調整が施される。93は土師質土器の鍋であり、口縁端部は内側が突起し、中央部が沈線状に凹む。外面全体に煤ける。94～96はⅠ層から出土した近世の遺物である。94は尾戸焼の陶器碗で全体的に浅黄色を呈した釉が施され、細かな貫入が入る。95は備前焼播鉢である。内外面ともにロクロ痕が顕著であり、口縁部は上方に拡張し、端部は上方に尖り気味に仕上げる。内面は放射状、及び斜方に条線が施される。96は瓦質土器の焙烙鍋であり、外型成形、内面はナデ調整が施される。97～99は石器であり、97はⅠ層、98・99はⅡ層から出土である。97は蛇紋岩製の小型扁平石斧である。98・99は砥石であり、98は流紋岩製、99は粘板岩製でありいずれも仕上砥である。

(3) I n区

I n区は調査対象地北東側斜面に位置する平場であり、標高29.5～31.2mを測る。現況は竹林であり、平坦面南部は後世の開墾により削り取られていた。現表土直下に地山の岩が崩れて堆積したⅡ層があり、Ⅱ層下で通路状遺構を検出した。通路状遺構は現況の里道に平行し、南に向かって下る。中央部は溝状に凹み、幅は1.2～1.8mで長さ10.5mを検出した。出土遺物はⅡ層中より、中世の土師質土器片、上段のI e区からの流れ込みと考えられる近世・近現代の遺物が出土した。

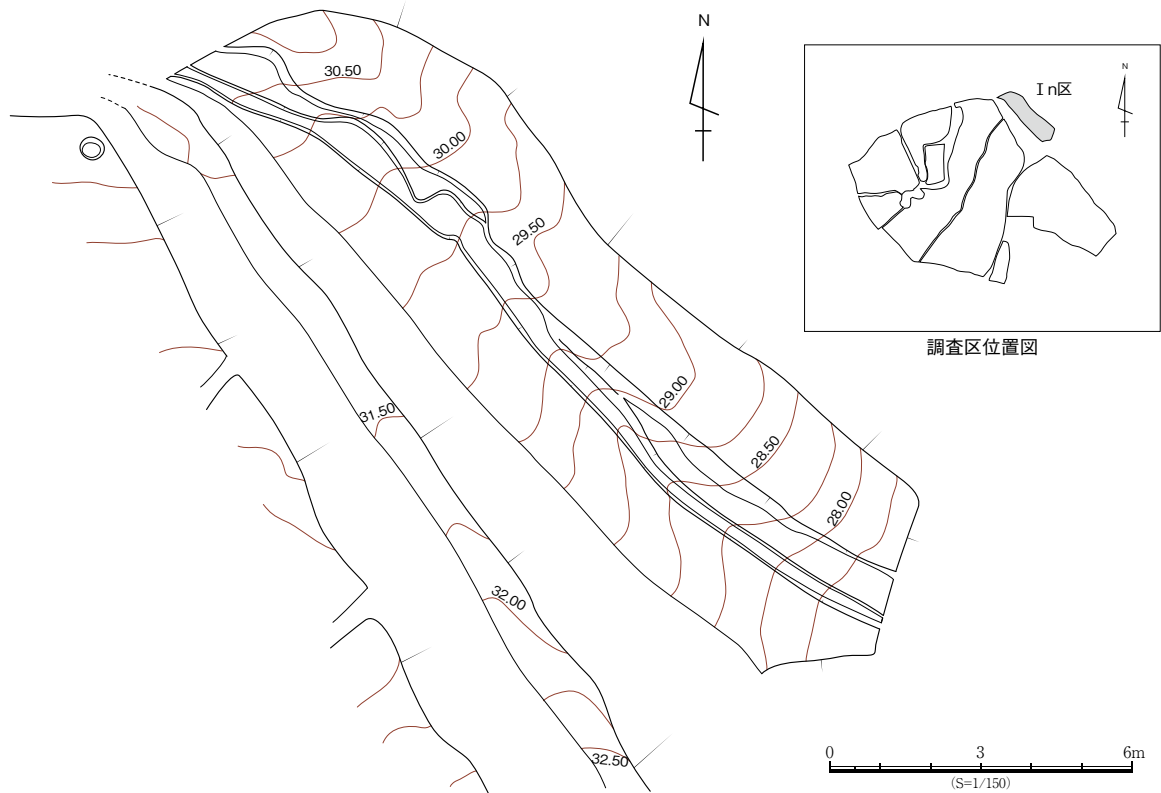


図4-22 I n区遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

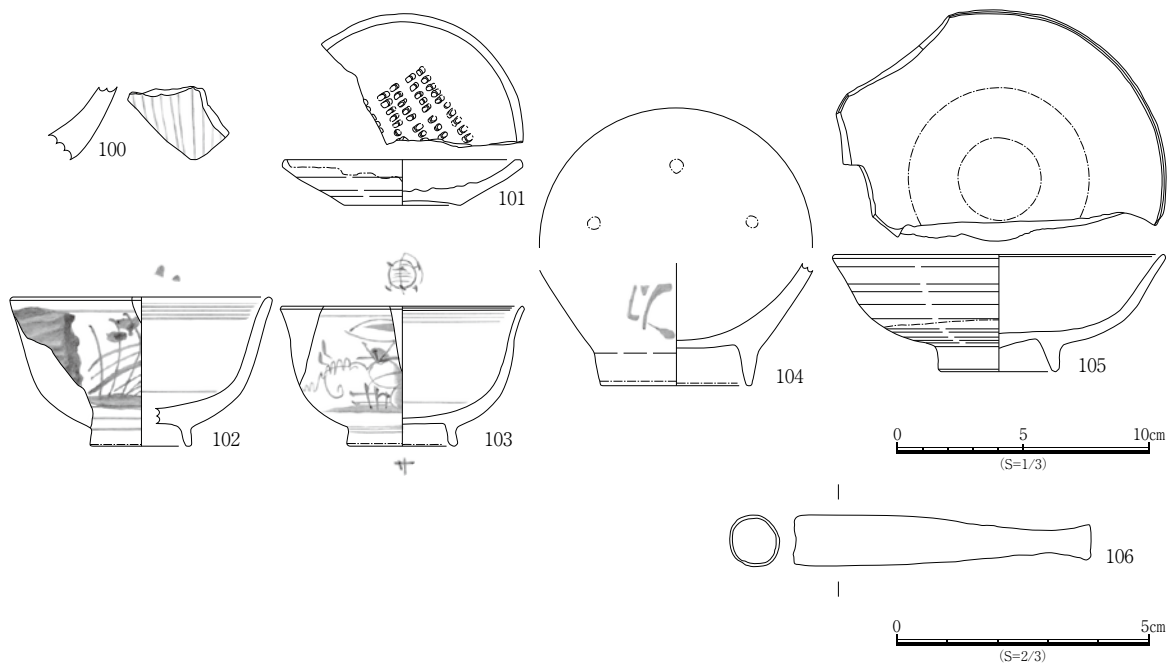


図4-23 In区包含層遺物実測図

①包含層出土遺物(図4-23)

100は細蓮弁文が施された青磁碗である。全体的な細かな貫入が入る。101は陶器のおろし皿である。内面のみ浅黄色の釉が施され、外面の一部に釉が垂れる。102・103は磁器碗である。102は内面に界線、外面には濃い呉須による草花風の文様が描かれる。103は能茶山焼であり、淡い乳白色を呈した下地釉に淡い呉須による文様が施される。外底部に「サ」の銘が、見込みは亀文、外面は梅文と唐草風の文様が施される。104は陶器碗であり、全体的に灰釉が施され、畳付の釉は削り取る。白釉によるイッチン掛けが施される。内面見込みにハマ痕が認められる。105は陶器皿であり、灰釉が外面体部中位まで施される。見込みは蛇ノ目状に釉を削る。高台内は高台脇より深く削り兜巾状を呈する。106は銅製の煙管の吸口部である。

(4)II区

II区では、弥生時代の竪穴建物跡1棟、土坑2基、溝1条、ピット33個と古代の土坑2基、ピット6個を検出した。調査区中央部の表土下では、暗オリーブ褐色粘土質シルトの包含層が認められ、古代、弥生時代の遺物が出土した。この包含層下が遺構検出面であり、標高32mを測る。調査区中央部では古代の柱穴群と柵列、弥生時代の土坑を検出した。古代の柵列は流路際の溝に沿って検出した。弥生時代の土坑(SK1)は埋土から壺の他に炭化米、炭化種実(堅果類)がまとまって出土した。竪穴建物跡は調査区の北寄りで見出されており、西半分は開墾により削り取られていた。また、調査区北端では2×2間の掘立柱建物跡を検出した。以下にII区で見出された各遺構について記述する。

①竪穴建物跡

ST1(図4-25~27)

調査区中央部北寄りの西側斜面縁辺で見出した。検出面は地山の岩盤面であり、標高は32.6mで、ST1の平面形は南側が少し張り出す楕円形を呈する。南東側に一段高い三日月状を呈したテラス状

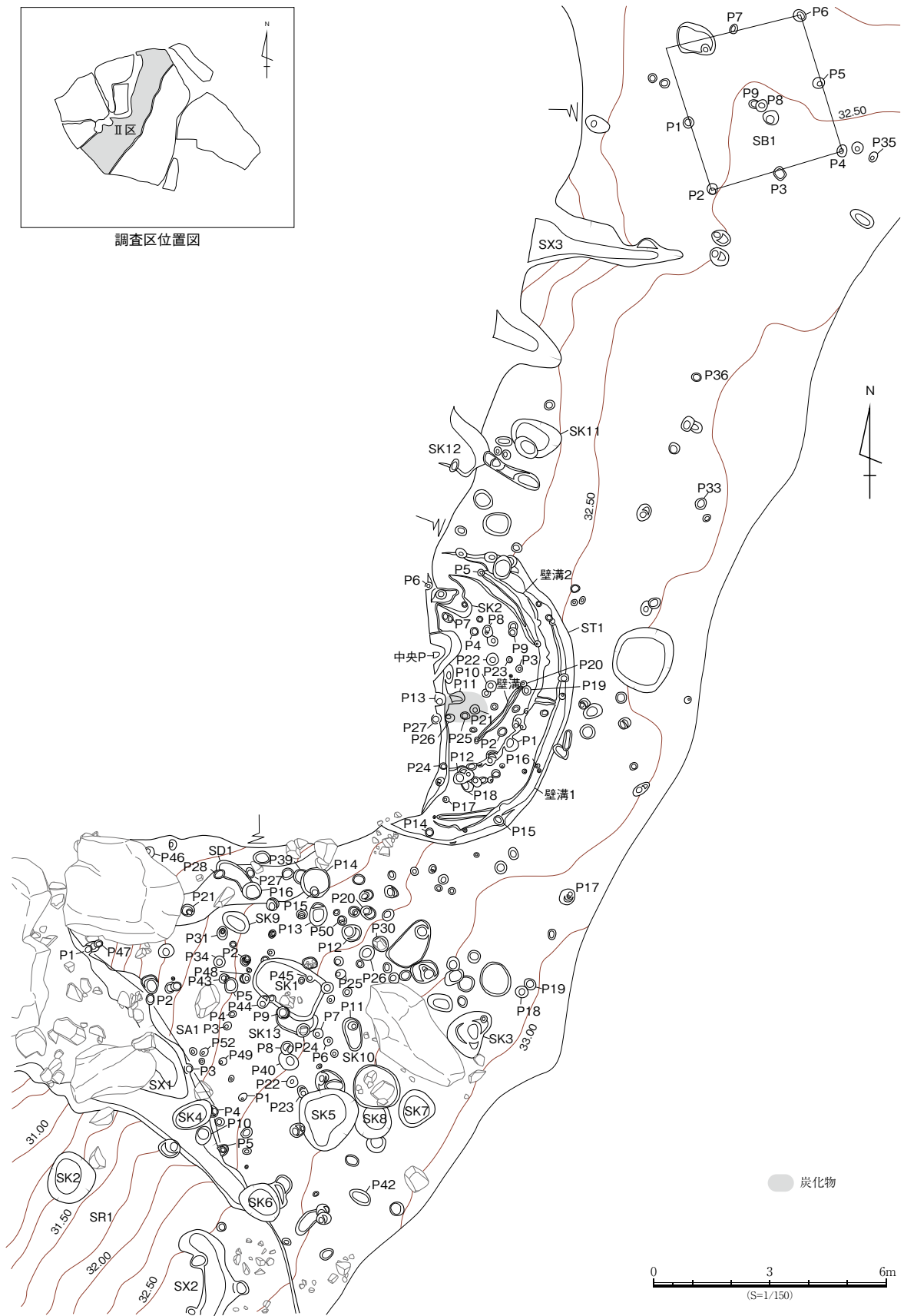


図4-24 II区遺構配置図

の段部を持つ。西側半分は削平される。検出した規模は長径7.55m, 短径3.65m(復元推長6.5m), 復元面積は36.15㎡を測る。遺構の深さは中央部で0.6m, テラス部で0.38mを測る。遺構埋土は大きく2層に分層され, 2層は2-1~4層に細分される。1層は黒褐色シルト質粘土で地山の風化礫が混じる。内側プランの上面に堆積が認められる。2-1・2層は黒褐色シルト質粘土であり, 内側プランの南寄りに堆積が認められた。2-2層からは比較的遺物がまとまって出土した。2-4層は灰黄褐色シルト質粘土であり, 床面全体に堆積が認められる。

ST1床面で検出されたピットは内区と拡張部を含めて60個で, 支柱穴と考えられるピットについては, 内区のP28・29・8・22・10・21・26の並びとP6・30・31・34・25・27の並びが重複して検出された。ピットの切合いから後者が古い段階の柱穴の並びと考えられる。また, 拡張区は内区南東部の壁際に北からP38・40・1・41・42・12・24・43と検出したピットは, 内区P10・21・26と並行し柱間も同寸法であることから関連性が考えられる。壁溝は拡張区側の壁溝1と, 内区側の壁溝2の二条を検出した。壁溝1は北東部から南にかけて周縁部を巡る。検出長5.36m, 幅0.32~0.45m, 深さは2~9cmを測る。南部は浅く, 壁溝はテラスに開口する。壁溝内で周縁に沿ってP57・56・54・53・52・15・50・14のピットが等間隔で検出された。壁溝の埋土からは弥生土器片44点, 投弾1が出土した。壁溝2は内区の北東部で検出された。両端にP5・55があり, このピット間が溝になる, 検出長2.40m, 幅0.23~0.32m, 深さは8.0~23.0cmを測る。また, 内区南東部にも内壁から少し間隔をおいた所でP20・60の間に同様の溝を検出したことから関連性が考えられる。テラス上面では内外区に接続した溝を検出した。中央ピットは内区の中央やや北寄りで検出したが, 西側は削平される。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト, 下層が灰黄褐色粘土質シルトである。楕円形を呈し長軸方向はN-68°-Eを指す。

埋土中から図示した弥生土器や石器(図4-26・27 107~136)が出土した。107~111は弥生土器壺である。107~109は全て貼付口縁の部類である。107の口縁部は断面形が四角形を呈し端部は面を成す。外面に縦方向の刻目, 頸部は櫛状工具による沈線が入る。108の口縁端部は上方に拡張し尖り気味に仕上げ断面形は三角形状を呈する。外面に斜状の刻目を施す。109の口縁部は器壁が厚く, 端部は外方に拡張され断面形は三角形状を呈する。外面には斜状の刻目が施される。110の口縁部は胴部から緩やかに外反し, ナデ調整で端部は面を成す。111は壺の胴部片で, 住居床面から出土した。底部は平底で胴部は算盤形を呈する。112~115は甕の口縁部片で全て素口縁の部類である。112は口径が10.0cmと小型である。口縁部は短く外反し, 端部は尖り気味に仕上げる。113の口縁部は緩やかに開き, 端部はナデ調整により面を成す。頸部外面にハケ目が認められる。114の口縁部はナデ調整を施し端部は面を成す。115の口縁部直下に幅の広い刻目が施される。116~120は底部片である。116は外面底部の脇が凹み蓋の持ち手部の可能性もある。118は外面と内面に指頭圧痕が強く残る。120の外面には一部ヘラミガキが認められる。121は高杯の杯部で口縁部は外反し, 端部は丸みを帯びる。122は高杯の脚部で杯部との接合部に絞り目が認められる。123はミニチュア土器で, 平底から段を持って立ち上がり, 杯状に開く。124~129は石鏃で, 全て平基式である。124~126はサヌカイト製で, 127は緑色のチャート製である。128・129は頁岩製で, 128は中央部が膨らみ, 129は全長が3.5cmとやや大型である。130は石斧で緑色岩製である。刃部は丁寧研磨されるが, 両主面に自然面を残す。側縁部は研磨される。131・132は砥石である。131は細粒花崗岩で, 研磨面二面を使用している。132は流紋岩で扁平である。両面及び一側面を使用し, 主面の一方は中央部が溝状に凹む。133~135は叩石で, 細粒花崗岩である。扁平な円礫で中央部が敲打により凹む。136は小型の投弾に属する。

3. 検出遺構と出土遺物

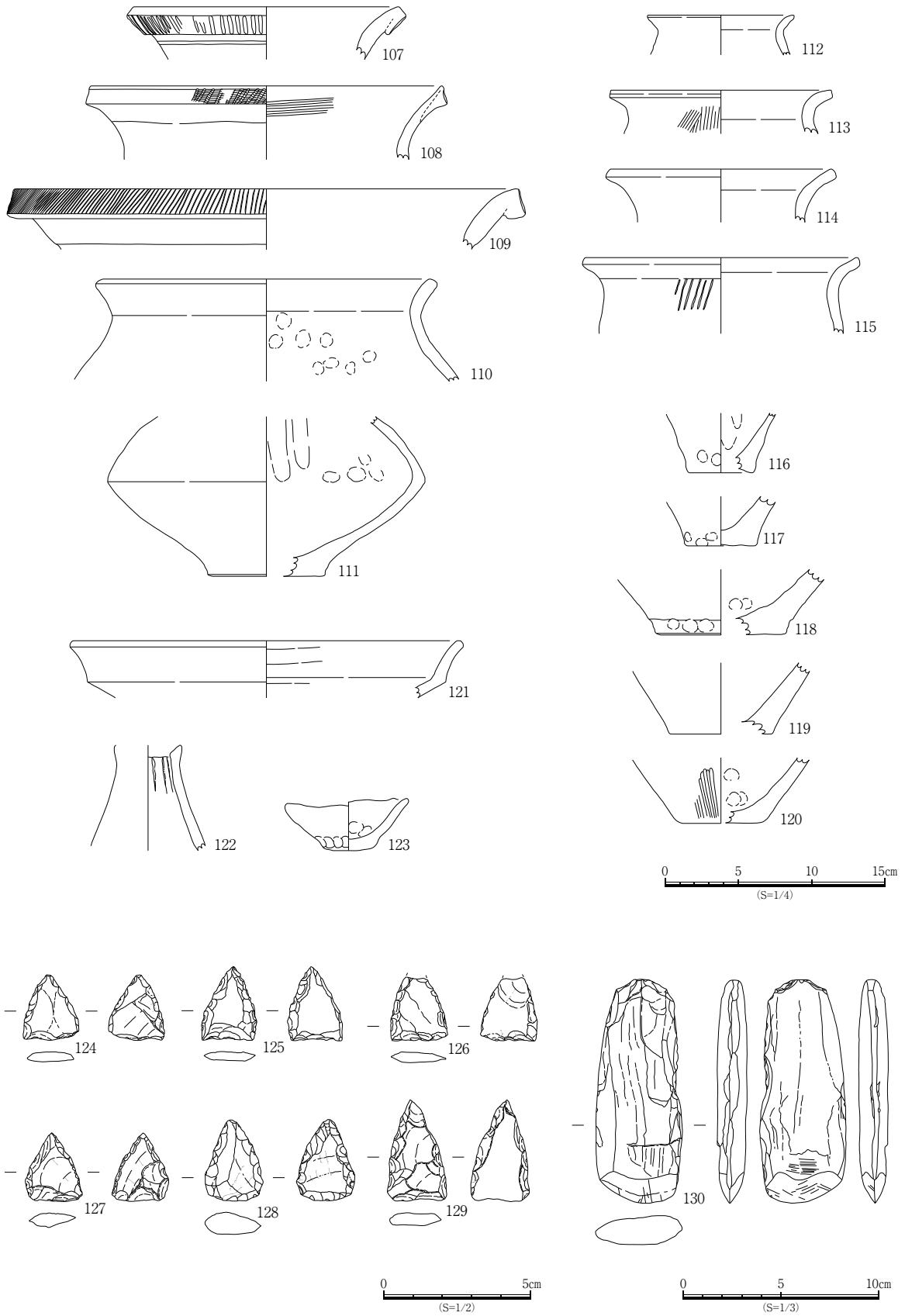


図4-26 II区ST1遺物実測図1

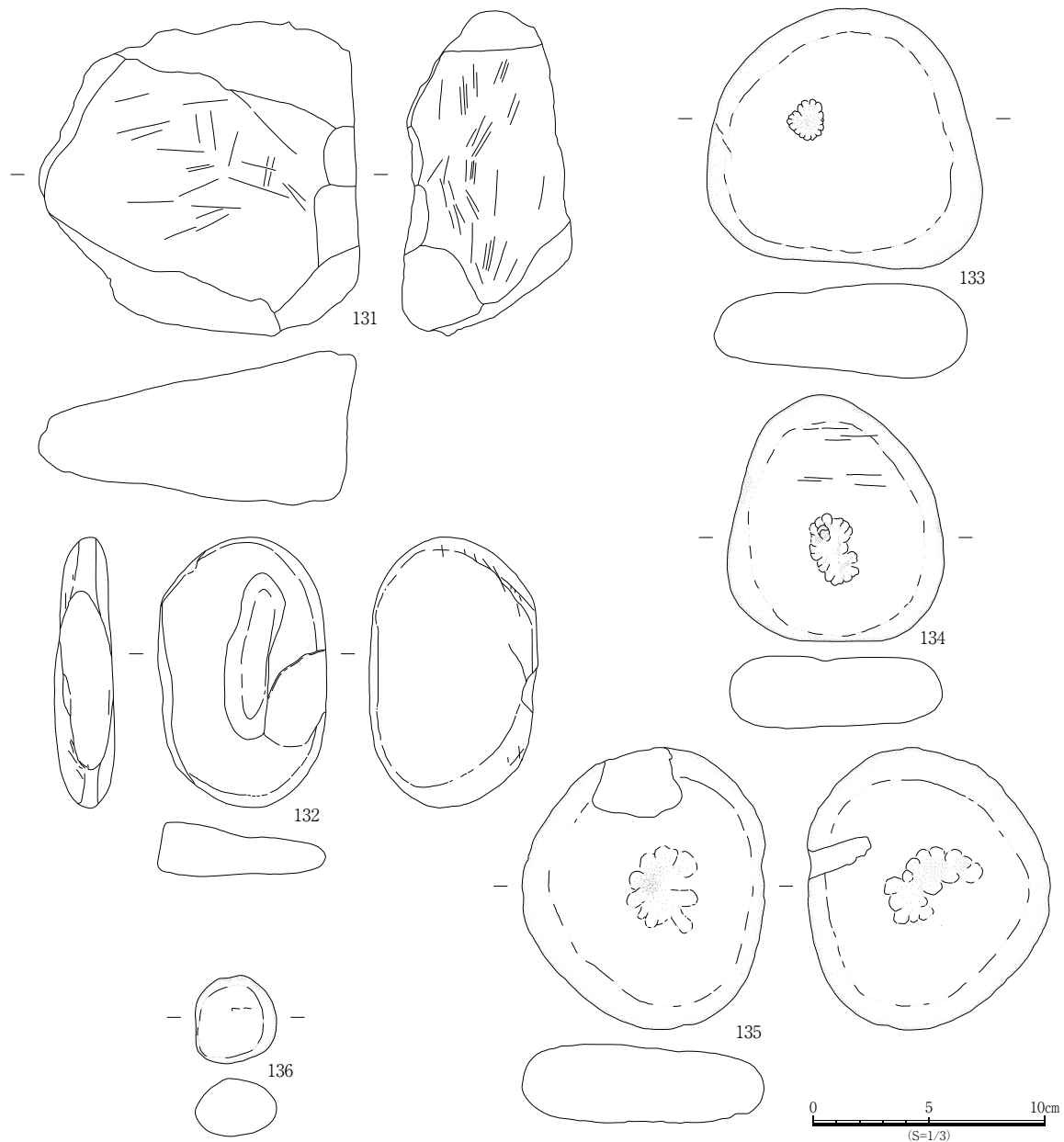


図4-27 II区ST1遺物実測図2

②土坑

II区では、弥生時代の土坑を2基、古代2基、時期不明6基を検出した。ここでは、実測可能な遺物が出土した土坑について遺構番号順に記述する。

SK1 (図4-28)

調査区中央部で検出した弥生時代の土坑である。長径1.84m、短径1.25mを測る隅丸長方形の土坑である。深さは0.24mを測り、埋土には炭化物を多く含んでおり、1層が暗褐色シルト質粘土で、2層は灰褐色シルト質粘土である。2層の埋土中炭化物は、炭化米と炭化堅果類を多く含んでおり、炭化米についてはSK13からも出土している。炭化米はSK13に接する土坑内部の南東部に集中がみられ、イチイガシは壺底部片(141)内部及びその周辺に集中して出土した。遺構埋土中からは炭化米 1,890

3. 検出遺構と出土遺物

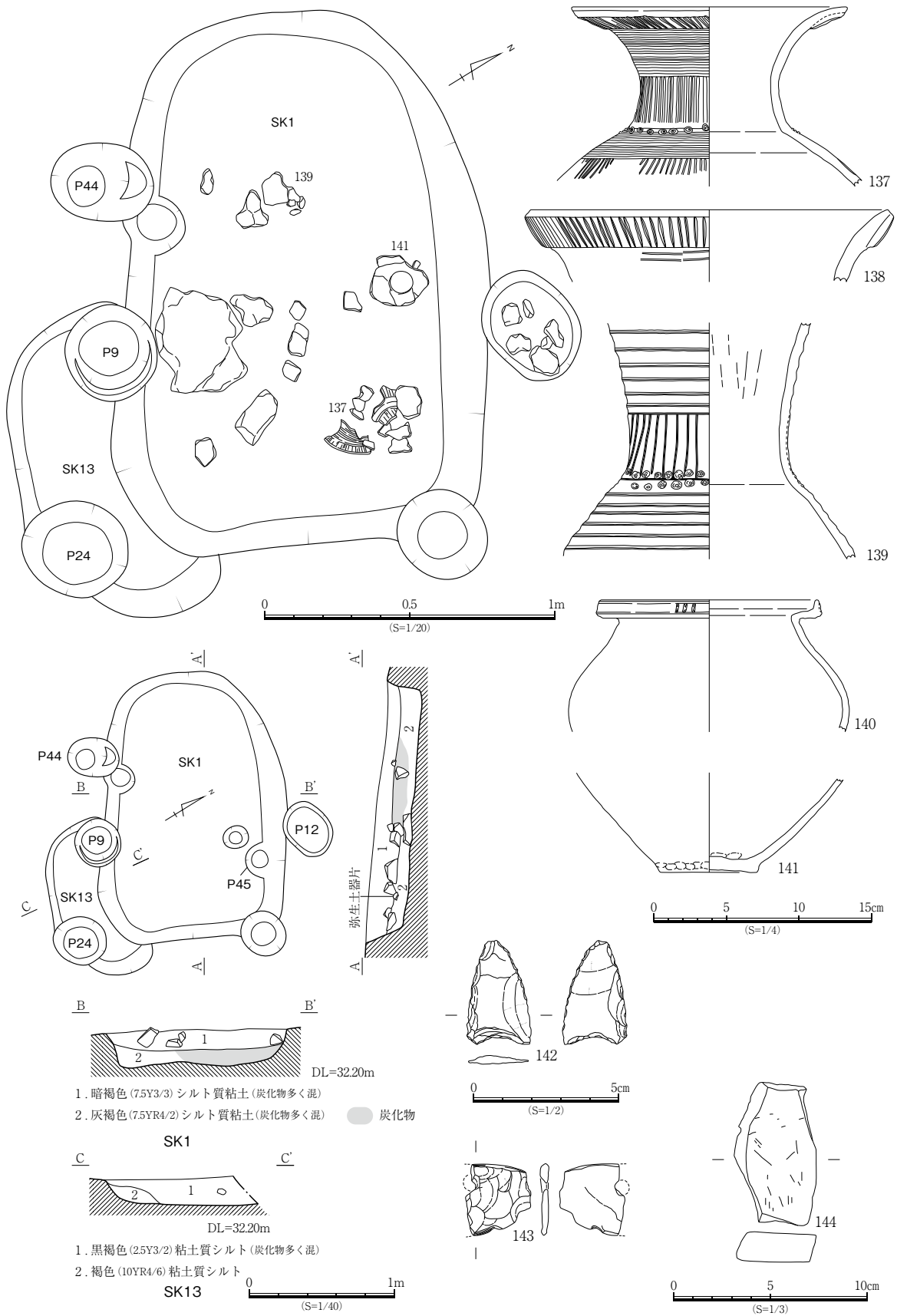


図4-28 II区SK1・13遺構図・遺物実測図

(+30,000)粒, イチイガシ, アカガシ, コナラなど炭化した堅果類の種実 349 粒を抽出した。これらについては自然化学分析を行った。(詳細はV章 分析に記載する)この内, 炭化米, イチイガシについては一粒ずつ放射性炭素年代測定を実施した。暦年代較正值は calBC95 ~ calAD50 前後の年代値が導かれ弥生時代Ⅳ~Ⅴ様式(中期後半から後期前半)に相当する。

SK1 から出土した遺物は, 弥生土器片 242 点, 石鏃 1 点, 石包丁 2 点, 砥石 2 点, 叩石 1 点であり, これらの遺物に暦年代を付与する事ができた。137~139 は壺であり, 貼付口縁の部類である。137 は口縁端部を摘みナデ調整により尖り気味に仕上げる。口縁部外面は縦に長い刻目が施される。頸部外面は櫛描文と浮文, 胴部は櫛描文と縦に長い刻目が施される。138 の口縁部は器壁が厚く, 口縁端部は面を成す。外面は縦に長い刻目が施され, 口縁部直下は横方向の櫛かへらによる調整が施される。139 は長頸であり, ナデ調整により横位の微隆起帯を配する。頸部下方は垂下する棒状浮文, 頸部と胴部の境目には円形の粘土に竹管刺突を施したドーナツ状の浮文を貼付する。140 は凹線文系の甕である。口縁部は外側に屈曲し, 端部を上方に拡張する。外面には刻目が施された三条一単位の浮文が施される。141 は壺の底部片と思われ, 平底から段を持って立ち上がる。内底の周縁に指頭圧痕, その他はナデ調整が施される。141 はうつ伏せの状態出土し, 中には堅果類の種実がまとまって入っていた。142~144 は石器であり, 142 は凹基式石鏃である。緑色チャート製で全長が 3.6 cm と大型である。143 は石包丁の断片であり, 頁岩製である。表面は剥離が著しく, 一部に被熱痕跡も認められる。144 は砂岩製の砥石であり, 一部に被熱痕が認められる。

SK2 (図4-29)

調査区南部, 流路上面で検出した近世の土坑である。長径 1.31m, 短径 1.2m, 深さは 0.32m を測る。平面形は不整円形のプランで埋土は黒褐色砂質シルトが堆積しており 1 層には 15~30 cm の角礫が多く含まれていた。図示した遺物は 1 層から出土した。145 は磁器で染付けが施された鉢である。外面に二重界線と蕩風の文様, 内面には草花文様が施される。146 は銅製の煙管である。その他土師質土器皿の破片が 2 点出土した。

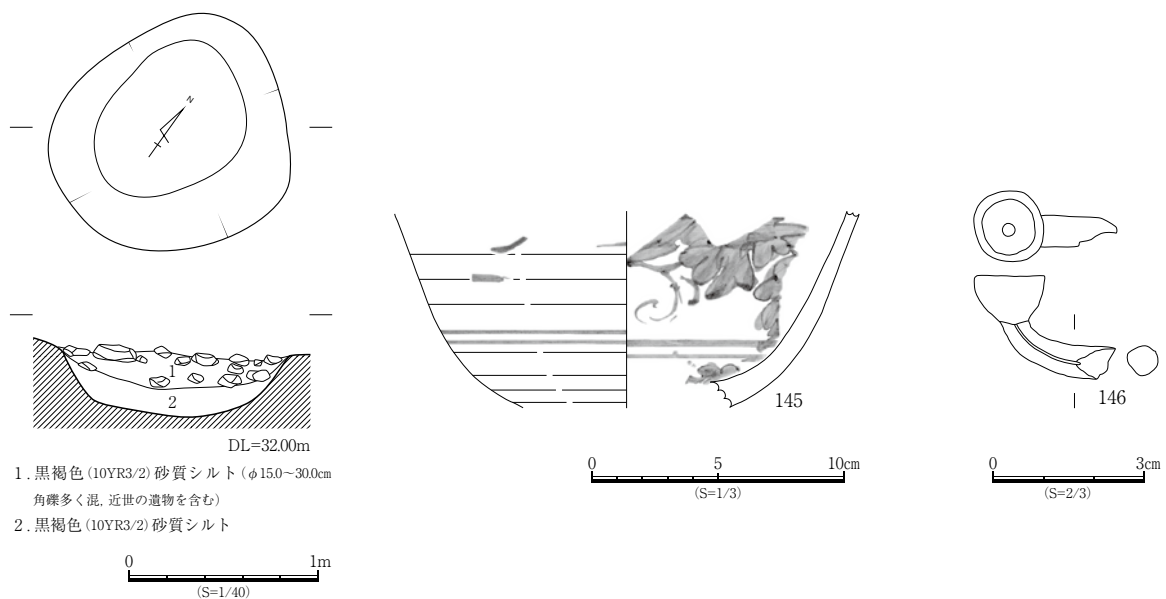


図4-29 II区SK2遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

SK4 (図4-30)

調査区南部, 流路の肩口上面で検出した中世の土坑である。長径1.06m, 短径0.66m, 深さは0.26mを測る。平面形は楕円形のプランで, 埋土は黒褐色シルトが堆積しており, 下層は粘性のある暗オリーブ褐色粘土質シルトの堆積が認められた。図示した遺物は1層から出土した。147は土師質土器皿であり, 回転ナデ調整が施される。その他, 2層からは土師器片36点, 混入と考えられる弥生土器片18点出土したことから, 下層の流路の堆積層の可能性はある。

SK5 (図4-30)

調査区南部で検出した近世の土坑である。長径1.55m, 短径1.5m, 深さは0.26mを測る。平面形は不整円形のプランで, 埋土は炭化物を含む暗灰黄色砂質シルトであり, 2層との境目に10.0~20.0cmの角礫が集中して検出された。埋土からは図示した遺物の他に19世紀代の磁器片1点, 瓦片1点が出土した。148は灰釉が施された尾戸焼の陶器碗である。畳付は釉を削り取る。内面に目痕が認められる。

SK9 (図4-30)

調査区南部で検出した古代の土坑である。長径0.79m, 短径0.51m, 深さは0.18mを測る。平面形は楕円形のプランで, 埋土は上層が炭化物を含んだ灰黄褐色粘土質シルト, 2層が黄褐色粘土質シルトである。東側が深く掘込まれており, 断面形は舟形状を呈する。埋土からは土師器片8点が出土した。149は土師器甕の胴部片であり, 胴部下半はタタキ目, 上半はハケ目が認められる。胎土には石英, 角閃石, 雲母片が含まれており搬入品と思われる。10世紀代のものと考えられる。

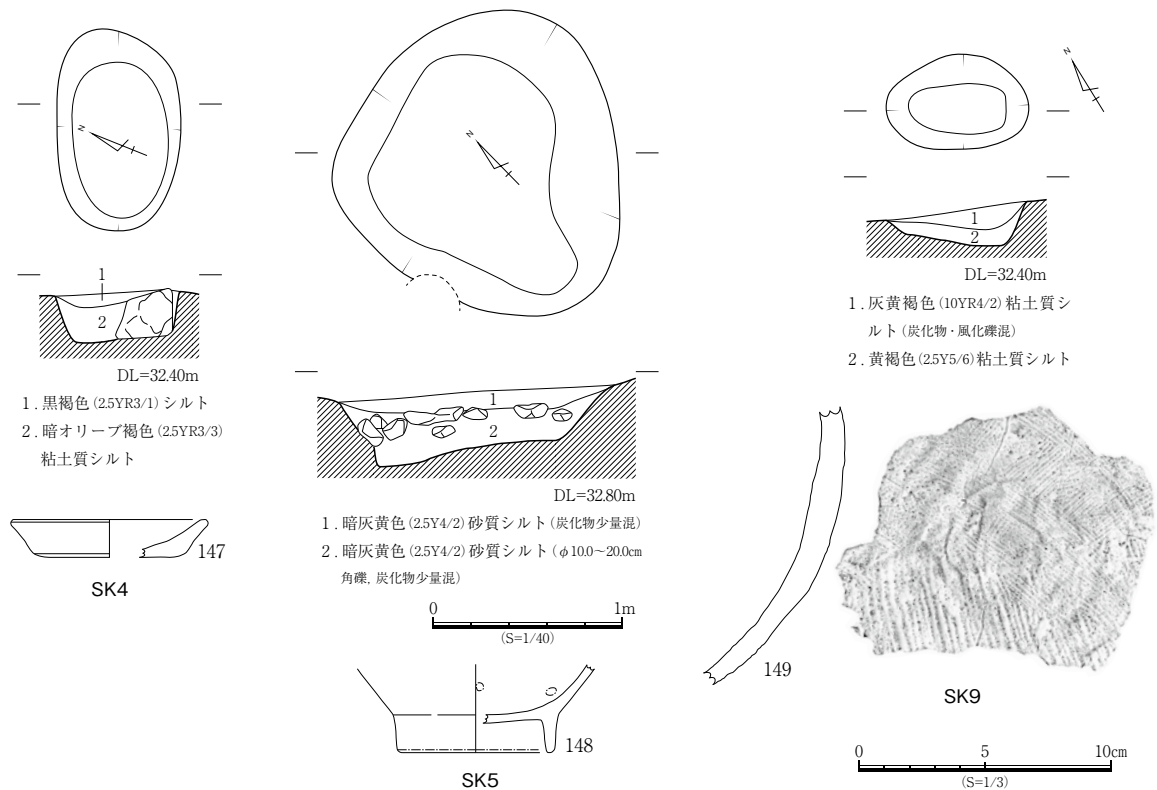


図4-30 II区SK4・5・9遺構図・遺物実測図

③性格不明遺構

SX1 (図4-31)

調査区南部, 自然流路(SR1)の肩口で検出した。自然流路の堆積と考えられる直径1mを越える大きな石が遺構の一部に入り込み全体的なプランは検出出来なかった。流路の堆積の一部の可能性もあるが, 土坑もしくは溝的な性格が想定される。検出面は流路の上面であり, 全長2.31m, 短径1.46mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトであり, SR1-1の堆積層を切る。出土遺物は図示した遺物の他に土師器片58点, 砥石1点である。150は土師器杯の底部片で, ベタ底の底部からやや段を持ち立ち上がる。回転ナデ調整が施される。151土師器碗で, 高台が付く。回転ナデ調整, 底部は回転ヘラ切り痕が認められる。152は緑釉陶器碗である。削り出しの円盤状高台で外底部中央に向かって凹む。体部は内湾し, 口縁端部は尖り気味に仕上げる。153は土師器甕である。口縁部は「く」の字に外反し, 端部は上方に拡張しナデ調整により尖り気味に仕上げる。口縁部内面及び体部外面はハケ調整が施される。これらの遺物は10世紀代である。

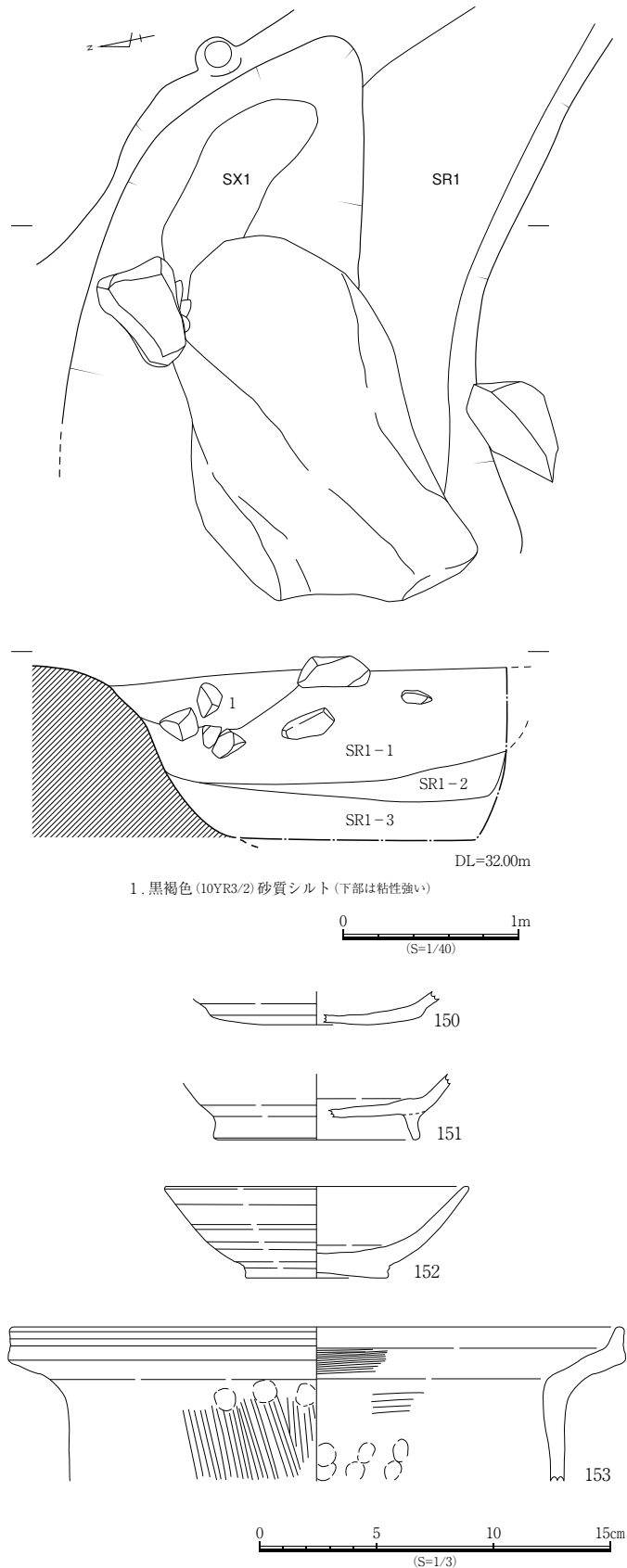


図4-31 II区SX1遺構図・遺物実測図

④柵列

SA1 (図4-32)

調査区南部, 自然流路(SR1)縁辺で検出された。柱穴の並びは流路に沿ってP1~5を検出し, 柱間寸法は1.01~2.05mを測る。柱穴の形状は方形, 円形, 楕円形があり, 規模は長径0.27~0.31m, 短径0.25~0.32m, 深さは0.18~0.51mを測る。P5では直径18.0cmの柱痕が検出され, 土師質土器鍋の破片1点と近世磁器の破片2点が出土した。

3. 検出遺構と出土遺物

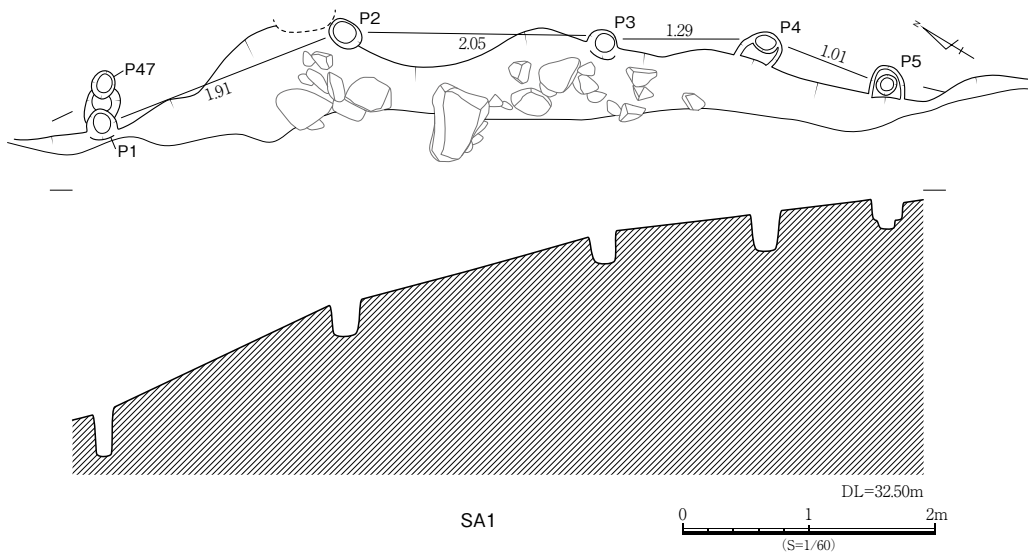


図4-32 II区SA1遺構図

⑤掘立柱建物跡

SB1 (図4-33)

調査区北部で検出した2×2間の掘立柱建物跡である。北西隅の柱穴は未検出であるが竪柱型の建物プランになるものと思われる。柱間寸法は桁行1.8～1.84m、梁行1.69～1.79mで、桁行2間で3.62m、梁行2間で3.54mを測る。面積は12.81㎡である。柱穴は円形、楕円形、方形があり、規模は長径0.22～0.33m、短径0.2～0.32mを測る。深さは9.0～51.0cmの深いものもある。出土遺物はP5から土師質土器鍋の破片1点、近世磁器片1点が出土し、P6からは土師質土器杯の破片が1点出土した。

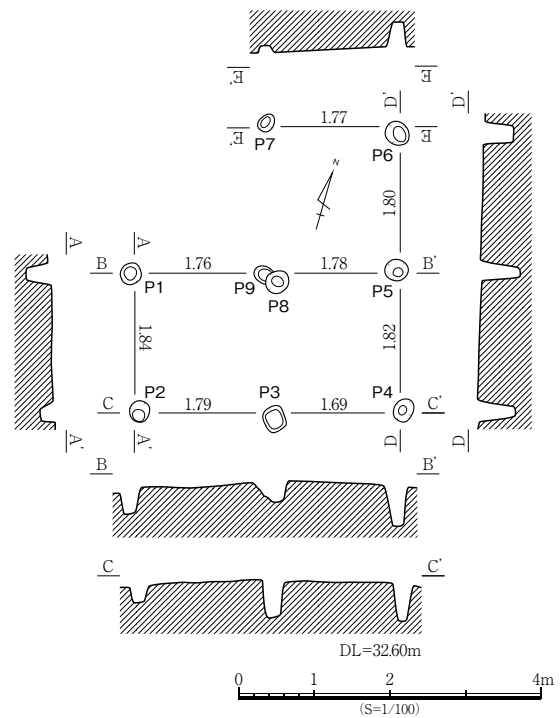


図4-33 II区SB1遺構図

⑥ピット

II区では調査区南部に集中してピットが197個検出された。この内出土遺物から時期の特定ができるピットは弥生時代33個、古代6個である。その他は、中世が10個、近世4個であった。以下にピットから出土した遺物について述べる。

ピット出土遺物(図4-34)

154はP47から出土した土師器椀である。口縁部は外反し、回転ナデ調整が施される。155は磨製石包丁である。頁岩製で片方が欠損し、弧背で背部は丁寧に面取りされている。刃部は弱い凸刃で研磨痕が認められる。二穴背部側に穿つ。156は弥生土器甕の底部片で、P9から出土した。比較的器壁が薄く、平底から外方に大きく開く。

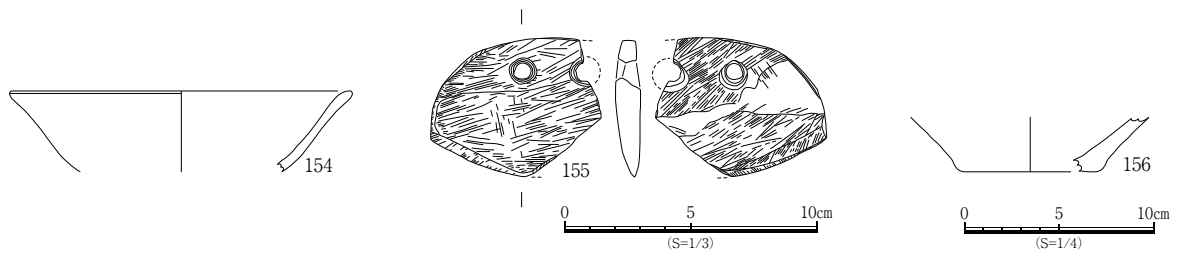


図4-34 II区ピット遺物実測図

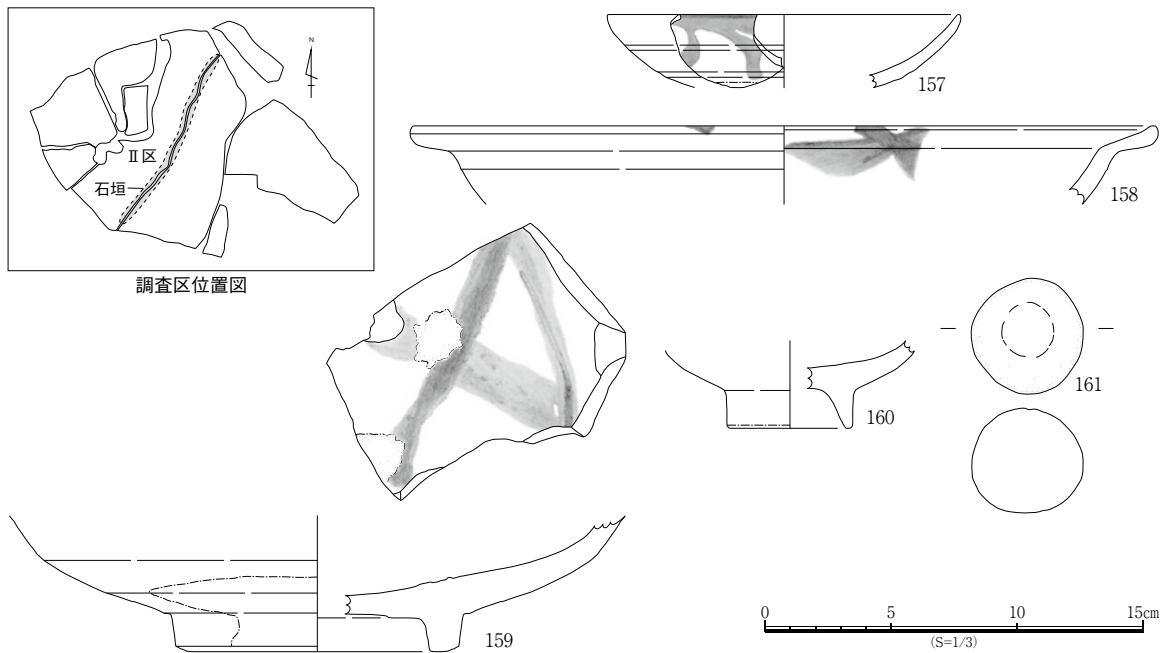


図4-35 II区石垣裏込出土遺物

⑦石垣裏込出土遺物(図4-35)

II区の旧状は水田であり、耕作地に石垣が構築されていた。石垣はII区で検出された自然流路上面にみられ、平場として造成した段部崖面に沿って構築していた。築石として使用されている石は主にチャートであり、現地で採れる石である。直径20.0～40.0cm大のものを野面積みしていた。石垣の裏込は5.0～15.0cm大の礫を地山と石垣との幅0.3～0.5cmに充填していた。以下に石垣裏込から出土した遺物について述べる。

157は陶器皿であり、肥前内野山窯産の銅緑釉が施された皿である。外面の一部に銅緑釉が垂れる。肥前Ⅲ期。158・159も肥前系の陶器皿であり、全体的に薄く灰釉が施され、内面には鉄釉と緑釉で老松文が施される。158は口縁部片であり、外反し端部は上方に屈曲する。159は底部片であり、断面逆台形状の高台を削り出す。いずれも肥前Ⅲ期の所産である。160は尾戸焼の陶器碗であり、全体的に黄釉が施され細かな貫入が入る。高台は高く、畳付は尖り気味に仕上げる。161は小型の投弾であり細粒花崗岩である。混入と考えられる。

⑧II区包含層出土遺物(図4-36・37)

遺物はほとんどがII層から出土した。以下に器種ごとに分類し記述する。

3. 検出遺構と出土遺物

162～171は弥生土器である。162・163は弥生土器壺の口縁部片である。162の口縁端部は上下に拡張され凹線文が施される。頸部には斜状の刻目が施される。163の口縁部は肥厚し、端部は面を成す。164は甕である。肩の張らない胴部から口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁であり、端部は外側に摘み出し小さな玉縁状を呈する。口縁外面は指頭圧痕が連続する。頸部と胴部の境目には一条の微隆起帯と粒状浮文が配される。165は甕の口縁部片であり、口縁部直下に櫛描文を強く施すことにより端部が肥厚する。166は甕の口縁部片であり、頸部から緩やかに外反し、端部は面を成す。頸部外面にはヘラミガキが一部に認められる。167～170は底部片である。170は甕であり、平底の底部中央に直径1.3cmの円孔を焼成前に穿つ。171は高杯の脚部であり、外面にヘラで二条の沈線を施し、間に斜格子状の文様を配する。

172・173は古代の遺物である。172は須恵器杯であり、底部から直線的に立ち上がり、口縁端部は平らな面を成す。回転ナデ調整が施され、外面と内面の一部に火摺痕が認められる。焼成が不良で酸化焰焼成である。173は土師器甕であり、口縁部は「く」の字に外反し、端部はナデ調整が施され上方に拡張し尖り気味に仕上げる。内面は横方向のハケ調整、胴部外面は縦方向のハケ調整が施される。胎土は褐色を呈し、石英・雲母片を含む。搬入品と考えられる。

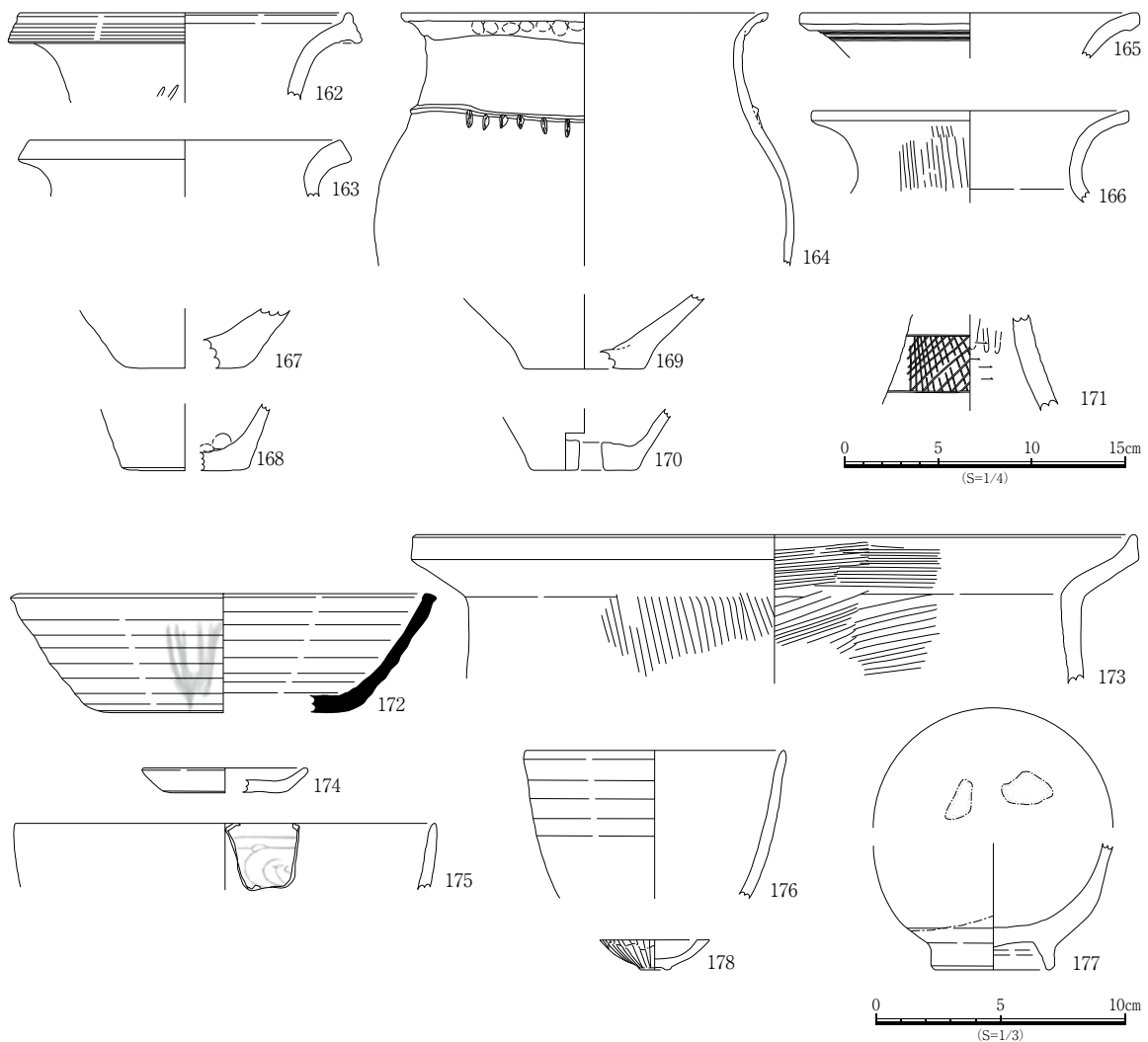


図4-36 II区包含層出土遺物1

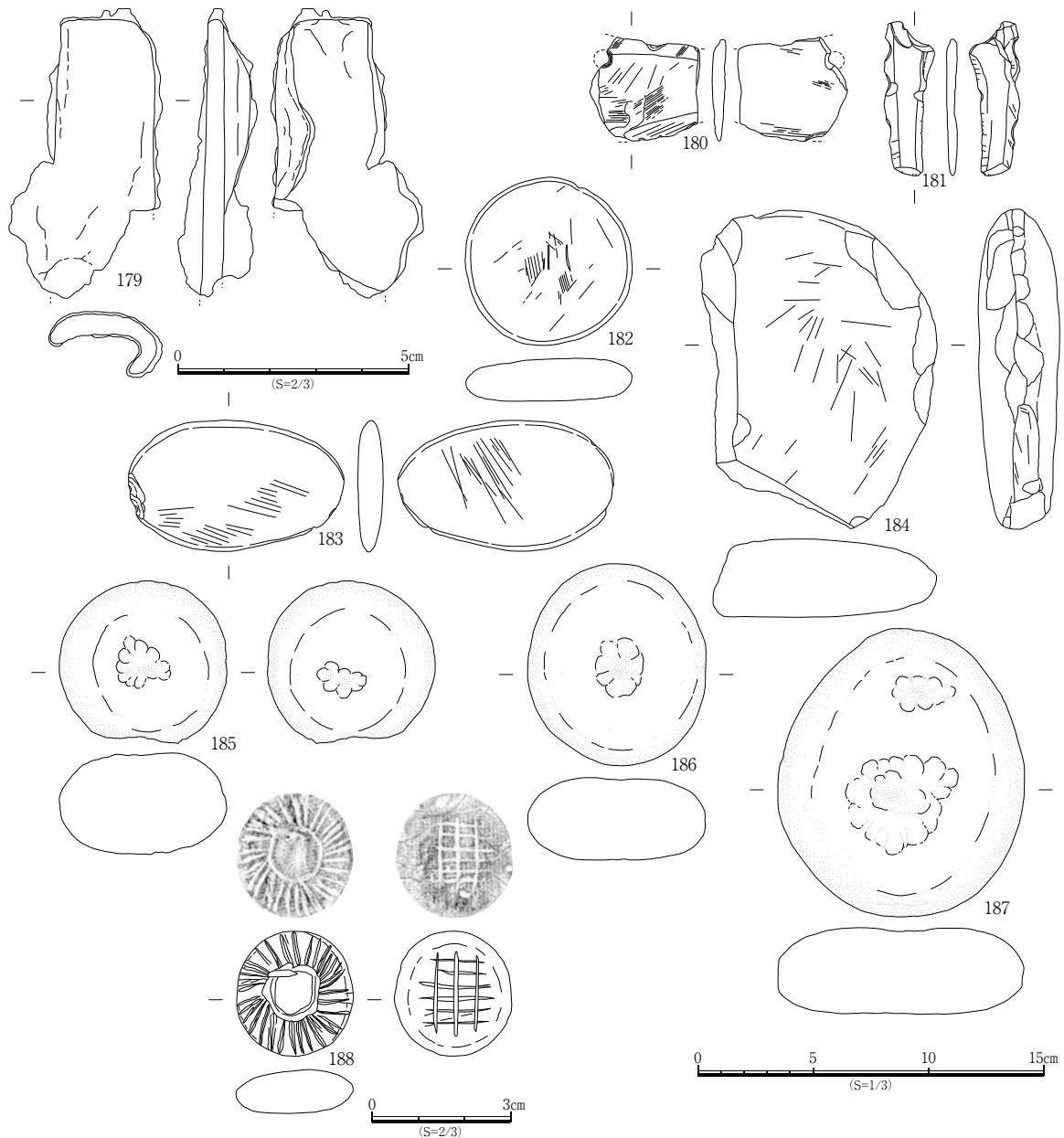


図4-37 II区包含層出土遺物2

174・175は中世の遺物である。174は土師質土器皿であり、ロクロ成形、底部切離しは回転糸切りである。175は青磁碗であり、内面に劃花文が施される。176～178は近世の遺物である。176は尾戸焼の碗であり、全体的に薄く黄釉が施される。177は肥前産の鉄釉が施された碗である。外面高台脇まで鉄釉が施釉され、高台脇より高台内が深く削り込まれる。見込みに砂目が二ヶ所認められる。178は白磁の紅皿である。外面型押し無釉で口縁端部の面取り幅が広い。

179は鉄器であり、弥生時代の鉄斧である。刃部は欠損し、全体的な形状は不明である。基部は折り返し袋状を呈する。

180～188は石器である。180は頁岩製の磨製石包丁であり、両端が欠損する。穿孔の一部が認められる。裏面は未調整である。181は石匙状を呈する。一側縁は三ヶ所に抉りが入り、反対側は研磨により湾曲した刃部を持つ。頁岩製である。182～184は砥石である。182は流紋岩製であり、扁平な円

3. 検出遺構と出土遺物

盤状を呈する。片面に擦痕が認められる。183は扁平な頁岩であり、両面に研磨痕が認められる。形状から石包丁の未成品の可能性もある。184は流紋岩製の扁平な砥石であり、片面と一側面を砥石として使用している。185～187は叩石でいずれも細粒花崗岩である。185は両面中央部に敲打による凹みが認められる。186・187は片面のみ敲打による凹みが認められる。188は緑色岩系の基石状の石である。片面に車輪状、もしくは陽の模様が陰刻され、もう片面には格子状の模様(ドーマン)が陰刻される。呪術的な道具と思われる。

(5)Ⅲ区

Ⅲ③区は表土を除去すると古代・弥生時代の遺物包含層があり、この遺物包含層下で遺構を検出した。遺構検出面の標高は29.5mを測る。弥生時代中期末の遺物はⅢ③区中央部の流路に接した地点で高杯などの遺物が一括して出土した。また、流路の東肩部には灰黄褐色粘土質シルトが溝状に堆積しており埋土から古代の遺物が出土した。埋土、出土遺物の状況からⅡ区で検出した溝状遺構(SX1)の続きの可能性も考えられる。Ⅲ区には5mを越える巨岩が2個並列しており、岩に沿って段状を呈した畑地があり、石垣がみられた。岩陰部を調査すると、枅形に組んだ石組遺構、及び排水溝と思われる石組遺構が確認された。Ⅲ④区はⅡ区から続く流路の堆積と、後世に畑として利用されていた時の溝跡(SD2)が確認された。溝からは能茶山焼など地元産磁器や、型紙刷りの磁器皿など幕末から明治期の遺物が出土した。調査区東部のⅢ①・②区については後世の畑地にする際の開墾が著しく、山切が行われている箇所であり、地山が削られておりⅢ②区で畑地として利用していた時の遺構しか検出されなかった。

検出された遺構は、近現代の遺構が多く、弥生時代の遺構としては土坑1基、ピット36個でピットが主体である。古代の遺構としては溝1条、ピット5個を検出した。近現代の遺構はハンダ土坑など土坑が11基、石組遺構1基、石垣3列である。19世紀代のものが中心である。

①溝

SD2(図4-39)

Ⅲ④区で検出した近世の溝である。主軸方向はN-67°-Eで北東から南西方向に延びる。北側はⅢ③区の調査の際に全長は9.37m、幅は1.48～1.85m、深さは0.08～0.35mを測る。断面形は皿状を呈し調査区西壁際で堆積を確認した。1層は黄灰色砂質礫、2層は暗灰黄色砂質シルト礫で旧耕作時盛土に相当する。1層が溝の埋土であり、陶器、磁器の細片、瓦片、煙管、鉄滓などが出土した。図示した189・190は銅製の吸口と煙管部分である。出土した遺物から19世紀代に位置付けられる。また、溝の底面ではピットを検出した。番号を付したP48～52は出土遺物から古代、中世、近世(18世紀代)のピットである。

②土坑

ハンダ土坑1～3(図4-40)

Ⅲ③区北端で検出した近現代のハンダが使用された土坑である。ハンダ土坑1～3が切り合った状態で検出され、1は方形、2は隅丸方形、3は円形プランを呈し、方形プランを呈した1が2・3のハンダ土坑を切る。これらのハンダ土坑については切合いの確認と検出に止め、深さを確認するため部分的にトレンチ調査を行った。1については堆積の確認のため部分的に完掘した。1は長径1.53m、



図4-38 III区遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

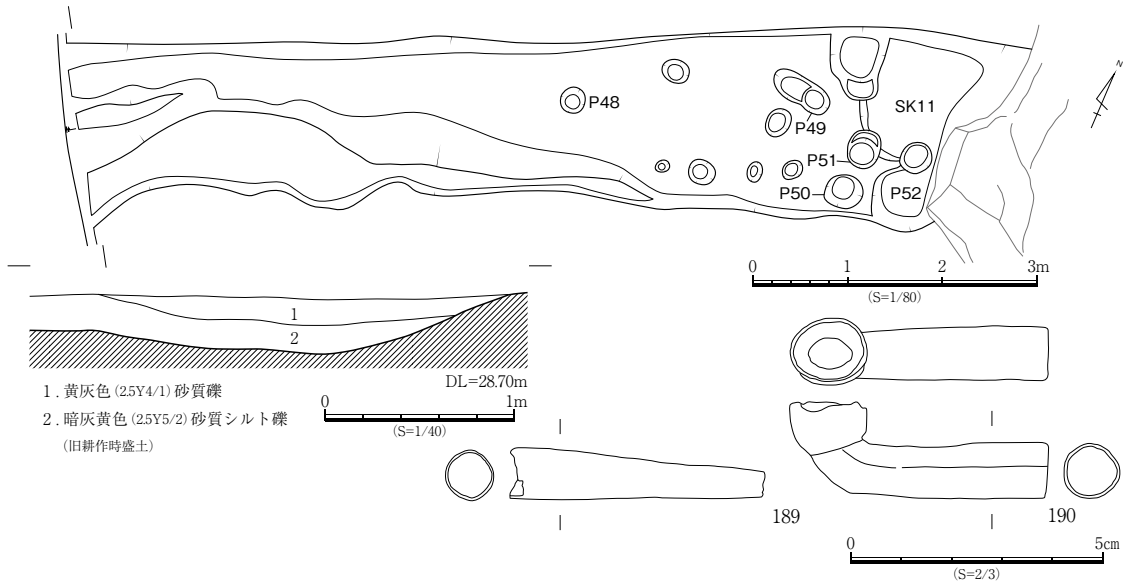


図4-39 Ⅲ区SD2遺構図・遺物実測図

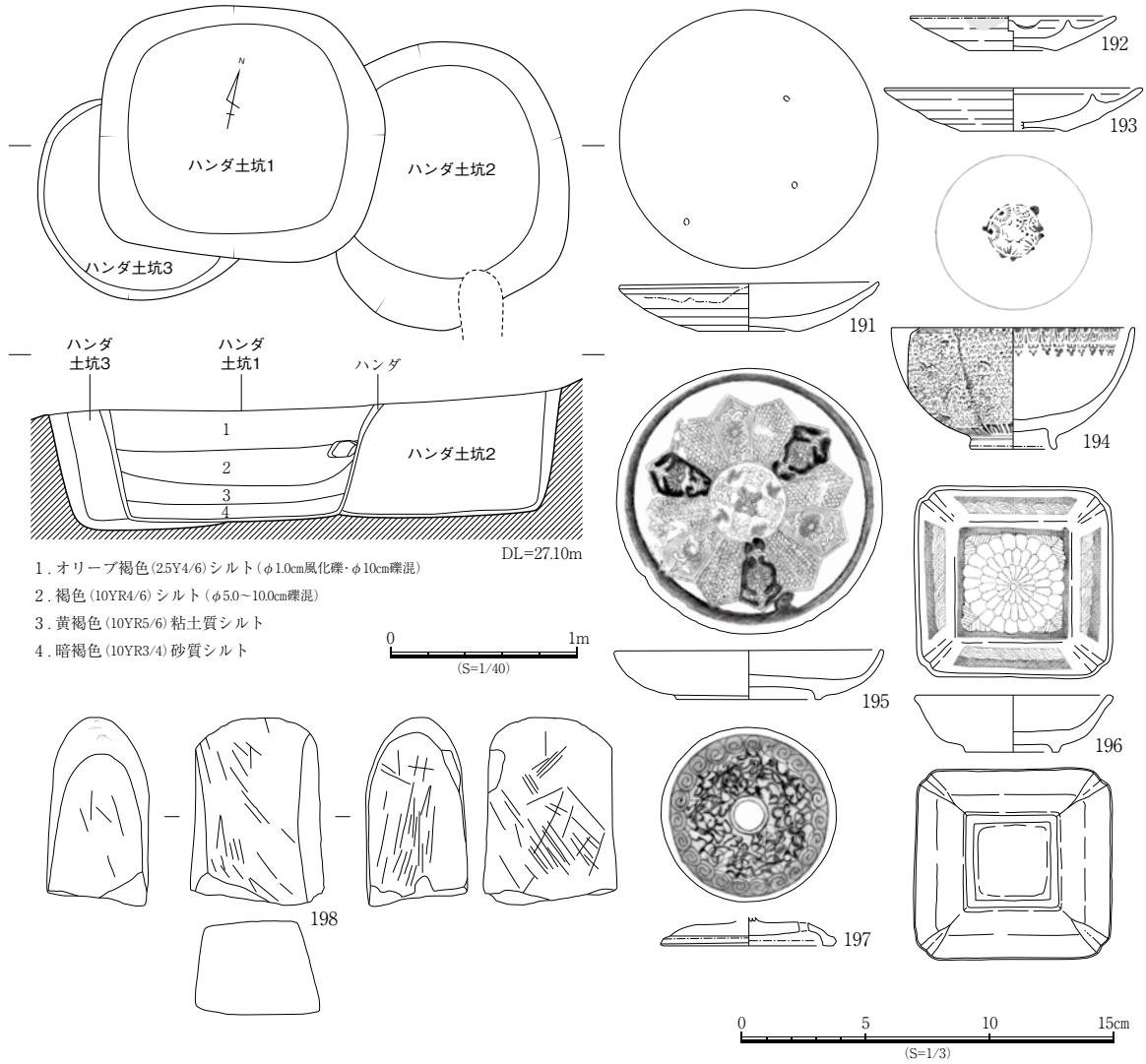


図4-40 Ⅲ区ハンダ土坑1~3遺構図・遺物実測図

短径1.35m、深さ0.59mを測る。ハンダの厚みは5.0～7.0cm前後を測り、側壁と床面にハンダが施されている。埋土は4層に分層され、図示した遺物(191～198)が出土した。ハンダ土坑2は長径1.48m、短径1.32m、深さ0.58mを測り、床面は1と同じである。ハンダ土坑2も1と同様に厚さ8.0cm前後で側壁と床面にハンダが施されていた。ハンダ土坑3は直径1.18m、深さ0.66mを測り、同じ様に側壁と床面にハンダが施される。

191～198は全てハンダ土坑1から出土した遺物である。191～193は陶器製の灯明皿である。内面のみに灰釉が施される。191は見込みにハマ痕、192は外面の一部にタール痕が認められる。194は磁器碗であり、外面に型紙により鱗状、体部下半に剣先蓮弁文、見込みには亀文が施される。195も型紙刷りが施された磁器皿であり、見込みに赤色釉と緑釉により菱文が転写される。196は磁器角皿であり、四側面に青海波文が濃い呉須により配され、見込みには菊花文の陰刻を施す。197は磁器蓋であり、摘み部は欠損する。蓋の表面には濃い呉須により唐草文が描かれる。198は流紋岩製の砥石であり、仕上砥である。四面ともに研磨痕が認められる。こうしたハンダ土坑内部からは、砥石が出土する事例が多い。

③石組遺構(図4-41)

Ⅲ③区南端中央にある岩陰で検出した。岩の下を深さ30.0cmほど掘込み、20.0～40.0cmの角礫を上下に二段積み上げ、枡形に組む。規模は長径4.39m、短径3.3mを測り、床には粘土を敷く。この枡形の石組遺構の西側は調査区南側の石垣2に続く。東側はC-C'のラインで排水溝と考えられる石列を検出した。また、この石列の西側B-B'のラインで幅0.9m、深さ0.52mで15.0～60.0cmの角礫を4段ほど積上げた石積みが見られた。石積み底面のレベルは枡形の石組遺構とほぼ同じ標高であり26.92～27mを測る。地主の方の話では岩陰部分は耕作時には室として利用し、それ以前は地下水が豊富でその水を利用して岩陰で紙を漉いていたそうである。床面に敷かれている粘土は還元された状態で検出されたことから、当時水を溜めていた事によるものと思われる。

石組遺構内部からは図示した近現代の陶磁器、瓦が出土した。199は磁器皿であり、内面に矢車状の矢羽根の間に六文字の吉祥句を交互に配した文様が呉須により型紙刷りされる。200は磁器小杯であり、内面見込みに濃い呉須により草花風の文様が施される。201は磁器皿であり、内面に呉須により「壽」のくずし文字が描かれる。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、墨書で落書きの痕が認められる。202・203は磁器の重鉢で外面に牡丹文が朱色、青色で施される。204は軒平棧瓦であり、瓦当部分には中心に巴文、二転唐草が配される。額には「西政」の刻印が施される。

④ピット出土遺物(図4-42)

ピットはⅢ区全体で181個を検出した。中でもⅢ③区に集中しており、遺物が出土したピットは51個である。弥生時代のピットが36個、古代のピットが5個、その他が近現代のピットにあたる。遺物は破片が多く、実測が可能な遺物は少量しか出土しなかった。205～207は弥生土器の甕底部片である。205はP21から出土した。平底でナゲ調整が施される。206はP19から出土した。平底で内面ヘラケズリ、外面はハケ調整の一部が認められる。207の底部は剥離する。剥離痕から底部は比較的厚みのある底部になるものと思われる。208は古銭で、寛永通宝である。背文字は確認できない。

3. 検出遺構と出土遺物

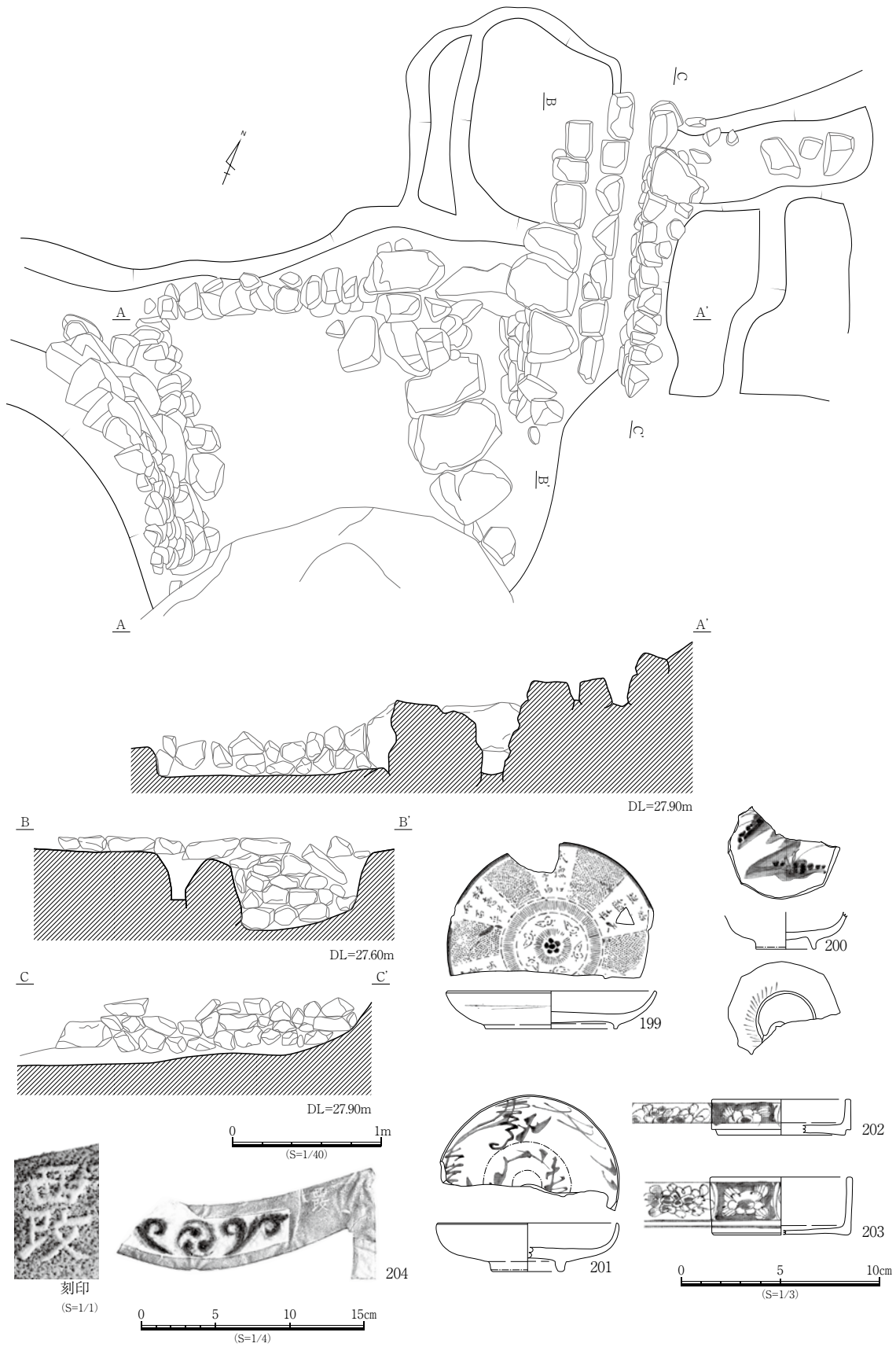


図4-41 Ⅲ区石組遺構遺構図・遺物実測図

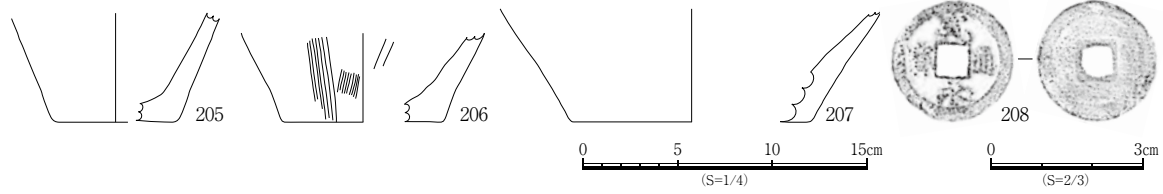


図4-42 Ⅲ区ピット遺物実測図

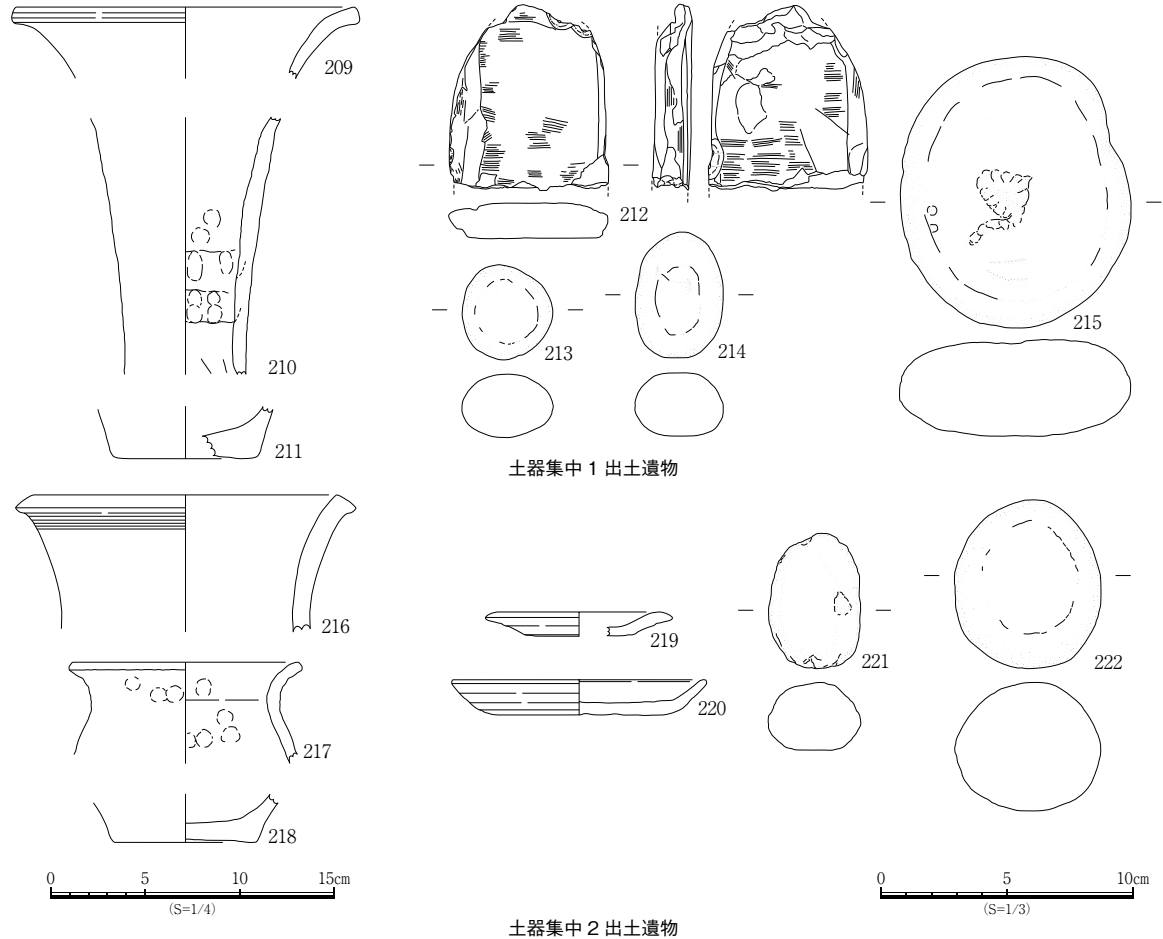


図4-43 Ⅲ区土器集中1・2遺物実測図

⑤土器集中1・2(図4-43)

Ⅲ③区中央部, 自然流路に接した緩斜面で検出した。検出面はⅢ層下であり, 標高 27.05m 前後を測る。当初は一体的な形状で検出されたが, 遺物を取り上げていくと, 集中が二つのブロックに分かれたため, 土器集中1・2として遺物の取り上げを行った。土器集中1は自然流路の肩口にあたり, 長径1.2m, 短径0.8mの範囲に弥生時代の土器・石器が集中して出土した。209~211は弥生土器である。209は壺の口縁部であり, 外反し, 端部は面を成す。ナデ調整が施される。210は長頸の頸部であり, 内面に指頭圧痕が認められる。211は底部片であり平底である。212~215は石器である。212は塩基性岩の扁平石斧であり, 刃部は欠損する。主面と側面側は丁寧に研磨される。213・214は小型の投弾である。215は叩石であり, 片面中央部に敲打痕による凹みが認められる。214は砂岩, その他は細粒花崗岩である。216~222は土器集中2から出土した。216は壺の口縁部である。頸部がやや長く立ち上がり, 口縁部は外反する。端部は上下に拡張され面を成す。外面口縁部下には櫛描直線文が施され

3. 検出遺構と出土遺物

る。217は甕であり、胴部から緩やかに外反し、口縁端部は面を成す。218は底部片であり平底である。219は古代の土師器皿であり、上部包含層の混入と考えられる。220は瓦器皿であり、土器集中1からの出土であるが上部からの混入と考えられる。221・222は投弾である。細粒花崗岩であり、小型(胴径3.0～4.0cm内外)のものと、中型(4.0～6.0cm内外)のものがみられる。

⑥石垣1・2出土遺物(図4-44)

石垣1はⅢ④区の南側に築かれた石垣である。全長6.2m、高さ1.3mの石垣で、東端部は岩に取り付く。裏込からは図示した遺物が出土した。223は尾戸焼の陶器灯明皿である。内面及び口縁部外面の一部まで灰釉が施される。貫入が認められる。224は瀬戸の陶器碗で、陶胎染付である。見込み中央には五弁花文、外面には唐草風の文様が施される。225は磁器碗であり、見込みには呉須により筆状の文様が施される。226は細粒花崗岩製の砥石であり四面に使用痕が認められる。

石垣2はⅢ③区の南側に築かれた石垣である。全長7.5m、高さ1.5mの石垣で、東端部は岩陰の石組遺構に取り付く。裏込からは図示した遺物が出土した。227は肥前産の白磁紅皿で貝殻状の型押し成形。内面と口縁部の一部のみ施釉される。口縁端部は幅の広い面取りがされる。1820年以降の製品と思われる。228は陶器皿で内面は菊花状の内型成形である。外面高台脇まで緑釉が施される。229・230は磁器小丸碗であり、229は口縁部内面に二重界線、見込みには花文が淡い呉須により描かれる。230は濃い呉須により外面に観世水文、内面には界線が施される。

⑦包含層出土遺物(図4-45～48)

Ⅲ区では弥生時代から近現代に至るまでの遺物が出土した。I・II層は、表土及び耕作土に相当し、近現代の遺物が中心に出土した。古代・弥生時代の遺物はⅢ層から出土している。Ⅲ層はⅢ③区中央部から西壁にかけて堆積しており、Ⅲ-1層では古代の遺物、Ⅲ-2層では弥生時代の遺物が出土した。調査区西部は自然流路があり、部分的に流路の堆積の影響を受けている箇所もあったため遺物の取り上げは面的にⅢ層を細分する事が困難であったためⅢ層で一括して取り上げを行った。以下

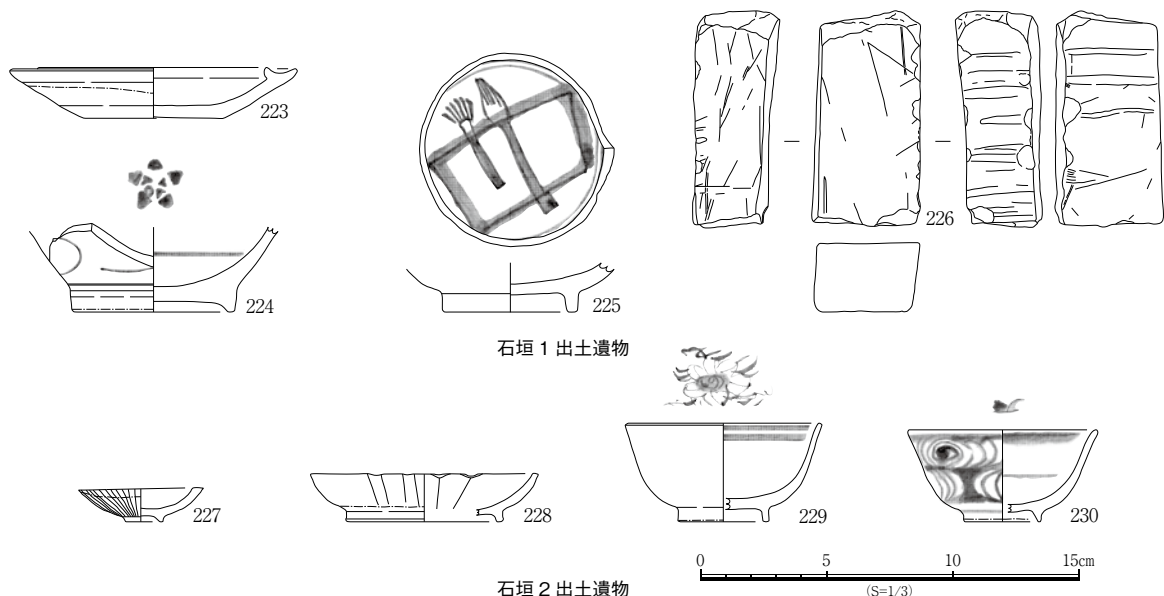


図4-44 Ⅲ区石垣1・2遺物実測図

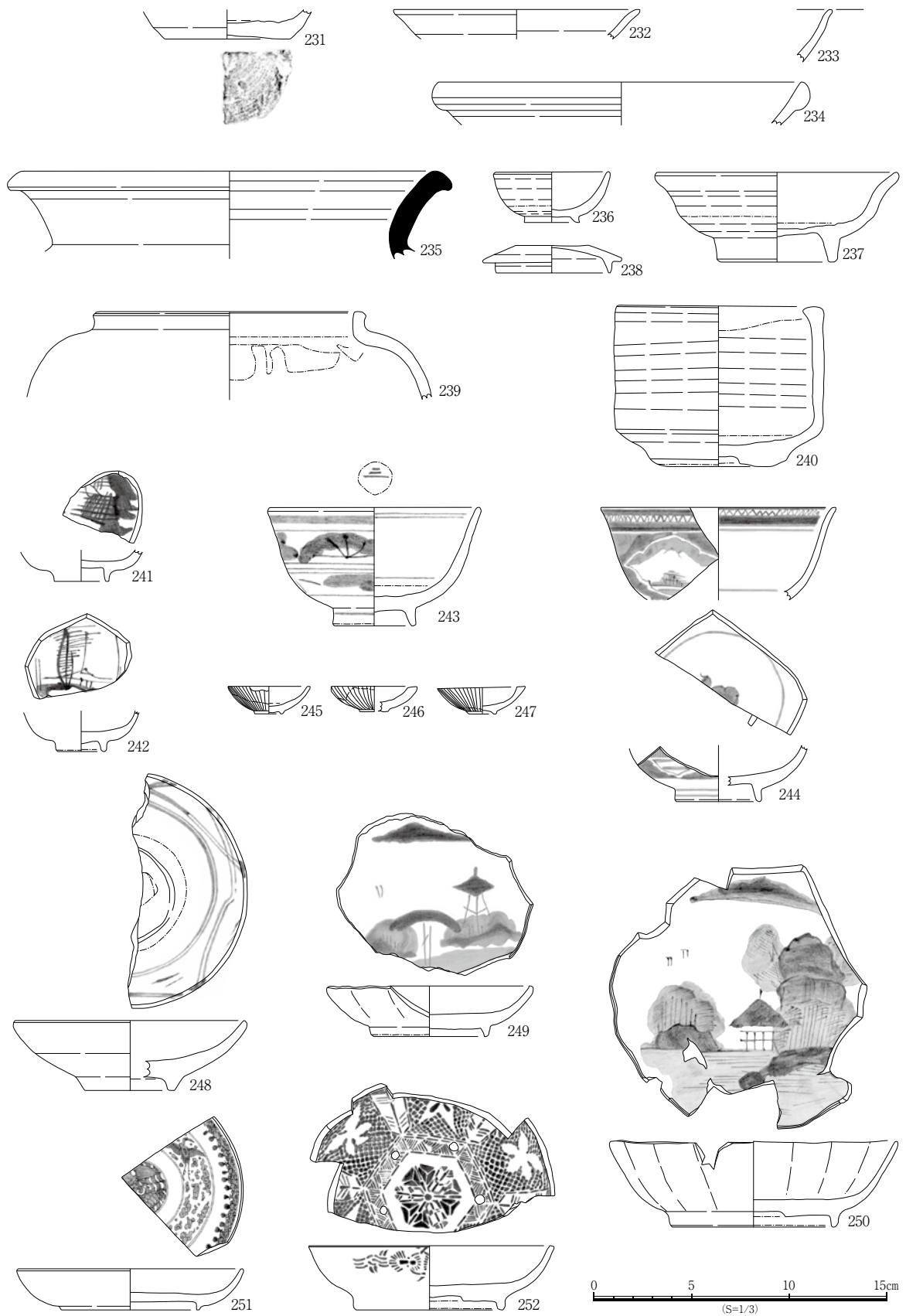


図4-45 Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層遺物実測図1

3. 検出遺構と出土遺物

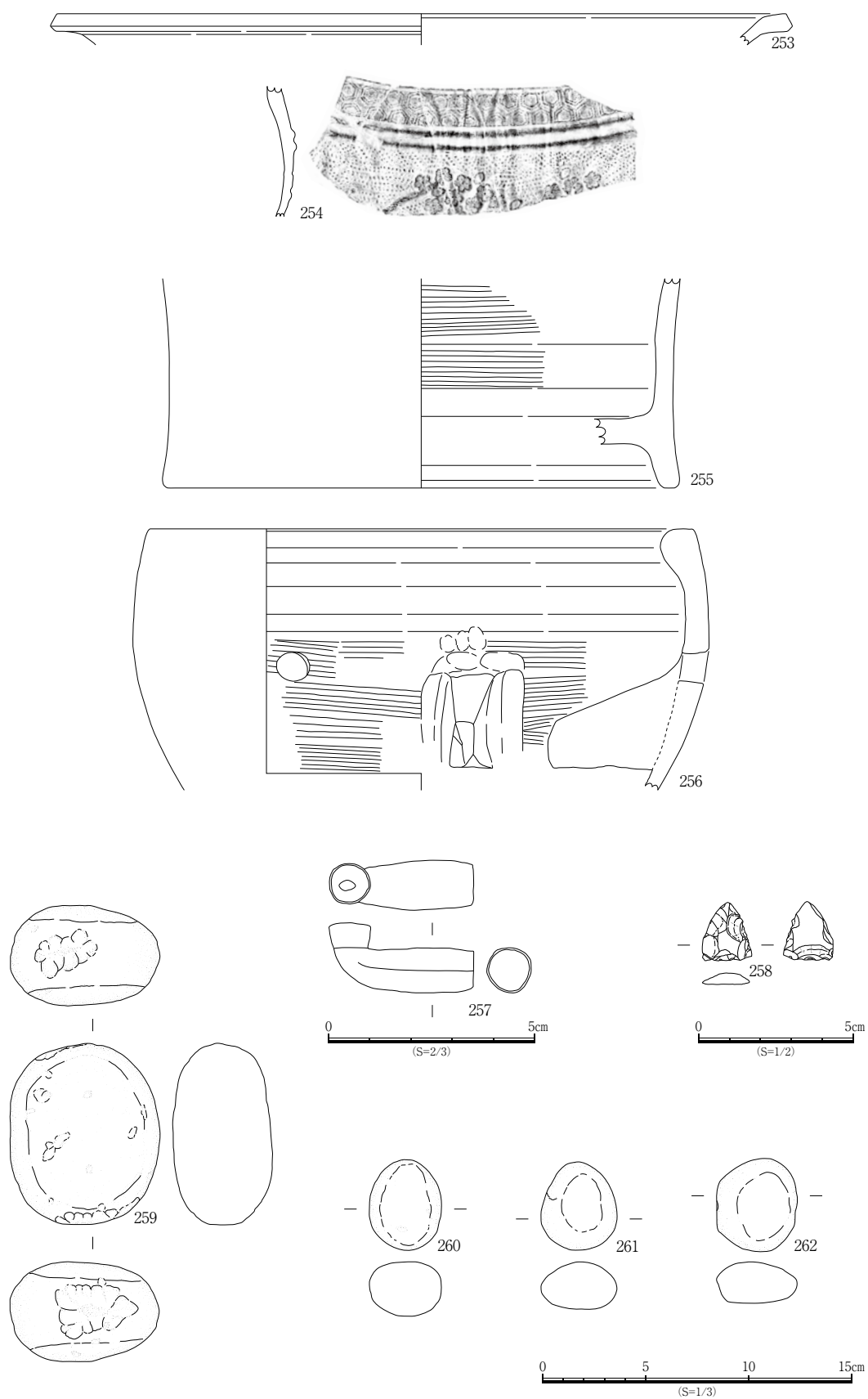


図4-46 Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層遺物実測図2

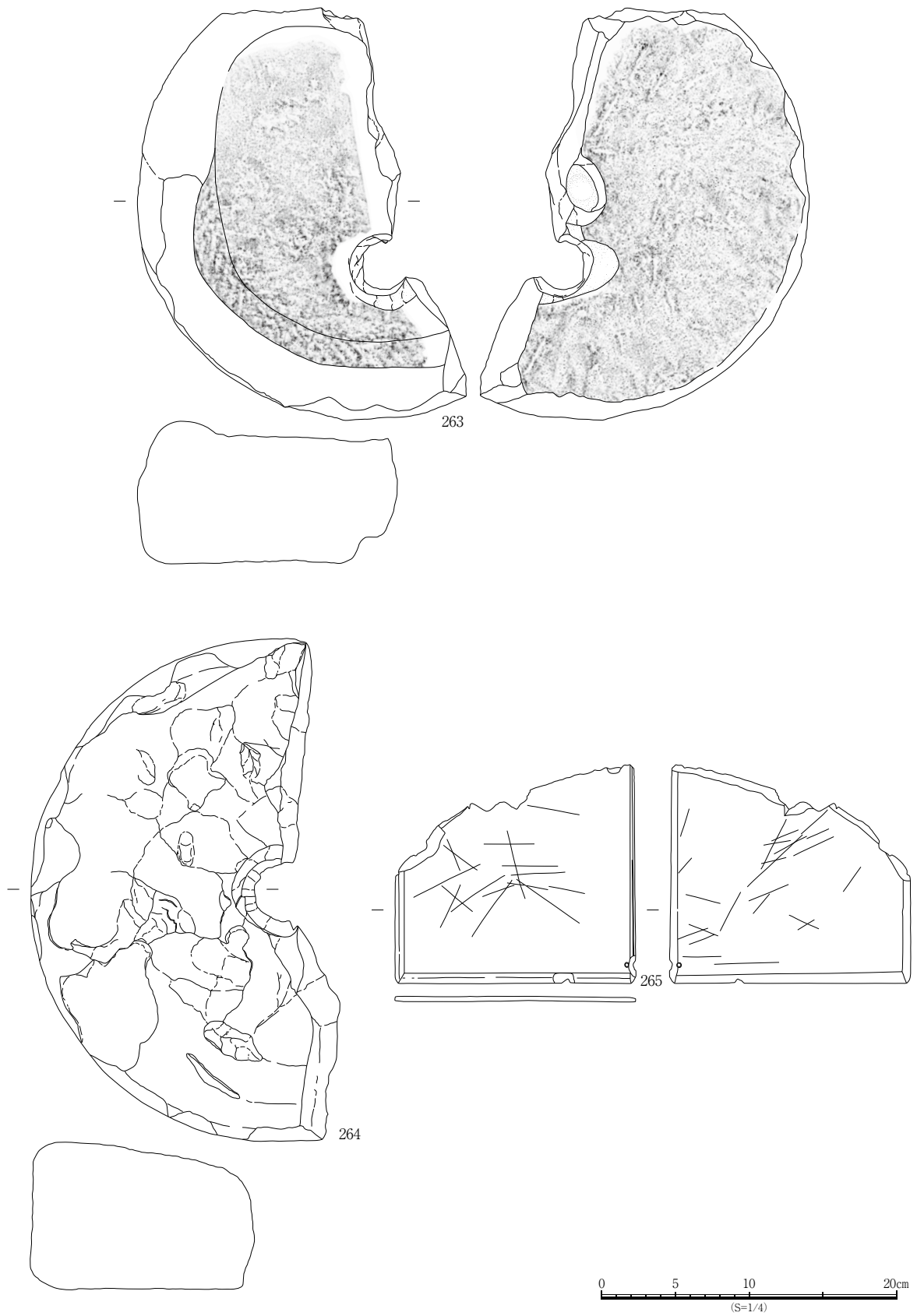


図4-47 Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層遺物実測図3

3. 検出遺構と出土遺物

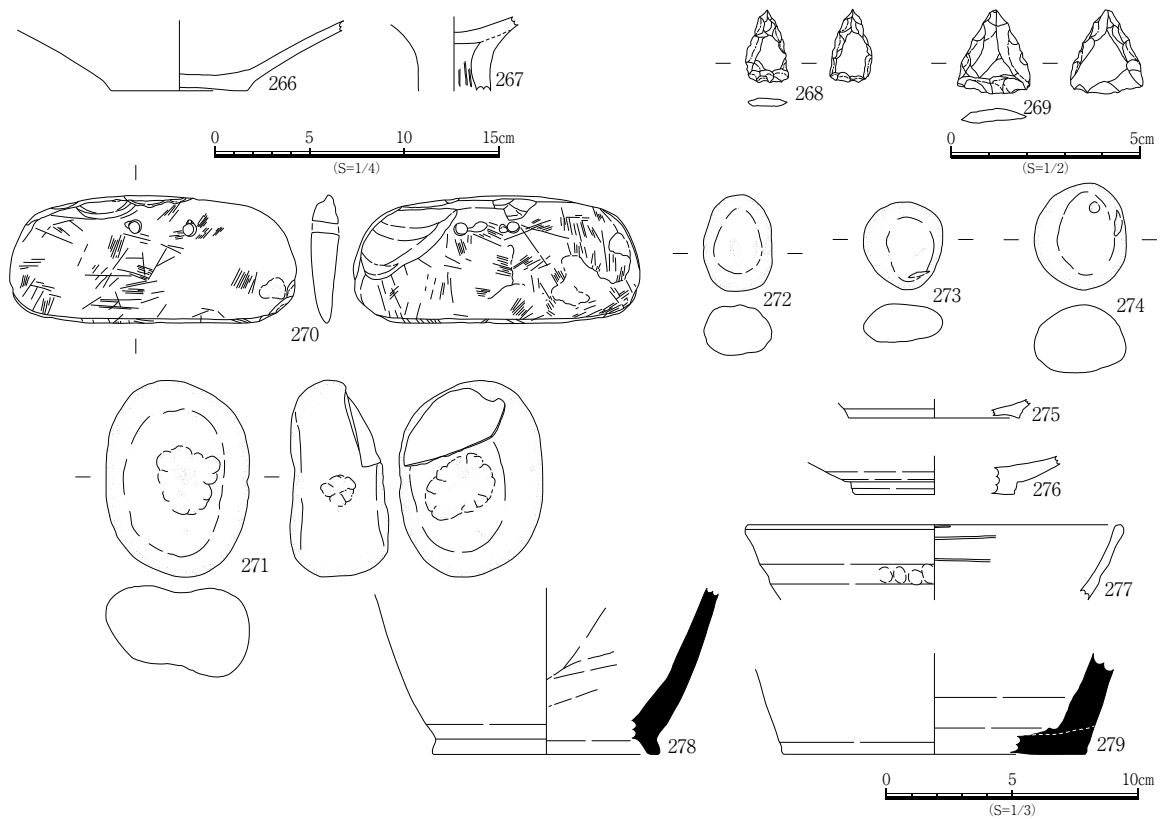


図4-48 III区III層遺物実測図

に包含層から出土した遺物について層序ごとに記載する。

231～265はI・II層から出土した遺物である。231は土師質土器杯の底部片であり、底部回転糸切りが認められる。232は京都系緑釉陶器皿の口縁部片である。端部を尖り気味に仕上げ、緑釉は薄く施釉される。233も京都系緑釉陶器の碗の口縁部片であり、口縁端部は外側に屈曲し尖り気味に仕上げる。全体的に薄く緑釉が施釉される。234は白磁碗の口縁部片である。口縁部は玉縁状を呈する。これらの遺物(231～234)はII層から出土し、古代(10世紀)から中世(11世紀)にかけてのものである。235は須恵器壺の口縁部片である。口縁端部は面を成し、やや垂下する。236は陶器小杯であり、外面体部下半以下は露胎する。237は陶器皿であり外面体部中位まで鉄釉が施される。断面三角形の高台が付き、体部中位で腰折れ、口縁部は外反する。高台脇より高台内を深く削る。内面見込は蛇ノ目釉剥ぎである。238は土師質土器の蓋である。天井部は削り平らな面を成す。239は陶器茶入れ壺であり、外面は褐釉が施される。口縁端部及び口縁内面は無釉で体部内面は施釉される。240～252は磁器である。240は香炉で、筒形を呈し、口縁部は端部を内傾し屈曲させる。外面全体と内面は口縁部の一部に施釉が施される。底部は蛇ノ目高台を呈する。内底部の一部に灰の付着が認められる。241・242は磁器小杯であり、I層から出土した。見込みに濃い呉須により簡略化した山水楼閣文様が描かれる。243は碗でI層から出土した。外面に松樹、簡略化した竹笹文が描かれる。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで中央にくずれた舟文と思われる文様を施す。244～249はII層から出土した。244の体部上半と底部は同一個体である。体部上半は口縁部が外反し、口縁部内外面に四方禰文、体部外面には花卉風の文様帯内に楼閣文が濃い呉須により施される。見込みには界線と中央に文様を配する。245～247は紅皿であり、外面は貝殻状の型押し成形、内面と口縁部付近のみ施釉する。245の口縁端部は幅が

狭く尖り気味であり、246・247は端部を面取りし幅の広い面を成す(1820～1860年)。248～252は皿である。248・249は肥前磁器であり、248の見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、二重界線、襷状の文様が施される。肥前V期。249は輪花皿で山水楼阁文が描かれ、口縁端部は口銹が施される。250～255はI層から出土した。250は輪花皿で内面に山水楼阁文が施される。口縁端部は口銹が施される。蛇ノ目凹型高台。251は転写により内面に雲鶴文、見込み中央には亀文が施される。252は型紙刷りにより内面に矢車と蜻蛉文、外面は向雀風の文様が描かれる。蛇ノ目凹型高台で、胎土はやや陶器質である。253～256は瓦質土器である。253は讃岐御厩系の焙烙鍋の口縁部片である。254～256は焜炉である。254は外面に二条の突帯が巡り、上位には亀甲文を巡らし、下位には梅樹文が配される。255は体部が筒型状に立ち上がる。内面は横方向のハケ調整、外面はミガキが施される。256の体部は内湾する。口縁部は内側に拡張し端部は平らな面を成す。体部には直径1.5cmの円孔があり内部に突起が付く。内面体部上半はナデ調整、下半はハケ調整が施される。257はI層からの出土であり、煙管である。258～265は石器である。258は平基式の石鏃でサヌカイト製である。259は石罫型をした叩石で長軸の両端部に敲打痕が認められる。260・261は砂岩、262は細粒花崗岩の小型の投弾である。263・264は石臼である。265は石板で周縁に0.8cm幅で区画線が入る。隅に直径1mmの円孔を穿つ。用途は不明である。266～279はIII層から出土した。266～274は弥生時代の遺物である。266は壺底部片であり、平底から外方に大きく開く。器壁は薄い。267は高杯であり、杯部と脚部は欠損する。内面に絞り目が認められる。268・269は平基式の石鏃である。268は頁岩製、269はサヌカイト製である。270は磨製石包丁である。直刃で二穴穿孔が認められる。頁岩製である。271は叩石で三面に敲打痕が認められる。細粒花崗岩である。272～274は小型の投弾で、272・274は細粒花崗岩、273は砂岩である。1個が29.0～55.6gを測る。275～279は古代の遺物である。III③区西壁側に堆積するIII-1層から出土した。275は畿内系黒色土器椀A類の底部片であり、断面三角形の低い高台が付く。276は緑釉陶器皿の底部片である。底部は円盤状高台で全体的に薄く緑釉が施される。277は瓦器椀であり、内面に二条の平行暗文が認められる。和泉型。278・279は須恵器壺である。278は外側に開く高台が付く。ナデ調整が施される。279は平底でナデ調整が認められる。

(6)自然流路

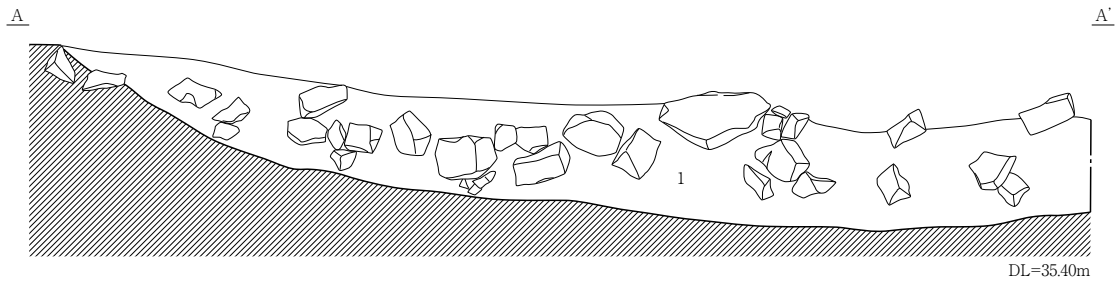
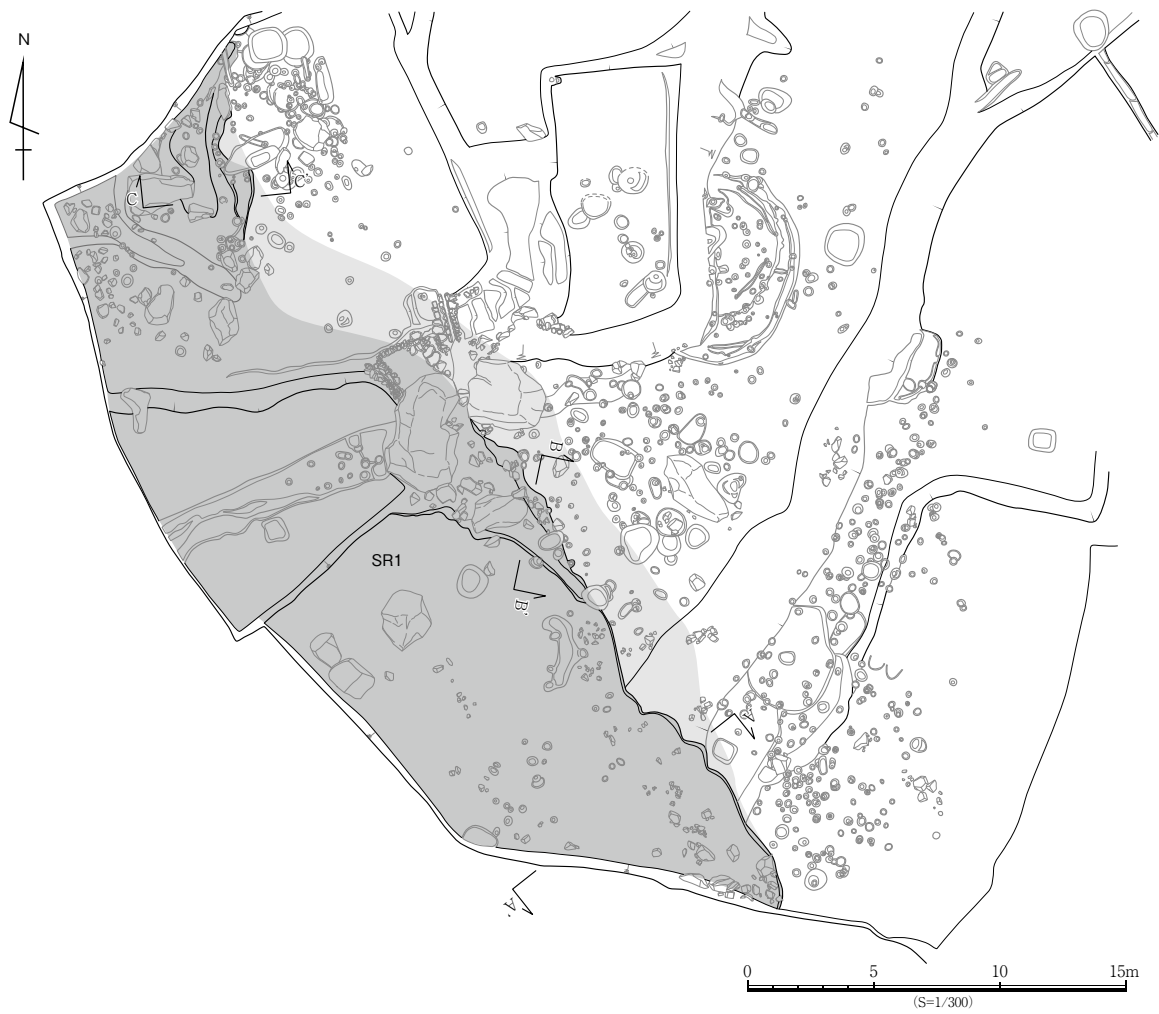
①SR1 (図4-49)

SR1は、Iw区からIII区にかけて調査区南東で検出した。全体的には灰オリーブ色シルト質砂が堆積しており5.0～10.0cmの礫、50.0～100.0cmの石が多量に混じり、弥生時代を中心とする遺物が出土した。また、SR1の縁辺には部分的に古代の遺物を含む堆積が認められた。現在、調査区の南側は農道工事の際、谷水を集水し、用水として利用するため水路が調査区に沿って設けられている。今回の調査地点は谷部に立地しており、元々は谷川が流れていた場所にあたる。今回検出したSR1(自然流路)は、水が流れていた事を示すシルト、砂、礫が堆積しており、旧谷川の一部に相当すると思われる。流路の上部は後世の開墾の影響を受けており、堆積状況については部分的な検出に止まった。また、今次調査区の遺構検出面でも流路に堆積している礫と同じ様な礫が散在している状況であった事から、流路の氾濫があったものと推測される。

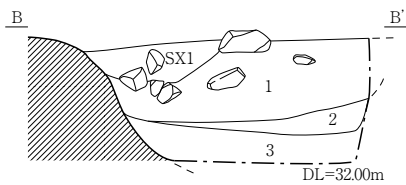
SR1出土遺物(図4-50～54)

SR1では弥生時代中期末、奈良から平安時代にかけての遺物が出土した。280～307は弥生土器で

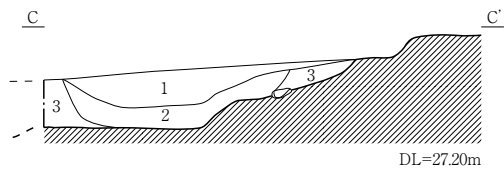
3. 検出遺構と出土遺物



1. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト質砂 (φ0.1~0.3cm礫主体, φ5.0~10.0cm角礫混, 上部に50.0~100.0cm石が流れ込んで堆積する)



1. 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト質砂 (遺物包含層)
2. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト質砂 (φ0.1~0.3cm礫主体, φ5.0~10.0cm角礫混, 上部に50.0~100.0cmの石が流れ込んで堆積する, 弥生遺物包含層)
3. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト質砂 (φ0.1~0.3cm礫主体, φ5.0~10.0cm角礫混, 上部に50.0~100.0cm石が流れ込んで堆積する)



1. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (φ10.0~15.0cm礫多く混)
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト (Fe・Mg混, 微粒砂ブロック混)
3. 褐色 (10YR4/6) 粘土質シルト

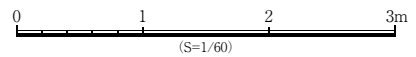


図4-49 SR1遺構図

ある。280～290は壺であり、凹線文系(286～290)と、非凹線文系(280～285)のグループに大きく分かれる。280～282は貼付口縁である。280の口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は面を成す。外面縦方向に幅の広い刻みを施し、棒状浮文状に仕上げる。直下に円形浮文と微隆起帯を配する。281の口縁部は幅の広い粘土帯を貼付し、下方に刻目を施す。282は口縁端部を尖り気味に仕上げ断面が三角形を呈する。外面に縦方向の細かな刻目を施す。283は口縁端部を外側に摘み出し下端に三角形状の深い刻目を施す。284は素口縁で口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し尖り気味に仕上げる。285の口縁部は大きく外反し、端部は面を成す。素口縁であり、口縁部の肥厚は認められない。外面には斜状の刻目が施される。286の口縁端部は内側に拡張し、内傾する面を成し、外面に凹線文を施す。287の口縁部は貼付口縁で端部を上下に拡張し、外面に凹線文を施す。288の口縁部は上方に拡張し、外面に凹線文を施す。289の口縁部は緩やかに外反し、端部を上方に拡張し、尖り気味に仕上げる。垂直な面を成し外面に凹線文を施す。290の口縁端部は下方に拡張し、外面に凹線文を施す。286～290はナデ調整を施す。291～300は甕である。291の口縁端部は外側を摘みナデ調整を施し肥厚させ、下端は微隆起帯状に仕上げる。292～294の口縁端部は上方に摘みナデ調整を施し、口唇部を尖り気味に仕上げる。下端に刻目、直下に微隆起帯を持つ。293の微隆起帯は上下に指頭圧痕が顕著である。295は胴部であり、上胴部の張りが少ない。上胴部は櫛描沈線を強く施すことにより、単位間を微隆起帯状に隆起させる。櫛描文帯の下は縦方向に長い刻目を施す。296の口縁部は大きく外反し、口径が28.0cmと広い。口縁端部はナデ調整により肥厚させ、下端に刻目を施す。直下には上下に摘み微隆起帯を造る。297・298は貼付口縁であり、端部は面を成す。外面に指頭圧痕文が連続する。298は内面にタール痕が認められる。299・300は凹線文系の甕である。299は「く」の字に外反し、端部を上方に拡張し尖り気味に仕上げる。300の口縁部は肥厚し、外面に凹線文を施す。外面に指頭圧痕がみられることから口縁部の肥厚は粘土を付け足しているものと思われる。301～306は底部片である。全て平底であり、ナデ調整が施される。305の底部は粘土を輪状にして内側から粘土を充填している。底部内面の接合部は指頭圧痕が顕著であり、外底部は粘土接合部に段が生じ、高台状を呈する。307は高杯脚である。脚柱部は外面に筋が認められる。308～310は鉄器である。308・309は方頭式の鉄鏃であり、基部は羽子板状を呈する。310は鉄斧であり、刃部は欠損する。基部は内側に折り曲げ袋状を呈する。311・312は石鏃で311はサヌカイト、312はチャート製であり、基部は欠損する。313～319は石包丁である。313～318は磨製、319は打製である。313は頁岩製であり、直背直刃である。中央に一穴穿つ。刃部は肥厚する。314は頁岩製で、弱直背直線刃である。片側は欠損する。背寄りに二穴穿つ。両主面ともに丁寧に研磨され、背部も面取りされる。315は頁岩製で弱直背弱凸刃である。両主面ともに丁寧な研磨が施される。背部際に二穴穿つ。片側は欠損する。316も弱直背弱凸刃で石質は砂岩である。背部際に穴を穿つが片側が欠損しており穴数は不明である。317は両側が欠損しており、全体形状は不明である。片岩製で穿孔は一穴認められるが穴数は不明である。裏面は平らなままである。318は欠損しており、全体形状は不明である。穿孔は一穴認められるが穴数は不明である。裏面は平らなままである。弱直背弱凸刃タイプになるものと思われ、石質は頁岩である。319は打製石包丁であり、両側に抉りが入る。石質は頁岩製である。320～322は石斧である。320は扁平片刃石斧であり、緑色岩製である。主面側は丁寧に研磨されるが、裏面は部分的な研磨で一部に自然面が残る。比較的薄い造りである。側縁部は丁寧に面取りされる。321は緑色片岩製の太型蛤刃石斧であり、形状は細長い棒状を呈する。基部は欠損する。全体的に研磨されているが、特に刃部調整は丁寧である。

4. 小結

322は緑色片岩の石斧であり、基部は窄まる。刃部は後側縁が使用により摩滅する。323は頁岩で、部分的に研磨される。石包丁の未製品と思われる。324～327は砥石である。324は三面に使用痕がみられる。325は流紋岩製で両面に使用痕が認められる。326は砂岩で四面に使用痕が認められる。327は砂岩で仕上砥である。四面を使用している。326・327は手持ちタイプと思われる。

328～333は叩石である。全て細粒花崗岩が使用されている。両面に敲打痕が認められるものが多い。334～351は投弾である。334～337・342は小型(4.0cm以下)、338～341・343は中型(4.0～10.0cm)に属する。352は石錘である。中央は敲打痕が認められ、溝状に凹む。

353～369は古代の出土遺物である。353～359は土師器杯であり、回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。平底で斜上外方に立ち上がる。359の底部は円盤状を呈し、段を持ち立ち上がる。360は皿であり、平底から段を持って外反する。口縁端部は丸みを帯びる。内底部は凹む。361～365は須恵器である。361は杯であり、体部は外方に直線的に立ち上がり、口縁端部内面は沈線状に凹む。362も杯であり、平底から内湾して立ち上がる。口縁端部は面を成す。回転ナデ調整が施され、底部は回転ヘラ切りである。363・364は蓋で、天井部は欠損する。365は高杯の脚部である。内面は縦方向のナデ調整が施される。

366は黒色土器であり、内面黒色のA類の椀である。口縁部はナデ調整により尖り気味に仕上げる。内面にヘラミガキ、外面に指頭圧痕が顕著である。367～369は緑釉陶器であり、367は皿、368・369は椀である。いずれも畿内系の緑釉陶器であり367は胎土がやや須恵器質である。368は口縁端部を尖り気味に仕上げる、いずれも施釉は薄く仕上げる。370は五輪塔の空風輪である。花崗岩質の砂岩であり、空輪と風輪の境目のホゾが丁寧に調整されている。371は石臼の上臼である。

4. 小結

今回の岩神地点の発掘調査成果の中で特筆すべきは、Ⅱ区で検出された大型の竪穴建物跡ST1を挙げる事ができる。今までのバーガ森北斜面遺跡の中で検出された竪穴建物跡の中でも最大規模であり、集落の中心的建物として位置付ける事ができる。さらに、ST1の近くで検出したSK1では炭化米、炭化種実が出土し、分析の結果、弥生時代中期末から後期前半のデータが得られ、供伴した出土遺物に時期を付与する事ができた。今回のバーガ森北斜面遺跡の調査では弥生時代の土坑の検出例は少なく、土坑の性格や高地性集落の構造を知る上で貴重な成果が得られた。

もう一つの成果は、古代(奈良から平安時代)の遺構と遺物が丘陵上で検出された事である。具体的には平安時代(10世紀代)には、バーガ森北斜面遺跡の立地する丘陵部に遺跡が確認された。出土遺物からみると土師器甕や須恵器甕など煮炊具、貯蔵具なども出土している事から恒常的に使用された場所であった事が窺える。周辺では、天神溝田遺跡や、奥名遺跡の調査で当該期の遺構と遺物が確認されており、この頃に丘陵部にも集落が広がる事が明らかとなった。県内の調査事例では、平野部に展開する古代の官衙や郡衙関連施設、寺院などの資料には恵まれているが、今回の調査のように丘陵部に立地する遺跡の性格や一般的な集落の実態についてはまだまだ解明されていない点が多く、今後の調査事例の増加を待つて検討を行いたい。

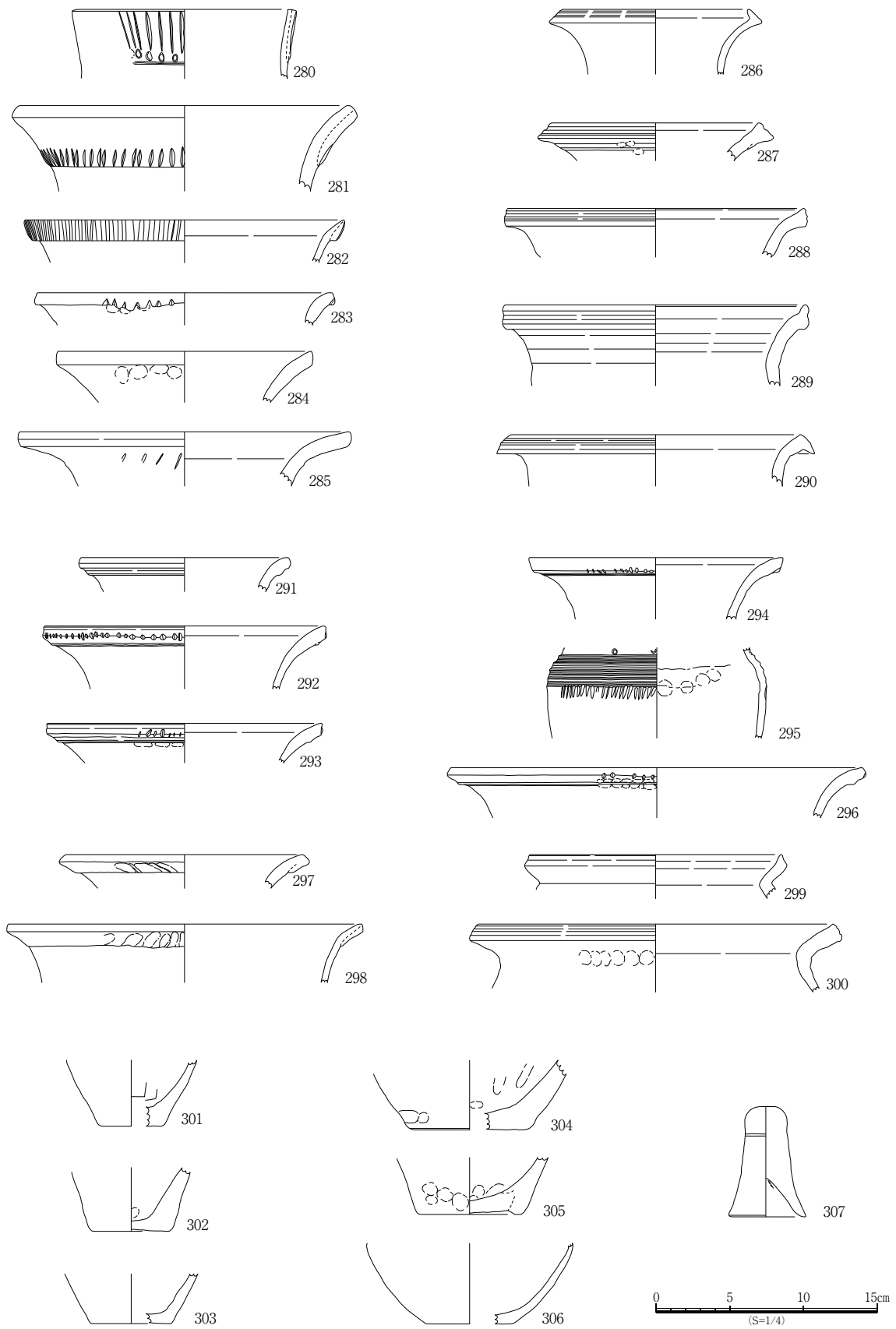


図4-50 SR1遺物実測図1

4. 小結

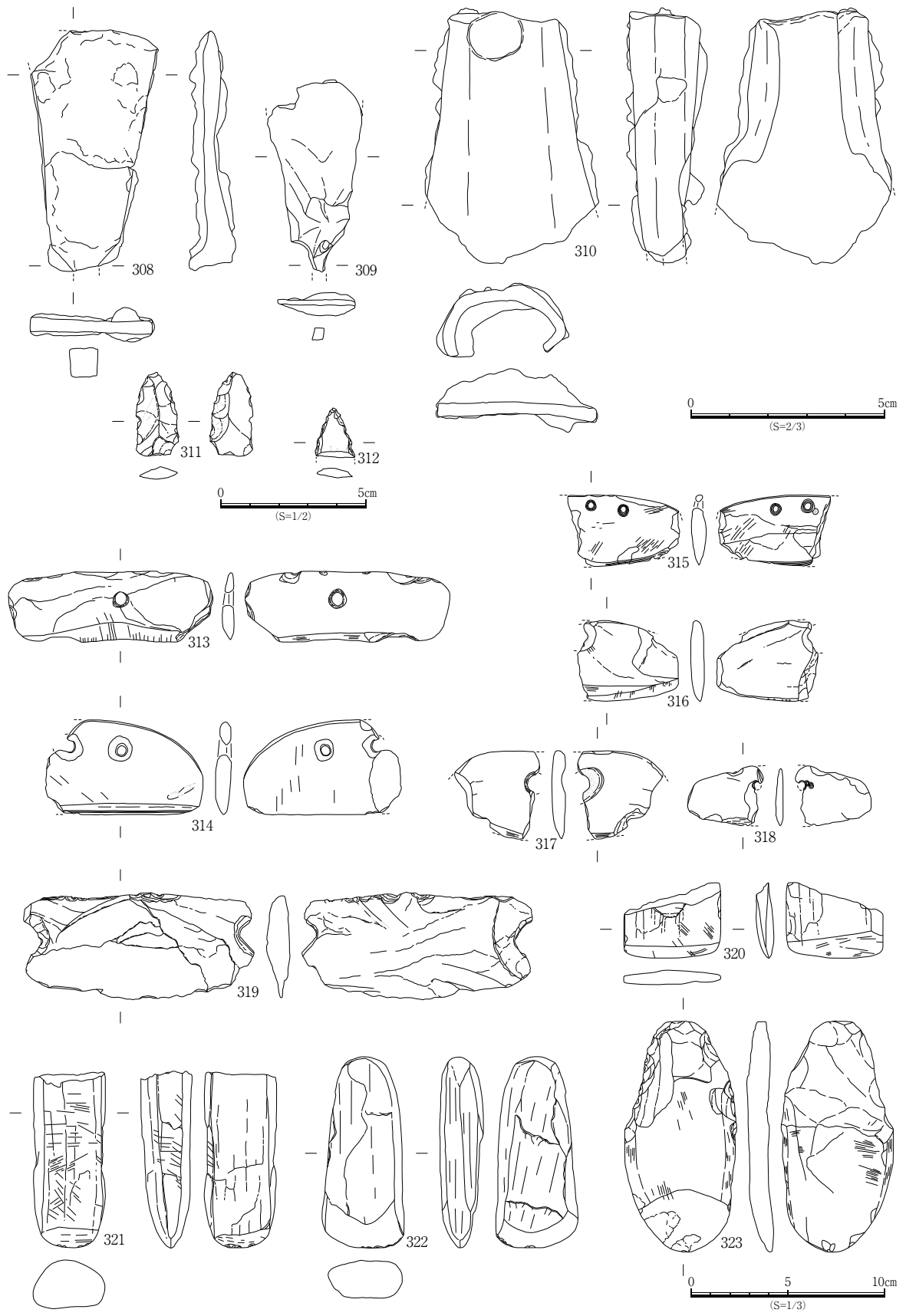


図4-51 SR1遺物実測図2

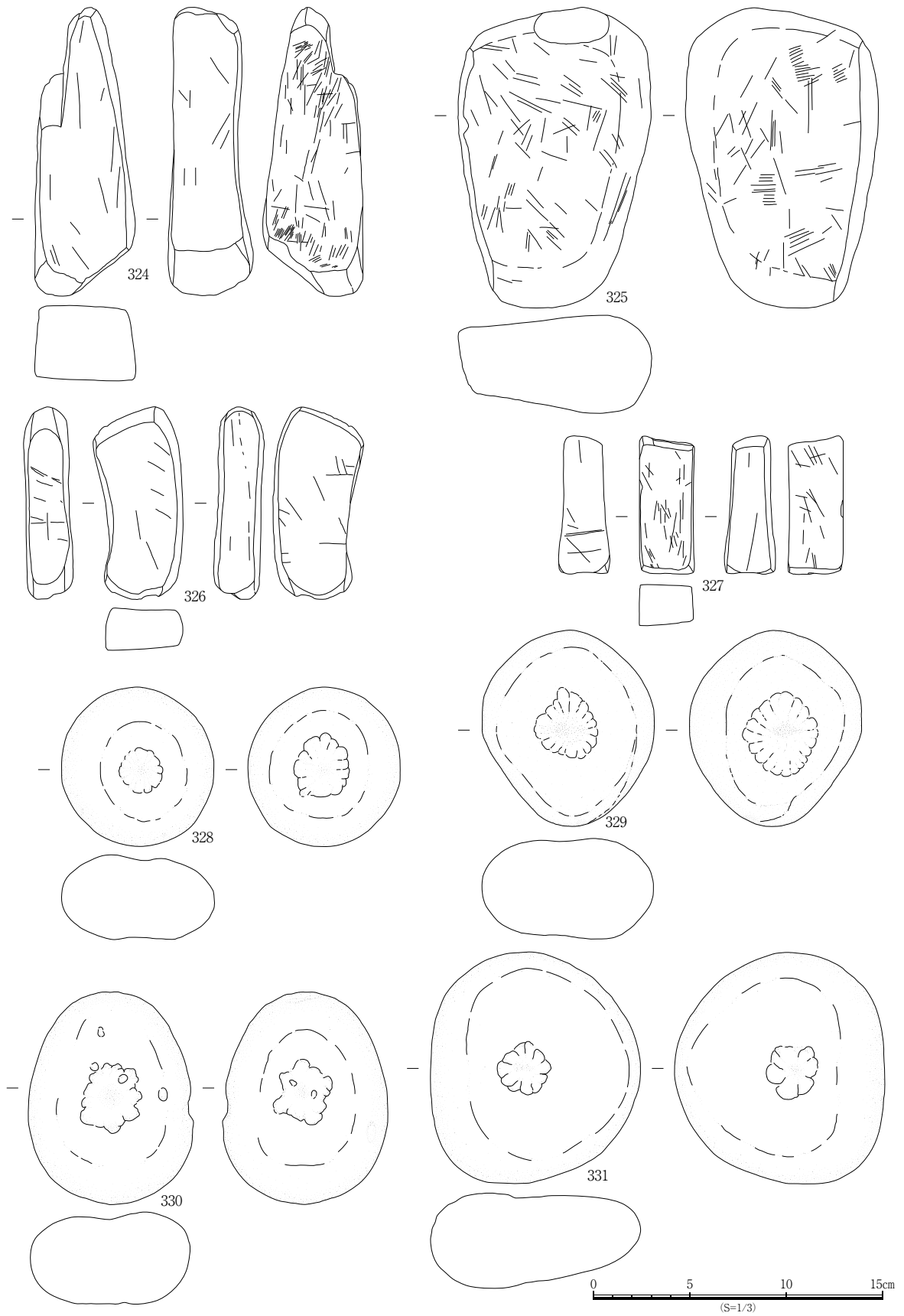


図4-52 SR1遺物実測図3

4. 小結

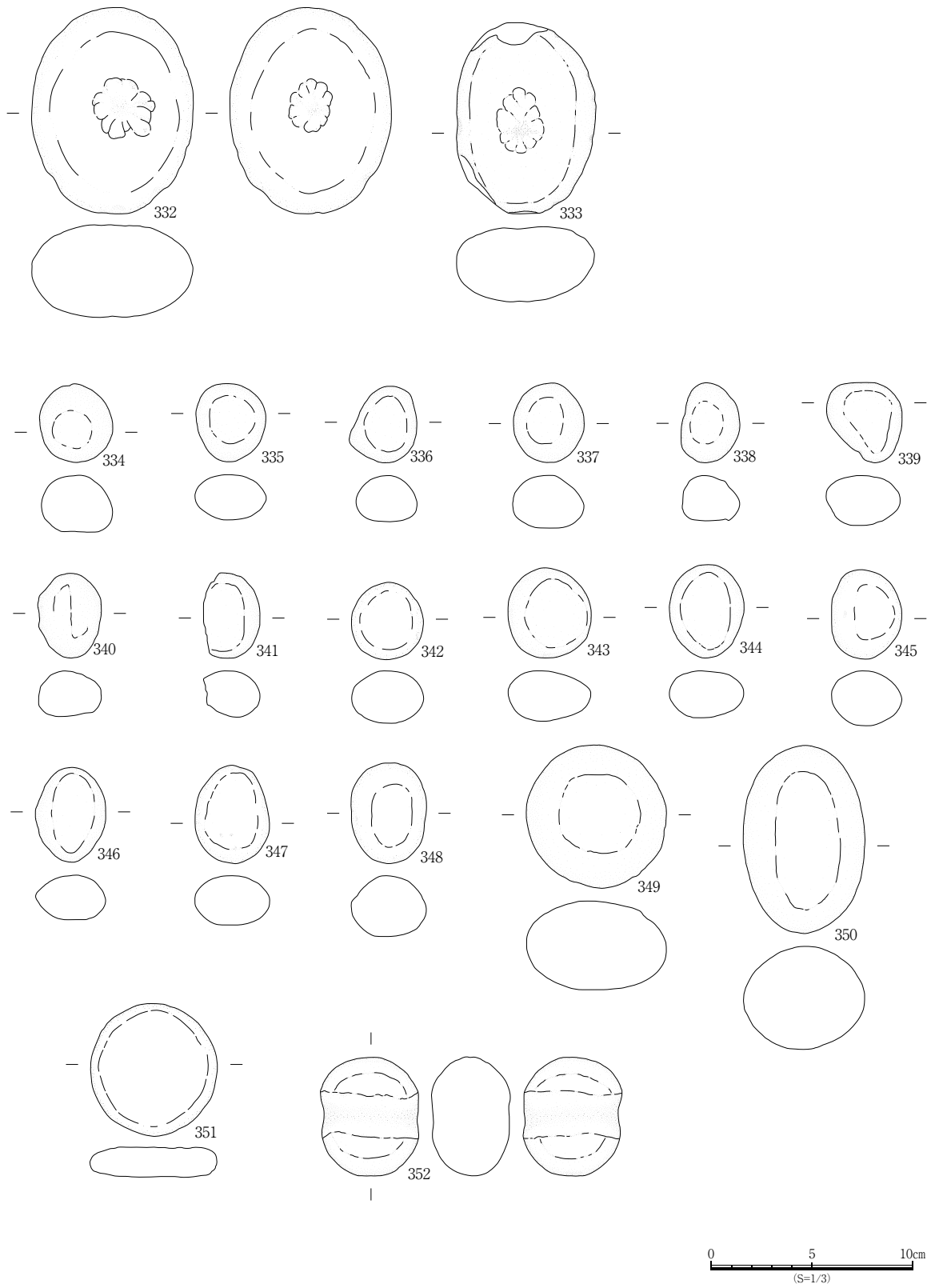


图4-53 SR1 遺物実測图4

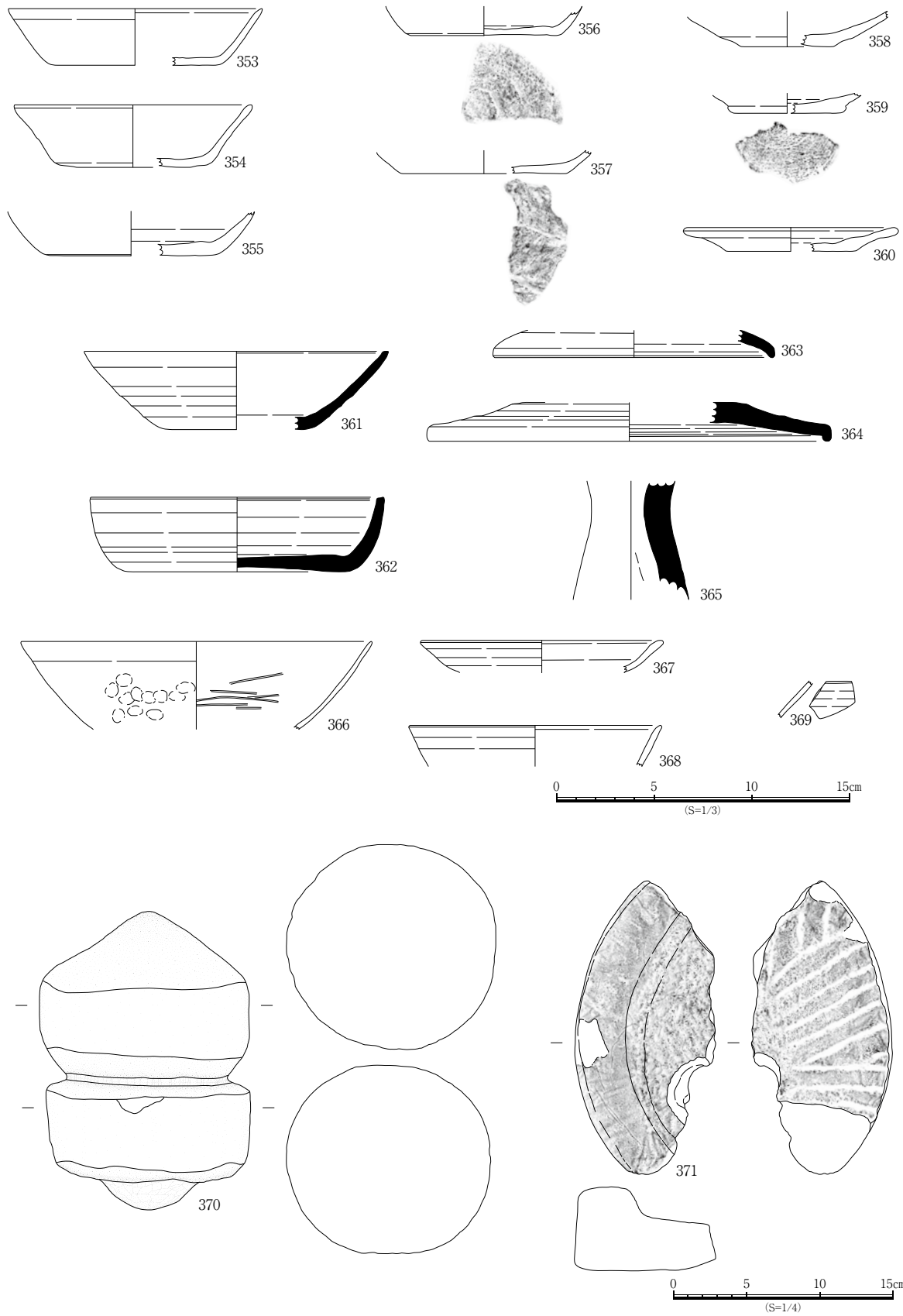


図4-54 SR1遺物実測図5

遺構計測表

遺構計測表1 ST

遺構番号 (調査区)	規模(残存長) m			平面形	主軸方向	中央ピット主軸方向	面積(残存面積) m ²
	長径	短径	深さ				
ST1 (I w区)	4.32	3.50 (2.54)	0.44～0.84	楕円形 (半円)	N - 0° - W	N - 84° - W	10.45 (9.48)
ST2 (I w区)	- (5.23)	- (1.96)	0.49～0.70	楕円形 (半円)	N - 35° - W	-	- (3.48)
ST3 (I w区)	3.11	2.60 (1.04)	0.32～0.42	隅丸方形 (半分)	N - 18° - W	-	5.40 (2.17)
ST1 (II区)	7.55	6.50 (3.65)	0.38～0.60	楕円形 (半円)	N - 2° - E	N - 57° - E	20.95 (36.15)

遺構計測表2 I w区ST1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
中央P	0.64	0.56	0.17	楕円形	弥生土器片6
P1	0.30	0.30	0.24	円形	弥生土器片2
P2	0.32	0.28	0.08	円形	弥生土器片1
P3	0.34	0.32	0.17	円形	弥生土器片1
P4	0.26	0.24	0.16	円形	-
P5	0.38	0.28	0.13	楕円形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P6	0.25	0.21	0.18	円形	-
P7	0.31	0.25	0.10	円形	-
P8	0.26	0.22	0.16	円形	-
P9	0.31	0.24	0.06	円形	-
P10	0.32	0.31	0.24	円形	-

遺構計測表3 I w区ST2ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P1	0.28	0.20	0.16	楕円形	弥生土器片2
P2	0.34	0.32	0.45	円形	弥生土器片2
P3	0.34	0.27	0.21	楕円形	-
P4	0.30	0.29	0.28	円形	-
P5	0.35	0.26	0.18	楕円形	-
P6	0.29	0.27	0.23	円形	-
P7	0.30	0.24	0.03	楕円形	-
P81	0.27	0.27	0.52	円形	弥生土器片2

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P82	0.33	0.27	0.25	楕円形	弥生土器片2
P83	0.29	0.25	0.43	円形	弥生土器片10
P84	0.38	0.35	0.33	円形	弥生土器片7
P86	0.28	0.22	0.16	楕円形	弥生土器片1
P87	0.25	0.21	0.33	円形	弥生土器片7
P88	0.30	0.25	0.48	楕円形	弥生土器片1
P89	0.30	0.29	0.11	円形	弥生土器片1
P90	0.25	0.20	0.23	円形	弥生土器片10

遺構計測表4 I w区ST3ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P1	(0.52)	0.44	0.03	楕円形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P2	(0.36)	(0.33)	0.04	円形	-

遺構計測表5 II区ST1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
中央P	(1.20)	(0.73)	0.40	楕円形	弥生土器片3
P1	0.49	0.40	0.41	楕円形	弥生土器片18
P2	0.28	0.22	0.16	楕円形	弥生土器片1・石鏃1
P3	0.19	0.18	0.32	円形	弥生土器片9
P4	0.22	0.22	0.19	円形	弥生土器片2
P5	0.19	0.18	0.05	円形	弥生土器片1
P6	0.22	0.18	0.26	円形	弥生土器片5
P7	0.31	0.20	0.09	楕円形	弥生土器片4
P8	0.31	0.26	0.36	円形	弥生土器片8
P9	0.23	(0.19)	0.36	円形	弥生土器片1
P10	0.29	0.28	0.45	円形	弥生土器片4

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P11	(0.40)	0.30	0.15	楕円形	弥生土器片1
P12	0.36	0.30	0.40	円形	弥生土器片2
P13	0.36	0.28	0.15	楕円形	弥生土器片1
P14	0.23	0.22	0.04	円形	石鏃1
P15	0.28	0.23	0.10	円形	弥生土器片8
P16	0.13	0.12	0.11	円形	弥生土器片1
P17	0.17	0.17	0.36	円形	-
P18	0.33	0.26	0.2	楕円形	弥生土器片7
P19	0.27	0.23	0.14	円形	弥生土器片1
P20	0.18	0.17	0.13	円形	弥生土器片1
P21	0.26	0.25	0.45	円形	弥生土器片2

遺構計測表6 II区ST1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P 22	0.32	0.32	0.41	円形	弥生土器片5
P 23	0.18	0.16	0.26	円形	弥生土器片5
P 24	0.18	0.18	0.09	円形	弥生土器片1
P 25	0.25	0.20	0.39	楕円形	弥生土器片1・石材剥片1
P 26	0.25	0.21	0.40	円形	弥生土器片3
P 27	0.25	0.25	0.27	円形	弥生土器片2
P 28	0.28	0.25	0.46	円形	-
P 29	0.15	0.14	0.14	円形	-
P 30	0.17	0.15	0.06	円形	-
P31	(0.28)	0.26	0.36	円形	-
P32	0.23	(0.20)	0.17	円形	-
P33	0.08	0.08	0.08	円形	-
P34	0.22	(0.21)	0.08	円形	-
P35	0.50	(0.22)	0.11	円形	-
P36	0.18	0.18	0.08	円形	-
P37	0.23	0.17	0.12	円形	-
P38	0.14	0.11	0.29	円形	-
P39	0.20	0.17	0.07	円形	-
P40	0.40	0.29	0.35	不整形	-
P41	0.40	0.09	0.42	楕円形	-
P42	0.26	0.18	0.23	円形	-
P43	0.24	0.19	0.43	円形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P44	0.28	0.22	0.09	円形	-
P45	0.18	0.17	0.08	円形	-
P46	0.16	0.14	0.13	円形	-
P47	0.22	0.21	0.24	円形	-
P48	0.13	0.12	0.04	円形	-
P49	0.08	0.07	0.06	円形	-
P50	0.11	0.10	0.09	円形	-
P51	0.12	0.12	0.11	円形	-
P52	0.10	0.09	0.10	円形	-
P53	0.16	0.16	0.09	円形	-
P54	0.27	0.21	0.21	円形	-
P55	0.17	0.14	0.10	円形	-
P56	(0.16)	(0.15)	0.08	円形	-
P57	0.18	0.16	0.28	円形	-
P58	0.14	0.14	0.06	円形	-
P59	0.18	0.13	0.06	円形	-
P60	0.17	0.12	0.05	円形	-
SK2	(1.80)	0.45～0.77	0.05～0.09	不整形	-
壁溝1	(5.36)	0.32～0.45	0.02～0.09	-	弥生土器片44・投弾1・棒状石器1・炭化物2
壁溝2	(2.40)	0.23～0.32	0.08～0.23	-	-

遺構計測表7 II区SB1

遺構名	棟方位	平面規模	総長(m)	面積(m ²)	柱間(m)	柱径(m)
SB1	N - 45° - W	桁行2間 梁行2間	3.62 3.54	12.81	1.80～1.84 1.69～1.79	-

遺構計測表8 II区SB1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P1	0.27	0.27	0.31	方形	-
P2	0.28	0.26	0.18	円形	-
P3	0.28	0.32	0.48	方形	-
P4	0.31	0.25	0.49	楕円形	-
P5	0.29	0.29	0.51	円形	土師質土器鍋片1・磁器片1

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P6	0.33	0.29	0.39	円形	土師質土器杯片1
P7	0.25	0.20	0.09	楕円形	-
P8	0.29	0.32	0.28	円形	-
P9	0.22	(0.18)	0.19	楕円形	-

遺構計測表9 II区SA1

遺構名	主軸方向	柱穴数	総長(m)	柱間(m)	柱径(m)
SA1	N - 31° - W	5	6.26	1.01～2.05	0.10～0.17

遺構計測表10 II区SA1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P1	0.27	0.27	0.31	方形	-
P2	0.28	0.26	0.18	円形	-
P3	0.28	0.32	0.48	方形	-

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物
	長径	短径	深さ		
P4	0.31	0.25	0.49	楕円形	-
P5	0.29	0.29	0.51	円形	土師質土器鍋片1・近世磁器片2

遺構計測表11 I w区SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	時代
		長径	短径	深さ			
SK1	N-41°-E	0.90	0.81	0.39	楕円形	弥生土器片1	弥生
SK2	N-8°-E	0.62	(0.47)	0.22	楕円形	弥生土器片1・土師質土器片6	中世
SK3	N-6°-E	1.44	1.33	0.25	楕円形	弥生土器片11・土師質土器片6・瓦器碗2	〃
SK4	N-45°-W	1.13	0.96	0.10	円形	須恵器片5・土師器片1・瓦器碗1	〃
SK5	N-23°-E	1.01	0.85	0.13	楕円形	弥生土器片1・須恵器片1	古代
SK6	N-82°-E	0.94	0.82	0.32	楕円形	弥生土器片25・土師器甕1・石材(サヌカイト)1	〃
SK7	N-21°-E	0.94	0.91	0.82	楕円形	弥生土器片58	弥生
SK8	N-22°-E	(0.47)	0.63	0.10	楕円形	土師器片1	古代
SK9	N-25°-E	(0.46)	0.61	0.03	楕円形	-	
SK10	-	(0.71)	(0.13)	0.16	-	弥生土器片1	弥生
SK11	N-20°-W	0.92	0.76	0.19	楕円形	弥生土器片38	〃
SK12	N-57°-W	0.79	0.76	0.24	楕円形	弥生土器片32	〃
SK13	N-57°-W	0.95	0.84	0.19	隅丸方形	-	
SK14	N-36°-E	(1.98)	1.03	0.38	長楕円形	弥生土器片48	弥生
SK15	N-81°-W	1.04	0.93	0.31	隅丸方形	-	
SK16	N-21°-W	2.32	0.47	0.61	楕円形	-	
SK19	N-48°-E	0.98	0.82	0.26	隅丸方形	-	

遺構計測表12 I e区SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	時代
		長径	短径	深さ			
SK1	N-61°-E	0.93	0.80	0.70	楕円形	土師質土器鍋1・近世陶器片1	近世
SK2	N-14°-E	0.90	0.90	0.18	方形	陶器片1	〃
SK3	N-27°-E	1.05	0.98	0.35	方形	-	
SK4	N-28°-E	0.78	0.80	0.46	方形	近世磁器片2	近世
SK5	N-82°-W	2.68	1.10	0.29	方形	土師質土器鍋2	中世
SK6	N-18°-E	0.94	0.86	0.14	方形	不明1	
SK7	N-29°-E	0.93	0.85	0.50	方形	磁器片1・青磁片1	近世
SK8	N-37°-W	1.95	1.60	0.14	楕円形	弥生土器片1	弥生

遺構計測表13 II区SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	時代
		長径	短径	深さ			
SK1	N-60°-W	1.84	1.25	0.24	隅丸長方形	弥生土器片242・石織1・叩石1・石包丁2・砥石2・炭化米・種子	弥生
SK2	N-28°-E	1.31	1.20	0.32	不整円形	土師質土器皿片2・磁器鉢1・煙管1	近世
SK3	N-44°-E	1.08	0.83	0.33	楕円形	弥生土器片1・近現代陶器片1・煙管1	近現代
SK4	N-66°-E	1.06	0.66	0.26	楕円形	弥生土器片18・土師器片36・土師質土器皿1	中世
SK5	N-1°-W	1.55	1.50	0.26	不整円形	磁器片1・陶器碗1・瓦片1	近世
SK6	N-42°-W	1.14	0.90	0.21	楕円形	-	近現代
SK7	N-37°-W	0.95	0.79	0.16	楕円形	-	
SK8	N-33°-W	0.97	(0.93)	0.17	円形	-	近現代
SK9	N-52°-W	0.79	0.51	0.18	楕円形	土師器片8	古代
SK10	N-58°-W	1.28	1.16	0.20	円形	弥生土器片1	近現代
SK11	N-59°-W	1.30	0.90	0.32	楕円形	-	
SK12	N-51°-W	1.22	1.18	0.31	円形	陶器片2	中世
SK13	N-66°-W	1.12	0.66	0.20	楕円形	弥生土器片15・炭化米	弥生

遺構計測表14 Ⅲ区SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	時代
		長径	短径	深さ			
SK1	N - 63° - E	0.94	0.85	0.15	円形	-	
SK2	N - 43° - W	0.85	0.85	0.13	円形	-	
SK3	N - 47° - W	(0.94)	0.60	0.17	隅丸方形	磁器片1	近現代
SK4	-	1.20	(0.63)	0.10	円形	近世陶器片1・石鏝1	近世
SK5	N - 62° - E	2.96	1.19	0.06	楕円形	弥生土器片1・須恵器片1	近現代
SK6	N - 62° - E	1.39	0.59	0.23	長方形	須恵器片1・磁器片1・陶器片1	近現代
SK7	N - 9° - W	1.88	0.58	0.20	長方形	土師器片2・陶器皿1	近現代
SK8	N - 67° - W	1.00	0.70	0.10	楕円形	-	近現代
SK9	N - 54° - W	0.76	0.45	0.19	楕円形	弥生土器片6	弥生
SK10	N - 19° - W	1.03	0.79	0.30	隅丸方形	弥生土器片1・須恵器片1・磁器片1・鉄釘1(6g)	近現代
SK11	N - 6° - W	(1.96)	1.04	0.08 - 0.17	不整形	土師器片1・近現代磁器片1・近現代陶器片3・瓦片3	近現代
ハンダ1	N - 12° - W	1.53	1.35	0.59	方形	磁器片4・陶器片2・瓦片1・石器4	近現代
ハンダ2	N - 17° - W	1.48	1.32	0.58	隅丸方形	陶器1・石器1	近現代
ハンダ3	-	1.18	(0.73)	0.66	円形	弥生土器片2・土師器片1・土師質土器片2・瓦質土器片1・陶器片3	近現代
ハンダ4	N - 1° - E	1.02	0.72	0.15	方形	須恵器片1・土師質土器片1・陶磁器片10・瓦質土器片1・瓦片3・鉄器2	近現代

遺構計測表15 I w区SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	時代
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 32° - W	6.25	0.45	0.15	-	

遺構計測表16 II区SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	時代
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 55° - W	0.91	0.44	0.27	弥生土器片35	弥生

遺構計測表17 Ⅲ区SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	時代
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 13° - W	1.58	0.21	0.07	-	
SD2	N - 67° - E	(9.37)	1.48 - 1.85	0.08 - 0.35	弥生土器片3・土師器片3・陶器片4・磁器片2・瓦片1・煙管2・鉄滓1(63g)	近世

遺構計測表18 I s区SX

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	時代
	長径	短径	深さ			
SX1	2.70	(2.19)	0.76	円形	弥生土器片10・叩石1	弥生
SX2	2.90	(1.78)	0.98	円形	-	

遺構計測表19 II区SX

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	時代
	長径	短径	深さ			
SX1	2.31	1.46	0.35	不整形	弥生土器片44・土師器片58・砥石1	古代
SX2	2.87	0.66	0.20	不整形	弥生土器片2	弥生
SX3	3.96	0.26	0.66	不整形	弥生土器片1・土師質土器片15・白磁(E類)1・陶器碗1	中世

遺物觀察表

凡例

1. 遺物観察表の法量は、基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については()で記載する。
その他、器形により必要なものは直接項目に付け加えた。
土錘については全長・全幅・孔径の順に記載した。
2. 色調については『新版標準土色帳』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
砂粒の大きさはS:1mm未満 M:1~2mm L:2mm以上である。
4. その他、備考には器種の分類、年代のわかるものについて記載した。
5. 中世の土器・陶磁器の分類については『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社1995, 貿易陶磁器の分類については『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁器』1993を参照した。
6. 石器の分類については以下の通りとする。
石鏃 I:凹基式(A:大型・B:小型) II:平基式
III:凸基式(A:円基式に近い・B:基部が窄まり尖頭器状) IV:茎を作出したもの
石包丁 I:打製 II:局部磨製 III:磨製
A:無側
B1:有側無抉・B2:有側有抉(1:直背弧刃・2:直背直線刃・3:弱直背弱凸刃・4:弱直背直線刃)
石斧 I:大型蛤刃石斧(A:断面形が扁平楕円形・B:断面形がAより厚みがある楕円形・C:断面形が円筒形に近い)
II:扁平片刃石斧(A:短冊形・B:分銅形もしくは台形・C:逆台形に近い)
III:小型石斧(A:平面形は楕円形・台形状、断面は扁平・B:平面形は棒状で、断面はやや丸味をもつ)
砥石 I:手持ち型 II:据置型 III:その他
叩石 I:河原石をそのまま利用したもの(A:両面を中心に敲打痕が残る・B:両面及び両側面に敲打痕が残る)
II:河原石を打ち割った剥片を利用したもの
投弾 I:4cm以下 II:4~10cm III:10cm以上

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
1	I w区	ST1	弥生土器 甕	(17.6)	(42)	-	にぶい黄橙色 灰色	チャート (S)	断面四角形の貼付口縁。	弥生
2	〃	〃	〃	(26.0)	(25)	-	黄灰色 黒褐色 黄灰色	チャート (M)	口縁部は尖り気味に仕上げる。	〃
3	〃	〃	〃	(16.4)	(20)	-	明黄褐色 にぶい黄橙色 灰色	チャート (L)	口縁端部は尖り気味に仕上げる。貼付口縁に縦方向の刻目が施される。	〃
4	〃	〃	〃	(18.0)	(18)	-	にぶい黄橙色 青灰色	チャート・ 石英(M)	断面三角形の口縁部。口縁端部は上方に摘み、尖り気味に仕上げる。口縁外面は縦方向の刻目と櫛描による沈線。	〃
5	〃	〃	〃	(17.0)	(21)	-	橙色	チャート (M)	口縁部は外反し、丸く収める。ナデ調整が施される。	〃
6	〃	〃	〃	(18.6)	(13)	-	にぶい黄橙色	- (S)	口縁端部を上方に拡張する。凹線文が施される。	〃
7	〃	〃	〃	-	(3.5)	-	にぶい橙色 灰色	チャート (M)	頸部下に粘土帯を貼付し、刻目が施される。器壁薄い。	〃
8	〃	〃	〃	-	(3.4)	-	にぶい黄褐色 褐色 灰白色	-	肩部に櫛描による沈線、その下に縦方向の刻目が施される。	〃
9	〃	〃	高杯	-	(3.1)	(12.0)	にぶい橙色 にぶい黄褐色 褐色	チャート (M)	凹線文系高杯脚部。	〃
10	〃	ST2	壺	(6.6)	(3.6)	-	明赤褐色 橙色	チャート (M)		〃
11	〃	〃	〃	(20.6)	(5.9)	-	にぶい黄褐色 灰色	チャート・ 石英(S)	口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。外面は縦方向の刻目。頸部は横方向の櫛描、楕円形で中央部を摘んだ粘土を貼付けする。	〃
12	〃	〃	〃	(25.8)	(3.7)	-	にぶい黄色 にぶい橙色 灰色	チャート (L)	貼付口縁。断面長方形の扁平な口縁。外面は縦、斜位の刻目が施される。	〃
13	〃	〃	〃	(18.2)	(3.3)	-	橙色 にぶい黄褐色	チャート (M)	口縁部は外反し、端部は上方に摘み、ナデ調整が施され面を成す。	〃
14	〃	〃	甕	(16.0)	(2.9)	-	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色 灰色	チャート (M)	断面長方形の貼付口縁。外面刻目が施される。	〃
15	〃	〃	〃	(20.0)	(4.0)	-	にぶい黄褐色 黒色	チャート (L)	貼付口縁。外面に縦方向の細かい刻目、口縁下端及び頸部に櫛描。	〃
16	〃	〃	〃	(19.4)	(2.5)	-	浅黄色 黄灰色 黒色	チャート (S)	貼付口縁。口縁端部は面取りされ刻目が施される。	〃
17	〃	〃	〃	(16.0)	(4.9)	-	にぶい褐色 にぶい赤褐色 黒色	チャート (L)	貼付口縁。口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面に縦方向の刻目が施される。	〃
18	〃	〃	〃	(20.0)	(4.0)	-	にぶい黄褐色 灰黄褐色 灰色	チャート (M)	貼付口縁。口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。下端に刻目、直下にナデ調整により仕上げた微隆起帯が付く。	〃
19	〃	〃	〃	(17.8)	(3.3)	-	にぶい黄色 黒褐色 黄灰色	- (M)	断面三角形の貼付口縁。外面縦方向の刻目が施される。	〃
20	〃	〃	〃	(10.6)	(1.9)	-	灰黄褐色 暗灰黄色 灰色	-	小型甕。口縁部は短く外反する。端部は丸く収める。内面はナデ調整が施される。	〃
21	〃	〃	〃	(12.0)	(2.2)	-	にぶい黄褐色	チャート (L)	小型甕。口縁部は外反し、端部は外側に摘む。ナデ調整が施される。	〃
22	〃	〃	〃	(15.4)	(6.9)	-	にぶい黄褐色 灰色	チャート (L)	無文。口縁部は外反する。	〃
23	〃	〃	〃	(18.4)	(5.7)	-	にぶい黄褐色 橙色 灰色	チャート (L)	口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は上方に摘みナデ調整が施される。	〃
24	〃	〃	〃	(12.8)	(7.1)	-	橙色	チャート・ 石英(M)	凹線文系。口縁端部を上方に摘み上げる。胴部内面は指頭圧痕と縦方向のナデ調整。ヘラケズリが一部見られる。外面も縦方向のナデ調整。	〃
25	〃	P84	壺	(17.0)	(2.9)	-	橙色 灰白色	チャート・ 石英(M)	凹線文。口縁外面に三条の凹線が巡る。IV様式。	〃

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
26	I w区	ST2	弥生土器 甕	-	(8.5)	-	橙色 にぶい赤褐色 黒褐色	チャート (M)	頸部に爪状圧痕。胴部上位に横方向の縞、縦方向の刻 目が施される。	弥生
27	〃	〃	〃 底部	(9.9)	-	7.6	にぶい黄橙色 〃 褐灰色	チャート (L)	底部中央部が凹む。外面の一部にナデ調整が施される。	〃
28	〃	〃	〃 〃	-	(5.8)	(5.6)	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート (L)	底部から段を持って立ち上がる。外面ハケ調整、内面ナ デ調整が施される。	〃
29	〃	〃	〃 〃	-	(6.1)	7.6	橙色 〃 黄灰色	チャート (L)	平底から段を持って立ち上がる。	〃
30	〃	〃	〃 〃	-	(3.7)	(6.2)	灰オリーブ色 にぶい黄橙色 灰オリーブ色	チャート・ 石英(M)	平底。底部脇は指頭圧痕が施される。	〃
31	〃	〃	〃 〃	-	(2.4)	7.6	にぶい黄橙色 浅黄色 黒褐色	チャート (M)		〃
32	〃	〃	〃 〃	-	(5.0)	(8.0)	灰色 灰黄褐色 灰色	チャート (L)	平底から段を持って立ち上がる。ナデ調整が施される。	〃
33	〃	〃	〃 高杯	(21.6)	(4.2)	-	にぶい黄橙色 にぶい 灰色	チャート (L)	在地系高杯。内湾し立ち上がり、口縁端部は僅かに屈曲 し水平な面取り。外面は横位の沈線。浮文は円形で中央 を竹管で押し下ドーナツ状、2個一対で配される。	〃
34	〃	〃	〃 〃	(20.8)	(2.8)	-	橙色 〃 黄灰色	チャート (L)	凹線文。口縁端部は面を成す。	〃
35	〃	〃	〃 〃	(19.6)	(3.0)	-	にぶい黄橙色 橙色 灰色	チャート (L)	口縁部は外反し端部は面を成す。外面は指頭圧痕、内面 は横方向のハケ調整が施される。内傾接合。	〃
36	〃	P84	〃 〃	(23.6)	(3.8)	-	にぶい黄褐色 にぶい橙色 灰色	チャート・ 石英(M)	焼成不良。口縁部は外反し、端部は面を成す。	〃
37	〃	ST2	〃 〃	-	(3.4)	-	明黄褐色 〃 褐灰色	チャート (L)	口縁部欠損。内面一部に横方向のハケ調整が施される。	〃
38	〃	〃	〃 〃	-	(2.2)	(11.4)	黄灰色 〃 〃	チャート (M)	裾部は上下に拡張する。外面中央は凹む。脚部縞描沈線、 裾部には刻目が連続する。	〃
46	〃	SK3	瓦器 椀	-	(1.7)	-	オリーブ灰色 暗オリーブ灰色 灰白色	-	高台以下欠損。内面ヘラミガキが施される。	古代
47	〃	P33	弥生土器 壺	(8.2)	(5.9)	-	にぶい黄褐色 明黄褐色 灰色	チャート (S)	広口壺。ナデ調整が施される。	弥生
48	〃	〃	〃 〃	(13.8)	(4.2)	-	灰白色 浅黄色 灰白色	チャート (M)	口縁部はやや肥厚し端部は上方に摘む。	〃
49	〃	SK4	須恵器 皿	-	(1.3)	(10.0)	灰黄色 灰白色 〃	-	焼成不良。	古代
50	〃	〃	〃 〃	-	(1.0)	(9.6)	灰白色 〃 〃	- (S)	焼成不良。	〃
51	〃	〃	瓦器 椀	-	(1.5)	(4.5)	灰白色 灰色 灰白色	- (S)	和泉型。見込みに斜格子状の暗文。高台貼付。焼成不良。	〃
52	〃	SK11	弥生土器 甕	-	(3.3)	(8.0)	にぶい黄褐色 〃 褐灰色	チャート・ 石英(L)	平底。ナデ調整が施される。	弥生
53	〃	〃	〃 〃	-	(4.5)	7.2	にぶい黄褐色 〃 黄灰色	チャート・ 石英(L)	平底。外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。タール 痕有り。	〃
54	〃	SK14	〃 〃	(15.0)	(1.8)	-	にぶい橙色 灰褐色 褐灰色	-	凹線文系。口縁端部は上下に拡張する。外面の一部にハ ケ調整が施される。タール痕有り。	〃
55	〃	〃	〃 〃	(23.8)	(4.2)	-	浅黄色 〃 灰色	- (L)	口縁端部は尖り気味に仕上げる。口縁外面は刻目が施 され、ナデによる微隆起帯が付く。	〃
56	〃	P80	〃 壺	(20.0)	(3.7)	-	にぶい黄褐色 〃 〃	- (L)	口縁部は外反しやや肥厚する。端部は面を成し上方に 摘みナデ調整を施す。	〃
57	〃	P47	〃 〃	(16.8)	(5.6)	-	褐灰色 灰黄褐色 褐灰色	チャート・ 石英(L)	口縁部は外反し、端部は上方に摘み上げ尖り気味に仕 上げる。	〃

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
58	I w区	P47	弥生土器 壺	-	(44)	(6.6)	明黄褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(M)	平底。ナデ調整が施される。	弥生
59	〃	P67	〃 甕	(14.2)	(3.5)	-	にぶい褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(L)	口縁部は緩やかに外反する。ナデ調整が施される。	〃
60	〃	P65	〃 〃	14.5	(10.2)	-	明黄褐色 にぶい褐色 褐灰色	チャート・ 石英(L)	胴部から口縁部にかけて間延びする。口縁端部は僅かに下方に拡張。外面ハケ、内面ナデ調整。後期中葉。	〃
61	〃	P50	〃 蓋	-	(22)	(12.0)	にぶい黄橙色 にぶい橙色 灰色	チャート・ 石英(L)	口縁端部外面刻目が施される。口縁内面はナデにより凹む。	〃
64	〃	P63	須恵器 甕	(15.8)	(2.2)	-	灰色 〃 〃	-	ナデ調整。	古代
65	〃	Ⅲ-2 層	弥生土器 壺	(16.0)	(4.2)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート (L)	断面四角形の貼付口縁。ナデ調整が施される。	弥生
66	〃	〃	〃 〃	(24.4)	(4.1)	-	橙色 〃 〃	チャート (L)	焼成不良。断面四角形の口縁部、端部は面を成す。外面に斜めの刻目、下端に一条の沈線が施される。	〃
67	〃	〃	〃 〃	(21.4)	(3.9)	-	にぶい赤褐色 明赤褐色 灰色	チャート・ 石英(L)	口縁部は外側に粘土帯を貼付し、端部は水平な面を成し外側は下方にやや垂下する。別府湾型か。壺B2類。	〃
68	〃	〃	〃 甕	(20.0)	(4.6)	-	にぶい黄褐色 〃 〃	チャート (M)	口縁部はラッパ状に開く。貼付口縁。ナデ調整が施される。	〃
69	〃	〃	〃 底部	-	(3.5)	(5.2)	橙色 にぶい黄褐色 褐灰色	チャート・ 石英(L)		〃
70	〃	〃	〃 〃	-	(2.2)	(6.6)	にぶい黄褐色 〃 黒褐色	チャート・ 石英(M)		〃
71	〃	Ⅲ-1 層	土師質土器 杯	(13.0)	(2.4)	-	橙色 〃 〃	-	回転ナデ調整が施される。口縁端部は肥厚する。	中世
72	〃	〃	〃 〃	-	(1.4)	6.4	にぶい橙色 〃 浅黄褐色	-	内面にタール痕有り。底部回転系切り。	〃
73	〃	〃	〃 〃	(6.4)	(1.0)	(4.2)	にぶい黄褐色 〃 〃	- (S)	底部回転系切り。	〃
74	〃	〃	〃 〃	-	(1.8)	(4.4)	橙色 〃 〃	-	焼成不良。ロクロ成形。底部回転系切り。	〃
75	〃	〃	瓦器 碗	-	(1.5)	(5.0)	灰色 〃 灰白色	-	焼成不良。断面三角形の低い高台が付く。	〃
76	〃	〃	土師器 甕	(18.4)	(5.4)	-	浅黄褐色 にぶい黄褐色 暗灰色・灰白色	チャート (L)	在地系。口縁部は外反し端部は上方に尖り気味に仕上げる。胴部外面及び内面胴部上位に横方向のハケ調整が施される。	10c後
77	〃	〃	〃 〃	(24.6)	(5.8)	-	褐色 〃 〃	雲母 (M)	口縁部は「く」の字に外反し端部は上方に拡張する。ハケ調整が施される。	〃
78	〃	Ⅱ層	青磁 碗	(15.0)	(4.4)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	-	鎚蓮弁文。	中世
79	〃	Ⅲ-1層	土製品 土錘	3.2	1.2	1.2	-	-	重量3.7g, 孔径0.4cm。	
83	I e区	P5	土師質土器 杯	(13.0)	2.9	(5.4)	にぶい橙色 〃 〃	- (S)	ベタ底から斜上外方に開く。底部は回転系切り。15c。	〃
84	〃	P8	〃 〃	-	(2.0)	5.2	にぶい黄褐色 〃 〃	- (S)	底部回転系切り。	〃
88	〃	Ⅱ層	須恵器 皿	(15.4)	1.4	(10.4)	灰色 〃 〃	- (S)	回転ナデ調整が施される。	古代
89	〃	〃	土師質土器 杯	-	(1.6)	(6.2)	浅黄褐色 〃 〃	- (S)	円盤状高台。底部回転系切り。	中世
90	〃	〃	〃 〃	(9.8)	2.4	5.0	橙色 〃 〃	- (S)	ロクロ成形。摩耗が著しく底部切離しは不明。	〃

遺物観察表(土器)91～119

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
91	I e区	II層	土師器 甕	(21.0)	(2.3)	-	にぶい黄色 〃 オリーブ黒色	-	口縁部は短く外反し、端部は面を成す。	古代
92	〃	〃	土師質土器 羽釜	(25.0)	(6.1)	-	にぶい橙色 〃 〃	石英 (S)	口縁端部は面を成し、外面に短い鑊が付く。外面胴部上位は指頭圧痕、内面は横方向のナデ調整が施される。	中世
93	〃	〃	〃 鍋	(28.8)	(4.2)	-	にぶい黄橙色 黒褐色 にぶい黄褐色	石英 (S)	口縁端部中央は沈線状に凹み、内側がやや突出する。内面ナデ調整が施され、外面は煤付着が見られる。	〃
94	〃	I層	陶器 碗	-	(3.4)	5.4	浅黄色 〃 〃	- (S)	尾戸焼。全体的に浅黄色を呈した釉が施され、細かな貫入が入る。	近世
95	〃	〃	〃 播鉢	(24.2)	(9.9)	-	灰褐色 〃 灰色	- (M)	備前焼。ロクロ痕が顕著。口縁部は上方に拡張し、端部は上方に尖り気味に仕上げる。内面は放射状、及び斜位の条線が施される。	〃
96	〃	〃	瓦質土器 焙烙鍋	(32.9)	(2.4)	-	灰色 〃 〃	-	外型成形。内面はナデ調整。讃岐御厩系焙烙。	〃
100	I n区	〃	青磁 碗	-	(2.9)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	- (S)	細蓮弁文。貫入が入る。	15c
101	〃	〃	陶器 皿	(9.4)	(1.8)	(4.6)	浅黄色 〃 〃	- (S)	おろし皿。櫛状工具により刺突し、おろし目を付ける。内面のみ施釉、外面の一部に釉が垂れる。	近世
102	〃	〃	磁器 碗	(10.2)	5.9	(4.0)	灰白色 〃 〃	-	内面に界線、外面には濃い呉須による草花風の文様が描かれる。	〃
103	〃	II層	〃 〃	(4.6)	(5.6)	(4.2)	灰白色 〃 〃	-	能茶山焼。高台内に「サ」の銘。見込みは亀文、外面は梅文と唐草風の文様が施される。淡い乳白色を呈した下地釉に淡い呉須により文様が描かれる。	〃
104	〃	III層	陶器 碗	-	(4.9)	(6.0)	暗灰黄色 〃 〃	-	内面見込みはハマ痕。全体的に灰釉が施され、疊付の釉は削り取る。白釉によるイッチン掛けが施される。	〃
105	〃	I層	〃 皿	13.0	4.7	4.6	灰白色 灰白色・浅黄色 灰白色	-	灰釉が外面体部中位まで施される。見込み蛇ノ目釉剥ぎ、アルミナ砂。高台内は高台脇より深く削り兜巾状を呈する。	〃
107	II区	ST1	弥生土器 壺	(18.2)	(3.6)	-	にぶい黄褐色 明黄褐色 灰色	チャート・ 石英(L)	断面四角形の貼付口縁。端部は面を成す。外面に縦方向の刻目。頸部は櫛状工具による横位の調整が施される。	弥生
108	〃	〃	〃 〃	(24.0)	(5.0)	-	暗灰黄色 オリーブ黒色 にぶい黄褐色	チャート・ 石英(M)	断面三角形の貼付口縁。口縁部は緩やかに外反し、端部は上方に拡張し尖り気味に仕上げる。外面は刻目を施し櫛状工具により調整し、内面は横位のハケ調整。	〃
109	〃	〃	〃 〃	(34.4)	(4.1)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(L)	断面三角形の貼付け口縁。外面は斜位の刻目が施される。	〃
110	〃	〃	〃 〃	(22.2)	(7.0)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(L)	胴部から口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は面を成す。ナデ調整が施される。	〃
111	〃	〃	〃 〃	-	(10.9)	(8.0)	にぶい黄色 橙色 黄灰色	チャート・ 石英(M)	平底の底部から段を持って立ち上がり、胴部算盤形を呈する。摩耗が著しく詳細な調整は不明。	〃
112	〃	〃	〃 甕	(10.0)	(2.7)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート (M)	小型。口縁部は短く外反し、端部は尖り気味に仕上げる。	〃
113	〃	〃	〃 〃	(15.0)	(3.0)	-	にぶい黄褐色 橙色 灰色	- (L)	口縁は緩やかに外反し、端部は面を成す。外面はハケ調整が施される。	〃
114	〃	〃	〃 〃	(15.0)	(3.7)	-	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(M)	口縁部は緩やかに外反し、端部は面を成す。ナデ調整が施される。	〃
115	〃	〃	〃 〃	(18.6)	(5.2)	-	にぶい黄色 明黄褐色 灰白色	- (M)	口縁部は緩やかに外反し、端部は上方に摘みナデ調整を施す。頸部に斜位の幅の広い刻目を施す。	〃
116	〃	〃	〃 〃	-	(4.1)	(4.4)	にぶい黄褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(L)	蓋の可能性あり。	〃
117	〃	〃	〃 〃	-	(3.4)	(4.8)	にぶい褐色 〃 灰色	チャート・ 石英(L)	平底から立ち上がる。内底中央部凹む。	〃
118	〃	〃	〃 〃	-	(4.5)	(8.8)	にぶい黄褐色 にぶい橙色 オリーブ黒色	- (L)	平底から段を持ち立ち上がり外方に開く。外底と内底部に指頭圧痕。	〃
119	〃	〃	〃 〃	-	(4.9)	(7.0)	橙色 褐灰色 〃	チャート・ 石英(L)	外底部剥離。	〃

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
120	Ⅱ区	ST1	弥生土器 甕	-	(4.5)	(5.7)	にぶい黄橙色 灰色	チャート・ 石英(L)	平底。比較的薄い底部。外面の一部にヘラミガキが施される。	弥生
121	〃	〃	〃 高杯	(26.0)	(3.9)	-	にぶい黄橙色 灰色	チャート (M)	口縁部は外反し、端部は丸味を帯びる。	〃
122	〃	〃	〃 〃	-	(7.2)	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色 灰色	- (M)	絞り目。	〃
123	〃	ST1P6	〃 ミニチュア 土器	(6.2)	(2.7)	(2.6)	にぶい黄橙色 灰色	チャート (L)	ベタ底から段を持って立ち上がり、杯状に開く。	〃
137	〃	SK1	〃 壺	(19.0)	(12.4)	-	にぶい黄橙色 灰色	- (L)	貼付口縁。口縁部は刻目、口唇部は尖り気味に仕上げる。外面頸部は櫛描文、浮文、胴部は櫛描文、刻目を施す。	〃
138	〃	〃	〃 〃	(24.6)	(5.0)	-	灰色 橙色 灰色	チャート (L)	貼付口縁。端部は面を成す。外面縦方向の刻目。口縁直下は横方向の櫛若しくはヘラ状工具によるナデ調整が一部に見られる。	〃
139	〃	〃	〃 〃	-	(16.3)	-	にぶい黄橙色 灰色	チャート・ 石英(M)	ナデ調整により横位の微隆起帯を配す。頸部と胴部の境目に竹管刺突、ドーナツ状の浮文を貼付する。	〃
140	〃	〃	〃 甕	(13.6)	(9.3)	-	橙色 にぶい黄橙色	- (M)	凹線文系。口縁部は外側に屈曲し端部は上方に拡張し尖り気味に仕上げる。口縁外面に三条一単位の隆起帯を配置。摩耗著しい。	〃
141	〃	〃	〃 壺	-	(6.5)	6.7	にぶい黄橙色 灰色	チャート・ 石英(L)	平底から段を持って立ち上がる。器壁薄い。内底部の周縁部に指頭圧痕。ナデ調整が施される。	〃
145	〃	SK2	磁器 鉢	-	(7.8)	-	灰白色 〃 〃	- (S)	外面二重界線と鳶風の文様、内面草花文が施される。	近世
147	〃	SK4	土師質土器 皿	(7.6)	1.5	(6.0)	橙色 にぶい黄橙色 橙色	- (S)	回転ナデ調整。	中世
148	〃	SK5	陶器 碗	-	(3.5)	(6.0)	灰オリーブ色 灰色	-	尾戸焼。全体的に灰釉が施される。畳付は釉を削り取る。内面に目痕。	近世
149	〃	SK9	土師器 甕	-	(12.1)	-	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石英・雲母・ 角閃石(S)	胴部下半タタキ、上位はハケ調整が施される。	10c
150	〃	SX1	〃 杯	-	(1.4)	(9.0)	にぶい橙色 〃 〃	- (S)	ベタ底の底部からやや段を持ち立ち上がる。回転ナデ調整。	〃
151	〃	〃	〃 碗	-	(2.8)	(8.8)	橙色 〃 〃	-	貼付け輪高台碗。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	〃
152	〃	〃	緑釉陶器 〃	(13.0)	(3.9)	(6.1)	淡黄色 灰白色 浅黄色	-	畿内系。削り出し円盤状高台。外底中央に向かって凹む。体部は内湾し、口縁端部は直線的に尖り気味に仕上げる。内外面ともに釉が剥離。	〃
153	〃	〃	土師器 甕	(26.0)	(6.6)	-	にぶい黄褐色 褐色 暗褐色	- (M)	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張しナデ調整により尖り気味に仕上げる。口縁部内面及び体部外面ハケ調整、胴部指頭圧痕。	〃
154	〃	P47	〃 碗	(13.4)	(3.2)	-	にぶい橙色 〃 〃	- (S)	焼成不良。口縁部は外反する。回転ナデ調整。	〃
156	〃	P9	弥生土器 甕	-	(2.9)	(7.4)	にぶい黄褐色 にぶい褐色 暗灰色	- (M)	平底から外方に開く。比較的薄い底部。	弥生
157	〃	石垣裏込	陶器 皿	(14.0)	(2.9)	-	緑灰色 灰オリーブ色 淡灰オリーブ色	-	内野山窯銅緑釉皿。外面の一部に銅緑釉が垂れる。肥前Ⅲ期。	近世
158	〃	〃	〃 〃	(29.4)	(3.1)	-	灰白色 暗灰黄色 にぶい黄色	-	口縁部は外反し端部は上方に屈曲する。全体的に薄く灰釉が施され、内面には鉄釉と緑釉によって老松文が描かれる。肥前Ⅲ期。	〃
159	〃	〃	〃 〃	-	(5.4)	(11.2)	灰白色 暗灰色 にぶい黄色	-	外面体部下半まで灰釉が施される。内面に鉄釉と緑釉で老松文が施される。砂目。断面逆台形状の高台を削り出す。肥前Ⅲ期。	〃
160	〃	〃	〃 碗	-	(3.5)	(4.6)	灰オリーブ色 〃 灰白色	- (S)	尾戸焼。全体的に黄釉が施され、細かな貫入が入る。高台は高く、尖り気味に仕上げる。	〃
162	〃	I・Ⅱ層	弥生土器 壺	(17.6)	(4.8)	-	橙色 〃 灰色	チャート・ 石英(M)	凹線文。頸部に斜状の刻目が施される。	弥生
163	〃	〃	〃 〃	(16.6)	(3.0)	-	橙色 褐色 灰黄褐色	チャート (L)	口縁部は肥厚し端部は面を成す。	〃

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
164	Ⅱ区	Ⅲ層	弥生土器 甕	(19.6)	(13.6)	-	灰色 にぶい褐色 灰色	チャート・ 石英(S)	なで肩の胴部から口縁部にかけて緩やかに外反。貼付 口縁、口縁端部は外側に摘み出し、小さな玉縁状。口縁 外面は指頭圧痕が連続。微隆起帯、浮文。器壁薄い。	弥生
165	〃	I・II層	〃 〃	(18.0)	(2.4)	-	暗灰色 〃 黒色	チャート (L)	口縁部は櫛描文を施すことにより肥厚する。	〃
166	〃	II層	〃 〃	(16.8)	(4.9)	-	にぶい黄橙色 にぶい橙色 灰色	- (L)	口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部は面を成す。頸 部外面は縦方向のヘラミガキ。	〃
167	〃	〃	〃 底部	-	(3.2)	(6.4)	暗灰色 にぶい黄橙色 暗灰色	チャート (M)	平底から外方に開く。底部は比較的厚い。	〃
168	〃	〃	〃 甕	-	(3.6)	(6.8)	暗灰色 浅黄橙色 暗灰色	チャート (M)	平底から直線的に立ち上がる。内底部指頭圧痕。	〃
169	〃	〃	〃 〃	-	(4.0)	(6.4)	浅黄色 〃 灰色	チャート (M)	平底から段を持って立ち上がり開く。ナデ調整。	〃
170	〃	〃	〃 甕	-	(3.3)	5.6	褐灰色 にぶい黄橙色 黒色	チャート・ 石英(M)	平底。底部中央に直径1.3cmの円孔を穿つ。	〃
171	〃	I・II層	〃 高杯	-	(5.2)	-	にぶい黄橙色 〃 橙色	- (L)		〃
172	〃	II層	須恵器 杯	(16.2)	(4.8)	(10.0)	浅黄色 灰白色 〃	- (S)	焼成不良。口縁端部は面を成す。回転ナデ調整。外面と 内面の一部に火擦痕。	古代
173	〃	〃	土師器 甕	(28.8)	(6.0)	-	にぶい褐色 〃 〃	石英・雲母 (L)	口縁部は「く」の字に外反、端部は上方に拡張する。外面 胴部縦方向のハケ調整、口縁部はナデ調整、内面は横方 向のハケ調整が施される。	〃
174	〃	〃	土師質土器 小皿	(6.6)	(1.0)	(5.0)	浅黄橙色 〃 灰白色	- (S)	ロクロ成形、底部回転糸切り。	中世
175	〃	〃	青磁 碗	(16.8)	(2.7)	-	オリーブ灰色 〃 明オリーブ灰色	-	内面割花文、外面無文。釉が薄く施される。	〃
176	〃	〃	陶器 〃	(10.4)	(6.0)	-	淡黄色 〃 〃	-	尾戸焼。	近世
177	〃	I層	〃 〃	-	(5.1)	4.6	暗褐色 にぶい黄橙色 〃	-	鉄釉碗。高台脇より高台内周縁部が深く削り込まれる。 内外面に鉄釉、見込みに砂目が二ヶ所見られる。	〃
178	〃	II層	磁器 紅皿	(4.4)	(1.2)	(1.2)	灰白色 〃 〃	-	外面型押し無釉。口縁端部の面取り幅が広い。	〃
191	Ⅲ区	ハンダ 土坑1	陶器 皿	10.5	1.9	4.0	灰白色 〃 〃	-	灯明皿。内面に灰釉が施される。見込みに三足ハマ痕有 り。	〃
192	〃	〃	〃 〃	8.2	1.4	3.5	暗灰黄色 浅黄色 〃	-	灯明皿。内面のみ灰釉が施される。外面の一部にタール 痕有り。	〃
193	〃	〃	〃 〃	(10.4)	(1.8)	(4.3)	にぶい黄色 淡黄色 灰黄色	-	灯明皿。内面のみ灰釉が施される。	〃
194	〃	〃	磁器 碗	9.8	4.9	3.4	灰白色 〃 〃	-		〃
195	〃	〃	〃 皿	10.8	2.0	5.8	灰白色 〃 〃	-	赤色と緑色が交互に施釉される。	〃
196	〃	〃	〃 〃	8.0	2.3	3.7	灰白色 〃 〃	-	四側面に青海波文、見込みに菊花文が陰刻される。	〃
197	〃	〃	〃 蓋	-	(1.1)	-	灰白色 〃 〃	-	つまみ欠損。唐草文が施される。	〃
199	〃	石組遺構	〃 皿	(10.4)	1.9	(6.6)	灰白色 〃 〃	-	矢車状の矢羽根の間に六文字の吉祥句を交互に配した 文様が呉須により型紙刷りされる。	〃
200	〃	〃	〃 小杯	(1.9)	-	(3.0)	灰白色 〃 〃	-	内面見込みに濃い呉須による文様、外面高台脇に列点 状の陰刻が施される。	〃
201	〃	〃	〃 皿	9.0	2.5	3.6	灰白色 〃 〃	-	内面に濃い呉須で「壽」の文様有り。見込みは蛇ノ目釉 剥ぎ、墨書による落書きが施される。	〃

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
202	Ⅲ区	石組遺構	磁器 重鉢	(7.0)	1.8	(6.4)	灰白色 〃 〃	-		弥生
203	〃	〃	〃 〃	(7.2)	2.9	(7.0)	灰白色 〃 〃	-		近世
205	〃	P21	弥生土器 甕	-	(5.8)	(6.6)	褐灰色 にぶい黄橙色 褐灰色	チャート・ 石英(M)	平底。ナデ調整が施される。	弥生
206	〃	P19	〃 〃	-	(4.7)	(8.4)	褐灰色 にぶい黄橙色 〃	チャート・ 石英(M)	平底。内面ヘラケズリ、外面ハケ調整が施される。	〃
207	〃	P20	〃 〃	-	(6.0)	(12.6)	灰黄褐色 橙色 灰黄褐色	チャート・ 石英(M)	平底。底部は剥離する。焼成不良。	〃
209	〃	土器集中 1	〃 壺	(17.8)	(3.8)	-	浅黄色 〃 〃	チャート (M)	外反し、端部は面を成す。ナデ調整が施される。	〃
210	〃	〃	〃 〃	-	(13.6)	-	にぶい黄橙色 〃 灰色	チャート・ 石英(M)	口縁部、胴部欠損。頸部内面に指頭圧痕有り。	〃
211	〃	〃	〃 底部	-	(2.8)	(7.6)	灰色 灰黄色 黒色	チャート・ 石英(M)	平底。	〃
216	〃	土器集中 2	〃 壺	(16.0)	(7.3)	-	にぶい褐色 橙色 灰色	チャート・ 石英(M)	口縁端部は下方に拡張し面を成す。外面口縁下は横方向の櫛描直線文。摩擦著しく調整は不明。	〃
217	〃	〃	〃 甕	(12.0)	(5.4)	-	にぶい黄橙色 〃 オリーブ黒色	チャート・ 石英(M)	胴部から緩やかに外反する。口縁端部は面を成す。	〃
218	〃	〃	〃 底部	-	(2.5)	(7.6)	灰黄色 灰色 〃	チャート・ 石英(M)	平底。	〃
219	〃	〃	土師器 皿	(7.4)	(0.9)	(4.4)	浅黄褐色 〃 〃	- (S)	口縁部は外反する。	古代
220	〃	土器集中 1	瓦器 皿	(10.0)	(1.4)	(8.2)	灰色 〃 灰白色	- (S)	底部から斜上方に短く立ち上がる。ヨコナデ調整が施される。	〃
223	〃	石垣1 裏込	陶器 〃	(11.3)	2.0	(5.5)	灰オリーブ色 灰白色 〃	-	灯明皿。内面及び口縁部外面の一部まで灰釉が施される。貫入が入る。尾戸焼。	近世
224	〃	〃	陶器 碗	-	(3.4)	6.2	灰白色 〃 〃	-	陶胎染付。見込みに五弁花風の文様、外面には唐草風の文様が施される。	〃
225	〃	〃	磁器 〃	-	(2.0)	5.3	明緑灰色 〃 灰白色	-	内面見込みに筆状の文様が施される。断面四角形の高台が付く。	〃
227	〃	石垣2 裏込	磁器 紅皿	4.9	1.3	1.5	灰白色 〃 〃	-	貝殻状に型押し成形。内面と口縁部の一部のみ施釉。	1820年以降
228	〃	〃	陶器 皿	(9.0)	1.9	(6.2)	オリーブ灰色 〃 にぶい橙色	-	菊花状の内型成形。高台脇まで緑釉が施される。	〃
229	〃	〃	磁器 小丸碗	(7.6)	3.9	(3.6)	灰白色 〃 〃	-	内面口縁部に界線、見込みに花文が施される。	〃
230	〃	〃	〃 〃	(7.4)	(3.7)	(3.0)	明緑灰色 〃 淡黄色	-	濃い呉須で外面に観世水文、内面は界線が施される。	〃
231	〃	Ⅱ層	土師質土器 杯	-	(1.5)	6.4	にぶい黄橙色 〃 〃	- (S)	底部回転糸切り。	10～11c
232	〃	〃	緑釉陶器 皿	(12.6)	(1.5)	-	オリーブ黄色 〃 灰色	-	須恵器質の胎土に薄く緑釉が施される。	〃
233	〃	〃	〃 椀	-	(2.7)	-	浅黄色 〃 灰色	- (S)	口縁端部は僅かに外反する。全体的に緑釉が薄く施される。	〃
234	〃	〃	白磁 碗	(18.8)	(2.2)	-	灰白色 〃 〃	-	玉縁状の口縁。白磁Ⅳ類。	〃
235	〃	Ⅰ層	須恵器 壺	(21.0)	(4.5)	-	黄灰色 灰色 〃	- (S)	口縁部は面を成し、やや垂下する。焼成良。	〃

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
236	Ⅲ区	I層	陶器 小杯	(6.0)	(3.1)	(2.9)	浅黄色 淡黄色	-	外面体部下半以下は露胎。	
237	〃	〃	〃 皿	(12.2)	(4.6)	5.8	黒褐色 褐灰色	(S)	外面体部中位まで鉄釉が施される。断面三角形の高台が付く。高台脇より高台内を深く削る。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。	
238	〃	〃	土師質土器 蓋	-	1.4	-	にぶい橙色 〃 〃	-	天井部は削りにより平坦な面を成す。	
239	〃	〃	陶器 茶入壺	(13.0)	(4.5)	-	にぶい赤褐色 極暗赤褐色 にぶい赤褐色	-	外面褐釉, 口縁端部及び内面は無釉。体部内面は施釉。	
240	〃	〃	磁器 香炉	10.6	8.3	5.7	灰白色 明緑灰色 灰白色	-	筒形を呈し, 口縁部は端部を内側に屈曲させる。外面全体と口縁部内部の一部に施釉。底部は蛇ノ目高台。内底部に灰の付着痕有り。	
241	〃	〃	〃 小杯	-	(1.6)	(2.8)	灰白色 〃 〃	-	内面呉須。	
242	〃	〃	〃 〃	-	(2.1)	2.4	灰白色 〃 〃	-	内面山水楼閣文が施される。	
243	〃	〃	〃 碗	(10.8)	6.1	4.2	明緑灰色 〃 灰白色	-	外面松樹・竹笹文。内面口縁部、体部下半に界線が施される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。	
244	〃	II層	〃 〃	(12.0)	-	(4.3)	灰白色 〃 淡黄色	-	花卉風の文様帯内に楼閣文、口縁部内外面に界線と波状文が施される。全体的に濃いコバルトの発色。	
245	〃	〃	〃 紅皿	(4.4)	(1.3)	(1.5)	明緑灰色 〃 灰白色	-	外面貝殻状に型押し成形。口縁の幅が広い。内面のみ施釉。	1840～ 1860年
246	〃	〃	〃 〃	(4.2)	1.4	1.5	灰白色 〃 〃	-	貝殻状の型押し成形(B類)内面と口縁部付近のみ施釉。	1820年 以降
247	〃	〃	〃 〃	4.5	1.4	1.4	灰白色 〃 〃	-	貝殻状の型押し成形(B類)口縁の幅が広い。内面と口縁部付近のみ施釉。	1840～ 1860年
248	〃	〃	〃 皿	(11.8)	3.6	4.6	明オリーブ灰色 灰白色 〃	-	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。二重界線。襷状の文様が施される。肥前V期。	
249	〃	〃	〃 〃	(10.6)	(2.6)	(6.0)	灰白色 〃 〃	-	肥前系。見込みに山水楼閣文。口縁端部は口鏽。	
250	〃	I層	〃 〃	(14.7)	4.4	8.2	灰白色 〃 〃	-	輪花皿。蛇ノ目凹型高台。内面山水楼閣文。口縁端部は口鏽。	
251	〃	〃	〃 〃	(11.4)	2.1	(7.1)	灰白色 〃 〃	-	内面見込みに雲鶴文・亀文が施される。	
252	〃	〃	〃 〃	(12.6)	3.3	7.6	- 明緑灰色 灰白色	-	型紙刷り。内面矢車と蜻蛉文、外面高台脇に界線、向雀風の文様。外底は蛇ノ目。内面見込みにハマ痕が見られる。やや陶器質。	
253	〃	〃	瓦質土器 焙烙鍋	(35.4)	(1.5)	-	オリーブ黒色 〃 暗灰黄色	-	讃岐御厩系。外型成形。	
254	〃	〃	〃 焜炉	-	(6.3)	-	褐灰色 〃 灰黄褐色	-	外面二条の突帯が巡り、上位には亀甲文が連続し、下位は梅樹文が配される。内面は横方向のナデ調整。	
255	〃	〃	〃 〃	-	(10.2)	(25.0)	灰色 暗灰色 黒色	-	体部に向けて直線的に立ち上がる。高台端部はやや丸味を帯びる。体部内面は横方向のハケ調整、外面はミガキが施される。高台高2.1cm。	
256	〃	II層	〃 〃	(26.4)	(12.7)	-	暗灰色 黒色 〃	-	体部上半は丸味を持ち立ち上がる。口縁端部は水平な面を成し内側に肥厚する。直径1.5cmの円孔を穿つ。内面は横方向のハケ調整、内面はミガキが施される。	
266	〃	III層	弥生土器 壺	-	(3.7)	7.2	橙色 〃 〃	チャート (S)	平底から斜上外方に大きく開く。器壁薄い。	弥生
267	〃	〃	〃 高杯	-	(3.9)	-	明黄褐色 〃 灰オリーブ色	チャート・ 石英(S)	杯部、脚下部欠損。絞り目。	〃
275	〃	III-1層	黒色土器 椀	-	(0.7)	(6.8)	黒色 にぶい橙色 〃	(S)	畿内系黒色土器A類。断面三角形の低い高台が付く。	古代
276	〃	〃	緑釉陶器 皿	-	(1.5)	(6.4)	灰オリーブ色 〃 〃	(S)	円盤状高台。全体的に緑釉が薄く施される。	〃

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
277	Ⅲ区	Ⅲ-1層	瓦器 椀	(14.8)	(3.0)	-	灰色 〃 灰白色	- (S)	和泉型Ⅲ・Ⅳ期。内面に二条の平行暗文。	古代
278	〃	〃	須恵器 壺	-	(6.6)	(9.0)	灰色 〃 〃	- (S)	ナデ調整が施される。外側に開く高台が付く。	〃
279	〃	〃	〃 〃	-	(4.0)	(12.0)	灰色 〃 〃	- (S)	回転ナデ調整が施される。	〃
280	〃	SR1	弥生土器 〃	(14.0)	(4.7)	-	灰色 〃 暗灰色	チャート・ 石英(M)	口縁部は直立気味に立ち上がり端部は面を成す。外面縦方向の幅の広い刻目。浮文、微隆起帯の粘土帯貼付。	弥生
281	Ⅱ区	〃	〃 〃	(22.0)	(5.8)	-	浅灰色 〃 灰色	チャート (M)	貼付口縁。幅の広い粘土帯を薄く貼付けし、下方に刻目を施す。断面長方形を呈し、端部は面を成す。	〃
282	Ⅲ区	〃	〃 〃	(21.6)	(2.9)	-	にぶい黄褐色 〃 〃	チャート・ 石英(L)	断面三角形の口縁部。外面に粘土帯を貼付し、刻目を施す。	〃
283	Ⅱ区	〃	〃 〃	(20.0)	(2.2)	-	橙色 〃 にぶい黄橙色	チャート (M)	口縁端部は外側に摘み出し、三角形の刻目を施す。	〃
284	〃	〃	〃 〃	(17.2)	(3.5)	-	橙色 〃 灰色	- (L)	口縁端部は上方に摘みナデ調整、尖り気味に仕上げる。	〃
285	〃	〃	〃 〃	(22.4)	(3.4)	-	橙色 〃 〃	チャート・ 石英(L)	口縁部は外反し端部は面を成す。口縁部の肥厚は認められない。外面は斜状の刻目。ナデ調整が施される。	〃
286	〃	〃	〃 〃	(12.6)	(4.4)	-	橙色 〃 〃	- (L)	口縁部は端部を内傾する面を成す。外面は凹線が巡る。	〃
287	〃	〃	〃 〃	(14.0)	(2.6)	-	にぶい黄褐色 〃 黄灰色	- (M)	口縁部は上下に拡張し、外面に凹線が巡る。	〃
288	〃	〃	〃 〃	(20.0)	(3.2)	-	橙色 〃 〃	チャート (M)	口縁部は外反し端部は上方に拡張する。外面は凹線が巡る。	〃
289	〃	〃	〃 〃	(20.4)	(5.5)	-	にぶい橙色 〃 〃	チャート (L)	凹線文系。口縁部は緩やかに外反し端部は上方に拡張する。口唇部は尖り気味に仕上げる。	〃
290	〃	〃	〃 〃	(19.6)	(3.5)	-	橙色 〃 〃	- (M)	口縁端部は下方に拡張し、外面に凹線が巡る。	〃
291	〃	〃	〃 甕	(14.0)	(2.3)	-	にぶい褐色 〃 黄灰色	チャート (M)	口縁端部は摘みナデ調整を施す。口縁下端はナデにより微隆起帯を作る。	〃
292	I w区	〃	〃 〃	(19.0)	(4.3)	-	にぶい褐色 にぶい黄褐色 黒色	チャート・ 石英(M)	口縁部は外反し、口唇部はナデにより尖り気味に仕上げる。口縁部は肥厚し下端に刻目を施す。直下に微隆起帯。	〃
293	Ⅱ区	〃	〃 〃	(18.6)	(2.4)	-	オリーブ黒色 〃 〃	チャート (L)	口縁部は外反し、端部は上方に摘み、ナデ調整。下端に刻目、直下に微隆起帯。	〃
294	〃	〃	〃 〃	(17.2)	(4.2)	-	灰白色 〃 オリーブ黒色	- (M)	口縁部はやや肥厚し、端部は尖り気味に仕上げる。下端に刻目、直下に微隆起帯。	〃
295	〃	〃	〃 〃	-	(6.2)	-	褐灰色 暗灰黄色 オリーブ黒色	石英 (M)	櫛状工具により微隆起帯を付ける。刻目を施す。	〃
296	I w区	〃	〃 〃	(28.0)	(3.4)	-	にぶい橙色 暗灰黄色 黒色	- (M)	口縁部は外反し口唇部はナデにより尖り気味に仕上げる。直下に摘みナデにより微隆起帯を付ける。	〃
297	〃	〃	〃 〃	(17.0)	(2.3)	-	橙色 〃 〃	チャート (L)	貼付口縁。端部は面を成す。外面は指頭圧痕文が施される。	〃
298	〃	〃	〃 〃	(24.0)	(4.0)	-	明褐色 〃 黄褐色	- (L)	貼付口縁。外面に指頭圧痕文が連続する。内面タール痕有り。	〃
299	〃	〃	〃 〃	(17.0)	(3.0)	-	にぶい黄橙色 〃 〃	チャート (S)	凹線文系。口縁部は外反し口縁端部は上方に拡張する。外面は凹む。	〃
300	Ⅲ区	〃	〃 〃	(14.0)	(4.6)	-	にぶい黄褐色 橙色 灰色	チャート (M)	凹線文。	〃
301	〃	〃	〃 底部	-	(4.5)	(4.4)	灰色 〃 暗灰色	チャート (L)		〃

遺物観察表(土器) 302～369

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量(cm)			色調 内面・外面・断面	胎土中の砂粒 (大きさ)	特徴	年代
				口径	器高	底径				
302	Ⅲ区	SR1	弥生土器 底部	-	(4.3)	(5.4)	にぶい橙色 灰色	チャート (M)		弥生
303	〃	〃	〃 〃	-	(3.4)	(5.4)	にぶい黄褐色 灰黄褐色 黒褐色	チャート (M)	平底から外方に立ち上がる。比較的薄い底部。	〃
304	〃	〃	〃 〃	-	(4.7)	(8.0)	にぶい黄褐色 灰色	チャート・ 石英(M)	平底から外方に立ち上がる。	〃
305	I w区	〃	〃 〃	-	(3.9)	7.2	黒褐色 灰黄褐色 褐灰色	チャート・ 石英(M)	底部は輪積みの上に粘土を重ねて作る。接合部に指頭 圧痕。ナデ調整を施す。	〃
306	Ⅱ区	〃	〃 〃	-	(5.5)	(6.0)	にぶい褐色 暗灰色	チャート・ 石英(M)	平底から内湾気味に立ち上がる。比較的器壁が薄い。	〃
307	〃	〃	高杯	-	(7.5)	5.2	橙色 にぶい黄褐色	チャート (M)	柱軸。裾部は短く開く。	〃
353	〃	〃	土師器 杯	(13.0)	(2.9)	(9.0)	橙色 〃 〃	- (S)	焼成不良。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	古代
354	〃	〃	〃 〃	(12.2)	(3.2)	(8.0)	橙色 〃 〃	チャート (S)	平底から直線的に立ち上がる。回転ナデ調整が施され る。	〃
355	I w区	〃	〃 〃	(12.6)	(2.3)	(8.4)	淡黄色 〃 〃	- (S)	内底周縁部は凹む。口縁部は尖り気味に仕上げる。回転 ナデ調整が施される。	〃
356	Ⅱ区	〃	〃 〃	-	(1.5)	(8.0)	橙色 〃 〃	- (S)	底部回転ヘラ切り。	〃
357	〃	〃	〃 〃	-	(1.2)	(8.4)	橙色 〃 〃	- (S)	底部回転ヘラ切り。	〃
358	〃	〃	〃 〃	-	(1.8)	(4.8)	にぶい橙色 〃 〃	- (M)	回転ナデ調整。底部ヘラ切り。	〃
359	I w区	〃	〃 〃	-	(1.0)	(5.8)	にぶい橙色 〃 〃	-	底部は薄い円盤状を呈する。ロクロ成形、底部ヘラ切り。 内底部にロクロ目を残す。	〃
360	Ⅲ区	〃	皿	(11.0)	(1.2)	(6.7)	橙色 〃 〃	- (S)	焼成不良。ベタ底から外反し口縁部は丸く収める。	10c
361	Ⅱ区	〃	須恵器 杯	(15.0)	(4.0)	(7.0)	灰白色 〃 〃	- (S)	焼成不良。体部は外方に直線的に立ち上がり口縁端部 は内側が沈線状に凹む。回転ナデ調整。	古代
362	Ⅲ区	〃	〃 〃	(15.0)	(3.8)	(11.6)	灰白色 オリーブ灰色 明オリーブ灰色	- (S)	平底から内湾気味に立ち上がる。口縁端部は面を成す。 回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	〃
363	〃	〃	蓋	(14.2)	(1.4)	-	灰色 〃 〃	-	回転ナデ調整が施される。	〃
364	Ⅱ区	〃	〃 〃	(20.4)	(2.0)	-	浅黄色 〃 灰白色	- (S)	焼成不良。天井部欠損。回転ナデ調整。	〃
365	Ⅲ区	〃	高杯	-	(6.1)	-	灰白色 〃 〃	- (S)	裾部欠損。内面縦方向のナデ調整が施される。	〃
366	Ⅱ区	〃	黒色土器 椀	(18.0)	(4.5)	-	黒色 にぶい褐色 〃	雲母 (S)	内黒A類。口縁部はナデ調整により尖り気味に仕上げ る。内面ヘラミガキ、外面指頭圧痕が施される。	〃
367	Ⅲ区	〃	緑釉陶器 皿	(12.4)	(1.7)	-	オリーブ灰色 灰色	-	畿内系。須恵器質の胎土に薄く緑釉が施される。	〃
368	Ⅱ区	〃	椀	(12.8)	(2.1)	-	浅黄色 〃 灰白色	- (S)	畿内系。口唇部を尖り気味に仕上げる。	〃
369	〃	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	浅黄色 〃 橙色	- (S)	緑釉が全面に薄く施される。	〃

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
39	I w区	ST2	石器 叩石	I - A	12.9	9.3	4.3	784.0	細粒花崗岩	
40	〃	〃	〃	I - A	11.5	9.5	4.3	715.0	〃	
41	〃	〃	〃 投弾	Ⅲ	11.5	8.8	4.1	603.0	〃	一側面の中央部凹む。
42	〃	〃	〃	Ⅲ	11.5	10.8	4.2	707.0	〃	
43	〃	〃	〃	I	3.7	3.1	2.4	38.4	〃	
44	〃	〃	〃	II	4.3	3.4	2.5	25.3	砂岩	
45	〃	〃	〃	II	4.5	3.8	2.9	63.7	細粒花崗岩	
62	〃	P68	〃 石鏃	II	3.3	2.2	0.4	3.2	サヌカイト	
63	〃	P35	〃	I	2.3	2.2	0.4	1.3	〃	
80	〃	Ⅲ - 2層	石器 石鏃	II	1.9	1.7	0.2	1.2	頁岩	
81	〃	〃	〃 叩石	I - A	12.6	10.9	3.8	728.0	砂岩	
82	〃	〃	石核	-	8.5	4.7	1.3	66.5	頁岩	
85	I e区	P3	鉄器 鉄釘	-	9.9	1.9	0.8	33.7	-	平釘。
86	〃	P10	石器 石包丁	Ⅲ - B1 - 3	11.4	4.7	0.9	75.5	結晶片岩	中央部に一穴穿つ。
87	〃	P2	〃 叩石	I - B	9.8	4.6	3.7	259.0	緑色片岩	
97	〃	I層	〃 石斧	II - A	5.6	3.4	0.9	37.7	蛇紋岩	小型扁平石斧。
98	〃	II層	〃 砥石	I	3.9	2.8	1.0	16.2	流紋岩	仕上砥。
99	〃	〃	〃	I	18.8	6.4	2.6	598.2	粘板岩	仕上砥。四面に擦痕が見られる。
106	I n区	I層	銅製品 煙管	-	5.9	1.0	1.0	4.5	-	羅宇装着部から吸口部分に向い窄まり、吸口はやや広がる。
124	II区	ST1	石器 石鏃	II	2.2	1.9	0.3	1.6	サヌカイト	
125	〃	〃	〃	II	2.5	1.9	0.3	1.9	〃	
126	〃	〃	〃	II	2.2	1.9	0.4	1.9	〃	
127	〃	〃	〃	II	2.3	1.9	0.5	2.1	緑色チャート	
128	〃	〃	〃	II	2.8	2.0	7.5	3.7	頁岩	中央部に膨らみがある。
129	〃	〃	〃	II	3.5	2.0	0.4	2.5	〃	風化により橙色を呈している。

遺物観察表(石器・鉄器) 130～190

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
130	Ⅱ区	ST1	石器 石斧	I-A	11.5	4.4	1.5	119.0	緑色岩	刃部・後側縁は丁寧に研磨されるが、前側縁・両主面は自然面を残す。基部は丸く収める。
131	〃	〃	〃 砥石	Ⅱ	13.6	13.8	6.7	1436.0	細粒花崗岩	研磨面として二面使用。
132	〃	〃	〃 〃	I	11.7	7.3	2.2	249.0	流紋岩	両面及び一側面使用。片面中央部は溝状に凹む。
133	〃	〃	〃 叩石	I	11.3	11.9	4.1	815.0	細粒花崗岩	
134	〃	〃	〃 〃	I	10.7	9.4	3.2	493.0	〃	両面中央部に敲打痕。一部に擦痕。
135	〃	〃	〃 〃	I	12.2	10.5	3.2	615.0	〃	両面中央部に敲打痕。
136	〃	〃	〃 投弾	I	3.8	3.5	2.5	45.0	〃	
142	〃	SK1	〃 石鏃	I-A	3.6	2.1	0.3	2.5	緑色チャート	
143	〃	〃	〃 石包丁	Ⅲ-B1-1	3.4	3.7	0.5	6.0	頁岩	表面剥離が著しい。被熱し赤色化が認められる。
144	〃	〃	〃 砥石	I	7.4	4.2	1.5	78.0	砂岩	一部被熱が認められる。
146	〃	SK2	銅製品 煙管	-	2.8	1.4	0.6	3.4	-	
155	〃	P20	石器 石包丁	Ⅲ-A	6.8	5.5	1.0	44.1	頁岩	二穴。弧背弱凸刃。
161	〃	石垣裏込	〃 投弾	Ⅱ	4.6	4.4	4.2	112.0	細粒花崗岩	
179	〃	Ⅱ層	鉄器 鉄斧	-	6.3	3.3	0.5	21.4	-	袋状鉄斧。
180	〃	〃	石器 石包丁	Ⅲ	4.8	4.5	0.5	16.8	頁岩	両端部欠損。穿孔の一部が認められる。裏面は未調整。
181	〃	I・Ⅱ層	〃 石匙状石器	-	6.7	2.2	0.5	8.4	〃	石匙状を呈する。一側縁は三ヶ所に抉りが入り、もう一側縁は研磨により刃部を付ける。
182	〃	Ⅱ層	〃 砥石	I	7.4	7.2	1.8	137.0	流紋岩	一面のみ使用。
183	〃	I・Ⅱ層	〃 〃	-	9.4	5.7	1.1	90.1	頁岩	刃部等未調整。擦痕顕著。
184	〃	Ⅱ層	〃 〃	Ⅱ	13.9	10.3	3.4	625.0	流紋岩	片面と一側面を使用。
185	〃	〃	〃 叩石	I-A	7.1	7.3	4.4	318.0	細粒花崗岩	
186	〃	I・Ⅱ層	〃 〃	I-A	8.8	7.7	3.6	357.0	〃	
187	〃	Ⅱ層	〃 〃	I-A	12.6	10.7	3.6	738.0	〃	
188	〃	〃	〃 祭祀具	-	2.7	2.5	0.9	10.0	緑色岩系	陽と九字の印が表裏に陰刻される。
189	Ⅲ区	SD2	銅製品 煙管	-	5.1	1.0	0.9	3.5	-	
190	〃	〃	〃 〃	-	5.1	1.1	1.1	7.6	-	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
198	Ⅲ区	ハンダ 土坑1	石器 砥石	I	7.6	5.4	3.8	236.0	流紋岩	仕上砥。四面使用。
204	〃	石組遺構	軒平棧瓦	-	26.2	25.0	1.6	18.0	-	瓦当文様は中心飾り巴文, 二転唐草。額部に「西政」の刻印有り。
208	〃	P12	古銭	-	2.4	2.4	1.5	2.4	-	寛永通宝。
212	〃	土器集中 1	石器 石斧	Ⅱ-A	7.4	6.3	1.4	113.0	塩基性岩	扁平石斧。刃部欠損。
213	〃	〃	〃 投弾	I	3.8	3.6	2.5	41.8	細粒花崗岩	
214	〃	〃	〃 〃	Ⅱ	5.0	3.5	2.5	66.4	砂岩	卵形。
215	〃	〃	〃 叩石	I-A	10.8	9.2	3.8	560.0	細粒花崗岩	中央部に敲打痕有り。
221	〃	土器集中 2	〃 投弾	Ⅱ	5.8	3.7	2.7	78.3	〃	卵形。
222	〃	〃	〃 〃	Ⅱ	6.7	5.8	5.1	251.0	〃	球形。
226	〃	石垣1 裏込	〃 砥石	I	8.6	4.2	2.7	2.2	〃	仕上砥。
257	〃	I層	銅製品 煙管	-	3.5	1.1	1.1	4.6	-	
258	〃	〃	石器 石鏃	Ⅱ	1.9	1.6	3.5	1.1	サヌカイト	
259	〃	〃	〃 叩石	I-B	8.8	7.3	4.8	460.0	細粒花崗岩	長軸方向の両端に敲打痕。
260	〃	Ⅱ層	〃 投弾	Ⅱ	4.4	3.5	2.7	52.3	砂岩	
261	〃	〃	〃 〃	Ⅱ	4.3	3.7	2.3	46.9	〃	
262	〃	〃	〃 〃	Ⅱ	4.5	3.9	2.0	55.0	細粒花崗岩	
263	〃	〃	〃 石臼	-	28.0	17.5	8.6	8900.0	砂岩	
264	〃	〃	〃 〃	-	30.2	15.2	9.1	1150.0	〃	
265	〃	I層	〃 不明	-	14.9	16.3	0.3	170.0	-	
268	〃	Ⅲ層	〃 石鏃	Ⅱ	1.9	1.1	0.2	0.5	頁岩	平基式。
269	〃	〃	〃 〃	Ⅱ	2.2	1.9	0.4	1.5	サヌカイト	平基式。
270	〃	〃	〃 石包丁	Ⅲ-B1-2	11.4	5.1	1.1	91.0	頁岩	二穴。
271	〃	〃	〃 叩石	I-A	7.8	5.7	3.6	220.0	細粒花崗岩	両面中央部及び側面が凹む。
272	〃	〃	〃 投弾	I	3.8	2.7	2.0	29.6	〃	
273	〃	〃	〃 〃	I	3.5	3.2	1.5	29.0	砂岩	

遺物観察表(石器・鉄器) 274～331

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
274	Ⅲ区	Ⅲ層	石器 投弾	I	43	3.7	2.7	55.6	細粒花崗岩	
308	Ⅱ区	SR1	鉄器 鉄鏃	-	6.3	3.3	0.7	26.5	-	方頭式。6c。
309	〃	〃	〃 〃	-	5.0	2.5	0.6	9.6	-	方頭式。基部は羽子板状を呈する。
310	Ⅱ区	〃	〃 鉄斧	-	6.6	4.4	0.4	51.0	-	袋状鉄斧。
311	Ⅲ区	〃	石器 石鏃	Ⅱ	2.9	1.5	0.4	1.6	サヌカイト	
312	〃	SR2	〃 〃	-	1.7	1.4	0.3	0.7	チャート	
313	Ⅱ区	SR1	〃 石包丁	Ⅲ-B1-2	11.6	3.7	0.6	38.0	頁岩	一穴。
314	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B1-4	8.2	4.9	0.8	46.6	〃	二穴。
315	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B1-3	5.8	3.7	0.8	19.8	〃	二穴。
316	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B1-3	5.2	4.2	0.7	24.3	砂岩	
317	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B1-3	4.4	4.6	0.7	16.7	片岩	
318	〃	〃	〃 〃	Ⅲ-B1-3	3.9	3.1	0.4	6.6	頁岩	
319	〃	〃	〃 〃	I-B2-4	11.9	5.6	1.2	9.2	〃	
320	〃	〃	〃 石斧	Ⅱ-A	3.9	5.0	0.9	22.5	緑色岩	
321	〃	〃	〃 〃	I-B	9.1	3.7	2.5	157.0	緑色片岩	刃部のみ研磨する。棒状。
322	〃	〃	〃 〃	I-B	8.9	4.3	2.0	145.0	〃	前側面及び刃部は研磨される。主面は未調整。
323	〃	〃	〃 石包丁未製品	-	11.9	5.8	1.4	115.9	頁岩	
324	Ⅲ区	〃	〃 砥石	I	15.0	5.2	3.9	457.0	片岩	中砥。三面使用。
325	〃	〃	〃 〃	I	15.6	10.0	5.1	1144.0	流紋岩	
326	〃	〃	〃 〃	I	10.0	4.0	2.2	163.0	砂岩	四面使用。
327	〃	〃	〃 〃	I	7.2	2.9	2.1	85.0	〃	仕上砥。四面使用。
328	I w区	〃	〃 叩石	I-A	8.3	7.9	4.4	395.0	細粒花崗岩	
329	Ⅱ区	〃	〃 〃	I-A	10.2	8.9	5.2	644.0	〃	
330	I w区	〃	〃 〃	I-A	11.1	8.3	4.8	666.0	〃	
331	〃	〃	〃 〃	I-A	12.0	10.9	5.0	921.0	〃	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	分類	法量(cm)				石質	特徴
					全長	全幅	全厚	重量(g)		
332	I w区	SR1	石器 叩石	I - A	10.3	8.0	4.6	525.0	細粒花崗岩	
333	II区	〃	〃	I - A	9.5	6.9	3.8	381.0	〃	
334	〃	〃	〃 投弾	I	3.9	3.5	2.8	56.0	〃	
335	〃	〃	〃	I	3.9	3.5	2.3	41.0	砂岩	
336	〃	〃	〃	I	3.8	3.4	2.3	36.0	〃	
337	〃	〃	〃	I	3.9	3.5	2.6	44.0	細粒花崗岩	
338	〃	〃	〃	II	4.0	2.9	2.3	33.0	〃	
339	〃	〃	〃	II	4.0	3.6	2.5	48.0	〃	
340	〃	〃	〃	II	4.2	3.1	2.3	43.0	〃	
341	〃	〃	〃	II	4.2	2.8	2.3	37.0	〃	
342	I w区	〃	〃	I	3.8	3.6	2.6	45.2	〃	
343	II区	〃	〃	II	4.5	4.1	2.5	62.0	砂岩	
344	〃	〃	〃	II	4.6	3.7	2.3	53.0	〃	
345	I w区	〃	〃	II	4.4	3.5	2.7	55.7	〃	
346	II区	〃	〃	II	4.7	3.5	2.2	50.0	細粒花崗岩	
347	I w区	〃	〃	II	4.9	3.7	2.4	56.7	〃	
348	〃	〃	〃	II	5.0	3.7	3.0	77.3	砂岩	
349	〃	〃	〃 未製品	-	6.6	6.3	1.5	95.0	片磨岩	紡錘車の未製品か。
350	II区	〃	〃 投弾	II	7.1	7.0	4.4	283.0	細粒花崗岩	
351	〃	〃	〃	II	9.4	6.0	5.1	387.0	砂岩	
352	〃	〃	〃 石錘	-	5.9	4.9	3.9	162.0	細粒花崗岩	敲打により中央に溝が巡る。
370	〃	〃	〃 五輪塔	-	20.4	14.3	14.0	4900.0	砂岩	空輪は宝珠が形骸化する。風輪は扁平。
371	〃	〃	〃 石臼	-	20.1	9.6	5.8	1406.0	〃	

第V章 分析

1. 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
松元 美由紀・高橋 敦

(1)はじめに

本報告では検出された植物遺体の同定および計測, その放射性炭素年代測定結果について述べる。

(2)試料

試料は, バーガ森北斜面遺跡の土壌試料1点2式分と, バーガ森北斜面遺跡より出土した種実遺体3式分である。分析の便宜上, 各試料に試料番号を付している(表5-1)。

試料は, II区のSK1より採取された土壌1点(埋土サンプル試料番号2)と, 出土した炭化米(埋土水洗別済サンプル; 試料番号1), 炭化種実(木の実; 試料番号3), 炭化物(炭; 試料番号4)の, 計4点である。炭化物は, 試料番号1, 4が乾燥した状態である。試料番号3は湿った状態で, 表面には泥が付着している。

表5-1 分析資料一覧

試料番号	調査区	遺構	層位等	時代	備考
1	II区	SK1	-	弥生中期末	埋土水洗別済サンプル
2			-		埋土サンプル
3			マ		木の実
4			マ		炭

(3)分析方法

①放射性炭素年代測定

試料の前処理については, 木炭, 炭質物, 木材が, 試料に土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合, これらをメス・ピンセット, 超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去, 水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去, HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。

なお, AAA処理でのHClによる酸処理では, 通常1 mol/l (1M)を用いる。アルカリ処理でのNaOHは, 0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」, 1M未満の場合は「AaA」と表記する。

腐植については, メス・ピンセットを使い石などの混入物を取り除き, 残りの全試料をすりつぶす(Bulk)。酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後, 超純水で中性になるまで希釈し, 乾燥させる。処理には1 mol/l (1M)のHClを用い, 処理として「HCl」と表記する。

処理を終えた試料については, 試料をバイコール管に入れ, 1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて, 管内を真空にして封じきり, 500℃ (30分) 850℃ (2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し, 真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコー

1. 自然科学分析

ル管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて δ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

②種実遺体分析

i) 前処理

試料番号1は、多量の炭化したイネの胚乳(炭化米)を主体とする。本分析では、試料全体の種類組成の把握と、一部の試料を対象とした精査を実施する。まず、試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、種実遺体以外(炭化材、土器片、岩片)と、炭化米以外の種実遺体を抽出する。次に、炭化米主体の試料から、状態が良好な年代測定対象試料10個、計測対象試料100個、他1,000個、合計1,110個の炭化米を抽出する。表面に穎(籾)が付着する個体は別途抽出する。残りの試料は、「イネ胚乳主体」としている。

試料番号2は、土壌試料300ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて常温乾燥後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体や炭化材(主に径4mm以上)を抽出する。

試料番号3は、炭化したイチイガシの子葉を主体とする。表面には泥が付着しているが、精査の結果、脆弱な果皮の付着も確認された。泥を除去すると、共に果皮も壊れる可能性が高いため、泥が付着した状態での常温乾燥により、果皮の残存を優先している。乾燥が進んだ時点で、イチイガシの状態が良好な年代測定試料の完形1個、他の完形個体、子葉の合わせ目に沿わずに割れた破片、子葉の合わせ目に沿って割れた破片などを、ピンセットを用いて抽出する。

ii) 同定・計測

種実遺体の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2000)、岡本(1979)等を参考に実施し、個数と重量を求めて結果を一覧表で示す。その他の抽出物は、重量を表示する。一部は容積と最大径を併記する。「イネ胚乳主体」は、100個や1,000個の量をもとに推定個数を求めて表示する。

また、試料番号1、試料番号3の状態が良好な炭化米各100個、計200個を対象に、デジタルノギスを用いて、長さ、幅、厚さを計測し、結果を一覧表で示す。

分析後は、年代測定対象試料を除く種実遺体等を分類群毎に容器に入れて保管する。

(4)結果

①放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果と暦年較正值を以下に示す。放射性炭素年代は、SK1か

ら検出されたイネ胚乳(試料番号1)が $2,030 \pm 30$ yrs BP, イチイガシの果皮・子葉(試料番号3)が $2,020 \pm 30$ yrs BPである(表5-2)。

次に暦年校正值を示す。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 σ , 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ , 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

2σ の暦年校正值についてみた場合、測定試料では試料番号1がcal BC 95-cal AD 47, 試料番号3がcal BC 84-cal AD 52となる。

表5-2 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年 (BP) 前処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	較正用 年代値	暦年較正年代(cal)												相対 比	Code No.	
					σ	cal	BC		cal	AD		cal	BP		cal	AD			
試料番号1	イネ胚乳 (炭化)10個	2,030 \pm 20 AAA	-23.97 \pm 0.27	2,029 \pm 21	2σ	cal	BC	49	-	cal	AD	27	cal	BP	1,998	-	1,948	1.000	IAAA-122482
						cal	BC	95	-	cal	AD	27	cal	BP	2,044	-	1,923	0.991	
						cal	AD	42	-	cal	AD	47	cal	BP	1,908	-	1,903	0.009	
試料番号3	イチイガシ 果皮・子葉 (炭化)1個	2,020 \pm 20 AAA	-24.23 \pm 0.32	2,015 \pm 21	σ	cal	BC	43	-	cal	AD	5	cal	BP	1,992	-	1,945	0.972	IAAA-122483
						cal	AD	14	-	cal	AD	16	cal	BP	1,936	-	1,934	0.028	
					2σ	cal	BC	84	-	cal	BC	80	cal	BP	2,033	-	2,029	0.005	
						cal	BC	53	-	cal	AD	33	cal	BP	2,002	-	1,917	0.946	
						cal	AD	36	-	cal	AD	52	cal	BP	1,914	-	1,898	0.049	

- (1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- (2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- (3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- (4)暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用
- (5)暦年計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- (6)暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- (7)統計的に真の値が入る確率は σ は68%, 2σ は95%である
- (8)相対比は、 σ , 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

②種実遺体分析

SK1からは、栽培種のイネの胚乳(炭化米)が1,895(+推定30,000)個(277.7g)、穎が6個(0.0g)と、木本のイチイガシが148個(38.8g)、アカガシ亜属が1個(0.0g)、コナラ属が180個(1.3g)の、合計2,230(+推定30,000)個(317.7g)の炭化した種実遺体が確認された(表5-3, 図版5-1)。

以下に、炭化種実等の出土状況を述べる。

試料番号1からは、イネの胚乳1,110個(9.4g)と、穎・胚乳8個(0.1g)を抽出・同定した。イネ以外では、イチイガシの子葉の破片が1個(0.1g)、コナラ属の果皮の破片が9個(0.0g)、子葉の破片が1個の、計11個(0.1g)が確認された。種実以外では、炭化材が0.5g(最大1.5cm)、土器片が4個(最大3.2cm)、岩片が1個、土粒が1個確認された。残りのイネ胚乳主体は、263.9g(600cc)を量り、約30,000個と推定される。

1. 自然科学分析

表5-3 種実同定結果

分類群	部位	状態など	調査区 II区 SK1								備考			
			-				マ							
			埋土水洗別済サンプル				埋土サンプル							
			1				2					3		4
個数	乾重 (g)	容積 (cc)	最大 (mm)	個数	乾重 (g)	容積 (cc)	個数	乾重 (g)	個数	乾重 (g)				
炭化種実														
イネ	穎	破片(基部)	-	-	-	-	4	0.0	-	-	-	-	-	
		破片	-	-	-	-	2	0.0	-	-	-	-	-	
	穎・胚乳	完形	8	0.1	-	-	12	0.1	-	-	-	-	-	
		完形未満～半分	-	-	-	-	4	0.0	-	-	-	-	-	
		破片(半分以下)	-	-	-	-	3	0.0	-	-	-	-	-	
	胚乳	完形(年代測定対象)	10	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		完形(計測対象)	100	0.9	2.2	-	100	0.8	-	-	-	-	-	計測結果は表5-4
		完形	1000	8.5	20	-	312	2.3	-	2	0.0	-	-	
		完形未満～半分	-	-	-	-	80	0.5	-	-	-	-	-	
		破片(半分以下)	-	-	-	-	264	0.5	-	-	-	-	-	
イネ主体	胚乳主体	完形・破片	約30000	263.9	600	-	-	-	-	-	-	-	-	推定個数,未分析
イチイガシ	果皮・子葉	完形(年代測定対象)	-	-	-	-	-	-	-	1	0.4	-	-	2個:花柱残存
		完形	-	-	-	-	-	-	-	34	19.3	-	-	子葉の合わせ目に沿わず割れている
		完形未満	-	-	-	-	-	-	-	25	6.7	-	-	
		破片	-	-	-	-	-	-	-	85	12.0	-	-	
	子葉	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.2	
		破片	1	0.1	-	7.3	-	-	-	-	-	1	0.1	
アカガシ亜属	果皮	破片	-	-	-	-	-	-	-	1	0.0	-	-	イチイガシの可能性,径0.6cm
コナラ属	果皮	破片	9	0.0	-	8.2	-	-	-	140	0.5	-	-	イチイガシの可能性
	果皮・子葉	破片	-	-	-	-	-	-	-	14	0.5	-	-	イチイガシの可能性
	子葉	破片	1	0.0	-	4.5	-	-	-	16	0.3	-	-	イチイガシの可能性
炭化材			-	0.5	-	15.2	-	0.1	6.5	7	0.4	1	-	3:最大1.1cm
アカガシ亜属	木材	ミカン割状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	半径2cm
サクラ属	木材	ミカン割状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	半径1.2cm
クスノキ科	木材	板目板状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ケヤキ	木材	不定形破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
植物片			-	-	-	-	-	0.4	-	-	-	-	-	
土器片			4	8.3	-	32.1	2	2.0	22.9	-	-	-	-	
岩片(主に径1cm以上)			1	4.1	-	29.4	-	18.4	-	-	-	-	-	
砂礫主体			-	-	-	-	-	14.6	-	-	-	-	-	
土粒(泥)主体(炭化物を含む)			1	0.1	-	4.9	-	-	-	-	10.9	-	-	
土壌分析量			-	-	-	-	-	488	300	-	-	-	-	

注)乾燥重量(g):表面に付着する泥の重量を含む。

試料番号2は、土壌300cc(488g)より、イネの穎が6個(0.0g)、穎・胚乳が19個(0.1g)、胚乳が756個(4.1g)と、炭化材が0.1g、植物片が0.4g、砂礫類が33g確認された。2式分(約200個)の作業量を超える種実(イネ781個)が抽出されたため、300ccの水洗にとどめている。

試料番号3は、イネの胚乳が2個(0.0g)と、イチイガシの果皮・子葉が145個(38.4g)、アカガシ亜属の果皮の破片が1個(0.0g)、コナラ属の果皮の破片が140個(0.5g)、果皮・子葉の破片が14個(0.5g)、子葉の破片が16個(0.3g)、種実以外では、炭化材が7個(0.4g)、土粒(泥)主体(炭化物含む)が10.9g確認された。

試料番号4は、炭化したイチイガシの子葉が2個(0.3g)と、炭化材が5個確認された。炭化材の樹種は、半径2cmのミカン割状がアカガシ亜属、半径1.2cmのミカン割状がサクラ属、板目板状がクスノキ科、不定形破片がケヤキに同定された。

本分析で確認された種実遺体各分類群の形態的特徴等を以下に述べる。

・イネ(Oryza sativa L.) イネ科イネ属

本分析で最も多く確認された炭化米は、ほぼ完全な形状をとどめ、表面模様も明瞭な個体が多くみられる。また、多くの炭化米は、表面に果皮や種皮が残る「玄米」の状態、内穎や外穎(粃)が付着する状態も少量確認された。炭化米の出土部位の厳密な区別は困難であるため、本分析では、非可食部の内穎・外穎を「穎」、内部の可食部を「胚乳」としている。

穎(果)・胚乳は、炭化しており黒色、やや偏平な長楕円体を呈す。試料番号1, 2より出土した状態が良好な胚乳各100個、計200個の大きさを計測した結果、長さは、最小3.5～最大5.6(平均4.75±標準偏差0.29)mm、幅は2.2～3.8(平均2.96±0.23)mm、厚さは1.5～3.0(平均1.98±0.18)mmであった(表4)。また、計測値をもとに、粒大(長さ×幅)・粒形(長さ/幅)(佐藤,1988)を求めた結果、長粒は0.5%、円粒は1.5%だけであり、短粒が99.5%と大部分を占めた。短粒は、小型が84.8%を占め、中型が8.6%、極小が6.1%と次いだ(表5-4)。

胚乳の基部一端には、胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面は、2～3本の縦隆条が明瞭で、穎が付着した個体も確認された。穎(果)は、長さ6～7.5mm、幅3～4mm、厚さ2～3mm程度で、基部に径1mmの斜切状円柱形の果実序柄(小穂軸)と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合して稲籾を構成する。果皮は薄く、表面には微細な顆粒状突起が縦列する。

・イチイガシ(*Quercus gilva* Blume) ブナ科コナラ属アカガシ亜属

果皮・子葉は、炭化しており黒色、長さ1.1～1.5cm、径1.1～1.3cm、重さ0.3～0.4gの楕円体で、頂部が尖る個体が多いことから、成熟した果実に由来すると考えられる。子葉は2枚からなり、合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。合わせ目に沿わずに割れた個体や、合わせ目に沿って割れた不揃いの破片が確認される。合わせ目に沿って割れた面は湾曲しており、頂端より約0.1～0.2mmの位置に幼根がある。子葉は硬く緻密で、表面には維管束の圧痕の縦溝がみられる。

今回確認された148個は、子葉の離れにくさ、著しい異形性、頂端が尖らず幼根の位置がずれているなどのイチイガシの特異性(岡本,1979)を典型的に示していることから、イチイガシに同定される。なお、半分未満の微細片31個は、イチイガシの典型的な特徴が確認されないため、コナラ属までの同定にとどめているが、おそらくイチイガシに由来すると考えられる。

また、多くの子葉の表面には果皮の破片が付着する。果皮は薄く、表面は平滑で細く浅い溝が縦列する。頂部には穀斗の圧痕である輪状紋があり、2個に2mm程度の花柱基部が確認された。なお、輪状紋がみられる果皮の破片をアカガシ亜属、果皮の微細な破片をコナラ属としているが、これらもイチイガシに由来すると考えられる。

表5-4 炭化米の大きさ

	II区 SK1														
	長さ(mm)					幅(mm)					厚さ(mm)				
	最小	最大	平均	標準偏差	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	
試料番号1	3.5	5.3	4.67	± 0.26	0.26	2.4	3.8	2.94	± 0.23	0.23	1.6	3.0	1.98	± 0.20	0.20
試料番号2	4.0	5.6	4.82	± 0.31	0.31	2.3	3.4	2.98	± 0.23	0.23	1.5	2.5	1.98	± 0.16	0.16
合計	3.5	5.6	4.75	± 0.29	0.29	2.3	3.8	2.96	± 0.23	0.23	1.5	3.0	1.98	± 0.18	0.18
	粒大(長さ×幅)					粒形(長さ/幅)					標本数(n)				
	最小	最大	平均	標準偏差	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	標準偏差					
	試料番号1	9.2	19.2	13.76	± 1.42	1.42	1.3	2.0	1.60	± 0.14		0.14	100		
試料番号2	10.2	18.3	14.34	± 1.52	1.52	1.4	2.1	1.63	± 0.15	0.15	100				
合計	9.2	19.2	14.05	± 1.50	1.50	1.3	2.1	1.61	± 0.14	0.14	200				
粒形	円粒(1.0-1.4)				短粒(1.4-2.0)				長粒(2.0-)						
	極小	小	中	大	極小	小	中	大	極小	小	中	大			
	粒大(8-12)	(12-16)	(16-20)	(20-)	(8-12)	(12-16)	(16-20)	(20-)	(8-12)	(12-16)	(16-20)	(20-)			
試料番号1	1	1	1	0	4	88	5	0	0	0	0	0			
試料番号2	0	0	0	0	8	79	12	0	0	1	0	0			
炭化米合計	1	1	1	0	12	167	17	0	0	1	0	0			
頻度(%)	0.5%	0.5%	0.5%	0.0%	6.1%	84.8%	8.6%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%			

注)計測値はデジタルノギスによる。粒大(長さ×幅)、粒形(長さ/幅)は、佐藤(1988)の定義に従う。

1. 自然科学分析

(5) 考察

SK1では、炭化米とイチイガシともに、ほぼ同じ放射性炭素年代値を示した。暦年代較正值は、cal BC 95-cal AD 50前後である。この年代値は、弥生Ⅳ期～Ⅴ期の中期後半から後期前半に相当する(今村・設楽,2011)。SK1からは、弥生時代中期末の土器が検出されており、含まれる炭化植物遺体の放射性炭素年代と土器の相対年代が整合的である。なお、今村・設楽(2011)によると、現段階では放射性炭素年代値によって、中期の下限年代をおさえるにいたっていないとされる。

このSK1からは、多量の炭化米と炭化種実が検出されている。炭化米は、土坑の隅でまとまって出土している。炭化種実も、そのほとんどが弥生土器壺内に存在していたものである。この土坑内からは、炭化種実の入った土器やその他の土器、礫などが検出されている。土坑埋土は、泥質堆積物で構成され、炭化米の検出部分で微細な焼土粒の混入が確認されている。ただし、埋土内には、炭化材片がほぼ認められず、土坑底部や側壁部に被熱痕跡が認められない。

今回同定を行った炭化米は、大部分を短粒が占めた。多くの出土穀粒の保存状態が良好で、表面に穎(粃)が残る個体も少量確認されたことから、粃がついた生米の段階で火を受け炭化したものとみなされる。また、炭化種実の殆どがイチイガシの果皮が付いた子葉に同定された。イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する常緑高木で、現在の本地域にも分布している。また、イチイガシは、子葉が生食可能で収量も多い有用植物であることから、遺跡出土例も多い(渡辺,1975;岡本,1979など)。弥生時代では、イチイガシの貯蔵は稲作と伴ってみられ(那須,1975)、イネと共にイチイガシも重要な植物食であったと推定されている。出土果実は、当時の遺跡周辺域の照葉樹林から持ち込まれた植物質食料と唆され、火を受け炭化したものとみなされる。

ただし、上記したSK1の発掘状況から、土坑内において燃焼が行われたとは考えられない。埋土に含まれる炭化材片は少なく、これらはアカガシ亜属、サクラ属、クスノキ科、ケヤキに同定された。発掘結果をふまえると、今回同定した炭化米、炭化種実は、SK1内以外の場所で火を受けた後に、最終的にSK1内に存在するようになったと捉えられる。炭化米、炭化種実の生成過程およびSK1への埋没過程については、調査区の遺構形成過程と、今回の同定試料のより詳細な観察などから、さらに検討を進めていくことが課題として認識される。

引用文献

今村峯雄・設楽博巳,2011,炭素14年の記録から見た自然環境-弥生中期-。多様化する弥生文化 弥生時代の考古学3,同成社,48-69.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑。石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑。東北大学出版会,642p.

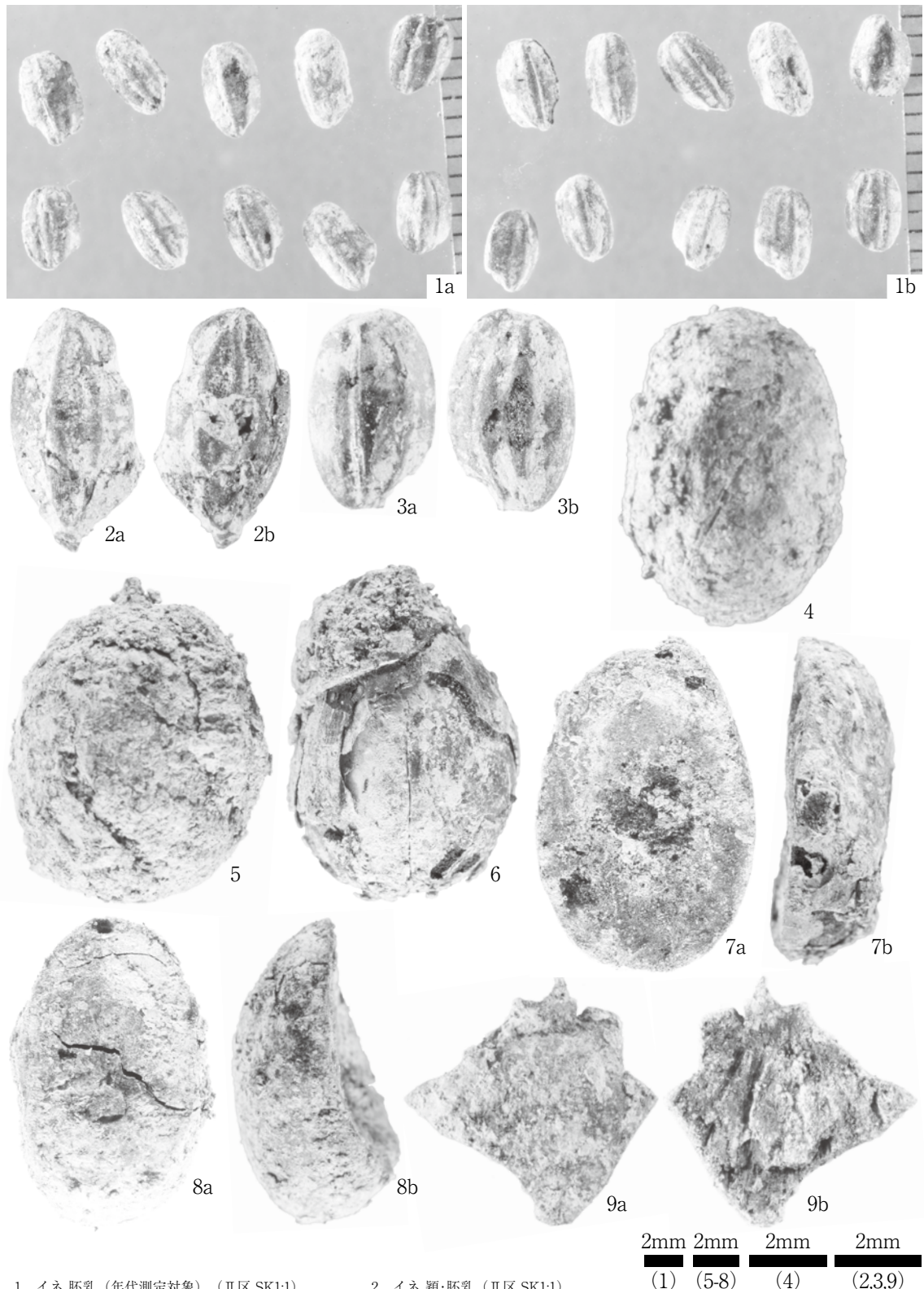
Nasu, H., Momohara, A., Yasuda, Y., and He, J.J., 2007, The occurrence and identification of *Setaria italica* (L.) P.Beauv. (foxtail millet) grains from the Chengtoushan site (ca.5800 cal B.P.) in central China, with reference to the domestication centre in Asia. *Vegetation History and Archaeobotany*, 16, 481-494.

那須孝悌,1975,山口市萩峠遺跡貯蔵穴中の植物遺体および花粉(予報)。山口市教育委員会。

岡本素治,1979,遺跡から出土するイチイガシ。大阪市立自然史博物館業績,第230号,31-39.

佐藤敏也,1988,弥生のイネ。弥生文化の研究2生業,金関 怨・佐原 真編,雄山閣,97-111.

渡辺 誠,1975,縄文時代の植物食。雄山閣出版,187p.



- 1. イネ 胚乳 (年代測定対象) (Ⅱ区 SK1:1)
- 2. イネ 穎・胚乳 (Ⅱ区 SK1:1)
- 3. イネ 胚乳 (計測対象) (Ⅱ区 SK1:1)
- 4. イチイガシ 果皮・子葉 (年代測定対象) (Ⅱ区 SK1:3)
- 5. イチイガシ 果皮 (柱頭残存)・子葉 (Ⅱ区 SK1:3)
- 6. イチイガシ 果皮 (柱頭残存)・子葉 (Ⅱ区 SK1:3)
- 7. イチイガシ 果皮・子葉 (子葉の合わせ目に沿って割れた破片) (Ⅱ区 SK1:3)
- 8. イチイガシ 果皮・子葉 (子葉の合わせ目に沿って割れた破片) (Ⅱ区 SK1:3)
- 9. アカガシ 亜属 果皮 (頂部) (Ⅱ区 SK1:3)

図5-1 バーガ森北斜面遺跡の種実遺体

2. 磨製石包丁の使用痕分析

愛知県教育委員会 生涯学習課文化財保護室
管理グループ 主査 原田 幹

(1)はじめに

高知県吾川郡いの町字奥名・是友に所在するバーガ森北斜面遺跡の発掘調査では、弥生時代中期後半を主とする磨製石包丁が約51点出土している。本分析は、これらの石包丁の機能及び使用方法を明らかにするために、実験使用痕分析の方法に基づいて行ったものである。顕微鏡を用いた微小光沢面をはじめとする使用痕の観察を行い、石包丁の使用部位、操作方法、作業対象物について検討した。

(2)分析資料と分析方法

分析資料は、平成22・23年度の発掘調査で出土した磨製石包丁である。出土資料のなかで比較的遺存状況のよい9点を対象に刃部を中心とした予備的な観察を行い、明瞭な使用痕が観察された377、829、228の3点(図5-2)についてより詳細な分析を行った。この3点以外にも使用痕は観察されたが、分析に費やせる時間的な制約から詳細な観察記録を残せなかったものである。

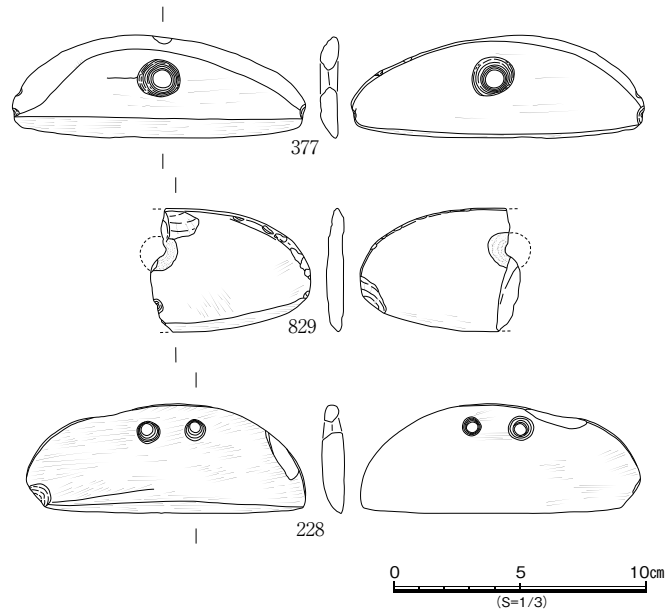


図5-2 分析石器実測図

使用痕の観察は、いわゆる高倍率法(Keeley1980)に基づく観察を主とし、低倍率による観察を補足的に行った。低倍率観察は、ズーム式のマイクロSCOPE⁽¹⁾を使用し、摩滅、剥離痕等規模の大きな使用痕の状況を確認した。高倍率観察は、小型金属顕微鏡⁽²⁾を使用し、100倍・200倍・500倍(対物倍率10倍・20倍・50倍)を用いて、摩滅痕、微小光沢面(以下光沢面とする)と光沢面上に形成された線状痕を観察した。東北大学使用痕研究チーム(梶原・阿子島1981)による光沢分類をもとに、石器に形成された光沢面の特徴、分布範囲と光沢の強度などの記録を作成し、必要に応じて使用痕の写真撮影を行った。観察した石器について特別な前処理や洗浄は行っていないが、観察前にエタノールによって脂分などの汚れを拭き取った。また、使用痕の画像の撮影は市販のデジタルカメラ⁽³⁾を使用し、焦点距離をずらして撮影した連続画像を焦点合成ソフト⁽⁴⁾で処理し、多焦点使用痕画像を作成した。

本分析では、AタイプやBタイプの植物光沢について、顕微鏡の観察視野中に占める光沢面の広がり方(大きさ、接続度、密度といった属性)を目安とし、光沢面の発達に応じて次のように区分する。

強：光沢面が大きく発達した状態。平面的に広範囲に広がるものを含む。

中：小から中程度の光沢面が密集または接続し広がりつつある状態。

弱：小さな光沢面が単独で散在する状態。

微弱：微小な光沢面がわずかに確認される状態。

なし：光沢面が認められない状態。

光沢面の大きさ、面積等は厳密に計測しているわけではないが、強は概ね径 100 μ m 以上、中は 50～100 μ m、弱は 50 μ m 以下を目安としている。実測図中には、強・中・弱・微弱の光沢強度、あるいは光沢なし・観察不能といった観察結果を記号で記入し、光沢面の分布状況を記載していく。

(3)分析結果の概要

3点の石包丁の分析結果については、図5-3の光沢分布図及び図5-4・5の使用痕顕微鏡写真により記述していくが、ここで石包丁の面の呼称についてことわっておく。通常石包丁の実測図は、片刃の場合、刃が付けられている面が表、刃面のない平坦な面を裏として表記することが多いが、本分析では、平坦な面を a 面、刃が付けられている面を b 面とし、a 面を断面図の左に配しているため、報告書の実測図表記とは逆になっている。以下、各石器の観察所見を記す。

377

半月形の完形品で、背部中央に孔1つ、刃部断面形は片刃である。結晶片岩製。肉眼及び低倍率では、刃縁に摩滅、光沢がみられる他、背部にも比較的明瞭な光沢が認められる。高倍率観察では、a・b面の広範囲に光沢面が認められる。光沢面はやや丸みをおびた水滴状を呈し、表面はきわめて明るくなめらかである(写真6)。光沢面の分布は、a面の方が全般的に発達しており、刃部中央から左辺

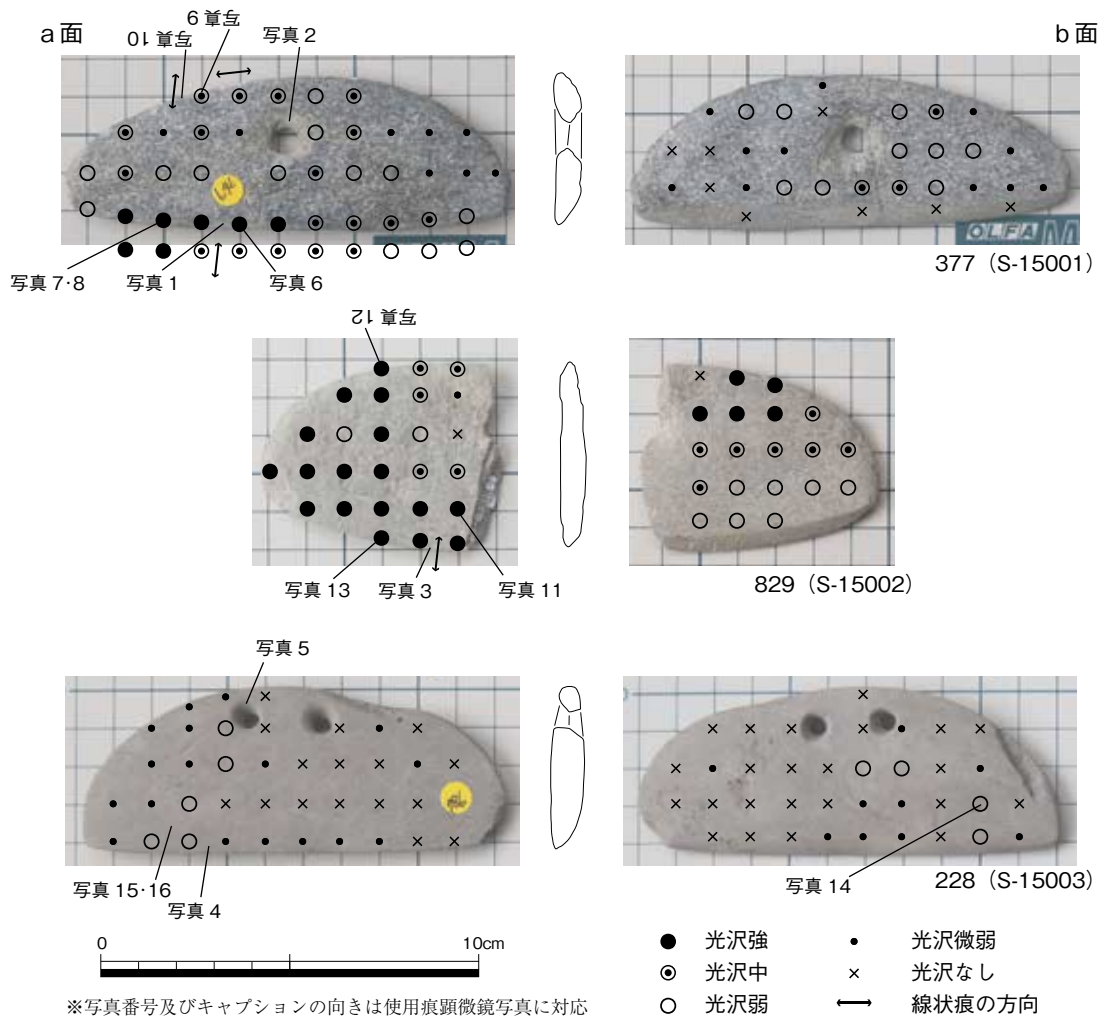


図5-3 光沢分布図・写真位置図

2. 磨製石包丁の使用痕分析

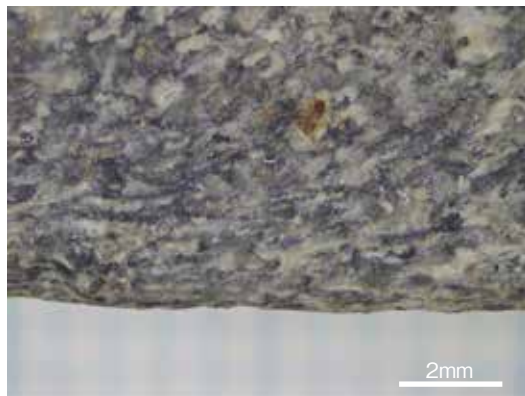


写真1 377 刃部拡大

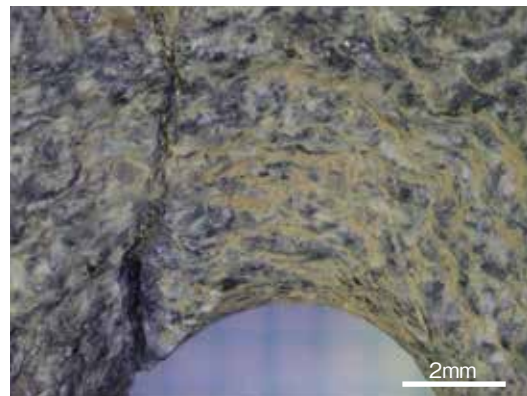


写真2 377 穿孔部拡大

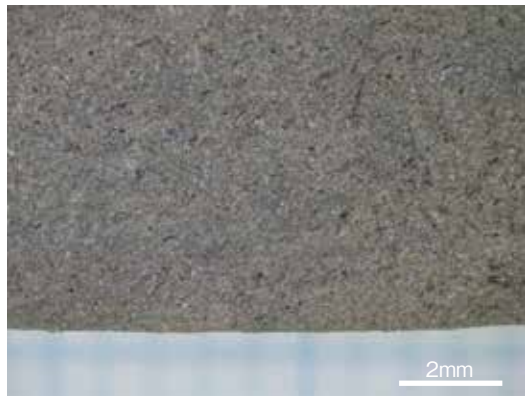


写真3 829 刃部拡大

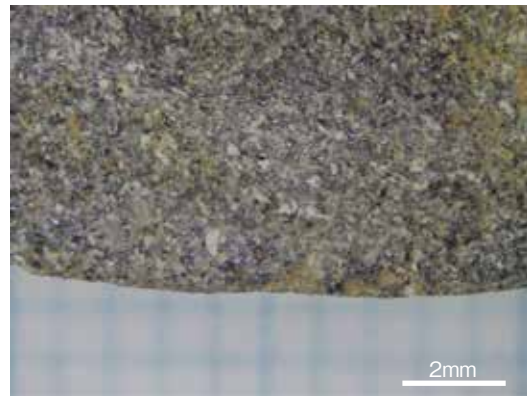


写真4 228 刃部拡大



写真5 228 穿孔部拡大

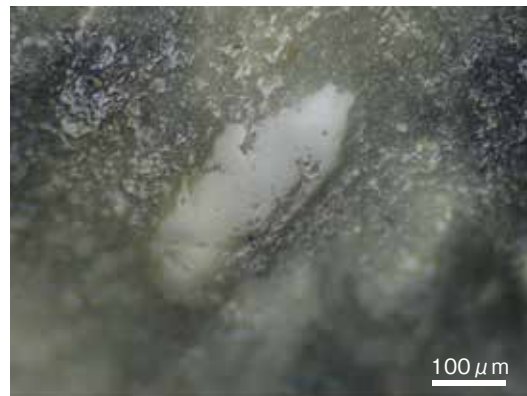


写真6 377 a面刃部の光沢面



写真7 377 刃部（正面）の光沢面

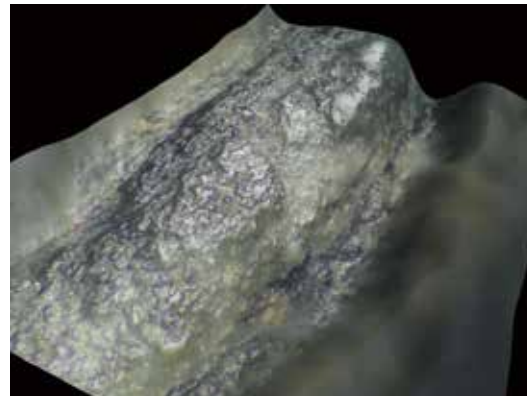


写真8 写真7の立体画像

図5-4 使用痕顕微鏡写真(1)

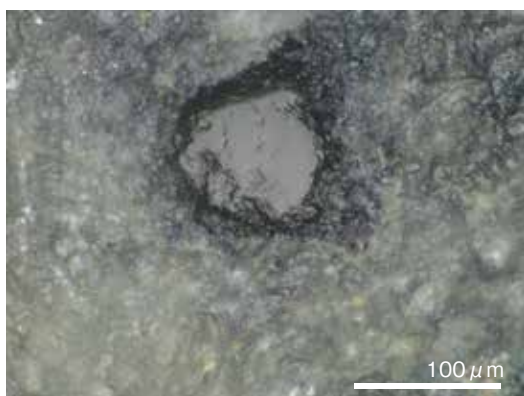


写真9 377 a面背部の光沢面

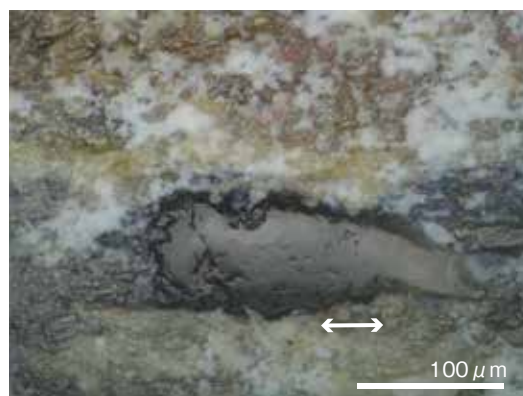


写真10 377 背部(正面)の光沢面

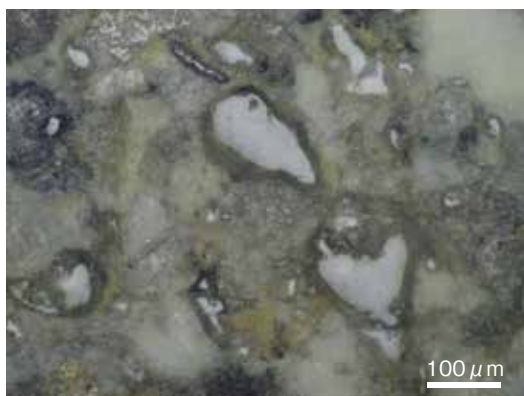


写真11 829 a面主面の光沢面

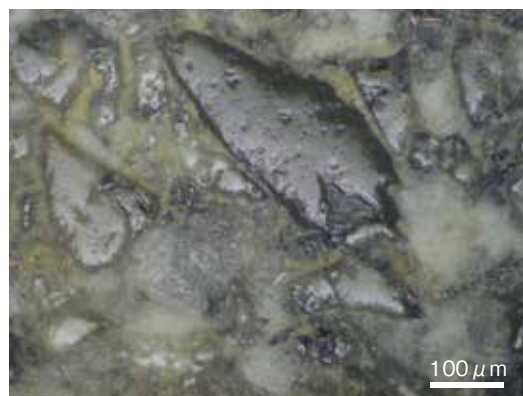


写真12 829 a面背部の光沢面

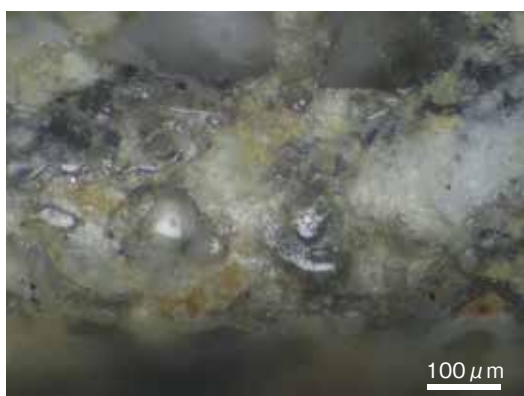


写真13 829 刃部(正面)の光沢面

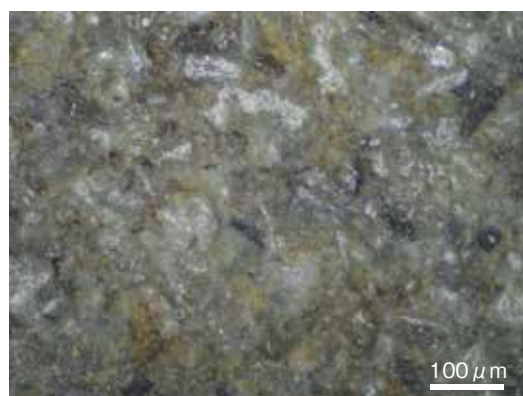


写真14 228 b面主面の光沢面

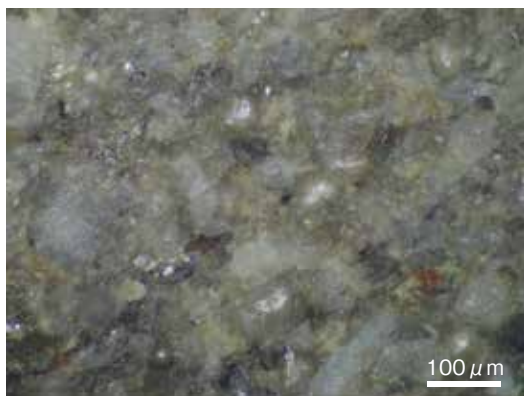


写真15 228 a面主面の光沢面

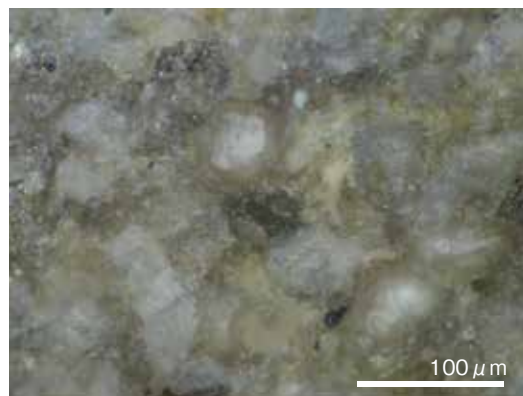


写真16 228 同写真15

図5-5 使用痕跡顕微鏡写真(2)

2. 磨製石包丁の使用痕分析

にかけて最も強くなっている。刃部正面の観察では、刃縁が摩滅し丸みをおび、その高所に光沢面が形成されている(写真7・8)。この部分では、摩滅部に刃縁と直交あるいは斜行する溝状の線状痕が観察される。また、背部にも発達した光沢面がみられる(写真9・10)。写真10は背部を正面から観察した画像であるが、縁辺に平行する鋭い線状痕が認められる。

829

約半分を欠損する。孔は1つ残存し、刃部断面は片刃である。砂岩製。肉眼及び低倍率では、摩滅等は顕著ではないが、器面に光沢が認められる。高倍率観察では、a・b面ともに非常に発達した光沢面が認められるが(写真11～13)、相対的にa面の方が光沢は強い。光沢面は点状に発達し、表面は明るくなめらかである(写真11)。写真13の刃縁の光沢面はあまり強くないが、縁辺は若干摩滅し、直交方向の線状痕が認められる。

228

半月形の完形品で、背部中央に2孔穿孔、刃部断面形は片刃である。石材は砂岩製である。肉眼及び低倍率では、刃縁等に顕著な摩滅、剥離痕等は認められない。高倍率観察では、a・b面ともに光沢面が認められるが、発達程度は全般的に強くない。光沢面が比較的発達しているのは、a面の左主面とb面の右主面である。光沢面は点状に発達し、表面は明るくなめらかである(写真14～16)。刃部正面の光沢があまり発達していないため、線状痕の方向は確認できなかった。

(4)機能推定

前項の観察所見をふまえて、石包丁の使用痕の特徴と機能について推定する。

機能部

光沢面等の使用痕の分布範囲は、作業対象物と石器との接触範囲を表している。石包丁の光沢面は非常に広範囲に分布しており石器の器面全体が対象と接触していたとみられるが、強く発達しているのはa面の中央から左側にかけての刃部及び主面で、主にこの部分が作業対象と接触した機能部とみられる。

操作方法

明確な線状痕が認められるのは刃部であり、377・829とも刃縁と直交する。このことから石器の刃を直交方向に動かして対象を切断したものと考えられる。なお、377の背部では縁辺と平行する線状痕がみられたが、これは背部の研磨による痕跡の可能性が高い。

作業対象物

微小光沢面は、点状に発達し、典型的なものはなめらかな水滴状の外観をもつ。光沢の表面は明るく非常になめらかで、若干のピット、微細な線状痕がみられる。これらの特徴は、BタイプおよびAタイプの光沢面の特徴に近く、実験では水分を含んだイネ科等の草本植物に対する作業で確認されている。

以上の検討から、今回観察した石包丁の機能は、水分を含んだイネ科等の草本植物をa面(平坦な面)の左寄りの主面・刃部にあて、刃を直交方向に操作して切断する機能が推定される。

(5)まとめ

実験と使用痕に依拠した石包丁の使用方法の検討については、御堂島正(御堂島1989)、松山聡(松

山 1992)などの先行研究があり、イネなどの穀物の穂を刈り取る「穂摘み」の使用方法が推定されている。筆者はイネに加えアワ、キビなど穀物の収穫実験を行い、収穫具の使用方法を検討している(原田ほか 2013)。その使用方法是、図5-6のように石器を手に保持し、石器の主面と親指で対象となる植物をとらえ刃部に押さえつけながら、手首を内側にひねって摘み取る、「穂摘み」によるものと考えられる。バーガー森北斜面遺跡の石包丁は、比較的明瞭な刃面を作出し、片刃とするものが多い。分析資料をみる限り、刃が付けられた面(b面)を裏として、平坦な面(a面)に穂を押さえつけるといった面の使い分けがはっきりしているのも特徴である。



図5-6 石包丁の使用方法

今回推定された石包丁の使用方法是、これまで一般的に考えられてきたものであるが、一方で、石包丁の操作方法来に多様性があるとの指摘がなされており(高瀬2008)、これは今後の課題でもある。本分析の成果が本遺跡の理解と今後の石器研究進展の一助となれば幸いである。

補注

- (1) マイクロネット社製CマウントズームスコープZ-2(対物倍率0.7~5倍)
- (2) モリテックス社製同軸落射照明光学ユニットSOD-Ⅲ, 対物レボルバー, オリnbas製対物レンズMPlan(10・20・50倍), 10倍接眼レンズ, LED照明装置
- (3) PENTAXQ, スーパーC, マウントズームアダプターNY-CZ
- (4) ヘリコン社製焦点合成ソフトHelicon Focus Pro

参考文献

- 阿子島香 1989『考古学ライブラリー56 石器の使用痕分析』ニュー・サイエンス社
- 梶原洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究-ポリッシュを中心とした機能推定の試み-(東北大学使用痕研究チームによる研究報告その2)」『考古学雑誌』第67巻第1号 日本考古学会 1-36頁
- 高瀬克範 2008「京都府深草・大阪府瓜破遺跡出土石包丁の使用痕分析」『駿台史学』第134号 駿台史学会 73-94頁
- 原田幹・網倉邦生・中山誠二 2013「石器による収穫実験と使用痕-アワ・キビ・イネを対象として-」『山梨県立博物館研究紀要』第7集 山梨県立博物館 23-33頁
- 松山聡 1992「石包丁の使用痕」『大阪文化財研究』第3号 財団法人大阪文化財センター 1-10頁
- 御堂島正 1989「抉入打製石包丁の使用法-南信州弥生時代における打製石器の機能-」『古代文化』第41巻第8号 古代学協会 1-15頁
- Keeley, L. H. 1980 Experimental Determination of Stone Tool Uses. Univ. of Chicago Press.

第Ⅵ章 まとめ

1. バーガ森北斜面遺跡出土の弥生土器について

今回のバーガ森北斜面遺跡で出土した弥生土器は破片総数含めて岩神地点 2,982 点, 三世庵地点 27,541 点, 合計 30,523 点である。調査面積の割合からみても三世庵地点で集中して出土している傾向がみられる。出土した弥生土器は壺・甕・鉢・高杯があり, 壺・甕については在地系のものと凹線文系のものに分けられる。前者の甕についてはバーガ森北斜面遺跡が立地する仁淀川流域以西, 土佐の南西部に多く分布する「南四国型甕」⁽¹⁾として提唱されているものであり, 今回出土した弥生土器もこの甕が主体を占める。壺・甕については全体が復元されたものでないと判別つかない器形のもが多く, 口縁部から頸部の破片については復元された土器の口頸部の開き方や, 口縁部の形態, 外面の施文方法をモデルに分類した。以下に, 分類の視点を述べる。

(1) 器形の特徴—甕にみられる胴部の張りとお径の開き—

今回の調査で出土した在地系甕について口縁部から胴部の最大径が復元できる個体についてその特徴をみていきたい。胴部から頸部にかけて窄まり, 頸部が直立気味に立ち上がり, 口縁部にかけて外反するタイプ(壺形)と, 胴部から口縁部にかけて緩やかに外反するタイプがみられる。前者は胴部と頸部の境目に段が生じ, 壺に分類される場合も考えられるがここでは甕として分類する。バーガ森北斜面遺跡出土の甕の特徴は, 胴部の最大径より口径が大きく, 口径/胴径の指数が 100 をこえるものが多い。弥生時代後期前半代(V期)に位置付けられている仁淀川流域の北高田遺跡(土佐市)の「南四国型甕」の系譜を引く甕は, 口径が 100 を越えるものがなく, 口縁部の外反の度合いが弱くなる傾向がある。⁽²⁾バーガ森北斜面遺跡では全体の 71.4 %が 100 を越えており, IV期の当該地域の甕の特徴を表している。法量は口径が 10cm内外を測る小型と, 20cm内外を測る中型が主体を占め, 30cm内外の大型が少量みられる。胴部はなで肩で胴部中位に張りがあるもの, 肩が張り, 胴部上位に最大径がくるものがある。

(2) 口縁部の形態

従来から当該地域で呼ばれている弥生時代中期末から後期初頭の甕については「南四国型甕」と呼ばれる一群が存在する。この土器の特徴については, 口縁部の粘土帯貼付と, 刻目と微隆起突帯を巡らす施文を中心としている。

貼付口縁の形態は断面四角形(長方形), 断面三角形(玉縁状), 断面台形, 断面楕円形, その他(貼付帯下端が薄く, 上端を下方に摘み出す)に分かれる。貼付口縁のものが 62.0 %で主体を占める。その他, 素口縁が 31.1%, 凹線文が 6.9%を占める。

I 類: 貼付口縁

A. 断面四角形(長方形)

長い粘土帯を貼付するのは壺(長頸壺)に多い。外面貼付帯全面に縦長の刻目を施し, 下端もしくは直下に浮文を配するものが多い。

1. バーガ森北斜面遺跡出土の弥生土器について

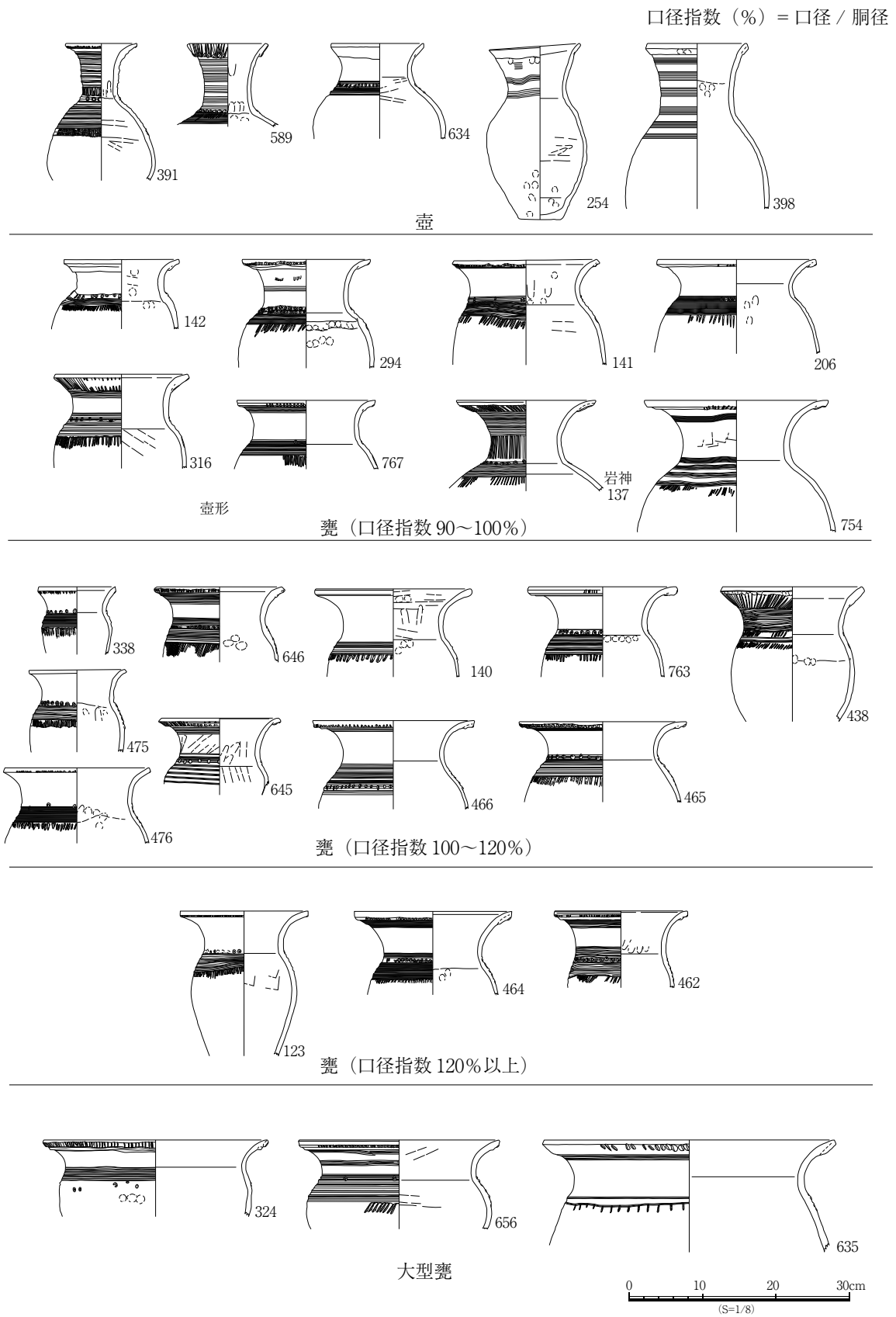


図6-1 口縁部の形態分類(表記のないものは三世庵地点の図版番号である)

B. 断面三角形

頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部にかけて外反するタイプ(壺形)に多い。細い粘土帯を口縁外面に貼付し、外方に摘みナデ調整により成形する。三角形の上端面全面に刻目を施すタイプが多い。

C. 断面台形

口縁端部を四角く成形し上端を摘みナデ調整を施し、外下方に面を造り、刻目を施す。下端は角を摘み微隆起帯状に仕上げる。外面貼付帯直下に櫛描直線文を施すものが多い。

D. 断面楕円形

幅の広い粘土帯を薄く貼付し、口縁端部を丸く収める。外面の刻目は貼付帯全体に縦長の刻目を施すものと、無文で端部を僅かに外方に摘むタイプがある。

E. その他

外面貼付帯下端が薄く、指頭圧痕が連続するものが多い。上端を下方に摘み出し、端面が拡張気味のものである。

II類：素口縁

A. 拡張あり(凹線文系)

端部を上下に拡張し、端部が面を成すもの。口縁端部を上下に拡張し、凹線文を施したものの。

B. 拡張なし(非凹線文系・在地系)

器形は「南四国型甕」と同じで、口縁部の粘土帯貼付は無く、尖り気味に仕上げるもの、面を成すものがある。外面の施文は施されないものが主体を占める。








分類	I類(貼付口縁)					II類(素口縁)	
	A	B	C	D	E	A	B
口縁形態							
特徴	断面四角形(長方形) 端面に刻目+浮文	断面三角形 上端面に刻目 無文	断面台形 上端に刻目+ 下端に微隆起帯	断面楕円形 端面に刻目 無文	その他 外面貼付帯に 指頭圧痕	拡張あり 外面に凹線文 沈線・無文	拡張なし 甕には刻目を 残すものがある

図6-2 口縁断面形分類模式図

(3)文様構成—施文方法の特徴—

ここでは、バーガ森北斜面遺跡出土の弥生土器にみられる文様構成をみてみたい。甕については基本的に「貼付口縁」に「刻目」を施し、微隆起帯と櫛描文、浮文を施す文様構成が優位を占める。バーガ森北斜面遺跡出土の土器は全体の64.4%がこの文様構成を占めている。ただ、施文方法にバリエーションがあり、一定の時期差を考慮する必要があるものと思われる。

壺

口縁部：刻目+浮文(円形・楕円形)

頸部：櫛描直線文のみ 微隆起帯のみ 櫛描直線文+微隆起帯 下位には垂線(棒状浮文風に仕上げる)

胴部：頸部との境目に浮文(円形・ドーナツ状・楕円形(粒状))+櫛描直線文+微隆起帯+棒状浮文

甕

口縁部：刻目+微隆起帯

頸部：櫛描直線文(口縁部直下)微隆起帯

胴部：浮文+櫛描直線文+微隆起帯+棒状浮文→列点文

櫛描直線文を強く施すことにより、単位間が稜を成し微隆起帯状にしているものがある。また、棒状浮文については、幅の広い工具により押圧し、単位と単位の間を棒状浮文風にみせるものもある。また、棒状浮文の代わりに縦長の刻目を列点状に施すタイプもある。頸部は基本的に無文で口縁部直下に数条の櫛描直線文と微隆起帯を巡らすものが多い。I A・I B・I Cタイプの貼付口縁には多いがI D・I Eタイプにはほとんどみられない。II類は口縁部の施文がほとんど無くなり、僅かに刻目と微隆起帯を持つもの、刻目だけのもの、無文のものがみられる。

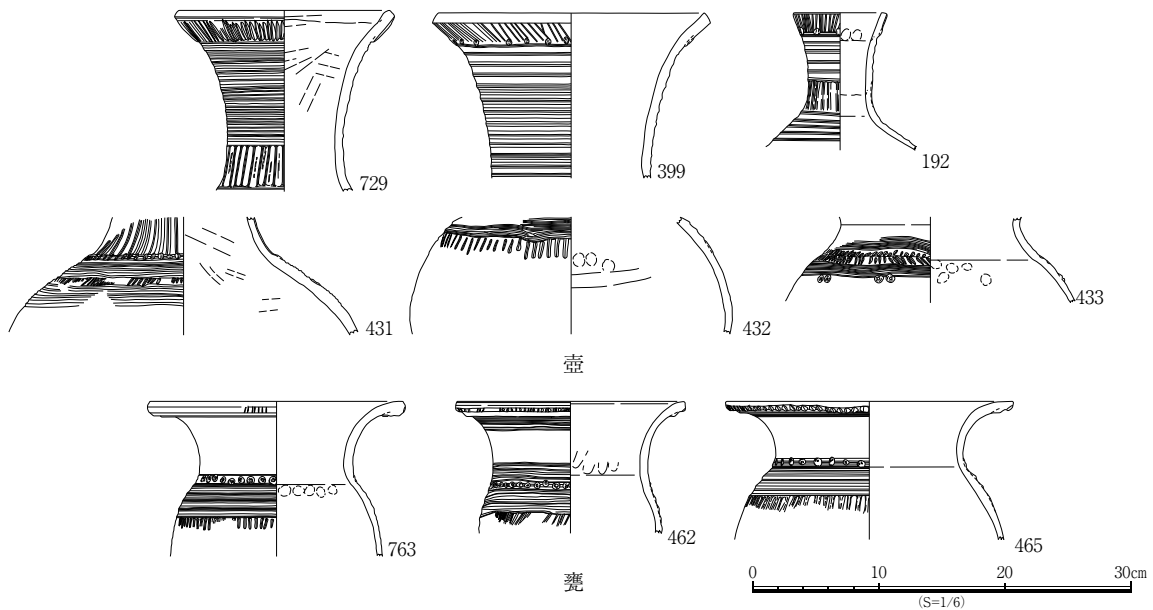


図6-3 壺・甕文様模式図(番号は三世庵地点の図版番号である)

(4)胎土・色調の違いによる土器の特徴

バーガ森北斜面遺跡出土の弥生土器は胎土・色調により、形態・文様構成の違いも認められる。胎土は黒、灰色を呈する黒色系のものと、黄色、黄橙色、橙色を呈する黄橙色系のものに大きく二分される。壺・甕の主体を占める「南四国型甕」は胎土に直径1.0~2.0mmのチャート・石英粒を多く含み、色調が黒、もしくは灰色を呈するものが主体を占める。その中に黄橙色系のものもわずかにみられるが、長頸壺の頸部の施文に櫛描直線文が無く、微隆起帯のみの施文であり、甕はII Bタイプの口縁形態のものにみられる。黄橙色系は、口縁部の形態がI D・I Eタイプのもので外面貼付帯に指頭圧

痕を残すもの、口縁部の形態がⅡAタイプで凹線文が施されるものが主体を占める。高杯は凹線文系のもので占められ、全て黄橙色系である。

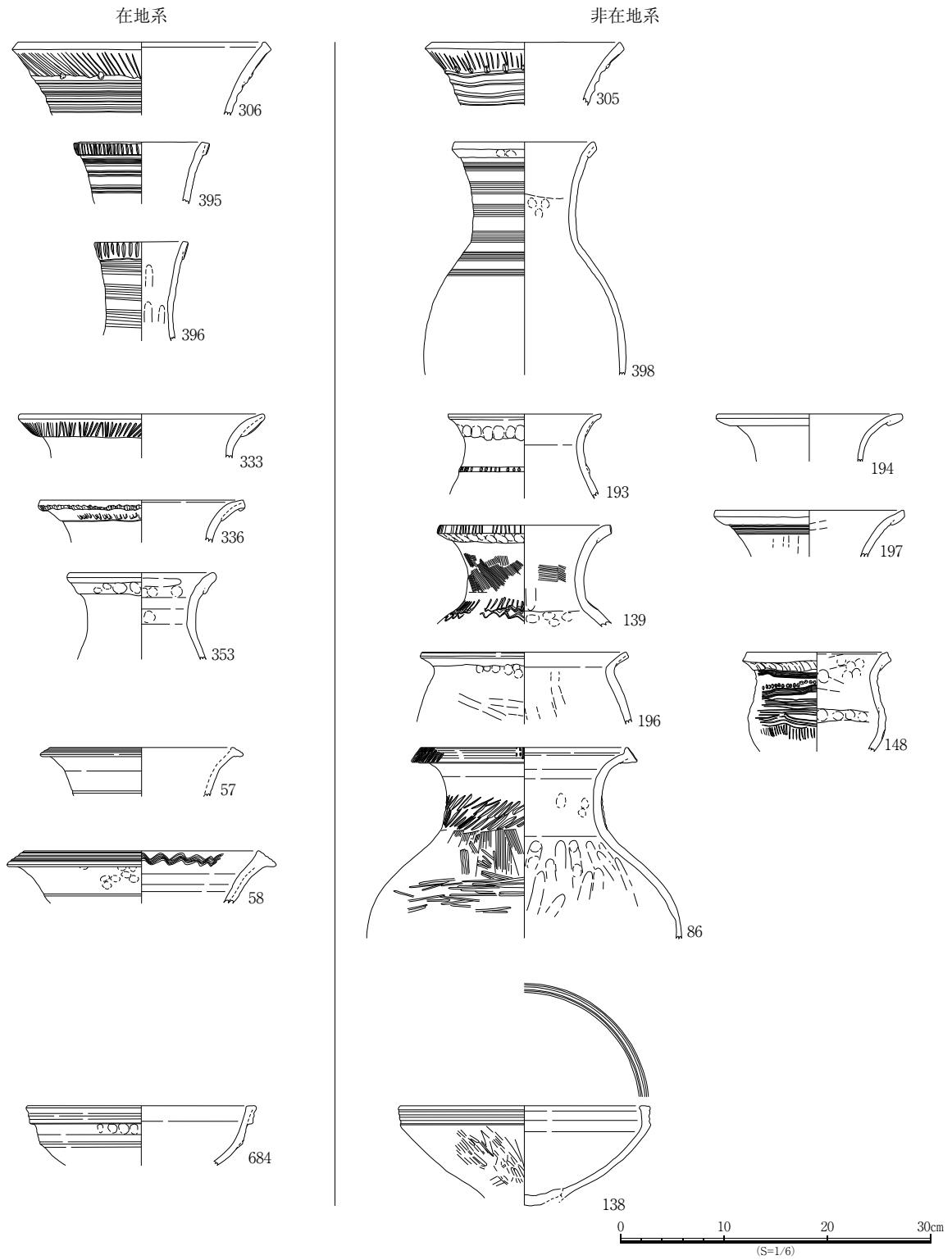


図6-4 胎土・色調による土器相對図(番号は三世庵地点の図版番号である)

2. バーガ森北斜面遺跡出土の石器について

(5) 在地系土器と非在地系土器の比率—貼付・素口縁・凹線文—

壺・甕は貼付口縁(I類)が壺62.5%, 甕61.6%, 素口縁(II B類)は壺26.3%, 甕34.3%, 高杯は30.4%, 鉢は100.0%を占める。在地系土器の割合は全体の85.6%を占める。これに対し, 非在地系のII A類, 凹線文系の壺11.2%, 甕4.1%, 高杯69.6%, 鉢0%で土器全体の14.4%である。バーガ森北斜面遺跡では, 壺・甕類については在地系のものが優位を占め, 高杯は凹線文系土器を需要していた状況がうかがえ, 8~9割を在地系土器が占めていたことがわかった。バーガ森北斜面遺跡と同じ弥生時代中期末の高地性集落に位置付けられている本村遺跡(香南市野市町)⁽³⁾と比較すると, 非凹線文が67.3%, 凹線文が36.3%と凹線文系土器の比率が3~4割程度を占めており, 高知平野東部の様相と比較するとバーガ森北斜面遺跡は凹線文の需要と浸透が浅いように見える。高杯では貼付口縁にナデ調整を施し凹線文風に仕上げる異質のタイプがあり(図3-9 684・685)在地系土器の一部に凹線文を取り入れようとするものもみられるが, 一般的ではない。少なからず壺・甕類については在地色が強い遺跡といえる。

表6-1 在地系土器と非在地系土器の比率

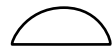
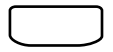
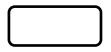


	土器点数	組成比率(%)	凹線文	非凹線文	
			点数(%)	素口縁	貼付口縁
壺	160	34.6	18(11.2%)	42(26.3%)	100(62.5%)
甕	245	52.3	10(4.1%)	84(34.3%)	151(61.6%)
高杯	56	11.8	39(69.6%)	17(30.4%)	
鉢	6	1.3	0(0.0%)	6(100.0%)	
合計	467	100.0	67(14.4%)	400(85.6%)	

2. バーガ森北斜面遺跡出土の石器について

(1) 石包丁の特徴

バーガ森北斜面遺跡出土の石包丁は磨製石包丁が断片も含めて三世庵地点で40点, 岩神地点で12点の合計52点が出土し, 打製石包丁は三世庵地点で3点, 岩神地点で1点の合計4点が出土した。全体の93%を磨製石包丁が占める。バーガ森北斜面遺跡出土の石包丁は全体的な研磨が施されており, 有側タイプの一部を除いては, 全体的に丁寧な研磨が施された磨製石包丁である。形態的には半月状を呈した無側の弧背直刃タイプのもが主体であり, 全体の44.7%を占める。側部を持つ有側タイプでは弱直背直線刃タイプ19.1%, 直背直刃タイプ14.9%, 弱直背弱凸刃タイプ12.8%, 直背弧刃タイプが8.5%を占める。有側の弱直背直線刃タイプは側部の面取りがされているものであり, 形状的には無側の弧背直刃と同じ様なタイプも含まれる。三世庵地点では無側タイプ, 有側の弱直背直線刃タイプが主体を占め, 岩神地点では有側の弱直背直線刃タイプ以外の有側タイプが多くみられる。全体形状が判る資料点数での分類なので時期差か出土地点差かは不明であるが, 傾向としては興味深い。打製石包丁は両端に挟りが入るタイプであり, 全体の7%しか普及していない。紐孔は確認できるもので一穴が全体の34%, 二穴が66%を占める。二穴のものは管状工具による穿孔が多

表6-2 石包丁の形態分類と出土比率

凡例	A(無側)	B(有側)				合計
		1. 直背弧刃 	2. 直背直刃 	3. 弱直背弱凸刃 	4. 弱直背直線刃 	
三世庵地点	20点(55.5%)	1点(2.9%)	4点(11.1%)	3点(8.3%)	8点(22.2%)	36点
岩神地点	1点(9.0%)	3点(27.3%)	3点(27.3%)	3点(27.3%)	1点(9.0%)	11点
合計	21点	4点	7点	6点	9点	47点

く、穿孔の際の第一工程の敲打による凹みは認められない。一穴タイプは敲打による凹みが認められる。石質は頁岩(泥岩)が全体の70%を占める。有側タイプでは片岩類が14%、砂岩7%、玄武岩2%を占める。いずれも仁淀川水系で抽出できる石材であり、特に今回石包丁の未製品として取り上げたものについては、ほとんどが頁岩(泥岩)の剥離仕上げのものである。

今回、磨製石包丁について使用痕の分析を行った。⁽⁴⁾内容、結果については第V章 分析の項に詳しいが、明瞭な使用痕が認められたのは分析を行った石包丁9点の内、2点(377・829)からである。これは、石器の主面と親指で対象となる植物をとらえ刃部に押さえつけながら、手首を内側にひねって稲の穂を摘み取る、「穂摘み」によるものと考えられている。出土した全ての石包丁についての分析は時間的制約のためできなかったが、実際に石包丁が稲作の道具として使用されていた事が分析結果から裏付けする事ができた。岩神地点で検出された炭化米と併せてバーガ森北斜面遺跡では、周辺部で稲作が行われていた事が明らかとなり、谷水田の営みを持った集落である事がわかった。

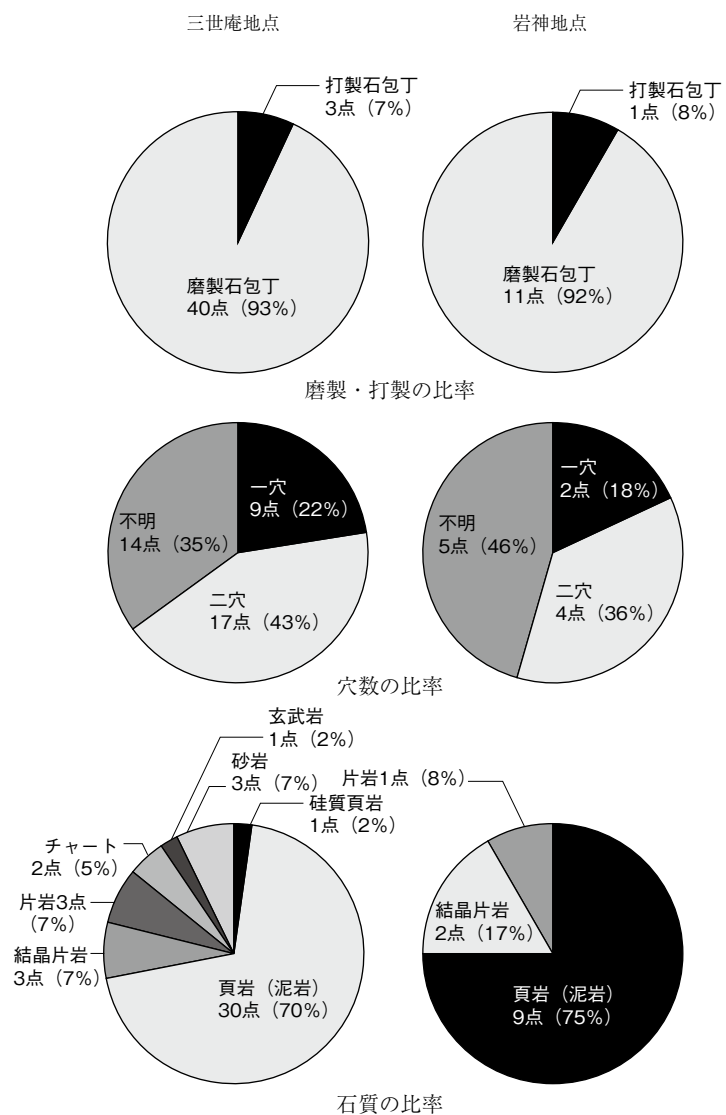


図6-5 石包丁組成割合図

裏付けする事ができた。岩神地点で検出された炭化米と併せてバーガ森北斜面遺跡では、周辺部で稲作が行われていた事が明らかとなり、谷水田の営みを持った集落である事がわかった。

(2)調査地点における投弾の分布

三世庵地点ではIV区に集中して武器・狩猟具の投弾が出土した。特に段部5のST6・7地点では114個と多く、段部4のST5地点で83個と集中している。竪穴建物跡が立地する地点に集中がみられる。投弾は小型、中型、大型の3種類がみられ、小型、中型が主体を占める。小型(I類)は4.0cm以下、中型(II類)は4.0~10cm、大型(III類)は10cm以上を測り、卵形~球形を呈するものである。II類、III類については磨石としての使用痕が認められない自然石及び、扁平な形態の円礫もみられるが、大きさがそれぞれの規格の石を集めてきているので投弾として取り扱った。平地に広がる弥生時代の集落である田村遺跡群(南国市田村)でも竪穴建物跡からの出土例が多く20軒から出土しており、小型の30~50gが主体を占めている。バーガ森北斜面遺跡の三世庵地点ではI類の投弾が472個、II類152個、III類50個の合計674個が出土している。I類は30~70g、II類は150~500g、III類は600~1,000gの

3. バーガ森北斜面遺跡の性格と位置付け

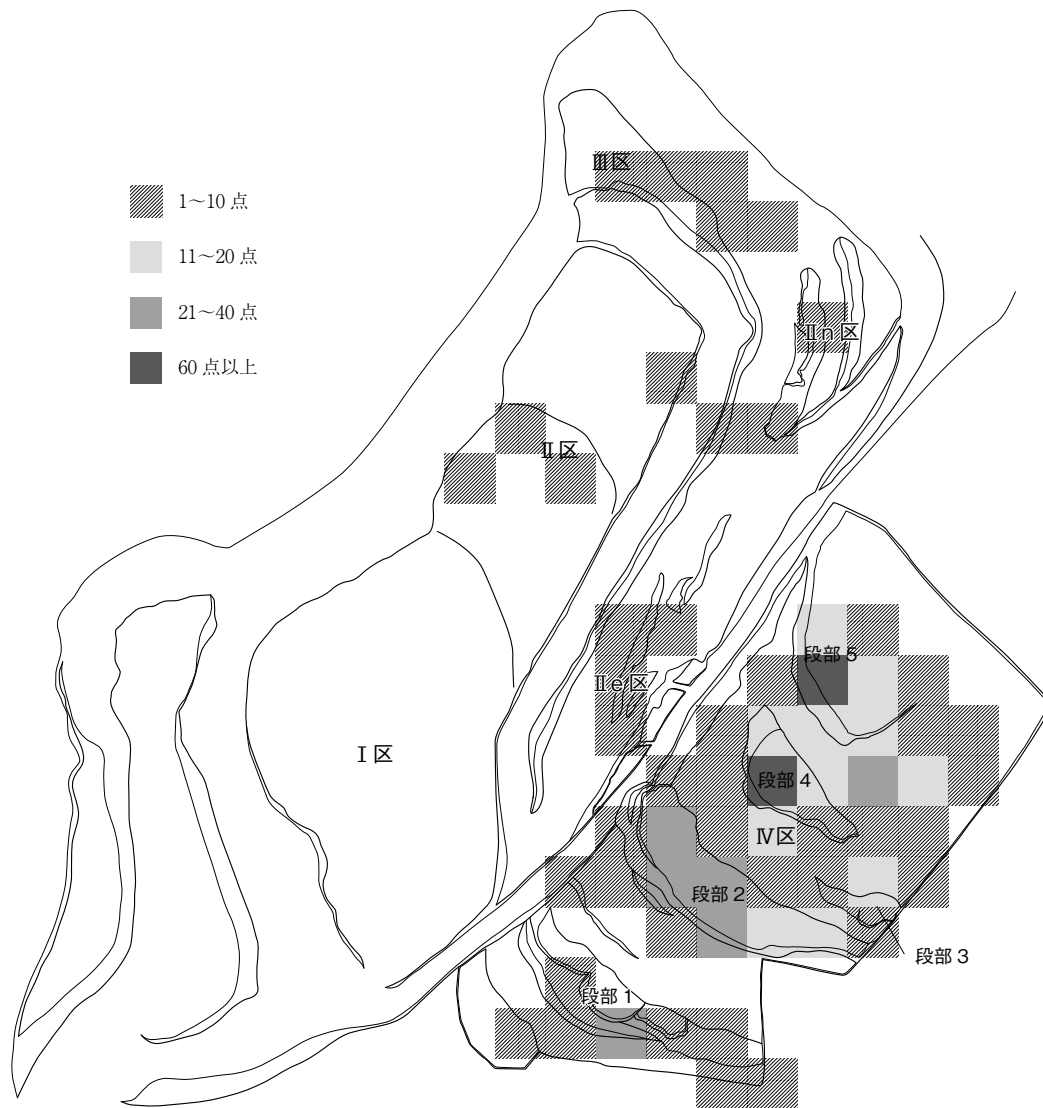


図6-6 三世庵地点投弾出土分布図

重量を測り、投弾としてはI、II類までが実用的に使用されていたものと考えられる。III類の重量のあるものは投げても遠距離までは届かないので斜面から下に向かって「落とす」、「転がす」様な使い方をしたのではないかと思われる。実際に戦闘時に使われたかどうかは出土状況や、投弾の使用痕跡が認められず不明な点が多い。しかし、竪穴建物跡が集中するIV区で数多く出土している現象は、住環境のある場所に武器として持ち備えていた可能性があるのではなかろうか。

3. バーガ森北斜面遺跡の性格と位置付け

バーガ森北斜面遺跡は、遺跡の立地から「高地性集落」として位置付けられていた。⁵⁾弥生時代中期末の現象として、軍事的、縄張りに集落を囲む環濠や、丘陵など高地に集落を構える遺跡が増加する事を受けて狭義の「高地性集落」⁶⁾としてのイメージがあった。確かに見晴らしの良い山の斜面地に分布する集落としてはそういう局面があったかも知れない。出土した遺物も武器としての石鏃や投弾なども多数出土しており、「戦い」「争い」を想像させるものもみられる。一方で、今回の調査では、食料の貯蔵穴(岩神地点II区SK1)が見つかり、中から炭化米、炭化種実など、当時食していたものが判明し、実際に

稲の穂摘みとして使用した石包丁も多数出土し、山の集落の営みのあり方が明らかとなった。

集落の景観をみてみると、検出された竪穴建物跡の立地は岩神地点では標高 37.5m, 32.6m の丘陵等高線に沿って竪穴建物跡が並ぶのに対し、三世庵地点では谷の奥まった場所の標高 59 ~ 42m に上下に並び集中して建つ。平成 9・11 年度の調査で確認されている竪穴建物跡は岩神地点では標高 40.5m, 三世庵地点は標高 87.9m で検出されている。⁷⁾ 岩神地点で今回検出された I w 区 ST1・2, II 区 ST1 と比高差 3~4m を持ちながら、10~20m の距離間をおいて北に延びる丘陵西斜面の等高線に沿って並ぶ立地が明らかとなった。各住居周辺には土坑や炉跡、ピットなど竪穴建物跡とセットで捉えられる遺構が検出されており、「奥名」の谷に開けた集落単位として捉える事ができる。また、三世庵地点の平成 11 年度調査では標高 87.9m の丘陵頂部で竪穴建物跡が確認されている。三世庵地点の地形は標高 90 ~ 50m にかけて北に向かって丘陵が延びており、標高 90m と標高 50m に尾根筋が走る。今回の調査地点は、この標高 50m を測る尾根筋延長部とその斜面にあたり、尾根北東端の頂部では竪穴建物跡 II 区 ST8 を検出した。平成 11 年度に確認された竪穴建物跡と同じ様に、見晴らしの良い尾根の先端頂部に立地する建物跡である。平成 11 年度調査では、この尾根筋の西側斜面で階段状に連続する段部が検出されている。また、今次調査区の尾根筋西側斜面には昭和 49 年発掘調査で確認された竪穴建物跡が見つかり、「菖蒲谷」に開けた集落単位として捉える事ができる。さらに、今回は尾根筋の東側、谷の奥まった斜面に高低差を持って階段状に竪穴建物跡が並んで検出されたことにより、「是友」に開けた集落単位が新たに見つかった。今回の発掘調査で、「奥名」「菖蒲谷」「是友」のそれぞれの谷部に面し尾根の西側は、等高線に沿って高低差と一定の間隔を持ちながら竪穴建物跡が並び、尾根の東側は谷の奥まった斜面に高低差を持って階段状に竪穴建物跡が並ぶ立地が確認され、地形を利用したそれぞれの谷に開けた単位ごとの集落が広がっていることが明らかとなった。

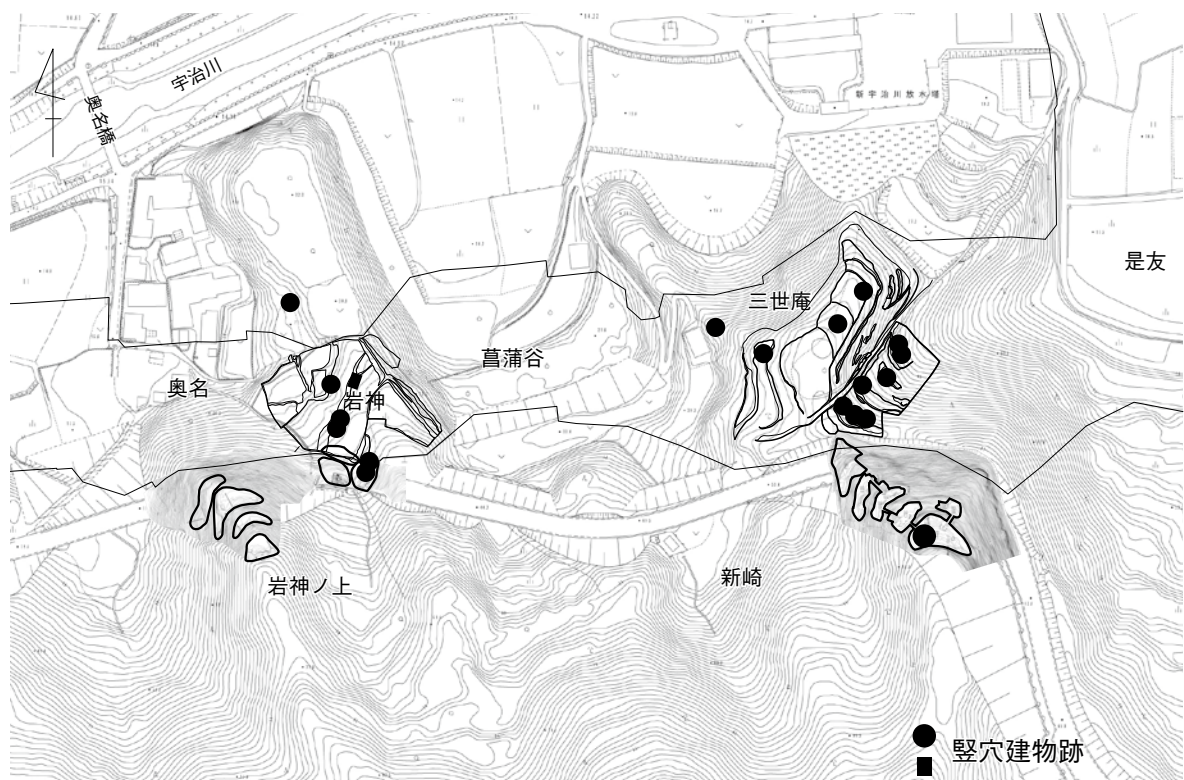


図6-7 竪穴建物跡位置図

3. バーガ森北斜面遺跡の性格と位置付け

「高地性集落」については、様々な観点から高地性集落論が論じられており、その定義について「広義」「狭義」という概念で分離し、⁽⁸⁾「狭義の高地性集落」を「立地する場所の地形や地貌上の特徴と、空堀と土塁や大型の打製石鏃と鉄鏃の様な軍事的戦闘と防衛に関わる遺構や遺物をもつもの」として前者の「広義の高地性集落」と区別した。その後は、弥生時代中期末の社会背景と関わりを持たせた「狭義の高地性集落論」が展開し、軍事的性格についての位置付けが先行するようになった。近年では、調査資料の蓄積と同時に、各遺跡の遺構・遺物の分析を通じた比較研究や事例研究が進み、高地性集落がもつ多様性について地域、集落構造の研究に進展してきている。⁽⁹⁾

本遺跡は標高30～87mと比高差が幅広く展開する集落であり、典型的な高地性集落には分類されない。先述したように、農耕具である石包丁が多数出土している事や、炭化米が検出されている事から、谷部の豊富な水を利用し、「奥名」「菖蒲谷」「是友」のそれぞれの谷で水田を経営する人々が弥生中期末の一時期に形成した小集落として捉えることができる。県内では数少ない高地性集落の調査が行われた本村遺跡(香南市野市町)では、標高30mを測る比較的低丘陵の谷側に向いた斜面地に竪穴建物跡が等高線に沿って検出されており、農耕具である石包丁が多数出土している事や、籾圧痕の付いた土器が出土している事などから本遺跡と同じく谷水田を営んでいた丘陵に展開する集落遺跡として位置付けられている。一方で、低丘陵ながら比較的眺望が良く、内陸であるが太平洋まで見渡せる所から高地性集落的要素ももっているとしている。⁽¹⁰⁾バーガ森北斜面遺跡は、その地理的条件から見張りや防塞に有利な地点と言える。また投弾と考えられる川原石や大型の石鏃など武器的遺物も多数出土しており、本遺跡も軍事的要素から切り離して評価することはできない。しかし、本遺跡に集落が形成された第一義的な要素は、豊富な湧水を始め、谷水田の経営を可能とする諸条件を備えていたことであり、あくまでも軍事的要素は第二義的なものであると考えられる。今後は、周辺の平野部の調査が進めば、バーガ森北斜面遺跡が低地の水稻農耕集落から生業活動の拡大に伴う谷水田への進出と同時に丘陵部に居住領域を拡大、分村した集落かどうか明らかになってくるものと思われる。

註・参考文献

- (1)出原恵三「土佐型甕の提唱とその意義」『遺跡』第32号遺跡刊行会 1990年
同 「土器と青銅器から見た土佐と宇和」『宇和の古代文化を解剖する』愛媛大学考古学研究
室第1回公開シンポジウム愛媛大学考古学研究室・宇和町 2001年
- (2)久家隆芳「南四国西半部の弥生土器」『犬飼徹夫先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学』犬
飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会 2002年
- (3)『高知県野市町本村遺跡調査報告書』野市町埋蔵文化財報告書第3集 野市町教育委員会 1993
- (4)原田 幹「バーガ森北斜面遺跡出土の石包丁使用痕分析について」当報告書第V章-2
- (5)岡本健児『日本の古代遺跡39 高知』保育社 1989
- (6)註(8)と同じ
- (7)『バーガ森北斜面遺跡Ⅰ』伊野町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 伊野町教育委員会 1999
『バーガ森北斜面遺跡Ⅱ』伊野町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 伊野町教育委員会 2001
- (8)小野忠熈『高地性集落の研究 資料編』学生社 1979
- (9)森岡秀人「高地性集落研究の今後と展望」『古代文化』54-4 2002
同 「高地性集落」『弥生文化の研究』第7巻
- (10)註(3)と同じ

付編1

1. 三世庵の近世集石墓

今回の三世庵地点の調査対象地の北東に延びる丘陵斜面で近世の墓と思われる集石墓が踏査でみつけた。「三世庵」は、天正年間の『長宗我部地検帳』吾川郡下に「サンゼアン」というホノギ記載がみられ、中世の段階、もしくはそれ以前から寺に関連する場所と推定されていた。周辺の踏査では、北側の調査対象地外にも同じ様な集石がみられる。地元の方の聞き取りによると、集石墓が見つかった地点の北西方向の標高30mに200㎡ほどの平場があり、寺が建っていた場所と云われている。現況は竹林・雑木林で一部畑地として開墾されているが、丘陵地の北端に位置し眺望の良い場所である。

集石墓が見つかった場所は、丘陵地の東北東斜面地であり、標高37mと標高31mに小規模な平場が確認され、川原石を積上げた場所が2ヶ所発見された。精査を行った結果、五輪塔の一部が検出され墓地の可能性があったため、墓地の記録保存調査を実施した。

集石墓1

標高36.2～37mの小規模な平場で検出した。直径20～30cm前後の川原石を幅2.4～3.8mの範囲で敷き詰めていた。上部にも何石か積上げられていたと思われるが崩れて散乱した状況であった。川原石は全て仁淀川河原で採取できる細粒花崗岩である。集石の範囲の北寄りに五輪塔の地輪が2個並んで検出された。また、水輪の一部と、一石で造られた空風輪が見つかった。

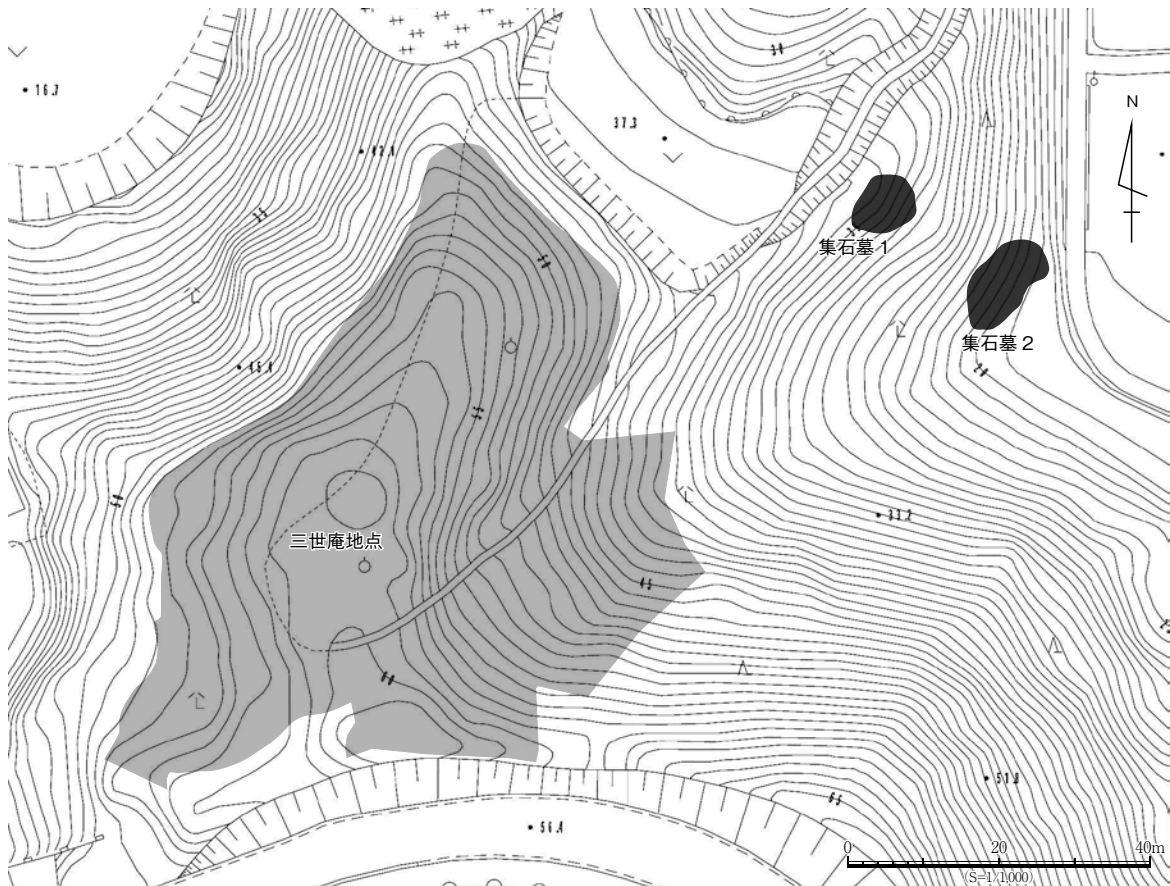


図7-1 三世庵地点集石墓位置図

1.三世庵の近世集石墓

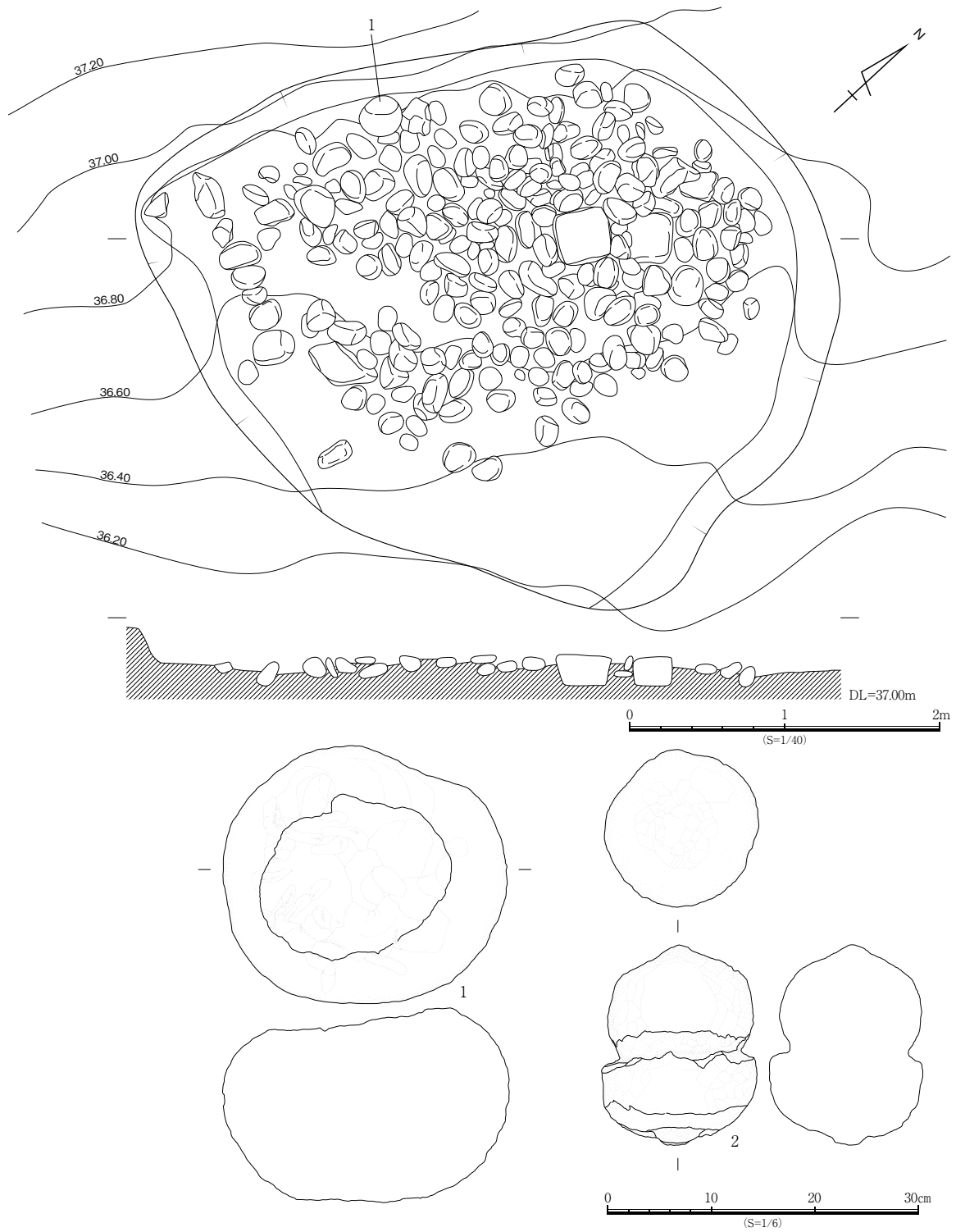


図7-2 集石墓1遺構図・遺物実測図

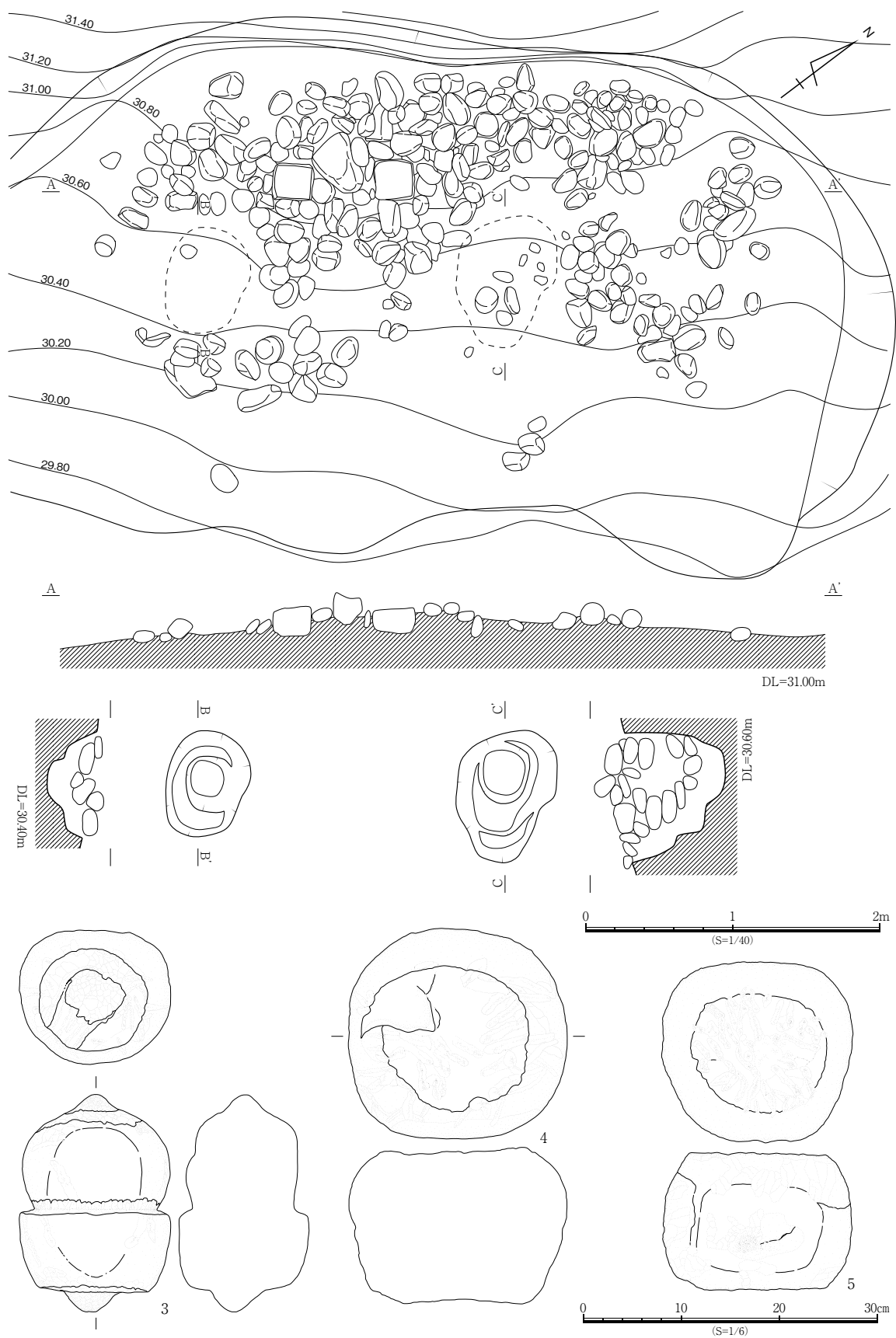


図7-3 集石墓2遺構図・遺物実測図

1.三世庵の近世集石墓

水輪(図7-2 1)は上端をハツリ、平坦面を造る。膨らみは上部にあり、下部に向けて窄まる。下面も上端ほどではないが石を安定させるためのハツリ痕が認められる。幅27.0cm、高さ17.5cmを測る。空風輪(図7-2 2)は集石上面に転石として表採された。「空」・「風」一石造りで空輪を宝珠形に仕上げ、風輪との境目をハツリ、溝を入れる。風輪の下は火輪のホゾ穴に差し込むため突起状に軸を造る。全長19.5cm、空輪幅は13.5cm、風輪幅は15.0cmを測り、空風輪の溝の深さは2.0cmを測る。石は細粒花崗岩質が使われている。

集石墓2

標高29.8～31.2m、集石墓1の下段に開けた平場で検出した。集石墓1と同じく直径20～30cm前後の川原石を幅2.2～4.7mの範囲で敷き詰めていた。上部にも何石か積上げられていたと思われるが崩れて散乱した状況であった。集石の範囲の南寄り

に五輪塔の地輪が2個並んで検出された。また、破線範囲では土坑状の掘込みが確認され半裁し、状況を確認した。この2基の土坑状プランの長軸方向はN-52～57°-Wを指し、1.5mの間隔を空けて並ぶ。南側で検出された土坑(B-B')は長径0.78m、短径0.64mを測る楕円形で床面北寄りに直径0.36mのピット状に凹む。上層は上部の集石と同じ円礫が埋め戻した際に入り込んでいる。北側で検出された土坑(C-C')は長径0.98m、短径0.66mを測る不整楕円形で、床面北西寄りに直径0.42mのピット状に凹む。埋土中には、上層から上部の集石と同じ円礫が埋め戻した際に入り込んでいる。南東側はテラス状に段々に掘込まれ、この段に沿って川原石を並べた状態で確認した。これらの土坑は蔵骨器を納めていた墓坑と考えられるが、2基の土坑埋土からは遺物は出土しておらず、蔵骨器は移設したものである。

集石中から空風輪1個、水輪2個、地輪2個が見つかった。空風輪(図7-3 3)は集石上面に転石として表採された。「空」・「風」一石造りで空輪を宝珠形に仕上げ、風輪との境目をハツリ、溝を入れる。空輪の片側は扁平な面を造る。風輪の下は火輪のホゾ穴に差し込むため突起状に軸を造る。全長22.1cm、空輪幅は15.0cm、空輪の面幅は8.9cm、風輪幅は15.1cmを測り、空風輪の溝の深さは1.9cmを測る。石は細粒花崗岩質が使われている。水輪(図7-3 4)は上端と下端をハツリ、平坦面を造る。膨らみは上部にあり、下部に向けて窄まる。完全な球体ではなく、辺を持つ隅丸方形気味である。上端幅21.5cm、下端幅19.0cm、高さ15.5cmを測る。石は細粒花崗岩質が使われている。水輪(図7-3 5)は上端と下端をハツリ、平坦面を造る。膨らみは中位にあり、完全な球体ではなく、辺を持つ隅丸方形気味に仕上げる。幅19.0cm、高さ14.4cmを測り、4より一回り小さい。石は細粒花崗岩質が使われている。また、地輪(図7-4 6)は、一辺が19.5～22.0cm、高さは10.3～12.0cmを測る。全体をハツリ、正方体に近く平滑に仕上げる。石質は他の石と同じ細粒花崗岩が使われている。この地輪は、1.2mの間隔をおいて2個並んで検出した。先述した2基の墓坑の位置からは離れているが、関連性が考えられる。

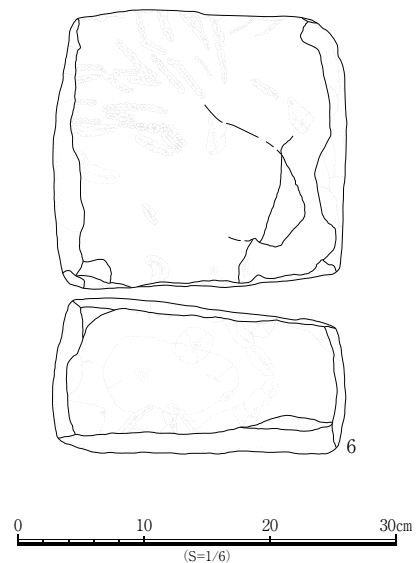


図7-4 集石墓2遺物実測図

付編2

三世庵地点ではいくつかの近現代の遺物が出土した。かつてはこのような新しい時代の遺物は調査・記録の対象とはならなかった。1980年代後半頃から全国的には近現代の遺構や遺物が報告されることが徐々に増えてきたが、高知県ではこれまでに報告された事例が少ない。今回報告する遺物は全て表採資料ではあるが、近現代の地域の生活の様相だけに留まらず、居住者の趣味・嗜好までもを探る手掛かりとなる。ここでは出土した遺物のうち、流通した年代や生産者等が把握できるものについて報告する。

1. 三世庵地点出土のガラス瓶

1は牛乳瓶である。なで肩で無色透明、「全乳」・「芳原吉本」の陽刻(エンボス)がある。内ネジ式の蓋が締まった状態で出土した。牛乳を入れる容器としてガラス瓶が使用される明治20年代から、機械栓が導入される明治33年頃まで流通したものである。2・3は目薬瓶である。どちらも淡いコバルト

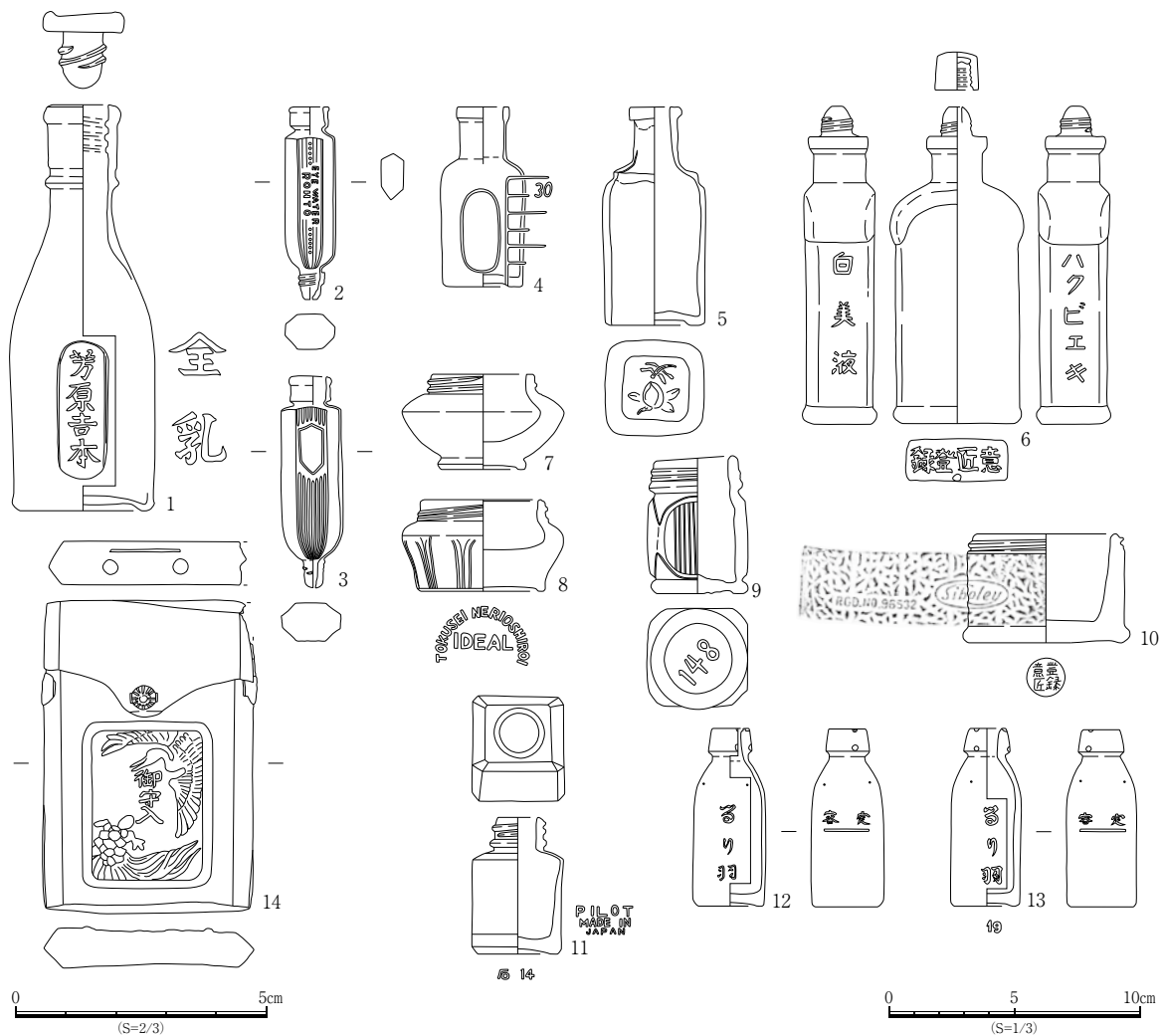


図7-5 三世庵地点出土ガラス瓶他実測図

2.牛乳瓶からみる明治期の高知

色半透明で、スポイト一体型である。2は「EYE WATER ROHTO」の陽刻がみられることから、昭和6年に信天堂山田安民薬房(現ロート製薬株式会社)より発売された「ロート目薬」であるとみられる。この形状の目薬瓶は昭和30年代にプラスチック製点眼容器が発売されるまで製造されていた。4はコルク栓の医療用薬瓶である。いかり肩で無色透明、目盛りとラベルを貼る部分を仕切る陽刻がみられる。5はコルク栓で無色透明、胴部横断面方形の化粧水瓶である。底部に「桃と蜻蛉」の陽刻があり、桃谷順天館より大正3年(1914)に発売された「白色美顔水」であるとみられる。6は白色半透明でいかり肩、スクリュー栓の化粧品瓶である。側面に「白美液」・「ハクビエキ」、底面に「商標登録」の陽刻がみられる。権利者名「佐藤製薬株式会社」で昭和5年(1930)に商標登録をされている。7～9はいずれも白色不透明、スクリュー栓の化粧品瓶である。8は底面に「TOKUSEI NERIOSHIROI IDEAL」の陽刻があり、高橋東洋堂から発売された「アイデアル特性練白粉」であることがうかがえる。10は無色透明、スクリュー栓のポマード瓶である。側面に「Siboley」「RGD.NO.96532」、底面に「意匠登録」の陽刻がみられる。ポマード(整髪料)は、昭和初期頃から広く流通した。11は無色透明、スクリュー栓で、パイロットの「パイロットインキ」のインク瓶である。背面に「PILOT MADE IN JAPAN」の陽刻があり、胴部横断面方形の形態より、戦後昭和26年(1951)以降の製造であることがうかがえる。底面の「石 14」の陽刻は石塚硝子(現石塚硝子株式会社)という製瓶メーカーの記号である。12・13は白髪染めの染料瓶である。無色透明、コルク栓で、正面に「るり羽」、背面に「定容」(右から左へ)と薬品の容量を示す線の陽刻がみられる。白髪染め「るり羽」は「山発商店」(山発産業株式会社、現在はシュワルツコフヘンケル株式会社に買収される)より明治44年(1911)から平成頃まで販売されていた。背面の文字が右横書きの表記であることから、戦前のものであることがうかがえる。14は青銅製のお守り入れである。

2.牛乳瓶からみる明治期の高知

流通した年代や生産者など、多くの情報を与えてくれるガラス瓶の中で、特に形状から詳細な流通年代が判明するものの一つとして牛乳瓶が挙げられる。牛乳容器は衛生上の観点から瓶の形状や蓋の材質について、法律によって規制を受けている。明治18年(1885)『牛乳営業取締規則』によって鉛や銅が牛乳容器として使用できなくなり、明治20年代にガラス瓶が使用されるようになった。その後、明治33年(1900)頃になると機械栓、大正末頃には王冠栓に変わり、昭和2年(1927)には『牛乳営業取締規則(新庁令)』により徐々に現在もみられる広口瓶、紙栓の形態に落ち着いた。また、ここで注目する内ネジ式牛乳瓶が流通していた明治20年代は、流通経路や保存環境が現在より発達しておら

表7-1 バーガ森北斜面遺跡・西浦遺跡出土の内ネジ式牛乳瓶

遺跡名	陽刻(エンボス)	特徴・備考
バーガ森北斜面遺跡(三世庵地点)	「全乳」・「芳原吉本」	一合瓶 蓋あり
西浦遺跡	「全乳」・「高知市外梅ノ辻 牧牛社 電話五六五番」	一合瓶 蓋あり
西浦遺跡	「全乳」・「高知市外梅ノ辻 牧牛社 電話五六五番」	五勺瓶 蓋なし
西浦遺跡	「一合」・「消毒牛乳」・「野村商光社 電話一一〇〇番」 「高知牛乳販売組合」(蓋)	一合瓶 蓋あり
西浦遺跡	「五勺」・「消毒全乳」・「武藤牧場 電話六三三番」	五勺瓶 蓋あり
西浦遺跡	「五勺」・「消毒全乳」・「安芸町 芸陽牧場 電話六番」	五勺瓶、蓋なし

ず、大半の牛乳は近隣地域で生産・消費されていた。ここからは三世庵地点出土のものに加え、同じ町の西浦地区に位置する西浦遺跡(平成23年度調査)より出土した牛乳瓶を併せて観察し、当時の高知の乳業について述べる。

表7-1に各遺跡で出土した牛乳瓶にはそれぞれ、「芳原吉本」、「牧牛社」、「野村商光社」、「武藤牧場」、「芸陽牧場」という牛乳販売会社、もしくは牧場名と思われる陽刻がみられる。このうち、「牧牛社」については、いくつかの資料にその名称をみることができた。「高知県統計書」には明治22年(1889)から牛乳搾高の項に「牧牛会社搾乳場」が登場し、乳牛12頭、搾乳高は高知県で一番多く30石376合で、所属地名は高知公園内となっている。明治23年(1890)には諸会社の項にも「牧牛会社」がみられ、資本金10,000円、社長弘田正郎氏の名前が掲載されている。この年の高知県の諸会社の項の16社中のひとつであり、なおかつ農業関係としては高知県唯一の会社である。明治31年(1898)には「高知牧牛株式会社」の名前で掲載され、乳牛53頭、搾乳高189石350合と他の牛乳所を大きく引き離し高知県で一位のシェアを誇る。明治34年(1901)は会社の項には「高知県牧牛株式会社」とあり、業種はこれまでの牛乳製造販売に畜牛繁殖改良が加えられている。「高知県統計書」には明治38年(1905)まで掲載されているが、明治39年(1906)以降みられず、この頃に会社組織としての活動は終了したものであると思われる。

その他に、高知県出身の物理学者で随筆家でもある寺田寅彦の随筆にも、「牧牛会社」の名称をみることができる。『寺田寅彦全集 第一巻 高知がえり』には次のような一節がある。「徳月楼の前へ舟をつけ自転車を引上げる若者がある。楼上と門前とに女が立ってうなずいている。犬引も通る。これらが煩惱の犬だろう。松が端から車を雇う。下町は昨日の祭礼の名残で賑やかな追手筋を小さい花台をかけた子供連がねって行く。西洋の夫人が向うから来てこれとすれちがった。牧牛会社の前までくると日が入りかかって、川端の榎の霜枯れの色が実に美しい。高坂橋を残す時東を見ると、女学生が大勢立っていると思ったが、それは海老茶色の葦を干しているのがあった。」(明治三十四年十一月)

これは寺田寅彦が高知へ帰省した際の様子を書いたものである。徳月楼(現在の高知市九反田)前の船着き場や追手筋の当時の生活の様子、高坂橋から現在も残る寺田寅彦邸への道中の描写の中に牧牛会社が描かれている。当時の高知市の中でも知名度のある規模的にも大きな会社であったことがうかがえる。この道中の位置関係と対応する形で、明治26年(1893)に久保田祥然堂より発行された「旅行必携新撰高知市街地図」(個人蔵)にも、高坂橋のたもと、現在の高知市丸ノ内二丁目に牧牛会社が描かれている。

後に牧牛会社は高知市街地の都市化に伴って高知市梅ノ辻に移転したと伝えられている。2地点で同時に所在していた時期もあると思われるが、今回取り上げた牛乳瓶の陽刻には「高知市外梅ノ辻」という所在地が刻まれている。内ネジ式牛乳瓶が流通したのは、明治33年(1900)頃までであるが、その頃に梅ノ辻に所在したという資料は確認できなかった。いつ頃梅ノ辻に移転したか、その後の展開は今後の研究課題としたい。

先にも述べたが、これまで近現代の遺構や遺物は調査・記録の対象とならなかった。しかし、今日すでに様々な容器がガラス瓶からアルミ缶や紙パック、ペットボトルへと変化している。これらの容器はリサイクルが行われ、将来発掘されるべき物質は残されない。ガラス瓶は当時の庶民の生活を知ることができる最後の考古遺物であるともいえるが、調査された事例はまだ僅かしか報告され

2.牛乳瓶からみる明治期の高知

ていないのが現状である。今回掲載した遺物は僅少なものであるが、今後、近現代の遺跡の発掘・調査が進んでいく上での資料のひとつとなれば幸いである。

引用・参考文献

桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』

編／佐野宏明 2010『浪漫図案』

高知県 1889～1906『高知県統計書』

寺田寅彦 1948『寺田寅彦全集 第一巻 高知がえり』



三世庵地点出土のガラス瓶

写真図版
三世庵地点



三世庵地点全景(北東より)



三世庵地点 I・II区全景(北より)



三世庵地点全景(南東より)

図版4



I・II区調査前全景(南東より)



II区調査前全景(南西より)



Ⅱ e・Ⅱ n 区調査前全景(東より)



Ⅳ区調査前状態(北より)

図版6



I区遺構検出状態(南東より)



昭和49年竪穴建物跡(南より)



Ⅱ区遺構検出状態(南西より)



Ⅱ区遺構完掘状態(北東より)



Ⅱ区 ST8床面遺構検出状態(南西より)



Ⅱ区 ST8完掘状態(南西より)



II e 区バンクセクション・SK23・25・26 検出状態(南より)



II 区段状遺構完掘状態(南より)



Ⅱ区段状遺構～Ⅳ区完掘状態(南東より)



Ⅲ区遺構検出状態(南より)



Ⅲ区バンクセクション(東より)



Ⅱ e 区 P3 弥生土器甕(13) 出土状態



Ⅱ n 区 包含層 弥生土器壺(53) 出土状態



Ⅱ n 区 包含層 石鍬(77) 出土状態



Ⅲ区 包含層 弥生土器高杯(95) 出土状態



段部1バンクセクション(北西より)



段部1バンクセクション(東より)



段部1ST2床面炭化物検出状態(西より)



段部1ST2完掘状態(北西より)



段部1 P6 弥生土器(99~101)出土状态



段部1 ST1 石包丁(104)出土状态



段部1 ST2 弥生土器甕(109)出土状态



段部1 ST2 石鏃(112)出土状态



段部1 ST3 弥生土器壺(116)出土状态



段部1 ST3 弥生土器甕(118)出土状态



段部1 ST3 弥生土器甕(122)出土状态



段部1 ST3 石包丁(132)出土状态



段部1完掘状態(北西より)



段部1斜面遺構検出状態(北西より)



段部2遺構検出状態(西より)



段部2遺構検出状態(南東より)



段部2 ST4床面遺構検出状態(南西より)



段部2 ST4完掘状態(東より)



段部2 ST4 弥生土器壺(149) 出土状態1



段部2 ST4 弥生土器壺(149) 出土状態2



段部2 ST4 弥生土器壺(150) 出土状態



段部2 ST4 石斧(153) 出土状態



段部2 焼土坑1～5 検出状態(北より)



段部2 SA1P8鉄鍬(173)出土状態



段部2 SA1P7石包丁未製品(175)出土状態



段部2 P113石包丁未製品(176・177)出土状態



段部2 P56弥生土器甕(180)出土状態



段部2完掘状態(北西より)



段部3 SK35検出状態(西より)



段部3 SK35炭化物検出状態(北より)



段部3 SK36 検出状態(西より)



段部4 SX3 セクション(南東より)



段部4ユニット1～3遺物検出状態(北西より)



段部4 P55遺物出土状態



段部4 ST5上面遺構検出状態(西より)



段部4 ST5上面遺構完掘状態(西より)



段部4 ST5中央ピット検出状態(南東より)



段部4 ST5床面遺構検出状態(南東より)



段部4 ST5 弥生土器壺(192)出土状态



段部4 ST5 弥生土器甕(200)出土状态



段部4 ST5 弥生土器甕(204)出土状态



段部4 ST5 弥生土器甕(198)出土状态



段部4 ST5 弥生土器甕(212)出土状态



段部4 ST5 弥生土器甕(214)出土状态



段部4 ST5 石包丁(227)出土状态



段部4 ST5 石包丁(228)出土状态



段部4 ST5完掘状態(西より)



段部4・5 ST5・6完掘状態(南西より)



段部5 焼土坑検出状態(南より)



段部5 SK37 セクション(東より)



段部5 SK39 セクション(北東より)



段部5 焼土坑12 セクション(北西より)



段部5 焼土坑13 セクション(北西より)



段部5 土器集中4・壁面バンクセクション(北東より)



段部5 土器集中4(南より)



段部5 バンクセクション(南東より)



段部5 ST6検出状態(北西より)



段部5 ST6炭化物検出状態(北西より)



段部5 ST6床面検出状態(西より)



段部5 ST6完掘状態(南西より)



段部5 ST6・7完掘状態(南西より)



段部5 ST7セクション(北西より)



段部5 ST7床面遺構検出状態(南西より)



段部5 ST7完掘状態(北西より)



段部5 ST7完掘状態(北西より)



段部4包含層弥生土器壺・甕(254・645)出土状態(北東より)



段部4包含層弥生土器壺(254)出土状態(南より)



段部1包含層弥生土器壺(297)出土状態



段部1包含層弥生土器壺(343)出土状態



段部1包含層弥生土器壺(305)出土状態



段部1 包含層弥生土器(297他)出土状態(北東より)



段部1 包含層弥生土器甕(339)出土状態



段部1 包含層弥生土器甕(352)出土状態



段部2 包含層弥生土器壺(397)出土状態



段部2 包含層弥生土器壺(430)出土状態



段部2包含層弥生土器壺(432)出土状态



段部2包含層弥生土器壺(436)出土状态



段部2包含層弥生土器甕(444)出土状态



段部2包含層弥生土器甕(453)出土状态



段部2包含層弥生土器甕(465)出土状态



段部2包含層弥生土器甕(475)出土状态



段部2包含層弥生土器甑(521)出土状态



段部2包含層弥生土器高杯(525)出土状态



段部2包含層弥生土器高杯(539)出土狀態



段部2包含層弥生土器高杯(541)出土狀態



段部2包含層石鏃(552)出土狀態



段部2包含層石鏃(553)出土狀態



段部2包含層石包丁(557)出土狀態



段部2包含層石包丁(561)出土狀態



段部2包含層石包丁(564)出土狀態



段部2包含層石包丁未製品(565)出土狀態



段部2包含層石斧(568)出土狀態



段部2包含層石斧(569)出土狀態



段部4包含層弥生土器壺(624)出土狀態



段部4包含層弥生土器壺(625)出土狀態



段部4包含層弥生土器壺(636)出土狀態



段部4包含層弥生土器甕(657)出土狀態



段部4包含層弥生土器甕(661)出土狀態



段部4包含層弥生土器甕(662)出土狀態



段部4包含層弥生土器甕(674)出土狀態



段部4包含層弥生土器甕(679)出土狀態



段部4包含層弥生土器高杯(690)出土狀態



段部4包含層袋狀鐵斧(691)出土狀態



段部4包含層石鏃(694)出土狀態



段部4包含層石包丁(695)出土狀態



段部4包含層石包丁(697)出土狀態



段部4石包丁未製品(701)出土狀態



段部4包含層石包丁未製品(702)出土狀態



段部4包含層石包丁未製品(707)出土狀態



段部4包含層石斧(708)出土狀態



段部4包含層石錘(716)出土狀態



段部5包含層弥生土器壺(728)出土狀態



段部5包含層弥生土器壺(729)出土狀態



段部5包含層弥生土器壺(734)出土狀態



段部5包含層弥生土器壺(761他)出土狀態



段部5包含層弥生土器甕(770)出土状态



段部5包含層弥生土器甕(779)出土状态



段部5包含層弥生土器甕(791)出土状态



段部5包含層弥生土器高杯(819)出土状态



段部5包含層袋状铁斧(821)出土状态



段部5包含層石鏃(822)出土状态



段部5包含層石鏃(824)出土状态



段部5包含層石鏃(825)出土状态



段部5包含層石包丁(833)出土状態



段部5包含層石斧(839)出土状態



段部5包含層スクレイパー(841)出土状態



段部5包含層叩石(853)出土状態



ST4～6完掘状態(南西より)



ST4～6完掘状態(北東より)



ST4・7完掘状態(南東より)



集石墓1・2検出状態(南西より)



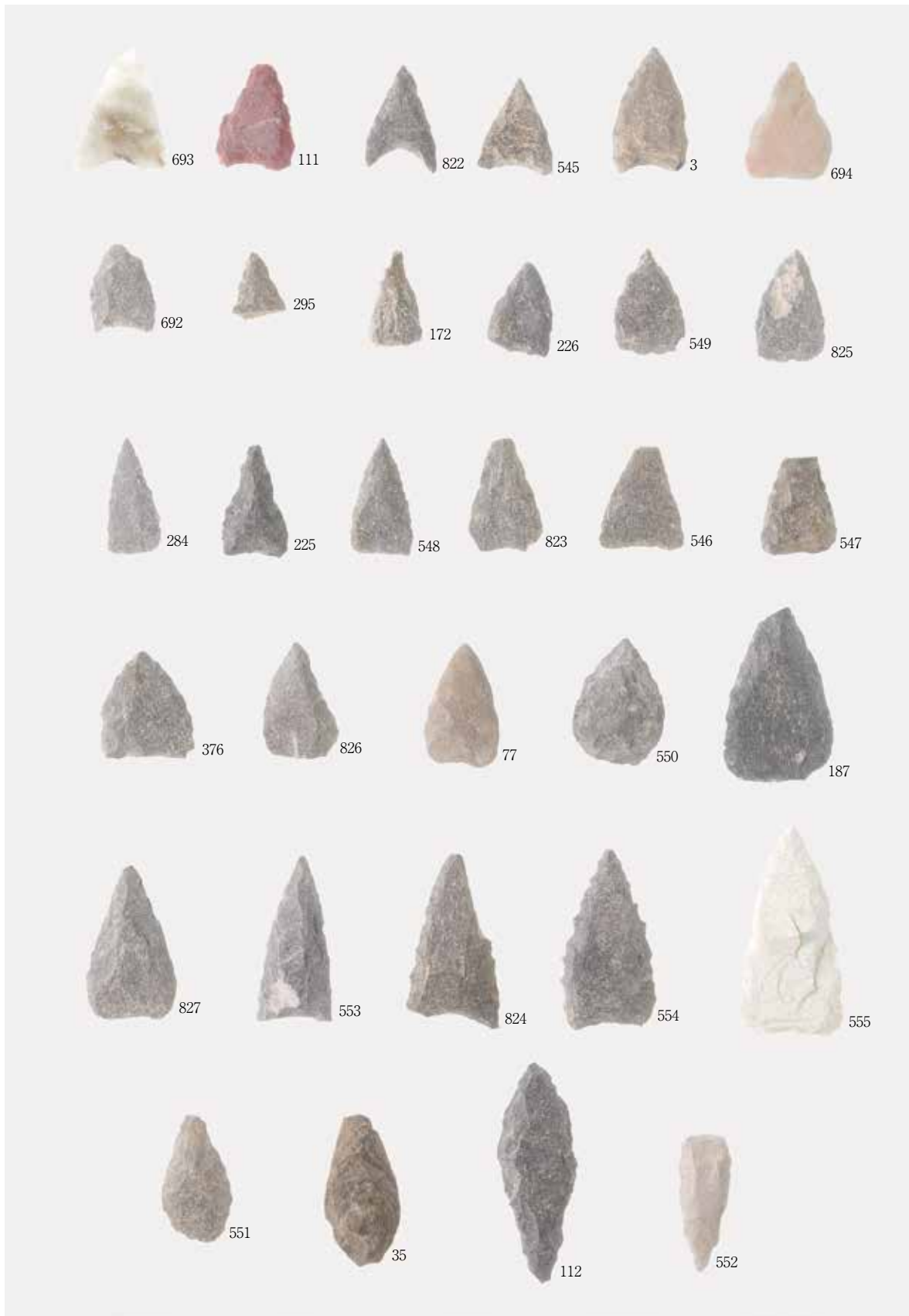
集石墓1検出状態(南西より)



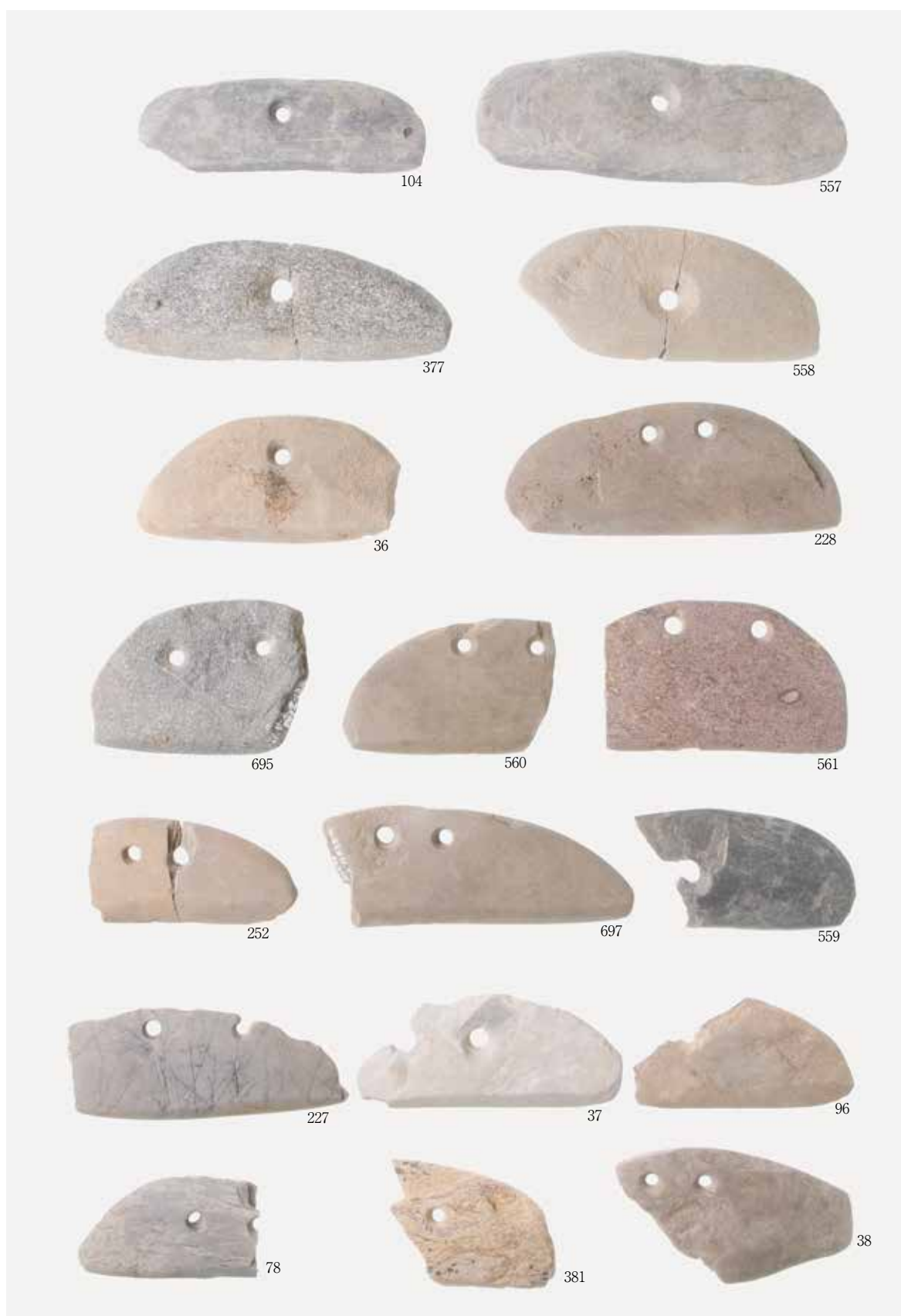
集石墓2検出状態(北西より)



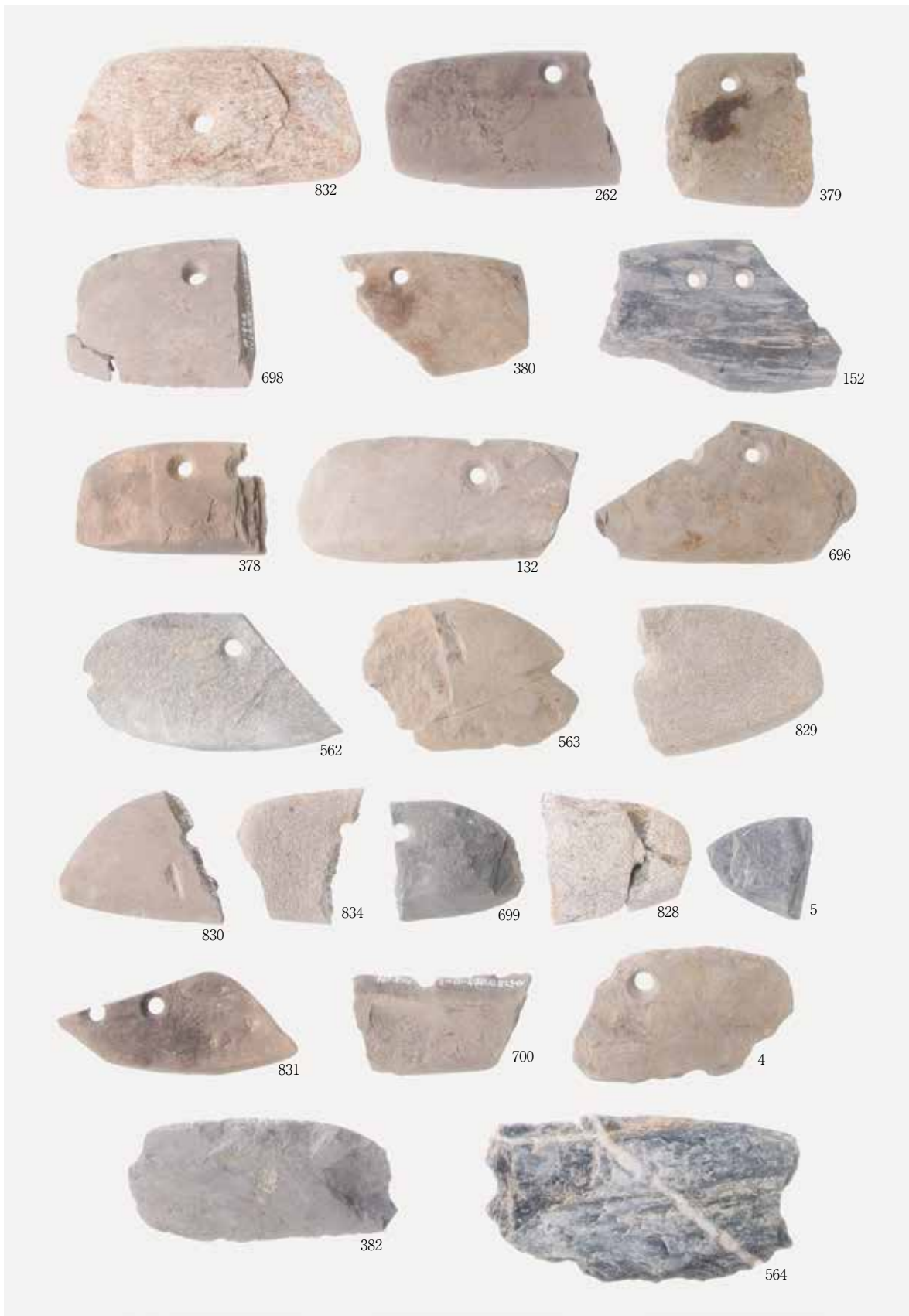
集石墓2(空輪・風輪)検出状態(南東より)



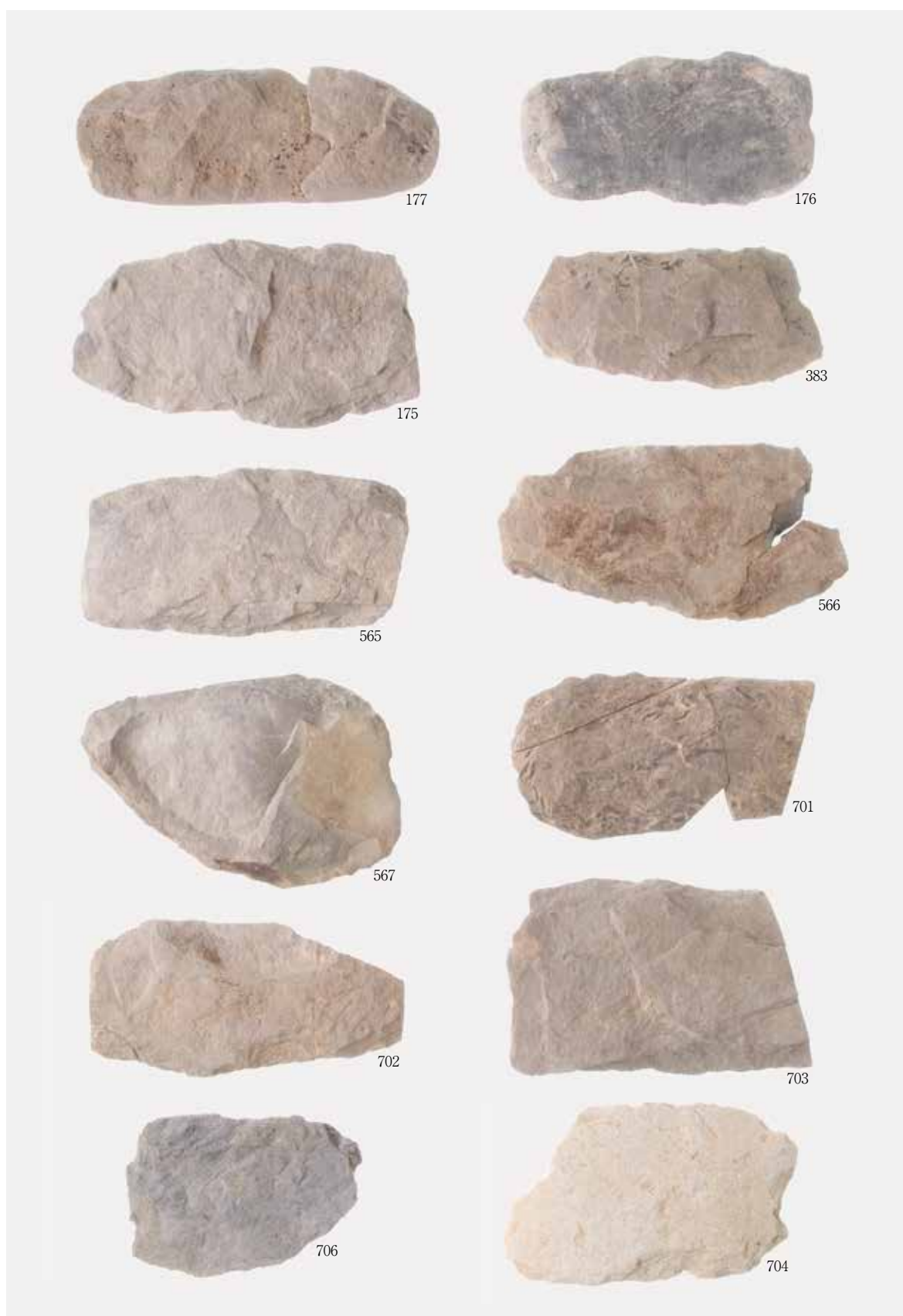
石器(石鏃)



石器(石包丁)



石器(石包丁)



石器(石包丁未製品)



石器(投弹)



石器(石斧)



石器(石斧)



弥生土器(壺・甕・高杯・鉢)



段部5包含層 鉄器(袋状鉄斧)



II e 区包含層 弥生土器(壺)



II e 区包含層 弥生土器(甕)



II e · II n 区包含層 石器(投弹)



II n 区包含層 弥生土器(壺)



Ⅱ n 区包含層 弥生土器(甕)



段部1 ST2 弥生土器(壺・甕)



段部1 ST3 弥生土器(甕)



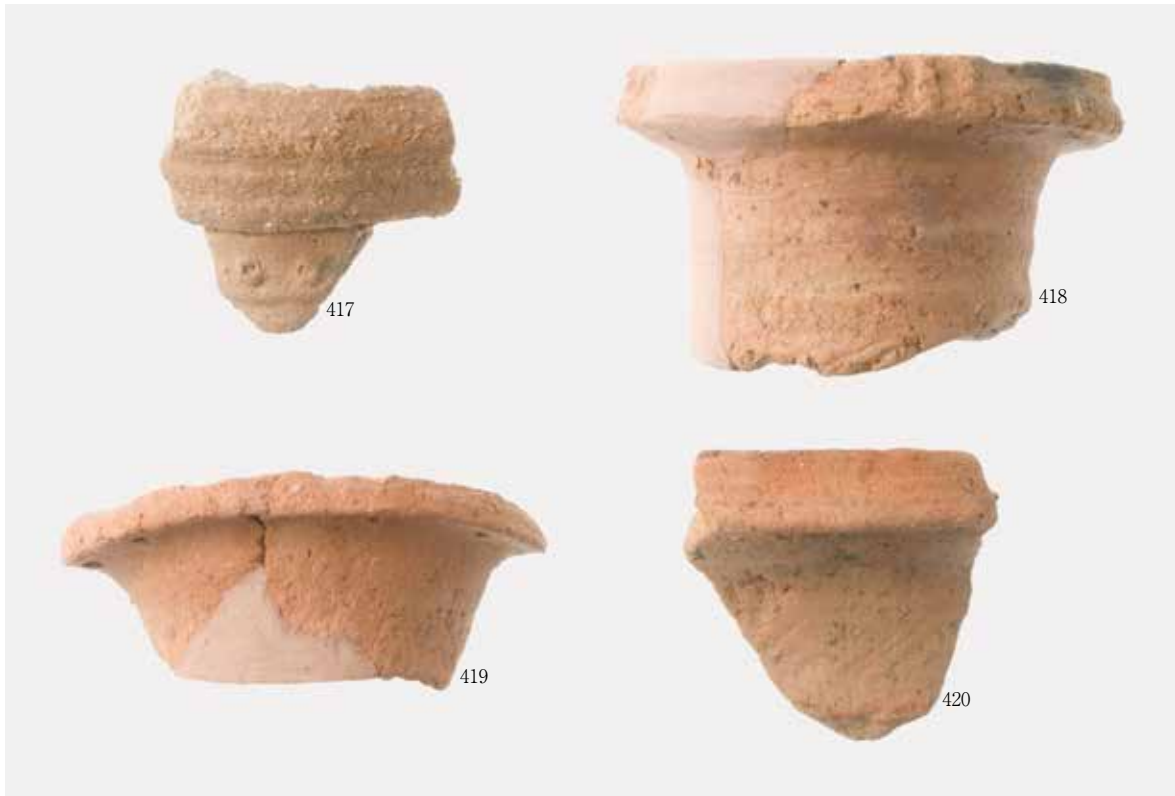
段部4 ST5 弥生土器(甕)



段部4 P55 弥生土器(壺)



段部1 包含層 弥生土器(壺)



段部2包含層 弥生土器(壺)



段部2包含層 弥生土器(壺)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



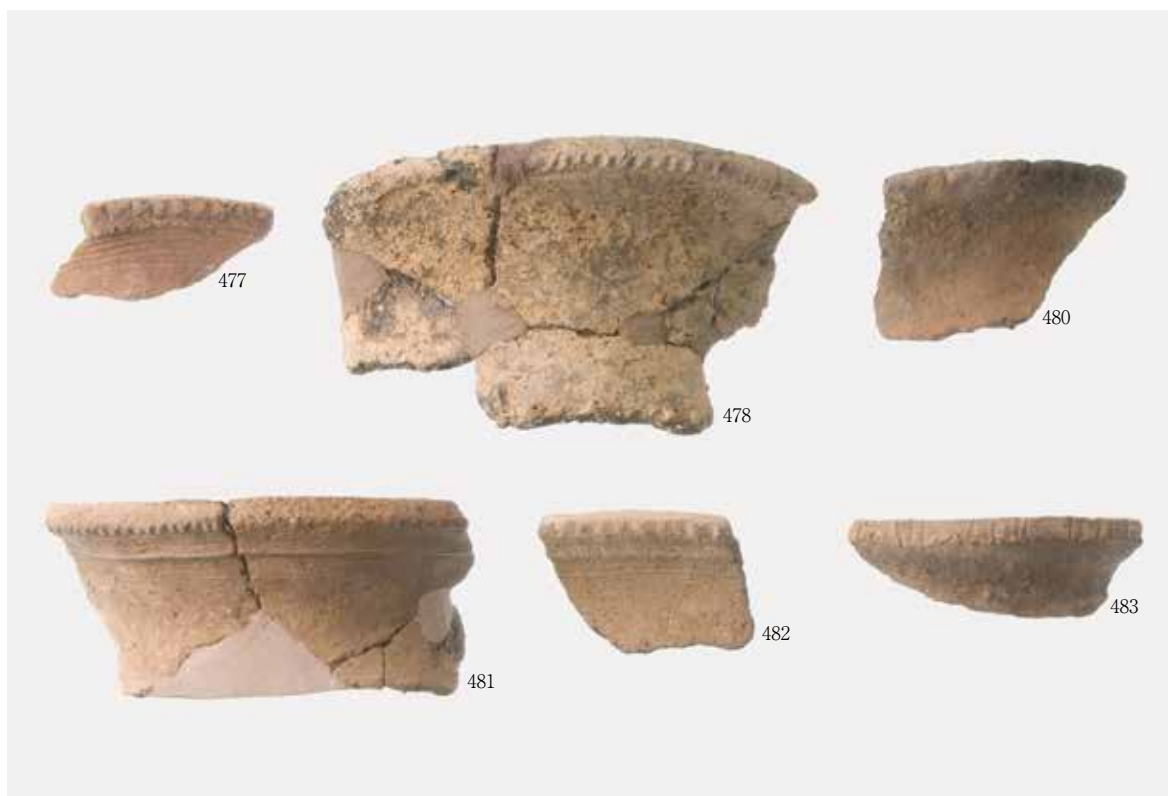
段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(高杯)



段部2包含層 弥生土器(高杯)



段部2包含層 石器(砥石)



段部3包含層 弥生土器(壺)



段部3包含層 弥生土器(甕)



段部3包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(高杯)



段部5包含層 弥生土器(壺)



段部5包含層 弥生土器(高杯)



段部5包含層 弥生土器(高杯)



Ⅲ区包含層 弥生土器(壺)



段部1 ST3 弥生土器(甕)



段部1 ST3 弥生土器(甕)



段部1 SK8 弥生土器(甕)



段部4 SK33 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(壺)



294

段部5 P95 弥生土器(壺)



415

段部2包含層 弥生土器(壺)



430

段部2包含層 弥生土器(壺)



462

段部2包含層 弥生土器(甕)



464

段部2包含層 弥生土器(甕)



476

段部2包含層 弥生土器(甕)



525

段部2包含層 弥生土器(高杯)



539

段部2包含層 弥生土器(高杯)



589

段部3包含層 弥生土器(壺)



625

段部4包含層 弥生土器(壺)



632

段部4包含層 弥生土器(壺)



646

段部4包含層 弥生土器(甕)



682

段部4包含層 弥生土器(鉢)



728

段部5包含層 弥生土器(壺)



729

段部5包含層 弥生土器(壺)



760

段部5包含層 弥生土器(壺)



761

段部5包含層 弥生土器(壺)



762

段部5包含層 弥生土器(甕)



8

II e 区 SK25 石器(石包丁未製品)



11

II e 区 SD1 弥生土器(甕)



53

II n 区包含層 弥生土器(壺)



74

II n 区包含層 弥生土器(高杯)



94

III 区包含層 弥生土器(高杯)



95

III 区包含層 弥生土器(高杯)



98

III 区包含層 石器(叩石)



122

段部1ST3 弥生土器(甕)



138

段部1 P11 弥生土器(高杯)



139

段部1 SK7 弥生土器(壺)



140

段部1 SK7 弥生土器(甕)



141

段部1 SK7 弥生土器(甕)



150

段部2 ST4 弥生土器(壺)



151

段部2 ST4 弥生土器(高杯)



154

段部2 ST4 石器(砥石)



157

段部2 ST4 石器(棒状石器)



段部2 SA1P8 鉄器(鉄鍬) (表面)



段部2 SA1P8 鉄器(鉄鍬) (裏面)



段部2 SA1P7 弥生土器(甕)



段部4 SK32 弥生土器(壺)



段部4 P72 弥生土器(壺)



段部4 ST5 弥生土器(壺)



段部4 ST5 弥生土器(壺)



段部4 ST5 弥生土器(甕)



210

段部4 ST5 弥生土器(甕)



214

段部4 ST5 弥生土器(甕)



215

段部4 ST5 弥生土器(壺)



220

段部4 ST5 弥生土器(底部)



223

段部4 ST5 弥生土器(蓋)



230

段部4 ST5 石器(礫錐)



242

段部4 SK33 弥生土器(高杯)



243

段部4 SK33 石器(叩石)



255

段部4包含層 弥生土器(甕)



256

段部5 SK41 弥生土器(高杯)



276

段部5土器集中4 弥生土器(高杯)



277

段部5土器集中4 石器(砥石)



286

段部5 ST7P3 石器(叩石)



292

段部5 SD7 弥生土器(甕)



296

段部1包含層 弥生土器(壺)



299

段部1包含層 弥生土器(壺)



300

段部1包含層 弥生土器(壺)



431

段部2包含層 弥生土器(壺)



500

段部2包含層 弥生土器(甕)



571

段部2包含層 石器(礫錐)



556

段部2包含層 石器(石鏃未製品) (表面)



556

段部2包含層 石器(石鏃未製品) (裏面)



572

段部2包含層 石器(石錘) (表面)



572

段部2包含層 石器(石錘) (側面)



段部2包含層 石器(石核) (表面)



段部2包含層 石器(石核) (裏面)



段部3包含層 弥生土器(壺)



段部3包含層 弥生土器(壺)



段部3包含層 石器(砥石)



段部3包含層 石器(剥片)



段部4包含層 弥生土器(壺)



段部4包含層 弥生土器(甕)



631

段部4包含層 弥生土器(壺)



634

段部4包含層 弥生土器(壺)



635

段部4包含層 弥生土器(壺)



645

段部4包含層 弥生土器(甕)



691

段部4包含層 鉄器(袋状鉄斧)(表面)



691

段部4包含層 鉄器(袋状鉄斧)(裏面)



710

段部4包含層 石器(石斧)



712

段部4包含層 石器(砥石)



716

段部4包含層 石器(石錘)



717

段部4包含層 石器(叩石)



725

段部4包含層 石器(剥片) (表面)



725

段部4包含層 石器(剥片) (裏面)



726

段部4包含層 石器(石核) (表面)



726

段部4包含層 石器(石核) (裏面)



747

段部5包含層 弥生土器(壺)



750

段部5包含層 弥生土器(壺)



751

段部5包含層 弥生土器(甕)



753

段部5包含層 弥生土器(甕)



754

段部5包含層 弥生土器(壺)



763

段部5包含層 弥生土器(甕)



773

段部5包含層 弥生土器(甕)



775

段部5包含層 弥生土器(甕)



785

段部5包含層 弥生土器(甕)



811

段部5包含層 弥生土器(鉢又は高杯)



836

段部5包含層 石器(石斧)



847

段部5包含層 石器(砥石)



6

7

II区包含層 石器(叩石·投弾)



9

10

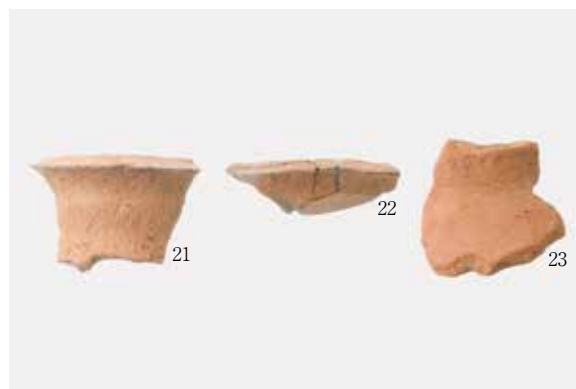
II e区SD1 弥生土器(壺・鉢)



12

13

II e区P3・5 弥生土器(壺・甕)



21

22

23

II e区包含層 弥生土器(壺)



39

40

II e区包含層 石器(砥石)



43

44

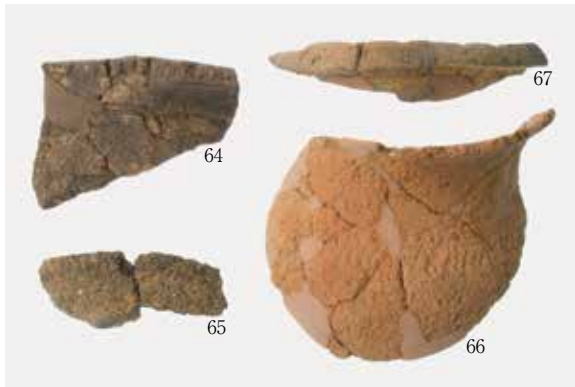
II e区包含層 石器(投弾・石核)



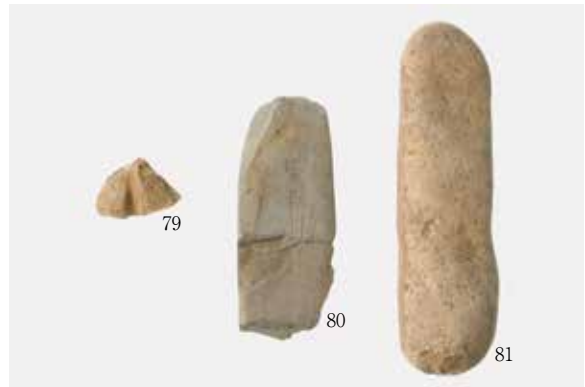
Ⅱ n 区包含層 弥生土器(壺)



Ⅱ n 区包含層 弥生土器(壺)



Ⅱ n 区包含層 弥生土器(甕)



Ⅱ n 区包含層 石器(砥石)



Ⅲ 区包含層 弥生土器(甕)



段部 1P6 · ST1 弥生土器(甕)



段部 1ST3 弥生土器(壺)



段部 1ST3 弥生土器(甕)



段部1 P11 弥生土器(甕)



段部1 P13・26 弥生土器(壺・甕)



段部2 SK28 弥生土器(甕)



段部2 烧土坑6 弥生土器(壺・甕)



段部2 SD3・5 弥生土器(壺)



段部2 SD3・5 弥生土器(甕)



段部2 P56・81・83 弥生土器(壺・甕)



段部4 SX3 弥生土器(壺・甕)



段部4 SX3 石器



段部4 ST5 弥生土器(壺)



段部4 ST5 弥生土器(甕)



段部4 ST5 弥生土器(甕)



段部4 ST5中央ピット 弥生土器(甕)



段部4 ST5 石器(砥石)



段部4 ST5 石器(石核)



段部4 SK33 弥生土器(壺・甕)



段部4 P55 弥生土器(甑・把手)



段部5 ST6 弥生土器(壺・甕・高杯)



段部5 土器集中4 弥生土器(壺)



段部5 土器集中4 弥生土器(甕)



段部5 ST7 弥生土器(壺・甕)



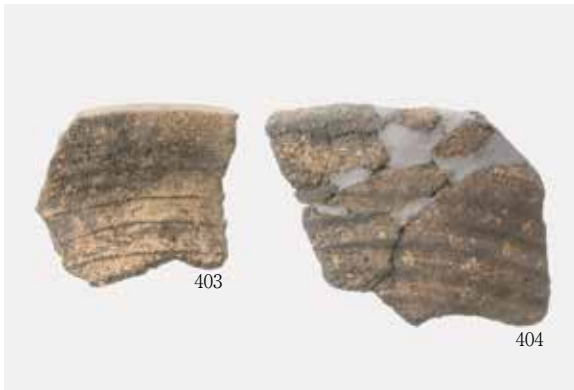
段部1 包含層 弥生土器(壺)



段部1 包含層 弥生土器(壺)



段部1 包含層 弥生土器(壺)



段部2包含層 弥生土器(壺)



段部2包含層 弥生土器(壺)



段部2包含層 弥生土器(壺)



段部2包含層 弥生土器(壺)



段部2包含層 弥生土器(壺)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(甕)



段部2包含層 弥生土器(鉢)



段部2包含層 弥生土器(高杯)



段部2包含層 弥生土器(器台・蓋)



段部2包含層 石器(叩石)



段部3包含層 弥生土器(甕)



段部3包含層 弥生土器(高杯・把手)



段部4包含層 弥生土器(壺)



段部4包含層 弥生土器(壺)



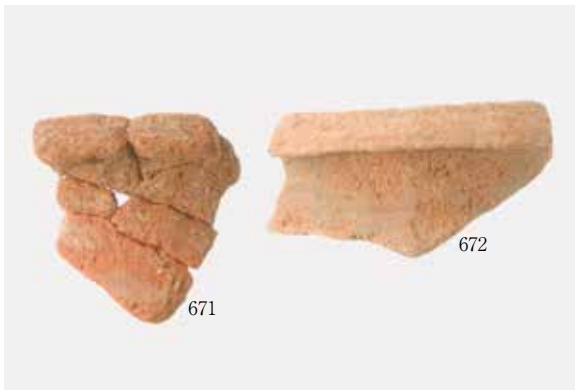
段部4包含層 弥生土器(壺)



段部4包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(甕)



段部4包含層 弥生土器(鉢)



段部4包含層 弥生土器(高杯)



段部4包含層 石器(砥石)



段部5包含層 弥生土器(壺)



段部5包含層 弥生土器(壺)



段部5包含層 弥生土器(壺)



段部5包含層 弥生土器(壺)



段部5包含層 弥生土器(甕)



段部5包含層 弥生土器(甕)



段部5包含層 弥生土器(甕)



段部5包含層 弥生土器(甕)



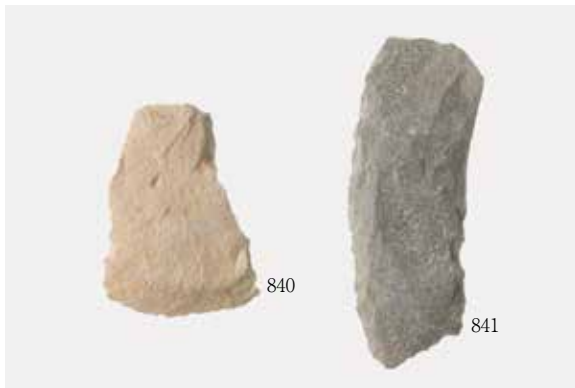
段部5包含層 弥生土器(甕)



段部5包含層 弥生土器(甕)



段部5包含層 弥生土器(甕)



段部5包含層 石器(スクレイパー)



段部5包含層 石器(砥石)



段部5包含層 石器(砥石)



段部5包含層 石器(叩石)

写真図版
岩神地点



岩神地点全景(南西上空より)



I w・II・III区調査前風景(南西より)



II・III区石垣検出状態(北西より)



I区調査前風景(北西より)



III区調査前風景(北東より)



I w 区上面遺構検出状態(北より)



I s・I w 区上面遺構検出状態(南東より)



I w 区バンクセクション(北西より)



I w 区下面遺構検出状態(東より)



I w 区 ST1床面検出状態(南東より)



I w 区 ST2弥生土器出土状態(東より)



I w 区 ST2 弥生土器壺(13)出土状態



I w 区 ST2 弥生土器甕(19)出土状態



I w 区 ST2 弥生土器甕(26)出土状態



I w 区 ST2 投弾(42)出土状態



I w 区 ST1 完掘状態(南より)



I w 区 SK11 弥生土器甕(53) 出土状態



I w 区 P 84 弥生土器壺(25) 出土状態



I w 区 P 65 上面弥生土器甕(60) 出土状態



I w 区 III - 1 層土師器甕(77) 出土状態



I w 区 ST3 完掘状態(北より)



I w 区遺構完掘状態(南より)



I w 区遺構完掘状態(北より)



I e 区遺構検出状態(南東より)



I e 区遺構完掘状態(南より)



I e 区斜面完掘・I n 区遺構検出状態(北西より)



I n 区遺構完掘状態(北西より)



Ⅱ区遺構検出状態(北より)



Ⅱ区遺構検出状態(南より)



Ⅱ区 ST1 テラス面検出状態(西より)



Ⅱ区 ST1 東西セクション(西より)



Ⅱ区 ST1 完掘状態(北西より)



Ⅱ区 ST1 弥生土器壺(111)出土状態



Ⅱ区 ST1 石鏃(129)出土状態



Ⅱ区 ST1 石斧(130)出土状態



Ⅱ区 ST1 砥石(132)出土状態



Ⅱ区 SK1 遺物出土状態(西より)



Ⅱ区 SK13 セクション(西より)



Ⅱ区 SK1 弥生土器壺(137) 出土状態



Ⅱ区 SK1 弥生土器壺(139) 出土状態



Ⅱ区 SK1 弥生土器壺(141) 出土状態



Ⅱ区Ⅱ層弥生土器甕(164)出土状态



Ⅱ区Ⅱ層弥生土器甑(170)出土状态



Ⅱ区P 20石包丁(155)出土状态



Ⅱ区Ⅱ層祭祀具(188)出土状态



Ⅱ区SX1土師器碗(151)出土状态



Ⅱ区SX1绿釉陶器碗(152)出土状态



Ⅱ区SK2磁器鉢(145)出土状态



Ⅱ区SK5陶器碗(148)出土状态



II区遺構完掘状態(北より)



II区ST1・SK1周辺完掘状態(南より)



Ⅱ区 SA1 完掘状態(西より)



Ⅲ区遺構検出状態(南東より)



Ⅲ区石組遺構完掘状態(北東より)



Ⅲ区石組遺構完掘状態(北西より)



Ⅲ区Ⅲ層弥生土器壺(266)出土状态



Ⅲ区土器集中1弥生土器壺(210)出土状态



Ⅲ区Ⅲ層石鍬(269)出土状态



Ⅲ区Ⅲ層石包丁(270)出土状态



Ⅲ区Ⅲ層須惠器壺(279)出土状态



Ⅲ区Ⅰ層瓦質土器焜炉(254)出土状态



Ⅲ区Ⅰ層磁器香炉(240)出土状态



Ⅲ区Ⅱ層石臼(263)出土状态



Ⅲ区中面遺構完掘状態(南東より)



Ⅲ区遺構完掘状態(東より)



SR1 完掘状態(南東より)



SR1 完掘状態(北東より)



SR1 セクション(北東より)



Ⅲ区 SR1 弥生土器甕(302)出土状態



I w 区 SR1 弥生土器甕(305)出土状態



Ⅱ区 SR1 鉄斧(310)出土状態



Ⅲ区 SR1 石鏃(311)出土状態



Ⅱ区 SR1 石包丁(314)出土状态



Ⅱ区 SR1 石包丁(313)出土状态



Ⅱ区 SR1 石包丁(319)出土状态



Ⅱ区 SR1 石斧(320)出土状态



Ⅲ区 SR1 砥石(325)出土状态



Ⅲ区土器集中1 叩石(215)出土状态



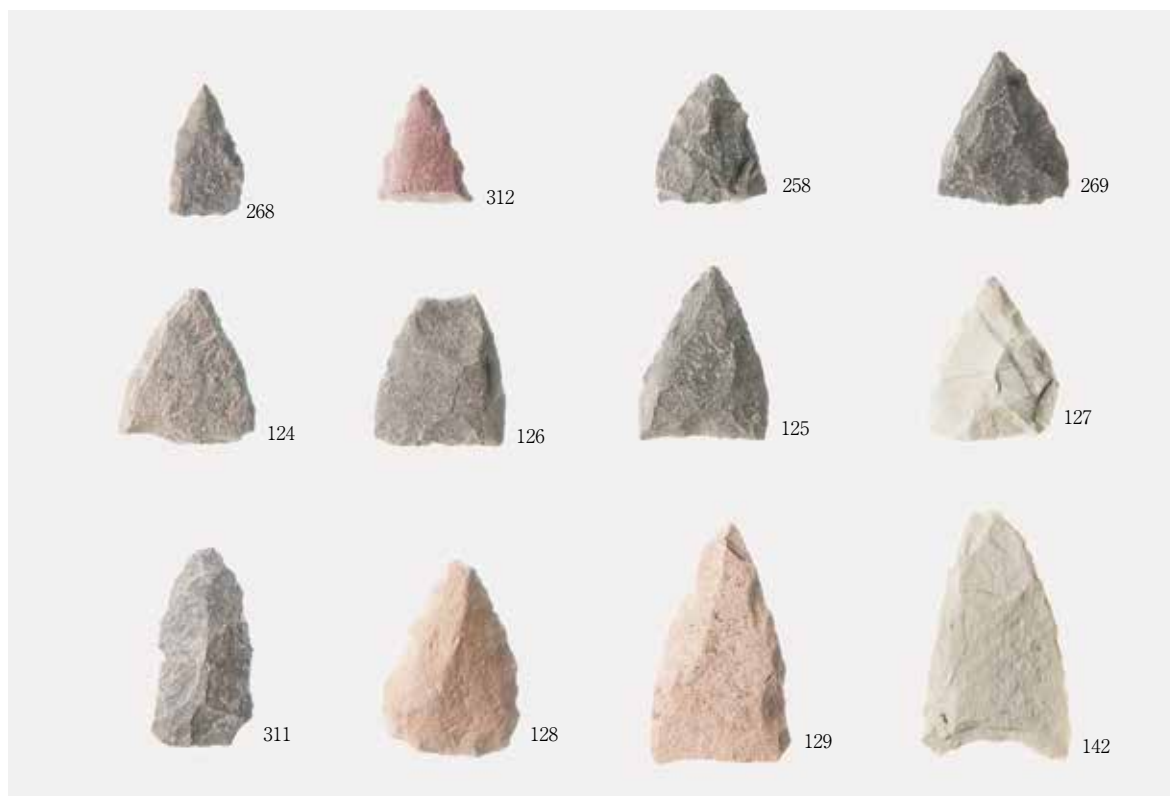
Ⅲ区 SR1 須恵器杯(362)出土状态



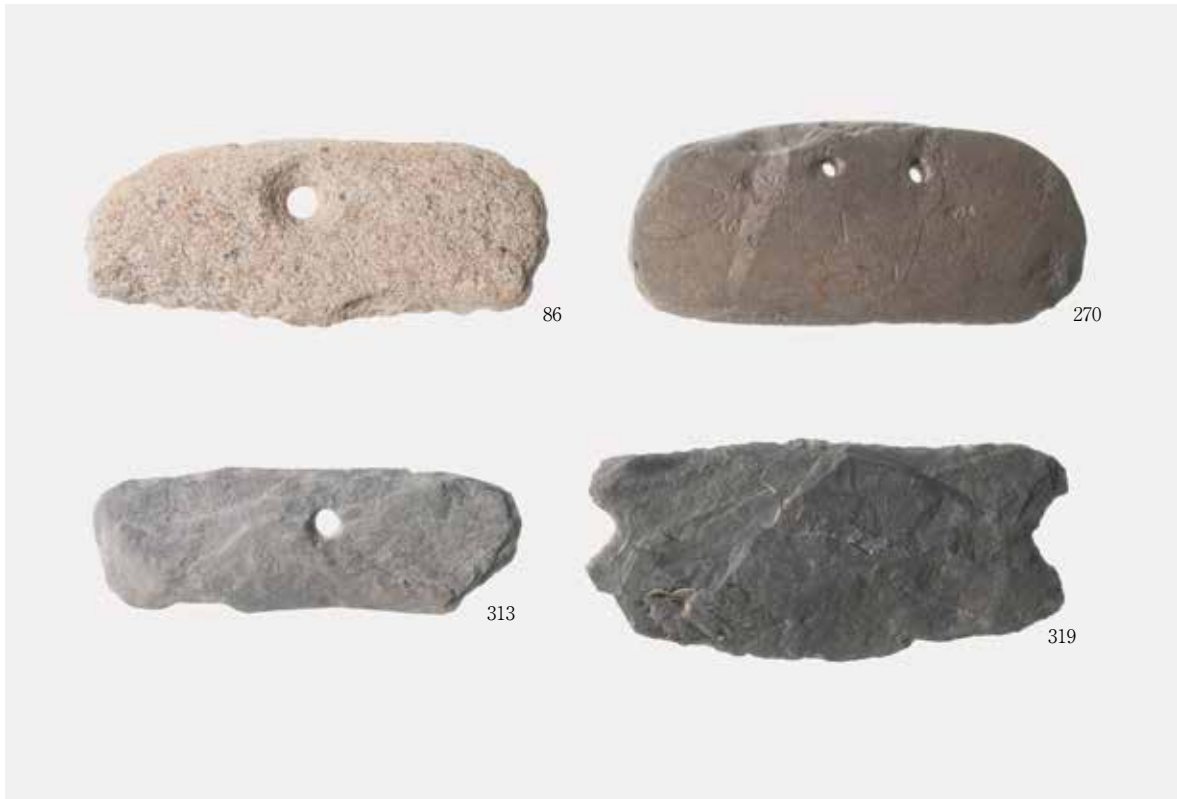
Ⅱ区 SR1 土師器杯(353)出土状态



Ⅱ区 SK1 弥生土器(壺・甕)・炭化米・堅果類



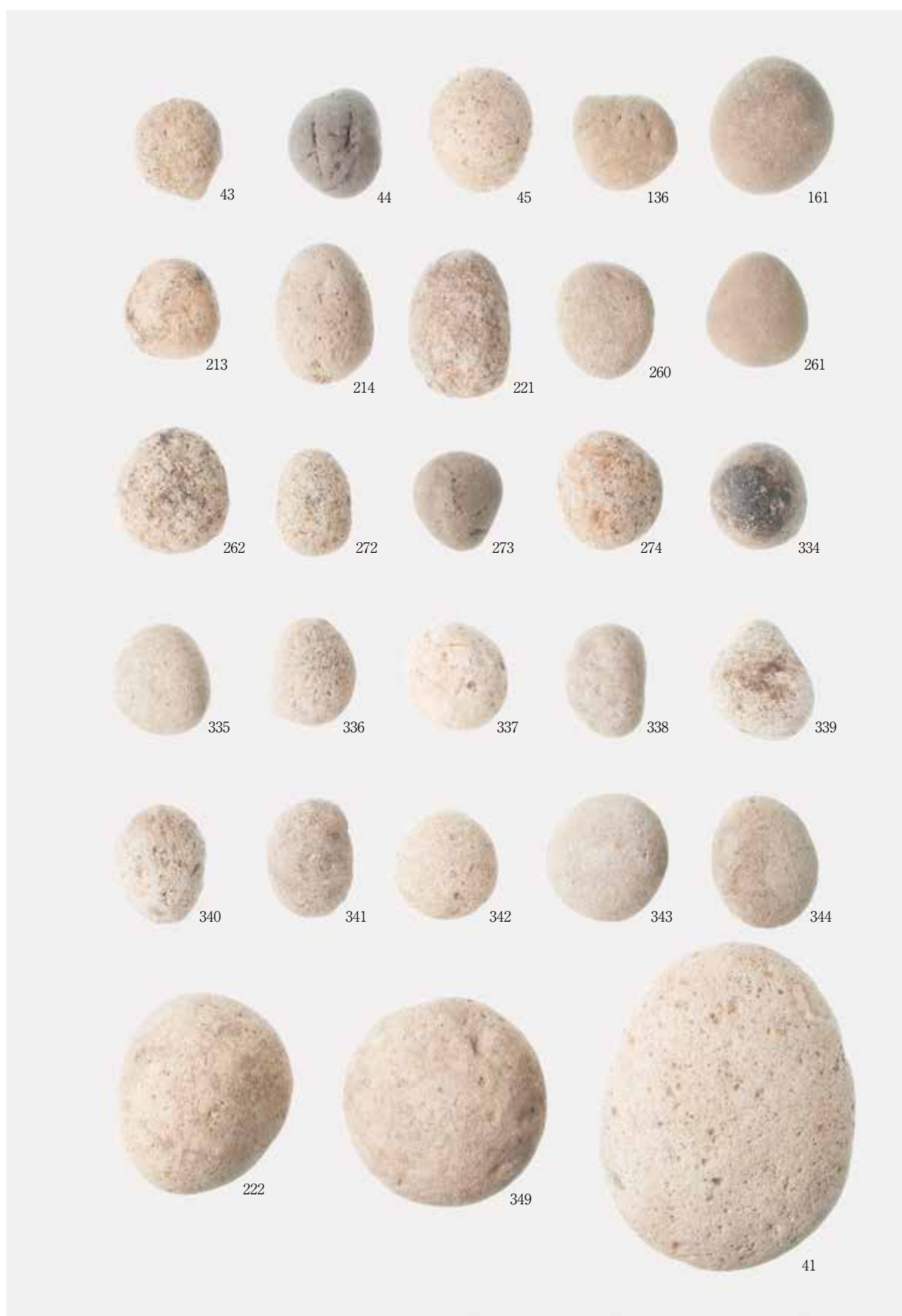
石器(石鏃)



石器(石包丁)



石器(石包丁)



石器(投弹)



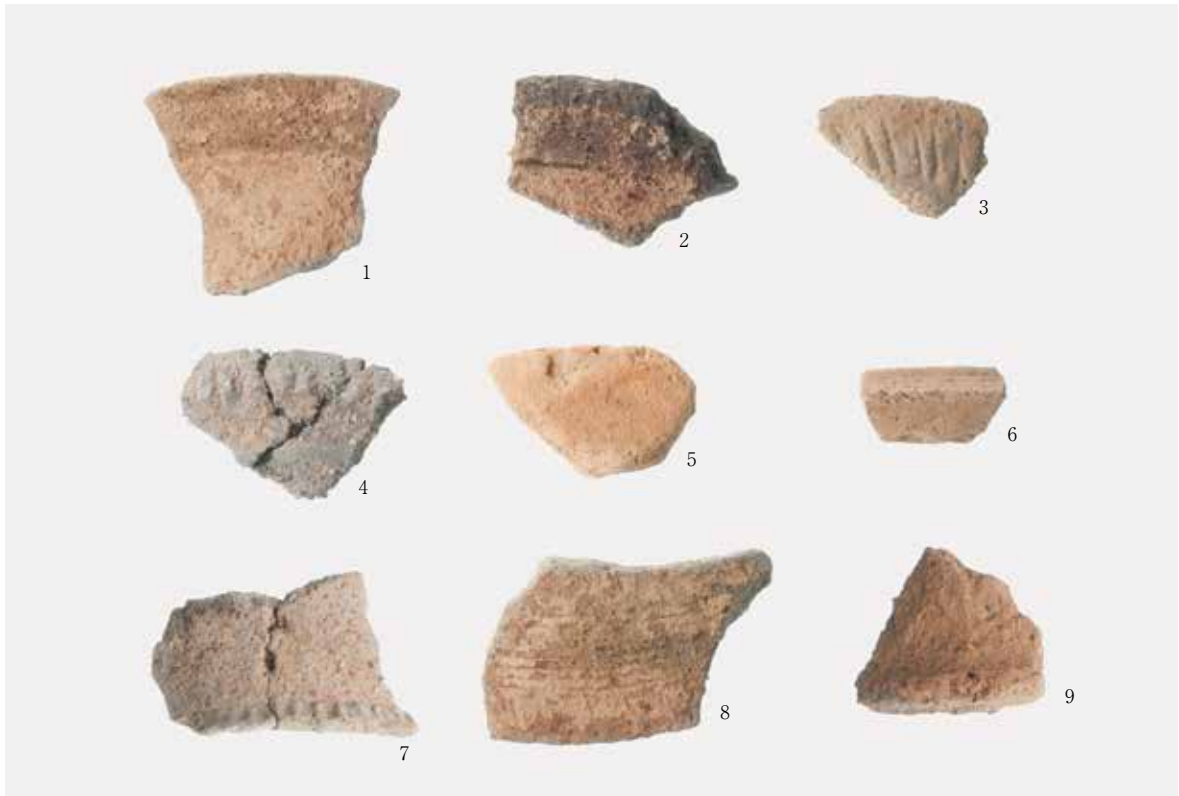
鉄器(鉄斧・鉄鍬) (裏面)



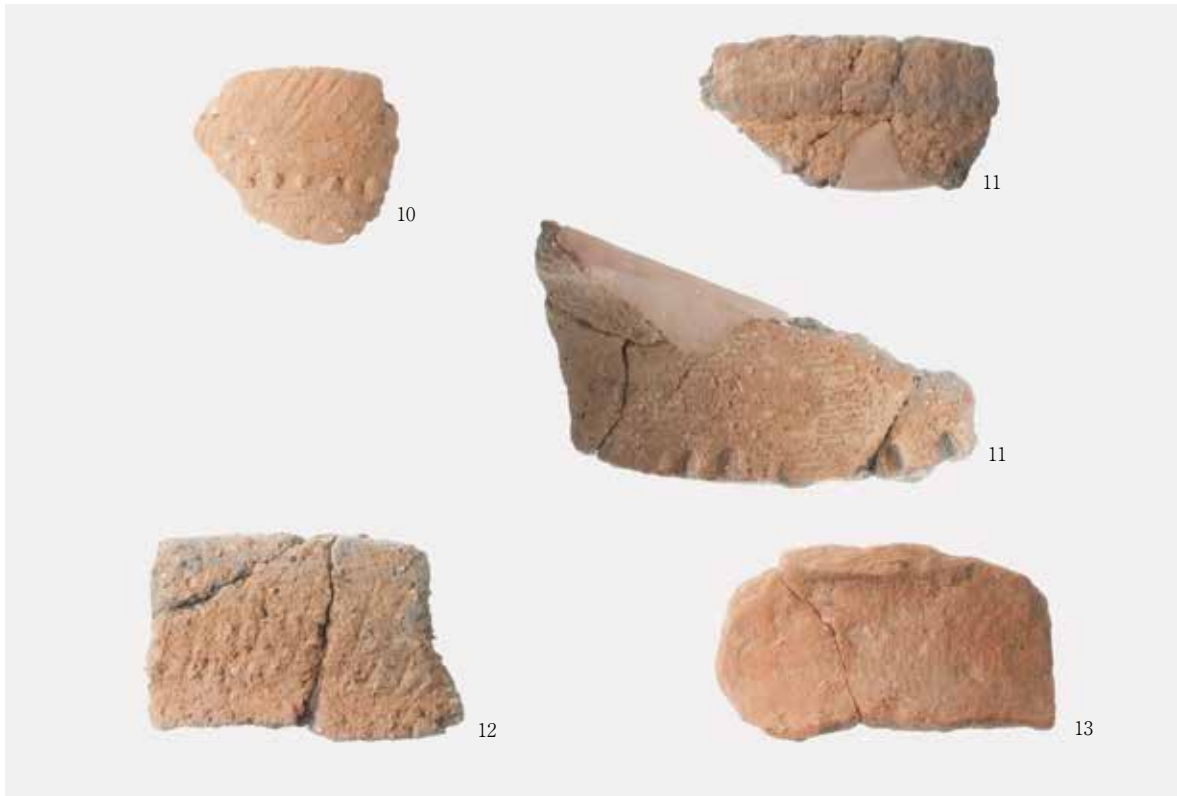
鉄器(鉄斧・鉄鍬) (表面)



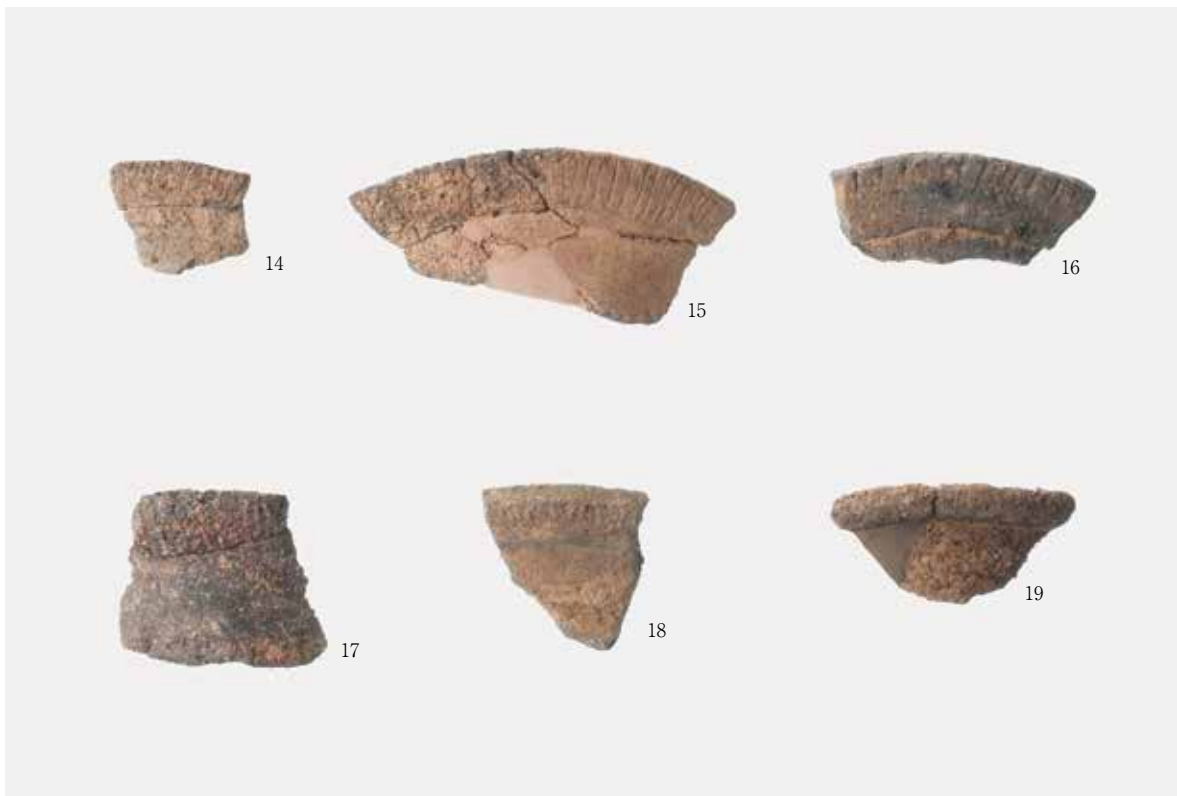
石器(石斧)



I w 区 ST1 弥生土器(甕・高杯)



I w 区 ST2 弥生土器(壺)



I w 区 ST2 弥生土器(甕)



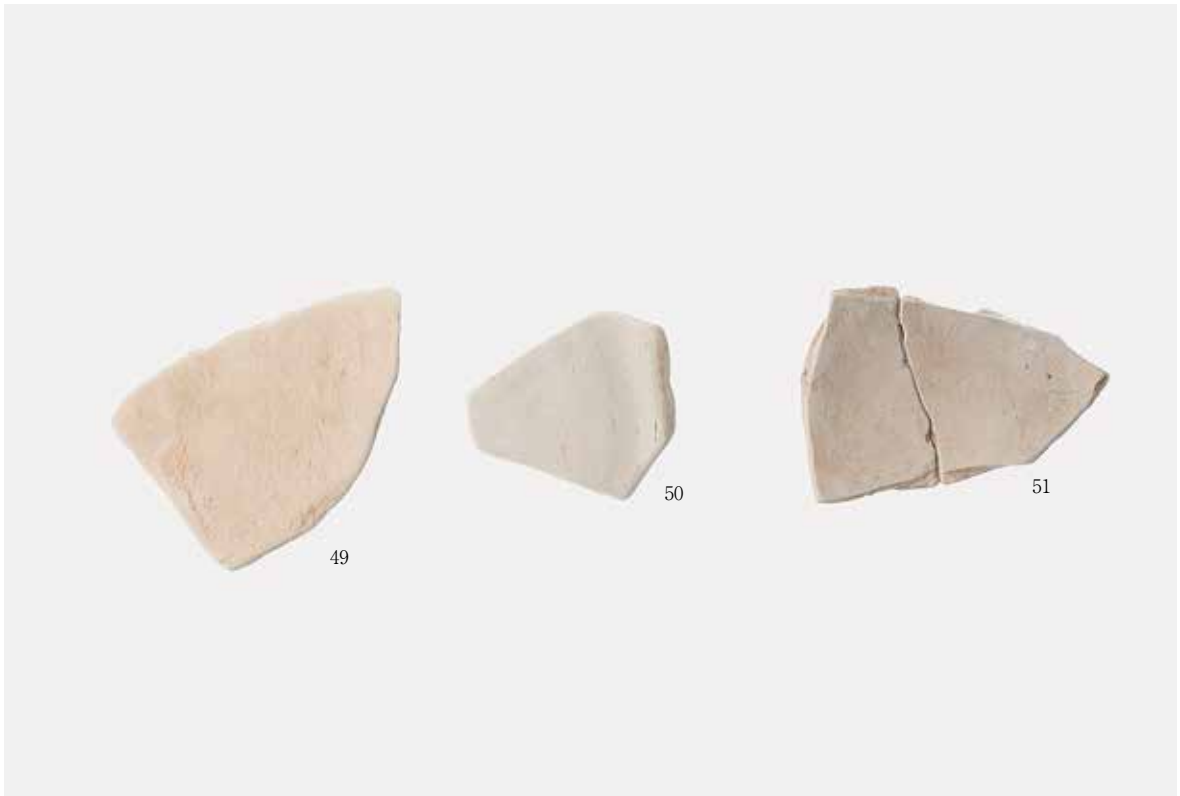
I w 区 ST2 弥生土器(甕)



I w 区 ST2 弥生土器(壺・甕)



I w 区 ST2 弥生土器(高杯)



I w 区 SK4 須恵器(皿)・瓦器(椀)



I w 区 SK14・P80 弥生土器(甕・壺)



I w 区ピット 弥生土器(壺・甕・蓋)



I w 区包含層 弥生土器(壺・甕)



I w 区包含層 土師質土器(杯)・瓦器(椀)



I w 区包含層 土師器(甕)



I e 区包含層 須恵器(皿)・土師質土器(杯・羽釜・鍋)・土師器(甕)



I e 区包含層 陶器(碗·搗鉢)·瓦質土器(焙烙鍋)



I n 区包含層 青磁(碗)·磁器(碗)



I n 区包含層 陶器(皿·碗)



II 区 ST1 石器(叩石)



Ⅱ区 ST1 弥生土器(壺・甕)



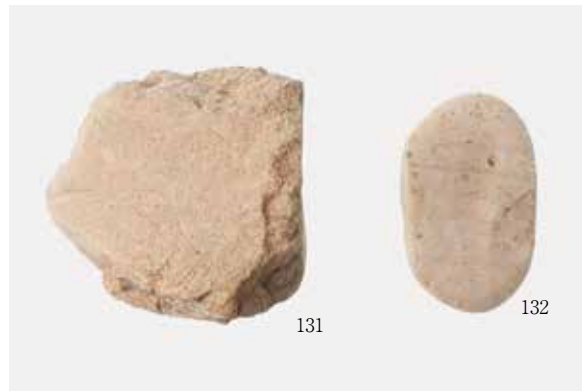
Ⅱ区 ST1 弥生土器(壺)



Ⅱ区 ST1 弥生土器(高杯)



Ⅱ区 ST1 弥生土器(ミニチュア土器)



Ⅱ区 ST1 石器(砥石)



II区 SK1 弥生土器(壺)



II区 SK1 弥生土器(壺)



II区 SK1 弥生土器(甕)



II区 SK1 石器(砥石)



II区 SK1 弥生土器(壺)



II区SX1 土師器(杯・椀・甕)



II区包含層 弥生土器(壺・甕・甗・高杯)



II区石垣裏込 陶器(皿·碗) (内面)



II区石垣裏込 陶器(皿·碗) (外面)



Ⅱ区包含層 須恵器(杯)・土師器(甕)・土師質土器(小皿)・青磁(碗)・陶器(碗)・磁器(紅皿)



Ⅱ区包含層 石器(叩石)



Ⅲ区ハンダ土坑1 磁器(皿・蓋)



Ⅲ区石組遺構 磁器(皿・小杯)



Ⅲ区土器集中1・2 弥生土器(壺・甕)



Ⅲ区石垣1 陶器(皿・碗)・磁器(碗)・石器(砥石)



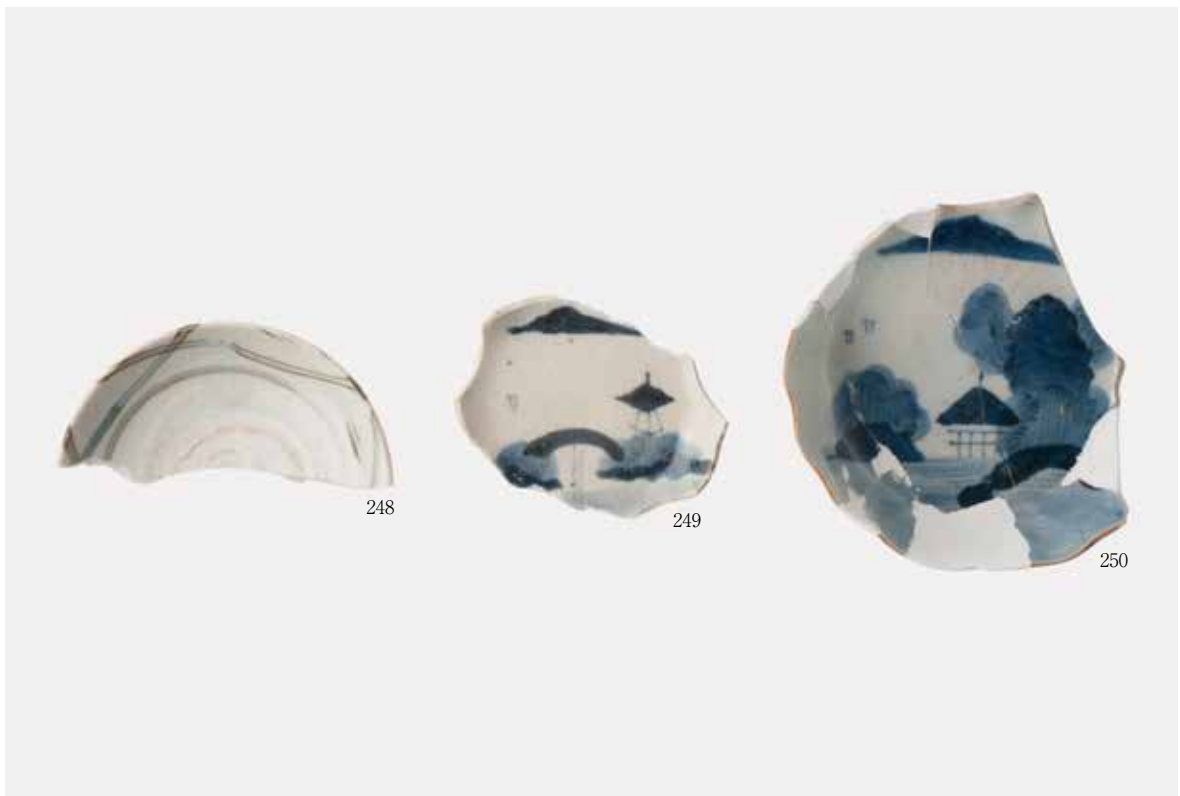
Ⅲ区石垣2 磁器(紅皿)・陶器(皿)・磁器(小丸碗)



Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層 緑釉陶器(皿・椀)・白磁(碗)・須恵器(壺)



Ⅲ区Ⅰ·Ⅱ層 磁器(小杯·碗)



Ⅲ区Ⅰ·Ⅱ層 磁器(皿)



Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層 瓦質土器(焜炉・焙烙鍋)



Ⅲ区Ⅲ層 須恵器(壺)



SR1 弥生土器(壺)



SR1 弥生土器(壺)



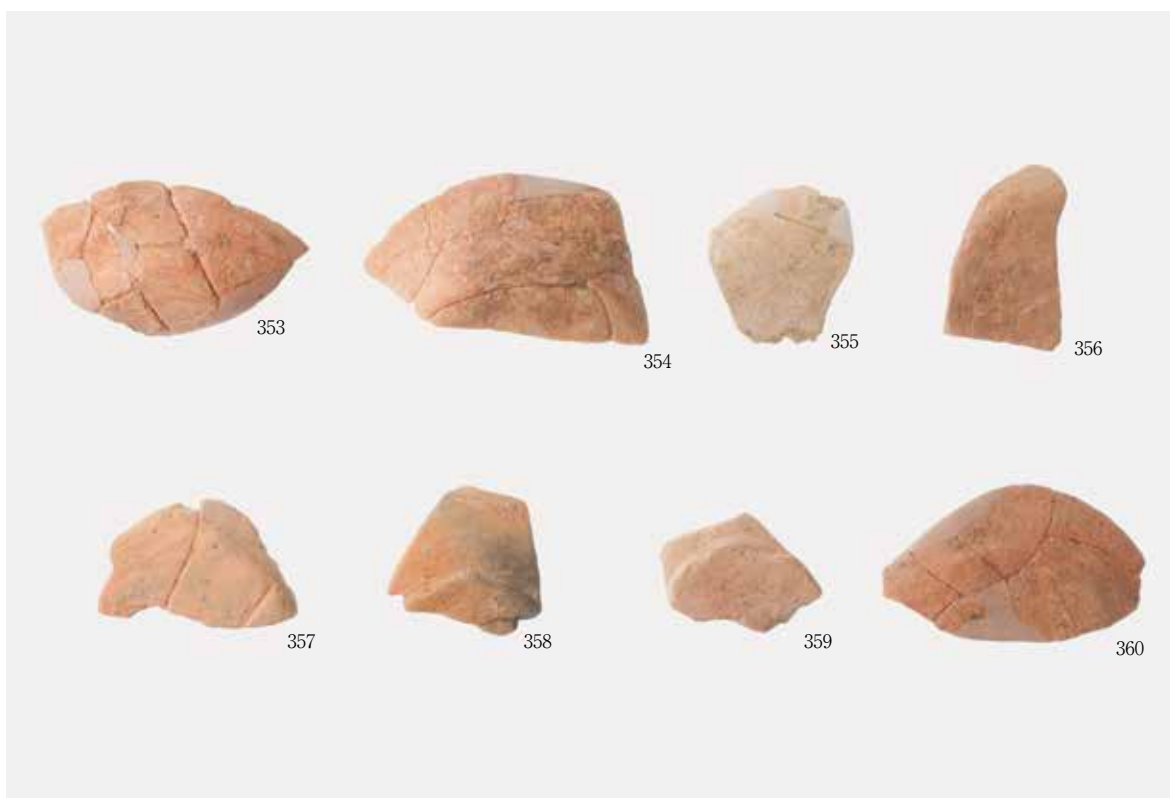
SR1 弥生土器(甕)



SR1 弥生土器(甕)



SR1 石器(砥石)



SR1 土師器(杯・皿)



SR1 黒色土器(椀)・緑釉陶器(皿・椀) (内面)



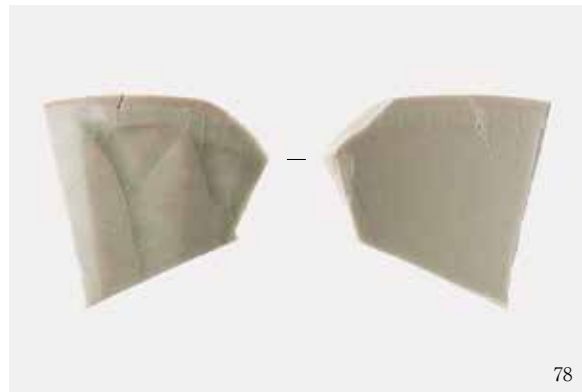
SR1 黒色土器(椀)・緑釉陶器(皿・椀) (外面)



SR1 須恵器(杯・蓋・高杯)



I w 区 P65 弥生土器(甕)



I w 区 II 層 青磁(碗)



I e 区 P5・8 土師質土器(杯)



I e 区 II 層 石器(砥石)



164

Ⅱ区Ⅲ層 弥生土器(甕)



189

190

Ⅲ区SD2 銅製品(煙管)



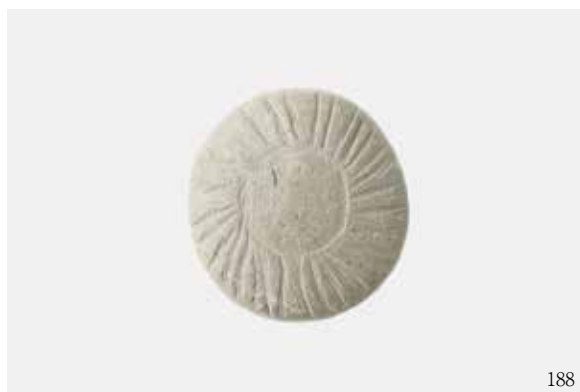
152

Ⅱ区SX1 緑釉陶器(碗) (内面)



152

Ⅱ区SX1 緑釉陶器(碗) (外面)



188

Ⅱ区Ⅱ層 石器(祭祀具) (表面)



188

Ⅱ区Ⅱ層 石器(祭祀具) (裏面)



191

Ⅲ区ハンダ土坑1 陶器(皿)



192

Ⅲ区ハンダ土坑1 陶器(皿)



193

Ⅲ区ハンダ土坑1 陶器(皿)



194

Ⅲ区ハンダ土坑1 磁器(碗)



198

Ⅲ区ハンダ土坑1 石器(砥石)



202

203

Ⅲ区石組遺構 磁器(重鉢)



240

Ⅲ区Ⅰ層 磁器(香炉)



255

Ⅲ区Ⅰ層 瓦質土器(焜炉)



256

Ⅲ区Ⅱ層 瓦質土器(焜炉) (内面)



256

Ⅲ区Ⅱ層 瓦質土器(焜炉) (外面)

報告書抄録

ふりがな	ばーがもりきたしゃめんいせき							
書名	バーガ森北斜面遺跡							
副書名	高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第144集							
編著者名	吉成 承三,パリオ・サーヴェイ株式会社,原田幹							
編集機関	(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2015年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇〇″	東経 〇〇″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふりがな バーガ森 きたしゃめんいせき 北斜面遺跡	〒781-2127 高知県 吾川郡 いの町	39386	320026	33° 32′ 38″	133° 26′ 22″	三世庵地点 2010.4.5 ～ 2011.2.25 岩神地点 2011.8.1 ～ 2012.1.31	三世庵地点 4,037㎡ 岩神地点 2,400㎡ 合計 6,437㎡	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
バーガ森 北斜面遺跡	集落跡	弥生 古代 中世 近世 近現代	堅穴建物跡 掘立柱建物跡 柵列 土坑 溝跡 自然流路 性格不明遺構 ピット	12棟 1棟 2列 114基 17条 1条 8基 1065個	弥生土器 須恵土器 黒色土器 緑釉陶器 土師質土器 瓦質土器 陶質土器 貿易陶磁器 鉄銅製 石器	<p>今次調査では、炭化米・炭化種実が土坑から出土し、放射性炭素年代の抽出をした。</p> <p>各調査区では、弥生時代中期末を中心とする遺構・遺物が多数出土した。弥生土器は在地系土器が主体であり、当遺跡での「南四国型甕」と凹線文系土器の組成比もみえてきた。石器では生産具である石包丁が多く出土しており、分析の結果、使用痕も検出された。鉄器では袋状鉄斧が完形品で出土した。</p>		
要約	<p>バーガ森北斜面遺跡は、標高30～90mの丘陵上に開けた弥生時代中期末の山の集落遺跡である。今回の調査では、三世庵地点、岩神地点の2地点の発掘調査が行われ、弥生時代中期末を中心とする堅穴建物跡が検出された。これらは、各地点に展開する集落単位の様相を知る貴重な成果といえる。出土遺物は、弥生時代中期末を中心とする土器・石器などであり、土器では「南四国型甕」と呼ばれる在地系要素のつよい甕が多数出土した。石器の中では生産具である石包丁が比較的多く出土した。こうした生産道具の他に、投弾や大型打製石鏃など武器類も出土しており、「高地性集落」の性格を抽出するための成果があった。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第144集

バーガ森北斜面遺跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ

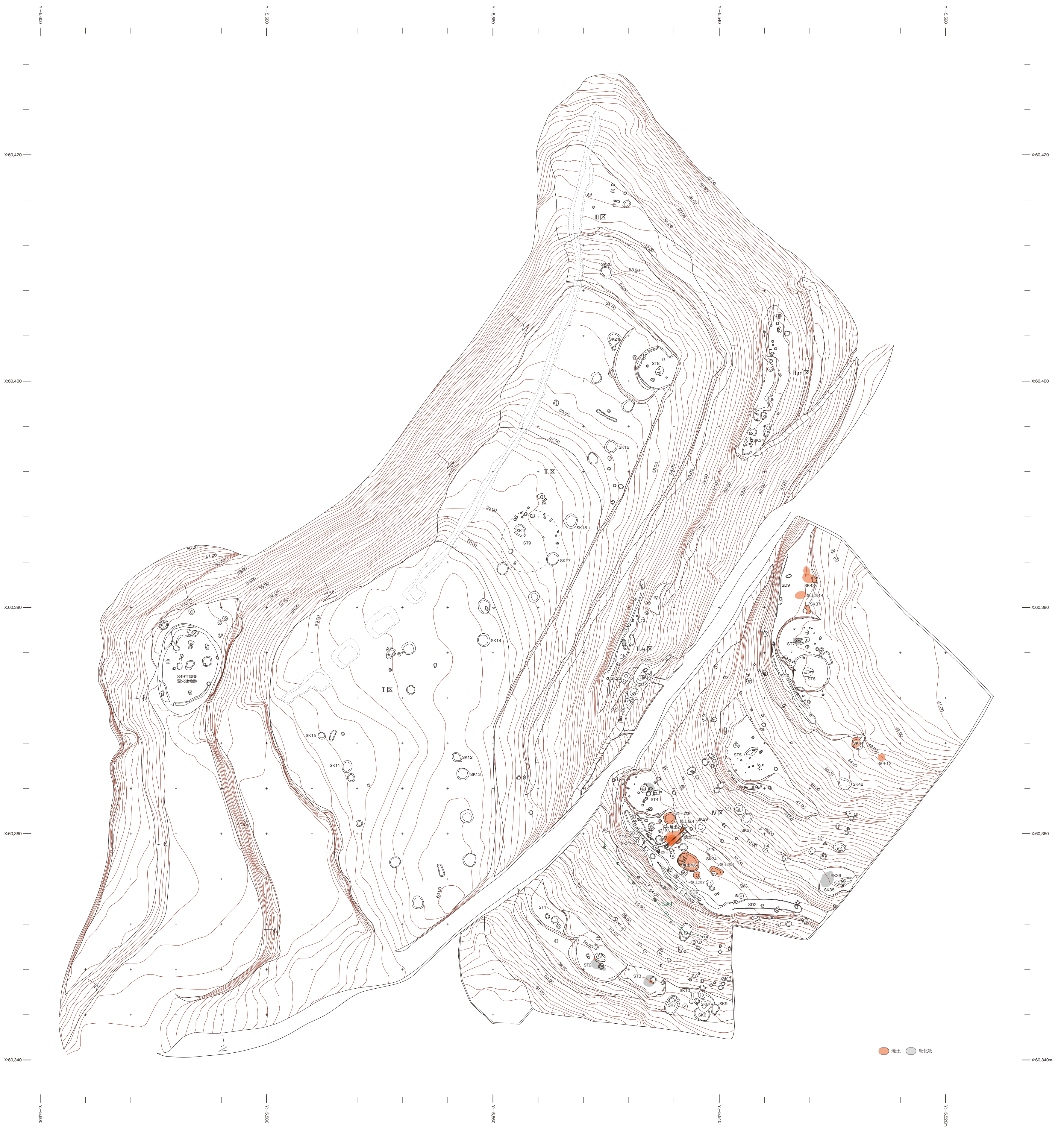
2015年3月20日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 株式会社 飛鳥

バーガ森北斜面遺跡
付図



付図1 バーガ森北斜面遺跡三世庵地点調査区全体遺構配置図 (S=1/200)



付図2 バーガ森北斜面遺跡岩神地点調査区全体遺構配置図 (S=1/200)